

Ⅲ 遺 物

(1) 土 器

1. 縄文土器 (図1・2)

1は深鉢口縁部片であり、横長の磨消文帯をもち、その外側にLRの縄文を転がす。2は口縁部片である。山形の突起部を拡張し、面取りを行い、円孔をあけている。外面は沈線による施文を行う。全体にミガキ調整が行われており、丁寧な作りである。3は、縦方向に押し引き状の刺突文を施し、それを扶むように両側に縦方向に2条の凹線を施し、その外側にLRの縄文を施す。

以上の諸特徴より、1から3は後期初頭に比定される。

4は口縁部を短く屈曲させ、頸部凸帯に押し引き状の刺突文を施し、胴部に沈線による施文を行う。5は二枚貝による器表面の調整を行い、口縁部・頸部及び胴部の三ヶ所に3本一組の横線文を施す。6は横方向に引いた沈線間に押し引き状の列点文を施す。7は外面無文の深鉢口縁部片である。内面口縁部やや下に凸帯を貼りつけ肥厚させている。8は深鉢口縁部の橋状取手である。外面と上部に太いヘラ描沈線を施し、円孔を貫通させている。9は波状口縁部片であり外面に一条の沈線を施す。10は口縁部片であり、内面に一つの凹圧文を施す。11・12は土器の突起部分と考えられる。12はらせん状の部分に刺突文を施し、突起先端に円孔を施す。13は胴部片であり沈線による施文を行っている。14は注口土器の胴部片と考えら

れる。楕円形の磨消縄文帯部分のほぼ中央に粘土を貼りつけ、その上を刻む。15は注口土器につく突起と考えられる。3方向より凹圧による円孔を施すが貫通はしない。16から20は注口土器の注口部分である。注口の断面は扁平をなし、16は根元部分に粘土紐を貼りつけている。21はヘラによる弧状文を描く。地文は縄文か条痕であるが、摩滅しており不明である。注口土器の胴部片とも考えられる。22は沈線文と竹管による刺突文を施している。23は山形口縁であり、頂部に円孔を施し、その下に深い沈線による施文を行う。24～28は胴部片である。

以上の諸特徴より、4から24は後期中葉から後葉に比定される。

25・26は胴部片であり、ヘラによる沈線文を施しており、晩期の浮線文とも考えられるが、25は器表面が摩滅しており、また26は小片のため詳細は不明である。25は沈線が収束するが隣の文様と重なるような構図となり、通常の浮線文様とはやや文様構成が異なる。

27は粘土を貼りつけ肥厚させ、その上を沈線によって施文を行う。時期は不明である。

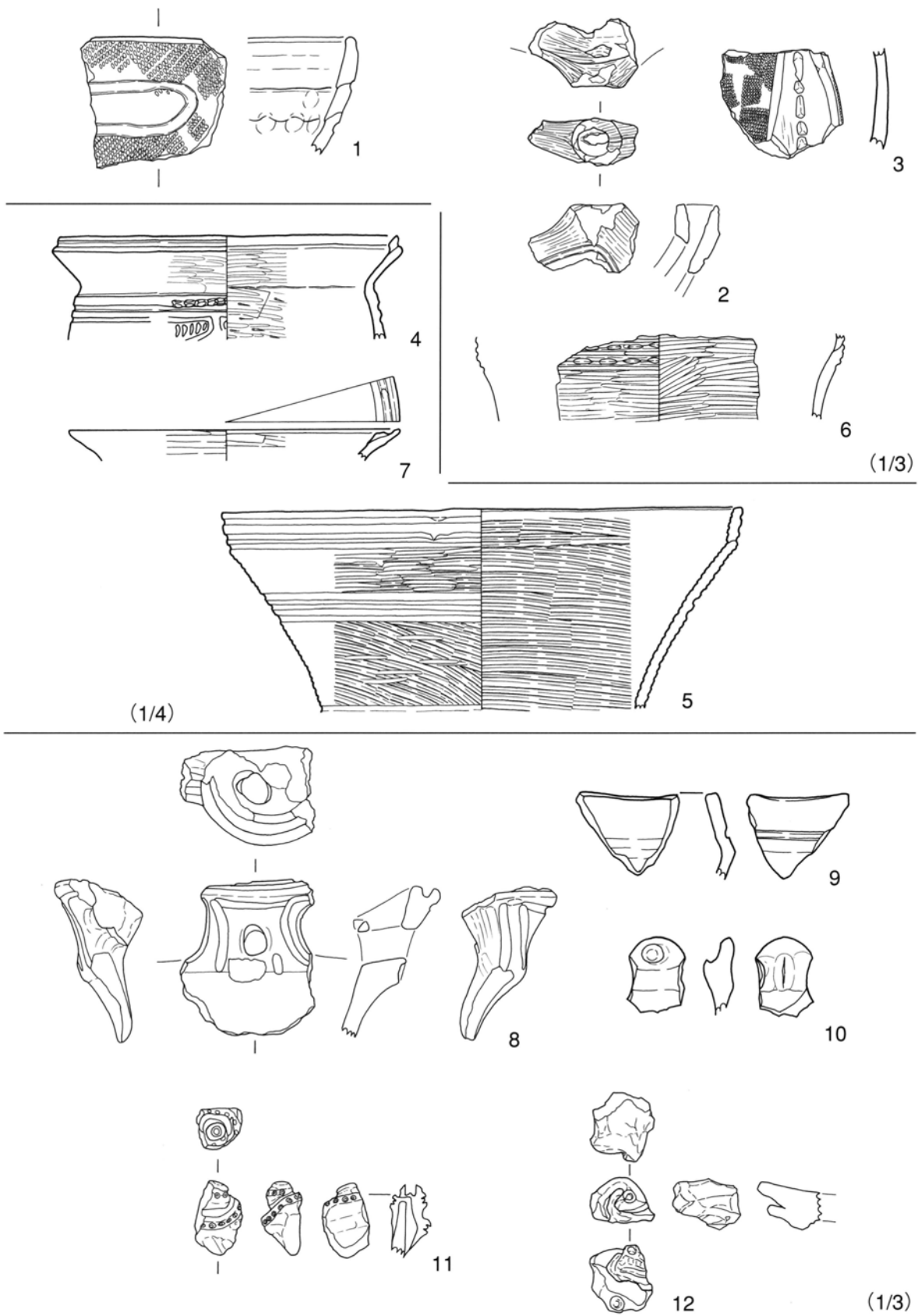


図1 縄文土器 (1) (4・5・7は1/4、他は1/3)

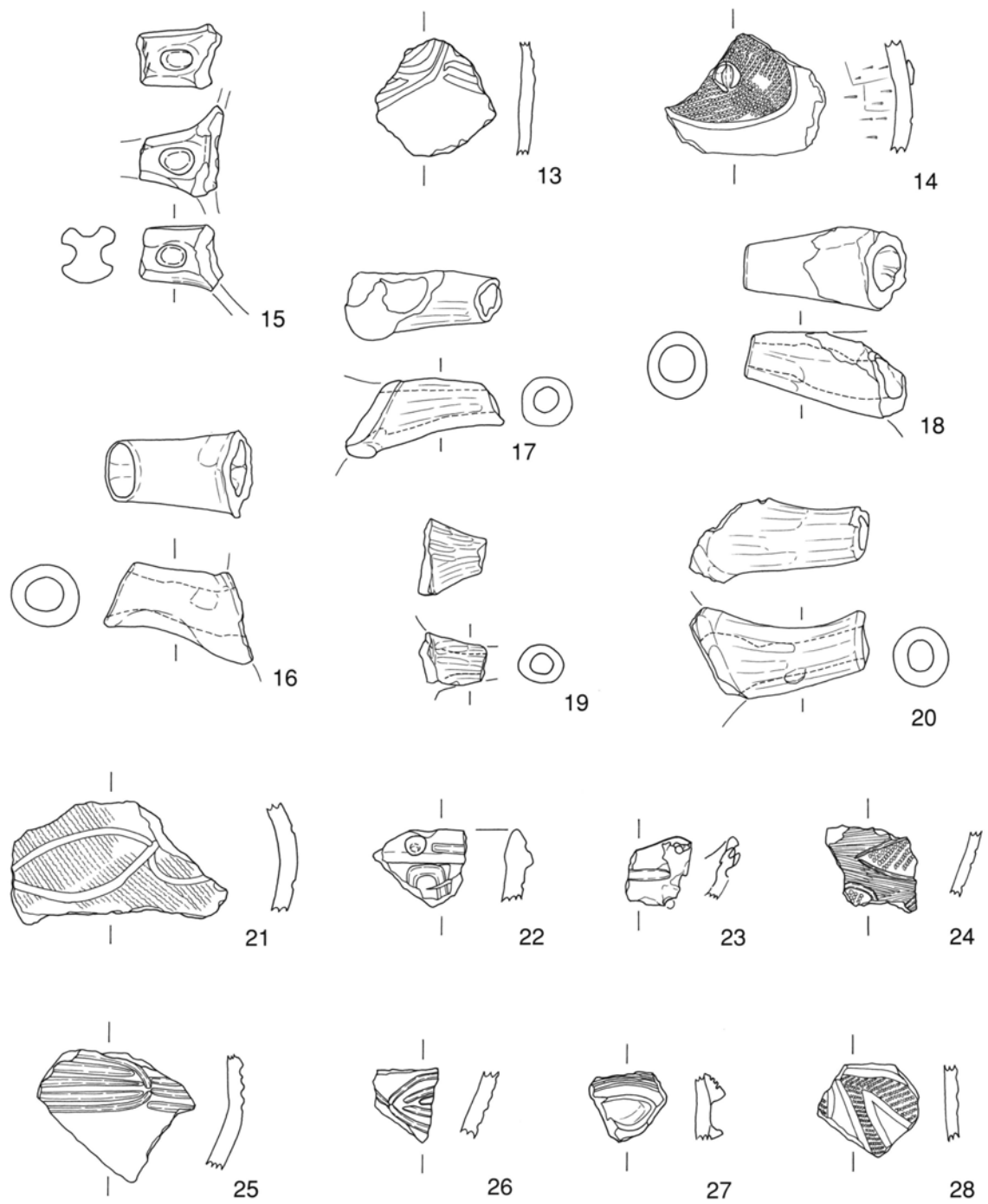


图2 縄文土器 (1)

(1/3)

2. I期

今回提示するI期の資料群は、従来尾張平野部において「貝殻山式」とされてきた弥生前期前半を含む良好な資料である。今回ようやく遺構単位の共伴関係によって提示できる段階になった。特に、SB07は遠賀川系土器と突帯紋系土器の共伴関係を考えるうえで重要な位置を占める。

(1) SB07 (図3)

SB07は遠賀川系土器と突帯紋系土器が共伴する、この地域では極めて貴重な資料群となった。しかし、隣接して新相を示す遺構が切り合う。ここでは、調査時点での認識に従い、遺構内資料を提示する。

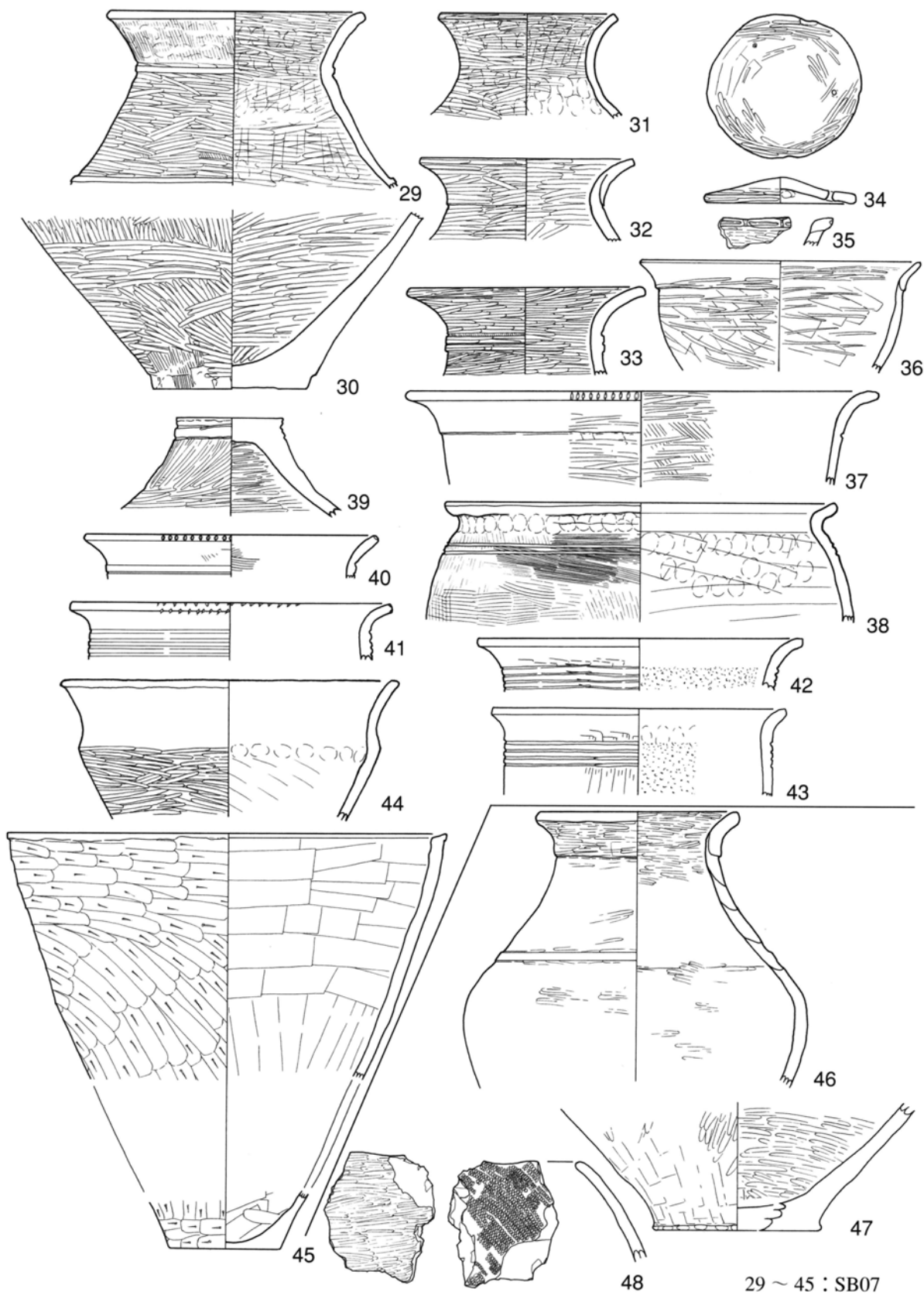
29は口頸部界から口縁端部にかけて短く外反し、胴部が直線的に開く器形の壺。頸部と頸胴部界には縦ハケにより削り出した削出突帯を有し、頸部から頸胴部界のミガキ調整が羽状となる。30は壺の底部。外面には帯状に横ミガキを行うものの、基本的には左上がりのミガキ調整を行う。底部外面は横方向のミガキ後、周縁に反時計回りのミガキを行う。内面は横ミガキ。31は頸部から口縁部にかけて緩やかに開く器形の壺。頸部および頸胴部界に突帯などを持たない無紋の壺で、口縁部から胴部にかけて密なミガキ調整が施されている。頸部から胴部にかけてやや羽状のミガキ調整がみられる。色調・胎土は貝殻山B類に酷似。32は頸部から口縁部にかけて短く外反する器形の壺。頸部に見られる有段部分を沈線により強調し、段を作り出す。33は頸部が短く直線的に延び、口縁部が広く開く器形の壺。頸部の削出突帯は上部を縦ハケにより削り出し、3条の沈線を施す。内外面ともに密なミガキ調整を行う。34は壺蓋。焼成後の穿孔が体部に2ヶ所ある。そのうち一つは貫通していない。外面は板ナデののち時計回り

にミガキを行う。35は鉢の口縁部か?、口縁部外面に指腹で長楕円形の押圧を施す。その上にヘラあるいは棒状工具による沈線を入れる。内外面ともに丁寧なミガキ調整を行う。36は鉢。有段口縁を有する、遠賀川系土器のなかでは古い要素を持つ。段の部分は未調整。37は鉢。口縁端部に刻み目、頸胴部界に段をもつ。有段部は下方から板ナデにより段を作り出す。38は貝殻山B類の鉢。口縁部が短く折れ、外面がやや丸みを帯びて膨らむ。胴部には縦ハケのち横ハケを行い、その後頸部に二又状工具による沈線を施す。口縁端部周辺および胴部内外面に煤・ヨゴレが付く。39は甕蓋。内外面に丁寧なミガキ調整を行い、その後、頂部に削出突帯を施す。ただし、削出突帯の上下端は雑な沈線で仕上げている。使用痕としては、残存する口縁部に近いところには、黒くヨゴレが付着する。40～43は甕。40は口縁端部に刻み目、頸部に削出突帯を持つ。41と42は頸部に半截竹管状工具を用いた沈線が引かれる。貝殻山B類。44と45は突帯紋系土器。44は鉢。頸胴部界から「く」字に屈曲して口縁部にいたる器形。頸部はナデ調整、胴部は横ミガキを行う。45は深鉢。外面調整は下位から上位へ板ケズリを行う。口縁端部は強い横ナデにより面取りがされる。胴部外面には煤・ヨゴレが下位に向かって強く着く。

SB07は朝日I-1期(古)に相当し、SK118に先行する資料群として捉えたい。

(2) SK116 (図3)

46は口頸部が有段口縁、頸胴部界に削出突帯を有する壺。47は壺の底部。48は器面全面に縄紋を施す鉢。内面は丁寧なミガキ調整。



29 ~ 45 : SB07
 46 ~ 48 : SK116

図3 SB07・SK116

(1/4)

(3) S K 118 (図4)

49～59は壺。49は頸部が緩やかにすぼまり口縁部が短く外反する器形。内外面ともに丁寧なミガキ調整を行う。ミガキの後、沈線を頸部に2条引く。胎土・色調は貝殻山B類に酷似。50は頸部を細く削り込むことによって有段を表現するもの。口縁端部内面に5mm幅の赤彩が施される。51は頸部がやや長く口縁部下にやや厚みを帯び口縁端部にいたる器形。内外面ともによくミガキこまれ、頸部の削出突帯はミガキあるいはミガキ以前のハケ調整時に上下をケズリ込む。52は頸部下が欠落する資料であるが、頸部に施される沈線2条から削出突帯ではなく、49と同様の短い頸部をもつ器形と考えられる。53は頸部が筒状に立ち上がり、口縁部が広く外反する器形。口縁端部に沈線を施し、その後口縁部下方に2ヶ所以上の切り込みを沈線に対して垂直方向に入れる。胴部の削出突帯は上部のみ縦方向の板状工具によるケズリ込みが認められる。54・55は胴部。54は外面に横方向のミガキを行った後、底部付近に縦方向のミガキを行う。55はミガキ後に施紋を行う。頸胴部界の沈線は上部のみ削りだす。胴部施紋には削出突帯手法がみられない。56～59は底部。60は甕蓋。外面はハケがよく残る程度のミガキであるのに対し内面には密なミガキを行う。61・62は鉢。61は口縁端部を強い横ナデで仕上げるため、外面がくぼむ。被熱が著しく、外面には剥離がみられる。底部付近には煤が付着する。62は器形と器面の調整方向から鉢としたが、沈線より下位の胴部には煤が付着し、内面下部にもヨゴレが確認でき、煮炊きの痕跡がみられる。63～69は甕の底部。63～65はハケ調整。63は底部に焼成後穿孔がみられる。66～69は板ナデによる調整。底部の張り出しや調整方法から削痕系深鉢（甕）と考えられる。

(4) S K 117 (図4)

S K 117は突帯紋系土器と遠賀川系土器が共存する資料。70～73は壺。70は大型の壺で、頸胴部界の紋様構成に注目できる。突帯はおそらく貼付で、突帯上の刻みは二枚貝腹縁によるもの。突帯下の沈線は二又状工具によるもので2帯ある。71は頸胴部界に幅広の削出突帯がみられる。72は削出突帯上に4条の沈線がある。73は頸部沈線が3条みられ、沈線間に円形刺突を施す。

(5) S K 122 (図4)

75は頸部に1条沈線を施す甕。76は頸胴部界に板によるケズリ込みがなされ段を作り出し、さらにミガキ後沈線によってさらに強調される壺。

(6) S D 42・S D 43 (図5)

遺構名は異なるが一連の溝資料。77～79は壺蓋。79はミガキ調整後、木葉紋をヘラ描する。施紋順序は葉の輪郭を内から外の順に描き、その後軸を描く。口縁部には2条の連弧紋を描く。木葉紋と連弧紋の間には赤彩が施される。頂部には穿孔がなく、口縁部付近に1ヶ所穿孔がみられる。内面には部分的に煤が付く。80はミニチュアの鉢。内面に赤彩がみられるが、赤色顔料の容器の可能性もある。81～88は壺。81は口縁部が直立気味に外反し、頸部に沈線を1条持つ壺。内外面に黒色塗布、外面沈線より下位には赤彩の痕跡が残る。82は頸部に指づくねによる断面三角形をなす突帯を持つ壺。口縁内面には縦方向に2mm前後の幅で描かれる彩紋が1/4めぐる。さらに突帯の上下にも帯状に彩紋がめぐる。頸部上位に焼成前穿孔の孔が対角線状に2ヶ所ある。83は頸部に削出突帯を持つ。横方向のミガキ調整が緻密に行われているため、ハケなどによる削り出しか否かは判断しづらい。口縁部下に一對の焼成前穿孔があ

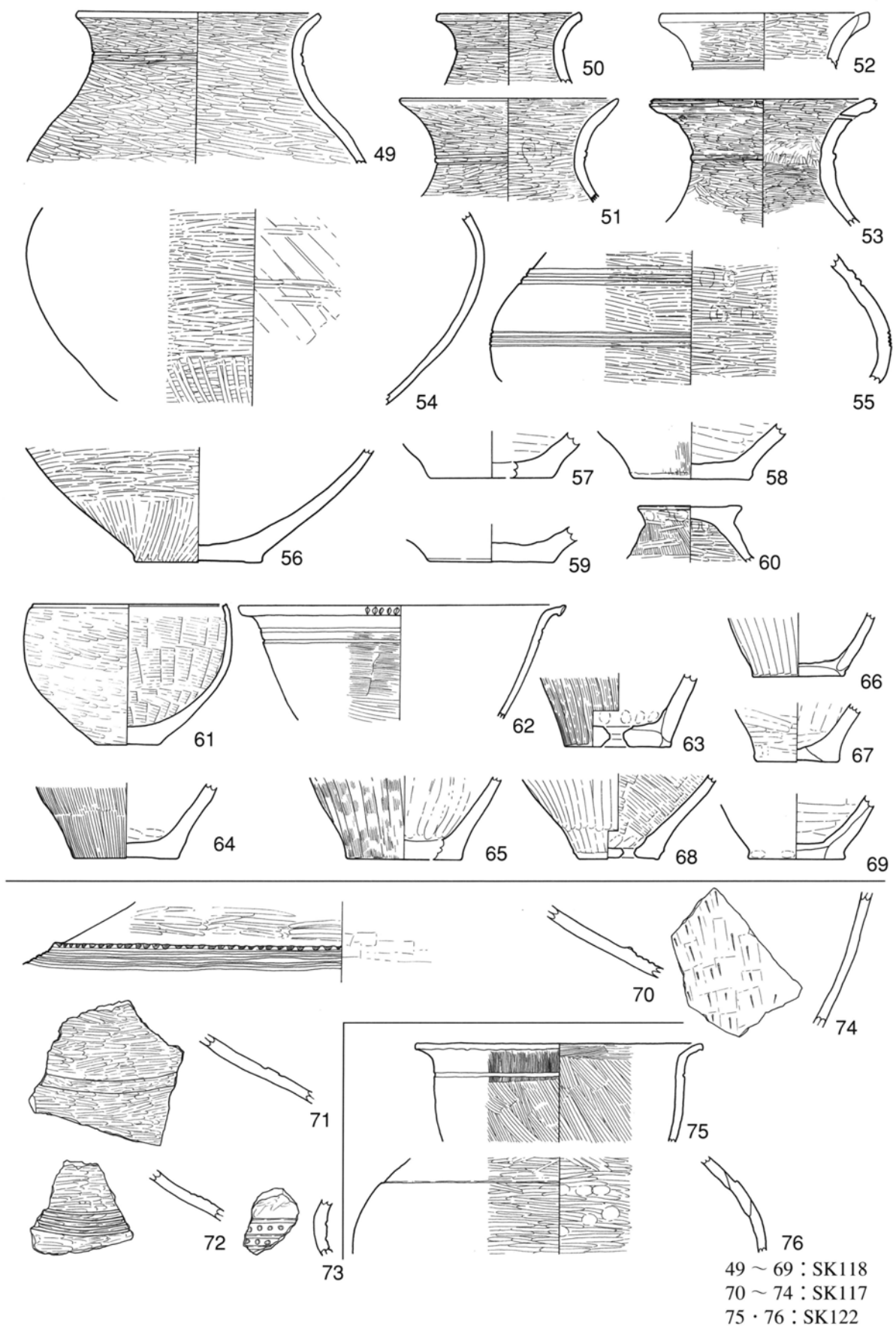


图4 SK 118 · SK 117 · SK 122

る。84は基本的に83と同様の器形・施紋をもつ。ただし、口縁端部に沈線1条と削出突帯上に2条の沈線を持つ。85は沈線紋を持たない無紋のもので、胎土は貝殻山B類に酷似する。86は断面が三角形となる削出突帯を持つもので、特に上部を深くケズリ込む。突帯部分から胴部にかけて緩やかに広がる器形で、口縁部は頸部から広く開く。頸部から頸胴部界は横ミガキのち縦方向のナデがみられる。87は口縁部が大きく開く器形で、頸部お

よび頸胴部界に各々2条の断面三角形に尖る貼付突帯がめぐる。頸部から頸胴部界のミガキは縦方向。胴部の貼付突帯下には割付用の沈線が1条めぐる。色調は灰褐色で他のものに比べ異質な胎土となる。88は貝殻山B類の壺。沈線帯の上下をハケで削り込む、削出突帯を意識している。89は有段の口縁部を持つ甕。有段部分は未調整で不揃い。口縁部は横ナデ調整で、段より下位の胴部は縦ハケ調整。外面には煤やヨゴレが強く残り、内

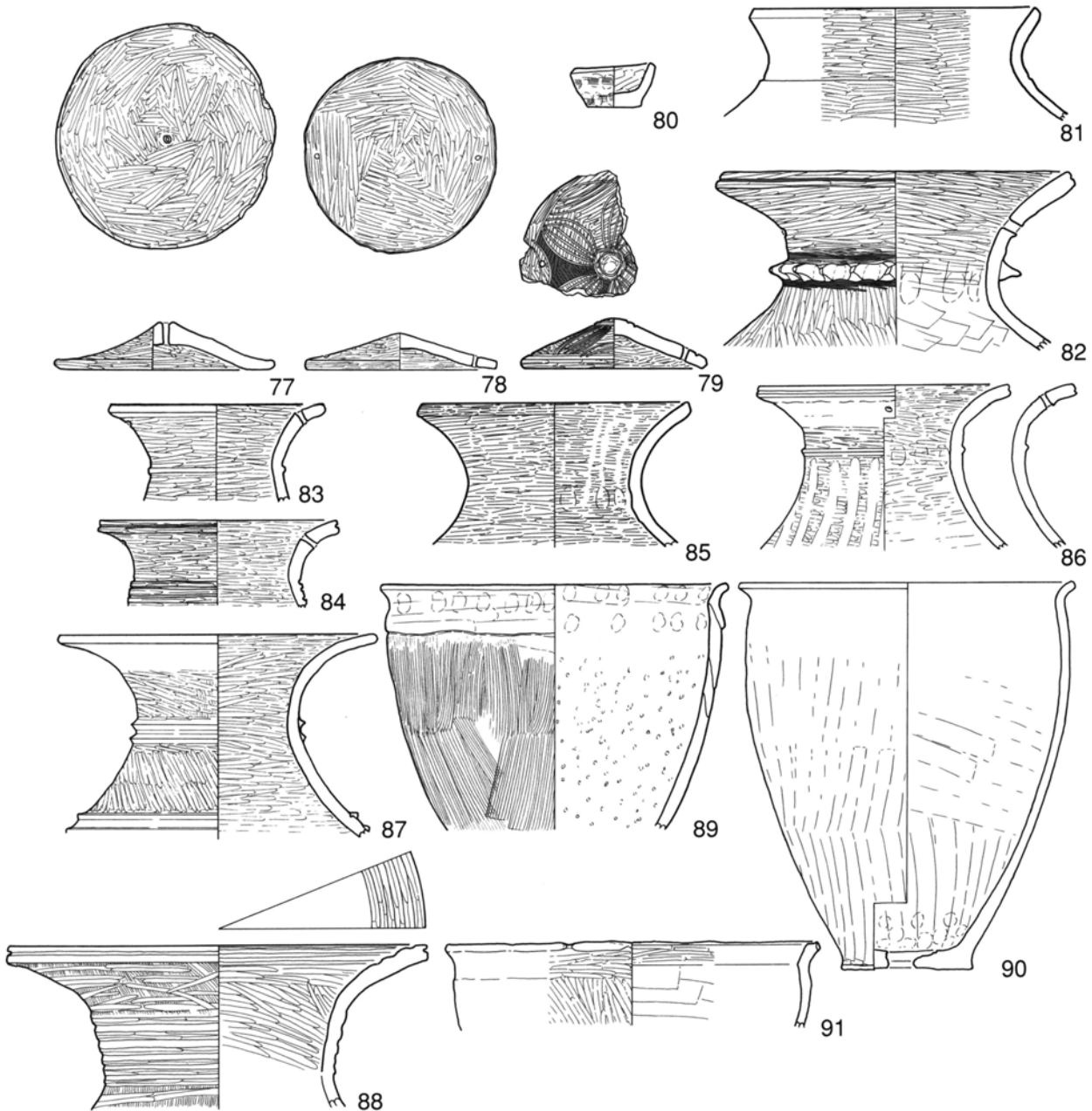


図5 S D 42・S D 43

(1/4)

面はアバタ状に剥離する。90・91は一宮市三ツ井遺跡に類例がある氷式系削痕深鉢（甕）。90は遠賀川系土器に接近する甕で、胴部外面には板ケズリが行われる。底部に焼成後穿孔がみられる。91は口縁端部に連続して指腹押圧を加える氷式系深鉢に接近する深鉢。頸部に横方向、胴部に縦方向のミガキを行い、頸胴部界を強く意識する器形。

(7) S D 45 (図6)

92～94は壺蓋。93は口縁部付近に寶貝?を模した、楕円形の浮紋の中央に切り込みを持つ円形浮紋がめぐる。滋賀県川崎遺跡などに類例がある。94は摘み部分に一对の焼成前穿孔をもつ甕蓋。あるいは壺の底部として捉え、穿孔部を紐穿孔と考えることもできる。95は甕蓋。頂部には摘み状に環状の張り出しがある。96・97は同一個体の壺。頸部と胴部に1条ずつ指頭押圧を行った貼付突帯を有し、頸胴部界に沈線帯を持つ。98は口

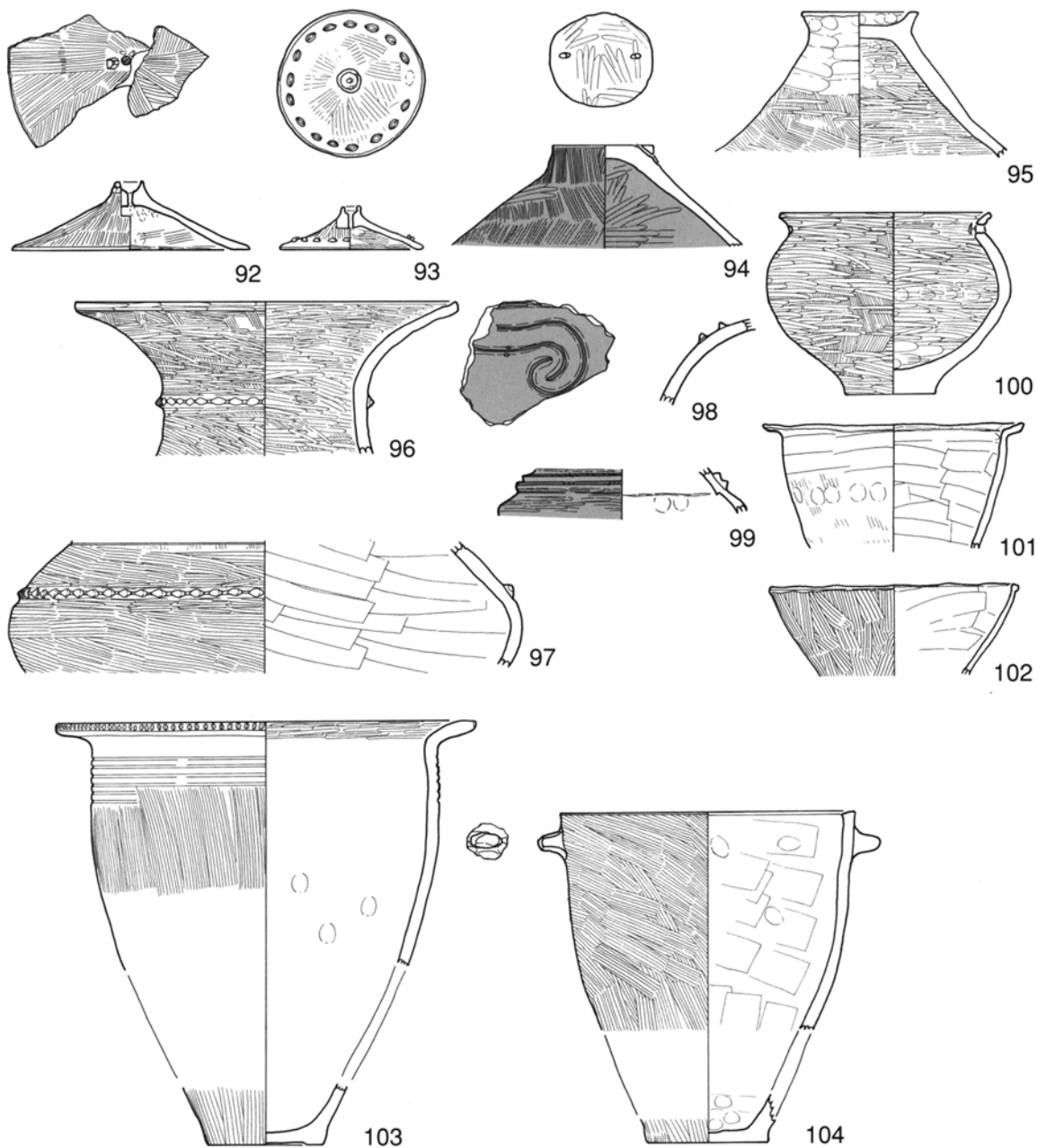
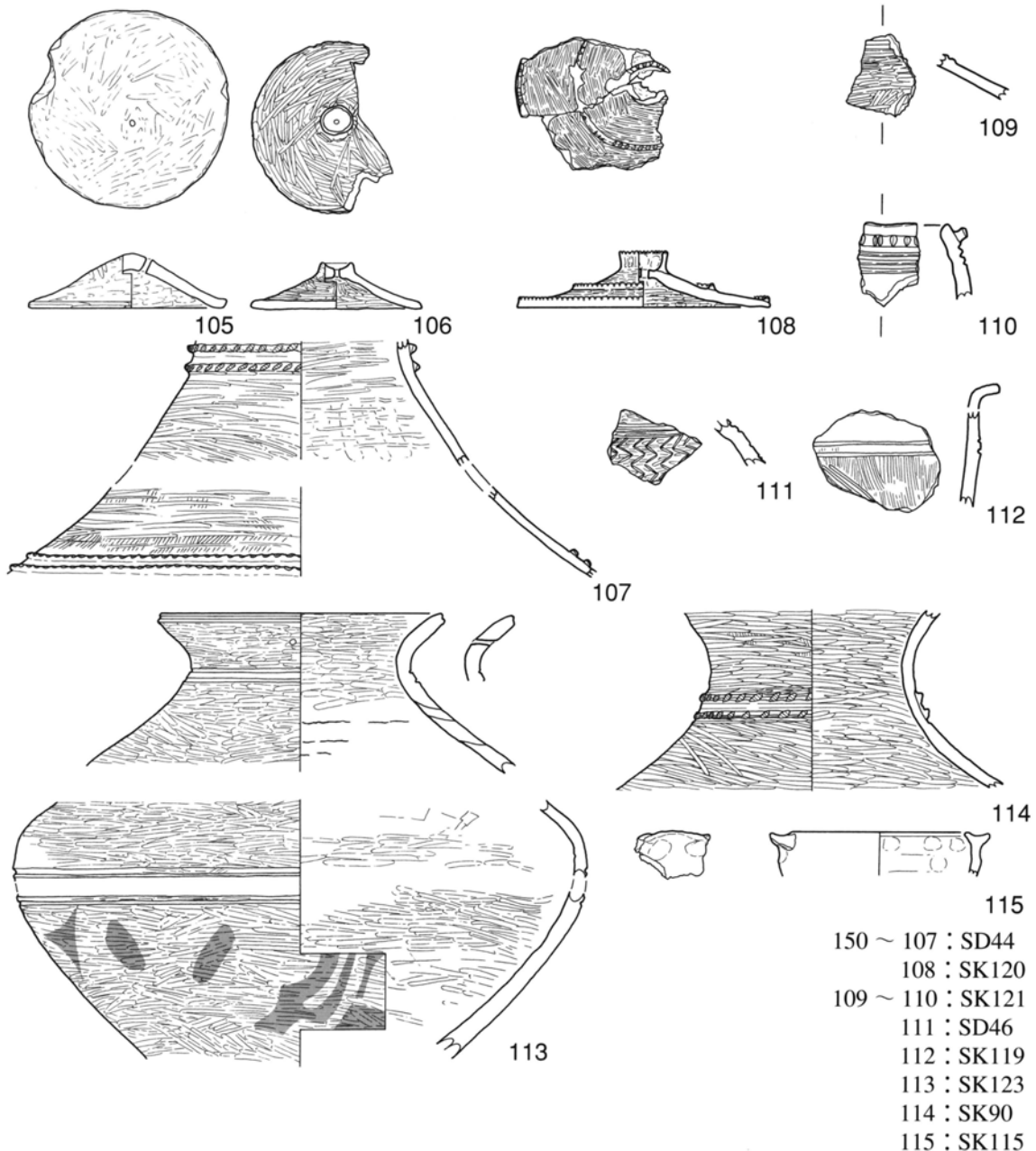


図6 S D 45

縁内面に渦紋状の貼付突帯を2条有する壺。破片資料ではあるが、注口部を意識した紋様となる。99は外面全面に赤彩を施す小型壺。100は頸部に1対の穿孔を有する鉢。外面より内面を緻密にみがく。101・102は小型の鉢。103は貝殻山B類の甕。104は1対の把手を有する鉢。全体に赤変しており、特に底部付近はその度合いが高い。

(8) その他の遺構出土資料 (図7)

105～107はSD44。105・106は壺蓋。107は壺の胴部。頸部と頸胴部界にそれぞれ2条のハケメ工具による刻み目を施した貼付突帯を有する。108はSK120の壺蓋。頂部に環状の摘み、体部に2条の貼付突帯を有する。109・110はSK121。109は頸部に削出突帯、胴部に相対渦紋を有する壺。110は口縁下に刻目突帯と沈線3条をもつ鉢。瀬戸内系の甕の影響が考えられる。111はSD46。頸胴部界に削出による段を有し、その下に無軸羽状紋を施す。羽状紋



- 150～107 : SD44
- 108 : SK120
- 109～110 : SK121
- 111 : SD46
- 112 : SK119
- 113 : SK123
- 114 : SK90
- 115 : SK115

図7 その他I期の遺構

(1/4)

は静止で描く。112はS K 119。体部に2条の沈線と山形紋を持つ甕。113はS K 123。胴部が扁平で、頸部から口縁部にかけて短く折れる器形の壺。胴部下半に黒色塗布による紋様が見られるが、紋様構成は不明。115はS K 115。把手の付く鉢。

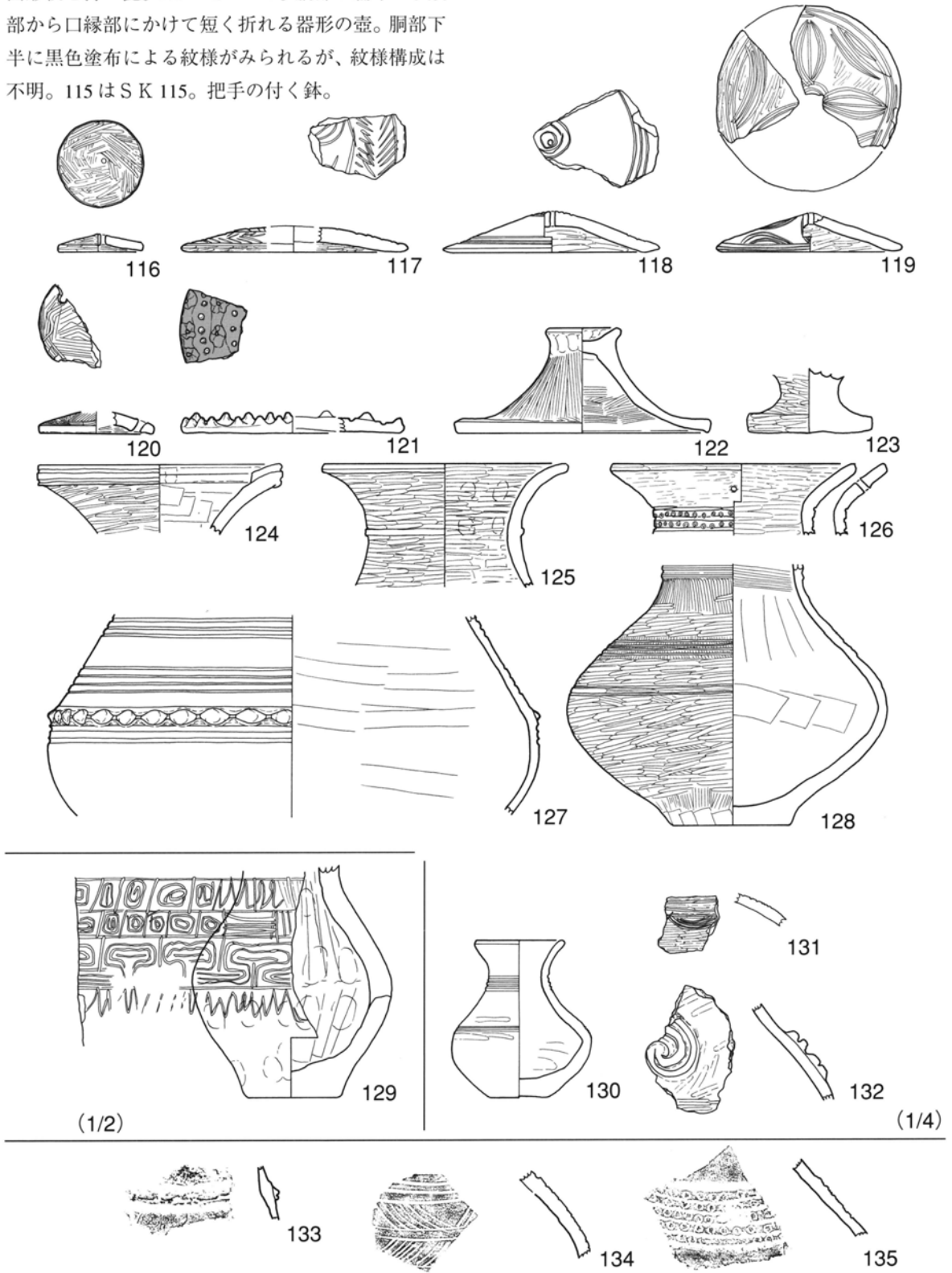


図8 95検出ほか(1)

(129は1/2、拓本は1/3、他は1/4)

(9) 95 検出資料 (図8・9)

116～121は壺蓋。117は頂部周辺に木葉紋、その外側には羽状沈線紋が施される。119は木葉紋。121は乳状突起と円形刺突紋が交互にめぐる。122は甕蓋。123は全面にミガキが認められる。台付鉢の台部か。124～135は壺。124は口縁貼付有段壺。126は頸部に3条の沈線紋、その間に円形刺突紋を施す。127は指腹押圧突帯紋と沈線紋帯の組み合わせからなる。129はヘラ描沈線による紋様が4帯構成で描かれる。1段目は山形紋と2重円、2段目は2重円と縦方向沈線と横方向沈線、3段目は工字紋風の紋様、4段目は山形紋の組み合わせ。131はミガキの後、沈線、重弧紋を施す。132は相対渦紋。133は生駒西麓産の胎土。134はミガキ後の施紋、沈線帯上部は削出、有軸羽状紋。135は削出突帯の沈線間に円形刺突紋。

136は把手付鉢。137～139は甕。137は砲弾形の器形に口縁端部下に刻み目突帯が付く。139は貝殻山B類。内外面にミガキを行う。140～142は鉢。

(10) 96 検出資料 (図10)

143は壺蓋。2孔一対の穿孔が端部にある。144は摘み部分に2孔一対の焼成前穿孔をもつ甕蓋。あるいは壺の底部として捉え、穿孔部を紐吊孔と考えることもできる。体部に山形紋と横方向の沈線紋が施される。145はミニチュアの壺。146・147は高杯の脚部。148～153は壺。148は貝殻山B類。149は削出突帯が2帯めぐる大型壺。150は頸部に沈線2条、その下にヘラ描による斜格子紋。151は上下に沈線帯、その間に無軸羽状紋。152は沈線下に無軸羽状紋。羽状紋はヘラ描ではなく、貝の腹縁による静止(押圧)で描く。154は胴部がやや膨らむ砲弾形の甕。口縁部下に刻目突帯紋と沈線3条を施す。155～157は鉢。155は口縁端部がL字状に張り出す。156は内外面に赤彩がみられる。口縁端部に刻み目、口縁下に2条の刻み目突帯がめぐる。157は貝殻山B類。口縁端部にハケ状工具による刻み目を施す。158は条痕紋系土器の壺。口縁端部および頸部の条痕は貝殻腹縁による施紋。159は浮線紋系の鉢か。

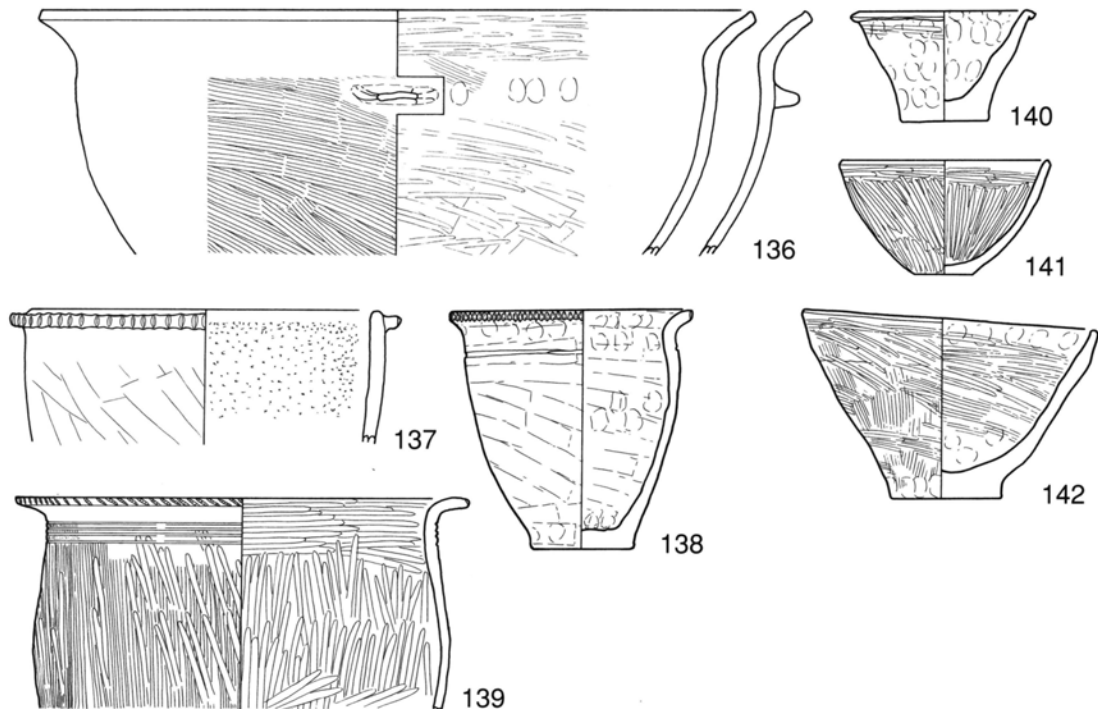


図9 95 検出ほか (2)

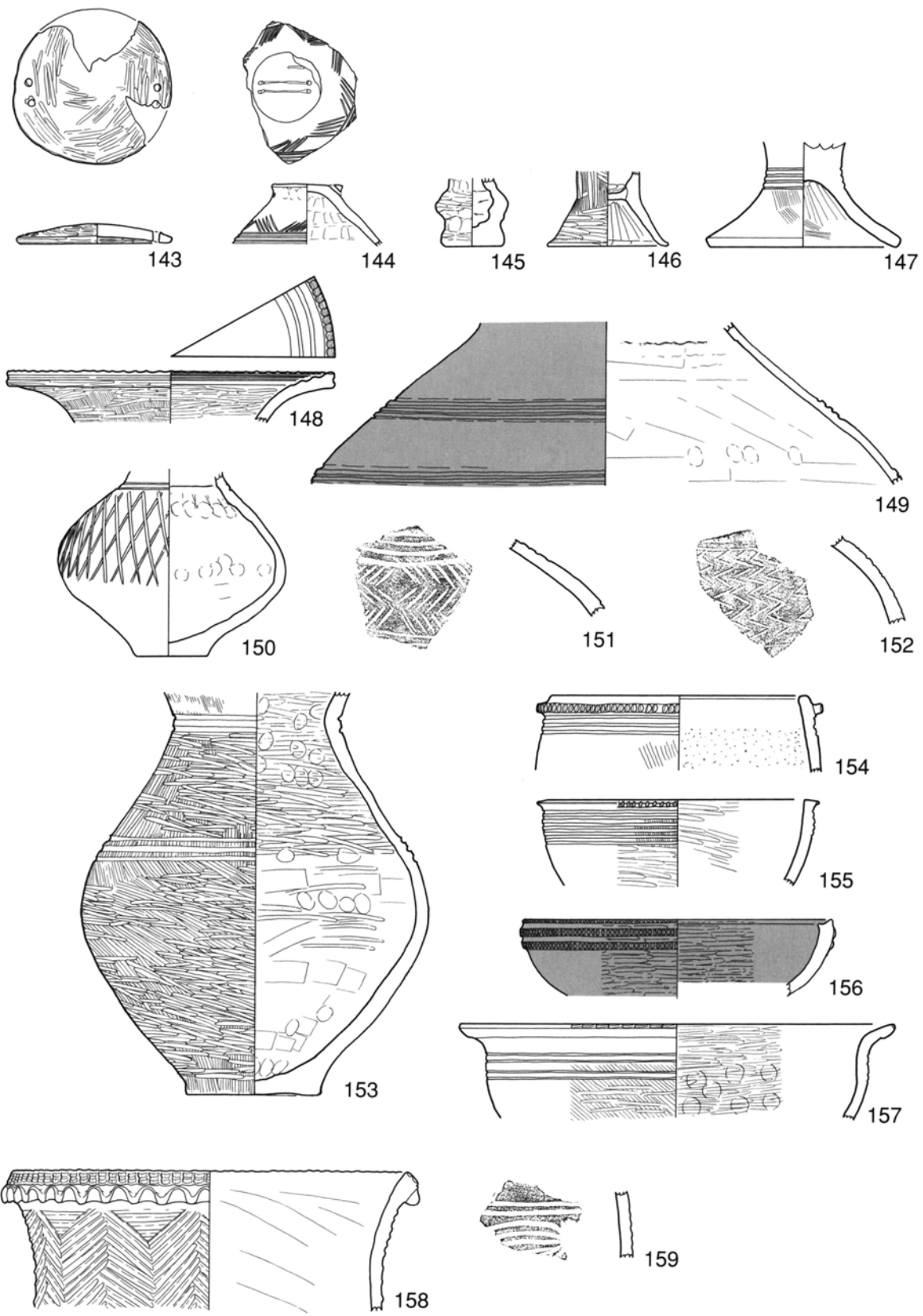


図10 96検出ほか

(拓本は1/3・他は1/4)

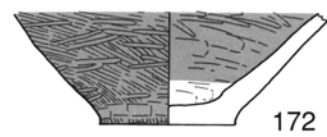
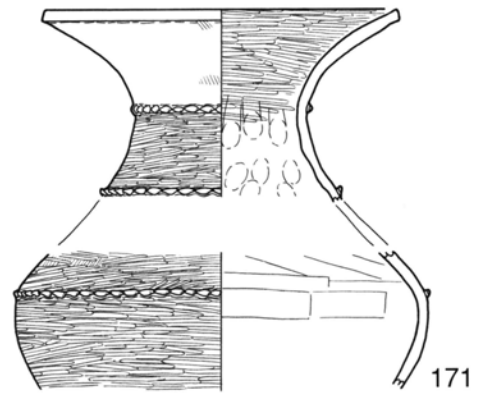
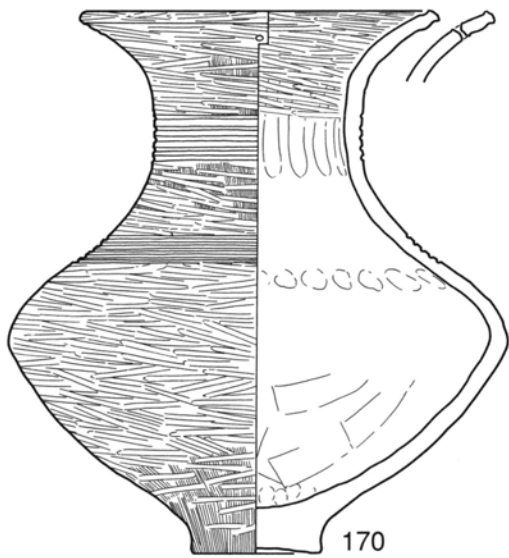
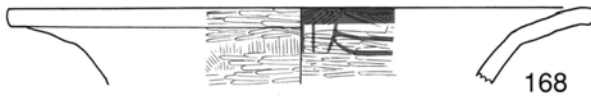
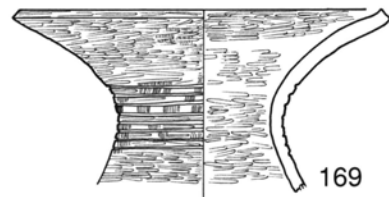
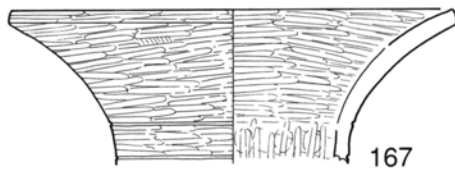
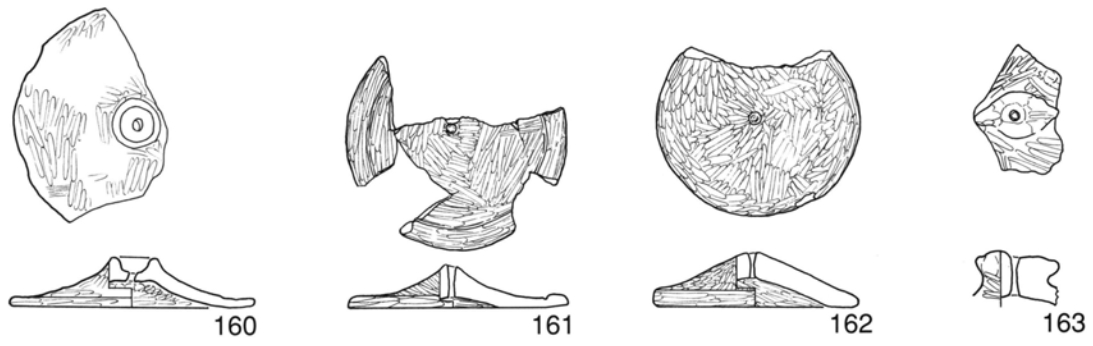


图 11 95 S D 101 下層 (1)

(1/4)

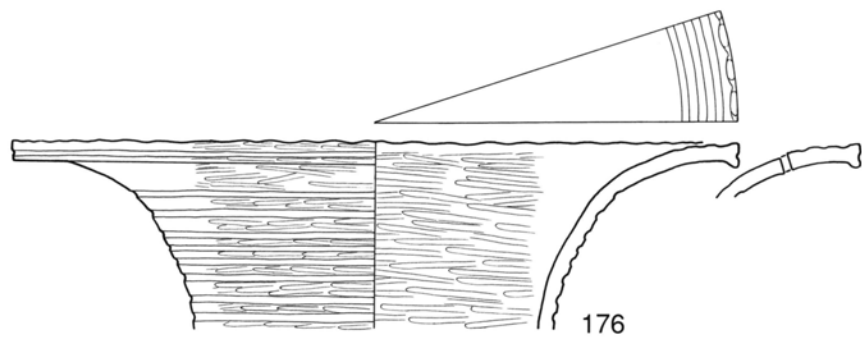
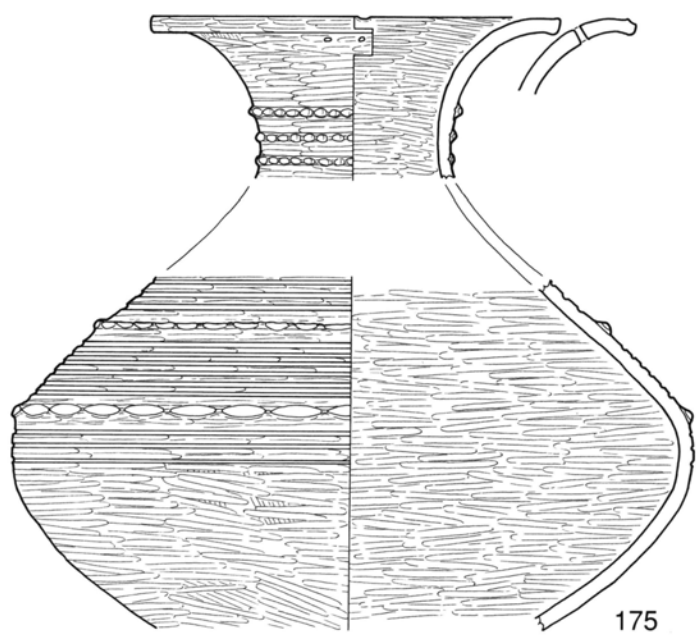
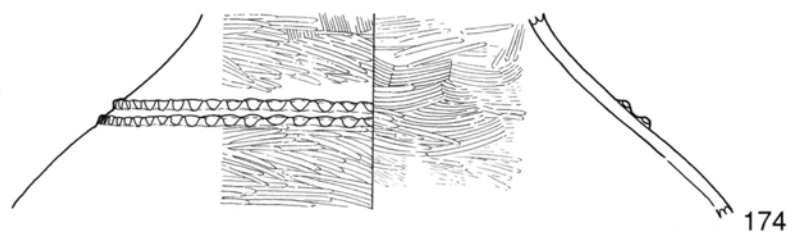
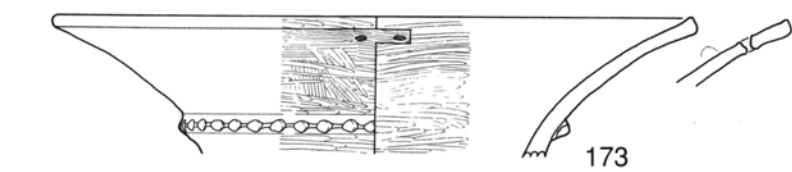


图12 95 S D 101 下層 (2)

(1/4)

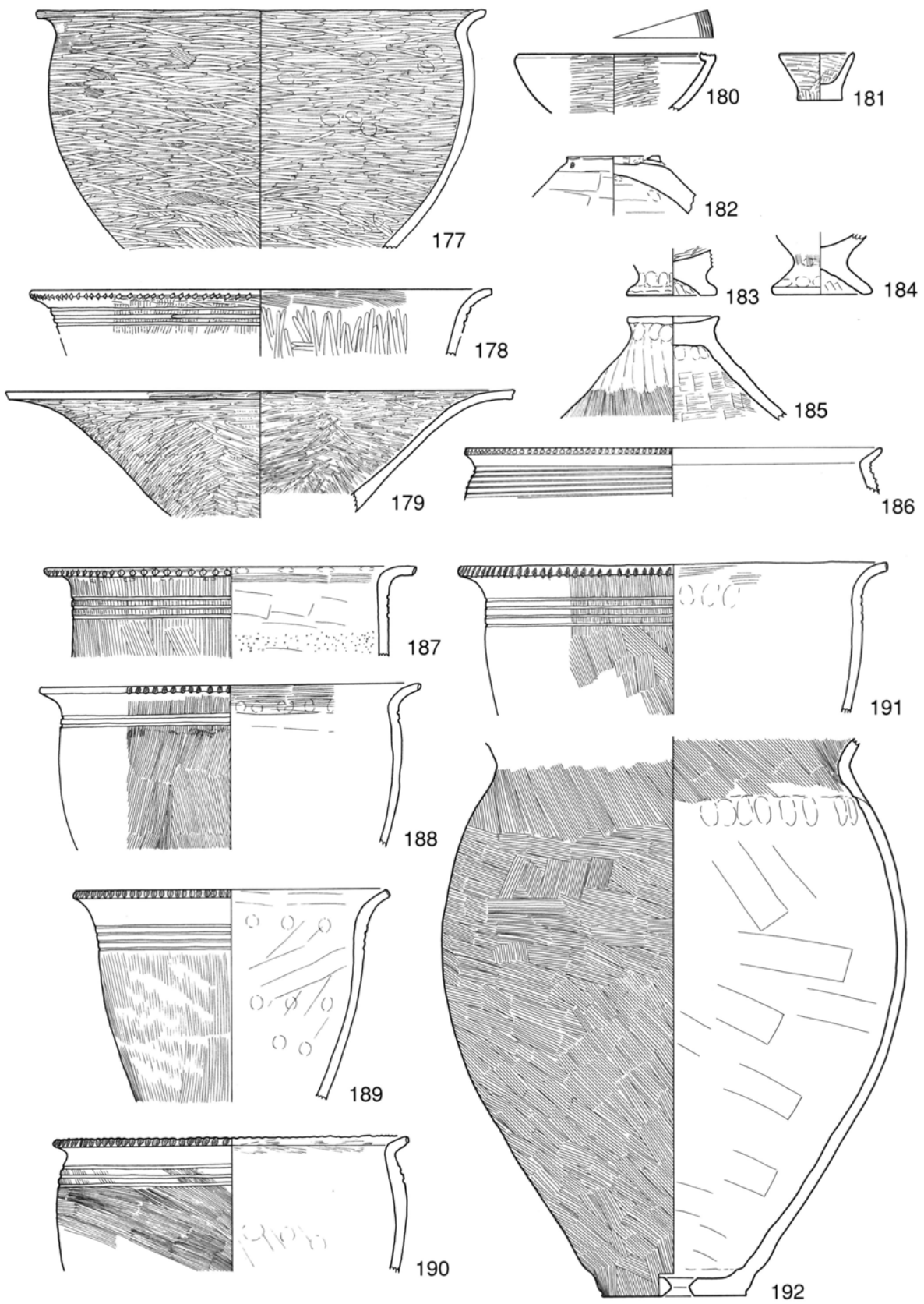


图13 95 S D 101 下層 (3)

(1/4)

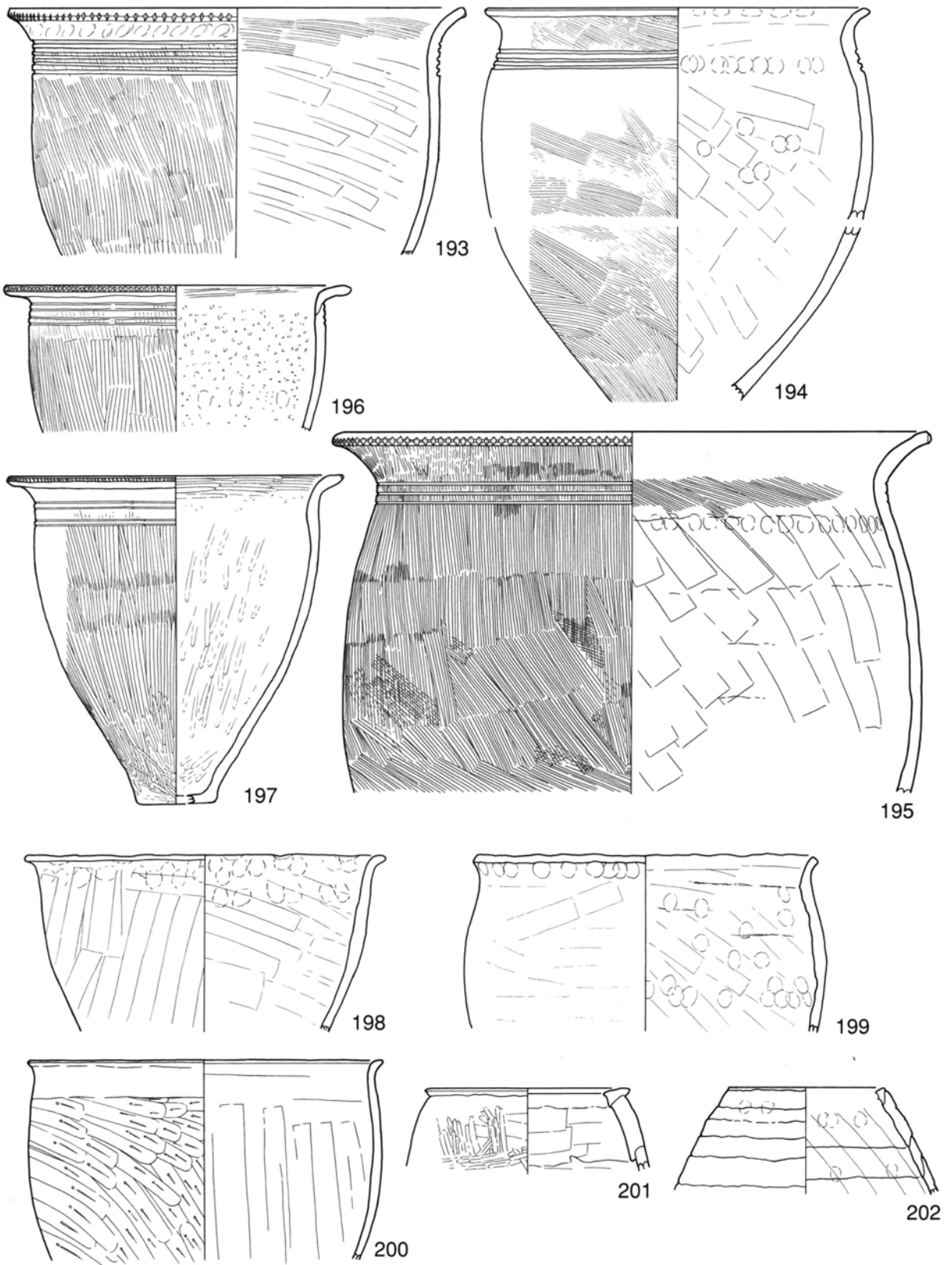


图14 95 S D 101 下層 (4)

(1/4)

(11) S D 101 (図 11 ~ 37)

95と96の調査区で層名が異なるので、対照させておく。95の下層と貝層は96の3層と2層に対応する。おおむねこれらの資料は朝日Ⅰ-3期に位置づけられる。95の上層は96の1層と2層の一部に対応する。これらは、S D 101の再掘削以降の資料で、朝日Ⅰ-3期の資料を含むもの、おおむね朝日Ⅱ~Ⅲ期に位置づけられる。

A. 95 S D 101 下層 (160 ~ 208)

160~163は壺蓋。164・165はミニチュア土器。166~176は壺。168は口縁内面に稜線をもち、高杯の可能性もある。口縁内面に赤彩が残る。169は外面が赤変し、内面の剥離が著しい。171の貼付突帯上は指腹押圧による施紋。172は内外面に赤彩が施される壺の底部。173と174は同一個体の可能性が高い。貼付突帯上は指腹押圧による施紋。175は口縁端部に注ぎ口状の凹みがみられる。その反対側には2孔の焼成前穿孔がある。口頸部界の貼付突帯下には割付用の沈線が確認できた。頸胴部界と頸部から胴部にかけての貼付突帯紋

は、押圧の手法が異なる。前者は指先による短いピッチの押圧、後者は指腹による横長の押圧手法。176は貝殻山B類。口縁部に焼成前穿孔がある。貝殻山B類としては口縁部に穿孔する類例はほかにない。177・178は鉢。177は貝殻山B類。178は口縁端部に刻目を施す。鉢としては珍しい。179は高杯の杯部。180は小型の鉢。口縁部が内側に折れ、外面に4条の沈線を入れる。内外面ともに密なミガキ。181はミニチュアの鉢。182は頂部に4ヶ所焼成前穿孔の孔を持つ甕蓋。壺の底部の可能性もある。183・184は甕の台部か。185は甕蓋。186~197は甕。192は胴部上位に沈線を施さないもの。Ⅰ-3期から顕著にみられる。胴部上位が丸く膨らむ器形もこの時期からみられる。196・197は貝殻山B類。198~200は水式系削痕深鉢形土器。201・202はナデ系内傾口縁土器。203~208は施紋原体がいずれも二枚貝腹縁の条痕紋系土器。203は口縁部下に指腹押圧を施す細頸壺。204~208は深鉢。204・205は砲弾形の器形、206~208は頸部から緩やかに外反する甕化指向の深鉢。

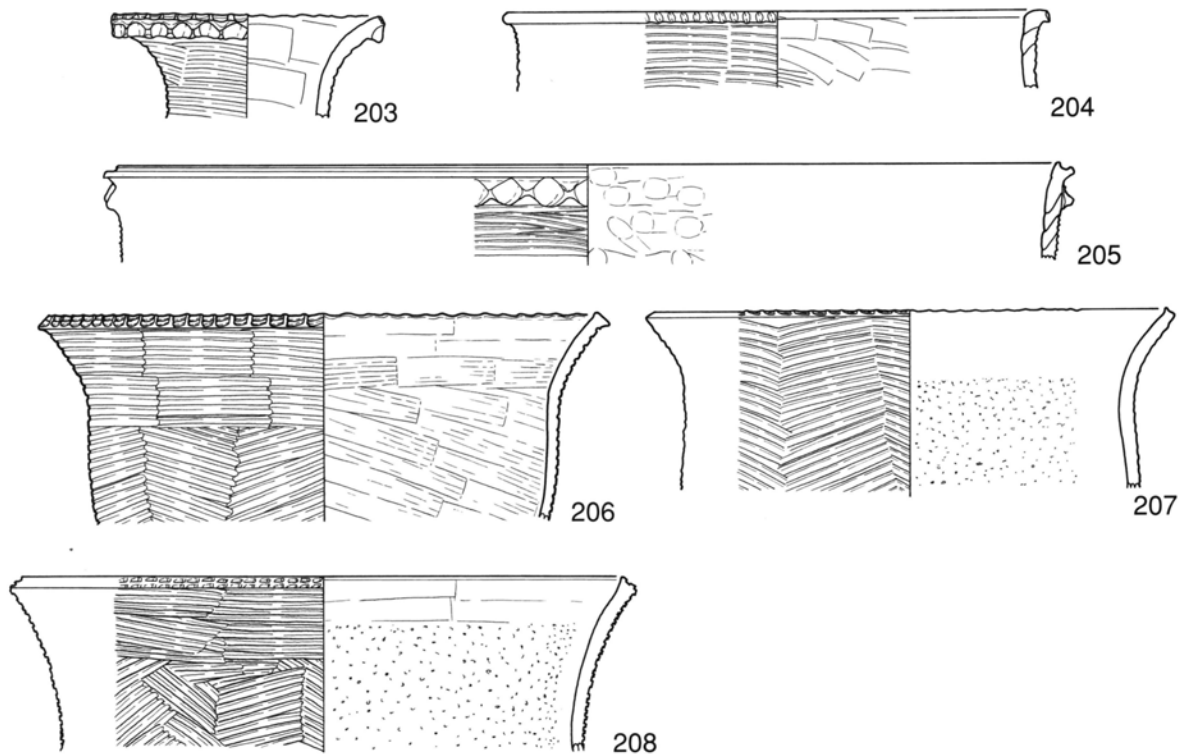


図 15 95 S D 101 下層 (5)

B. 95 S D 101 貝層 (209 ~ 226)

209 ~ 216は壺。210は板状工具による刻みを行
う貼付突帯が2条。ただし、突帯は幅広の1帯を
2分割している。211は色調が黒褐色で、器面全
体に黒色塗布を施している可能性がある。213は
底部に焼成後穿孔をもつ壺。215・216は大型壺。
口縁部から胴部にかけて大型壺としては器壁が薄

い。215は口縁下と頸胴部界に指先による刻み目
を入れる。216は無紋。217 ~ 222は甕。219 ~ 222
は貝殻山B類。223は条痕調整が縦方向に入る内
頸口縁土器。224 ~ 226は条痕紋系土器。224・225
は深鉢。225の底部に焼成後穿孔がある。226は
大型壺の胴部。

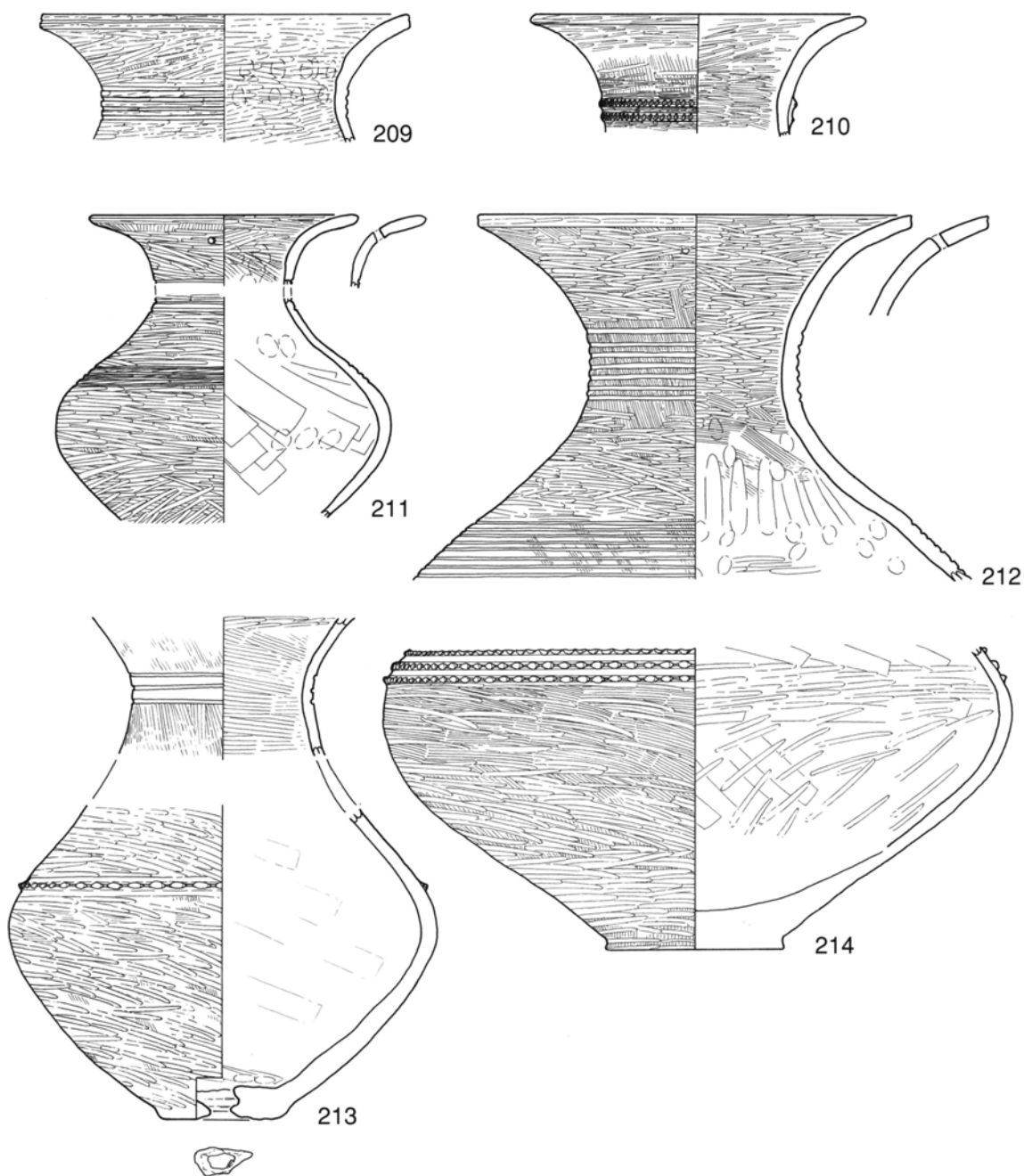


図16 95 S D 101 貝層 (1)

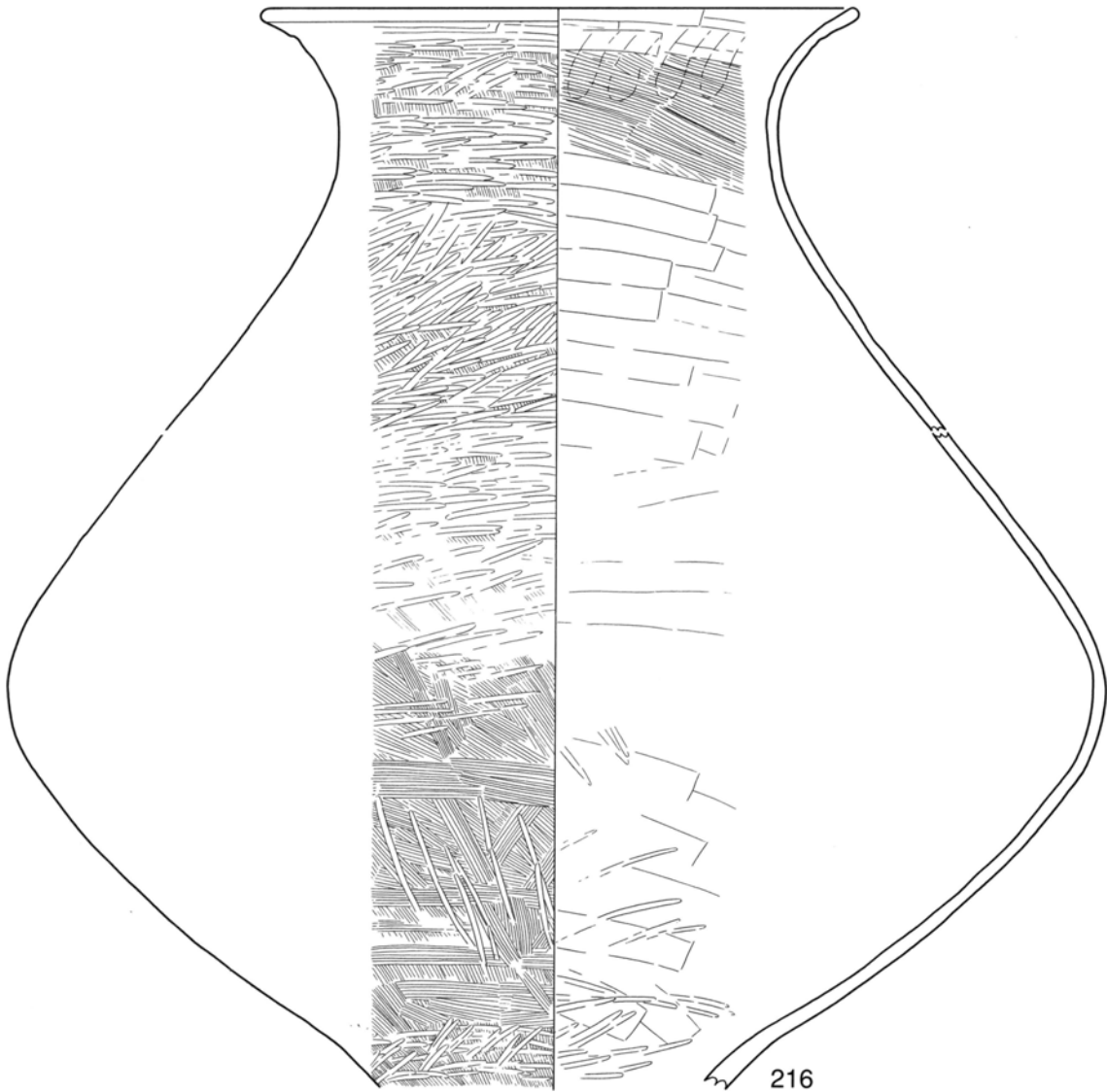
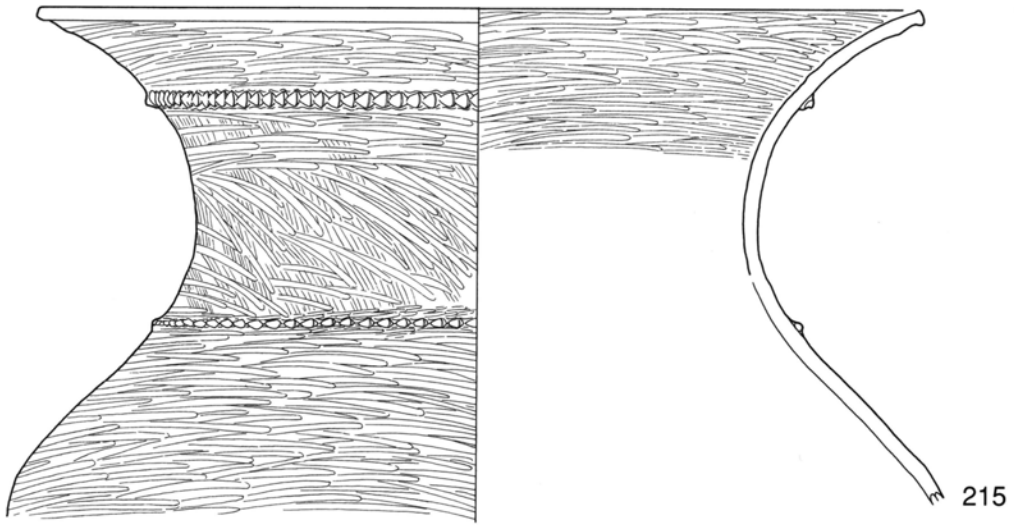


图 17 95 S D 101 貝層 (2)

(1/4)

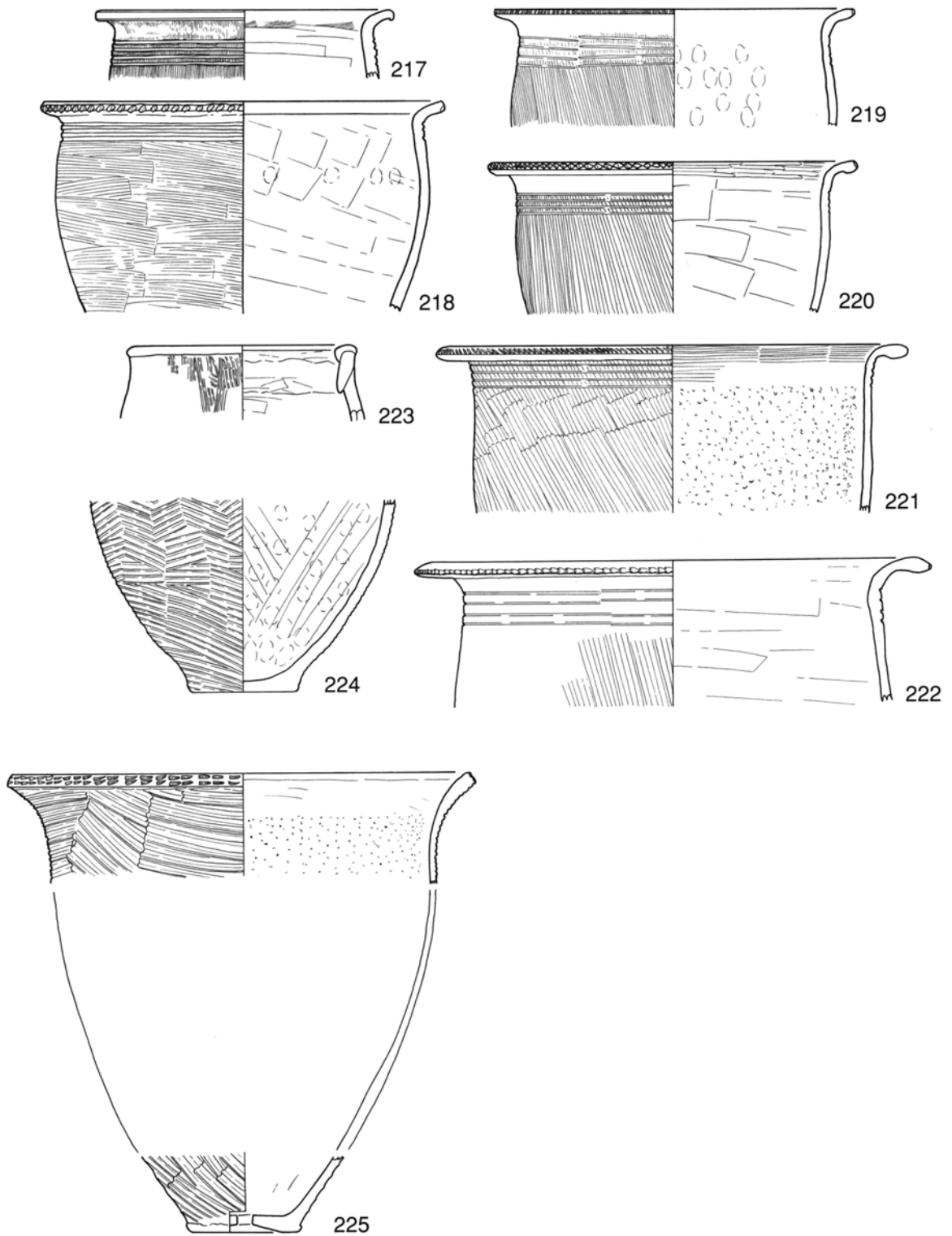


图 18 95 S D 101 貝層 (3)

(1/4)

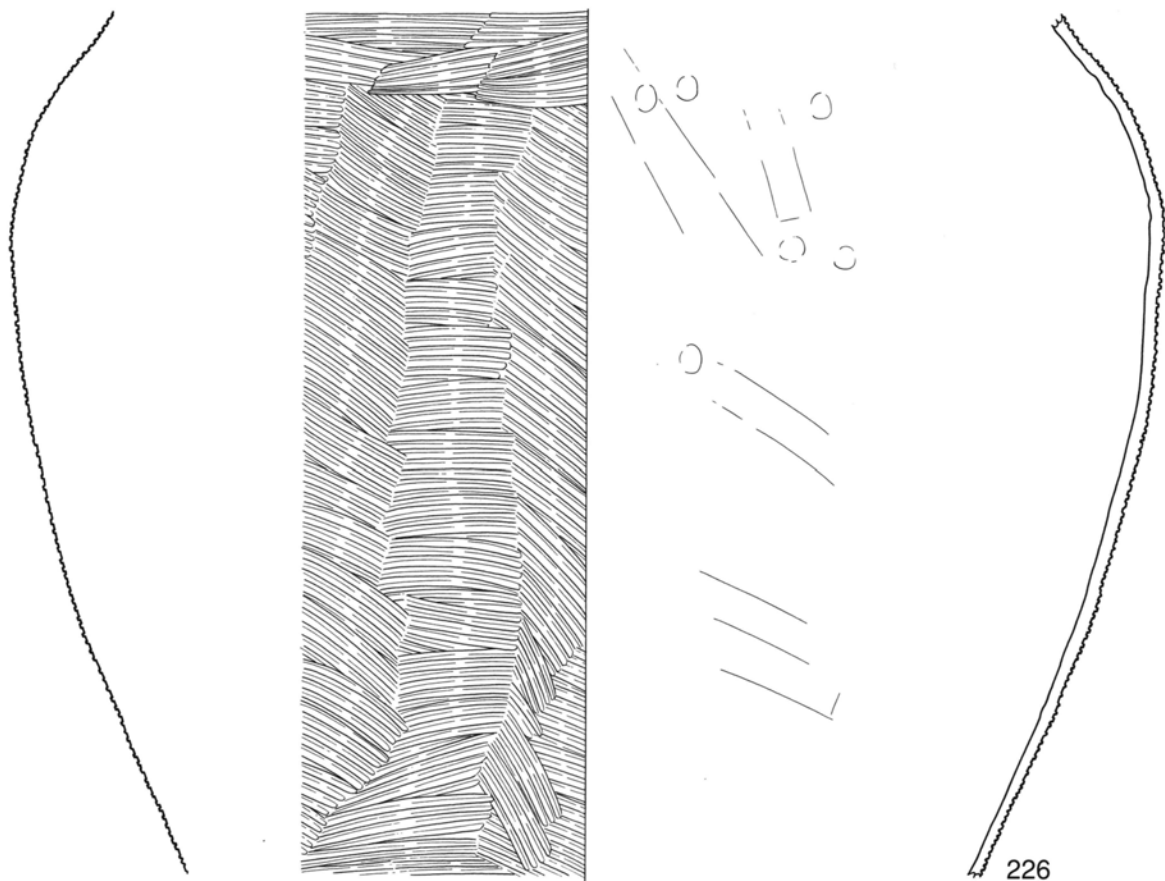


图 19 95 S D 101 貝層 (4)

(1/4)

C. 95 S D 101 上層 (227 ~ 234)

227 ~ 231はI期。227は無紋の壺。228・229は甕。228は貝殻山B類。230は甕蓋のミニチュアか。231は条痕紋系土器の深鉢。232 ~ 234はII期。232

は条痕紋系土器 (II系) の鉢。233・234はハケ甕 (I系)。234は口縁端部に二枚貝腹縁による刺突がある。

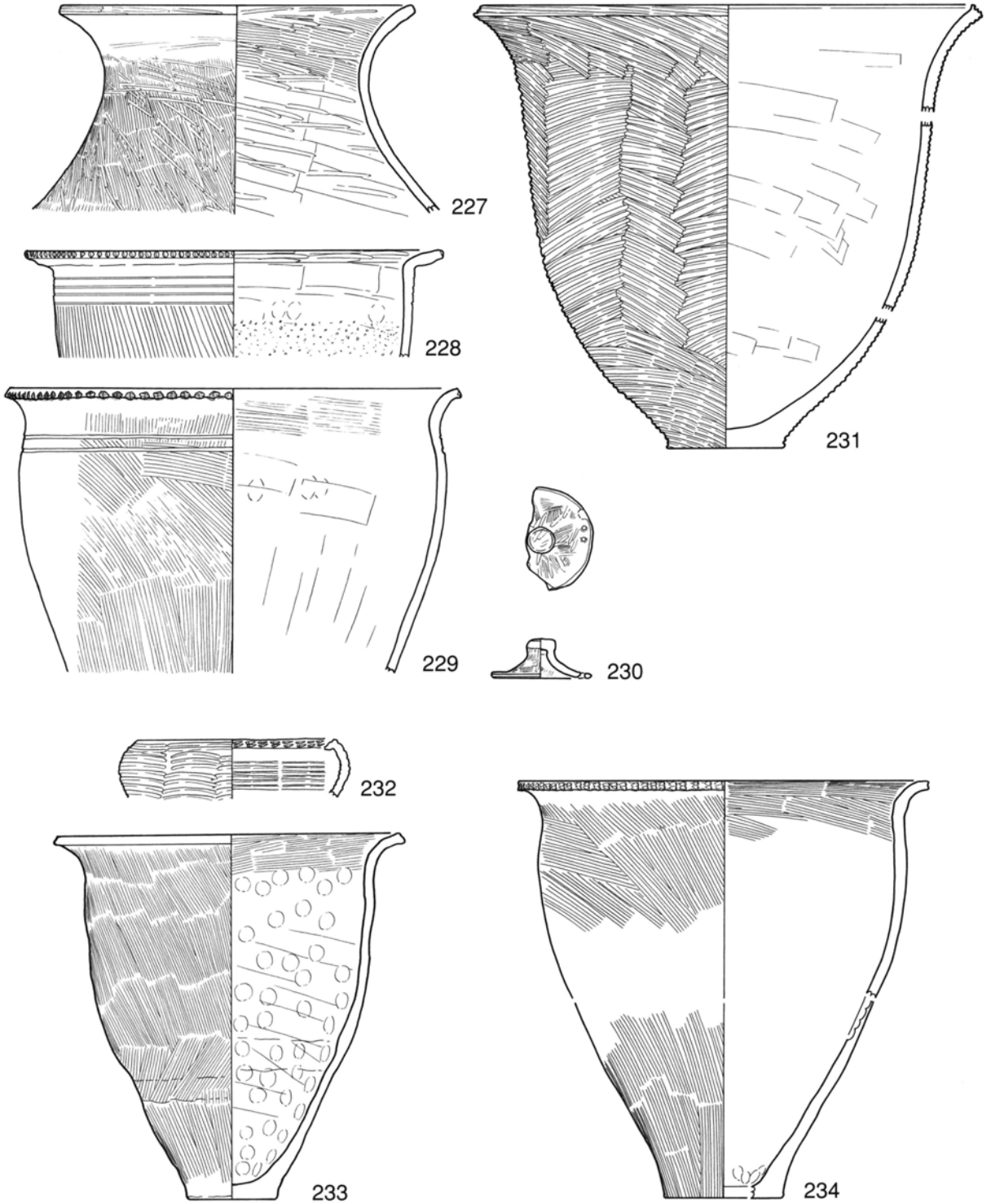


図20 95 S D 101 上層

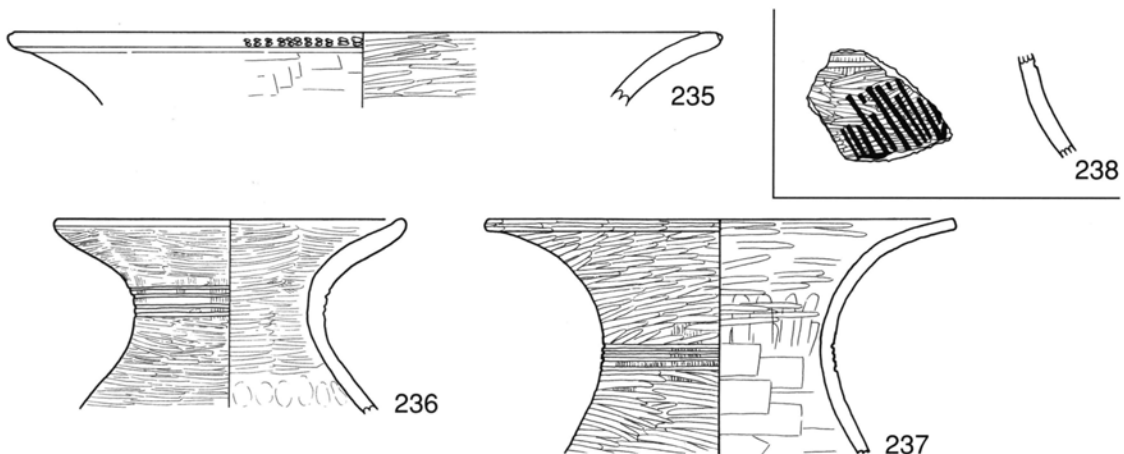
D. 96 S D 101 3層 (235 ~ 301)

235 ~ 237はS D 101にみられた集石(S X 04)からの出土資料でいずれも壺。235は口縁端部に二枚貝腹縁による刺突がある。238はS X 04同様の集石、S X 05出土資料で壺の頸部。細線の山形紋と思われる赤彩がある。

239 ~ 245は壺蓋。242は内面に煤が付着する。246 ~ 278は壺。246はI - 2期に遡る資料。口頸部界が有段となり、段の部分をミガキの段階で削り込む。247・248・249 ~ 253は口頸部界に削出突帯を有するもの。247は上部を浅く削り込む。248は上下を浅く削り込む。255は口縁内面に貼付突帯が1条めぐる壺。全周するか否かは不明であるものの、突帯上に刻目など装飾を施さないことから蓋受けの可能性が指摘できる。257は口縁部が大きく外反しない壺。紋様もなく、縦方向のミガキ調整で仕上げている。遠賀川系土器のなかでは極めて稀な資料。頸部に部分的な赤彩がみられる。258は口縁端部に沈線をめぐらせ、その上下にハケ状工具による刻目を施す。259は彩紋土器。沈線間と沈線帯下に山形平行斜線紋を施す。260は土器の剥離面に布目圧痕がみられる。262の貼付突帯紋は口頸部界・頸胴部界、いずれも幅広の突帯を2分割して2条の突帯としている。頸胴部界の突帯下には割付用の沈線が確認できる。265

は尾張平野に特徴的な紋様構成をもつ。胴部紋様帯の構成が貼付突帯+沈線+貼付突帯となる。通常は貼付突帯のみや沈線のみあるいは沈線+無紋帯+貼付突帯の構成となる。ところで、貼付突帯紋と沈線紋の連続した胴部紋様帯の構成は貝殻山B類にみられる。貝殻山B類の場合、紋様帯構成は貼付突帯紋+沈線紋を基本とし、沈線紋+貼付突帯の紋様構成は採用しない。頸部に斜格子紋の赤彩が一部残る。266は貝殻山B類。269は2条の突帯上位に相対渦紋の剥離痕がみられる。273は貝殻山B類。削出突帯の下位に半截竹管状工具による山形紋が2帯めぐる。274は頸部の沈線帯施紋後、細い貼付突帯紋を縦に6条、横に8条の単位で施す。I - 4 / II - 1期にみられる紋様構成。275・276・278は貝殻山B類の壺。275の胴部紋様構成は沈線5条+貼付突帯2条+沈線2条以上となる。特に注目したいのは、貼付突帯の1条目である。施紋順序から示すと、まず2条目より太い突帯を貼り付け、突帯の頂部から2条の突帯に分ける。その際、1か所以上の単位で2条突帯にしない箇所を残す。次に板状工具により2条突帯部分を刻む。この刻目突帯が全周しない類例は貝殻山B類の特徴である。

277は貝殻山B類に類似するもの。口縁内面の施紋に相違がある。貝殻山B類の施紋について



235 ~ 237 : SX04
238 : SX05

図21 96 S D 101 3層下 S X 04・S X 05

(1/4)

は、隆帯の両端に指腹押圧を施すことはあるが、隆帯部分に施す刻み目をもつことはない。現状では朝日遺跡から277以外に327が確認できるのみ。279・280は鉢。281は沈線による重弧紋を描く鉢。重弧紋を描く際にヘラ状工具により割付を行った痕跡が見られる。282はミニチュアの鉢。283は内外面ともに丁寧なミガキ調整が行われる蓋。内面にスス・ヨゴレの痕跡がみられない。甕蓋あるいは鉢蓋の可能性もある。284は2孔一対の焼成前穿孔の孔を持つ蓋。鉢あるいは壺の底部の可能性もある。285～295は甕。285・291～293は貝殻山B類。294は朝鮮系無紋土器。胴部上端をわずかに折り曲げ口縁部端に附加させる断面円形の粘土帯を巻き込む。この特徴が朝鮮系無紋土器の製作技法と酷似する。また、口径や器高も九州などで出土する資料に類似する。ただ、以下の3点において相違点が指摘できる。まず、胴部外面に縦方向のハケ調整を行う点である。短いピッチでハケ調整を行うことを除けば、朝日遺跡出土の遠賀川系土器と寸分違わない。次に、内面のミガキ調整があげられる。ナデ調整で仕上げるのが最も多いのに対して、本資料は極めて珍しい。最後に、器壁の厚い点が異なる。大きさがほぼ類似することから、手で持った重量感がかなりある。以上の

指摘から確認できるように、九州などで出土する朝鮮系無紋土器と類似する。この地域で製作された土器である可能性が高い。また、粘土帯の有無を除けば、ほぼ同じ特徴を持つ土器がある。これもこの地域で製作された裏付けとなろう。片岡宏二氏の見解によれば「擬朝鮮系無紋土器」といえる。295は沈線紋下に山形紋を施すもの。296は沈線紋系土器胴部に縦区画の紋様帯をもつ。297～301は条痕紋系土器。3層も含め、I期の資料群における条痕紋系土器の割合はかなり低い。297・298は壺。いずれも頸部に2帯以上の波状紋を施す。297は口縁端部に押引、口縁には棒状工具による縦方向の連続押圧を施す。299～301は深鉢。300は口縁端部を4ヶ所？摘むもので、II期の可能性がある。



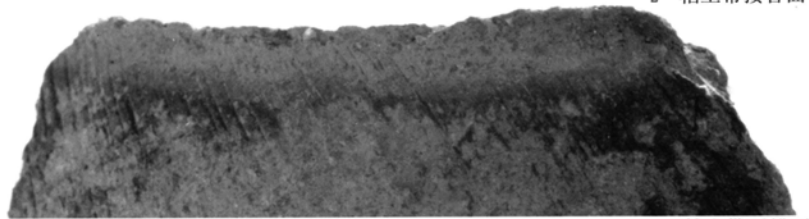
4 内面



1 粘土帯の断面接合痕



2 粘土帯接合面



3 粘土帯剥離面

写真1 朝鮮系無紋土器(294)部分写真

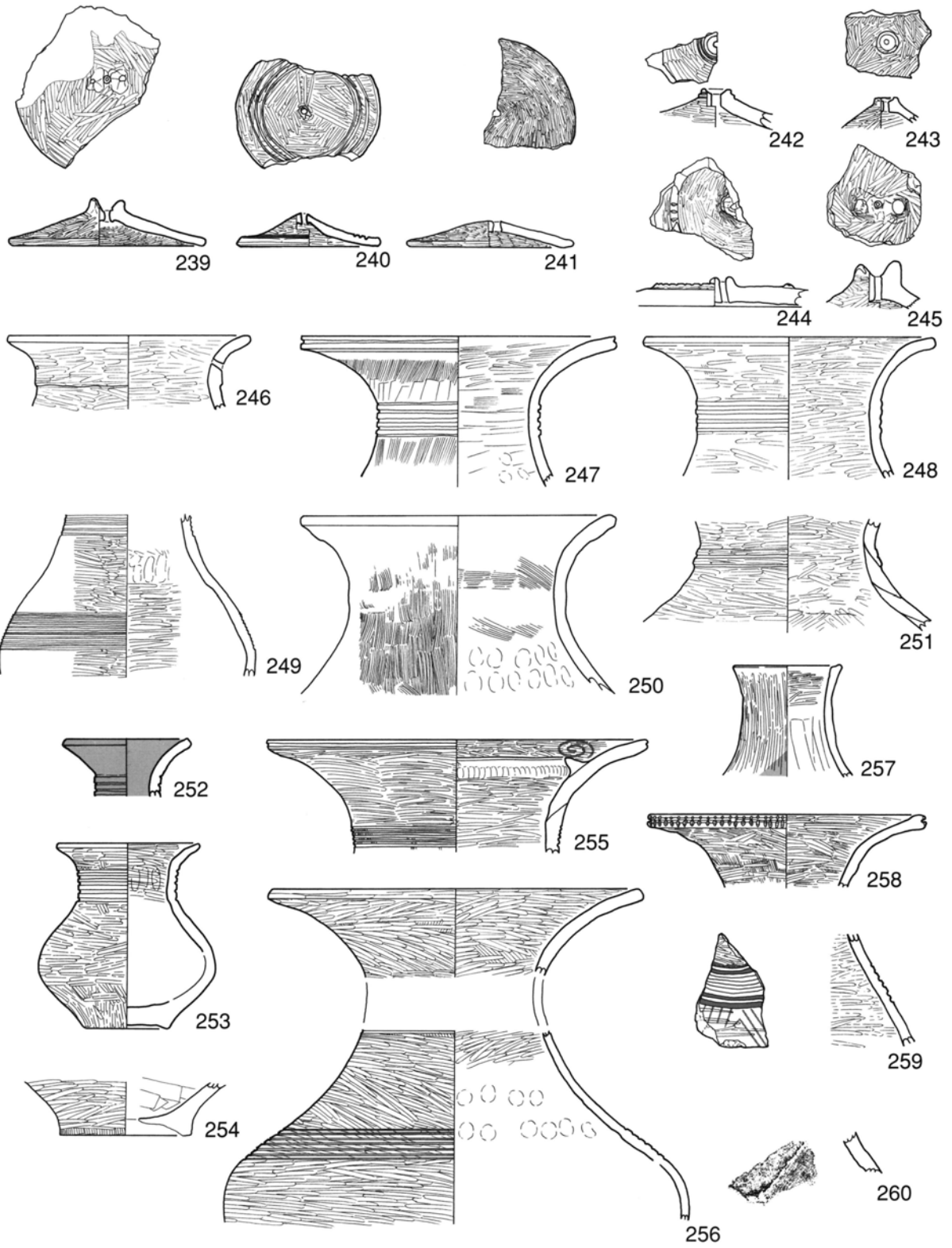


図22 96 S D 101 3層 (1)

(拓本は1/3、他は1/4)

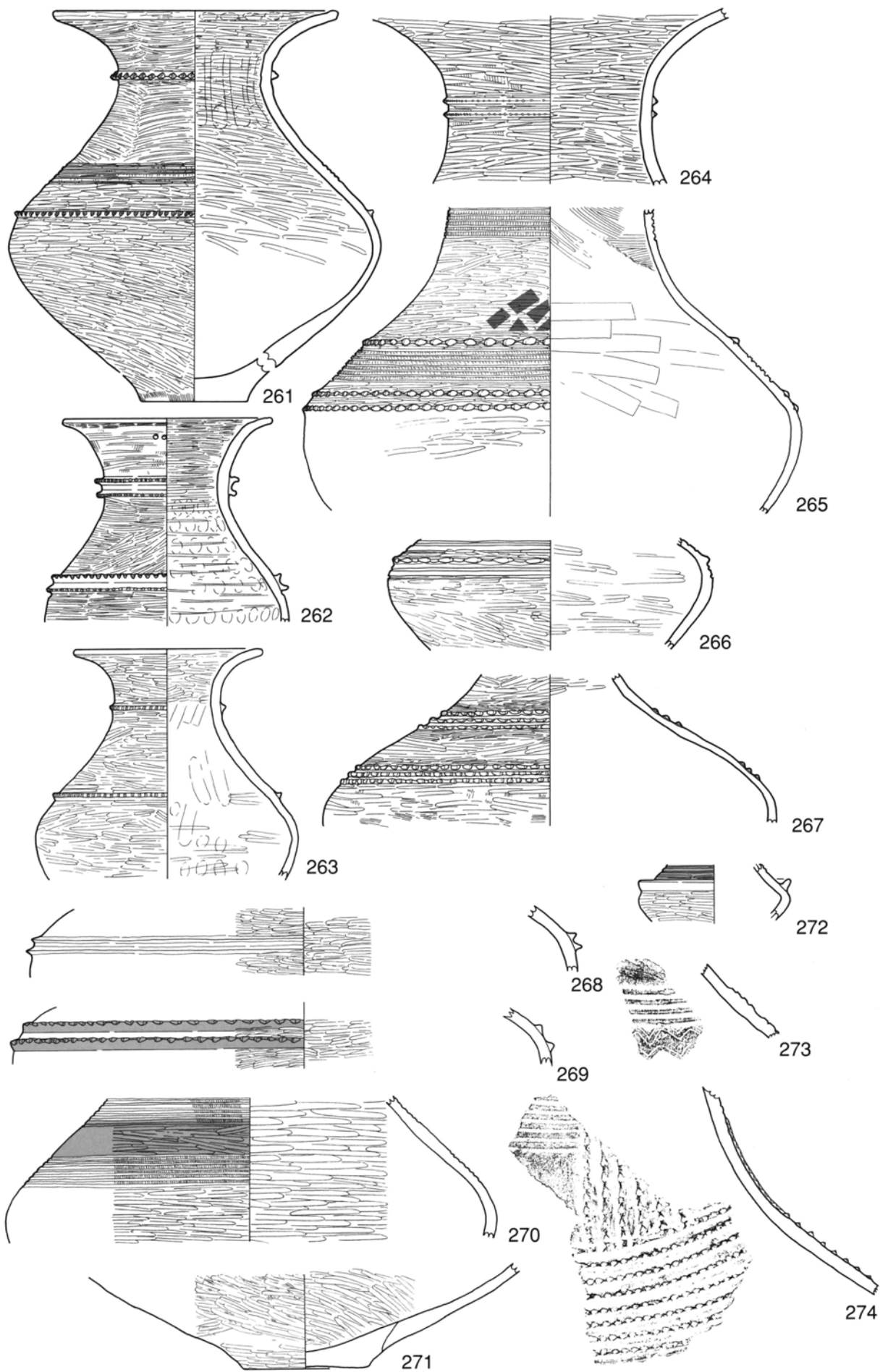


図23 96 S D 101 3層 (2)

(拓本は 1/3、他は 1/4)

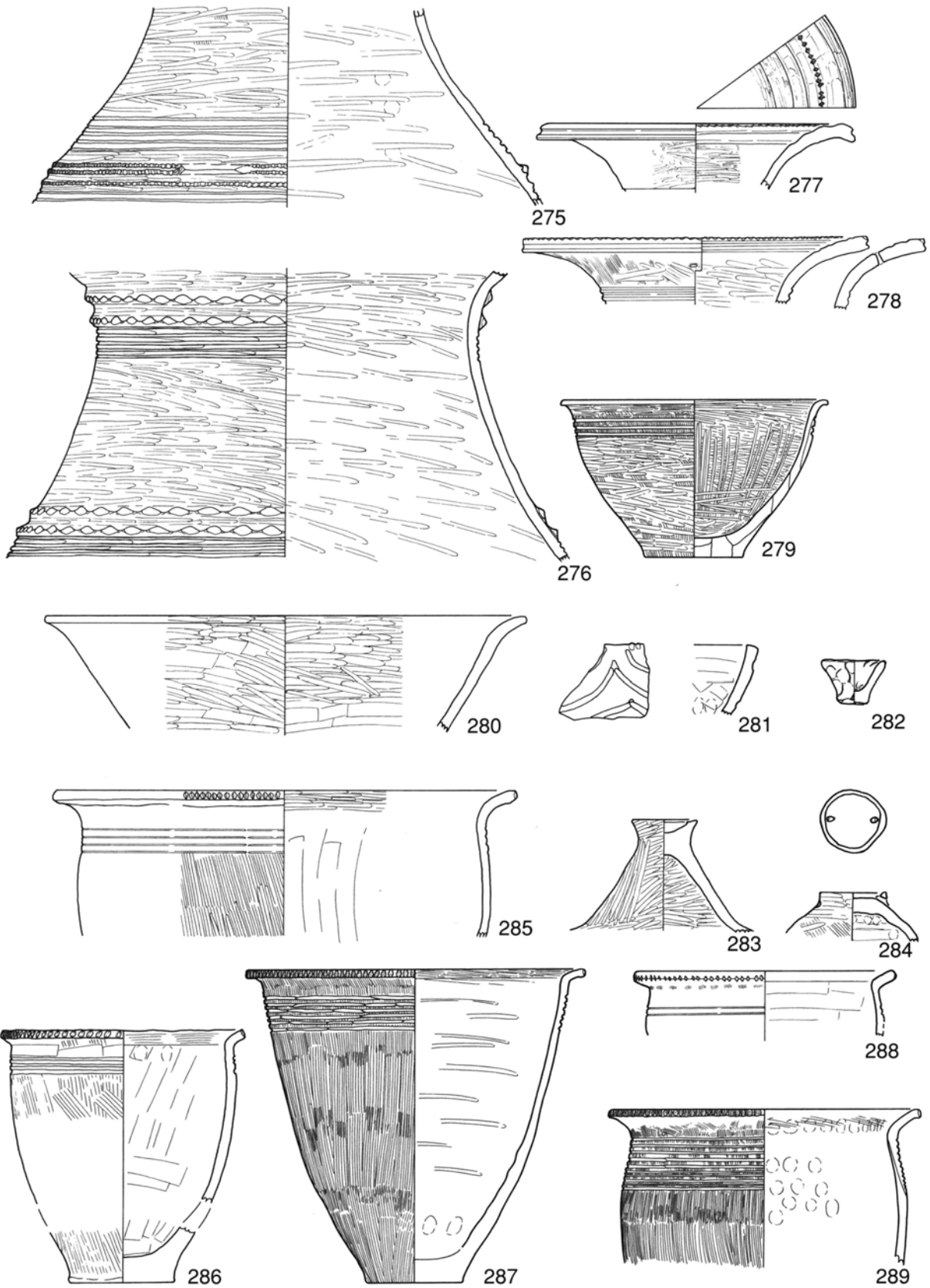


图24 96 S D 101 3層 (3)

(1/4)

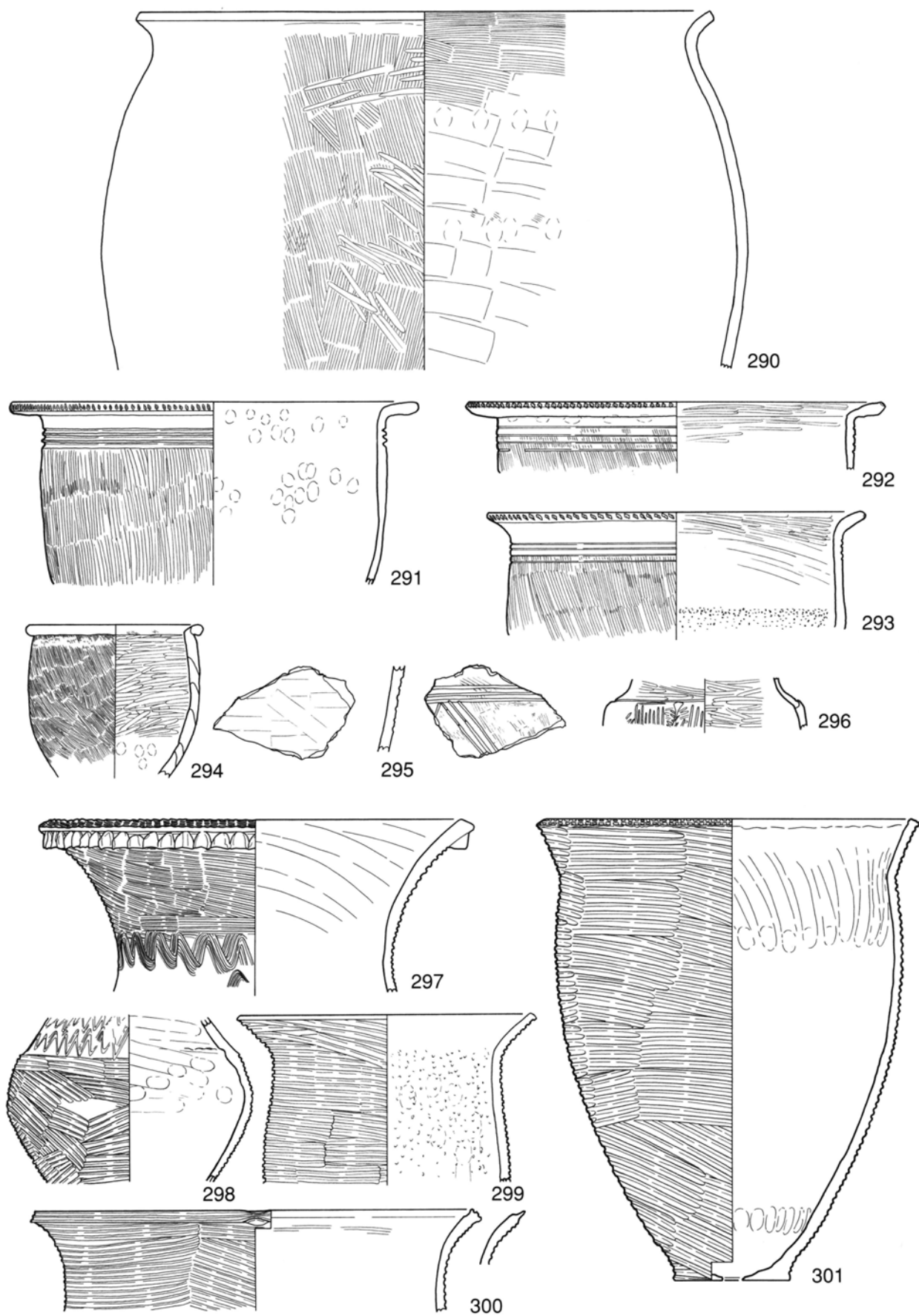


图 25 96 S D 101 3 層 (4)

(1/4)

E. 96 S D 101 2層 (302～375)

302～307は壺蓋。308～335は壺。308は頸部を境にくの字になる口縁形。頸部に上下から削り込む、削出突帯を持つ。突帯上に沈線を持たないため、幅広の突帯となる。口縁下に焼成前穿孔を1ヶ所持つ。頸部より下位のミガキ調整の方向は縦方向となる。313の胴部紋様帯周辺には黒色塗布が帯状に施され紋様帯直下には赤彩が施される。赤彩が陰、黒色塗布が陽とすれば、木葉紋の可能性もある。316の頸部貼付突帯は3条あり、これらの突帯上の刻みは羽状刻みになる。318の貼付突帯上の施紋は指先押圧、爪痕が残る。319は口縁内面に赤彩による紋様が想定できる。320は頸胴部界の沈線紋間に円形刺突が加えられる。322は頸胴部界の沈線下に縦方向の沈線を2条引いて区画し、無軸の羽状紋を描く。羽状紋は砂粒の動きがみられないことから、押圧により紋様を施すと考えられる。326は削出突帯上に斜格子紋を施す。327は278と同一個体の可能性がある。328～334は貝殻山B類。328は胴部が強く張る器形。紋様構成は、頸胴部間に半截竹管状工具の腹部を利用した太描沈線紋帯+半截竹管状工具による連弧紋+太描沈線紋、胴部に指腹の押圧を施す貼付突帯+太描沈線紋帯となる。331は紋様構成に特徴のある資料。沈線2条+半截竹管状工具による山形紋+半截竹管状工具による沈線2条以上、この沈線が途切る箇所にリング状の円形浮紋が付き、沈線の途切れた部分にやや弧状の沈線区画を行う。334・335は先に示した328などとは器形に大きな相違点がある。328などは胴部が大きく張り、頸部が直線的に立ち上がり、口縁部がほぼ水平に大きく開く器形をなす。一方、334・335は胴部はあまり張らず、頸部へ緩やかに内傾しながらつながら、太頸となる。口縁部も大きく開くものが多いが、前者に比べてさほど水平にはならない。これら335に代表される貝殻山B類の壺は概して大

型品が多く、器形的にも突帯紋系土器に出現する変容壺の系譜が想定できる。336～342は鉢。338は無頸壺。口縁部下に焼成前穿孔が1ヶ所ある。340の沈線に赤彩が残る。341は横に細長い把手が一对付く鉢。342は片口の鉢。施紋具に半截竹管状工具を用いる、貝殻山B類。343は鉢。294の朝鮮系無紋土器に器形・調整・胎土の類似点が多い。344～350は甕。344は胴部上位に削り出しの段がみられる。板状工具により段を作り出す。口縁部には板状工具による刺突がある。345は口縁端部と胴部上位の沈線帯にそれぞれ円形刺突紋がみられる。346の口縁端部の刻みは端部下方に板状工具で行う。347は内面に粗いミガキがみられる。351・352は貝殻山B類の甕。353は条痕紋系土器の壺。口縁端部に押圧突帯がないことからⅡ期の資料か？354は口縁端部に押し引き紋、口縁に押圧突帯がみられる条痕紋系土器の壺。355は頸部をもたない、胴部から口縁部にかけて直線的にたちあがる器形。口縁端部に強い横ナデを行い面取りをする。357は突帯紋系土器の系譜が想定できるケズリ深鉢。356は条痕紋系土器の壺の底部。358は氷式系削痕深鉢。359～362は内傾口縁土器。359・360はナデ系。360はナデ系内傾口縁土器の既存資料のなかで最も器形が把握できる資料。361・362は条痕系。363～375はⅡ期の資料。363はⅠ系壺の底部。364はⅠ系の二枚貝調整甕。365～373はⅡ系の土器。373は櫛条痕による調整、これ以外はすべて二枚貝調整。374はⅠ系のハケ甕。

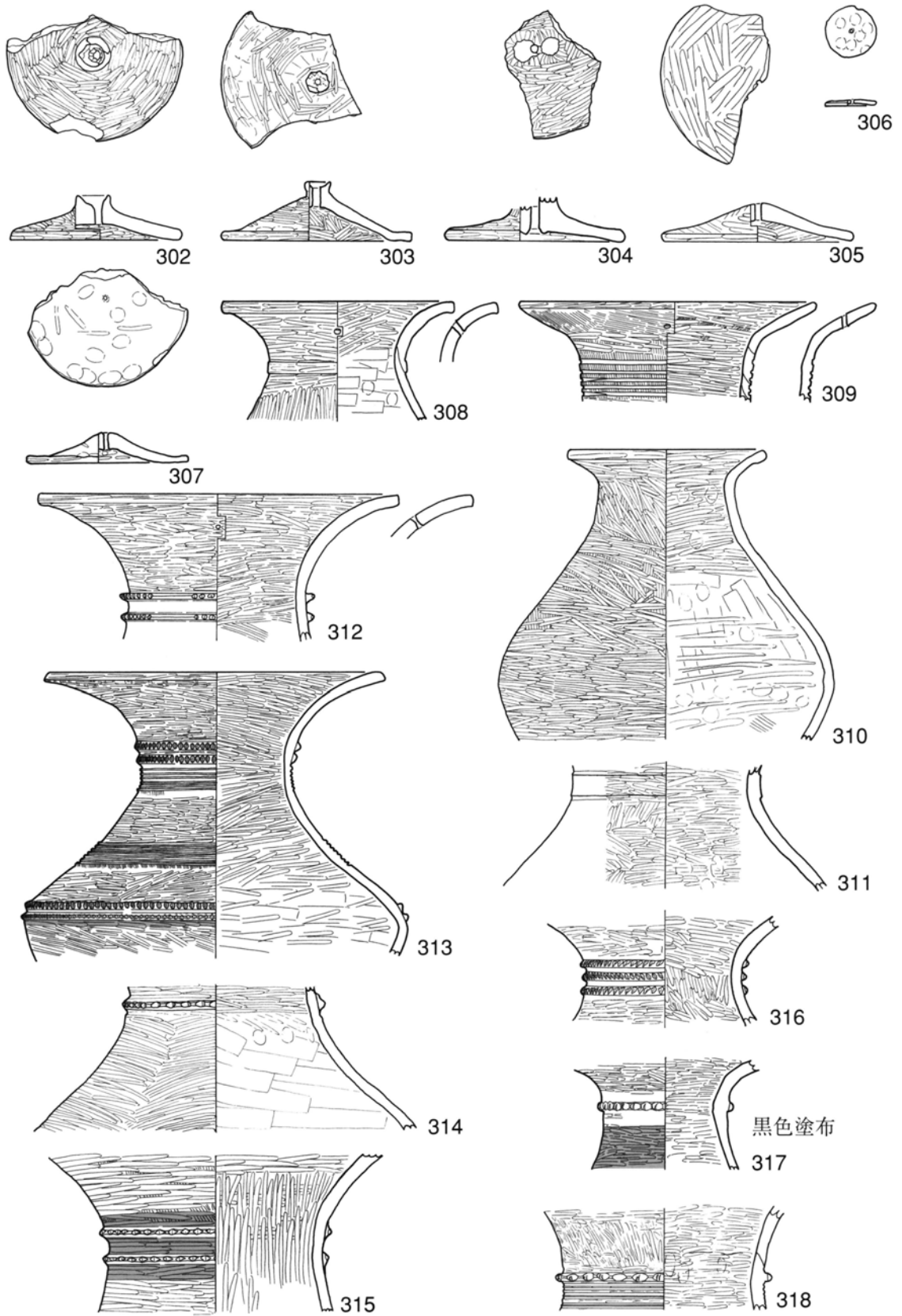


图26 96 S D 101 2層 (1)

(1/4)

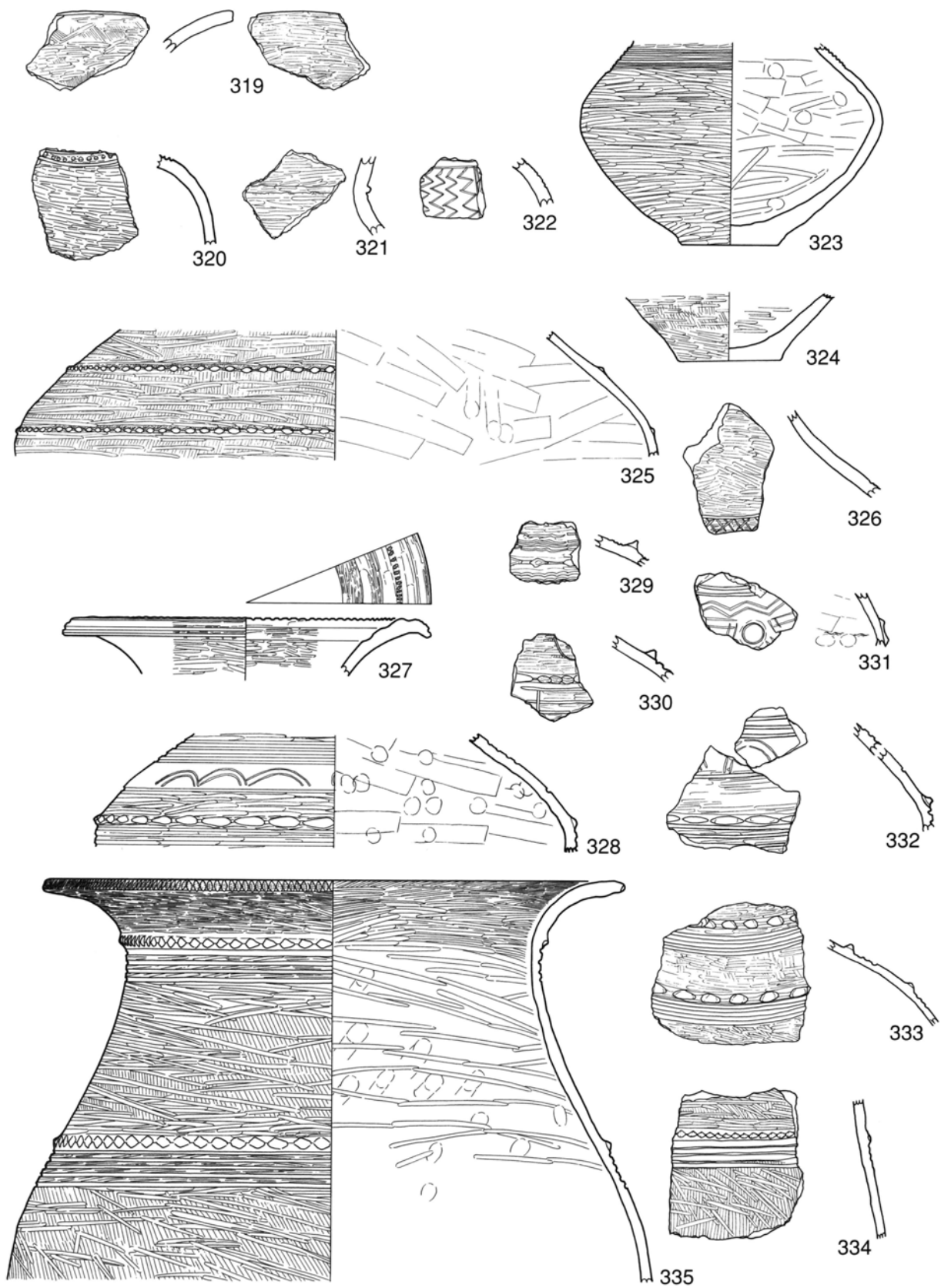


图27 96 S D 101 2层 (2)

(1/4)

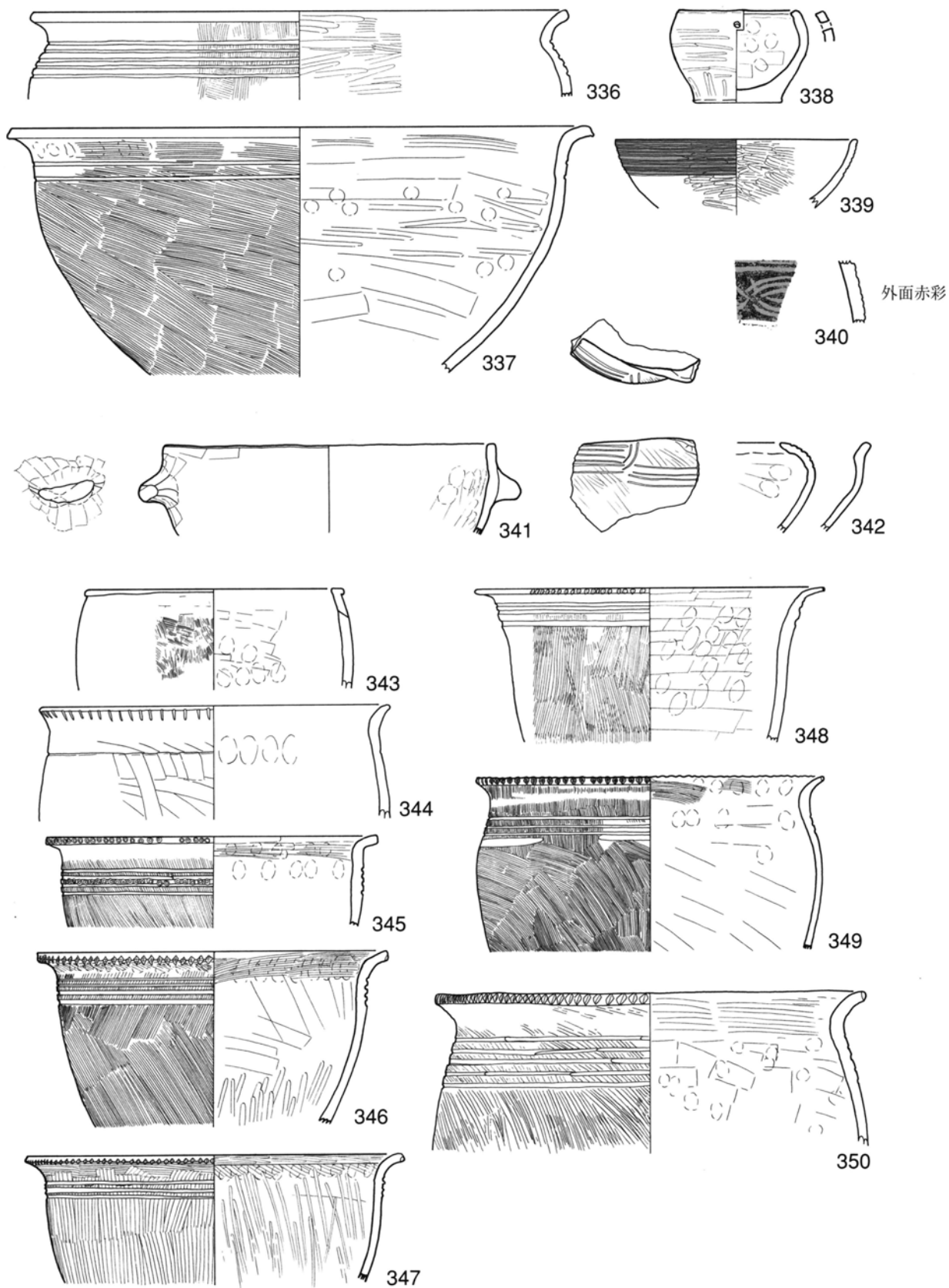


図28 96 S D 101 2層 (3)

(拓本は 1/3、他は 1/4)

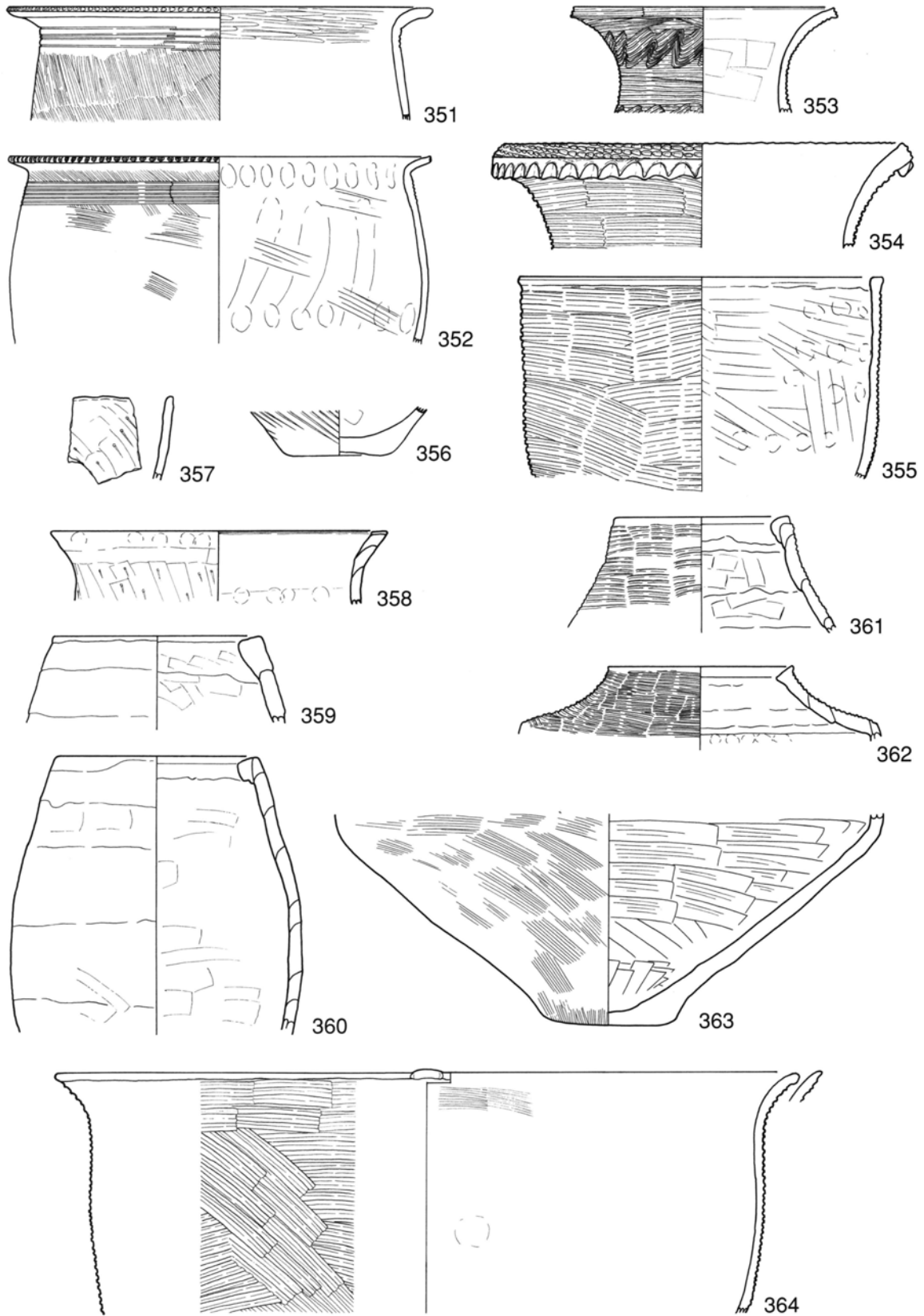


图29 96 S D 101 2層 (4)

(1/4)

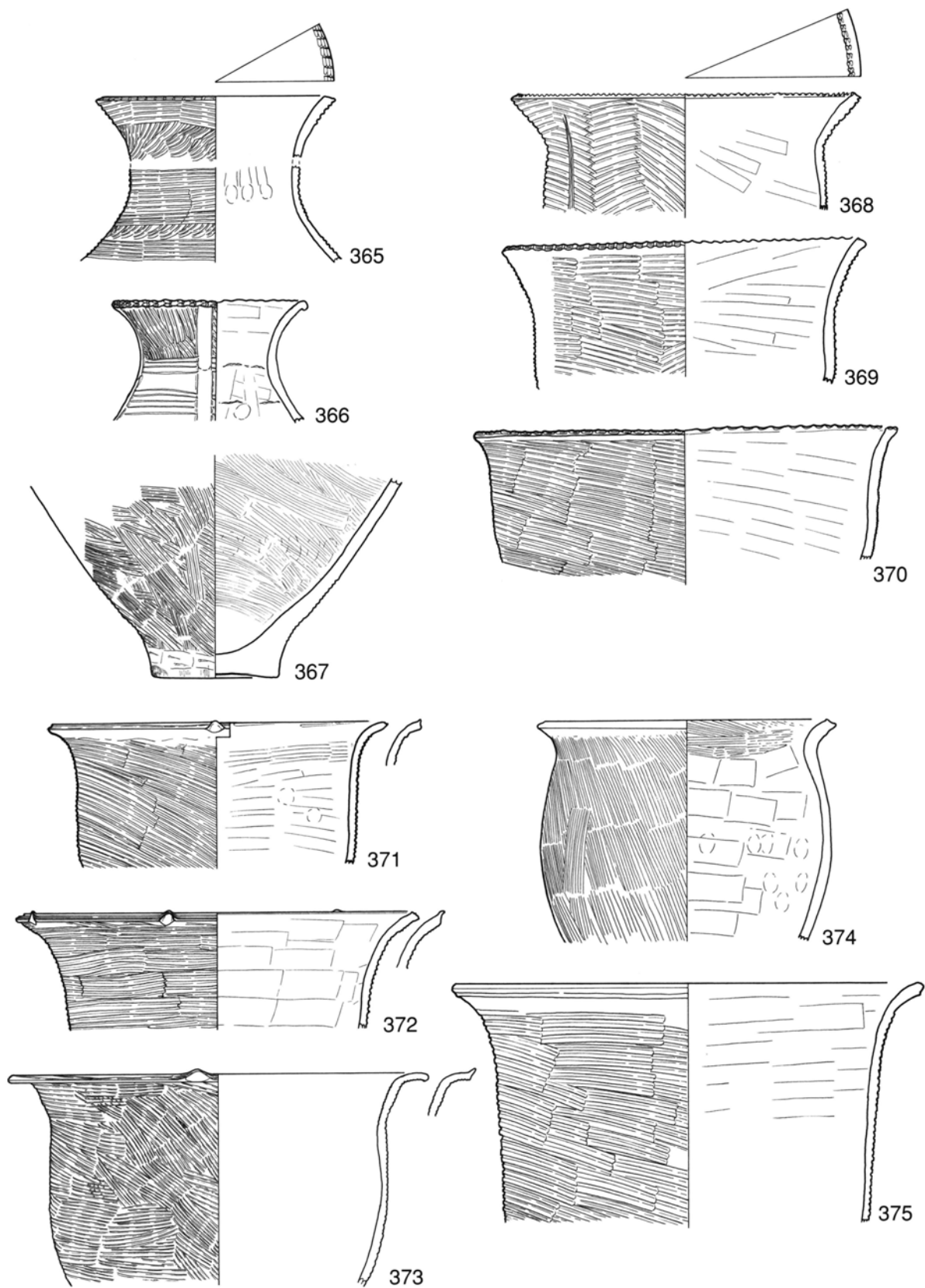


图30 96 S D 101 2層 (5)

(1/4)

F. 96 S D 101 1 層 (376 ~ 403)

376 ~ 379は壺蓋。379の2孔は焼成後穿孔。380 ~ 360は壺。383は調整具として1次調整が二枚貝、2次調整がハケを使用する。紋様は頸部にヘラ描沈線を6条以上、その下に二枚貝による不揃いな波状紋を施す。I - 4 / II - 1期の可能性もある。385 ~ 388は胴部上位の破片で貼付突帯の相対渦紋をもつもの。389は貝殻山B類。口縁内面の隆帯紋が5条めぐる。ただし、いずれの隆帯紋も同一箇所ですぐ途切れる。途切れる箇所に抉りは認められないが、工字紋の名残か? 390は片口鉢。内外面ともに赤彩がある。391は横長の把手状浮紋が付く鉢。浮紋上に刻目を入れることから装飾的な把手と考えられる。392は2孔一対の焼成前穿孔の孔を持つ甕蓋。鉢の底部の可能性もある。393 ~ 399は甕。393は胴部上位の2条沈線間に刻目を入れる。396 ~ 399は貝殻山B類。400は氷式系削痕深鉢形土器。401・402は条痕紋系土器の深鉢。401は二又状工具による羽状条痕。403は条痕系内傾口縁土器。胴部が若干残存する。胴部は無紋で、内傾口縁土器から厚口鉢への型式変化を辿る良好な資料。

G. 96 S D 101 1 層 (II・III期) (404 ~ 429)

404 ~ 406・410 ~ 412・416 ~ 418はI系の壺。406は口縁内面が突状に張り出しその端部と外面を刻む。412は二枚貝腹縁による直線紋を5帯配し、その間に二枚貝腹縁による弧状区画したのち縄紋を充填する紋様構成。408・409は条痕紋系土器。口縁部にいずれもハネアゲ紋を施す。413は沈線紋系土器の無頸壺。長胴形から深鉢と捉えたほうが良いかもしれない。414・415は厚口鉢。419 ~ 422はI系の甕。423 ~ 429はII系の深鉢。

H. S D 101 層位不明 (430 ~ 452)

I 期

430 ~ 434は壺蓋。435 ~ 441は壺。439は外面全体に赤彩。440は貝殻山B類。442は口縁部に刻目突帯を有する甕。443は横長の把手が付く鉢。444は口縁部がやや外反ぎみに立ち上がる器形の条痕紋系土器の深鉢。口縁端部は強い横ナデによる面取りがある。口縁部には棒状工具による刺突が施される。445は条痕系内傾口縁土器。446は底部に焼成後穿孔をもつ甕。

II・III期

447はI系の壺。448はI系の甕。449はII系の深鉢。450 ~ 452は条痕系内傾口縁土器および厚口鉢。

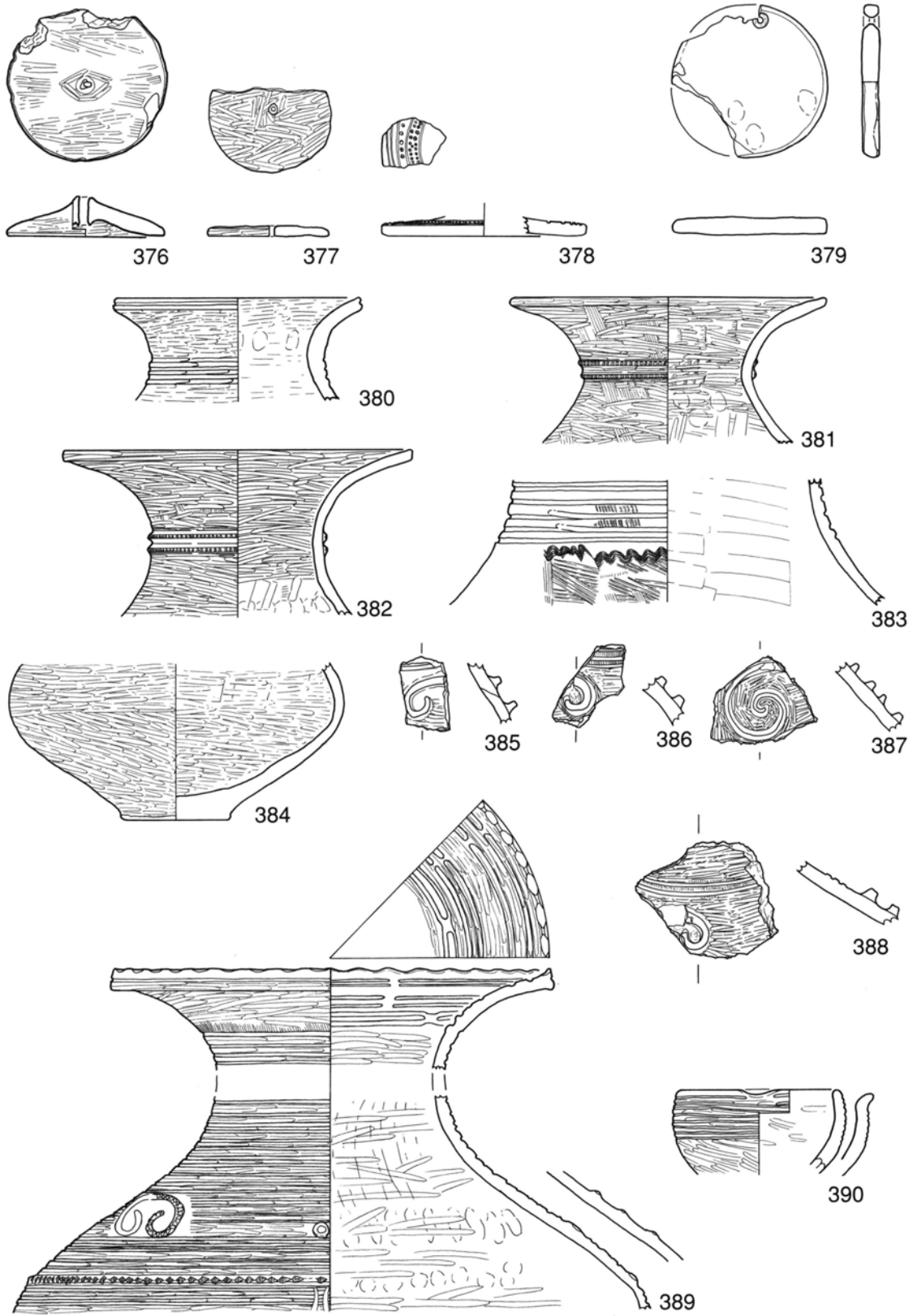


图31 96 S D 1011 层 (1)

(1/4)

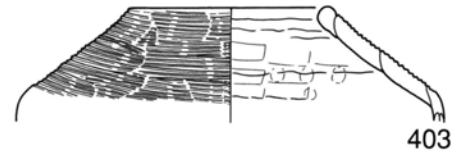
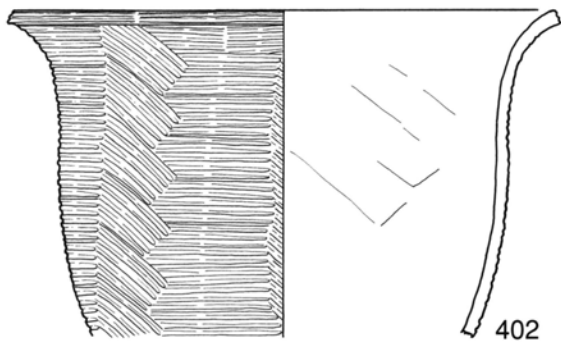
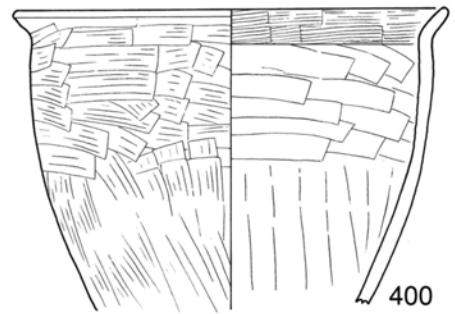
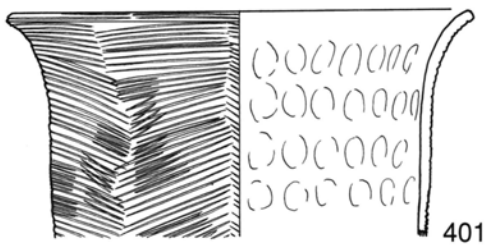
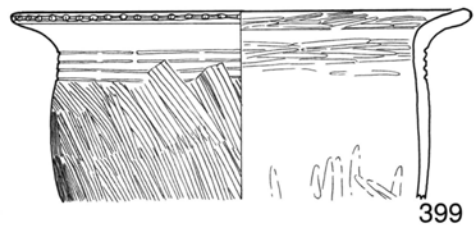
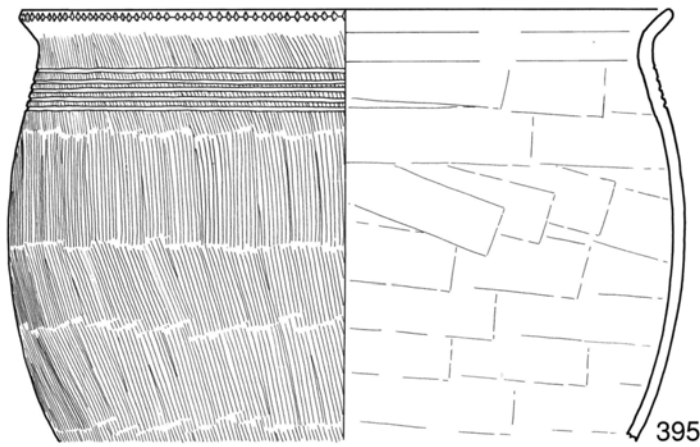
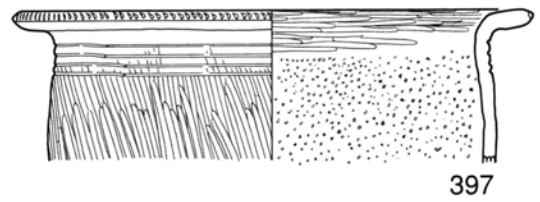
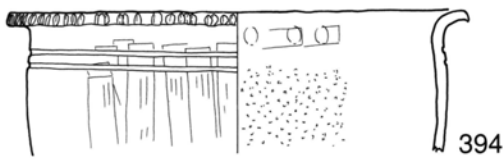
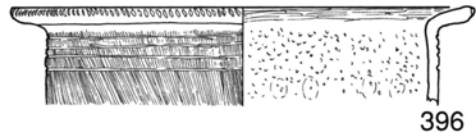
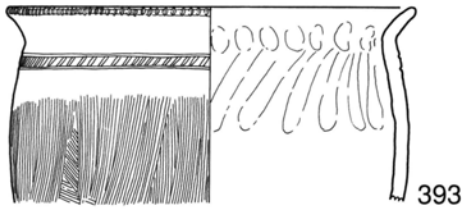
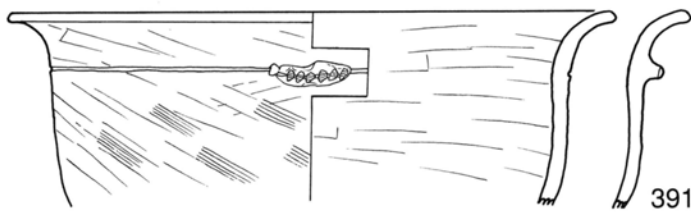


图32 96 S D 101 1层(2)

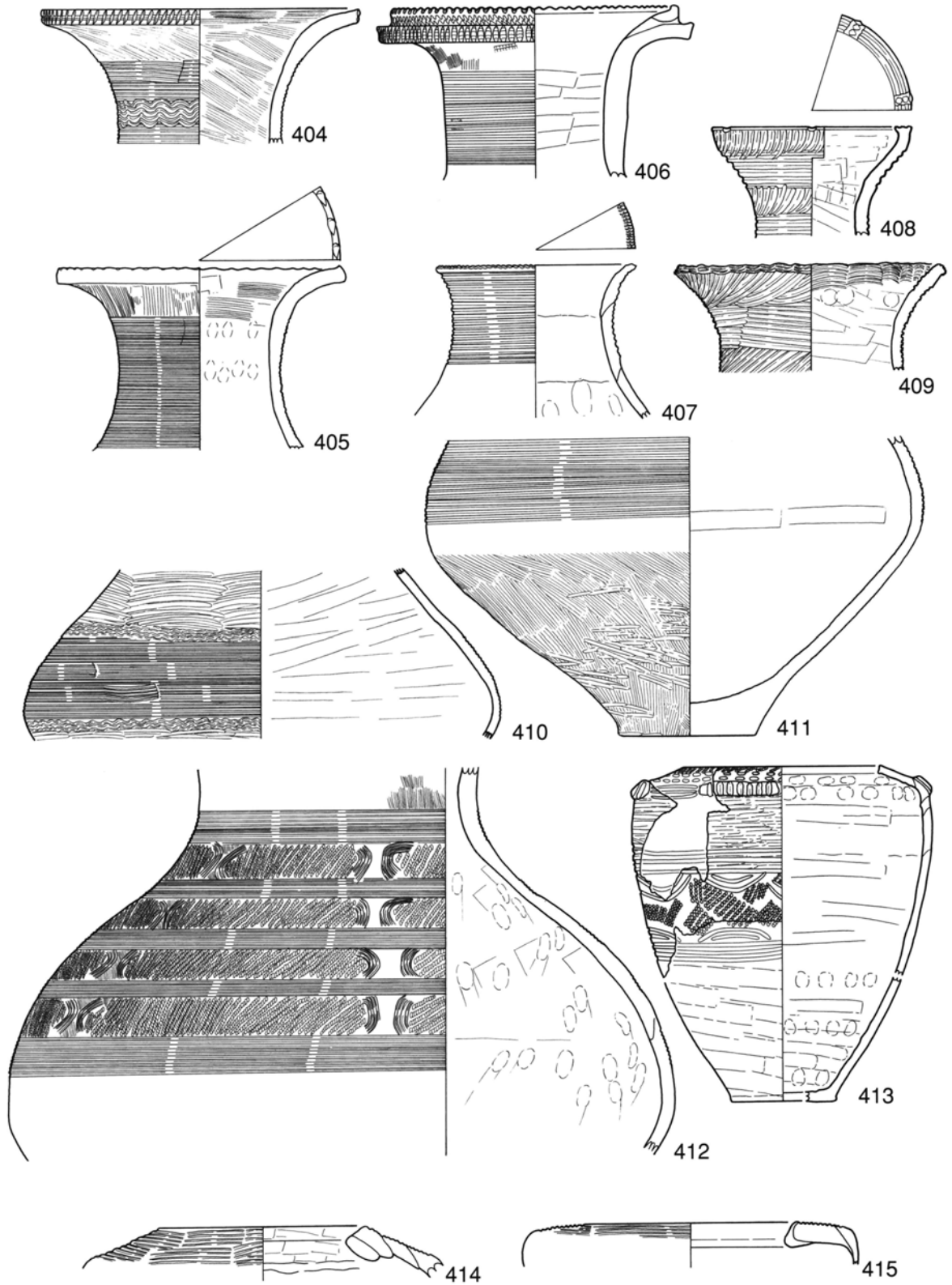
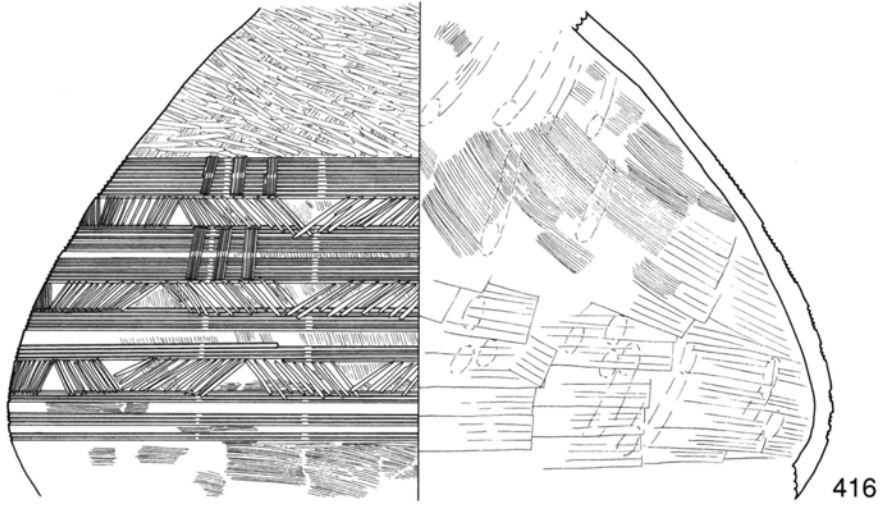
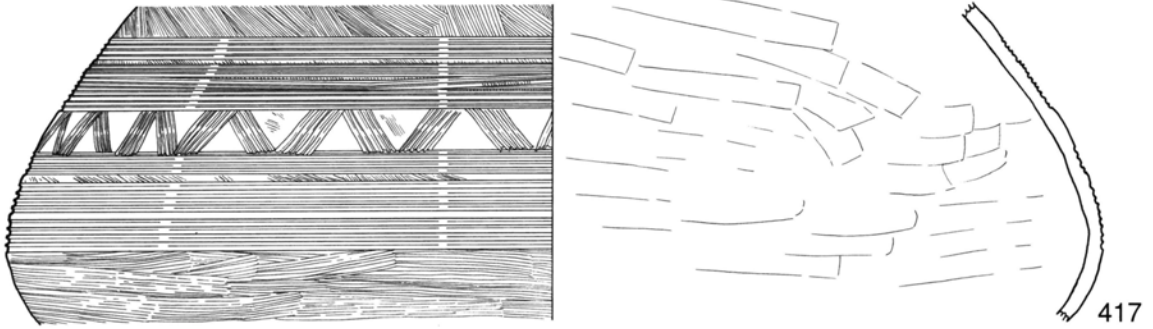


图33 96 S D 101 1层 (3)

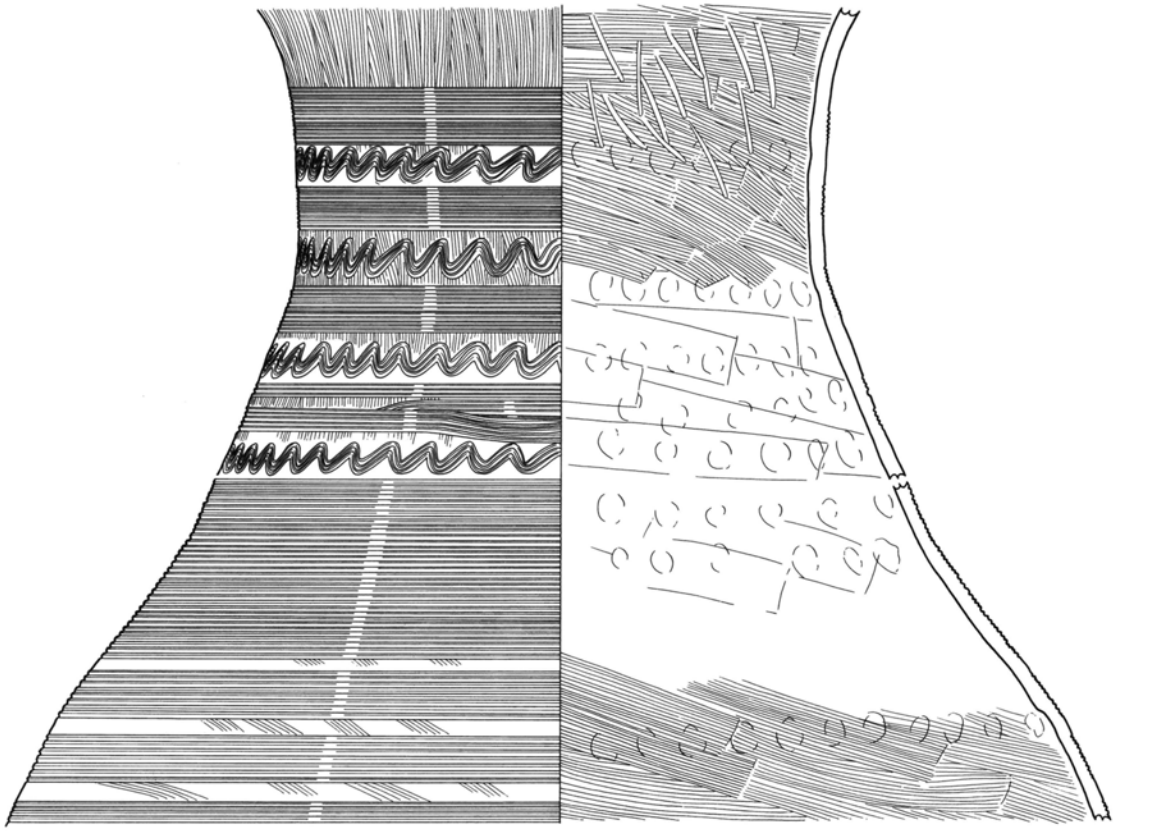
(1/4)



416



417



418

图34 96 S D 101 1层 (4)

(1/4)

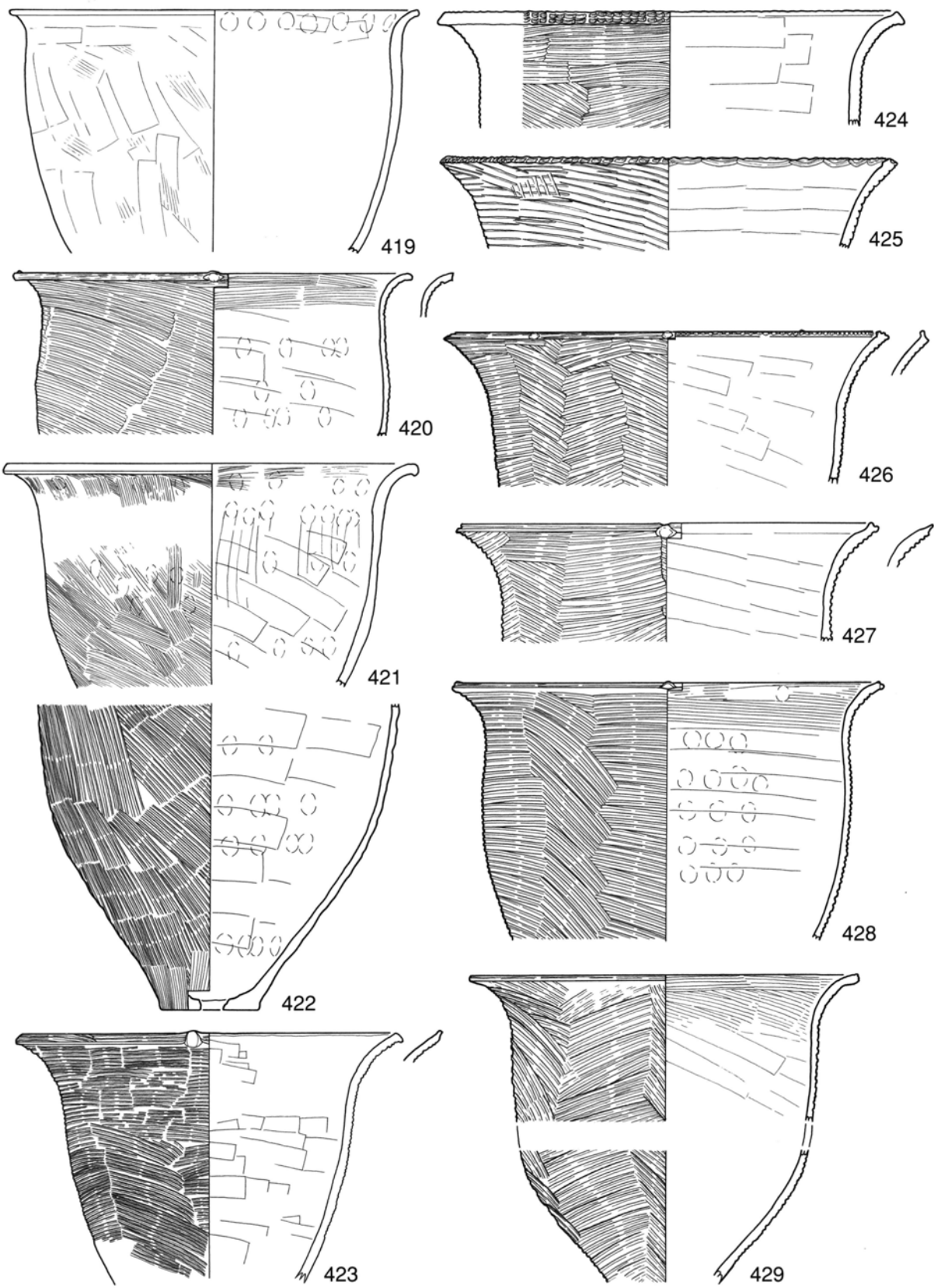


图 35 96 S D 101 1 層 (5)

(1/4)

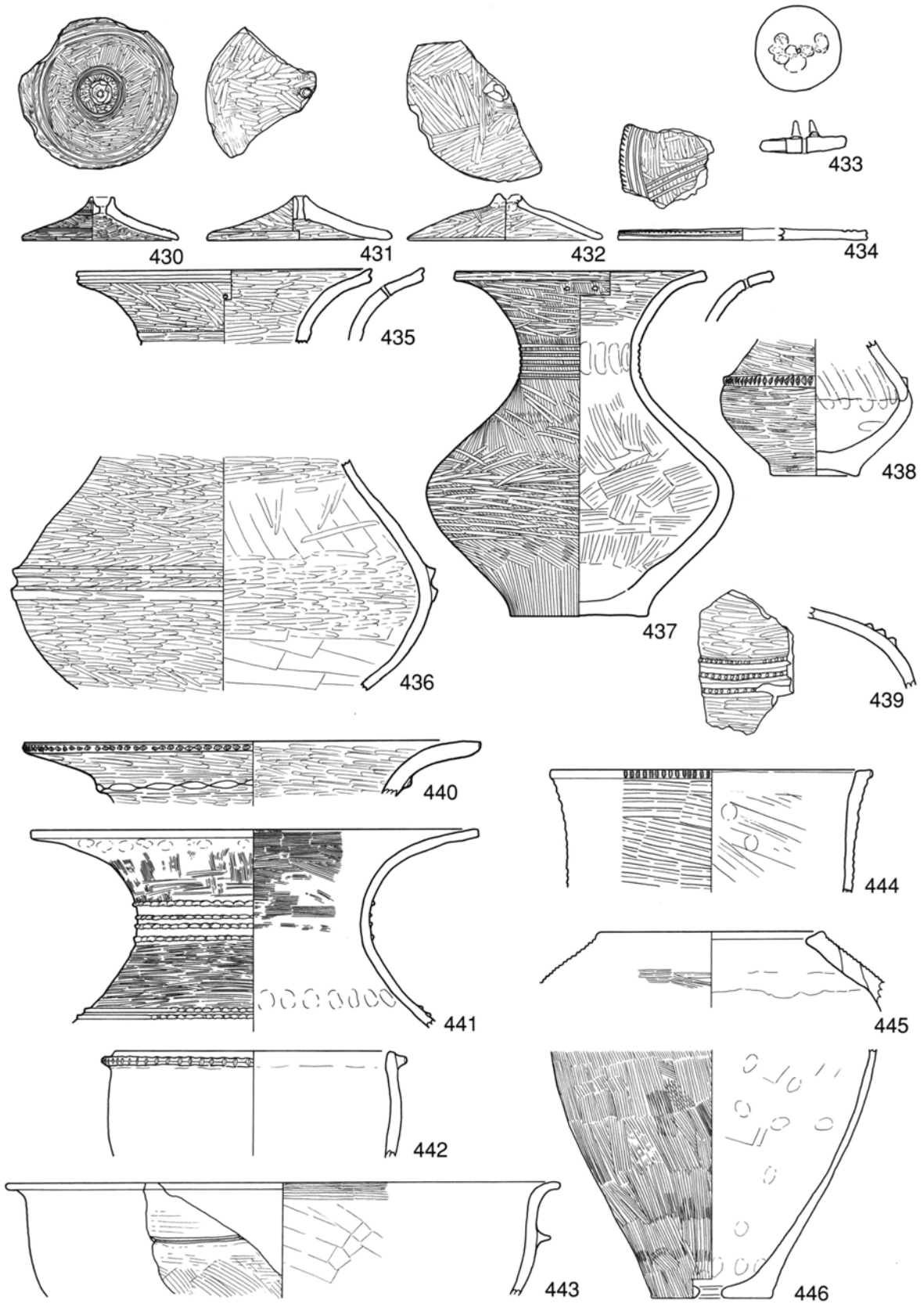


图 36 S D 101 層位不明 (I 期)

(1/4)

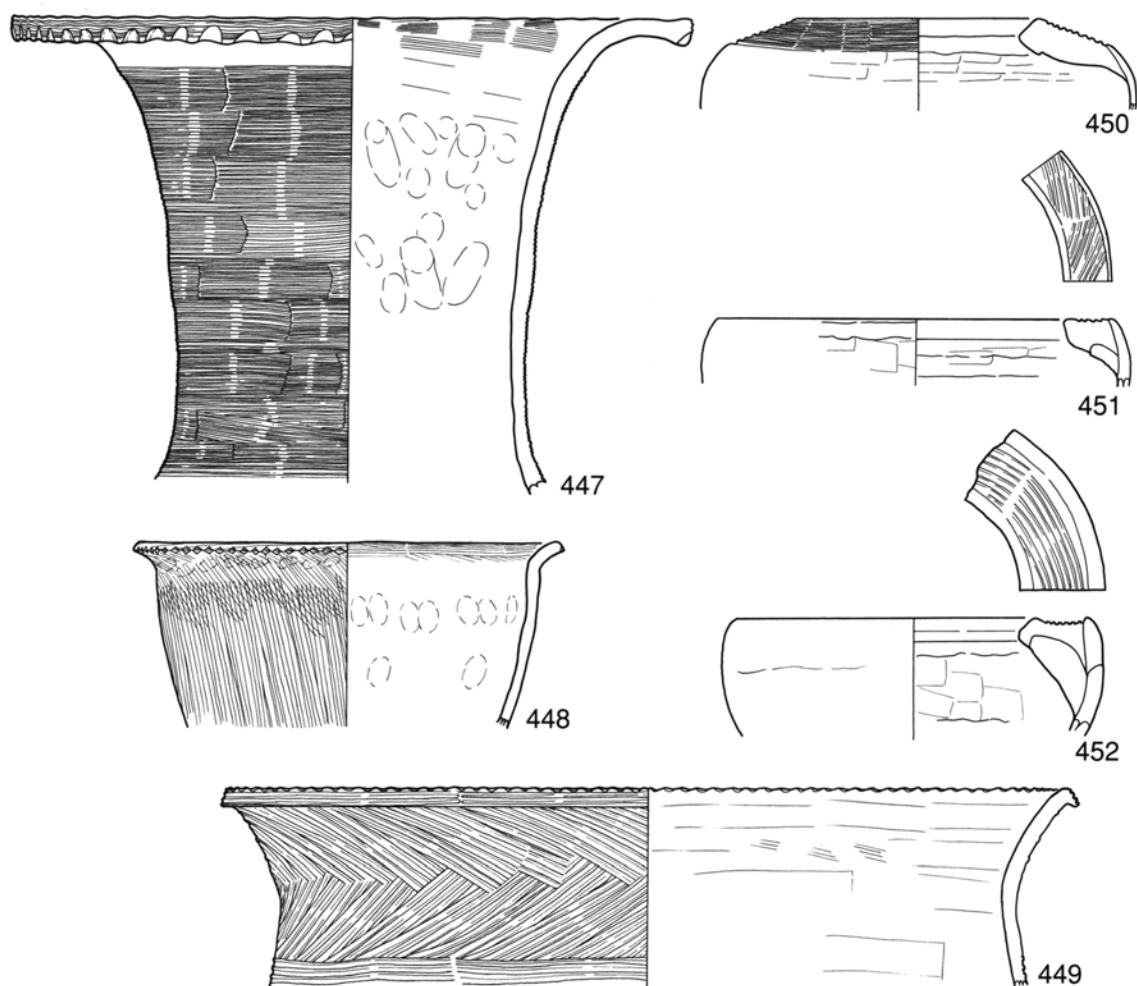


图 37 S D 101 層位不明 (II · III 期)

(1/4)

3. II・III期

(1) S D 102 (図 38～48)

S D 101の再掘削後の資料がほぼ同時期として考えられる。95・96ともに上位の資料に関しては、IV期以降の資料が混在するものの、II～III期の資料群としてのまとまりがある。

A. 95 S D 102 下層 (453～481)

453～465はI系の壺。453・454は口縁端部を丸くおさめる器形で、頸部直線帯は櫛描紋。453は頸部と口縁部の間に無紋帯があり、口縁端部に施紋をしない。一方、454は口縁部まで直線帯が続き、口縁端部には2段にわたり櫛?による刺突がめぐる。455は口縁端部に沈線を1条めぐらし、指による単独圧痕が加えられている。頸部の直線帯は3帯以上で、二枚貝腹縁によるもの。456は口縁端部に板状工具による刻み。頸部の直線帯は櫛描紋。457は口縁部下端に連続指腹押圧を施す。頸部直線帯は櫛描紋。458・459は他の壺に比べてやや長め。458は頸部直線帯が5帯の櫛描紋、施紋と胴部のミガキ終了後、頸胴部界に付加沈線を施す。459は頸部に不揃いな直線帯を二枚貝腹縁で施す。口縁部には指腹による単独圧痕、口縁部内面には二枚貝腹縁による波状紋を施す。460は口縁部がやや垂下する。口縁端部は櫛描紋ののち指で上下端から連続押圧を施す。頸部の直線帯は4帯で櫛描紋。461は口縁部上下端に短いピッチで指つまみ連続押圧を加える。頸部直線帯は二枚貝腹縁によるもの。462は461にくらべ口縁部上下端の指つまみ連続押圧のピッチが長い。頸部直線帯は二枚貝腹縁によるもの。463は口縁端部に二枚貝腹縁による条線を施した後、上下端に連続押圧を加える。上端は浅くハケによる押圧、下端は深く指腹による押圧。464は頸部紋様帯下に縦ハケによる段作出がみられる。465は胴部が算盤玉

状の器形で胴部中位に最大径をもつ。頸部からゆるやかに外反し口縁部にいたる器形。口縁端部は二枚貝腹縁による条線を施した後、上端に指腹押圧を加える。頸部の直線帯は二枚貝腹縁による6帯が口縁部下までみられる。胴部最大径の部分には頸部と同様の直線帯が2帯みられる。調整および施紋順序は、縦ハケ→施紋→施紋間のミガキの順で行われる。

466はII'系の壺。紋様帯の下部を断面三角形の貼付突帯で区画し、その上位に横長および縦長の方形区画紋を施す。方形区画紋は横線→縦線の順に描く。貼付突帯と方形区画紋の間には振幅の長い波状紋を充填する。いずれも半截竹管状工具によるもの。方形区画紋内には櫛による刺突(擬縄紋)が充填される。すべての紋様が施された後、横方向のミガキが加えられる。467はI系の壺。無紋ではあるが、ハケによる1次調整の後、胴部最大径から頸部にかけて板ナデによる2次調整を行う。468は貝殻山B類の壺。半截竹管状工具による波状紋と沈線帯が施される。469はI系の壺と考えられるが、器形・調整・使用痕から別系統の可能性もある。胴部最大径が上位にあり、最大径部分から底部の器高が高い。調整はケズリを行った後、粗いミガキをおこなう。使用痕は底部周辺が著しく摩耗、内外面ともに煤やヨゴレが付着する。470はI系の壺底部。底部周辺が摩耗している。I系の細頸壺。胴部の紋様は、櫛描直線に弧線が重ねられて長楕円(擬流水紋)を構成している。472はI系の壺。頸胴部界に半截竹管状工具による直線を3帯、その下に半截竹管状工具による三角形区画紋を8単位、さらに三角形区画内および直線の上に縄紋を充填する。ミガキは施紋

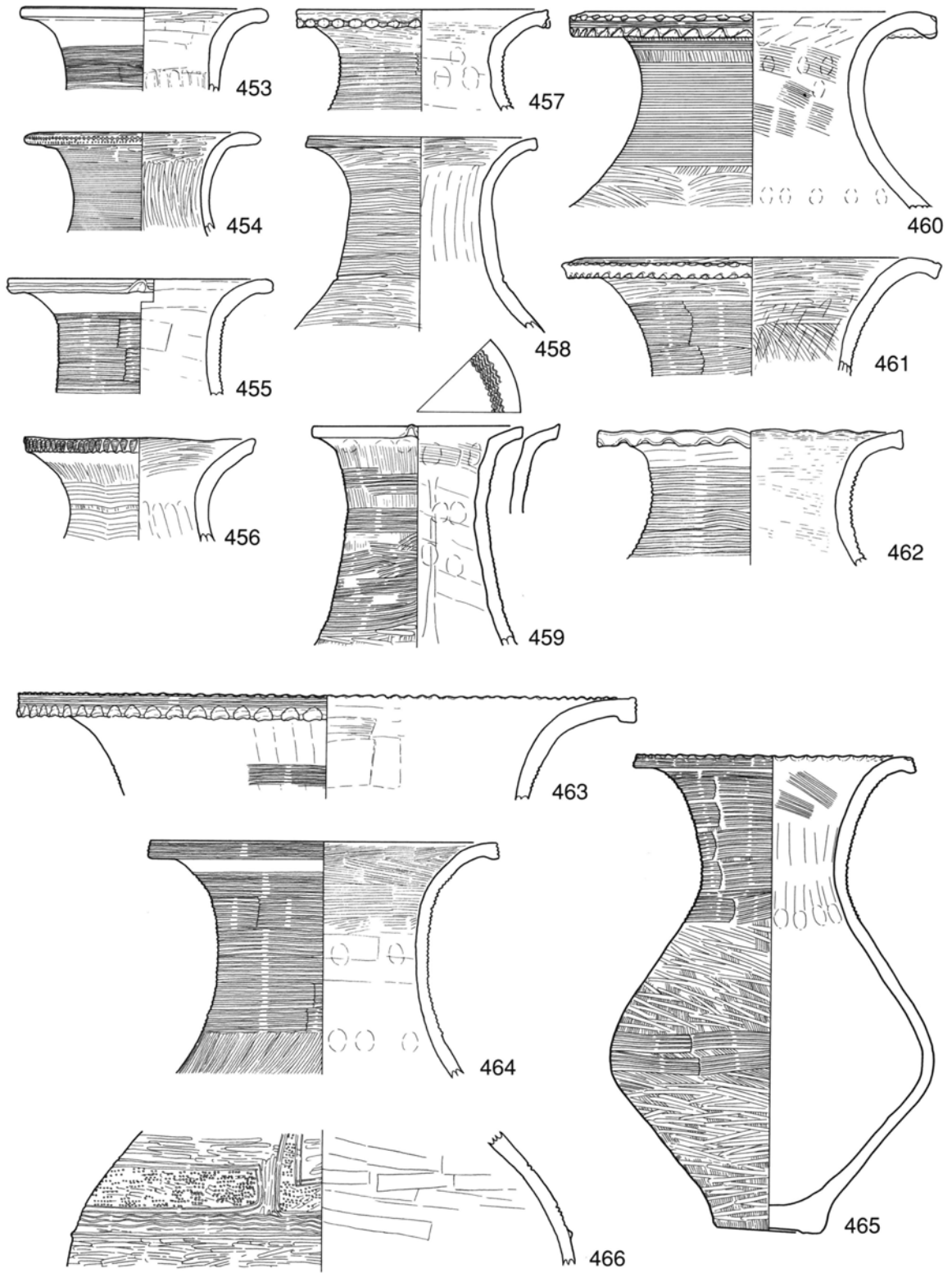


图 38 95 S D 102 下層 (1)

(1/4)

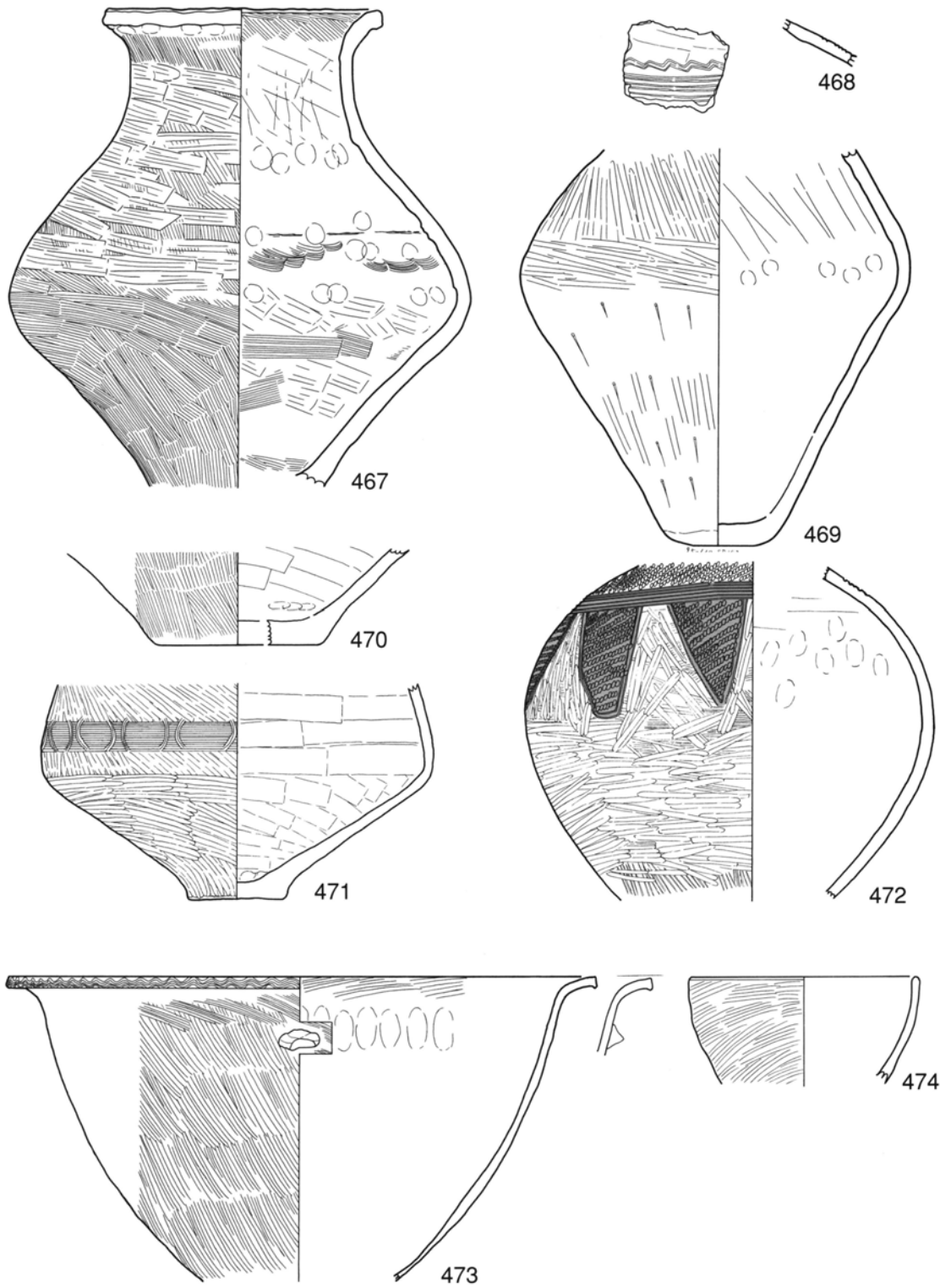


图 39 95 S D 102 下層 (2)

(1/4)

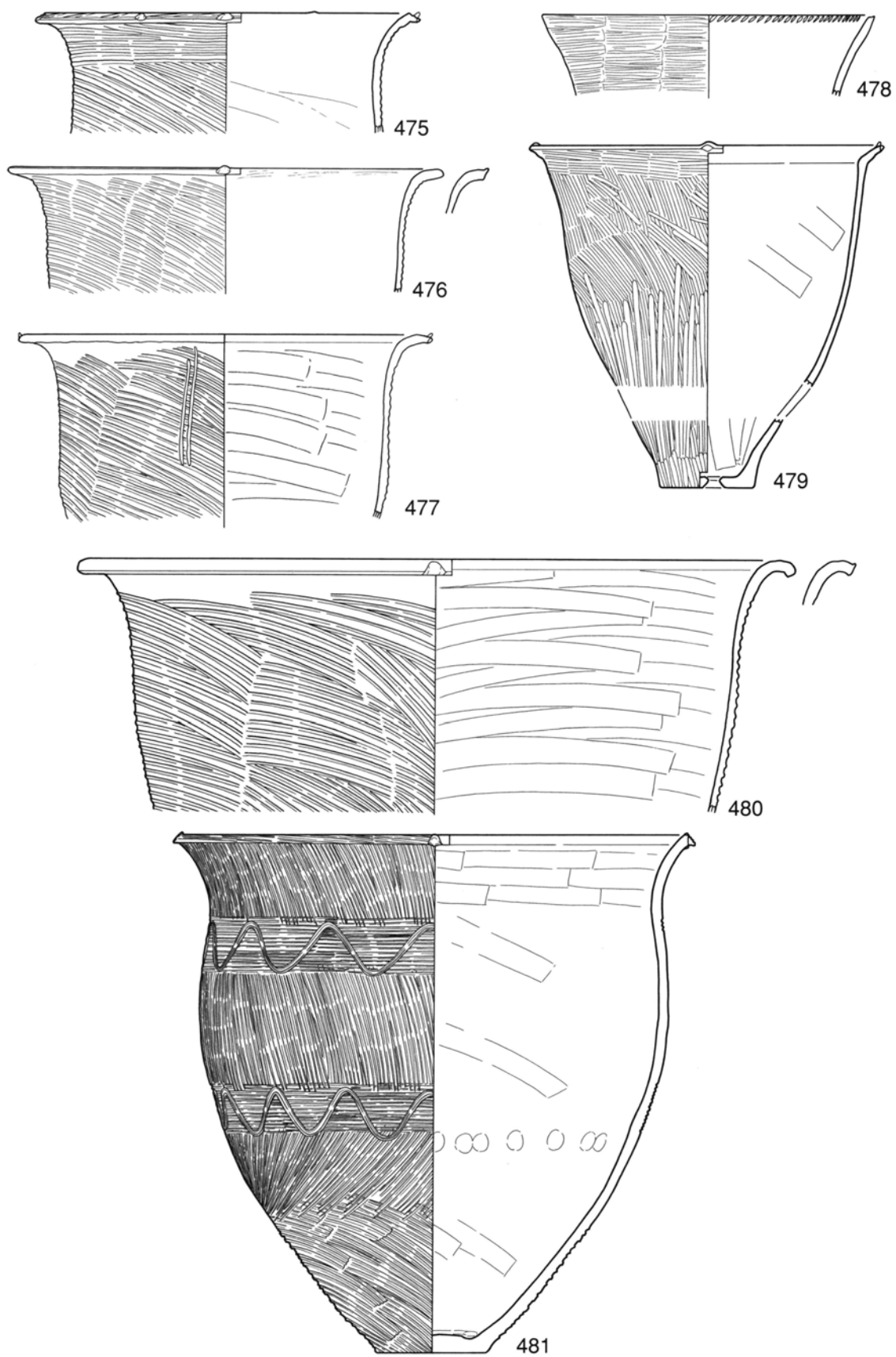


图 40 95 S D 102 下層 (3)

(1/4)

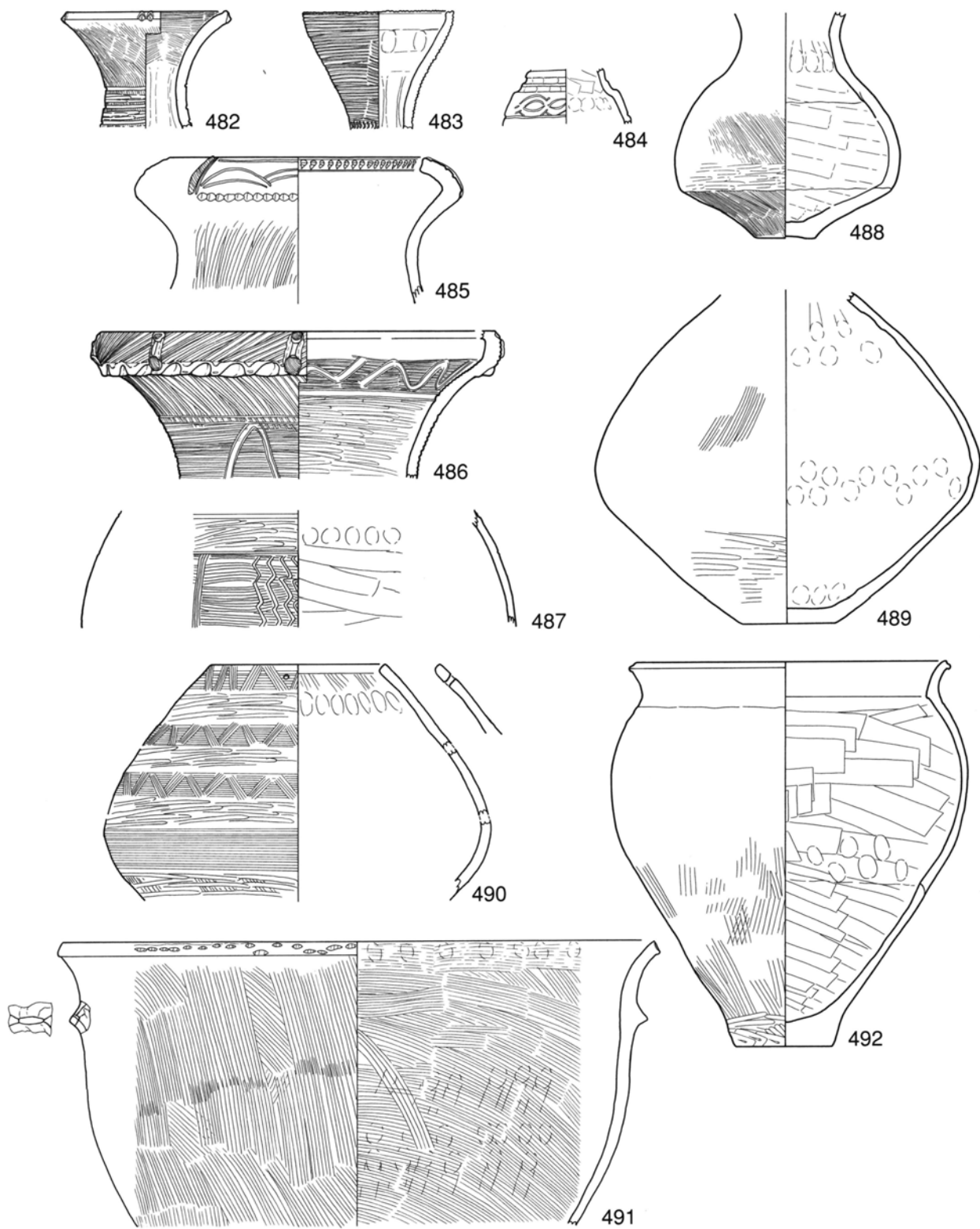


図41 95 S D 102 上層ほか (1)

(1/4)

後おこなう。直線および三角形区画に赤彩を施す。外面は全体に、内面は胴部最大径周辺に、煤とヨゴレが付着する。473は瘤状突起が付く鉢。口縁端部にハケによる波状紋が施される。474は口縁部が外反しない鉢。

475はⅡ系の深鉢。調整は二枚貝腹縁、口縁端部は二枚貝腹縁による条線の後、指腹による単独圧痕を8ヶ所加える。476・477・479・480はⅠ系の甕。476は二枚貝腹縁条痕の下にわずかにハケ調整が確認できる。口縁内面にはナデによって消されるヨコハケが残る。477は二枚貝腹縁による斜位条痕ののち縦に二枚貝腹縁による条線が施される。478はⅡN系の祖形深鉢。口縁部から胴部上位にかけて横方向の櫛条痕が短いピッチで行われる。口縁部内面には板状工具による連続刺突がみられる。479はⅠ系のハケ甕。口縁部には円周4分割の位置に板状工具による単独押圧が施される。胴部下半にはハケ調整後、縦方向のミガキが加えられる。480はⅡ系の深鉢。口縁部が丸く折れる。調整は二枚貝腹縁による左上がりの斜位条痕。481はⅡ系の深鉢。以下の順序でおおむね底部から口縁部にかけて調整・施紋が、行われる。底部付近に二枚貝腹縁による左上がりの斜位条痕→櫛状工具による右上がりの斜位条痕→櫛状工具による横方向の直線を3帯、半截竹管状工具による波状紋を重ねる→櫛状工具による縦方向の条痕→櫛状工具による横方向の直線を3帯、半截竹管状

工具による波状紋を重ねる→櫛状工具による縦方向の条痕。

B. 95 S D 102 上層ほか (482～495)

482はⅠ系の細頸壺。口縁端部に板状工具による2×4ヶ所の刺突が円周4分割の位置に施す。頸部には沈線が3条めぐり、その間を粗いミガキでうめる。483はⅠ系の細頸壺。口縁から頸部にかけて櫛描直線を6帯施し、その下に二枚貝腹縁による連続刺突を加える。484はⅢ系の細頸壺。485は袋状口縁の太頸壺。口縁端部の連続刺突はハケによるもの。486はⅡ系の壺。口縁部の棒状浮紋には上下に貝殻背面押圧を加える。二枚貝腹縁による施紋後の沈線はすべて半截竹管状工具によるもの。487はⅠ系の付加沈線研磨手法を用いた壺。488・489はⅠ系の無紋壺。490は付加沈線研磨手法を用いない無頸壺。口縁部から胴部最大径にいたるまで4帯の櫛描直線を等間隔に配置し、上位3帯は櫛描山形紋を重ねる。口縁部は焼成前穿孔がある。491はⅠ系の瘤状突起が1対つく鉢。口縁端部にはハケによる不揃いな刺突がみられる。492は甕。Ⅰ系か。493は太櫛の条痕を施すⅡN系の深鉢。いずれも同一工具で、口縁端部の刻み、頸部の横位条痕、胴部の横羽状条痕、口縁内面の連続刺突を施す。口縁から頸部にかけて縦方向に沈線が3条付く。494・495はいずれもⅠ系のハケ甕。

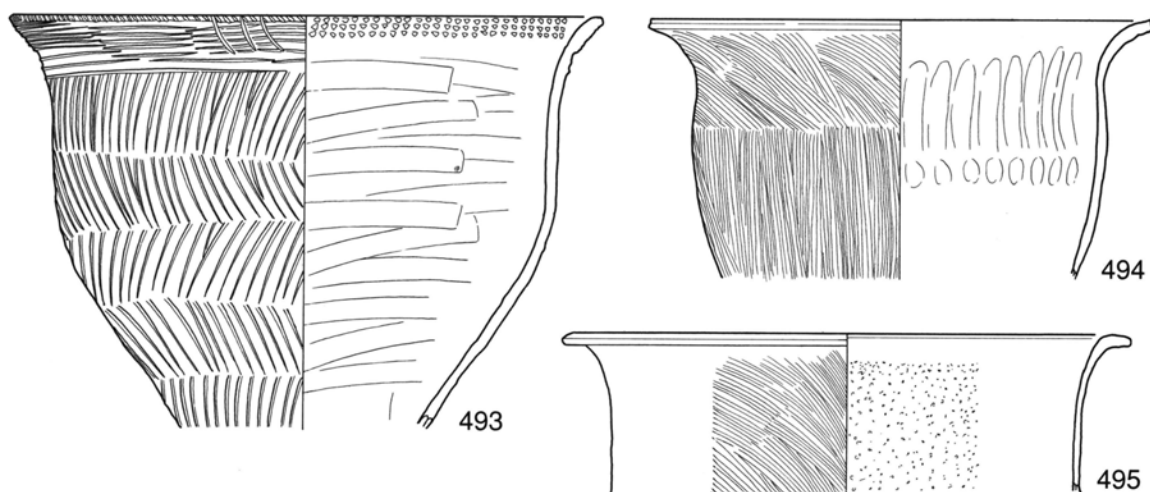


図42 95 S D 102 上層ほか (2)

(1/4)

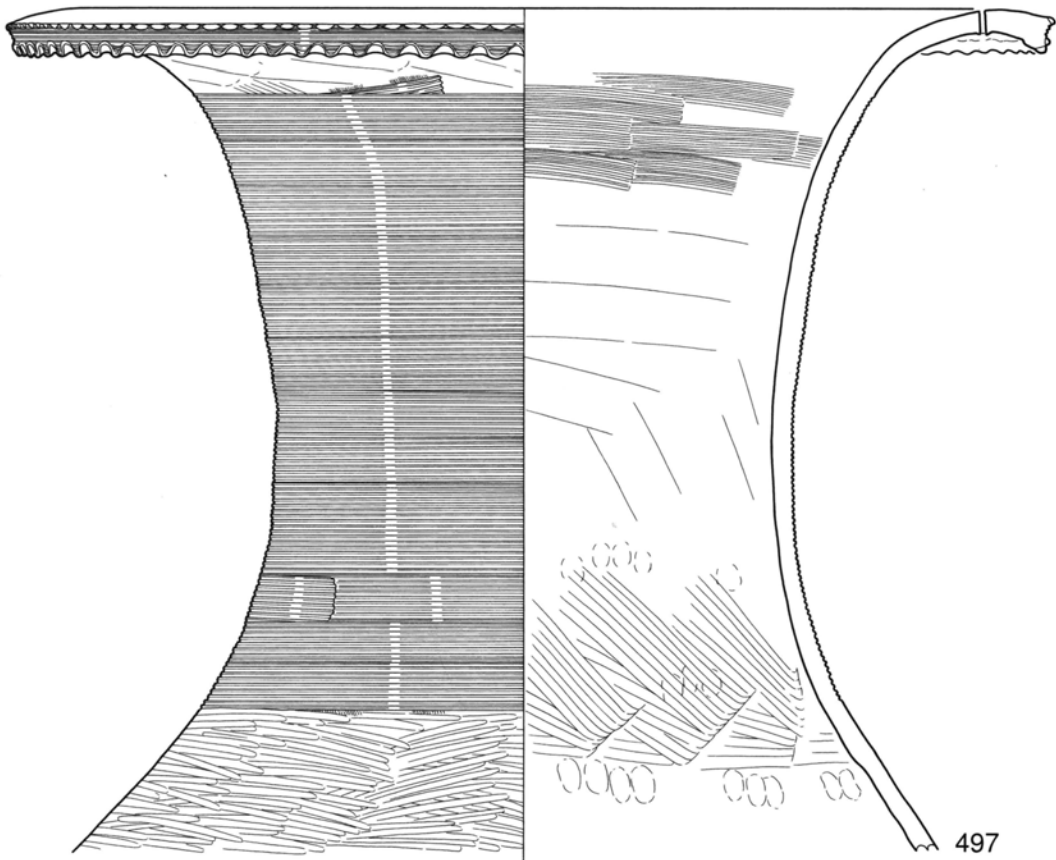
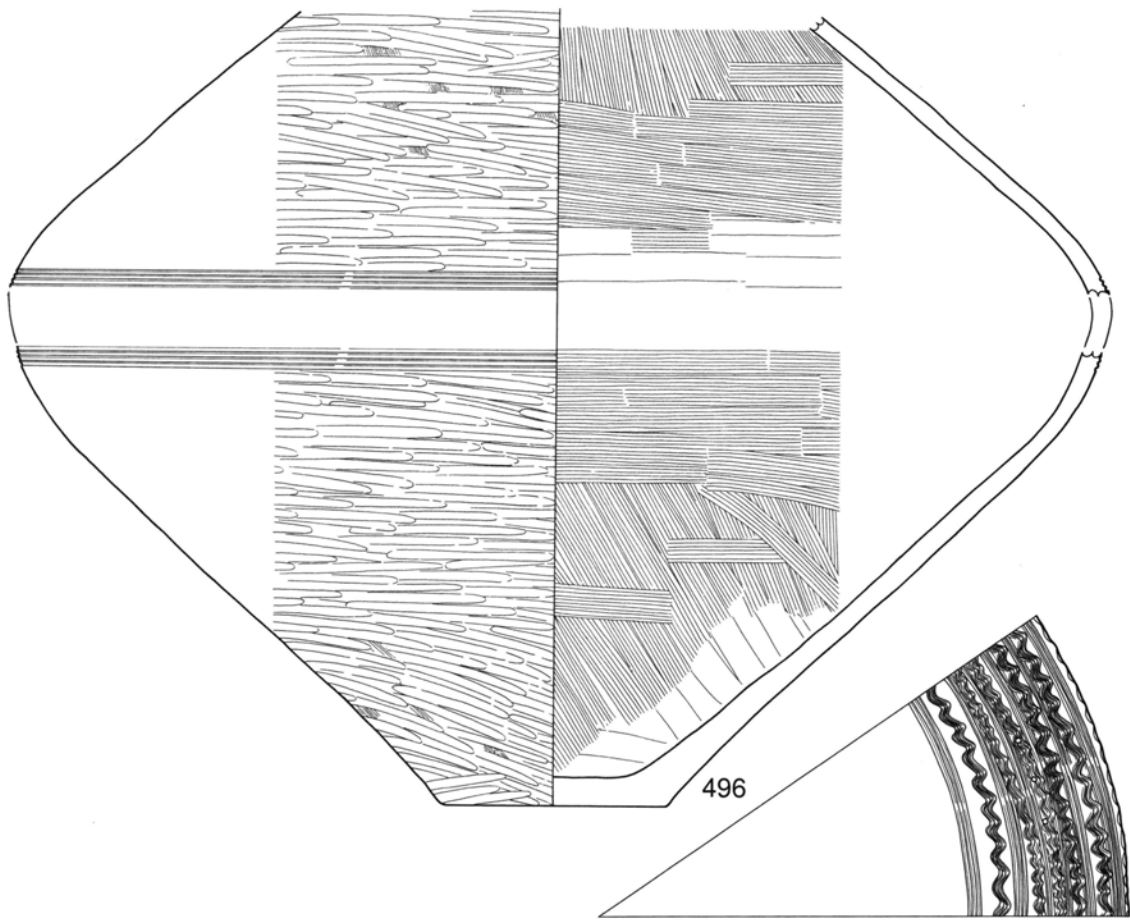


图 43 96 S D 102 3 層 (1)

(1/4)

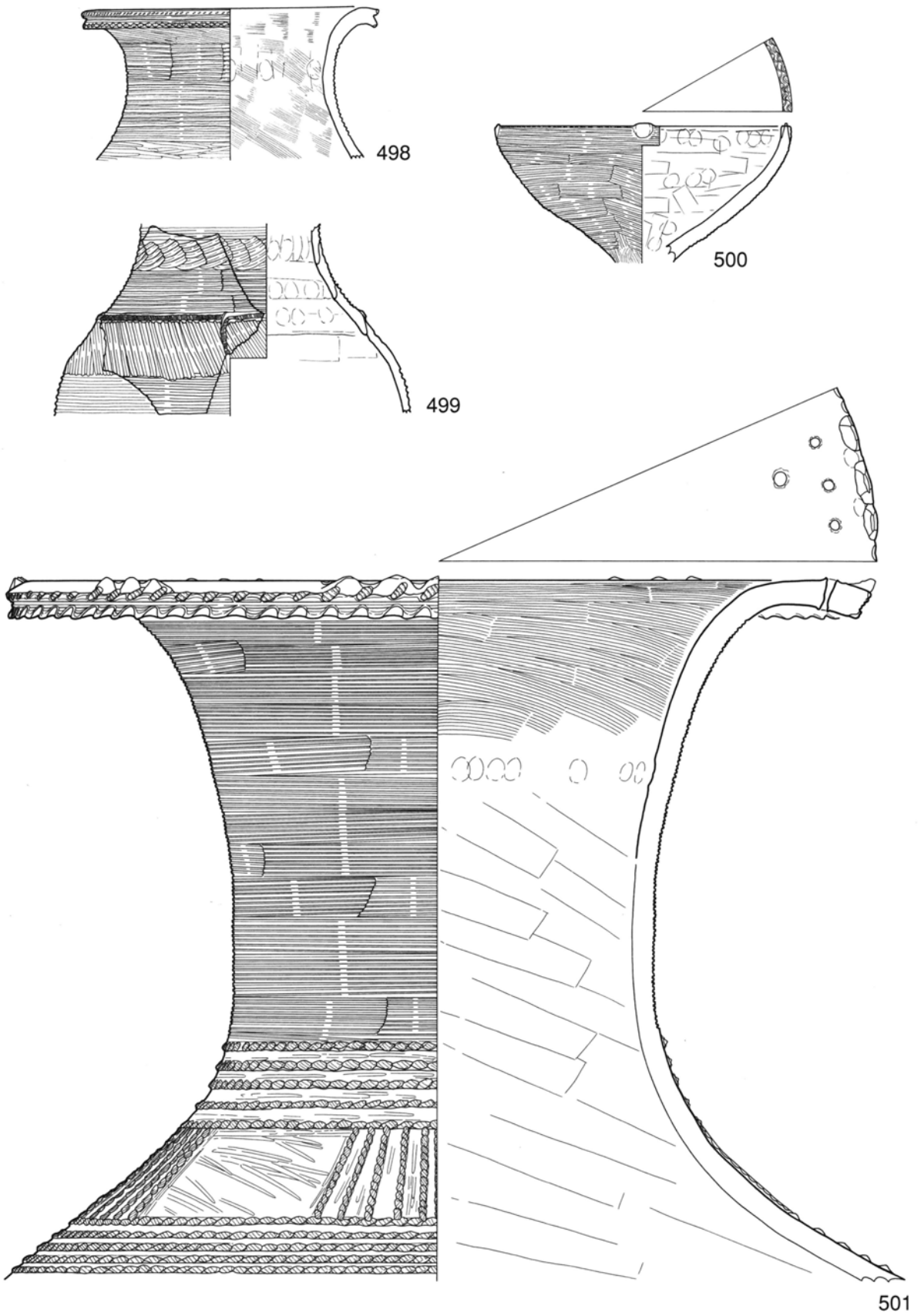


图44 96 S D 102 3层(2)

(1/4)

C. 95 S D 102 の 3 層 (496 ~ 505)

496 は I 系の壺。胴部最大径に二枚貝腹縁による直線帯を施す。ミガキは施紋後。498 は I 系の壺。口縁端部に二枚貝腹縁による条線を施したのち、上下端にそれぞれ板状工具による刻みを加える。頸部の直線帯は 3 帯で二枚貝腹縁によるもの。頸部の直線帯施紋後胴部にミガキを行う。499 は II 系の壺。頸部はハネアゲ紋を施したのち上下に直線帯を加える。胴部は最大径に直線帯を施し、その上にやや左上がりの斜位条痕、さらに頸胴部界に貝殻背面押圧を加えた突帯を付ける。突帯は L 字状の単位で区画する。500 は I 系の高杯。口縁部に指つまみによる単独押圧を円周 4 分割の位置に施す。口縁端部には二枚貝腹縁による波状紋を加える。

497 と 501 は出土地点が同一で、ともに超大型

の壺。口縁から頸部にかけての器形はほぼ同一規格であるが、胴部については相違点がある。467 は撫肩のようにあまり張らない。501 は胴部が強く張り出すようである。施紋具は二枚貝を用いて施すが、頸部直線帯以外の施紋に相違がみられるので、比較しながらみていく。

口縁端部はいずれも条線を施す。497 は上下端を指腹でつまみ連続押圧を加える。501 は上端を二枚貝腹縁、下端を指腹で押圧する。

口縁内面施紋について、497 は直線帯を 5 帯施したのち、間に波状紋を加える。501 は円周 6 分割の位置に 3 ヶ所の瘤状突起が連続した装飾を加えるものの、基本的には無紋である。

もう一つ口縁内面について注目したい点は、焼成前穿孔の相違点である。497 は径約 3 mm の孔が円周 5 分割の位置に 3 × 5 ヶ所、501 は径約 7 mm

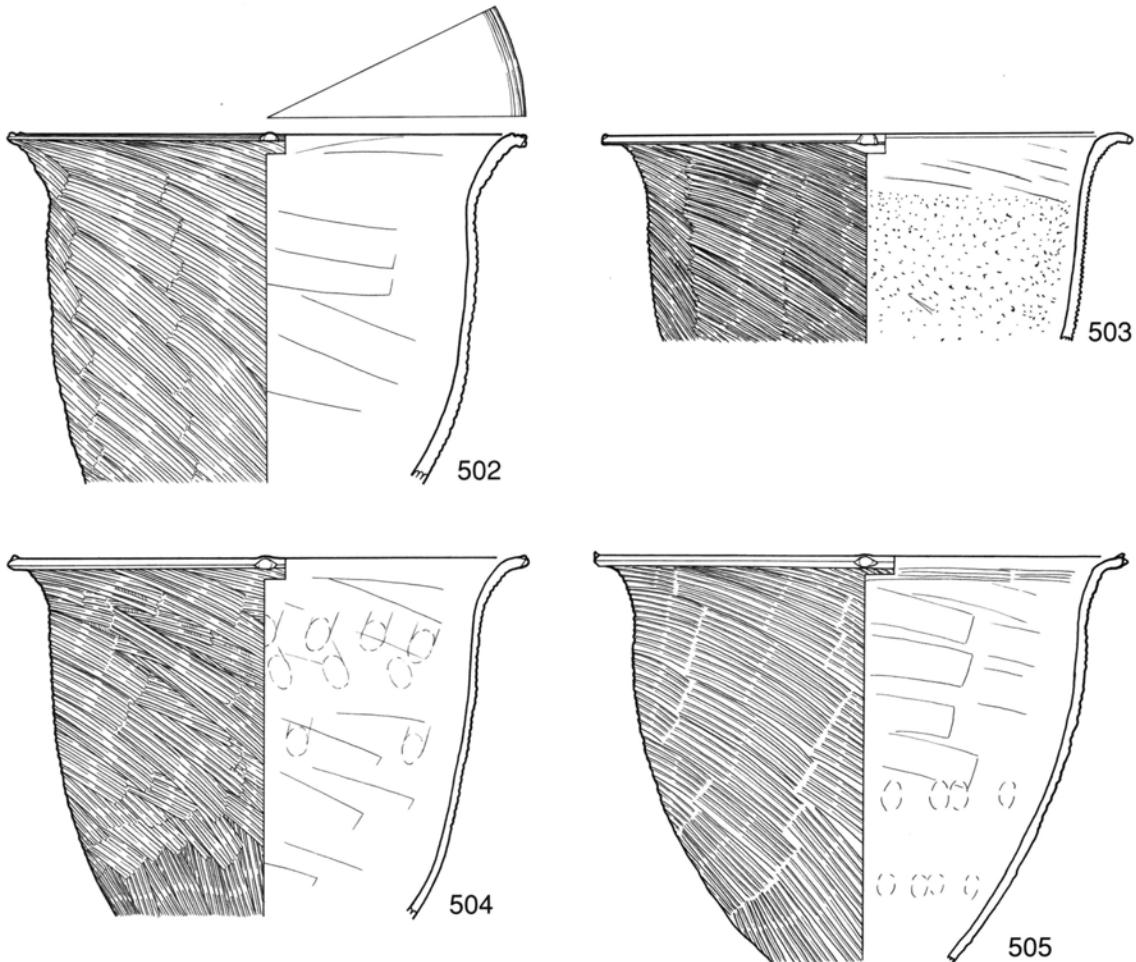


図 45 96 S D 102 3 層 (3)

の孔が瘤状突起の位置に合わせて3×6ヶ所である点だ。孔の大小と5単位と6単位の相違点に注目しておきたい。

頸部から胴部上位の紋様について。497は頸部に直線帯が12帯、その下位は羽状気味のミガキがみられる。501は頸部の直線帯が12帯みられるのは497と同様であるものの、その下位に押圧突帯によって施される紋様帯の存在に相違点がある。頸部直線帯の下位に貝殻背面押圧を有する突帯が5条、頸胴部界にも同じく5条施される。この間を埋めるように口縁内面の瘤状突起に対応させて縦方向の押圧突帯が6条×6単位みられる。

以上、紋様を中心に比較してみた。しかし、胴部中位以下が両者ともに欠損しているため、器形・紋様ともに全容は伺い知れない。胴部上位までの部位で判断すれば、497は口縁内面に501は胴部上位に重点をおいた加飾が指摘できる。

502はⅡ系の深鉢。口縁部内面に条線を施す。504～505はⅠ系の甕。いずれも左上がりの斜位条痕で口縁部に単独押圧がある。503は胴部内面にアバタ状剥離がみられる。

D. 96 S D 102 2層貝層 (506～516)

506～510は壺。506はⅡ系。頸部にハネアゲ紋を施すが、先端が流れ気味である。507～510はⅠ系。507はハケ調整後、頸部に二枚貝腹縁で直線紋帯を4帯、その下位に施紋後ミガキを加える。口縁端部はハケメ工具による連続刺突、その後円周4分割の位置に指つまみによる単独押圧を加える。508の施紋順は次に示す通り。(1)頸部に貼付突帯を付し、その上に板状工具で刻む。(2)櫛状工具による波状紋帯を3ヶ所。(3)波状紋帯上に櫛状工具で弧線を加える。(4)波状紋帯の2段目の下部に沈線を入れる。(5)無紋帯に横ミガキを行う。509は焼成後穿孔が底部にある。510は胴部に二枚貝腹縁の直線帯が2帯、ミガキ調整は粗い。511・512はⅠ系の甕。513・514はⅡ系の深鉢。いずれも横羽状条痕であるが、513は二枚貝腹縁、514は櫛状工具を原体とする。515・516はⅠ系の鉢。516は左上がりの二枚貝腹縁による斜位条痕を行い、その後底部付近にヘラミガキを加える。胴部上位の瘤状突起は2つで1対の計4ヶ所付く。口縁端部はハケメ工具による連続押圧が施される。

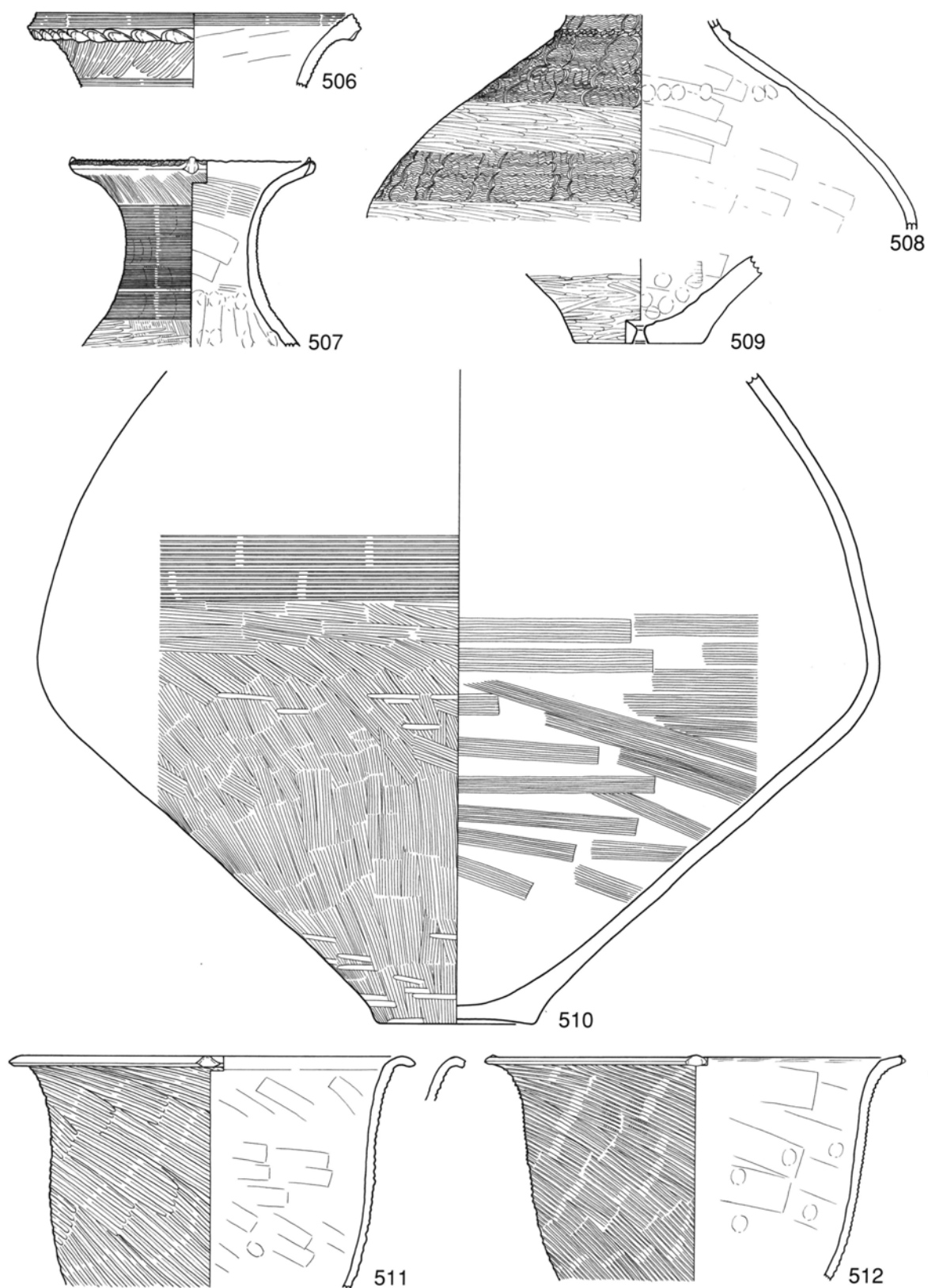


图46 96 S D 102 2層貝層 (1)

(1/4)

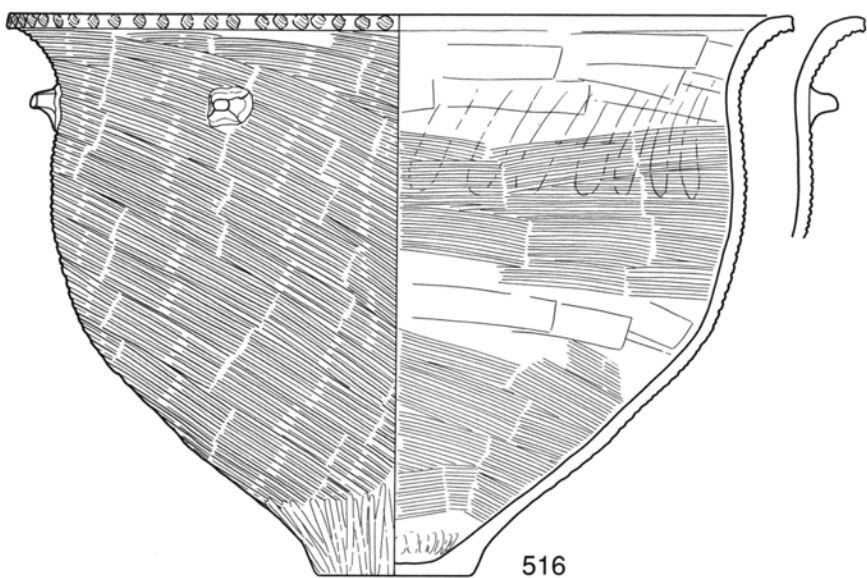
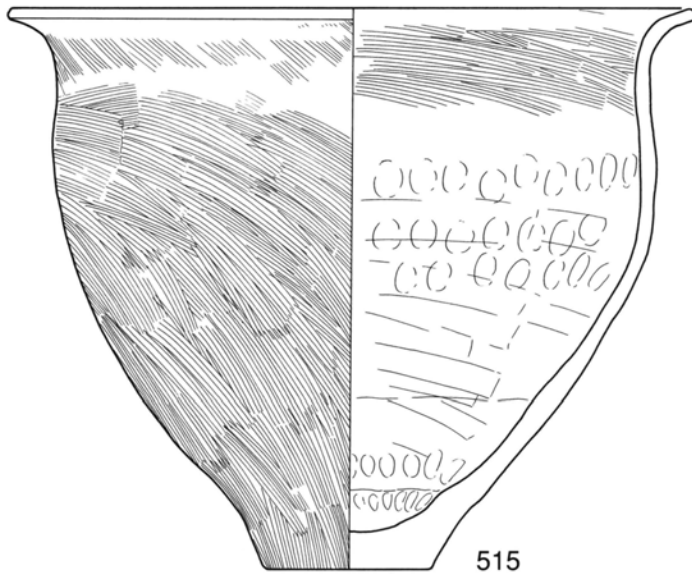
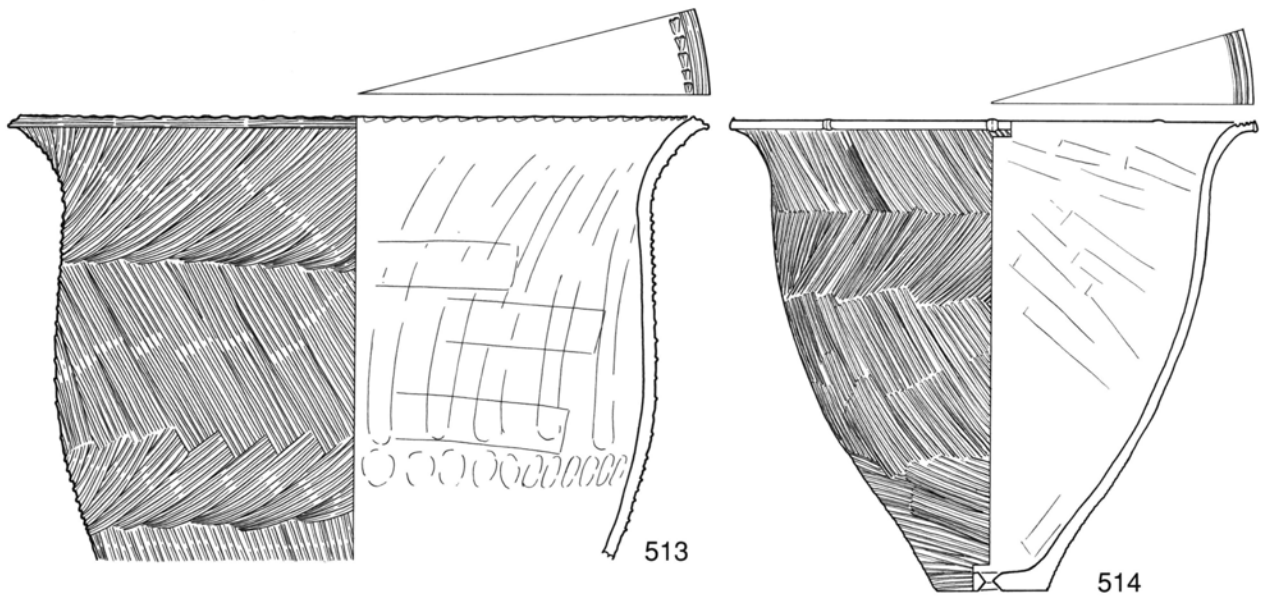


图47 96 S D 102 2層貝層 (2)

(1/4)

E. 96 S D 102 1・2層 (517～524)

517～520はI系の壺。520は二枚貝腹縁の直線帯と波状紋を施した後、直線帯上に羽状沈線を加える。521はII S系の深鉢。条痕の原体は櫛状工具。522は沈線紋系土器の鉢。重方形区画紋は横方向の沈線の後、縦方向の沈線を引く。重方形区画紋を囲む貼付突帯は4区画想定できる。貼付突帯上および口縁内面の刺突は二枚貝腹縁による。523・524は条痕系厚口鉢。

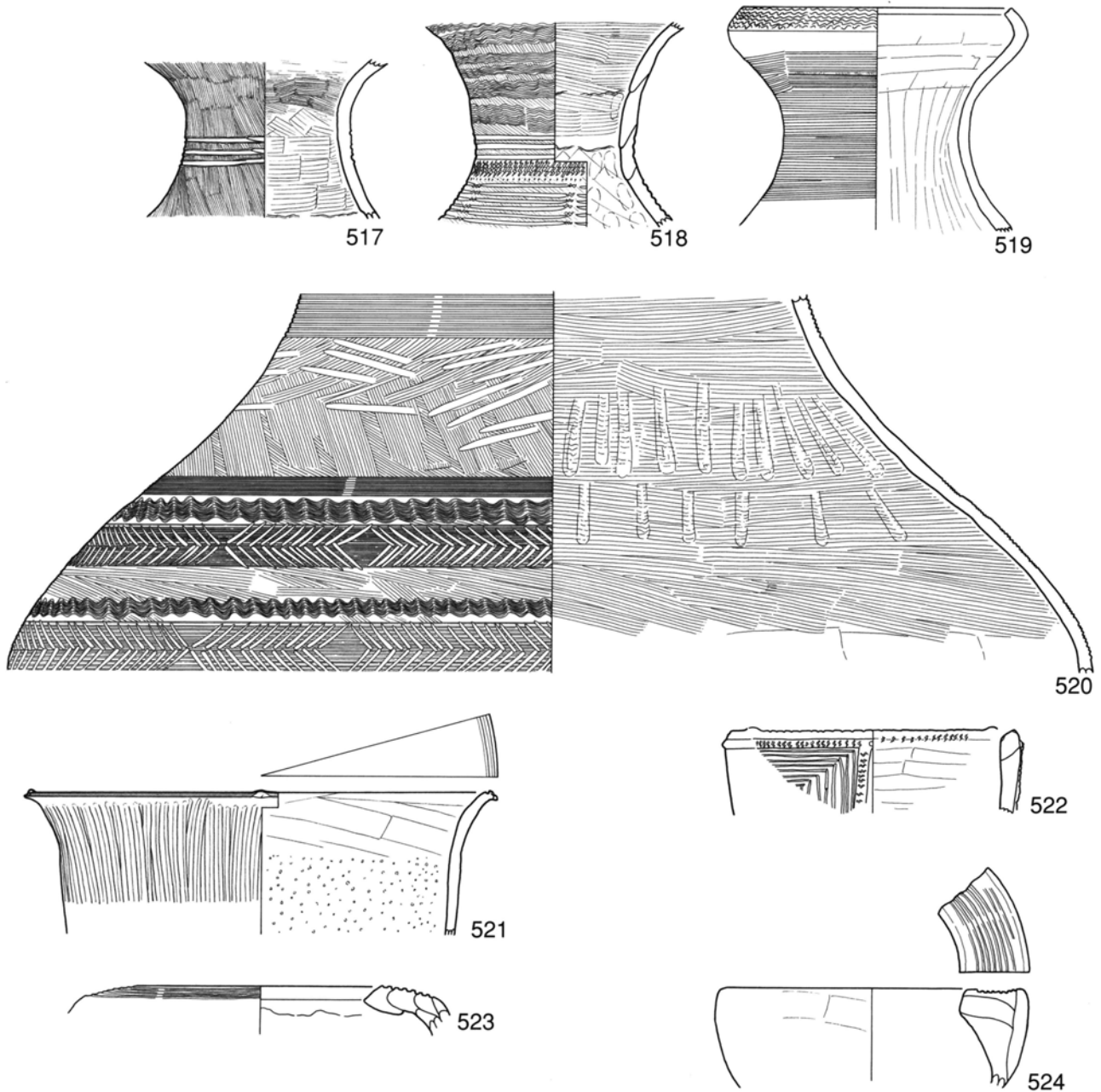


図48 S D 102 2層・1層ほか

(1/4)

(2) S D 106 (図 49 ~ 57)

A. 3層 (525 ~ 528)

525・526はⅡ系の壺。525は口縁部外面に2段の紋様帯がある。上段は直線紋下段は連弧紋が施される。この口縁部外面から口縁端部にかけて円周5分割の位置に、貝殻背面押圧が加えられた棒状浮紋がある。頸部には貝殻腹縁による直線帯が4帯、その上にハネアゲ紋、直線帯の下位には貝殻背面押圧を施した突帯が付く。口縁部内面は貝殻腹縁による連弧紋が施される。526は受口状の口縁部で、外面には棒状工具による羽状沈線を施す。頸部上位の直線帯に続き口縁下に押圧突帯、頸部下位に口縁外面と同様の羽状紋を施す。527・528はⅠ系の壺。527は頸部直線帯下に沈線を入れる。口縁端部は直線紋を施した後、上下端に指つまみを加える。口縁内面は直線紋を2帯、そして波状紋を2帯施す。528はハケ調整後、底部付近を板ナデで整える。

B. 2・3層 (529 ~ 533)

529 ~ 531はⅠ系の壺。529・530の施紋原体は櫛状工具。531は二枚貝腹縁。529は頸部直線帯下に沈線を引く。531は頸部直線帯下にハケメ工具による段をつくる。532は櫛状工具による縦羽状条痕がみられるⅡ系の深鉢。ⅡN系の祖形か。533は二枚貝腹縁による左上がりの斜位条痕がみられるⅠ系の甕。条痕後底部付近に縦ハケ調整、さらに縦ミガキを加える。口縁部は円周4分割の位置に指つまみによる単独押圧が加えられる。

C. 貝層直下 (534 ~ 539)

すべてⅠ系。534 ~ 537は壺。534は頸部直線帯が二枚貝腹縁、口縁端部の刻みはハケメ工具による。頸部直線帯下にハケメ工具による段がつくられる。535は櫛状工具による頸部直線帯下に沈線を付加する。536は小型の壺で、胴部が筒状の器形、頸胴部の境目を胴部のミガキ調整で意識す

る。537は櫛状工具による頸部直線帯、口縁端部の上下端を指つまみを行う。538は鉢。内外面を丁寧にみがく。539は縦方向に粗いハケ調整を行う。

D. 貝層 (540 ~ 555)

540 ~ 549は壺。546・547はⅡ系、それ以外はすべてⅠ系。540 ~ 542・544の施紋具はすべて二枚貝腹縁。541は頸部直線帯下に沈線を入れる。543は付加沈線研磨手法が用いられる。544は口縁部に円周4分割の位置に指つまみによる単独押圧がある。頸部直線帯下にハケメ工具による段がつくられる。545の施紋具は櫛状工具。546は袋状口縁部に弧状区画が4単位みられる。547は受口状に近い袋状口縁。口縁外面の二枚貝腹縁条痕の上下を半截竹管状工具により区画する。頸部には半截竹管状工具による不揃いな波状紋を施す。548は小型の壺。549は直線帯に施紋後ミガキ調整を行う。直線帯下の沈線および段はみられない。550 ~ 555はすべてⅠ系の甕。550・552はハケ甕。それ以外はすべて二枚貝腹縁調整の左上がりの斜位条痕。

E. 1・2層貝層 (556 ~ 573)

556 ~ 558・561はⅠ系の壺。556は口縁端部にハケメ工具による刻み、頸部に直線帯を施す。直線帯の上位2帯はピッチが短く不揃いな直線であるが、下位の3帯はピッチが長く均等に引かれている。557は口縁部上端と内面の境目に3ヶ所1単位の瘤状突起が円周4分割の位置に付く。口縁上下端にハケメ工具による刻み、二枚貝腹縁による頸部直線帯が2帯以上施される。558は口縁上下端を指つまみする連続押圧がめぐる。二枚貝腹縁による頸部直線帯は比較的口縁部近くまでのびる。561は胴部上位に櫛描直線帯、2段の縦方向の区画紋を加える。紋様帯下には二又工具による不揃いな波状紋がめぐる。559・560はⅡ系の壺。559は頸部に左上がりの斜位条痕、頸部および胴部に直線紋帯を施し、紋様帯の端を半截竹管状工

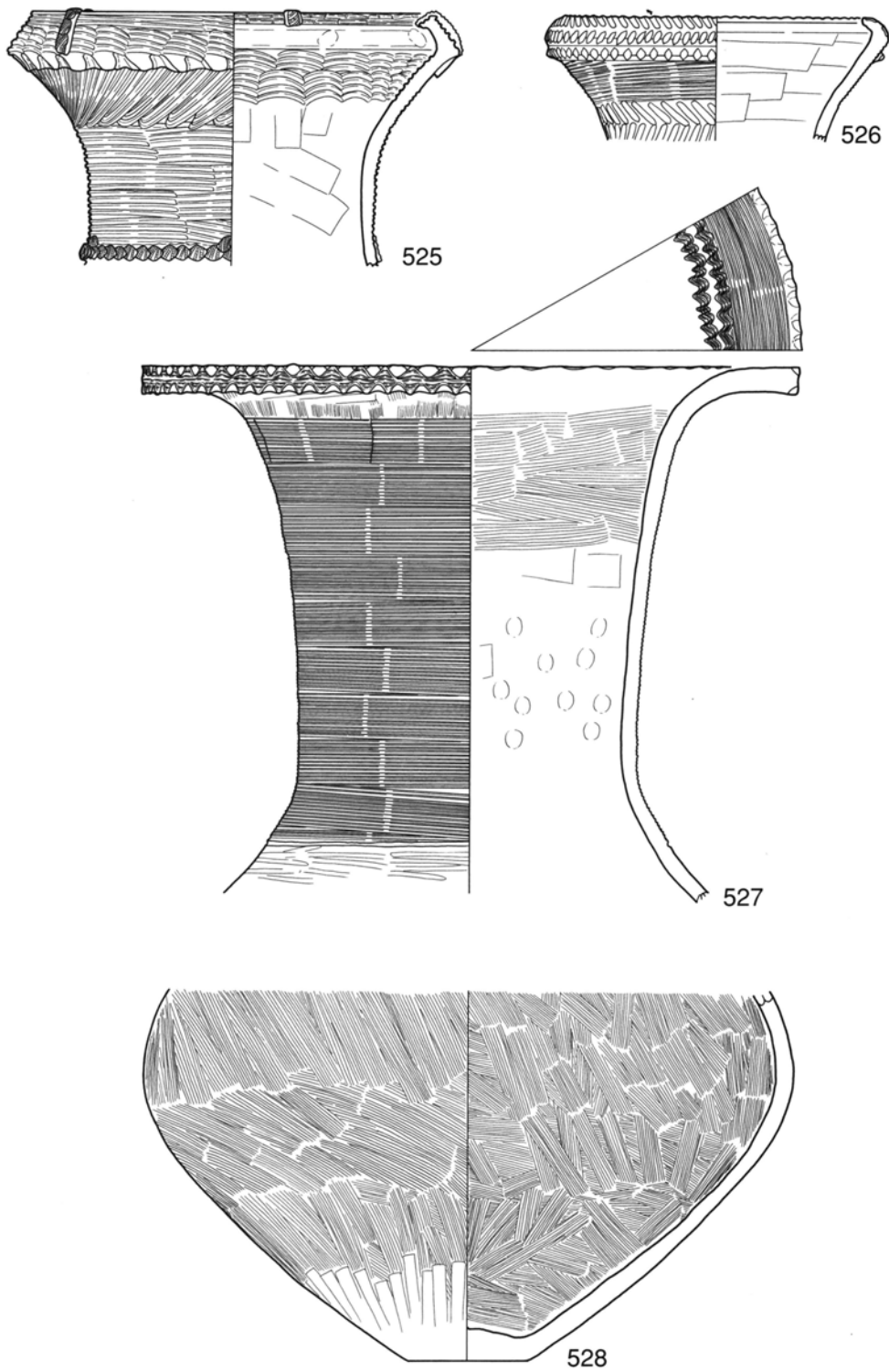


图49 S D 106 3層

(1/4)

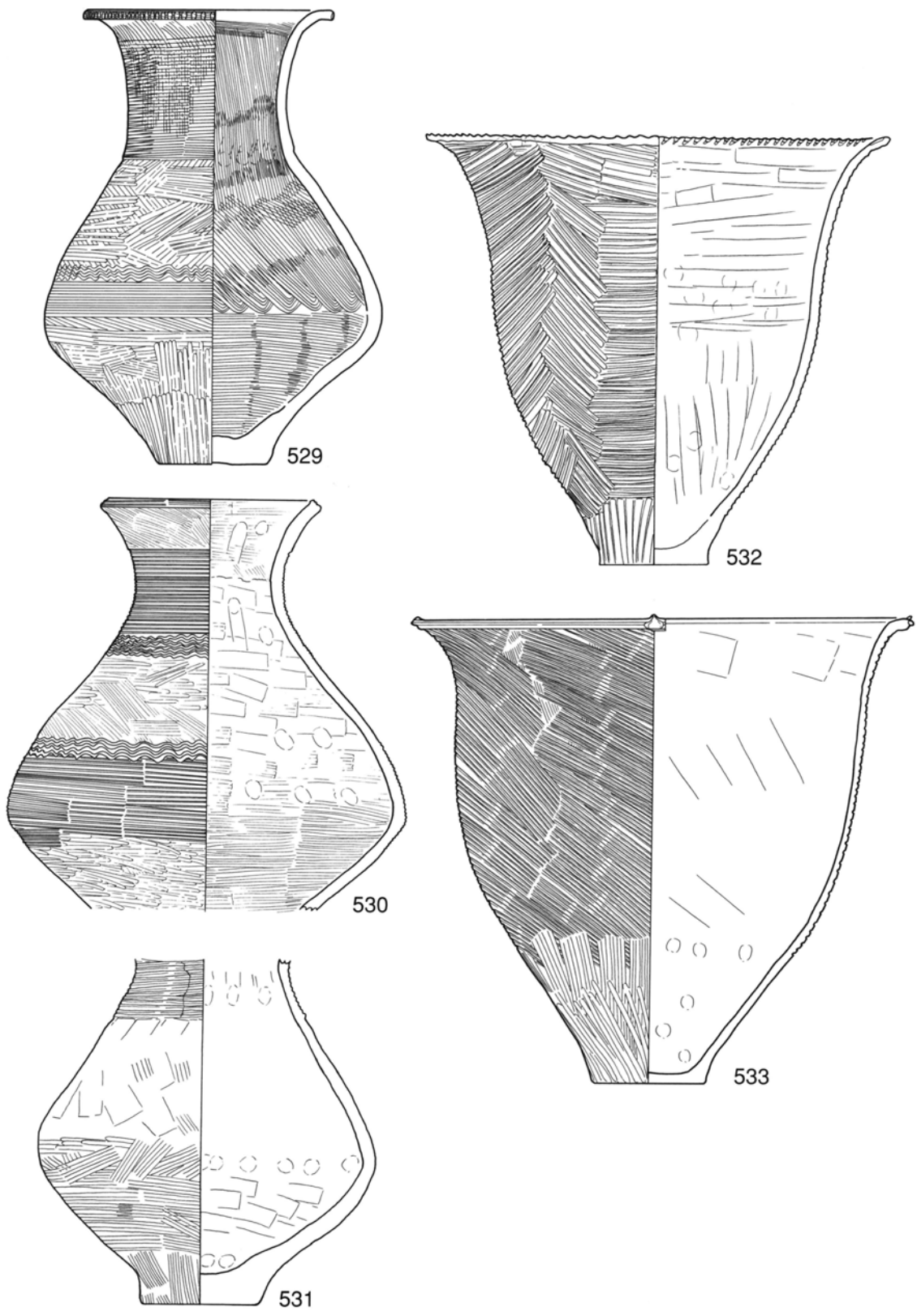
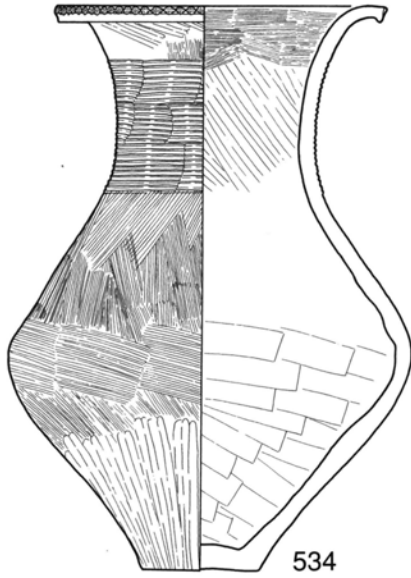
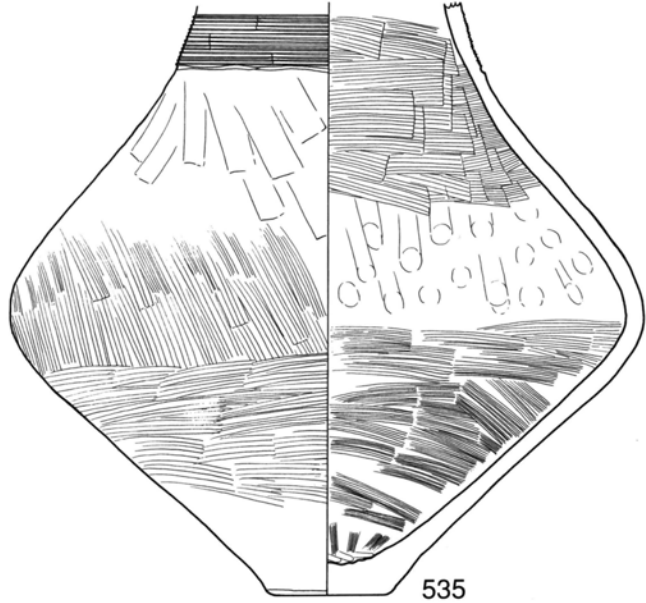


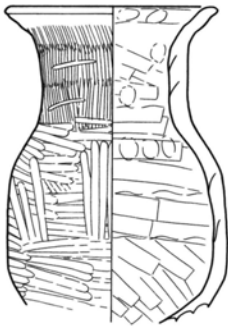
图 50 S D 106 3 层 · 2 层



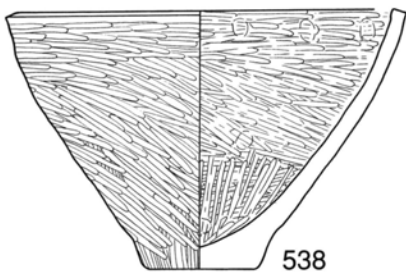
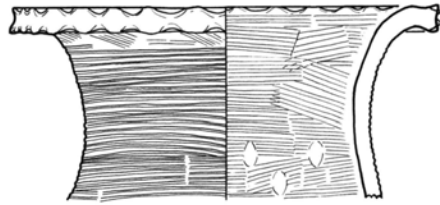
534



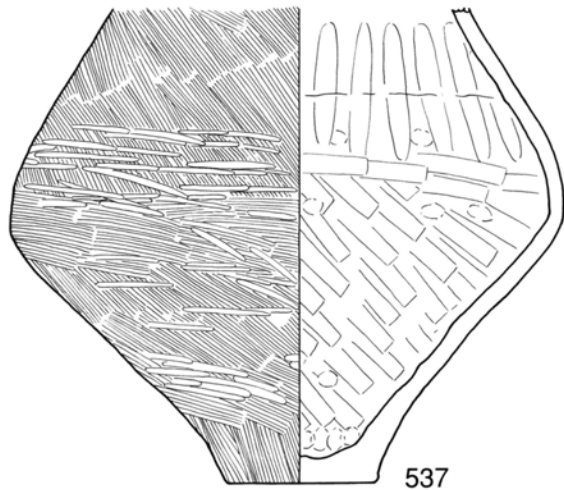
535



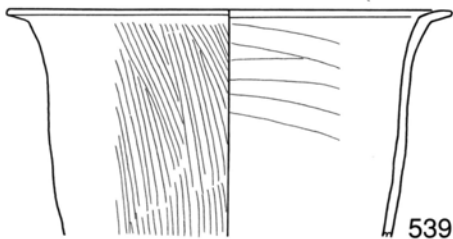
536



538



537



539

图51 S D 106 貝層直下

(1/4)

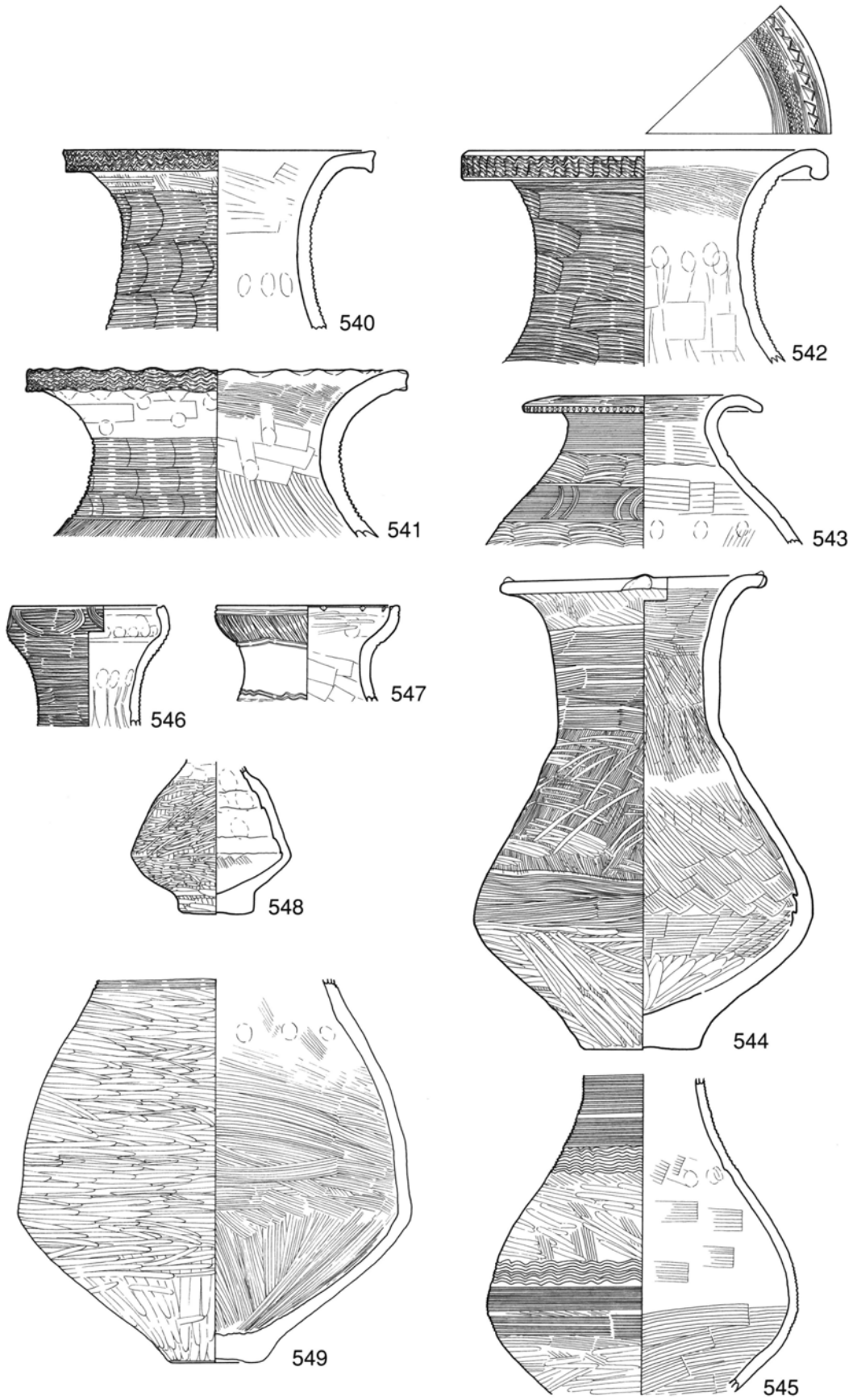


图 52 S D 106 貝層 (1)

(1/4)

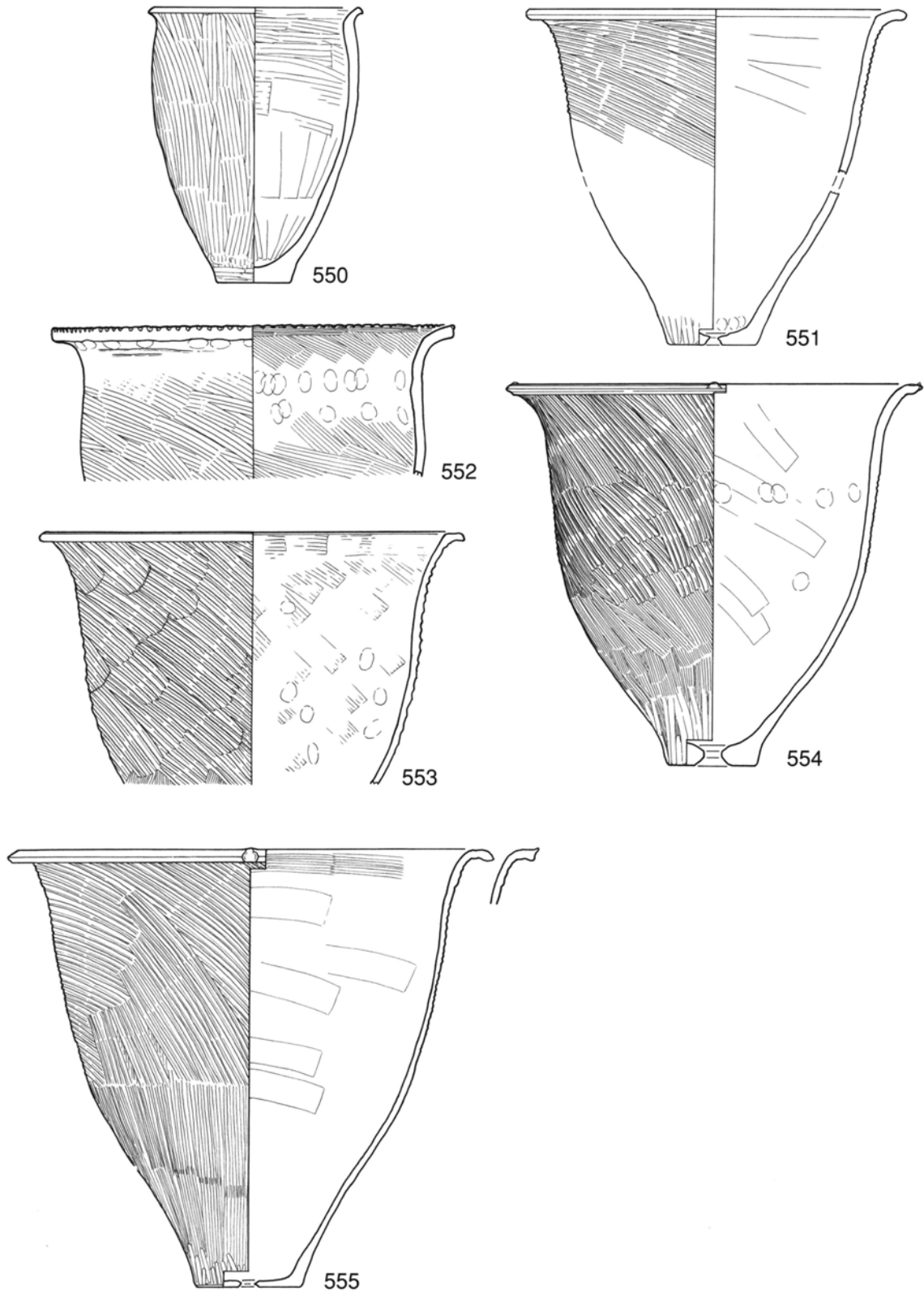


图 53 S D 106 貝層 (2)

(1/4)

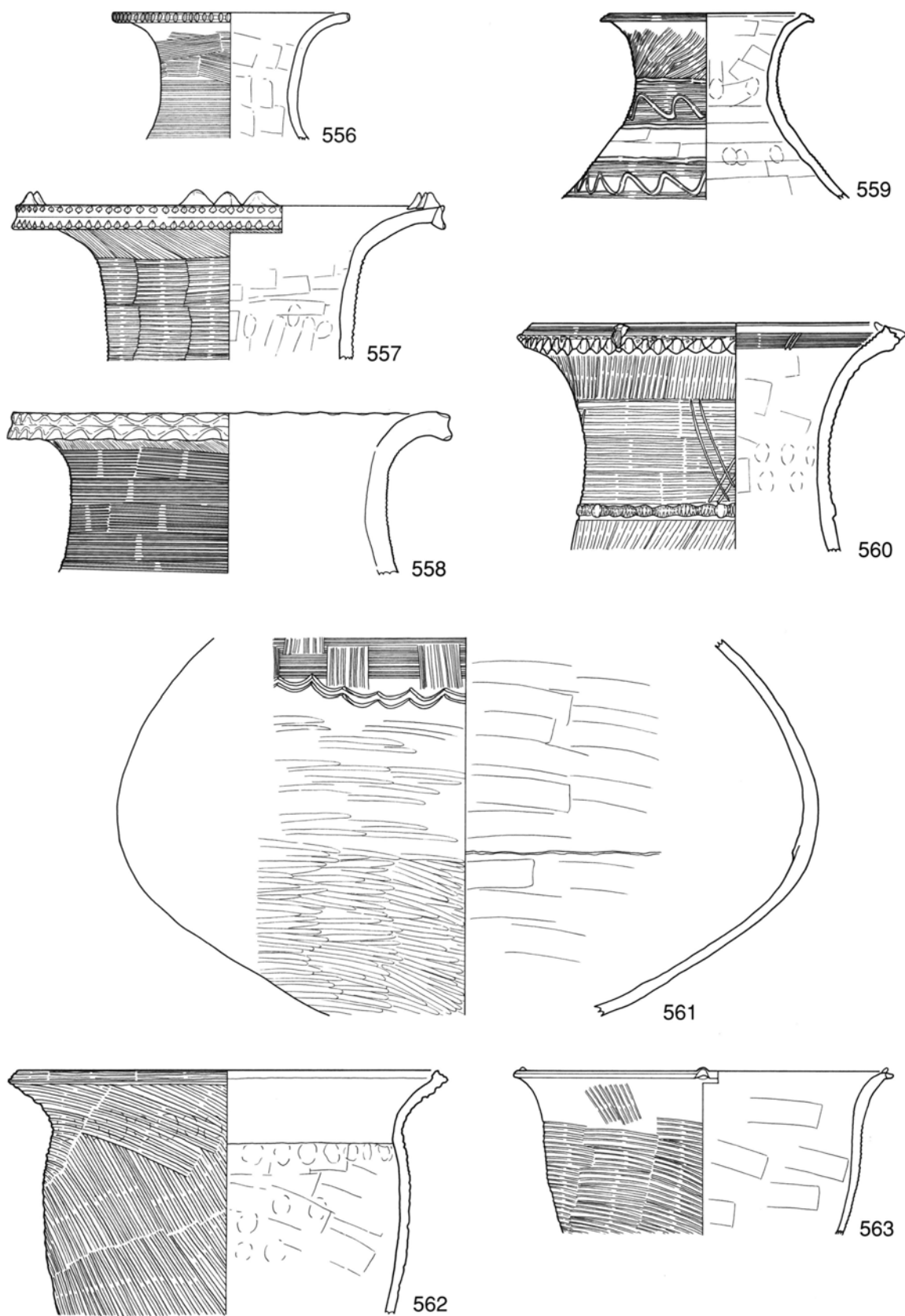
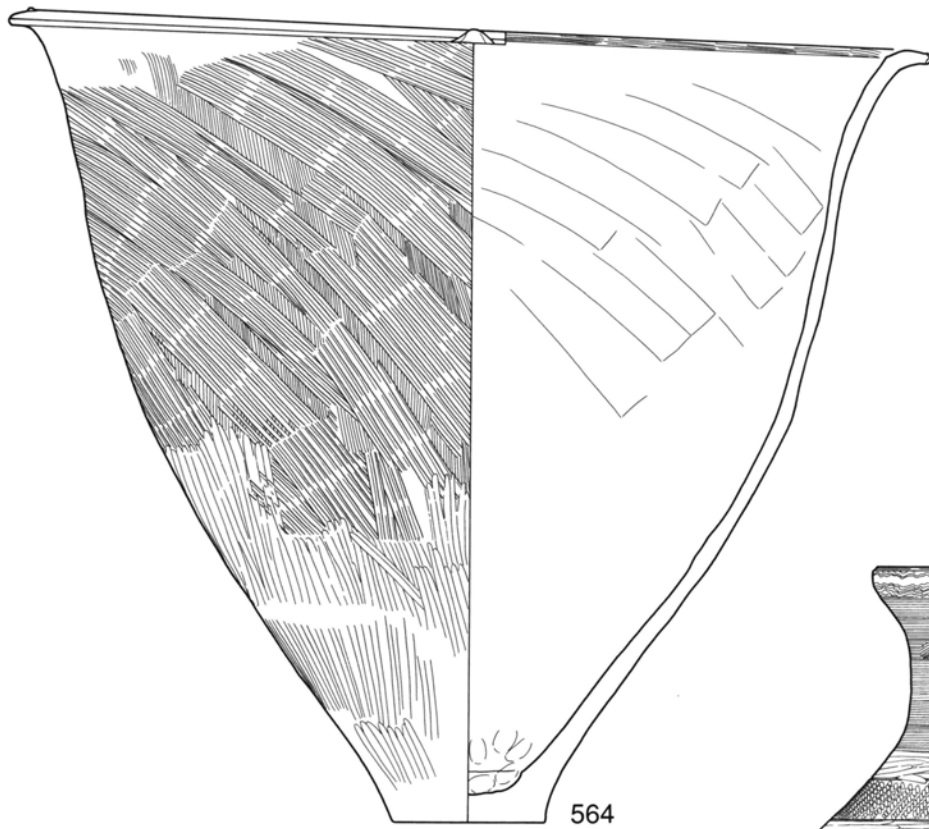
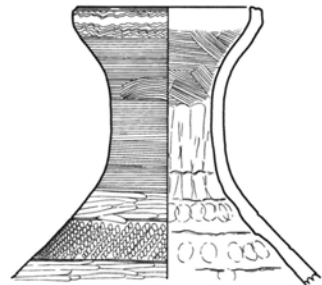


图54 SD 106 1 · 2層貝層 (1)

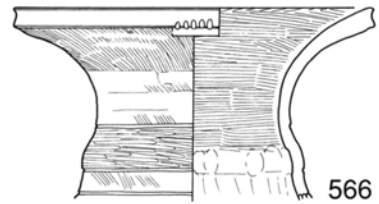
(1/4)



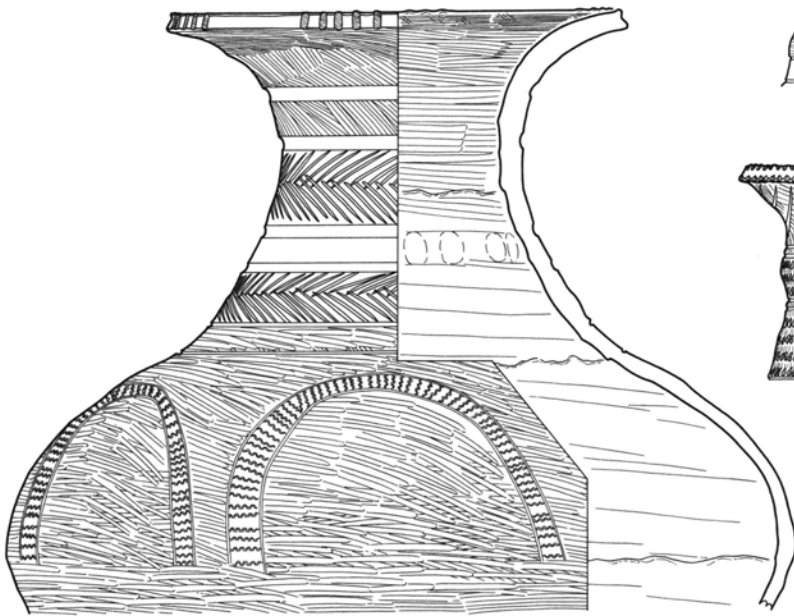
564



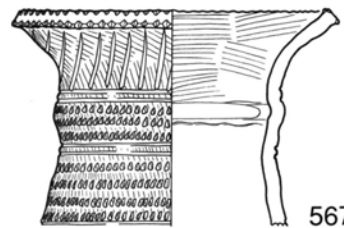
565



566



568



567

图 55 S D 106 1 · 2 层贝层 (2)

(1/4)

具による不揃いな波状紋で付加する。直線紋帯上には半截竹管状工具による山形紋を加える。560は口縁部内面端に突帯がめぐり、受口状口縁になる。口縁部に円周3分割?の位置に棒状浮紋を付け、その両端は貝殻背面押圧で接着させる。口縁内面には二枚貝腹縁の直線帯、その上に二又工具による縦区画が施される。頸部の紋様はやや右上がりの二枚貝腹縁による条痕をベースに、二枚貝腹縁の直線帯、下位に貝殻背面押圧された突帯、直線帯上には二又工具を用いたX字状紋を加える。562はⅡ系の深鉢。563・564はⅠ系の深鉢。

565～573はⅣ期以降の資料。565は付加沈線研磨手法を用いたⅠ系の細頸壺。付加沈線間に縄紋を施紋する。566・568はⅡ系の壺。568は図202に集成した二枚貝刺突連弧紋壺の系列。567はⅢ

系の壺。569は口縁部が「く」字状に外反し、細かいハケ調整ののち、粗い条痕調のハケ調整を行う。口縁端部には粗いハケメ工具による連続した刺突と円周4分割の位置に指つまみがつくⅠ系の甕。伊勢湾西岸産か? 570・572はⅠ系の甕。572は口縁内面に波状紋を施す。571・573はⅡN系の深鉢。

F. その他 (574～581)

574・575・581はⅡ～Ⅲ期。574はⅠ系の壺。紋様帯下に付加沈線を施す。施紋は櫛状工具。575はⅡ系の深鉢。口縁端部に二枚貝腹縁による刻みを行い、円周4分割の位置に指腹による単独押圧を加える。胴部上位は横位羽状条痕。581は条痕系の厚口鉢。576～580はⅠ系の受口口縁を有する細頸壺。

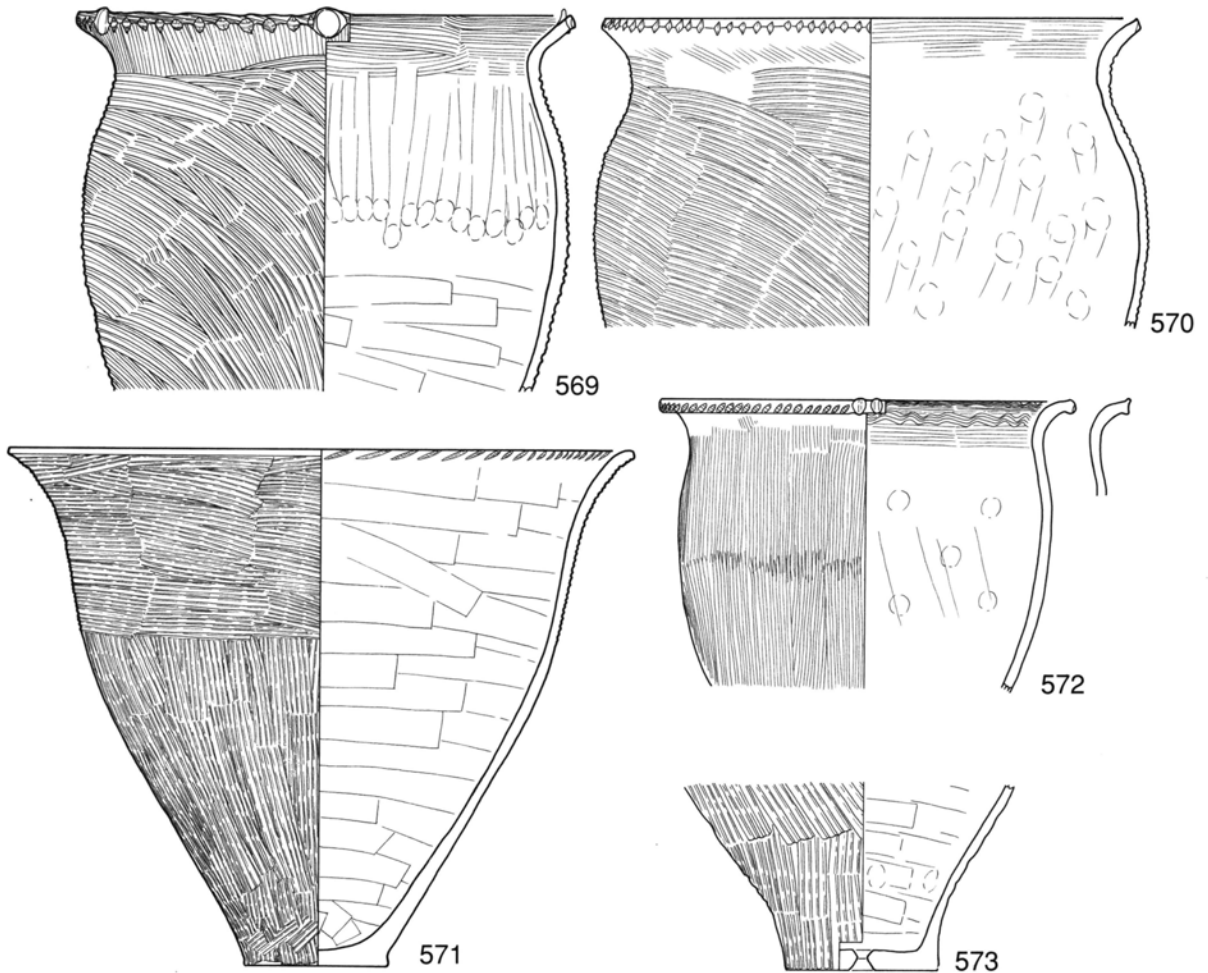


図56 S D 106 1・2層貝層 (その3)

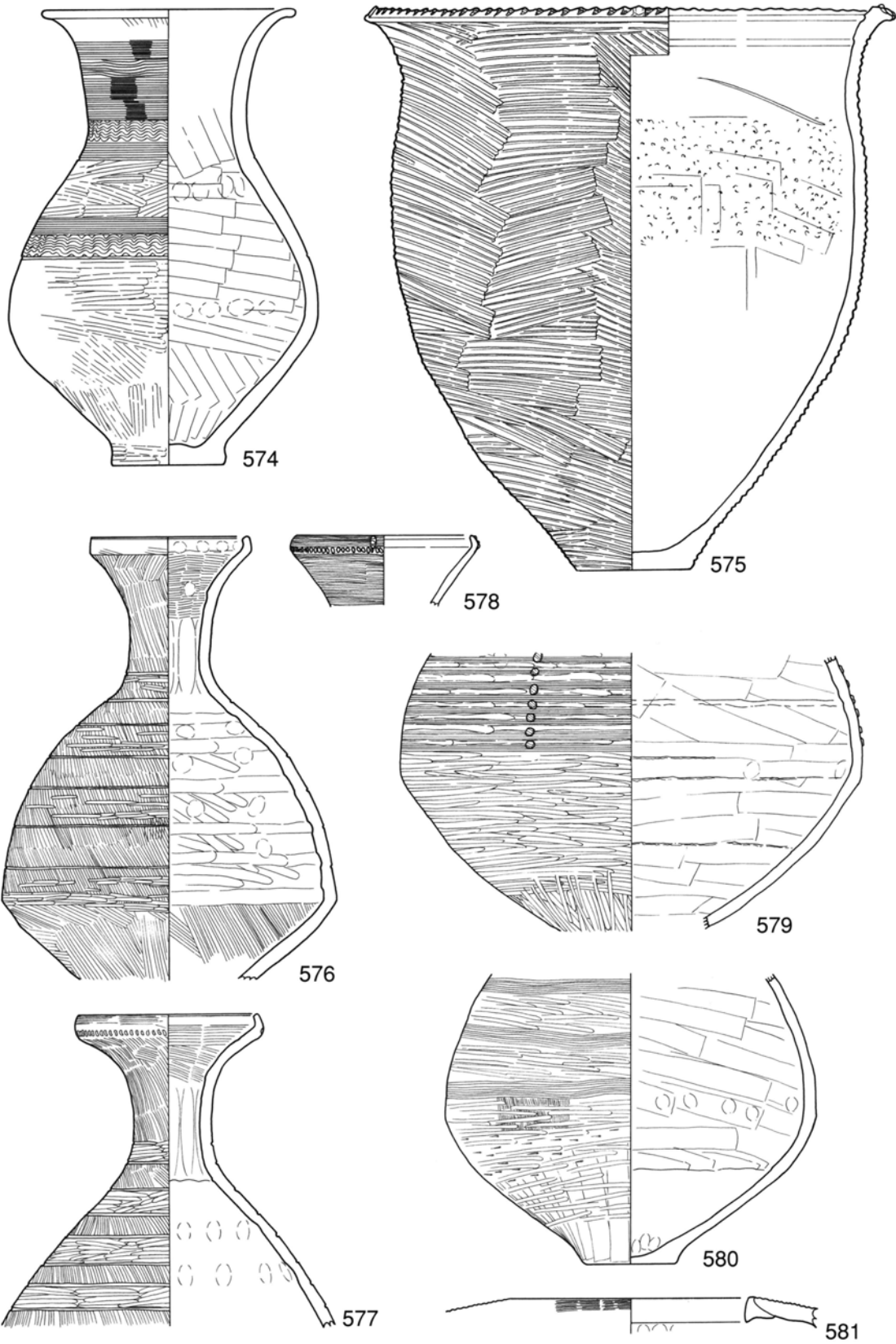


図 57 S D 106 層位不明など

(1/4)

(3) S D 105 (図 58 ~ 70)

A. 3層 (582 ~ 597)

582 ~ 588 は I 系の壺。589 は II 系の壺。590 は I 系の壺。591 ~ 593 は I 系の甕。591 は瘤状突起が 2ヶ所付く。594 は II 系の深鉢。595・596 は台付無頸壺。594 は櫛状工具による流水紋が施される。597 は条痕系内傾口縁土器。

B. 2層 (598 ~ 646)

598 ~ 611 は I 系の壺。611 は口縁部が垂下、口縁内面に 3つの瘤を 1単位とする突起が付く、伊勢湾西岸産。612 は II 系の平行沈線紋土器。613・614 は二枚貝施紋と付加沈線がみられない III 期の I 系壺。616 はハネアゲ紋を持たない II 系の壺。617 は頸部に貝殻背面押圧を有する突帯、胴部に羽状条痕を施す II 系の壺。615 は付加沈線研磨技法を有する I 系の壺。618・619 は I 系の細頸壺。620 は瘤状突起が 3ヶ所ある I 系の鉢。621 は沈線紋系土器 (II' 系) の鉢。口縁部に中心部がくぼむ円形の吸盤状突起が 4ヶ所付く。その間を竹管状工具による 2列の刺突紋がめぐり、この紋様帯の下に横位沈線帯を X 字状・重山形と重弧紋で区画する紋様帯と竹管状工具による刺突列が交互に配置される。内面は丁寧ミガキを行い、内外面ともに煤・ヨゴレが顕著。622 は櫛状工具による直線紋と波状紋が交互に配される I 系の無頸壺。623 は壺成形第 1 段階の浅鉢か? 624 は I 系の壺。625・626・642 は I 系の二枚貝腹縁調整の甕。627 ~ 640 は I 系のハケ甕。633 は口縁端部に波状紋、刻み目を加える。634 は口縁内面に波状紋を施す。635 は口縁端部と内面に波状紋を施す。636 の底部穿孔は長方形の工具 (石器) により打撃を加え、その後円形状に研磨する。641 は頸部と胴部のミガキ調整の方向を変えて肩部を意識する。643 は外面調整および口縁端部刺突・口縁内面条線に二枚貝腹縁を使用、頸胴部界付近の横

線および口縁内面の上下区画と縦区画が半截竹管状工具を使用している。644 ~ 646 は II 系の深鉢。

C. 1層・層位不明 (647 ~ 705)

647 ~ 658 は I 系の壺。659 ~ 665 は II 系の壺。659 の口縁端部には指腹押圧が 1ヶ所、その他を貝殻背面押圧がめぐり、666 ~ 674 は IV 期以降の壺。675 ~ 678 は鉢。679 ~ 684 は台付鉢または高杯。685・686 は I 系の二枚貝腹縁調整の甕。687・688 は I 系のハケ甕。689 ~ 703 は IV 期以降の I 系の甕。703・705 は II 系の深鉢。

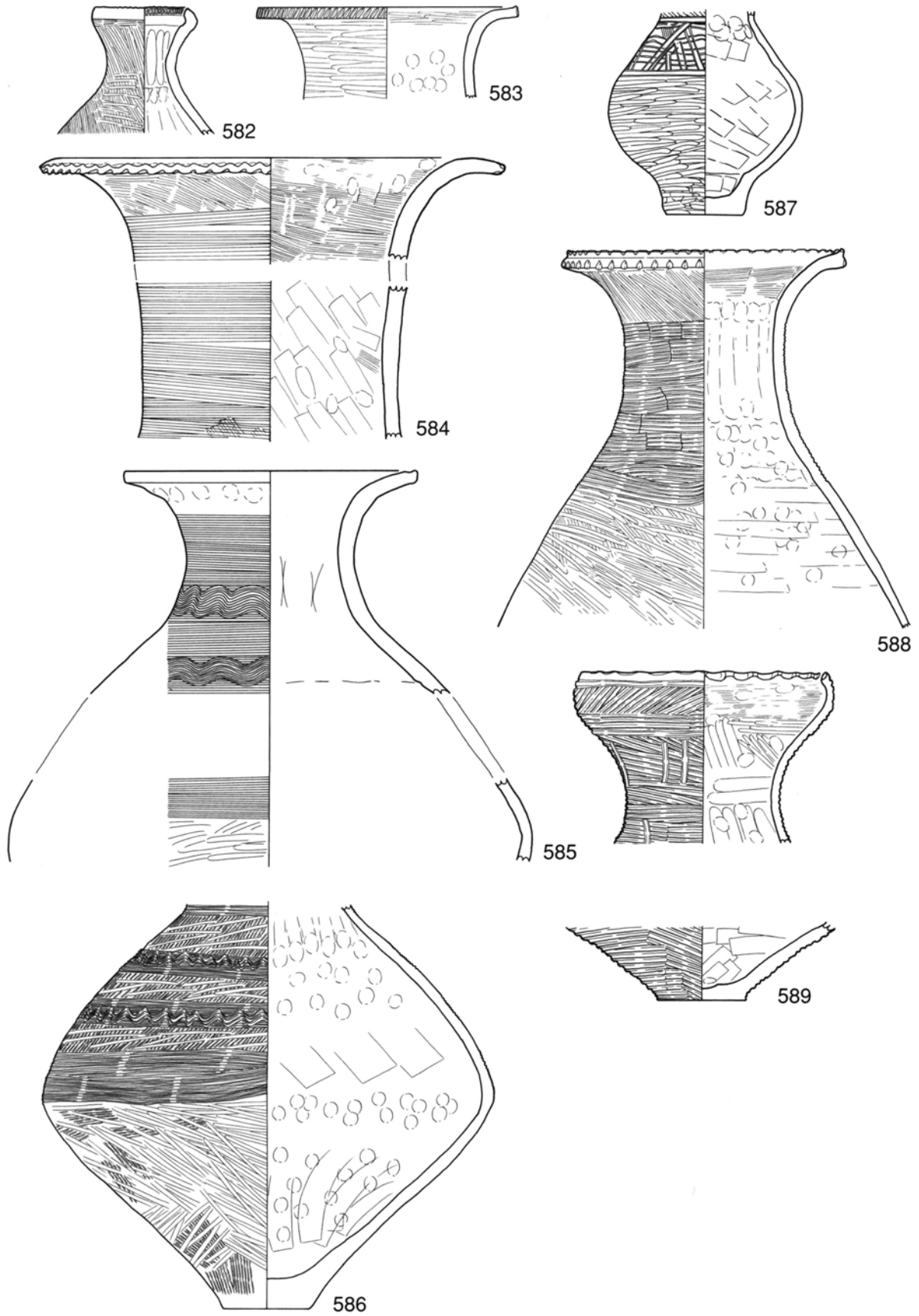


图58 S D 105 3层 (1)

(1/4)

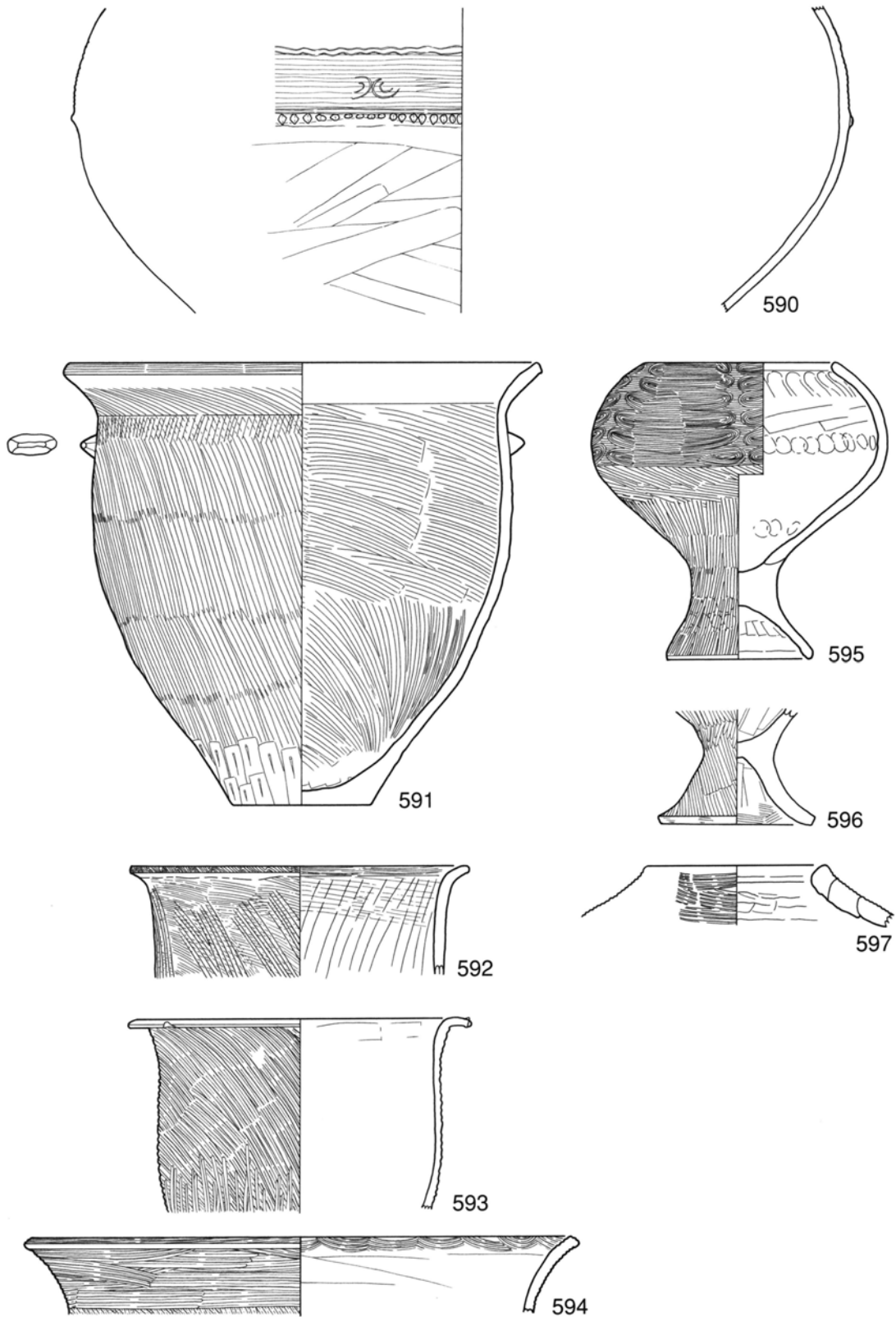
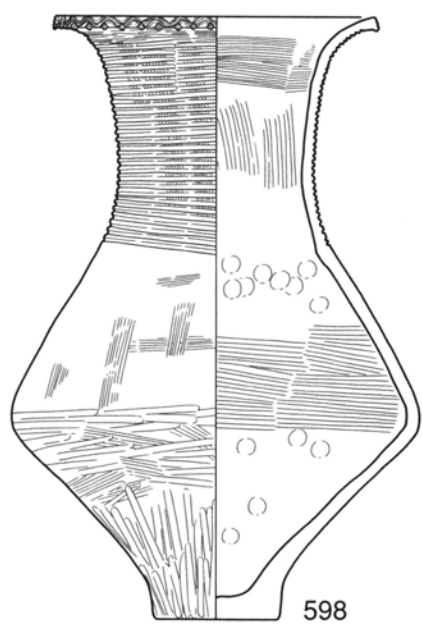
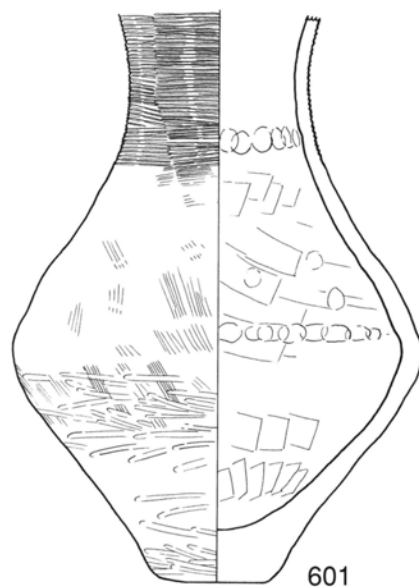


图 59 S D 105 3 層 (2)

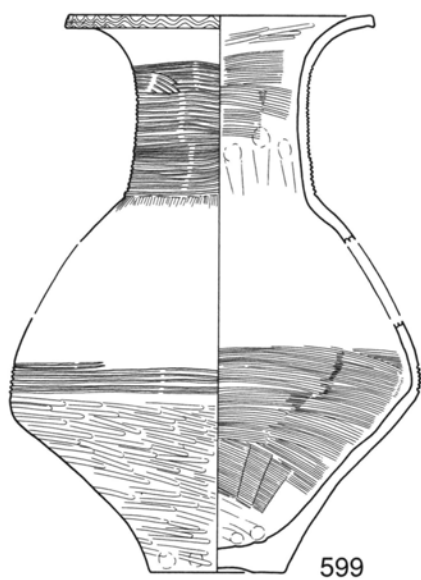
(1/4)



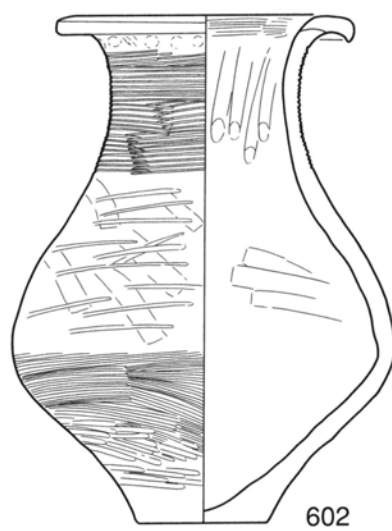
598



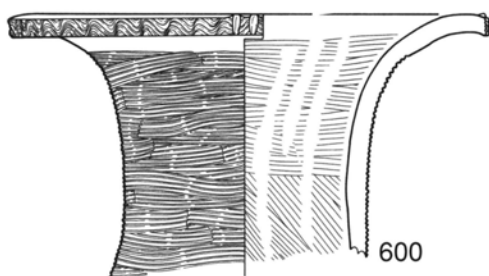
601



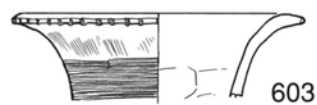
599



602



600



603



604

图60 S D 105 2层 (1)

(1/4)

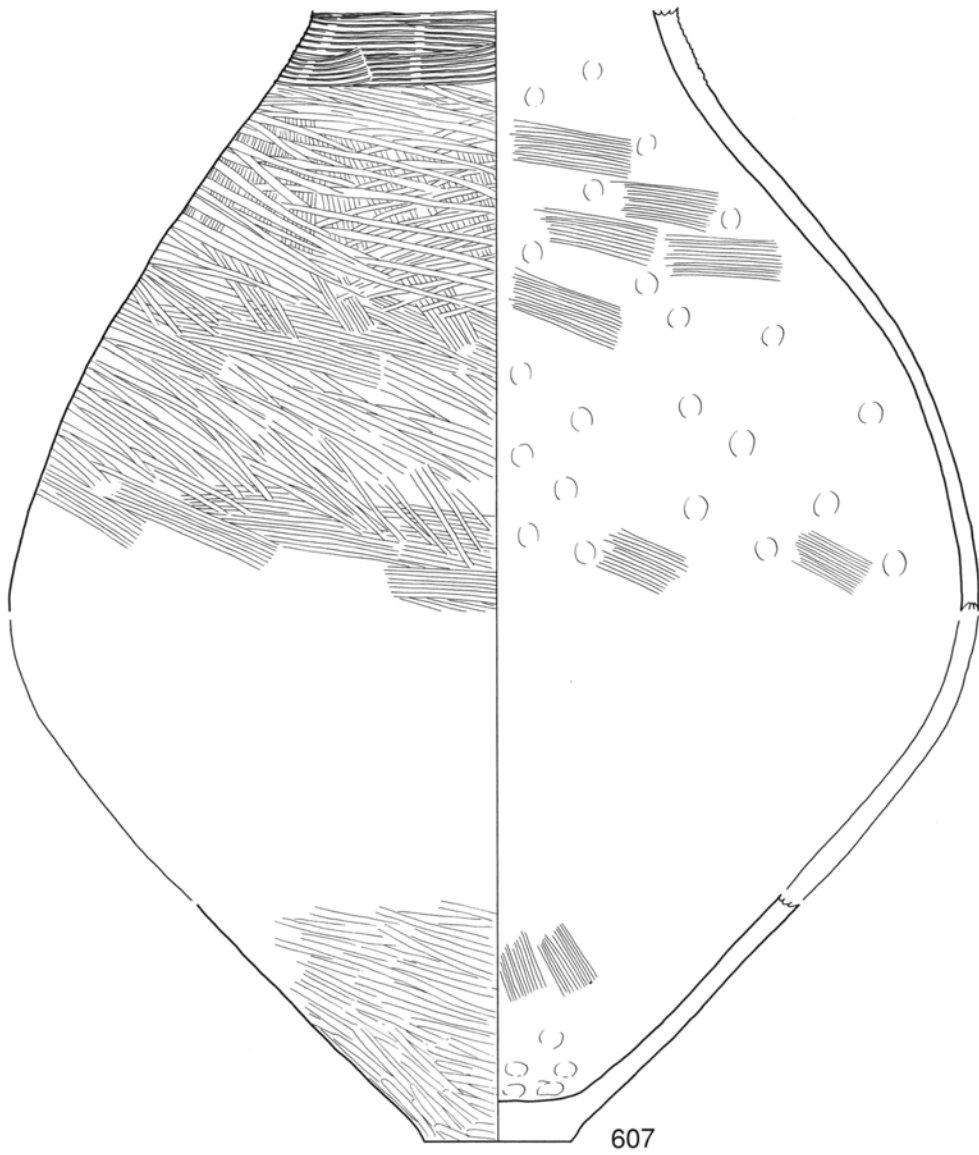
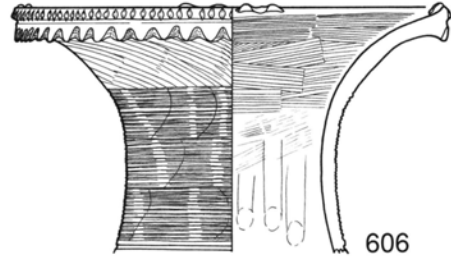
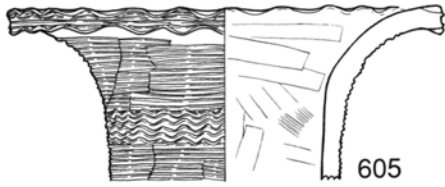


图61 S D 105 2層 (2)

(1/4)

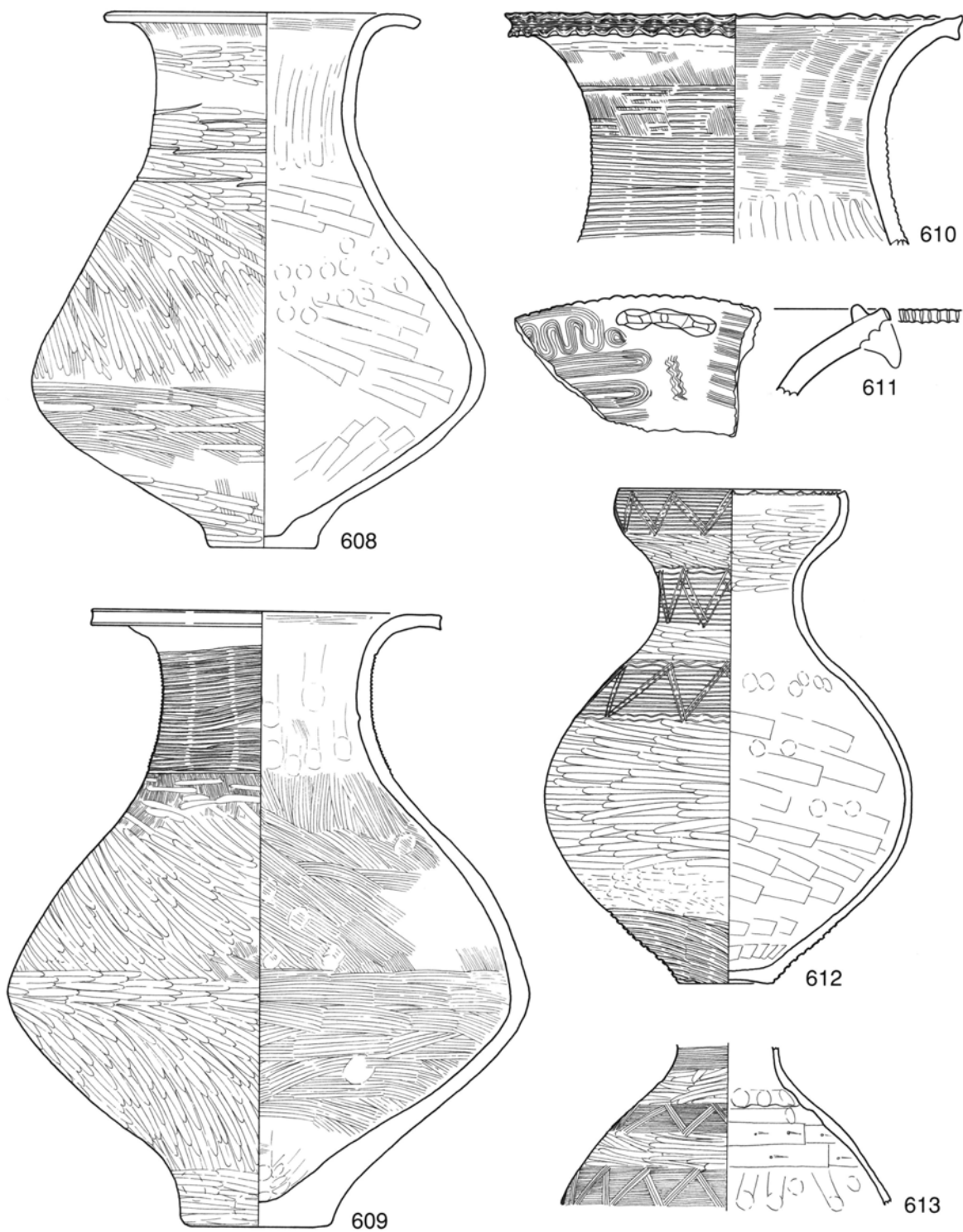


图62 S D 105 2层 (3)

(1/4)

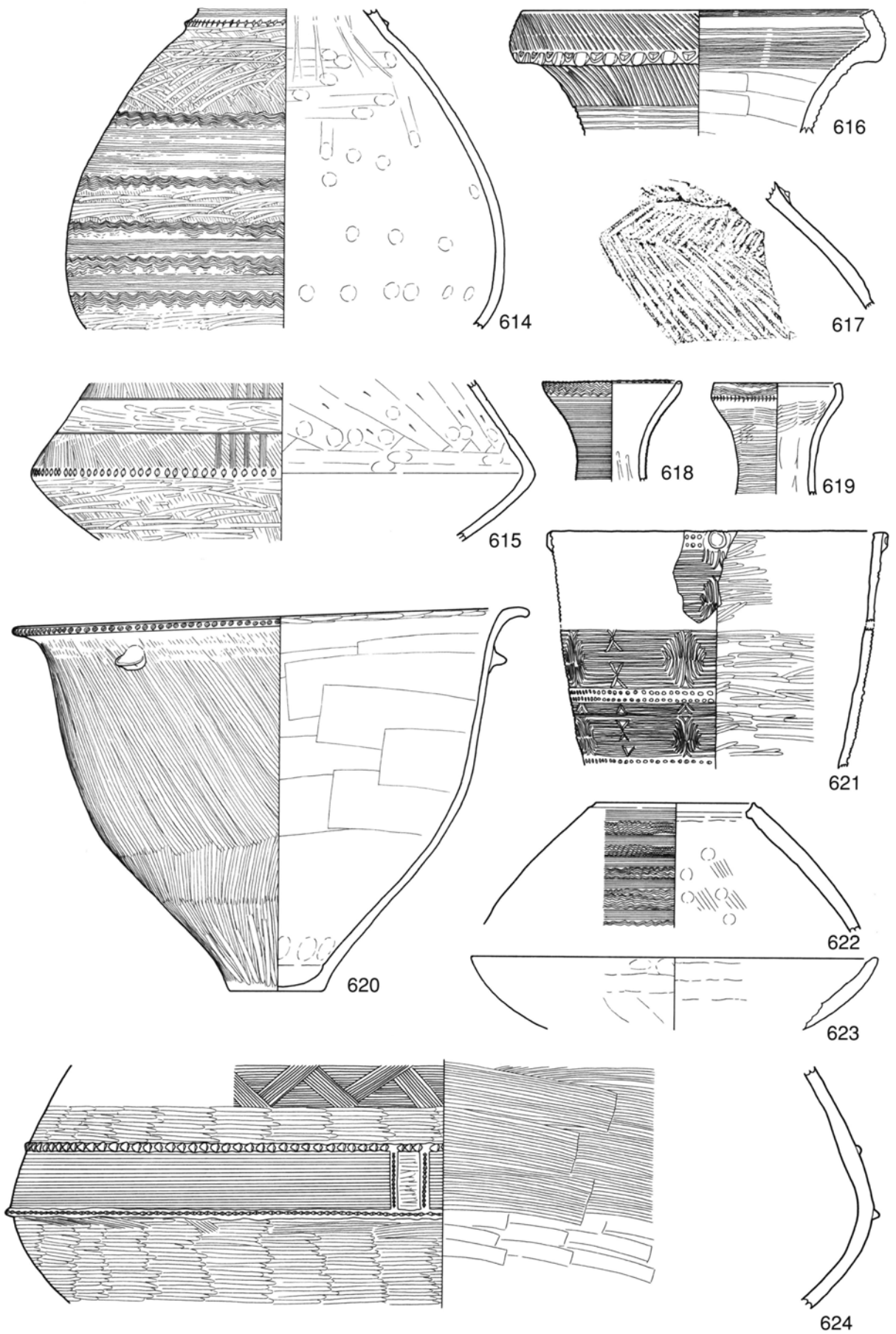


図 63 S D 105 2 層 (4)

(拓本は 1/3、他は 1/4)

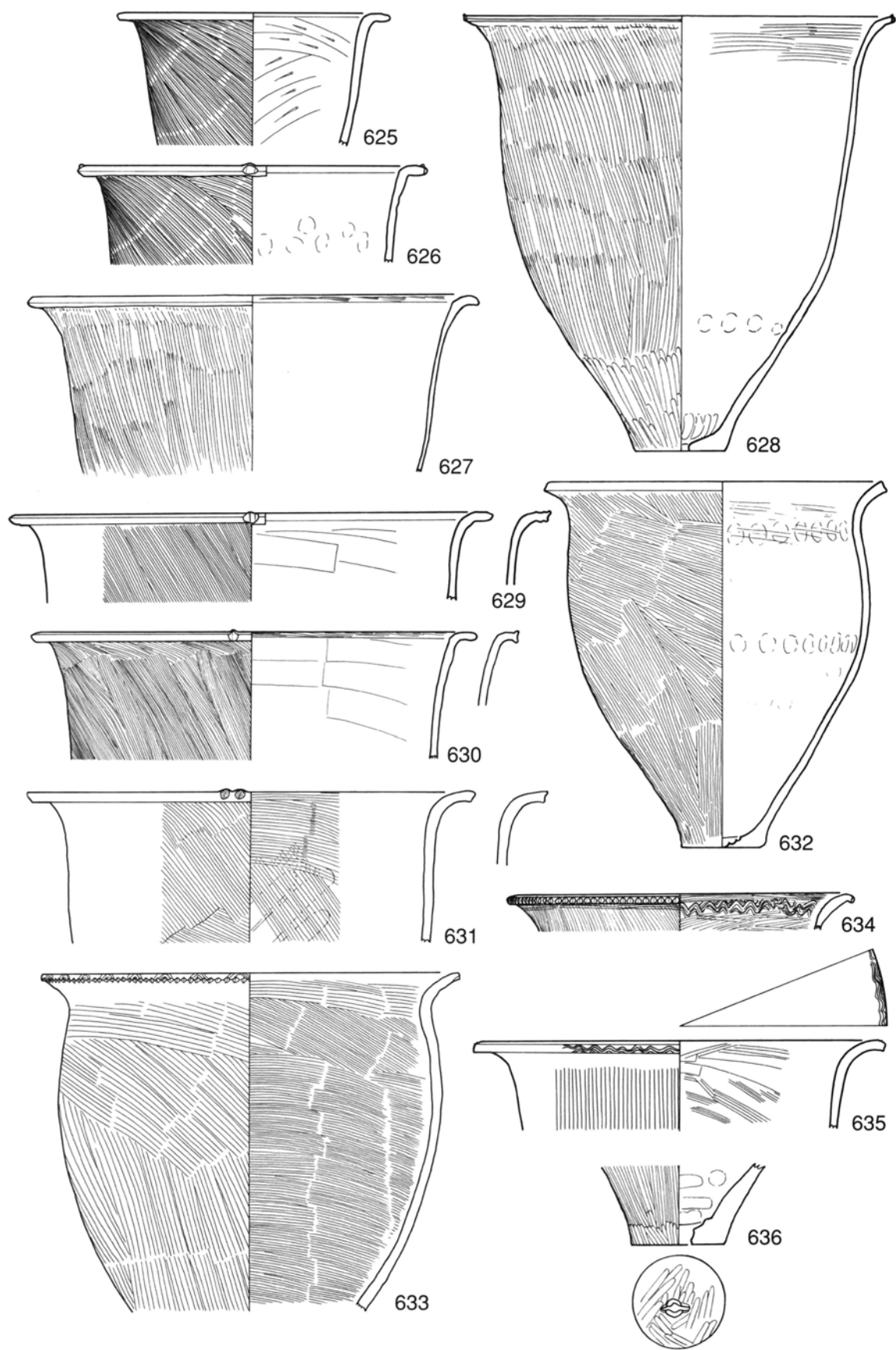


图64 S D 105 2层 (5)

(1/4)

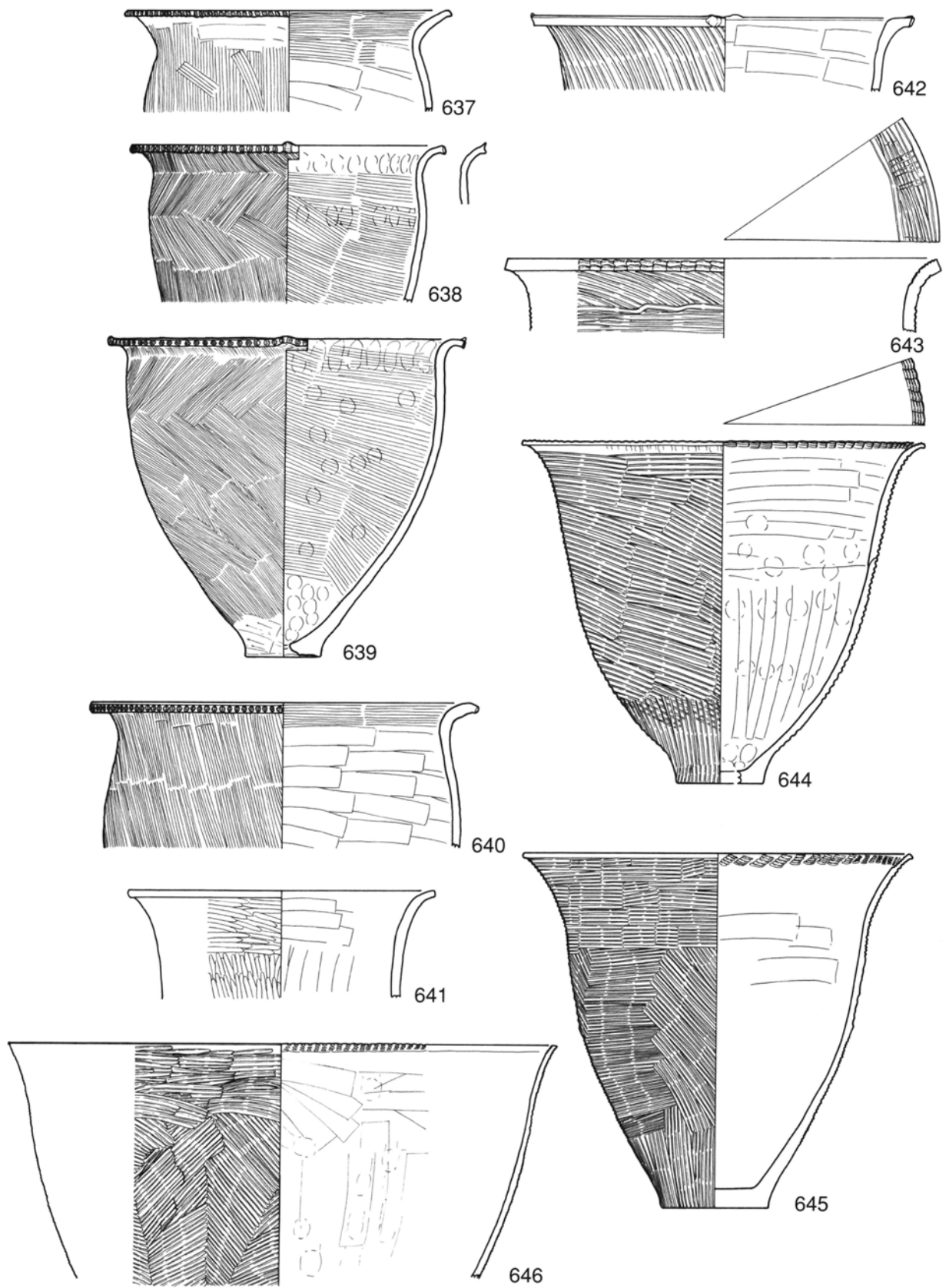


图65 S D 105 2層 (6)

(1/4)

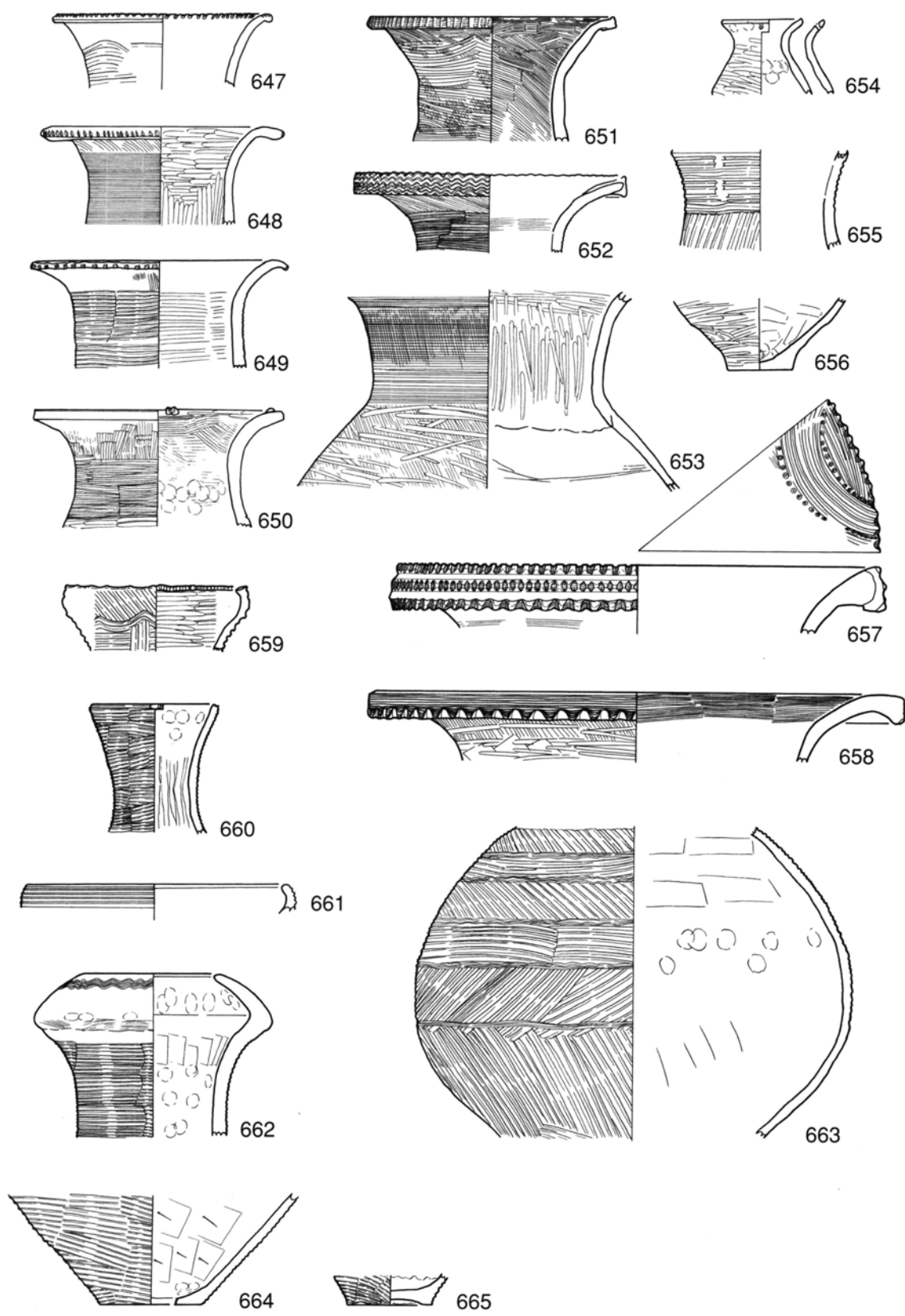


図 66 S D 105 1層ほか (1)

(1/4)

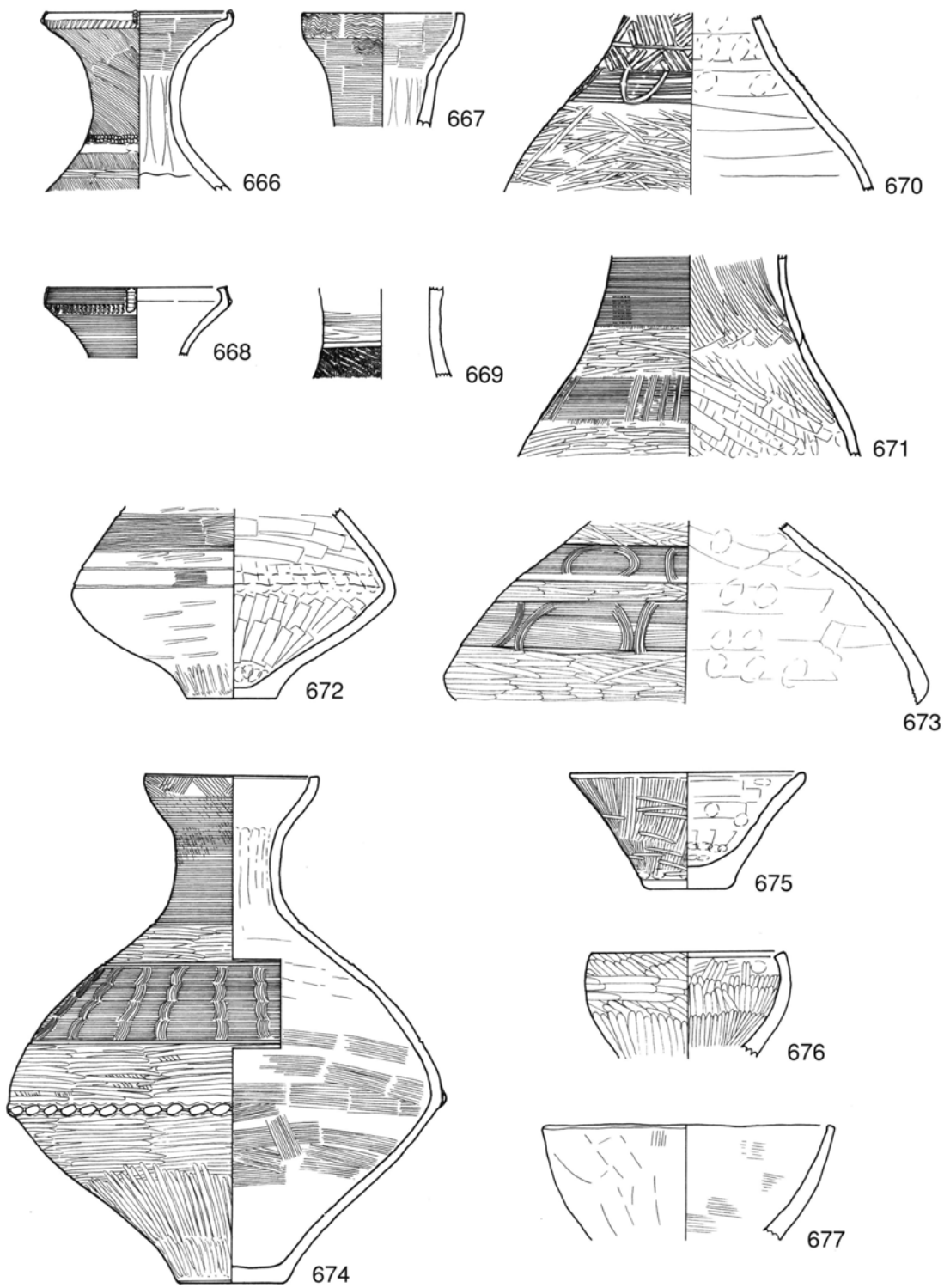


図67 S D 105 1層ほか (2)

(1/4)

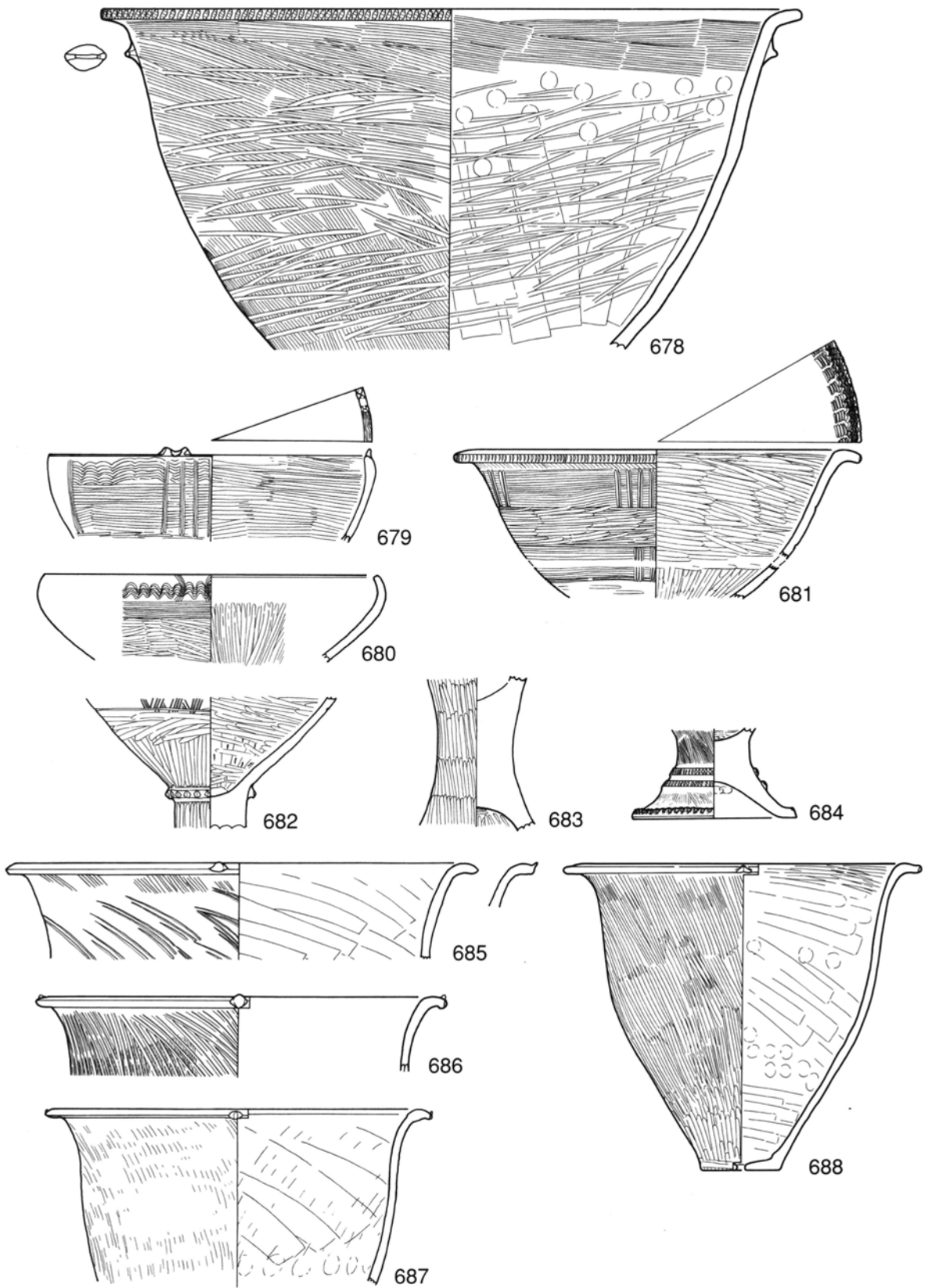
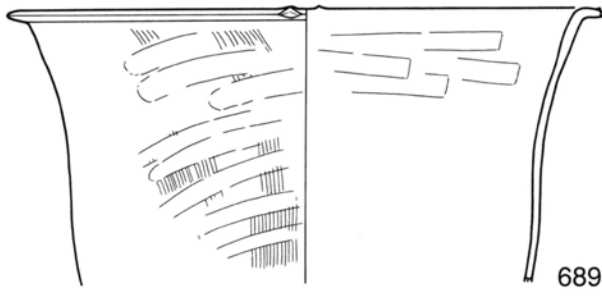
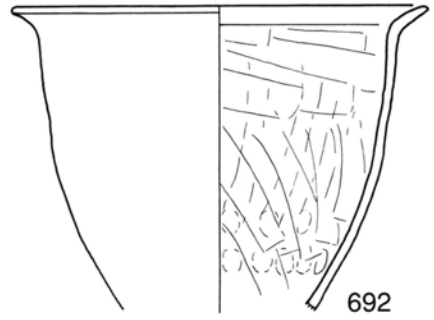


図68 S D 105 1層ほか(3)

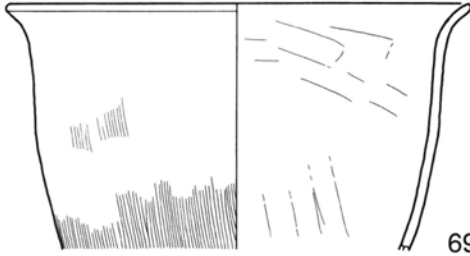
(1/4)



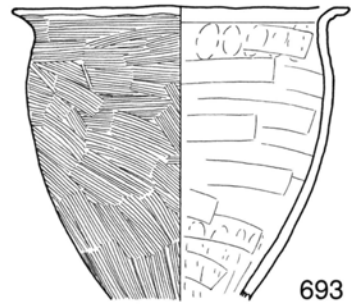
689



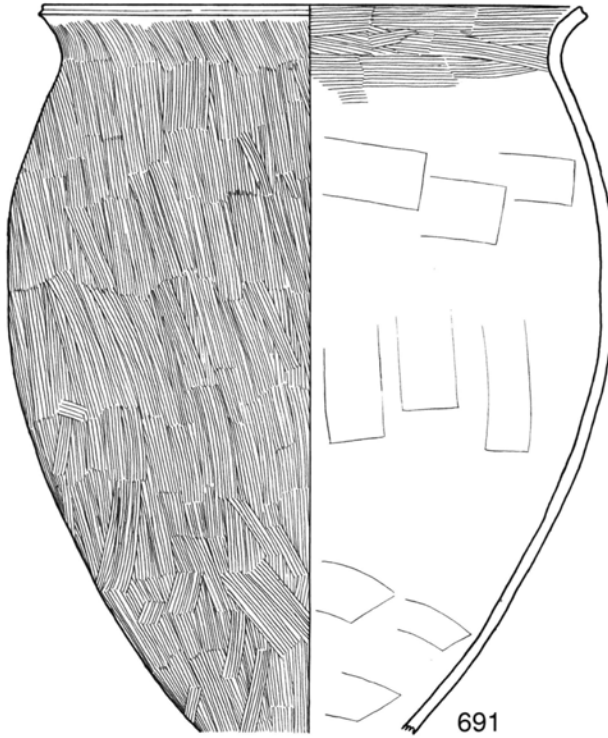
692



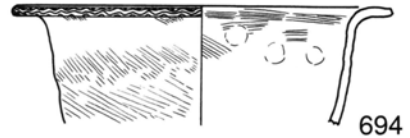
690



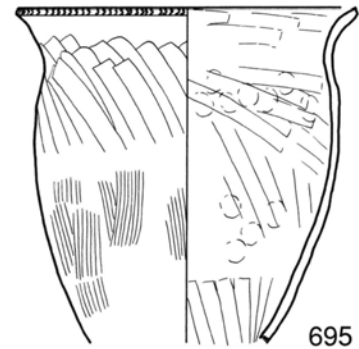
693



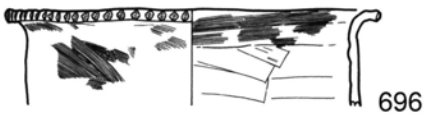
691



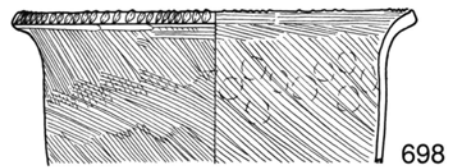
694



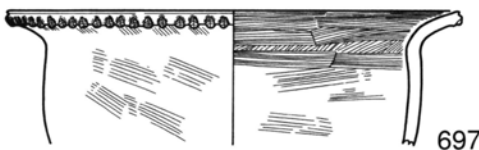
695



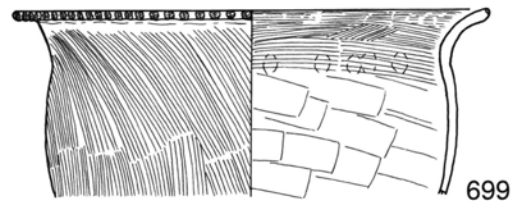
696



698



697



699

図 69 S D 105 1層ほか (4)

(1/4)

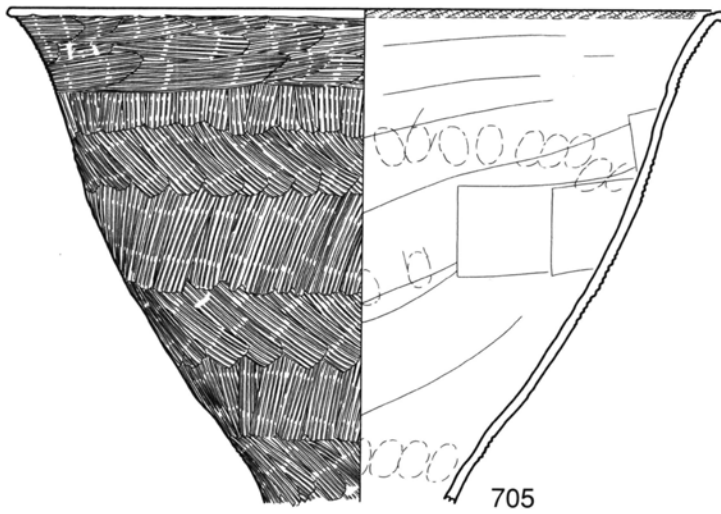
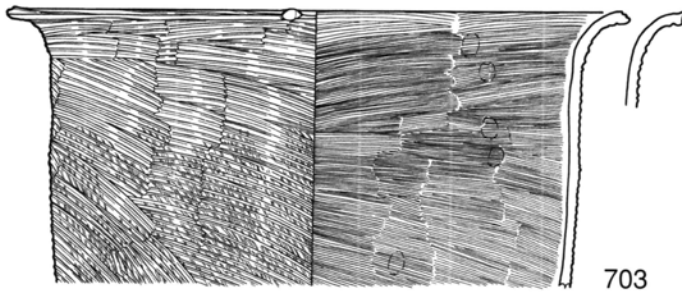
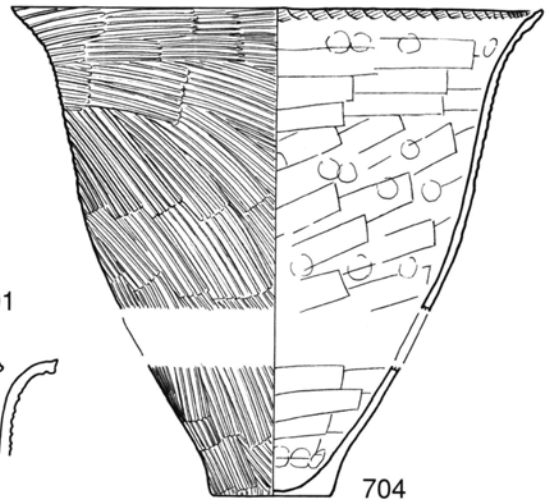
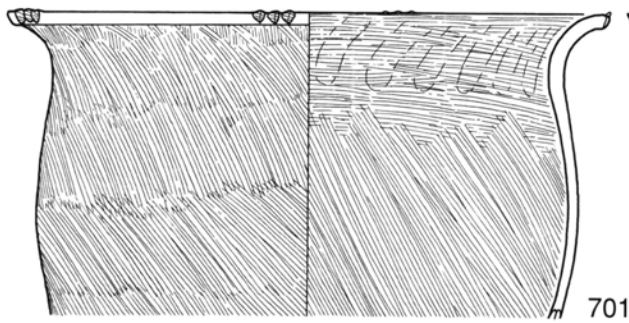
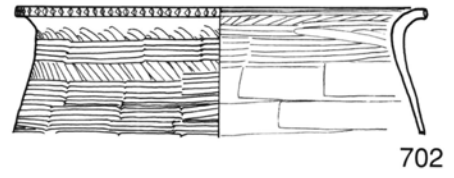
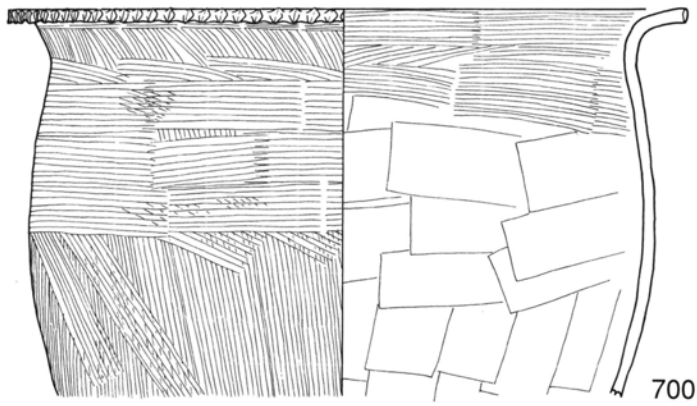


図70 S D 105 1層ほか (5)

(1/4)

(4) S D 40 (図71)

概ねⅢ～Ⅴ期の資料群。

706・707はⅠ系の壺。706は櫛状工具による直線帯が頸部に5帯、胴部上位に3帯以上施される。底部付近および底部にミガキ調整を行うが、全体的に粗雑な2次調整である。707は二枚貝腹縁による直線帯を4帯、その下位にハケメ工具による段をもつ。口縁端部にはハケメ工具?による横線を引いたのち、上下端に同一工具による連続刻みを入れる。708は沈線紋系土器(Ⅱ'系)。口縁部の瘤状突起は3ヶ所以上、突起部分につながる口縁端部には半截竹管状工具による縦位沈線が施される。口縁上端には半截竹管状工具による連続刺突がめぐる。口縁内面には瘤状突起を境として半截竹管状工具による重弧紋、その下位には同一工具による連続刺突をめぐらせる。頸部にはヘラ描沈線帯が4条以上めぐり、口縁部周辺には煤・ヨゴレが付く。709はⅠ系の甕で、左上がりの二枚貝腹縁による斜位条痕。710～717はⅣ期以降の資料。710・711はⅠ系の細頸壺。710は頸部にめぐり付加沈線間を帯状に赤彩する。712はⅡ系の細頸壺。口縁部を欠く。施紋は二枚貝腹縁による横位直線帯と左上がりの斜位条痕を地紋に、ヘラ描沈線を6条めぐらせる。その間を上位から羽状紋、2条1単位の縦位平行線、羽状紋、連弧紋、2重の連弧紋を配し、胴部には連環状弧紋と弧紋間に4条の沈線を充填させる。弧紋はいずれも7単位ある。そして胴部の連環状弧紋のうち1ヶ所に赤彩を充填させる。713は台付鉢の脚部か? 715・717はⅠ系のハケ甕。716はⅡN系の深鉢。底部に布目圧痕。

(5) S K 110 (図72)

概ねⅢ～Ⅳ期の資料群。

718はⅠ系の壺。口縁内面に板状工具による連

続刺突がめぐる。721はⅡ系の壺。胴部中位から底部にかけて二枚貝腹縁による条痕を施し、胴部中位に左上がりの斜位条痕、これに対してヘラ描による3条1単位で右上がりの沈線を引き、斜格子紋状となる。720はⅠ系の鉢。721・722はⅠ系の条痕甕。723・724はⅠ系のハケ甕。725はⅡN系の祖形深鉢か?

(6) その他の遺構 (図73・74)

726・727はS D 39、いずれもⅠ系の壺。726は頸胴部界にハケメ工具による段を作り出す。二枚貝腹縁による頸部直線帯は4帯、胴部は2帯めぐり、728・729はS D 38。728はⅡ系の壺。729はⅠ系の甕。730はS D 36、Ⅰ系の細頸壺。口縁部は内側に短く屈曲させ受口状口縁をなす。その端部には刻み目がめぐる。口縁から頸部にかけて櫛状工具による直線帯を7帯めぐらす。間隔において胴部には櫛状工具による直線帯を6帯めぐらし、その上を縦列に弧状区画紋を加える。胴部最大径には刻目突帯が1条めぐり、731はS D 37、Ⅰ系の細頸壺。紋様帯を区画する付加沈線はみられない。732～734はS K 106。732はⅠ系の細頸壺。付加沈線研磨手法と部分赤彩がみられる。733はⅠ系の無頸壺。口縁下に2孔1対の穿孔がみられる。いずれもⅣ期と思われるが、遺構の主体がⅡ～Ⅲ期のためここで取り上げた。734はⅠ系の鉢。735はS D 41。Ⅰ系の壺、胴部上位に焼成後穿孔ではあるものの、隅丸方形に穿ち、破面を研磨する円窓付土器。736はS K 107、横長の瘤状突起をもつ甕。737・738はS K 108。いずれもⅠ系で、737は頸部と胴部に櫛状工具による直線帯をめぐらし、頸部直線帯上に刻目突帯をもつ壺。一方、737はヘラ描沈線による羽状紋をもつ鉢。739はS K 109、Ⅰ系の条痕甕。740・741はS D 107。740はⅠ期の貝殻山B類の壺。741は二枚貝腹縁による直線紋と波状紋を交互に配するⅠ系の鉢。742は

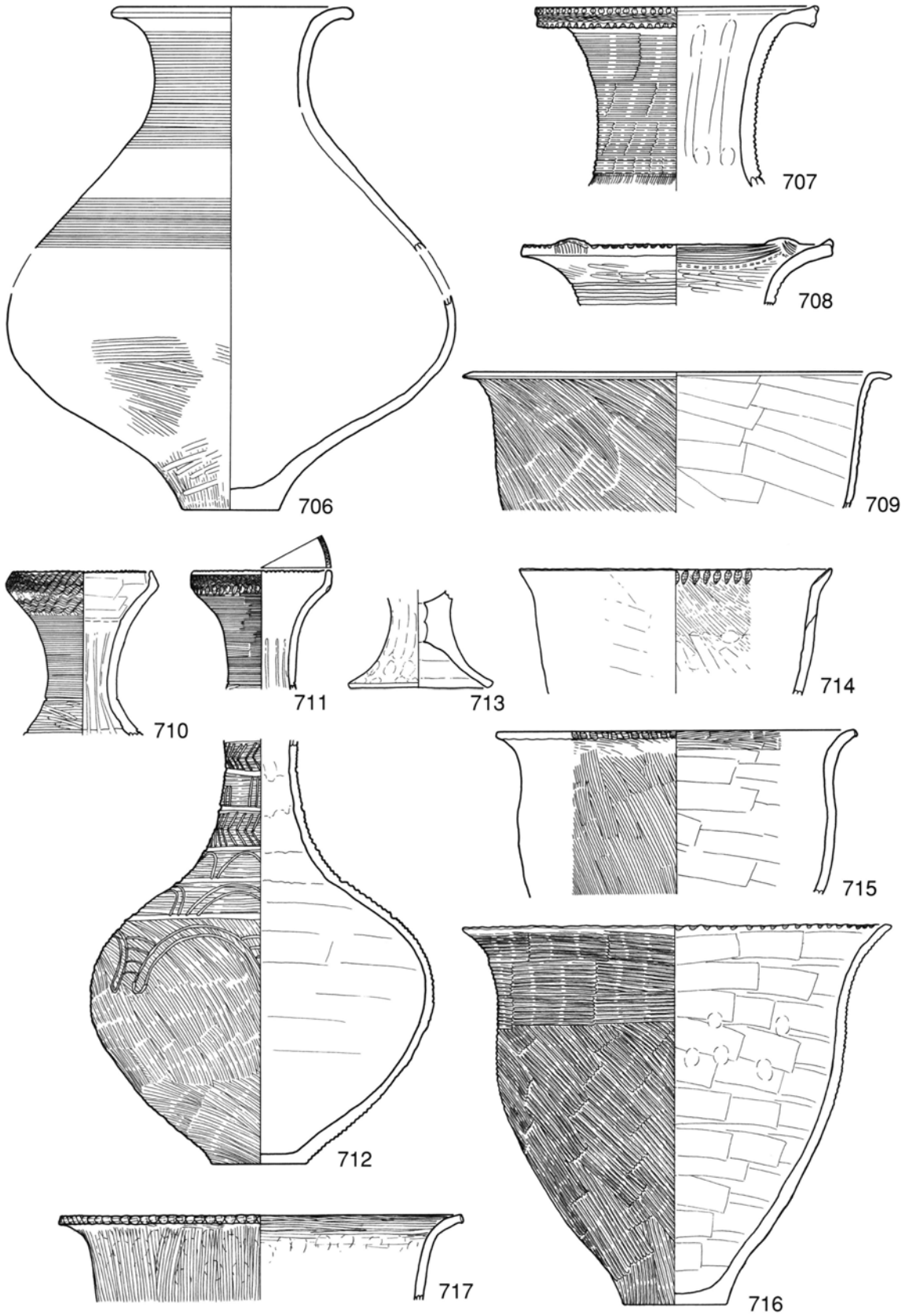


图71 SD 40

(1/4)

S K 112、粗雑な作りながら I 系の壺。743・744 は S K 109。743 は II 系の細頸壺。744 は I 系の壺。745・746 は S K 114、いずれも I 系。746 は胴部上位から中位にかけて二枚貝腹縁による直線帯が 3 帯めぐる。IV 期以降の器形と紋様構成をもつが、工具が二枚貝腹縁である点、IV 期には下らない。

(7) 土器棺資料 (図 75)

747 は S K 111、口縁部を欠く I 系の壺。頸胴部界にハケメ工具により段を作り出す。底部付近は摩耗が著しく丸みを帯びる。748・749 は S K 113。I 系の壺底部が棺蓋 (748)、II 系の壺胴部 (749) が棺身に相当する。

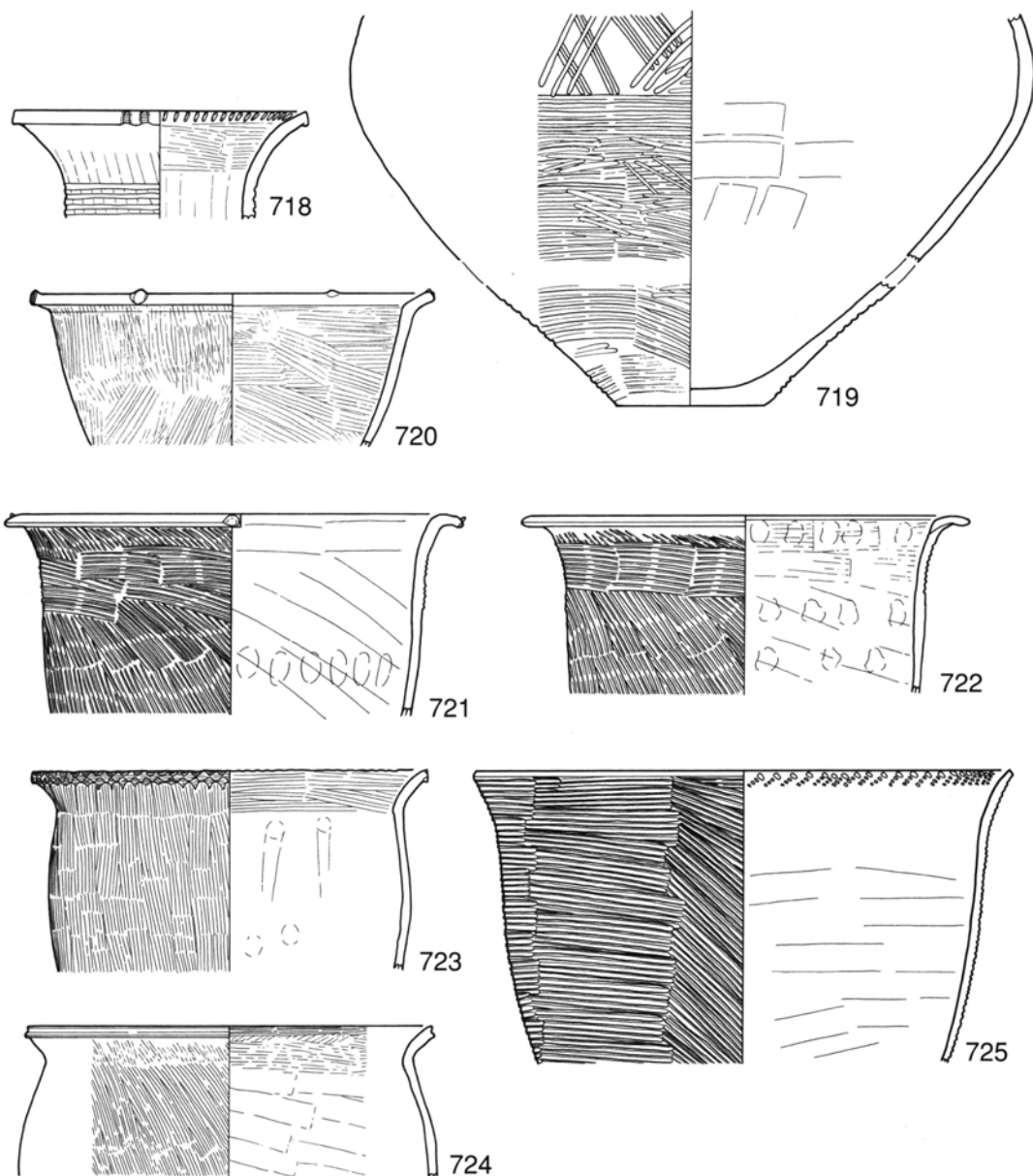


図 72 S K 110

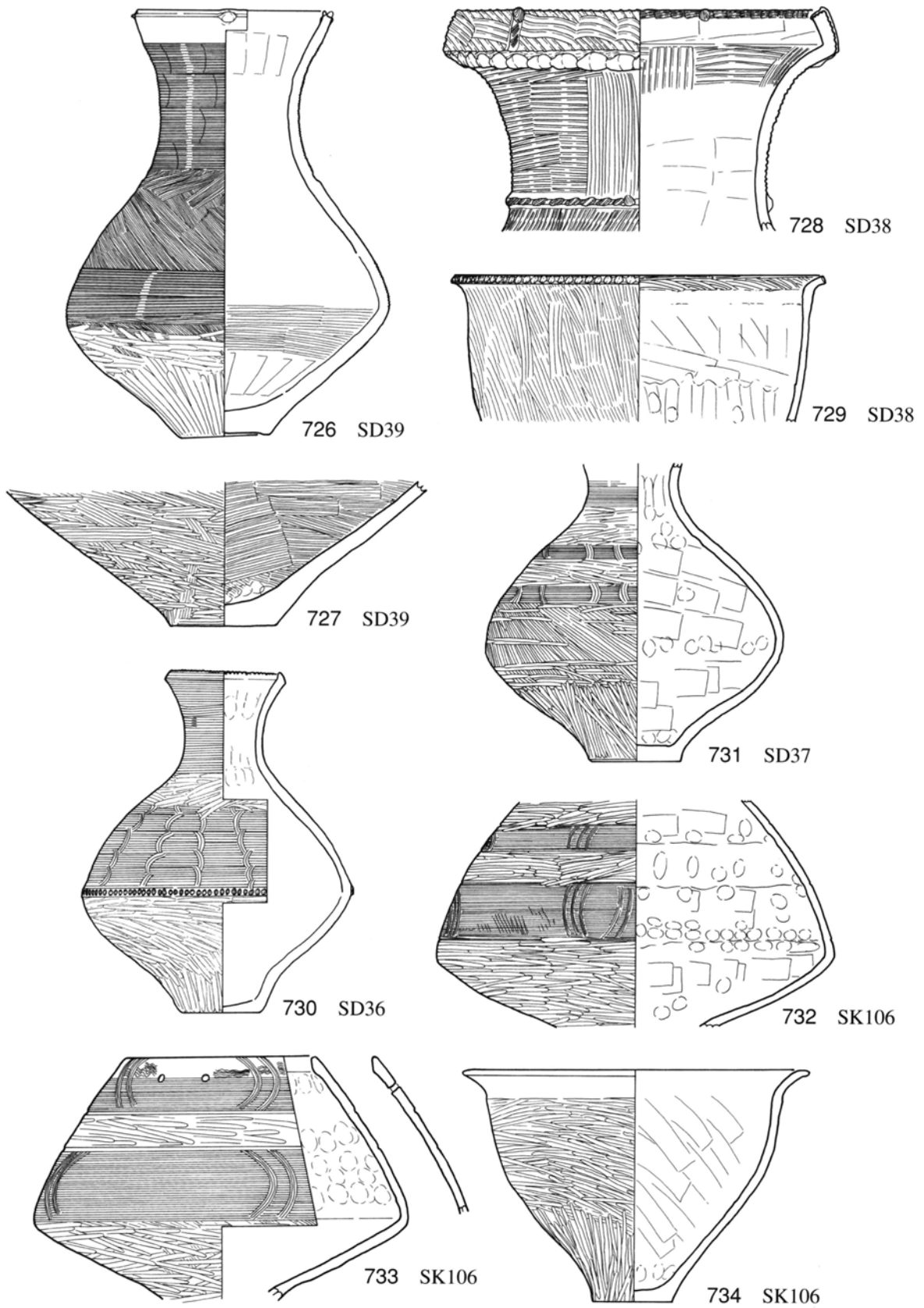


図 73 95 II・III期の各遺構

(1/4)

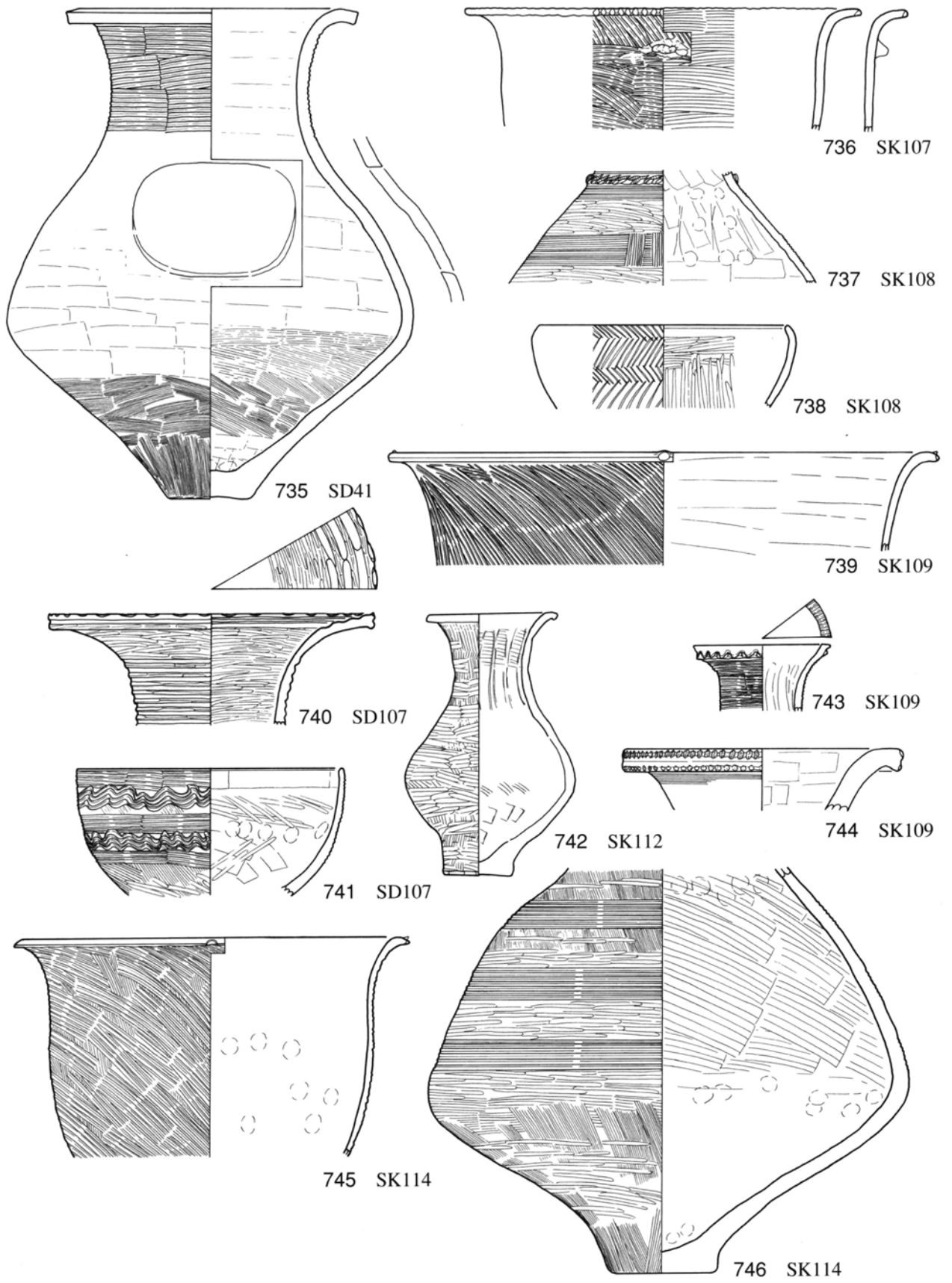
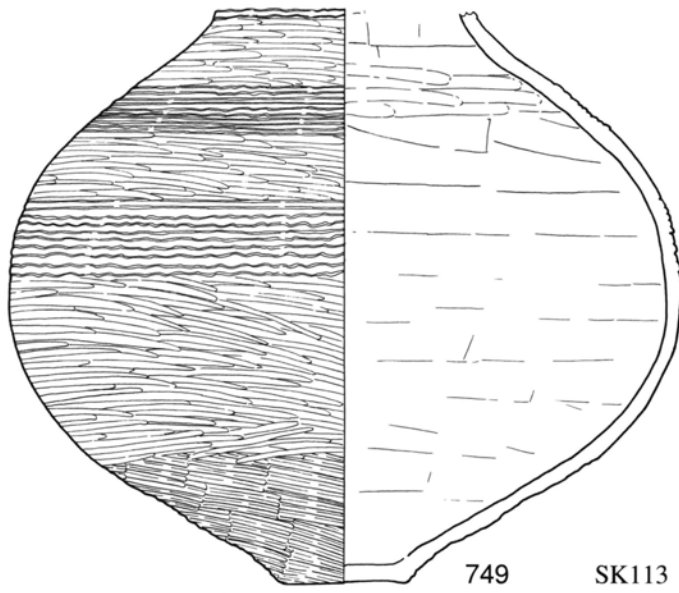
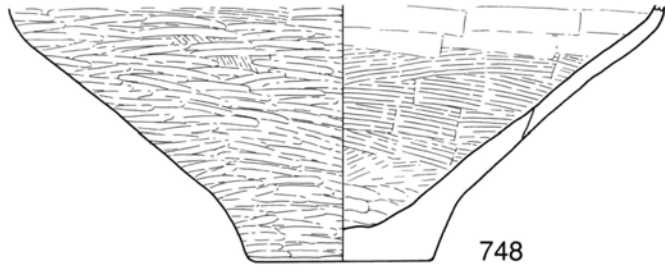
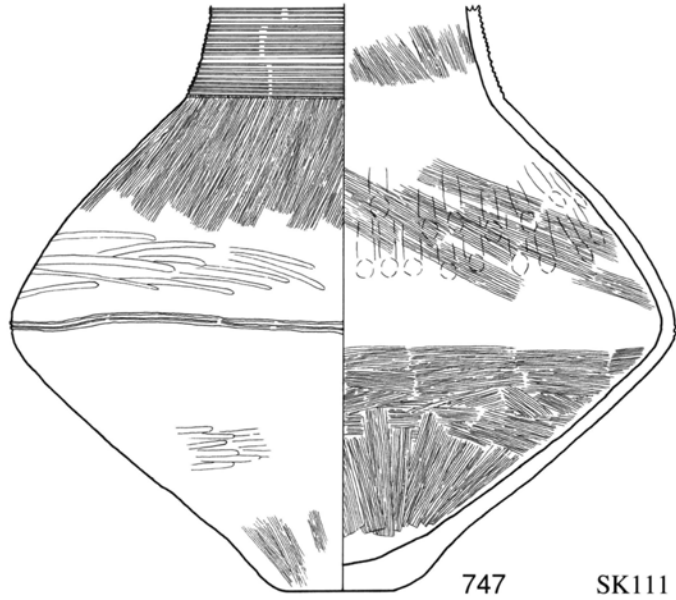


図74 96 II・III期の各遺構

(1/4)



☒ 75 SK 113 • SK 111

(1/4)

(8) 包含層出土 (図 76 ~ 80)

750 は I 系の壺、紋様はすべて二枚貝腹縁による。751 は I 系の壺、頸部に 2 条の突帯がめぐり、その上に X 字状の連続刻みを加える。胴部上位には縄紋を施す。伊勢湾西岸産か? 752 は I 系の壺。頸部には二枚貝腹縁による 6 帯の直線紋帯、口縁端部には二枚貝腹縁による横線を引き、口縁上下端には貝殻背面押圧を加える。753 は II 系の壺。口縁外面にヘラ描の斜格子紋、頸部にハケメ工具による羽状刺突がめぐる。754 は II 系の受口状口縁をもつ壺。口縁部に羽状紋、頸部にハネアゲ紋、胴

部に横位羽状条痕を施す。口縁端部に指腹押圧をめぐらす。755 は付加沈線研磨技法をもつ。3 帯の紋様帯はヘラ描沈線の羽状紋がめぐる。756 は II 系の壺。二枚貝腹縁による横位条痕とその下位に斜位条痕を行った後、横位条痕の上に山形紋、その下位に横線区画紋を配する。いずれも半截竹管状工具による施紋。757 は II 系の深鉢。半截竹管状工具による波状紋と横位直線線紋が 2 条めぐる。758 は I 系の無頸壺、2 孔 1 対の穿孔が見られる。櫛状工具による流水紋?、その間を竹管状工具の刺突列で埋める。759 は I 系の鉢。櫛状工具による直線紋 + 波状紋 + 直線紋がそれぞれ 2 帯

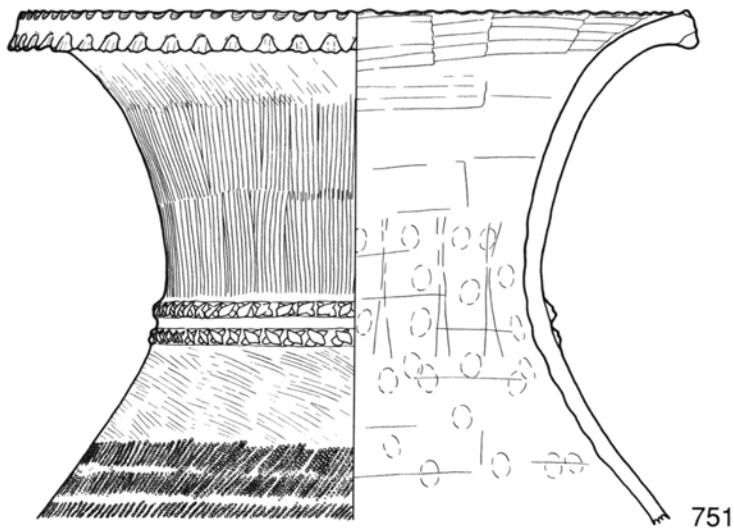
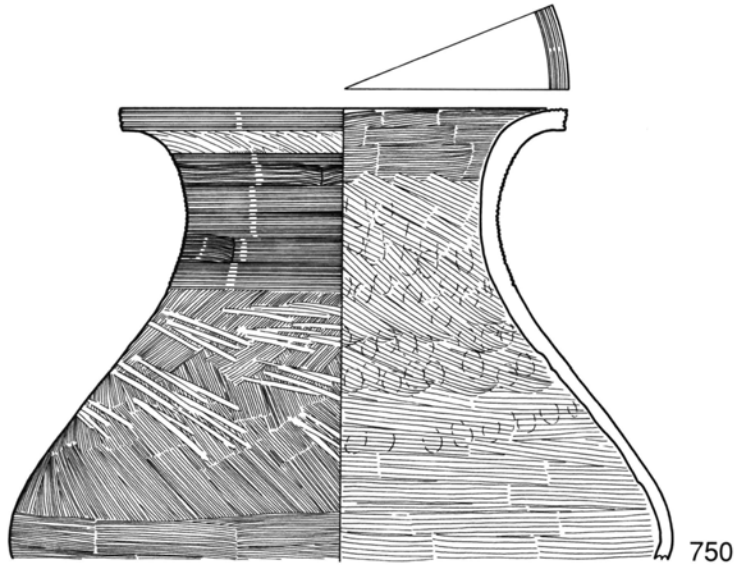


図 76 95 II・III 期包含層 (1)

1組でめぐる。760・761は口縁部内面に段を有するI系の壺。760は口縁内面に3孔1単位の焼成前穿孔がある。761の口縁部周辺の紋様は、口縁内面に櫛状工具による縦型流水紋、口縁端部を櫛状工具による直線紋とハケメ工具による上下端刻

みを加える。頸部は二枚貝腹縁の直線帯が9帯、その下位に櫛状工具による刺突を加える。頸胴部界・胴部上位・胴部最大径の位置にハケメ工具による押圧を施した突帯が3～4条めぐる。この間を櫛状工具による横位直線紋と縦位に6条1単位

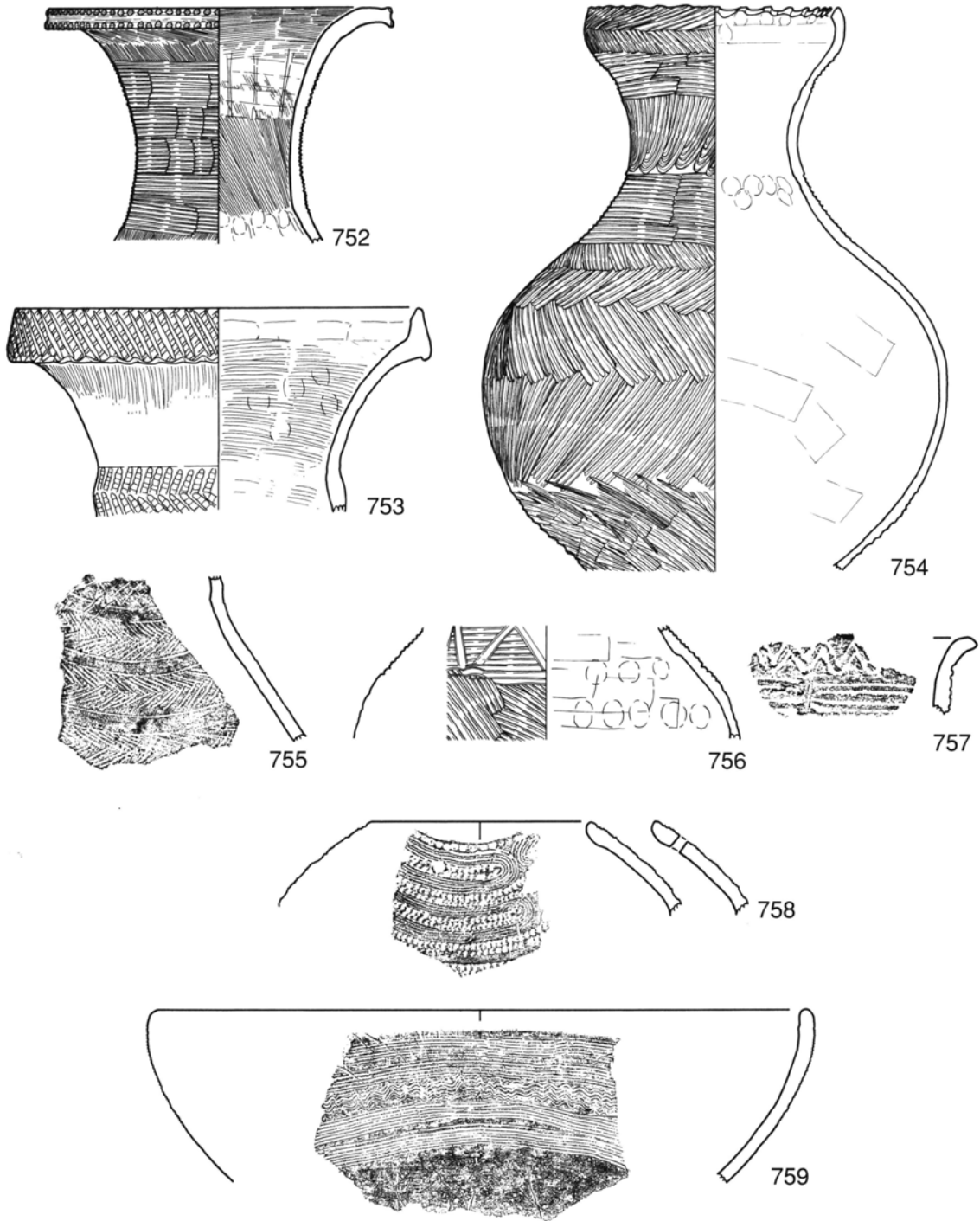


図77 95 II・III期包含層(2) (拓本は1/3、他は1/4)

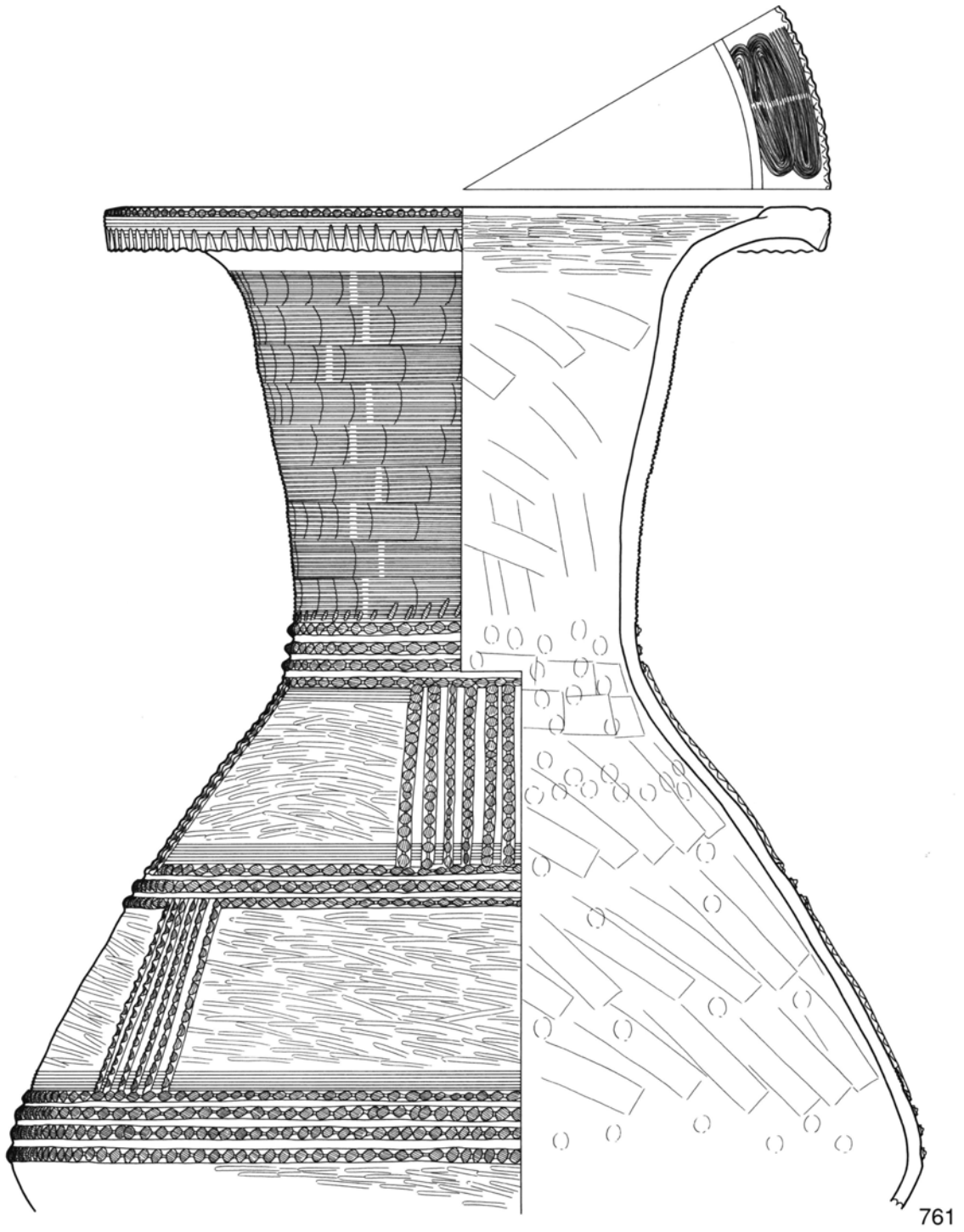
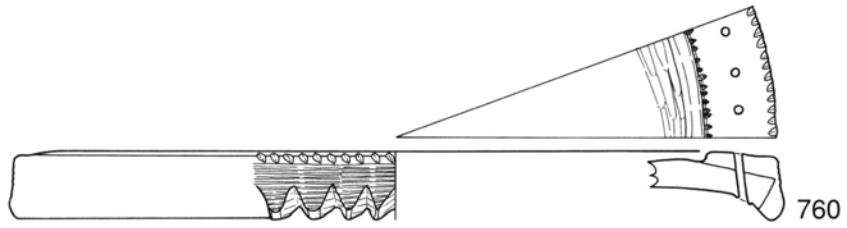


图 78 96 II · III 期包含层 (1)

(1/4)

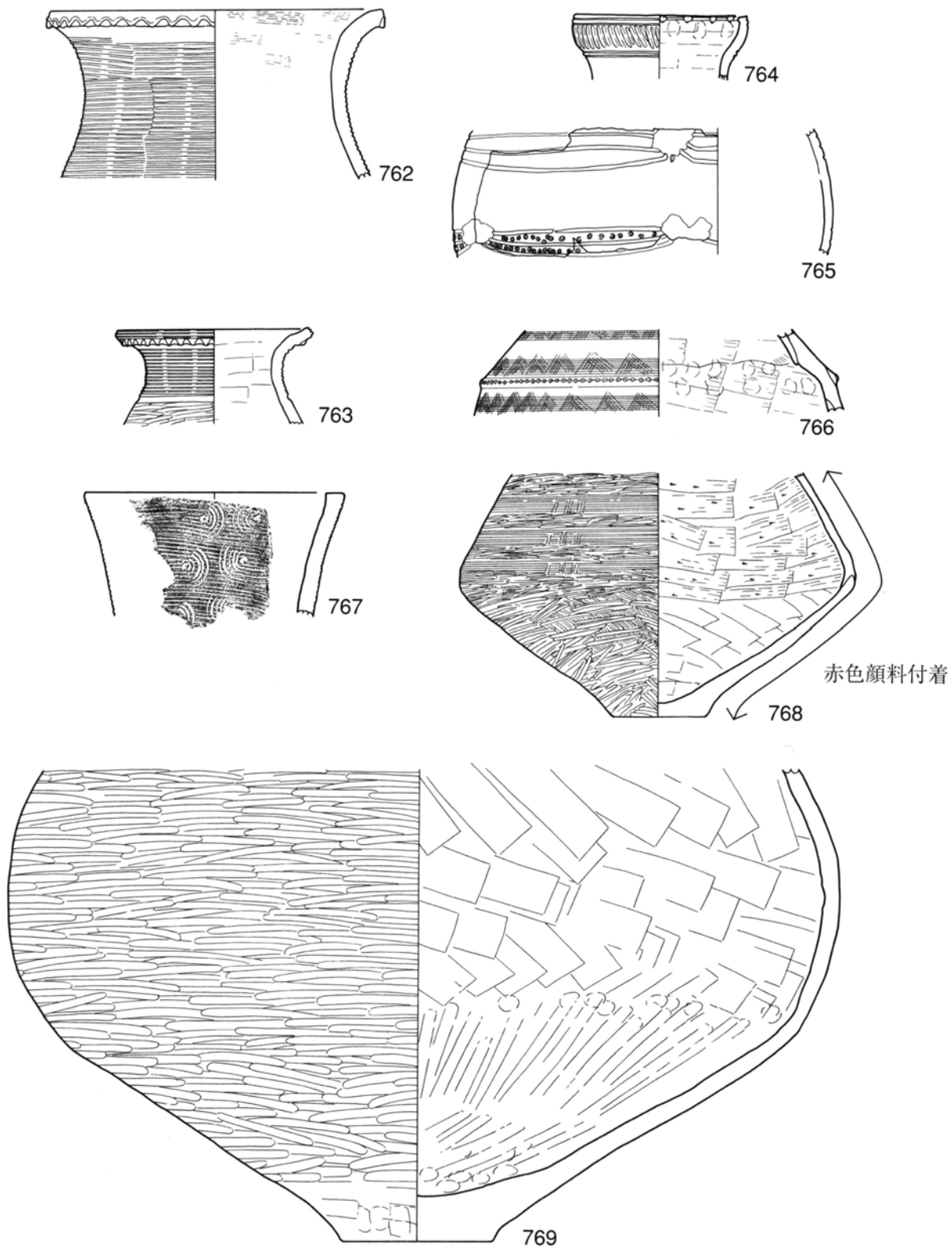


図 79 96 II・III期包含層 (2)

(拓本は 1/3、他は 1/4)

のハケメ工具による押圧を施した突帯が埋める。さらに施紋後、無紋部分をミガキ調整する。762は口縁部が短く外反する I 系の壺。口縁部下端に指腹押圧がめぐる。頸部には二枚貝腹縁による直線帯が施される。763は頸胴部界に太描沈線をもつ I 系の壺。764は受口状口縁を有する II 系の壺。口縁部内面に指先による刺突が間隔をもって配される。765は沈線紋系土器。胴部に瘤状突起が 2 段配され、その間を不揃いな弧状紋を施す。沈線間には竹管状工具による刺突紋で埋める。外面に煤・ヨゴレが強く付く。766は胴部に稜をもつ特殊な器形の壺。『朝日 V』(第 187 図 2377~2379)に類似例がある。稜部に刻目突帯をもち、その上下には櫛直線の上に櫛山形紋が施される。767は口縁部が直線的にのびる器形の I 系の細頸壺。櫛

直線紋に扇形紋を加えた擬流水紋を施す。768は内面に赤彩あるいは赤色顔料が付着する。769は I 系の壺底部。770は I 系の甕。外面は二枚貝腹縁による調整ではなく、紋様か? 771は口縁部が短く屈曲する鉢。付加沈線によって区画された櫛描直線紋が 5 帯めぐり、口縁部に近い 1 帯を除き他の 4 帯は縦方向の棒状浮紋が 2 本 1 単位、さらに櫛描弧状区画紋が加えられる。口縁部内面には櫛状工具による羽状刺突がめぐる。頸部には 2 孔 1 対の焼成前穿孔をもつ。772はヘラ描流水紋をもつ鉢。器形が船形を呈する。773は片口の鉢。内外面に赤彩を施す。ヘラ描流水紋を施す。774は高坏の脚部。器面全面にわたり縦型流水紋が施される。

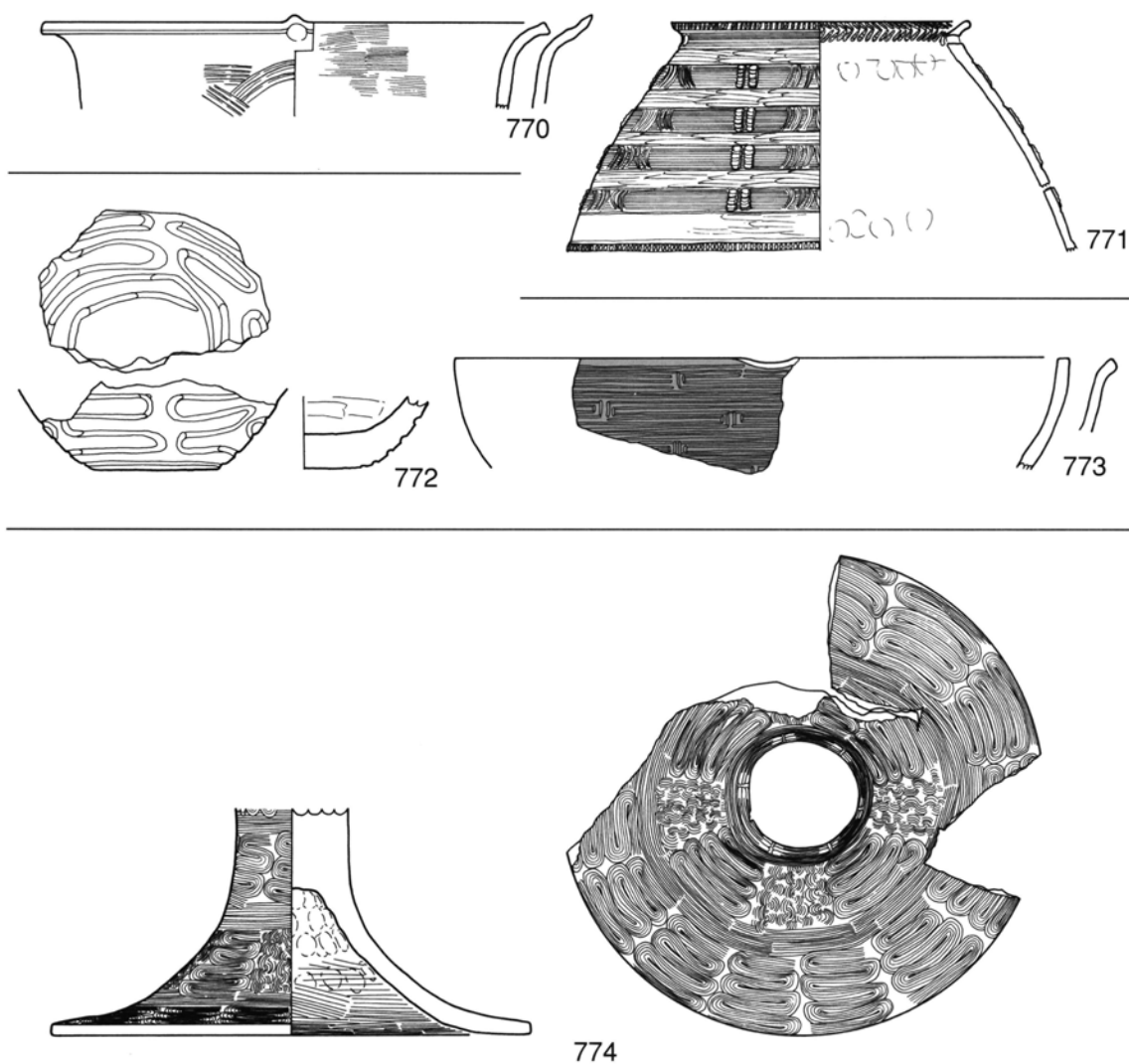


図 80 96 II・III 期包含層 (3)

(772・773 は 1/3、他は 1/4)

4. IV・V期

(1) S D 103 (図 81 ~ 88)

層位は大きく上層・下層の2層に分かれ、上位から下位に提示する。

A. 95 S D 113・120 上層 (775 ~ 810)

775はI系の壺の底部、外面が摩滅する。776はI系の壺。口縁部内面の板状工具による2段の三角列点紋以外の施紋は二枚貝腹縁による。口縁内面端の円周4分割の位置に瘤状突起が位置する。長面を指で摘み貼り付ける。口縁端部は波状紋、頸部の直線帯は4帯以上めぐる。口縁内面施紋は端部側から貝殻背面による連続押圧、直線紋、三角列点紋の順に配する。777はI系の壺の底部。底部外面に糊圧痕が残る。778はI系の高坏脚部。脚部上位にはへら状工具による沈線が8条めぐる。脚の裾部にはへら状工具による沈線が2条めぐる。779はI系の細頸壺。沈線+磨消帯系列。780はI系の単頸壺。口縁部下端に刻みがめぐる。頸部から胴部上位に5帯の櫛直線、その下に櫛波状紋がめぐる。782はIV系のタタキ甕で、く字状に強く屈曲する口縁部は上端が折り返されるようになり、イタ刻みが2段になされる。体部外面の成形・調整は、口縁部外面のタタキ、体部上位のハケ→上位の横位タタキ→中位から下位の斜位タタキ→下位から中位のハケの順に行われる。783はII系の袋状口縁壺。半截竹管状工具に直線あるいは波状紋による区画の中に二枚貝腹縁の条痕を施す。口縁内面端に棒状工具による刺突が1ヶ所ある。784は小型の壺。口縁内面に櫛波状紋、頸部から胴部にかけて不揃いな櫛波状紋がめぐる。785はI系の壺、頸部から胴部上位にかけてへら状工具による沈線が9条以上めぐる。786は頸部を打ち欠いて可能性がある。底部外面に未貫通の焼成前穿孔がある。787と788は同一個体。円窓

付壺。789は、ハケ甕。口縁下端に刻みをめぐる。790は口縁部上下端を指腹で連続押圧するI系の壺。791は胴部中位にへら沈線を2条施し、その間をミガキ調整するI系の壺。792は頸部から胴部上位にかけて羽状沈線紋を施し、その上にへら沈線を7条以上加えるI系の壺。793は口縁端部と頸部に櫛状工具による連続刺突と胴部に沈線+磨消帯を施すI系の壺。口縁内面には円周4分割の位置にハケで押圧・接着させる浮紋が配される。794・795・797はI系の細頸壺。794は口縁下端と頸部にめぐる連続刺突は二枚貝腹縁による施紋。797は頸部に半截竹管状工具による連続刺突がめぐる。796はミニチュアの鉢。底部にへら押圧がある。外面全体にススが付着する。798は底部と胴部の接合面が明瞭に残る壺の底部。799は口縁上下端を指腹による連続押圧、頸部に櫛状工具による直線帯が9帯以上めぐるI系の壺。口縁内面に櫛状工具による波状紋が2帯めぐる。800・801はI系のハケ甕。801の口縁端部は指腹による連続つまみを加える。802はIV系のタタキ甕。803はII N系の深鉢。頸部に横位条痕、胴部に横位羽状条痕紋を施す。底部はおそらく布目圧痕を持つ。804~806はI系のハケ甕。804と806の刻みは口縁下端に入れる。807は胴部のハケ調整後、口縁部周辺に強い横ナデを行い、外面に頸部を作り出す。内面はおそらく貝殻腹縁を原体とする条線をめぐるせ、端部に櫛状工具による刻みを加える。808・810はIV系のタタキ甕。808は口縁部端面に刺突がなされ、体部外面上位から中位のハケ→横位タタキ→下位のハケの順に成形・調整される。810は、口縁部外面のタタキ→体部外面上位から中位の→上位の斜位タタキ→中位から下位の斜位タタキ→下位の斜位タタキ→下位のハケの順に行われる。809は鉢で外面にスス、内面に有機

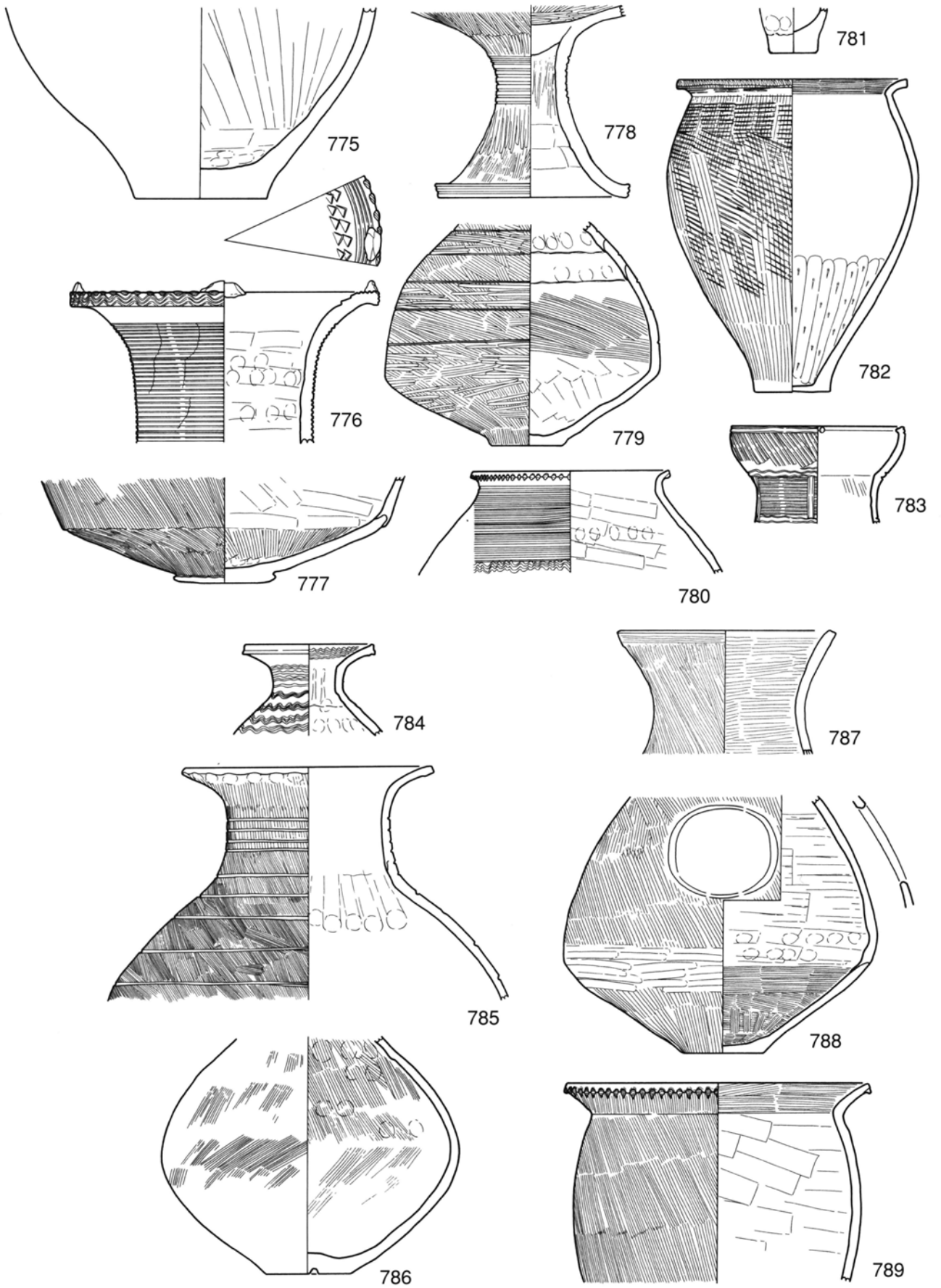


图81 S D 103上層 (1)

(1/4)

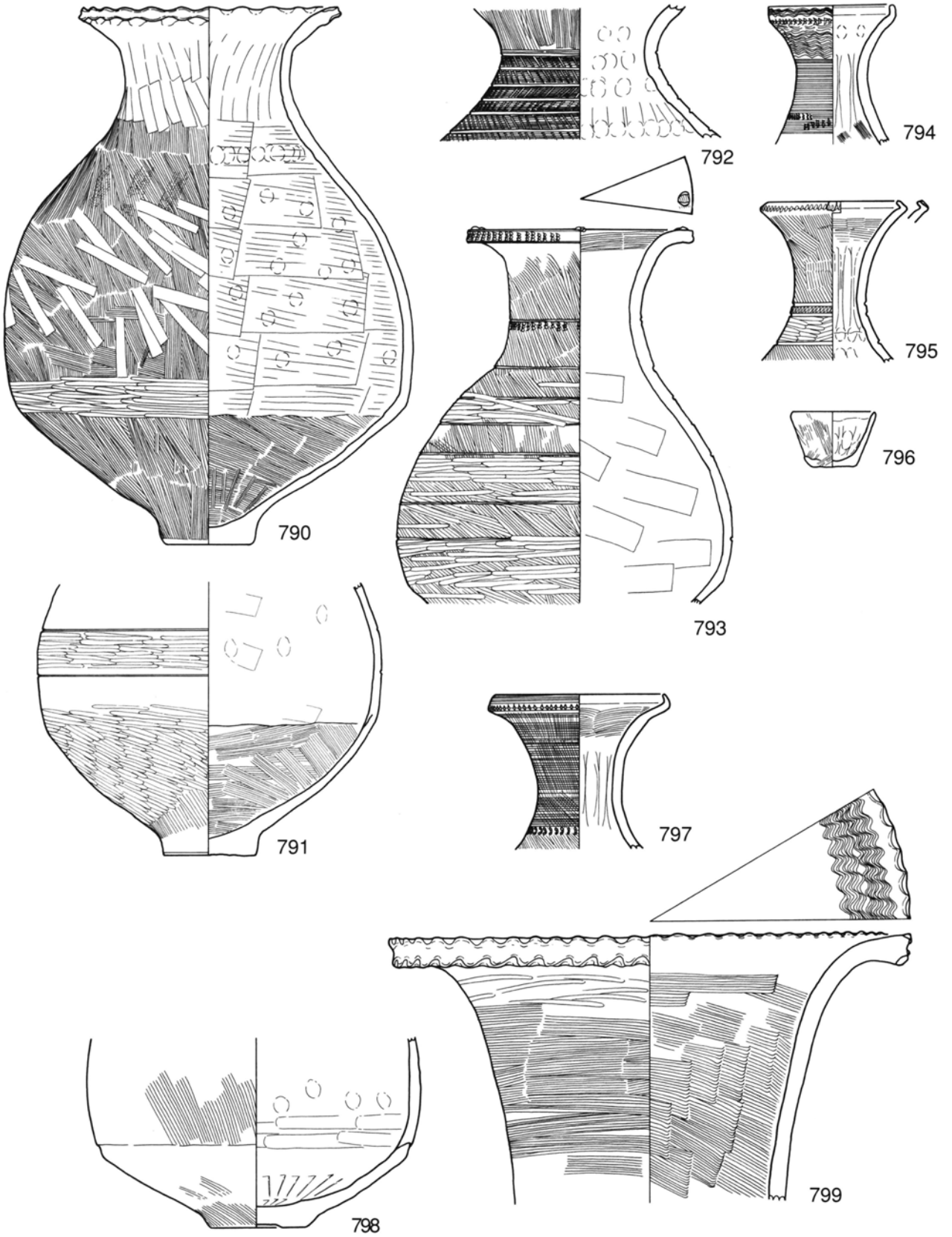


图82 S D 103上層 (2)

(1/4)

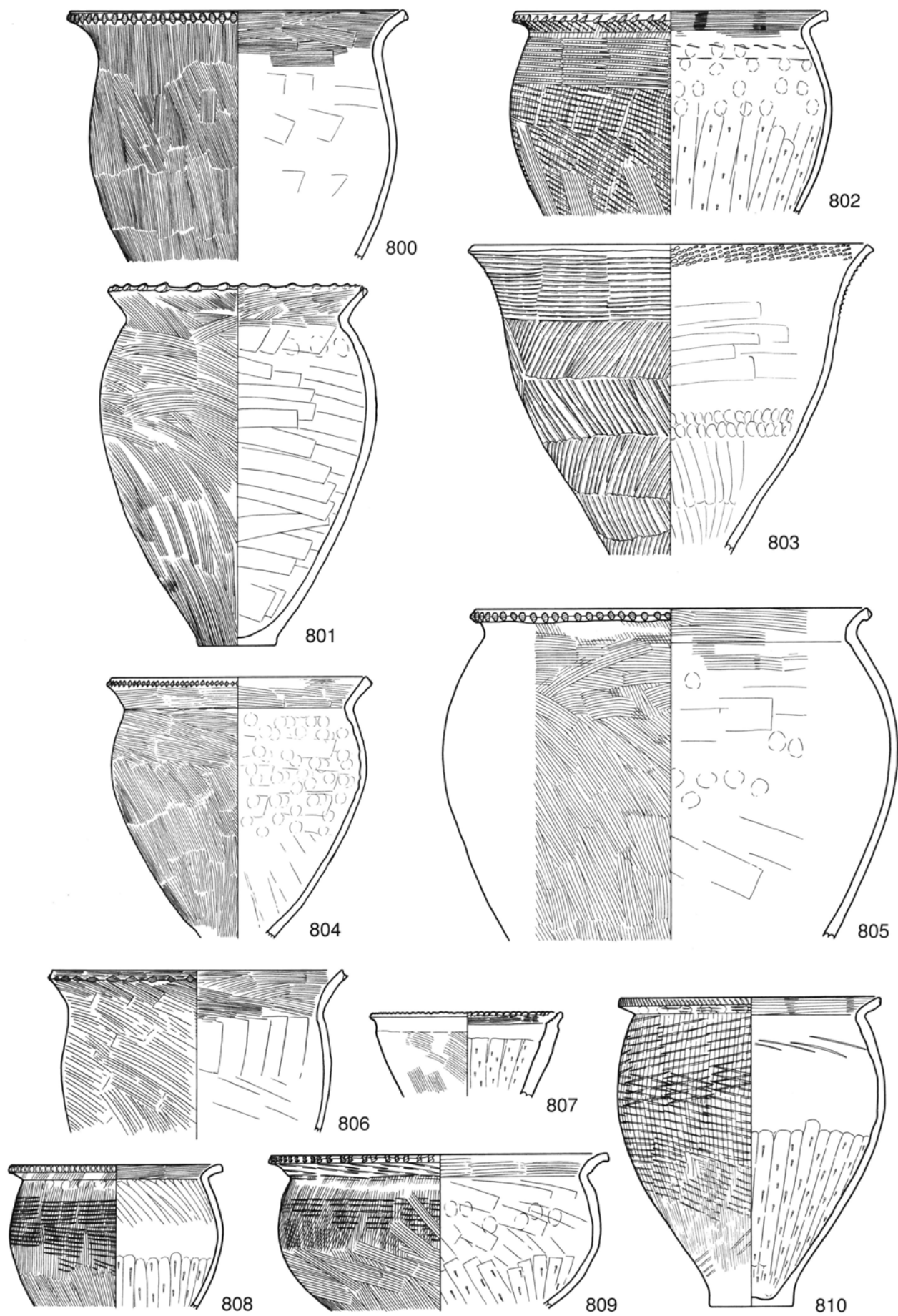


图 83 S D 103 上層 (3)

(1/4)

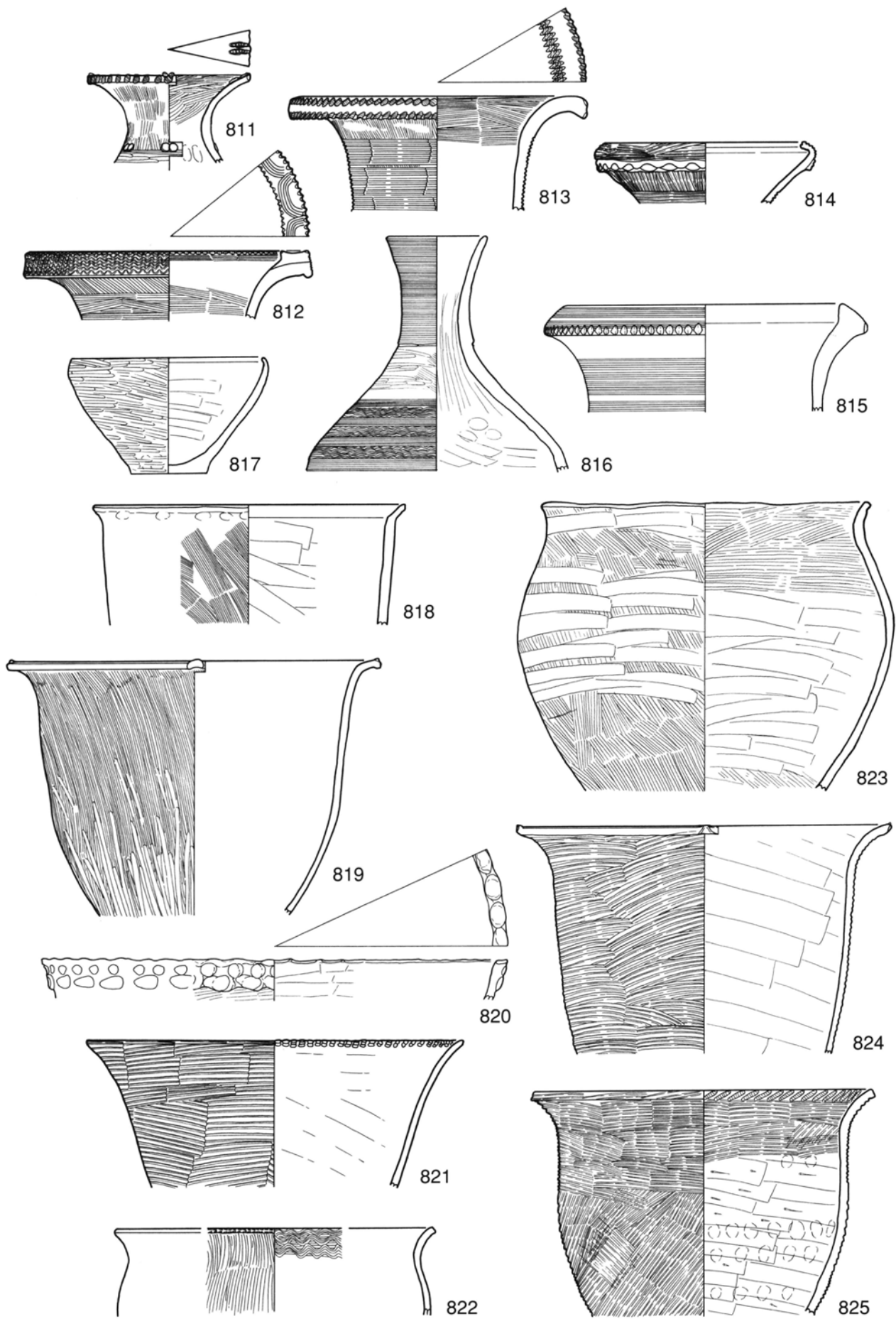


图84 S D 103下層 (1)

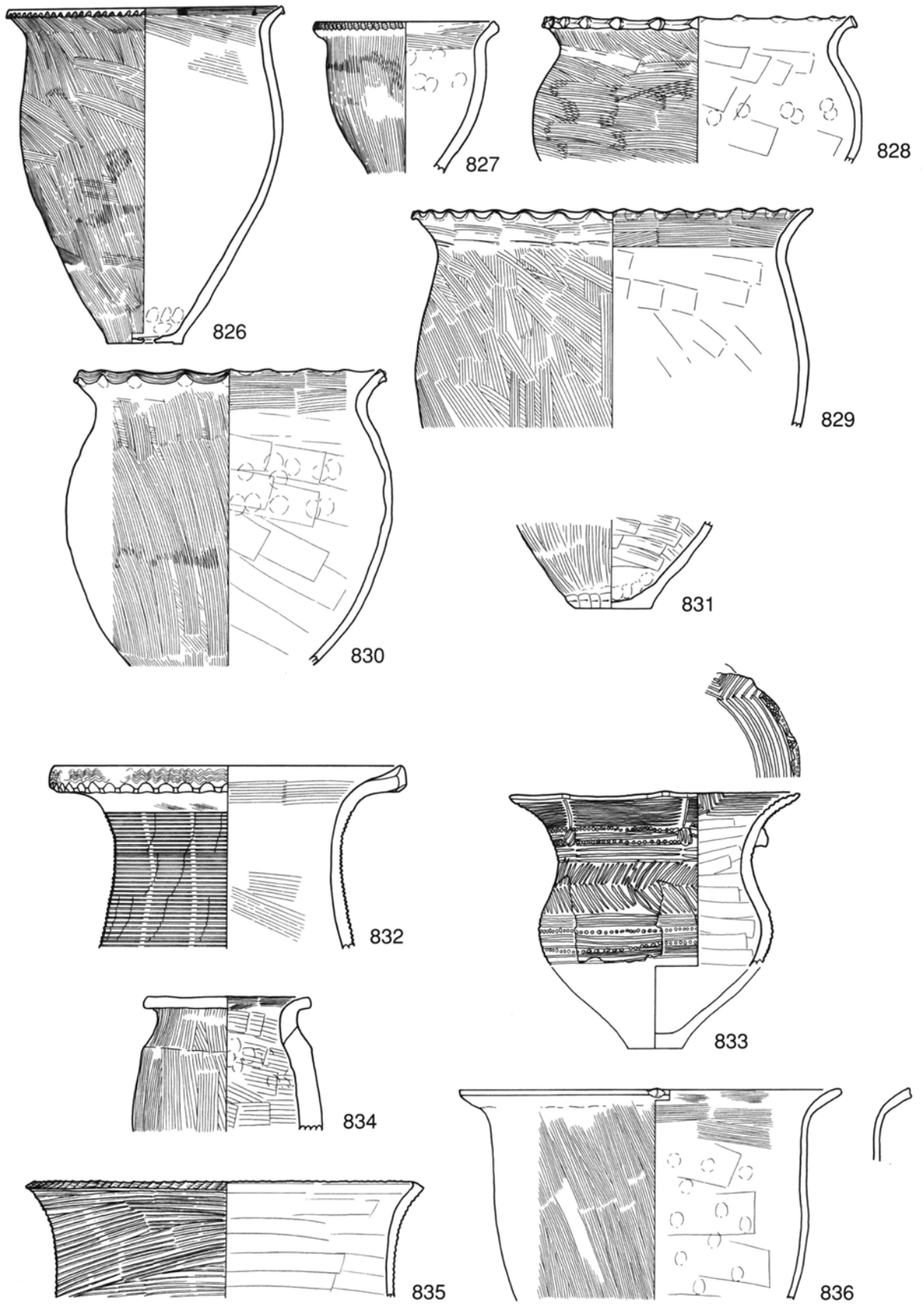


图85 S D 103下層 (2)

(1/4)

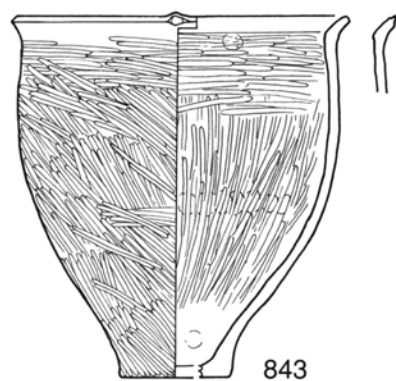
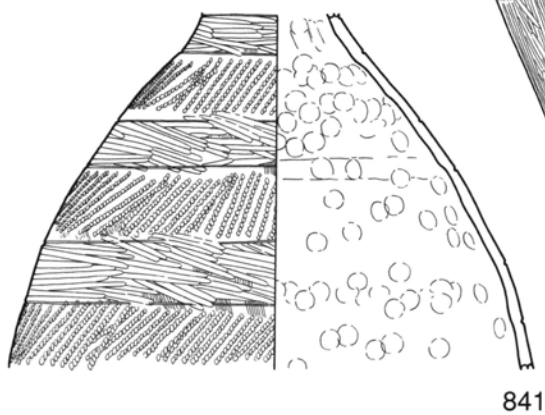
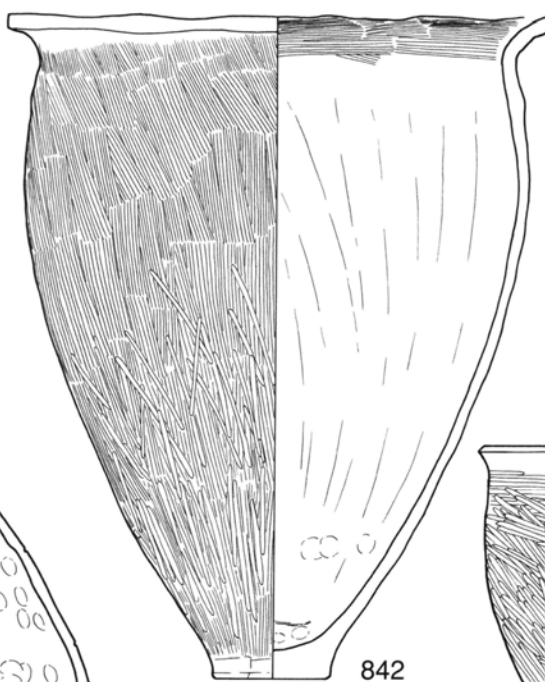
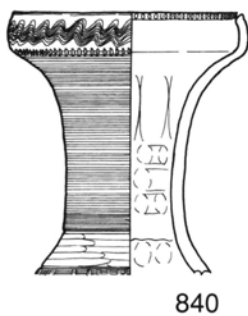
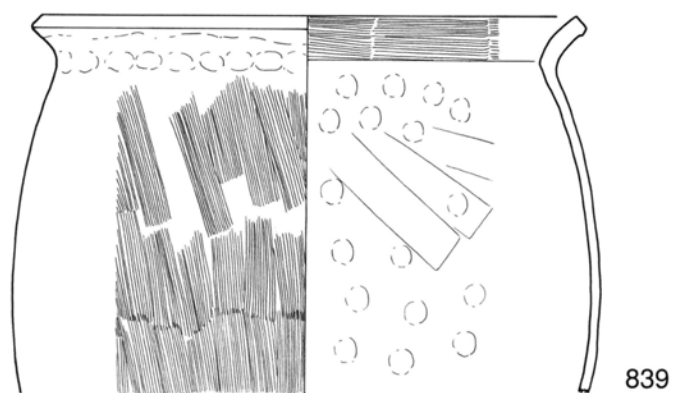
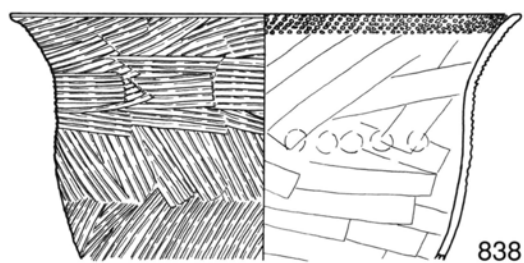
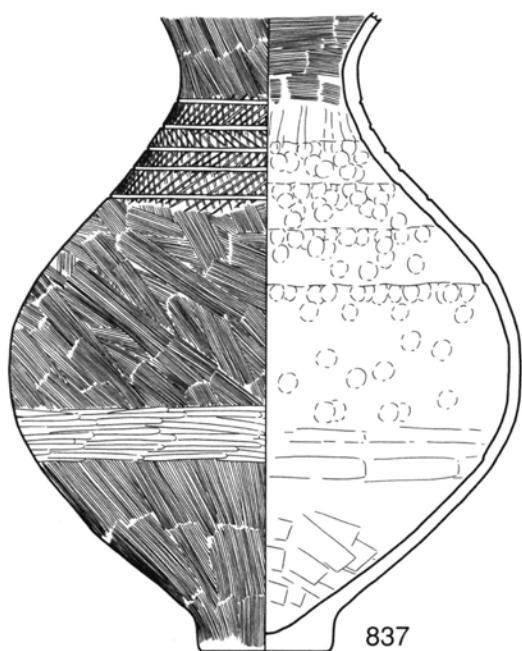


图 86 S D 103 下層 (3)

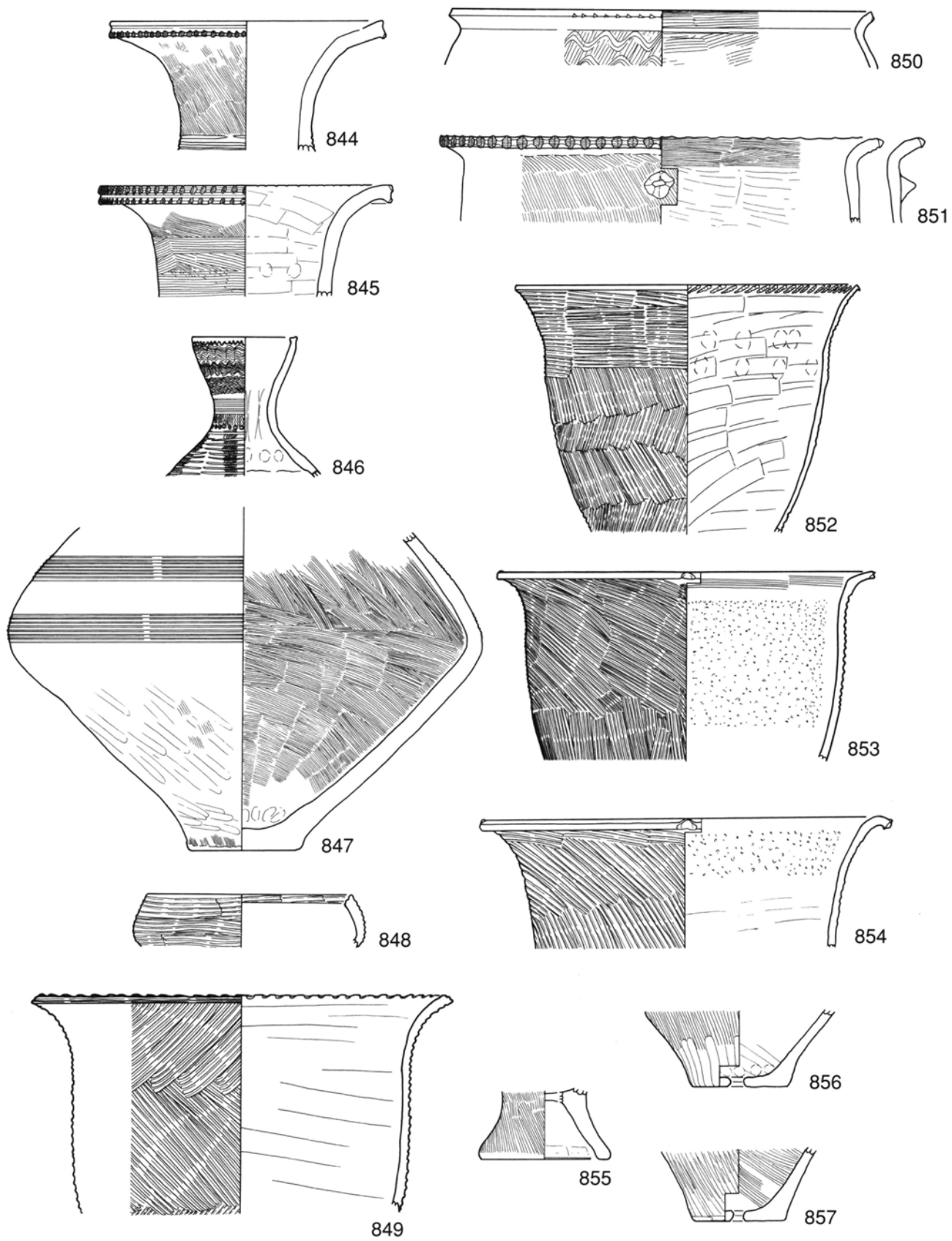


图87 S D 103下層 (4)

(1/4)

物が付着する。口縁端部にはイタ刺突が巡り、口縁部外面のタタキ、上位の横位タタキ→上位のハケ→下位のハケの順に成形・調整される。内面は下半に上方へのヘラケズリが施される。

B. 95 S D 113・120 下層 (811～843)

811はI系の小型壺。口縁内面端に棒状浮紋、頸部に円形浮紋がそれぞれ円周4分割の位置に2つ単位で加えられる。口縁端部はハケによる連続刻み。812はI系の口縁内面に段を有する壺。口縁端部の波状紋には二枚貝腹縁、これ以外の施紋にはすべて櫛状工具を用いる。813はI系の壺。口縁の上下端にハケメ工具による刻み目、口縁内面に二枚貝腹縁による波状紋と頸部に3帯以上の直線帯を施す。814は袋状口縁を有するII系の壺。815はI系の壺。816はI系の細頸壺。口縁部から頸部にかけて櫛状工具による直線帯が6帯、その直下が付加沈線、有段となる。817はI系の鉢。818は口縁部が短く外反するI系の甕。819はハケ調整の後、胴部下半のみミガキ調整をおこなう甕。円周4分割の位置に指腹つまみを加える。820は口縁端部および口縁下に2段の指腹による連続押圧を施す鉢。821はII N系の深鉢。822は口縁内面に櫛状工具による波状紋が3帯めぐるI系の甕。823はハケ調整ののち、頸部および胴部上位に横方向の強い板ナデをおこなう、I系の甕。824は二枚貝腹縁調整甕、円周4分割の位置に指腹つまみを加えるII系の深鉢。825は口縁内面にハケメ工具による連続刺突、ハケ調整のI系の甕。826～831はI系の甕。826は底部に焼成後穿孔、外面に木葉痕がある。828は胴部が張る器形で、鉢あるいは鍋に近い。口縁端部の連続押圧は指先によるもので、爪痕を残す。929の口縁端部は指腹つまみによる連続押圧。830の口縁端部は829と同様の押圧であるが、押圧に2cm前後の間隔をあける。831は底部に横方向の短いピッチでケズリを行う。832はI系の壺。口縁端部の波状紋が櫛状

工具、頸部の直線帯が二枚貝腹縁によるもので3帯以上めぐる。833は沈線紋系土器(II'系)の壺。瘤状突起および口縁内面の重コ紋は5単位。施紋順序は口縁部下と胴部最大径付近の紋様帯を描き、この間を羽状沈線紋帯が埋める。口縁部下は瘤上の沈線→縦沈線区画→横方向の沈線→管状工具による連続刺突の順。胴部最大径付近の紋様帯は横方向の沈線→管状工具による連続刺突の順。口縁内面の紋様帯は縦沈線→横沈線→管状工具による連続刺突の順。834は小型としては器壁が厚いI系の甕。835はII系の二枚貝腹縁調整の深鉢。836はI系のハケ甕。837はI系の壺。頸部に4段のヘラ状工具による斜格子紋、その後に沈線区画を加える。838はII N系の深鉢。839はI系のハケ甕。840・841はI系の細頸壺。842・843はI系の甕。842はハケ、843はミガキで仕上げる。

C. 96 S D 103 (844 ~ 862)

前出の95 S D 103・S D 120と同一の溝。844 ~ 857が上層、858 ~ 862が下層に対応。

844 ~ 847はI系の壺。846の胴部上位の施紋は、縦4方向に櫛状工具で波状紋を施した後、横方向のヘラ状工具による沈線帯を加える。沈線は短いピッチで描かれる。847は外面が赤変し、内面に煤とヨゴレが残る。胴部中位の施紋は二枚貝腹縁の直線帯が2帯。848はII系の袋状口縁壺。849はII系の深鉢。850は胴部上位にハケメ工具による2帯の波状紋をもつI系の甕で口縁部下端に板状工具による刺突がされる。851は瘤状突起をもつI系の甕。852はII N系の深鉢。853・854はI系の甕。855は台付甕の脚台。856・857は焼成後穿孔を有するI系の甕。

858・859は同一個体の可能性があるI系のミガキ甕。860は台付鉢の台部。861は厚口鉢。861はII系の壺底部。底部に焼成後穿孔がある。

(2) S D 104 (図89 ~ 97)

A. 上層 (863 ~ 938)

863はIII系の壺。864 ~ 869はII系の細頸壺。864は頸部から胴部にかけてヘラ沈線を引き、その間を羽状沈線や斜格子と磨消帯を配する。865は磨消帯と羽状沈線紋・複合鋸歯紋・斜格子紋を交互に配する。横位区画沈線は付加沈線ではない。複合鋸歯紋の施紋順序は横位区画沈線→時計回りに山形紋→これを埋めるように反時計回りで沈線を充填させ完成させる。867の頸部には二枚貝腹縁条痕のち沈線紋様を配する。口縁端部には二枚貝腹縁の連続刺突がある。869の施紋は横方向→縦方向を基本とする。底部から胴部下半にかけて二枚貝腹縁条痕がみられる。870・871はI系の壺。870は沈線による施紋、871は櫛状工具による施紋。872はI系の短頸壺。頸部に焼成前の2孔一対の穿孔が見られる。紋様は付加沈線研磨技法が採用されている。873はI系の鉢。台付か? 874・875はI系の台付鉢の脚部。876はI系の鉢。口縁部周辺を強く横ナデする。その後口縁端部にハケメ工具による連続刺突を加える。877はミニチュア土器。878は胴部と底部の境目に稜をもつ無頸壺。879 ~ 887はI系の壺。879の口縁端部のハケメ工具による連続刻みは、下端→上端の順。880の施紋はすべて二枚貝腹縁、口縁内面の瘤状突起は円周4分割の位置に配される。881は頸部下に付

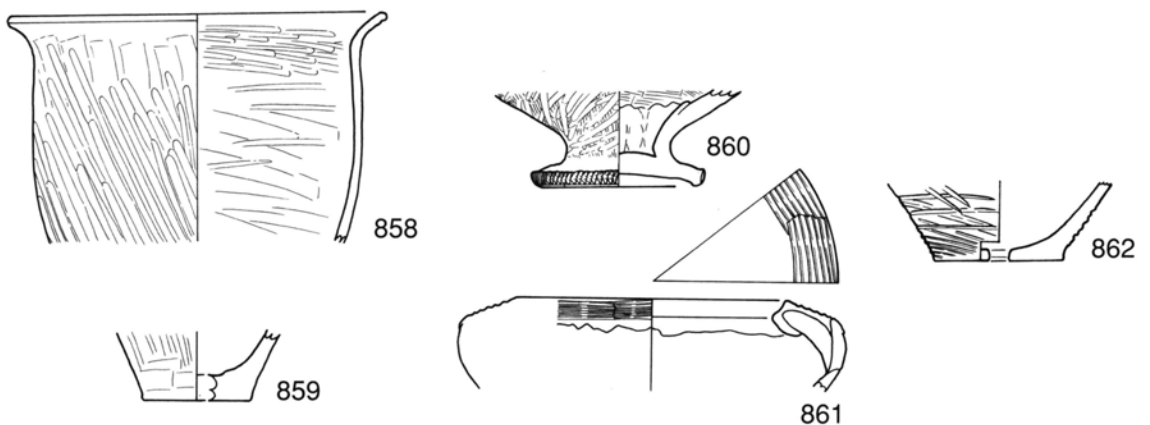


図88 S D 103下層(4)

(1/4)

加沈線を施す。882の頸部は打ち欠きを行なった可能性がある。胴部最大径付近に2cm前後の焼成後穿孔が1ヶ所ある。885は付加沈線研磨技法が見られる。886は円窓付土器。887は胴部上位に1ヶ所円形の赤彩がある。888はミニチュア土器。889はⅡ系の二枚貝腹縁条痕深鉢。890はⅡ系の棒状工具による条痕深鉢。891はⅠ系のハケ甕。892はⅡ系の二枚貝腹縁条痕甕。円周4分割の位置に指腹つまみが見られる。893はⅡ系の二枚貝腹縁条痕深鉢。894は櫛状工具?による条痕甕。895は胴部が強く張るⅡ系の深鉢あるいは鉢。円周4分割の位置に指腹押圧を加える。896はⅡ系の二枚貝腹縁条痕深鉢。口縁端部に二枚貝腹縁条痕、口縁上端に板状工具による連続刻みを施す。897は胴部を縦方向に板ナデ調整するⅠ系の甕。898は口縁部が水平に折れるⅠ系の甕。899はⅣ系のタタキ甕で、口縁端部下端にイタ刺突がなされる。体部外面は口縁部外面のタタキ、体部上位のタタキ、下位のタタキ後上位から中位のハケ→下位のハケの順に成形・調整される。また、底部には焼成後穿孔がみられる。900～905はⅠ系のハケ甕。906はⅠ系の台付甕の脚台。907はⅣ系の台付壺。908～913・915～922はⅠ系の壺。909は口縁端部に二枚貝腹縁の連続刺突、口縁内面の円周4分割の位置に3ヶ所1単位の瘤状突起がみられる。910は909と同様の瘤状突起があり、頸部の櫛直線帯下に二枚貝腹縁による連続刺突がめぐる。911は口縁下から頸部にかけて櫛直線帯が6帯以上めぐる。913は口縁端部および口縁内面の刺突が二枚貝腹縁、頸部の波状紋と直線紋が櫛状工具、その下に竹管状工具による連続刺突がめぐる。917は付加沈線研磨技法。914はⅢ系の壺。923の短いピッチの沈線紋帯下にタタキ?がみられる。924はミニチュア土器。925は上げ底の壺か? 926・927はⅠ系の高杯。928～932はⅠ系のハケ甕。932の口縁端部には円周4分割の位置にハケ

メ工具による押圧が加えられる。933はⅠ系の二枚貝腹縁甕。1次調整のハケ調整が残る。口縁端部に円周4分割の位置に指押圧が位置する。934～938は台付甕の脚台。

B. S D 104 b 貝層 (939～949)

939～945は壺。941と942はⅡ系で、これら以外はすべてⅠ系。939・940・943は付加沈線研磨技法が用いられる。941は口縁端部に二枚貝腹縁、頸部紋様はヘラ状工具による施紋。946はⅠ系の高杯脚部。947はⅠ系の二枚貝腹縁条痕甕。948は胴部上位に瘤状突起を4ヶ所持つⅠ系のハケ甕。949はⅠ系のハケ甕。950はミニチュア土器。

C. S D 104 a 貝層 (951～961)

951～956はⅠ系の壺で、952の胴部下位に外側からの焼成後穿孔が開けられる。957はⅡ系の壺。施紋はすべて半截竹管状工具。958～960はⅠ系の甕。961はⅡN系の深鉢。

D. 95 S D 104 下層 (962～970)

962はⅢ系の壺。963はハケ調整ののち二枚貝腹縁条痕をおこなうⅠ系の甕か? 964・965はⅡ系の壺。966は沈線紋系土器(Ⅱ'系)の壺。口縁端部の突起は6ヶ所。これを基本に紋様構成が規範される。沈線施紋は横方向→縦方向を基本とし、菱形の施紋は最後に付ける。頸部と胴部の接合部は肩部屈曲成形技法が用いられる。967は台付鉢の台部。968はⅡ系の深鉢。口縁下に未貫通の穿孔が2ヶ所ある。969はⅠ系の壺。直線帯は櫛状工具による6帯。970は円窓付土器。

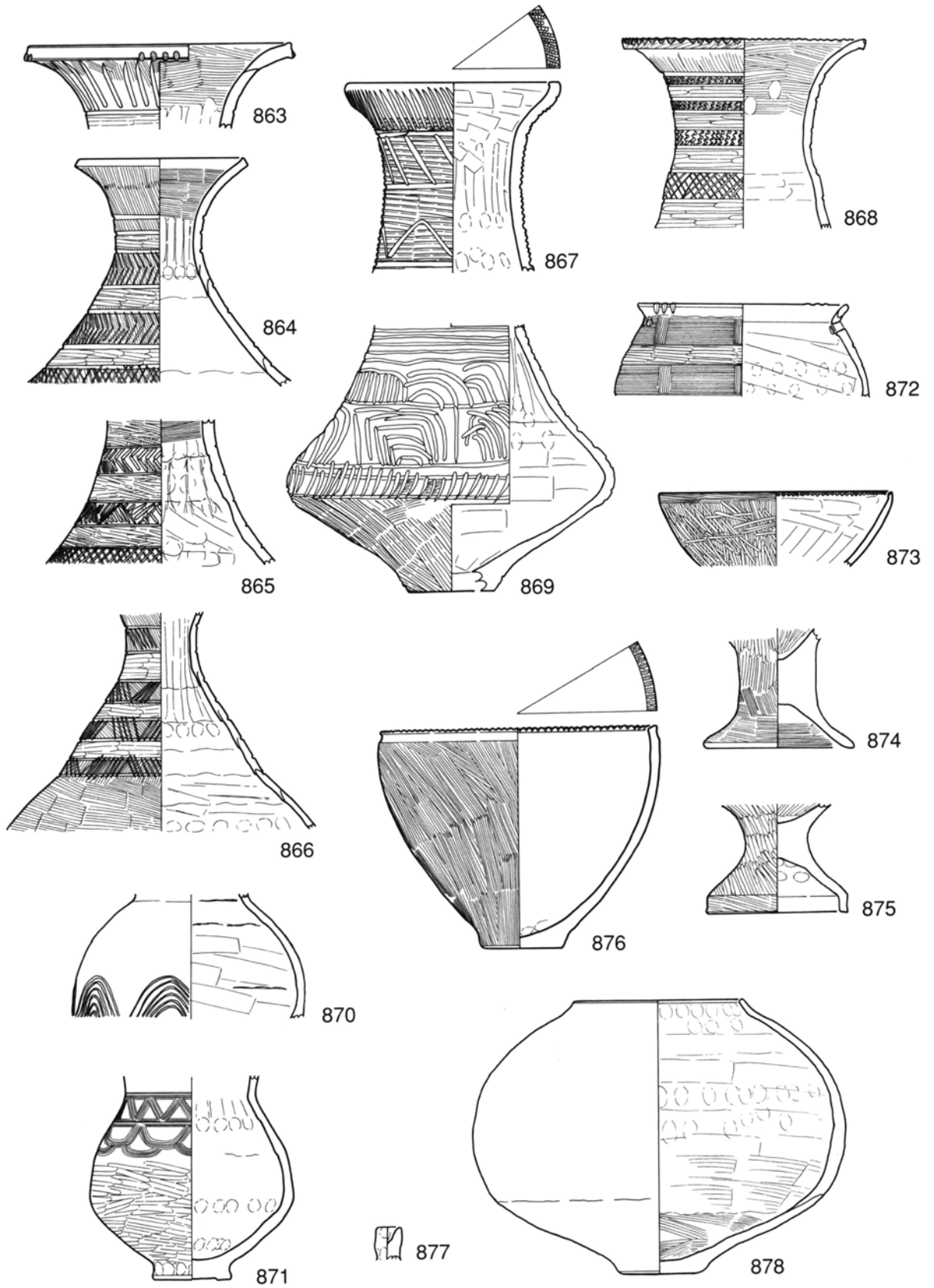


图89 S D 104上層(1)

(1/4)

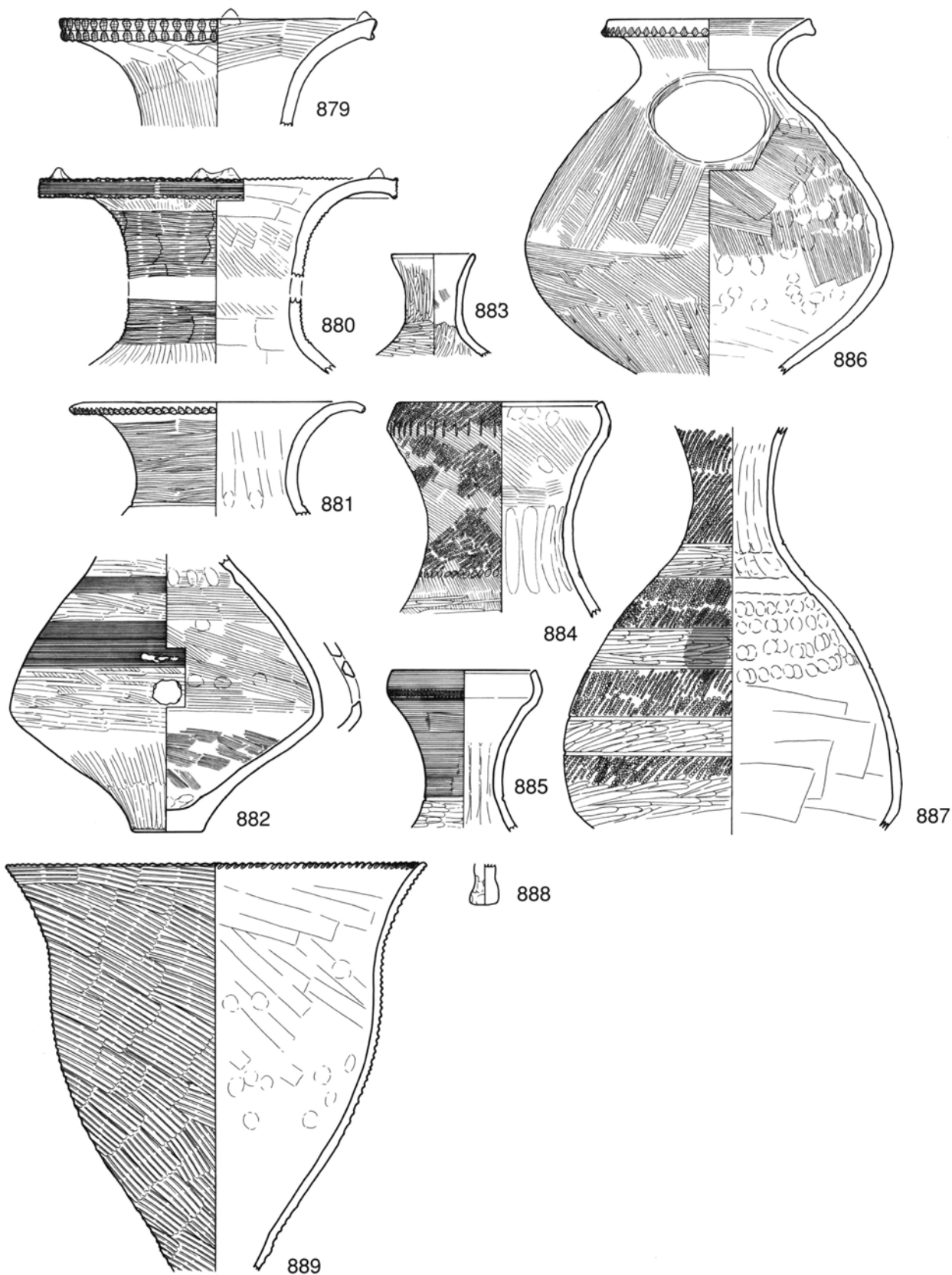


图90 S D 104上層(2)

(1/4)

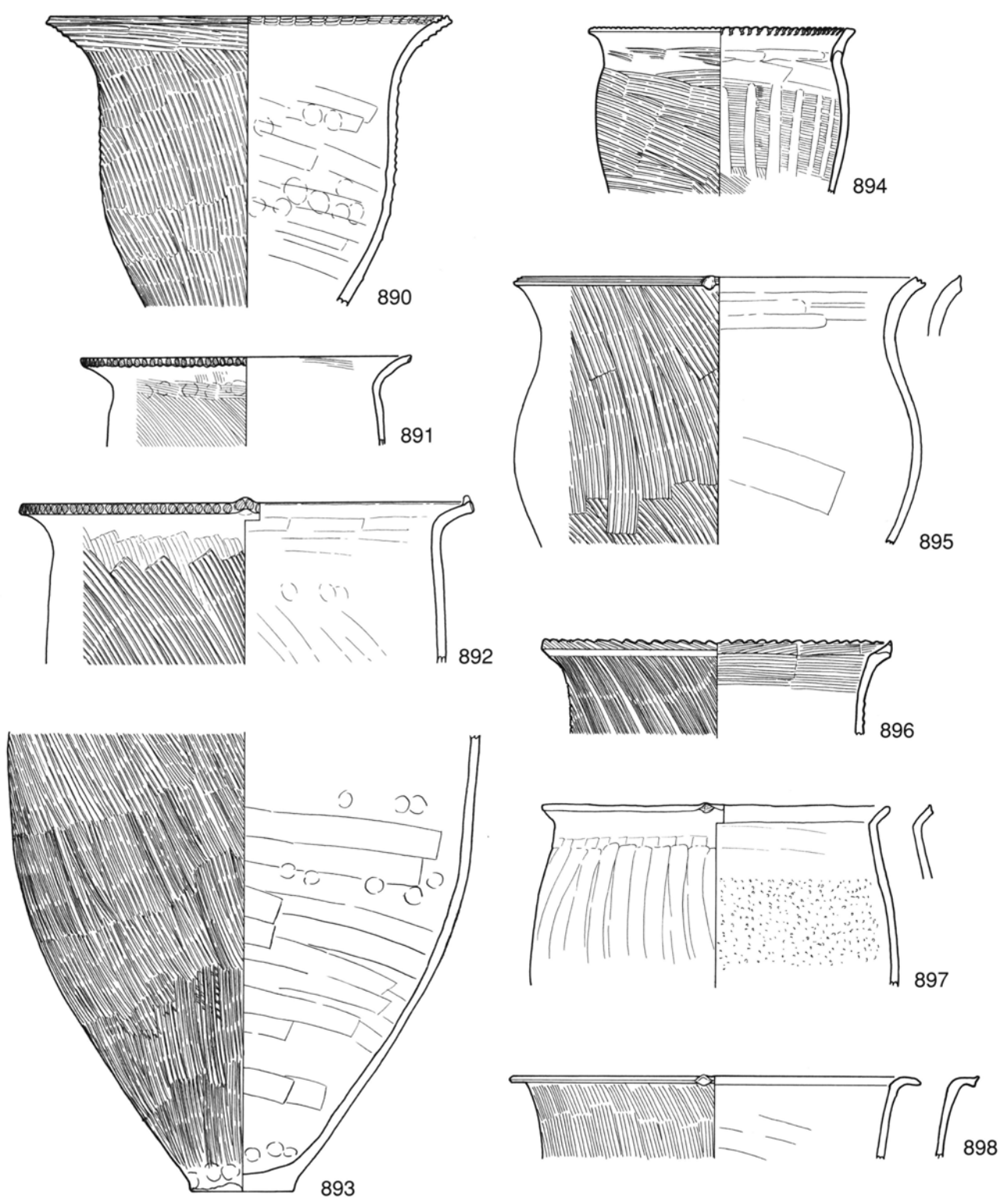


图91 S D 104上層 (3)

(1/4)

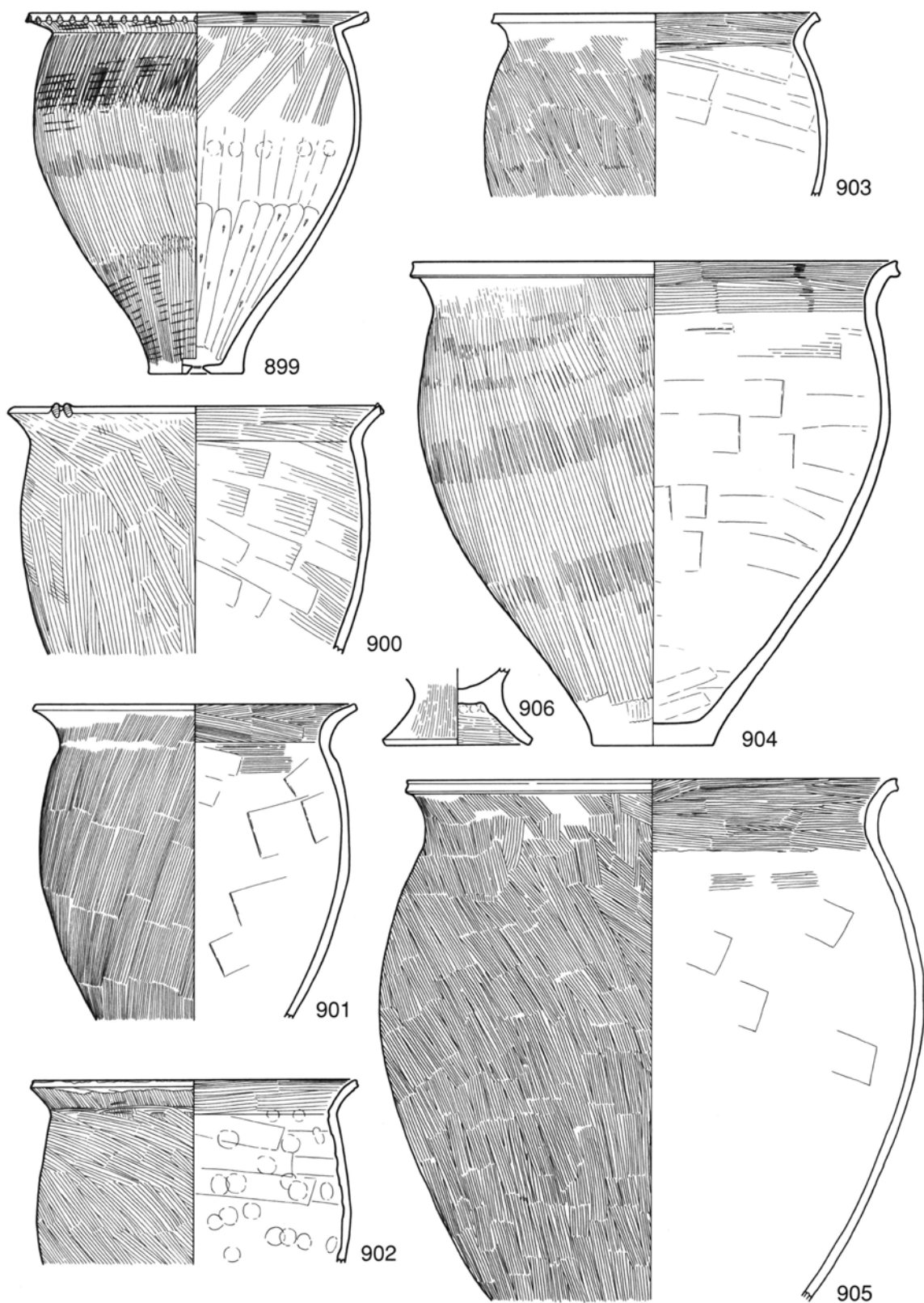


图92 S D 104上層(4)

(1/4)

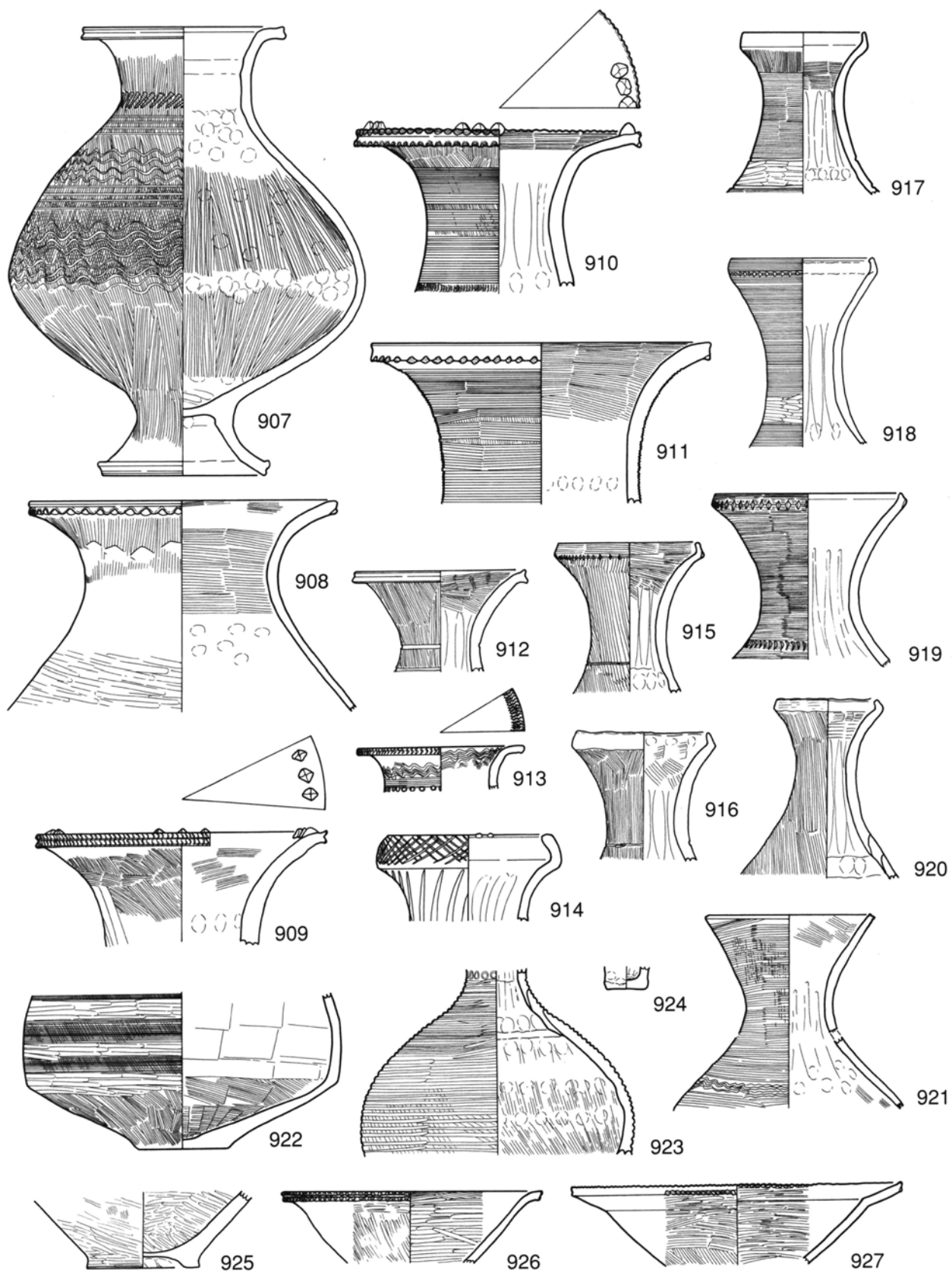


图 93 S D 104 上層 (5)

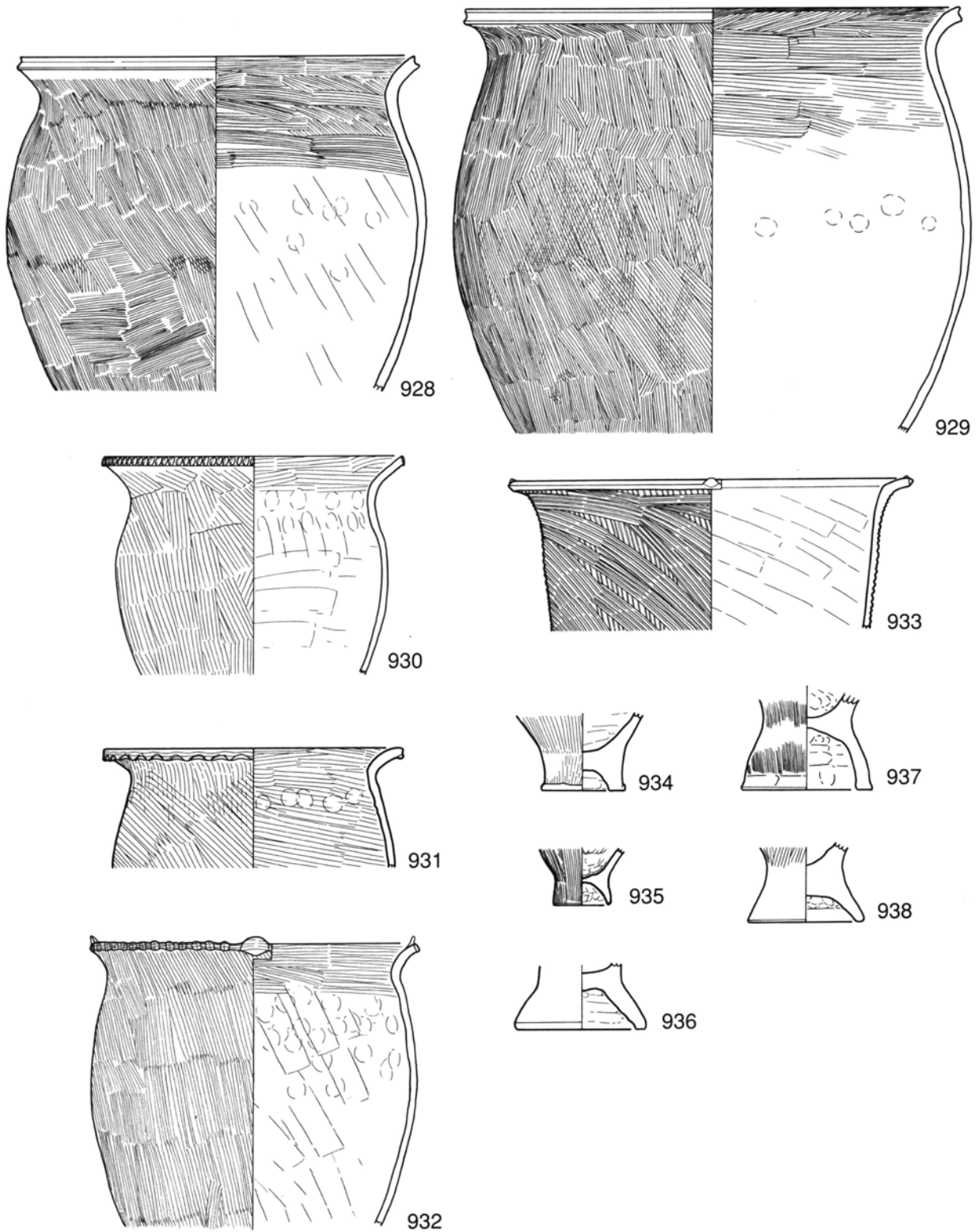


图94 S D 104上層(6)

(1/4)

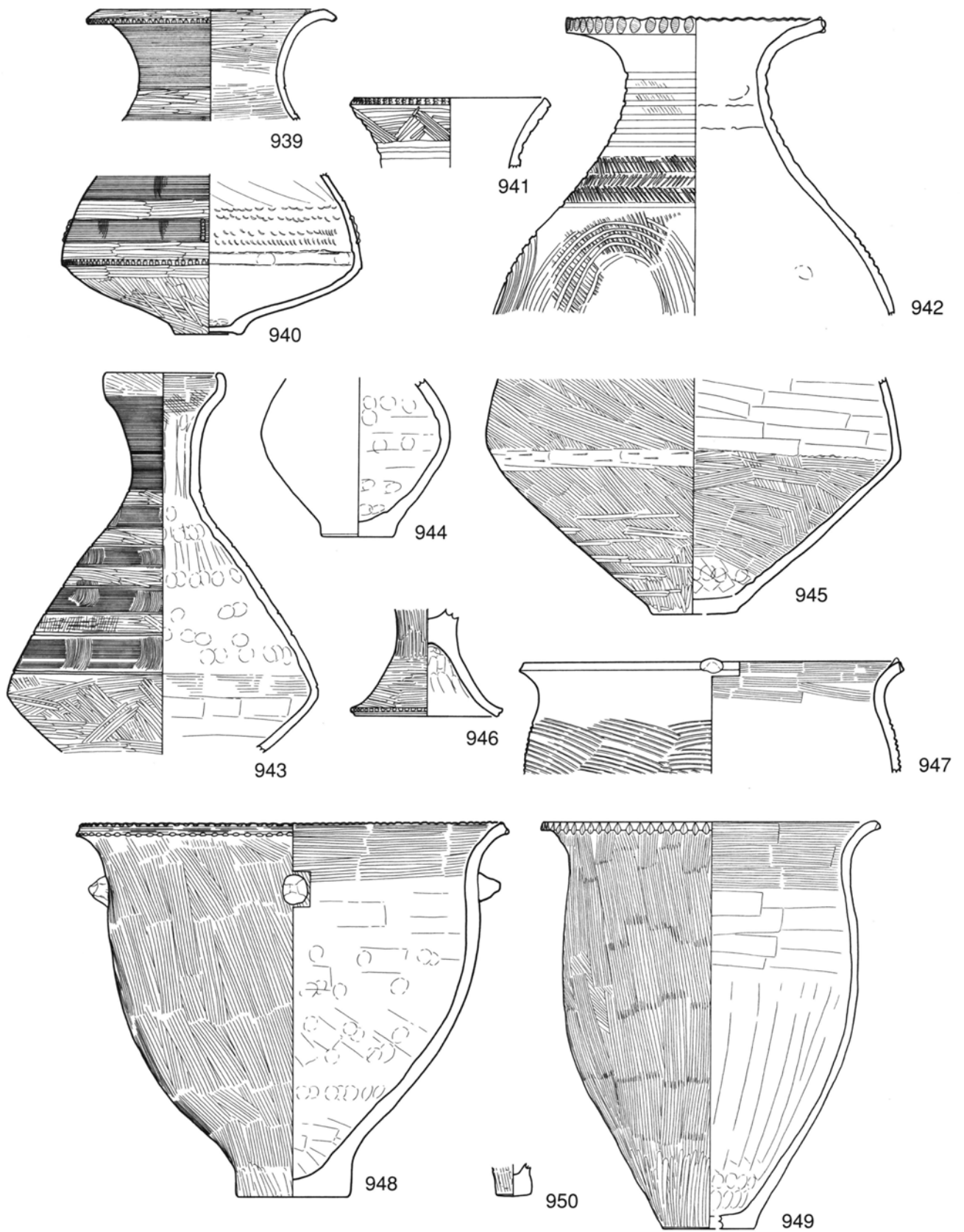


图95 S D 104 b 貝層

(1/4)

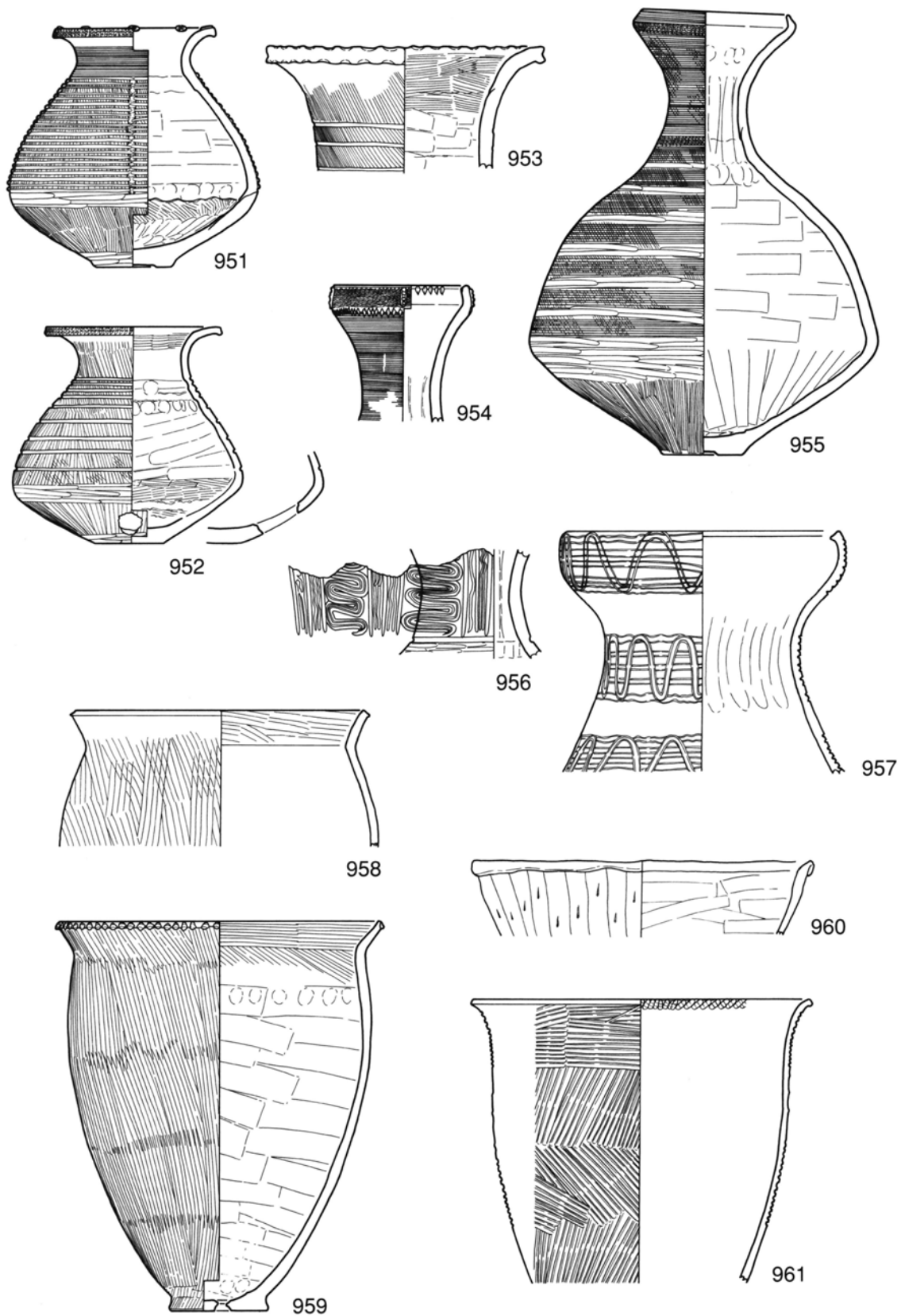


图 96 S D 104 a 貝層

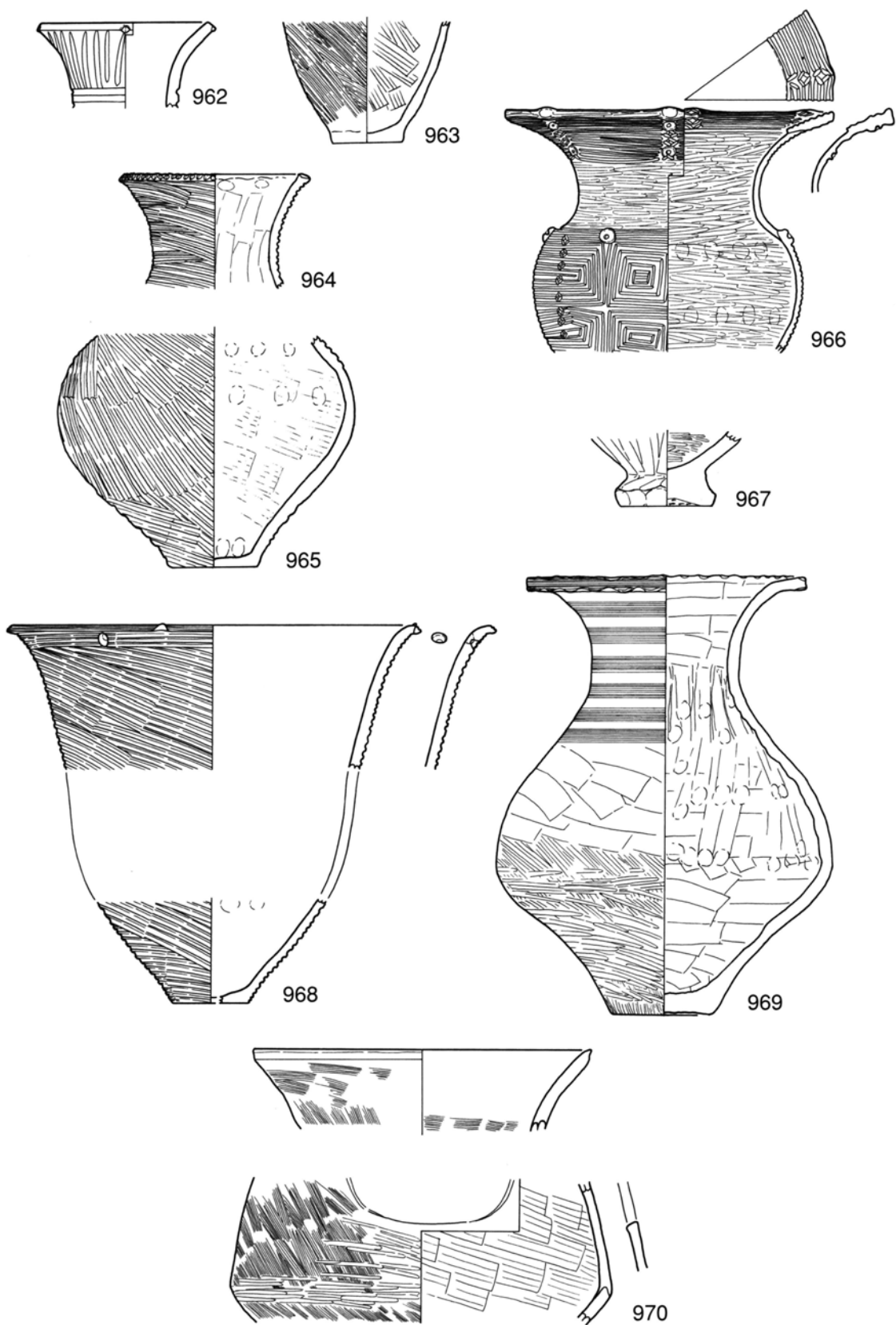


图97 S D 104 (95 S D 104下層)

(1/4)

(3) S D 108 (図 98 ~ 103)

S D 108はS D 104と対になり、開口部をつくり出す溝。層位は上から1層→1層貝層→2層貝層→2層→3層の順に堆積する。2層貝層までⅥ期の遺物を含み、以下はⅤ期が主体を占める。

A. 1・2層 (971 ~ 993)

971~983は1・2層の壺。971~978のうち、976と977のⅤ期以外はすべてⅥ期。982~983は981のⅡ系以外はすべてⅠ系。984は無頸壺、2孔1対の焼成前穿孔が口縁部下にある。穿孔は施紋後。985~988はⅠ系のハケ甕。989はⅡN系の深鉢。底部外面に布目痕がある。口縁内面の櫛状工具による連続刺突は2段。999は台付鉢か？991は高坏の脚部。992はⅠ系のハケ甕。993は台付甕の脚台。

B. 1層貝層 (994 ~ 1009)

994~997はⅠ系の壺。999と1000はⅡ系の壺。1001はⅥ期の壺。1002と1003はⅠ系のハケ甕。1004・1005は台付甕の脚台。1006は無頸壺。1007はⅣ系の高坏の脚部。1008は156と同一固体か？

C. 2層貝層 (1010 ~ 1044)

1010~1019はⅠ系の壺。1010の口縁端部の刺突は二枚貝腹縁。1011の口縁端部の条線は二枚貝腹縁。1020はⅣ系の壺。胴部上位に焼成後穿孔が1ヶ所ある。1022は胴部外面につなぎ目を残す鉢。1023はⅣ系の高坏で坏部外面下半には上方へのヘラケズリがみられる。1024は短頸壺。焼成前穿孔が2孔1対？ある。1025はⅠ系の高坏。1026は台付甕の脚台。

1027~1036は1027のⅣ系の甕と1034のⅠ期の氷式系削痕系深鉢以外はすべてⅠ系のハケ甕。1027は口縁部上端が折り返し状になり、端面の刻み後下端ヘイタ刺突がなされる。体部外面はやや粗い縦位の単純なハケ調整で、最後にクシによる不安定な横線が上位に巡る。内面は下半部に上方

へのヘラケズリが施される。1037は二枚貝腹縁条痕甕。1038と1039は同一個体、ⅡN系の深鉢。底部外面に布目痕ある。口縁内面に櫛状工具による刺突がある。1040は甕蓋。1041は焼成後穿孔をもつ甕の底部。1042はⅣ系の高坏の脚部。1043は台付甕の脚台で、底部に焼成後穿孔がある。1044は台付甕の脚台。

D. 3層 (1045 ~ 1049)

1045・1046はⅠ系の細頸壺。1047・1048は台付甕の脚台。1049は甕の底部。

(4) S D 33 (図 104)

S D 33はS D 108と切り合い関係にあり、S D 33が先行する溝である。

1050~1052はⅠ系の壺。1053~1055はⅠ系の甕。1053は口縁端部に円周4分割の位置に2単位の指腹つまみを加える。1055は口縁から頸部にかけて指先(ツメ)による弧状紋が1ヶ所ある。1056は付加沈線研磨手法を用いるⅠ系の無頸壺。2孔1対の焼成前穿孔が口縁下にある。底部に木葉痕がある。

(5) S D 14 (図 104)

1057はS D 14資料、Ⅰ系の細頸壺。3本1単位の棒状工具で横位沈線を引き、縦方向の半截竹管状工具による沈線を4ヶ所加える。

(6) S D 17 (図 104)

1059はⅠ系の壺。口縁端部と頸部の円形浮紋は竹管状工具の刺突が加えられる。

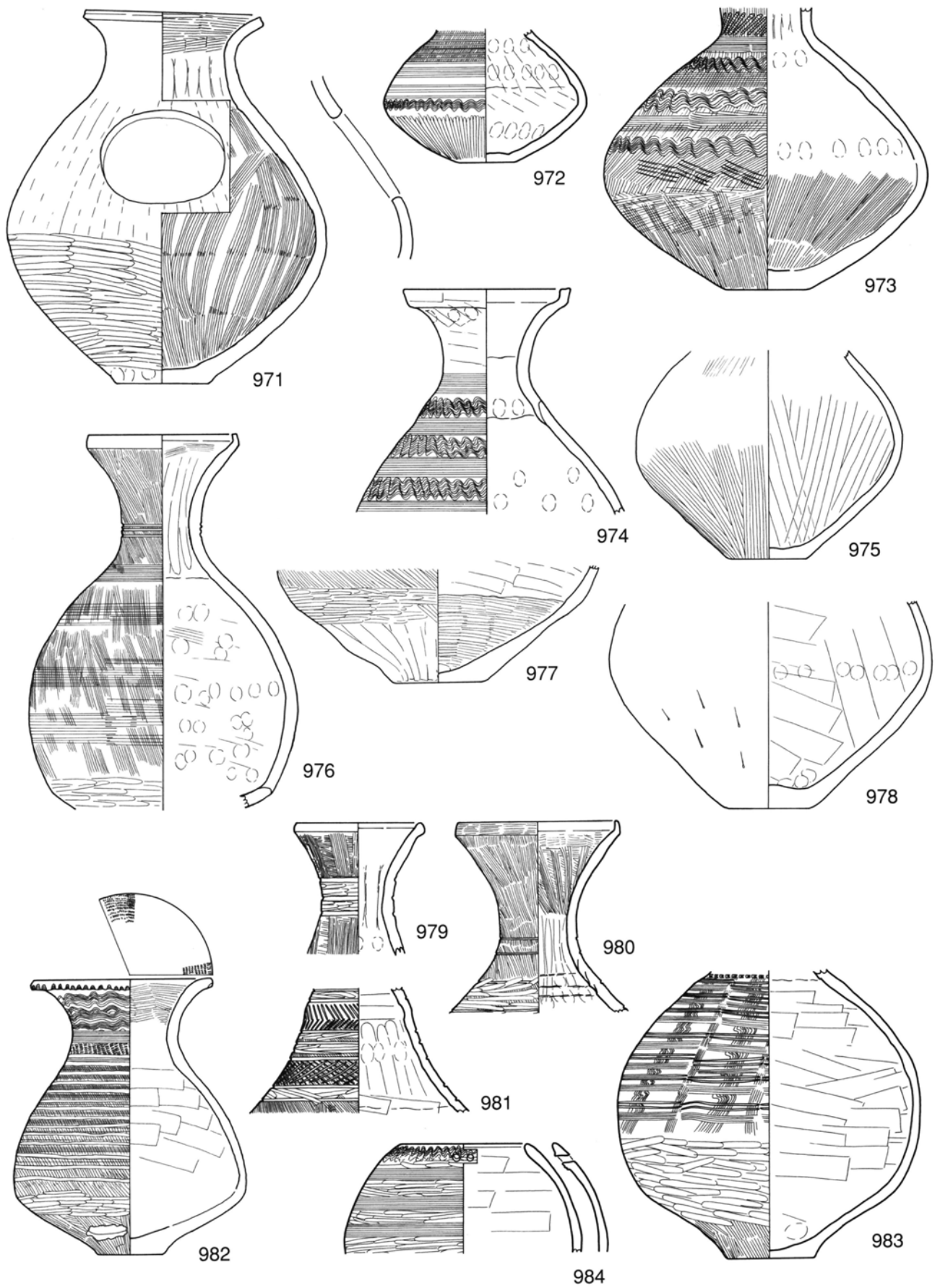
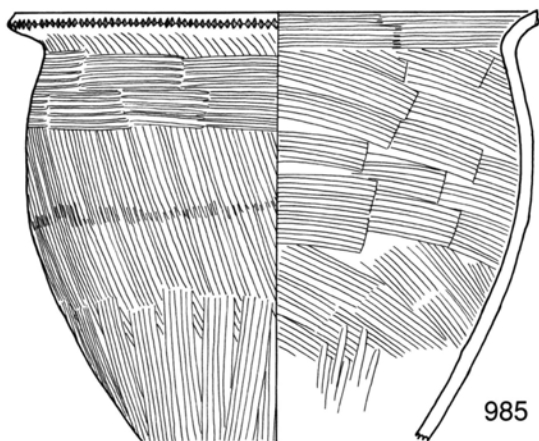
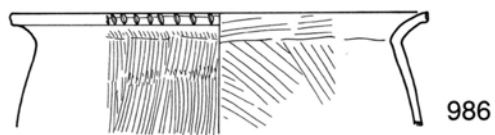


图 98 S D 108 1 · 2 层 (1)

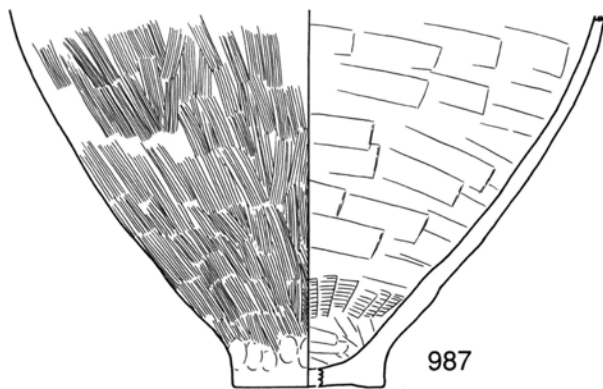
(1/4)



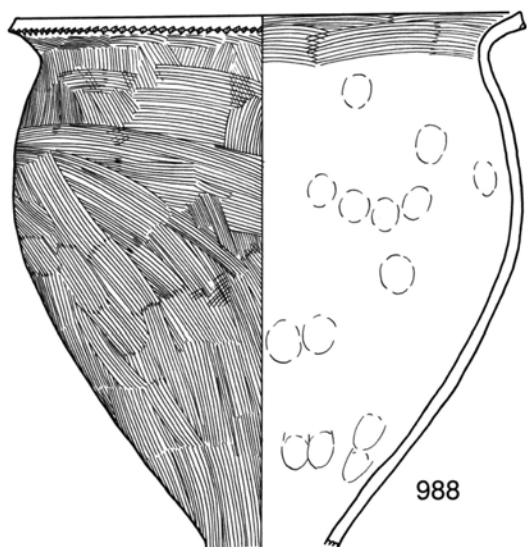
985



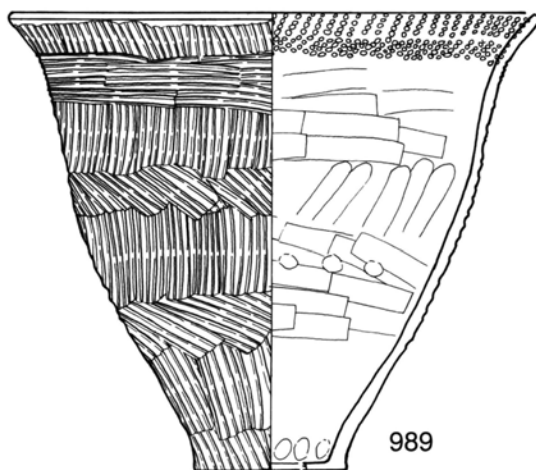
986



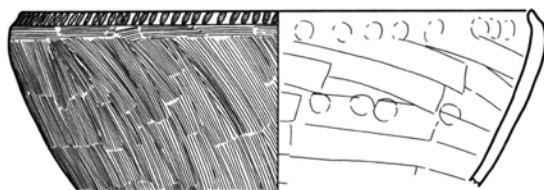
987



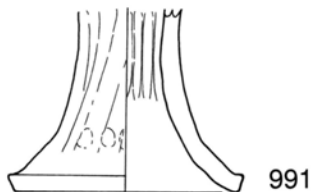
988



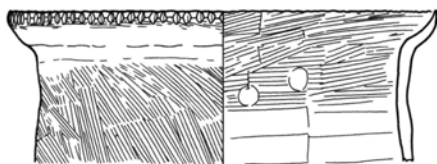
989



990



991



992



993

图99 S D 108 1 · 2 層 (2)

(1/4)

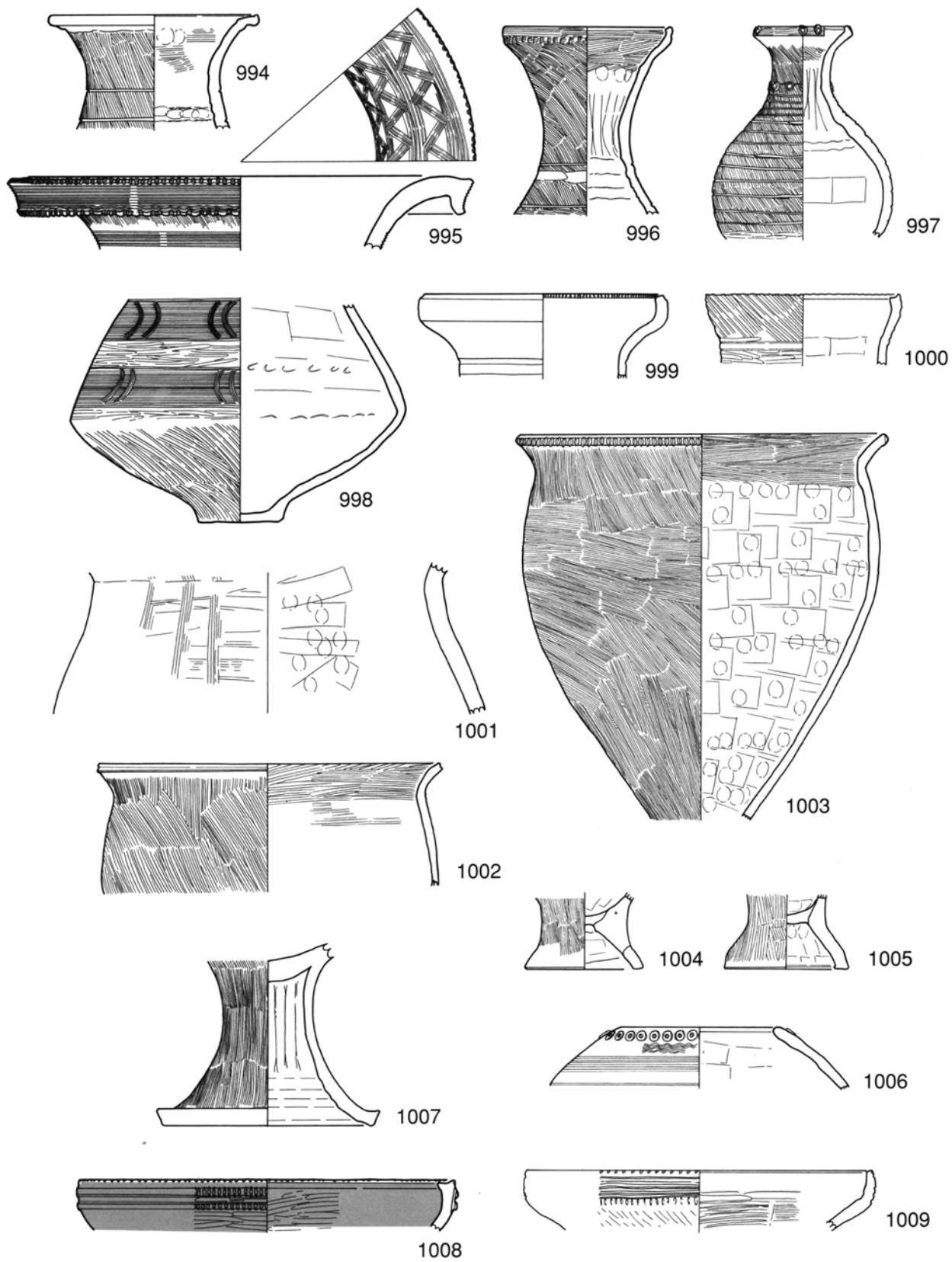


图 100 S D 108 1 层贝层

(1/4)

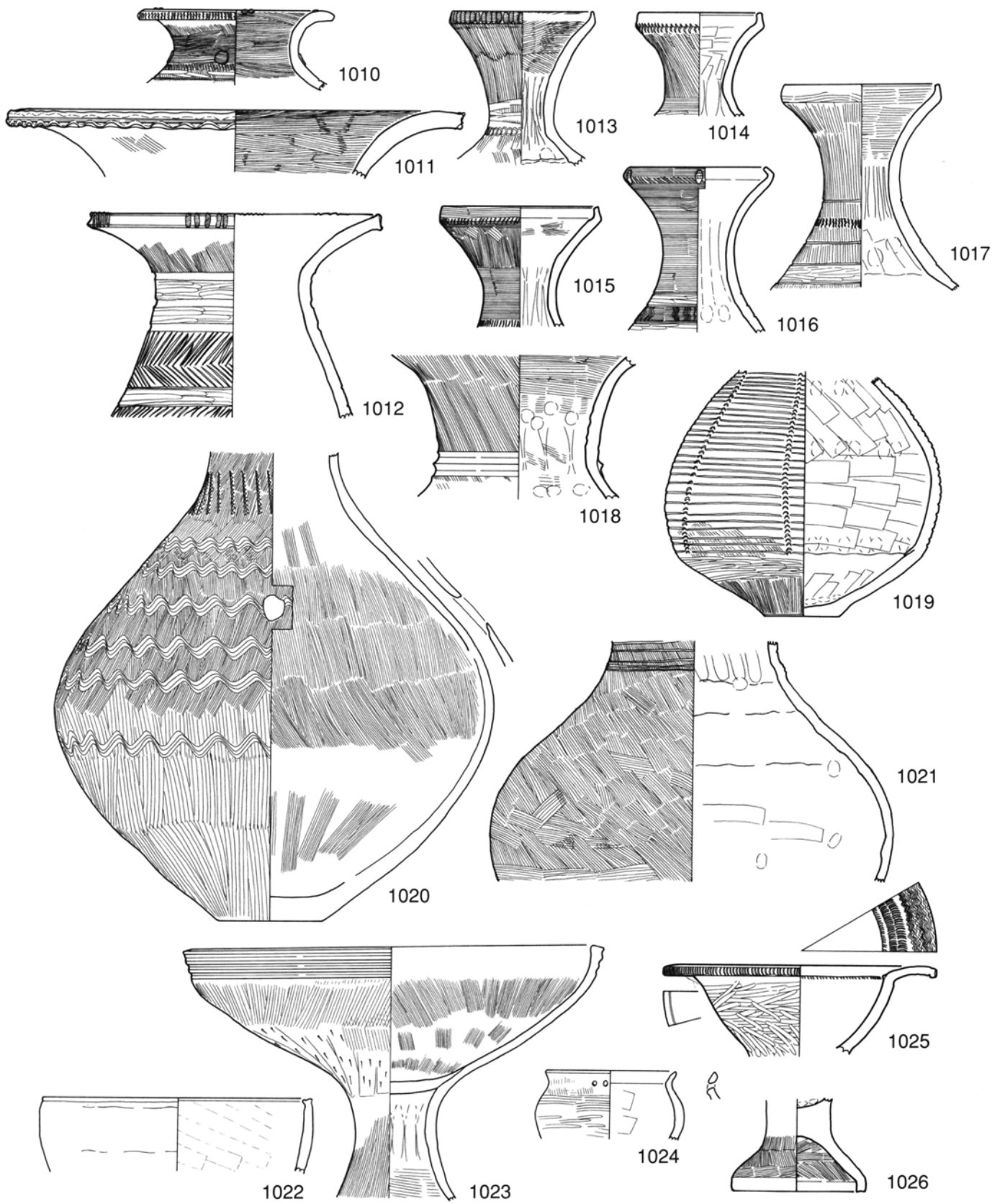


图 101 SD 108 2 層貝層 (1)

(1/4)

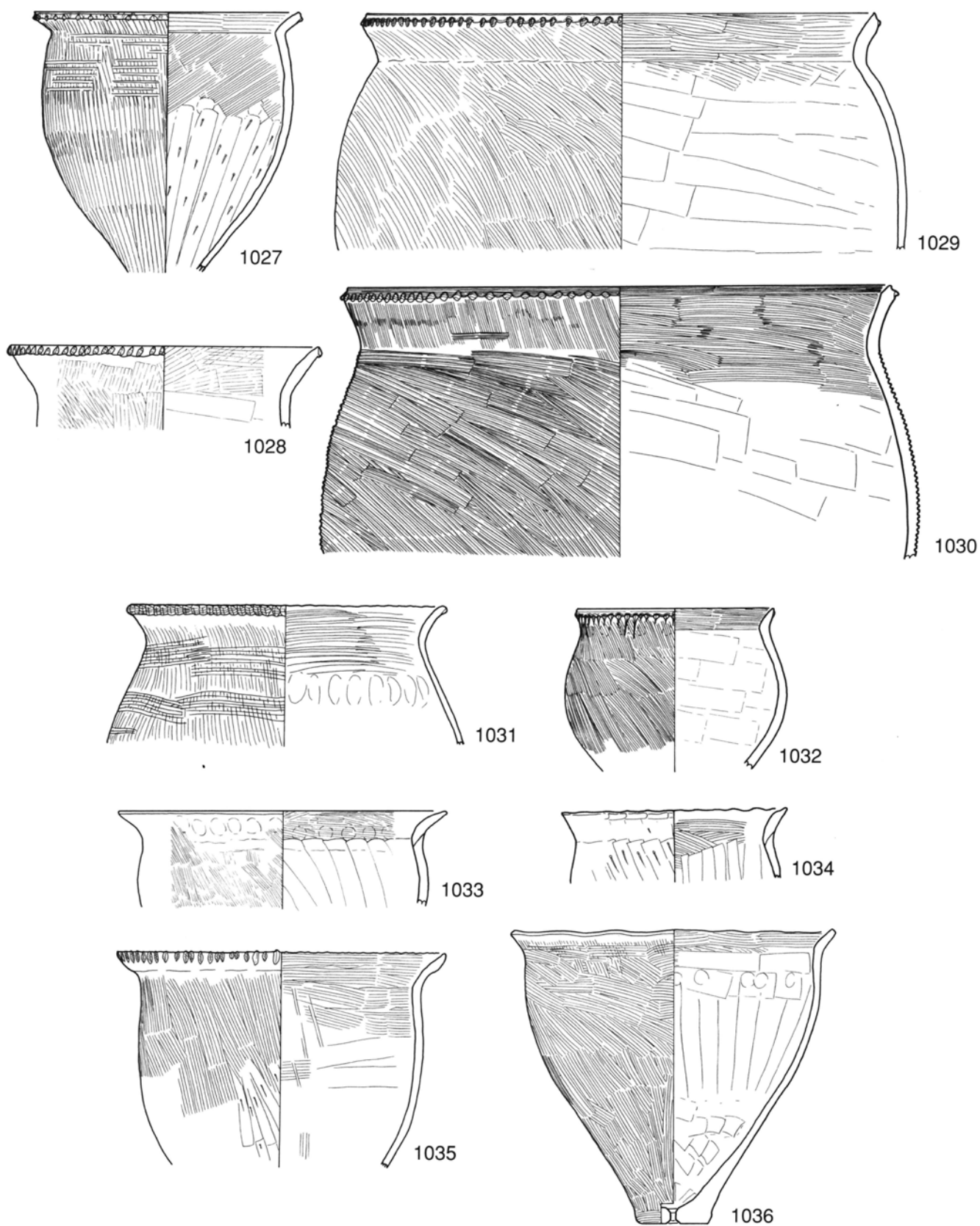
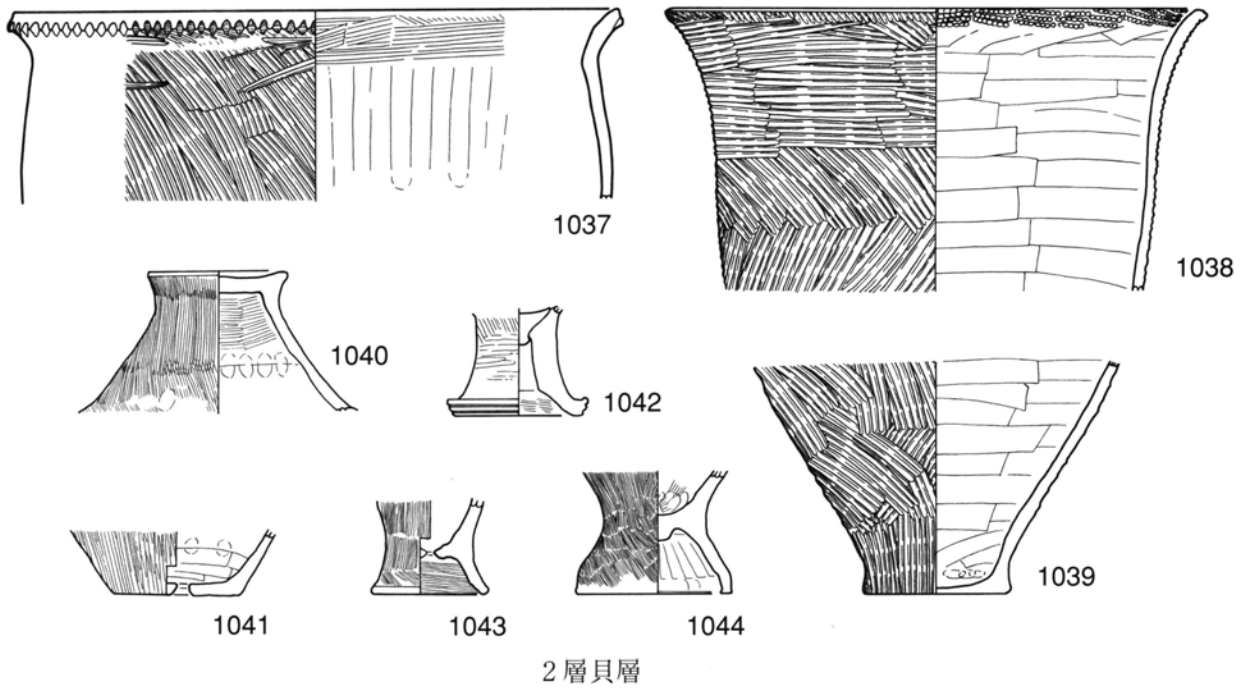
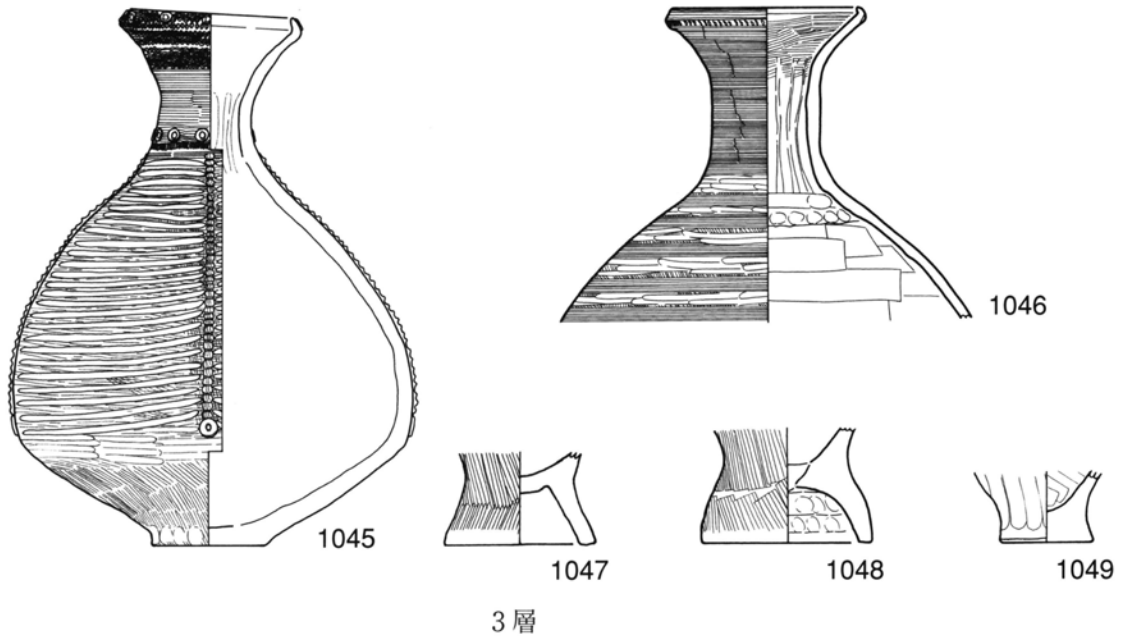


图 102 S D 108 2 层贝层 (2)

(1/4)

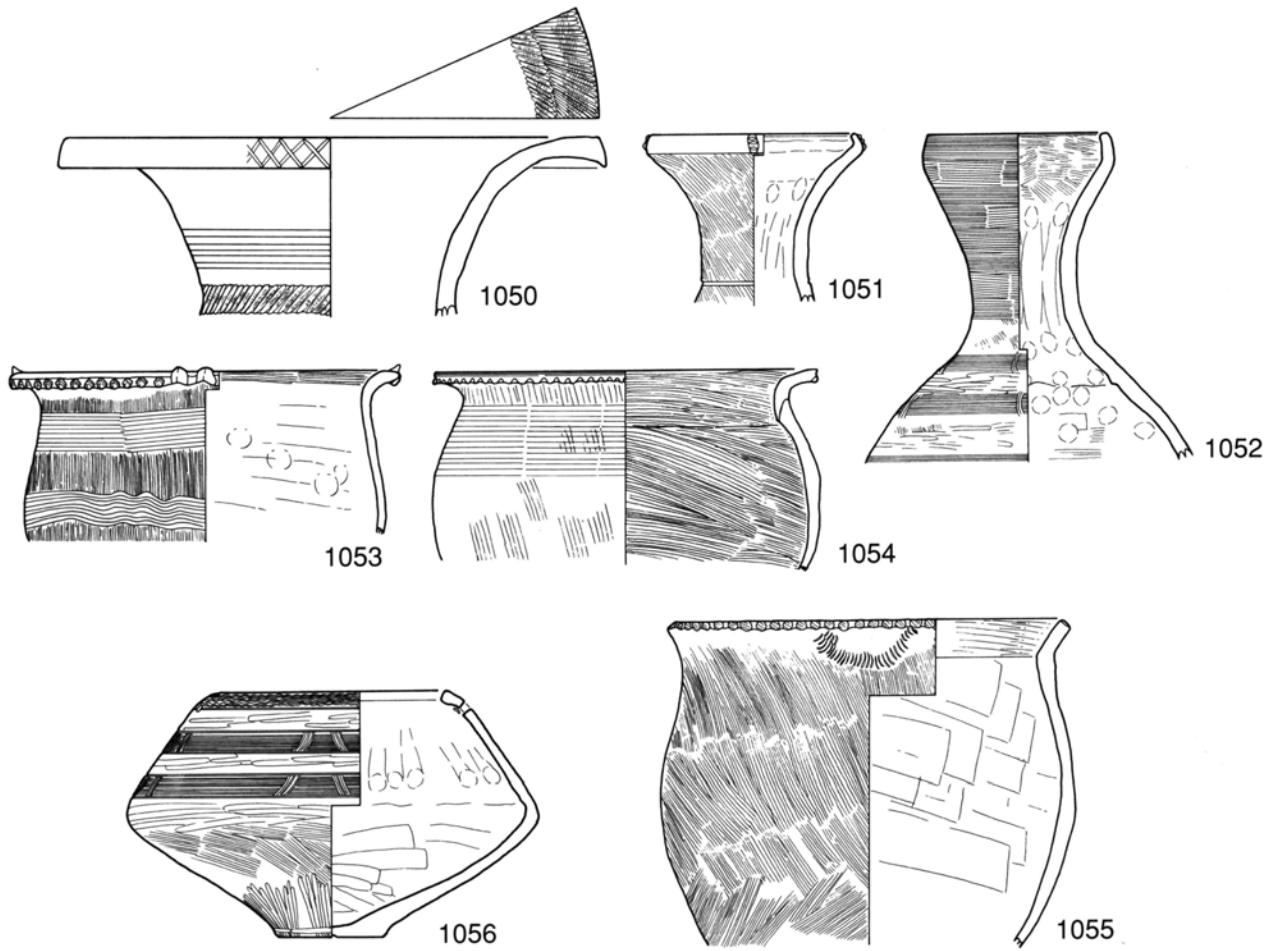


2層貝層



3層

図 103 S D 108 2層貝層 (3) ・ S D 108 3層



SD33

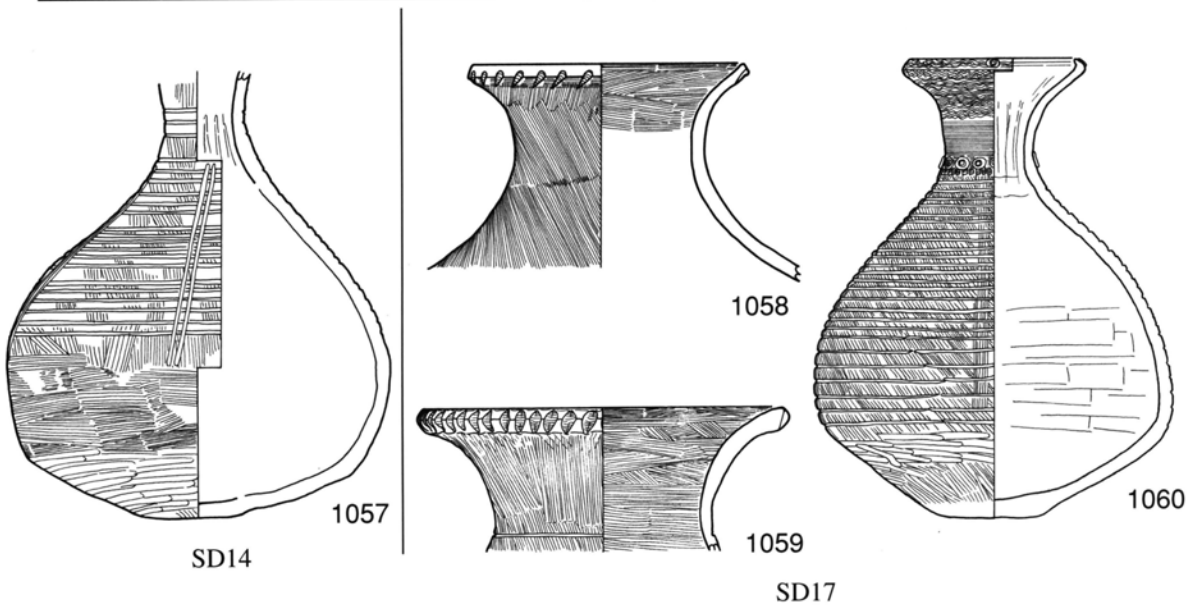


图 104 S D 33 · S D 14 · S D 17

(1/4)

(7) S D 16 (図 106・107)

1061～1063はI系の壺。1062の頸部紋様は半截竹管状工具による連続刺突紋。1063は口縁内面に口縁に並行する2本の棒状浮紋が円周4分割の位置に加えられる。浮紋上にはハケメ工具による刻みが施される。1064・1065はIII系の壺。いずれも口縁端部の円周4分割の位置に下端から上端へむけて指腹押圧を加える。1066～1070はI系の細頸壺。1067は付加沈線研磨手法を用いる。1070の刺突紋はすべて二枚貝腹縁による。1071は円窓付土器。底部外面に木葉痕がある。1072はI系の壺。施紋および調整の順序は、ハケ調整→縄紋→ヘラ状工具による沈線区画→ミガキ。胴部の沈線区画は3単位の山形。1073・1074はVI期。1076はIV系のタタキ甕で、口縁端部が上方へ折れて段をなす。端面はヨコナデにより沈線状になって、イタ刺突がなされる。体部外面の成形・調整は、口縁部から頸部の斜位タタキ→上位から中位のハケ→上位から中位の横位タタキ→下位の斜位タタキの順に行われ、内面には下位にヘラケズリが施される。1077～1081はI系のハケ甕。1078はハケ調整のあと板ナデで仕上げる。1079は口縁部端がヨコナデにより面をなし、内面には上方へのヘラケズリがみられる。外面はハケ調整。1080はケズリ調の板ナデで仕上げる。1082・1083は1次調整にハケ、2次調整に二枚貝腹縁を用いるI系の甕。1085は胴部が張る二枚貝腹縁条痕の甕。口縁端部と口縁内面の刺突は二枚貝腹縁。1084・1086～1088はII N系の深鉢。1087と1088はともに底部に焼成後穿孔、底部外面に布目痕が認められる。

(8) S D 15 (図 108)

1089～1093はすべてI系。1089は細頸壺、表面の摩滅が著しく紋様・調整が判然としない。1090は口縁下に焼成前穿孔が1孔みられる無頸

壺。1091と1092は台付カメの脚台。1093は台付甕。口縁端部と内面をつまみ、連続押圧する。その際、内面に爪痕が残る。

(9) S D 18 (図 108・109)

1094・1096はII系の細頸壺。1095はIII系の壺。口縁端部の円周4分割の位置に貝殻背面押圧を加える。1097～1104はI系の壺。1101は櫛描直線帯の最上位に赤彩をめぐらせる。1105はI系の無頸壺。1106・1107はI系のハケ甕。1106は胴部上位に瘤状突起が4ヶ所付く。1108はII S系の深鉢。1109・1110はI系の高坏。

(10) S D 19 (図 110)

1111はI系の壺。付加沈線研磨技法が用いられる。1112はII系の深鉢。1113は円周4分割の位置にハケメ工具による押圧が加えられる。底部に焼成後穿孔が丁寧に穿たれる。

(11) S D 20 (図 110)

切り合い関係からS D 19に先行する溝。

すべてI系。1114～1116は壺。1114の口縁端部はハケメ工具による刺突の後、中央にヘラ沈線を引く。頸部紋様は横位直線帯に縦位波状紋を加えた後、横位直線帯下にそれぞれ太描沈線を引く。1116の底部外面に沈線が3条見られる。1117・1118はハケ甕。1119は鉢。1120は台付鉢の脚部か？

(12) S D 23 (図 110)

1121・1122はI系のハケ甕。

(13) S D 21 (図 105・111)

1123は壺の底部、底部外面にヘラ状工具により「十」文字の沈線が引かれている。1124～1134はすべてI系の壺。1127の直線帯間の施紋は板状工具による連続刺突の山形紋。1128は胴部上位から中位にかけて赤彩帯が見られる。1129は短頸壺。頸部に焼成前穿孔2孔ある、一対か？1130は内面に朱が全面に残る、無頸壺。口縁下に1対の焼成前穿孔がある。1131は胴部の破片か？外面全体に赤彩がある。

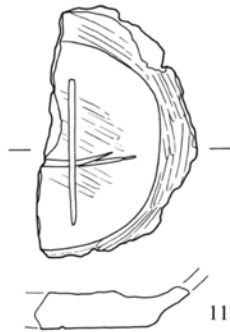


図 105 S D 21 (1) (1/3)

(14) S D 24・S D 25 (図 111)

すべてI系の壺。1132の胴部下位に焼成後穿孔が1ヶ所ある。底部外面は木葉痕をナデ消す。口縁内面の円形浮紋は3×4単位で円周4分割の位置にある。胴部のヘラ状工具による縦位山形紋は6方向。頸部の櫛波状紋4帯の下に二枚貝腹縁による連続刺突がある。1134には胴部中位に2ヶ所の焼成後穿孔がある。1135には胴部下位に1ヶ所焼成後穿孔がある。

(15) S D 22 (図 112)

1136は外面を裾部から頂部にむかって板ケズリをする、蓋。頂部がリング状にくぼむ、I期か？

(16) S K 95 (図 112)

1137・1138はI系の細頸壺。

(17) S K 91 (図 112)

1139は頸部に貼付突帯、その下にハケメ工具による山形紋を描く。1140は口縁が外反しない壺。口縁下の貼付突帯上にはX字状の太描沈線を引く。1141は口縁部を折り返す甕。

(18) S K 90 (図 112・113)

1142・1143はI系の壺。1142の口縁内面にみられる円形浮紋は3×4単位で円周4分割の位置にある。1143の頸部刺突紋は櫛状工具。1144・1145はII系の細頸壺。1144の紋様は太描沈線による、ミガキは施紋後。1145の沈線による複合鋸歯紋は、磨消帯間に施される。施紋順はハケ調整→横位沈線→複合鋸歯紋→ミガキ調整。1146はI系の壺。付加沈線研磨技法を用い、紋様帯は縄紋を施す。1147には幅広の櫛条痕を施す、壺の底部か？1148と1149は同一個体でII N系の深鉢。底部外面に布目痕が付く。1150はII N系の深鉢。1151～1158はI系のハケ甕。1152の底部は丁寧に磨りきりされた焼成後穿孔がある。1155の胴部上位にはハケメ工具による横位直線紋が3帯ある。下位の2帯は短いピッチで描かれ、波状紋調になる。1157は底部外面に木葉痕、丁寧に磨りきりされた焼成後穿孔がある。穿孔は中心からややずれる。

(19) S K 89 (図 114)

1159・1160は上層、1163～1165は貝層上位、1166～1169は貝層中位。

1159はI系の台付鉢。1160は円窓付土器。1161・1162はI系の壺。1162は口縁端部上下端にハケメ工具による刺突を加える。1163・1165は円窓付土器。1164はI系のハケ甕。底部に焼成前穿

孔がある。1166～1168はI系の壺。1168の底部外面に木葉痕があり、焼成後穿孔がなされる。1169はIII系の壺。

(20) S D 10 (図 115)

1170はI系の細頸壺。頸部に竹管状工具と二枚貝腹縁の連続刺突がめぐり、1171はI系のハケ甕、底部に丁寧に研磨された焼成後穿孔が中心部から少しずれてある。

(21) S D 27 (図 115)

1172はI系の細頸壺。紋様は櫛描紋帯＋磨消帯で構成され、櫛描紋帯上には円形浮紋を加える。

(22) S K 88 (図 115)

1173は胴部が強く張るI系のハケ甕。1174は口縁部が直立するI系の鉢。1175はII系の壺。ヘラ沈線を引き、二枚貝腹縁刺突紋より下位にヘラ状工具による羽状沈線が4段めぐり、1176は円窓付土器。1177は口縁部に貼付突帯がめぐり、外面に粗雑なミガキがある。

(23) S K 124 (図 116)

いずれもI系の壺。1178は口縁端部に二枚貝腹縁条線を引いたのち、上下端を指腹により連続押圧を加える。頸部に二枚貝腹縁の直線帯が4帯めぐり、その下をハケメ工具により削りだす。1179はI系の細頸壺、胴部上位の横位沈線帯下に施す。縦位直線紋は茎状のものを束ねた工具で施す。1180は櫛描直線帯のみのI系細頸壺。

(24) S D 31 (図 116)

1181はI系の全面赤彩の高坏。1182は高坏の脚部か？1183は無紋のI系壺。胴部最大径にミガキをおこなう。1184と1185は同一個体、口縁部を強く指腹で連続してつまむ、口縁部が波状を呈す

る。1186は口縁部が受口状となる円窓付土器。

(25) S D 34・S D 35 (図 116)

1187は沈線＋磨消帯のI系の細頸壺。1188は口縁内面に3×4単位のハケ刻み、口縁下に3～4条のヘラ沈線による山形紋、太描沈線2条、その下にヘラ状工具による羽状沈線紋を施す。

(26) S D 32 (図 117)

1189はI系に接近する沈線紋系土器(II'系)の壺。紋様構成は以下の通り。口縁端部に櫛状工具による刻み、口縁内面端の円周4分割の位置に円形浮紋を配し、その間を櫛状工具による長楕円区画紋を描く。長楕円区画は半時計回りで施す。内側に同一工具で直線紋を充填。さらに、区画紋の下位に櫛状工具による刺突紋で全体を区画する。これら長楕円区画紋の描き方は胴部も同様となる。外面は、櫛状工具による直線紋を2帯、その下に二又状工具による2本1単位の沈線を2周させ、長楕円区画紋を5単位描く。二又状工具による直線帯上に縦方向の棒状浮紋が口縁内面の円形浮紋に対応して4ヶ所付く。胴部下半から底部にかけてのミガキ調整は区画紋下位の刺突紋を施す以前である。1190・1191はII系の細頸壺。1190の胴部中位以下には二枚貝腹縁条痕、頸部から胴部上位の紋様は横位沈線＋斜格子紋＋横位沈線＋羽状沈線紋＋横位沈線紋5条＋複合鋸歯紋＋連弧状区画紋。原体はすべて棒状工具か？1192はI系のハケ甕。1193はI系の鉢。口縁下に羽状沈線、その下部を横位沈線で区画する。施紋はミガキ調整後。1194・1195はI系のハケ甕。1194は胴部上位に二枚貝腹縁による波状紋が2帯めぐり、1196・1197はI系の細頸壺。

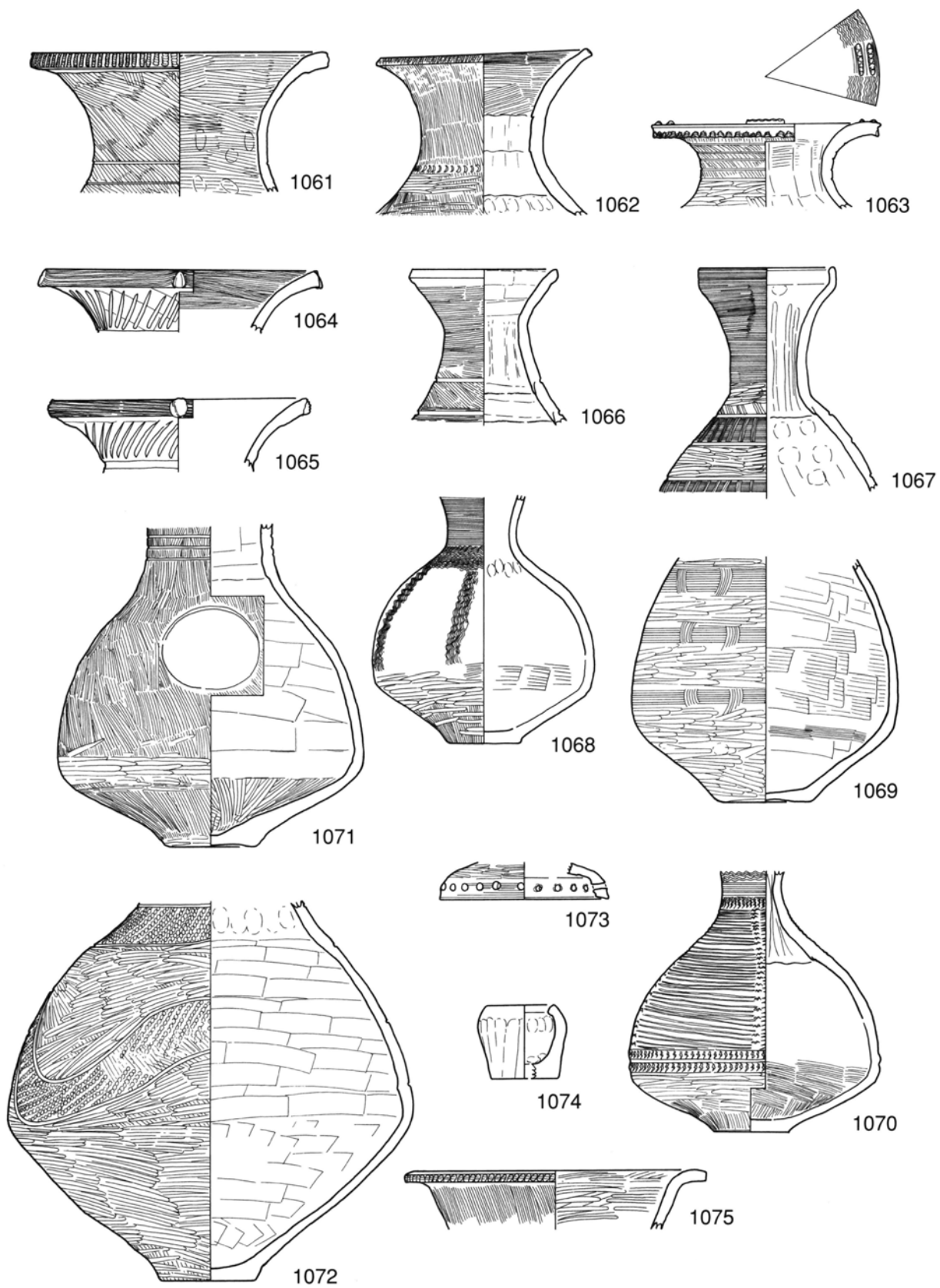


图 106 SD 16 (1)

(1/4)

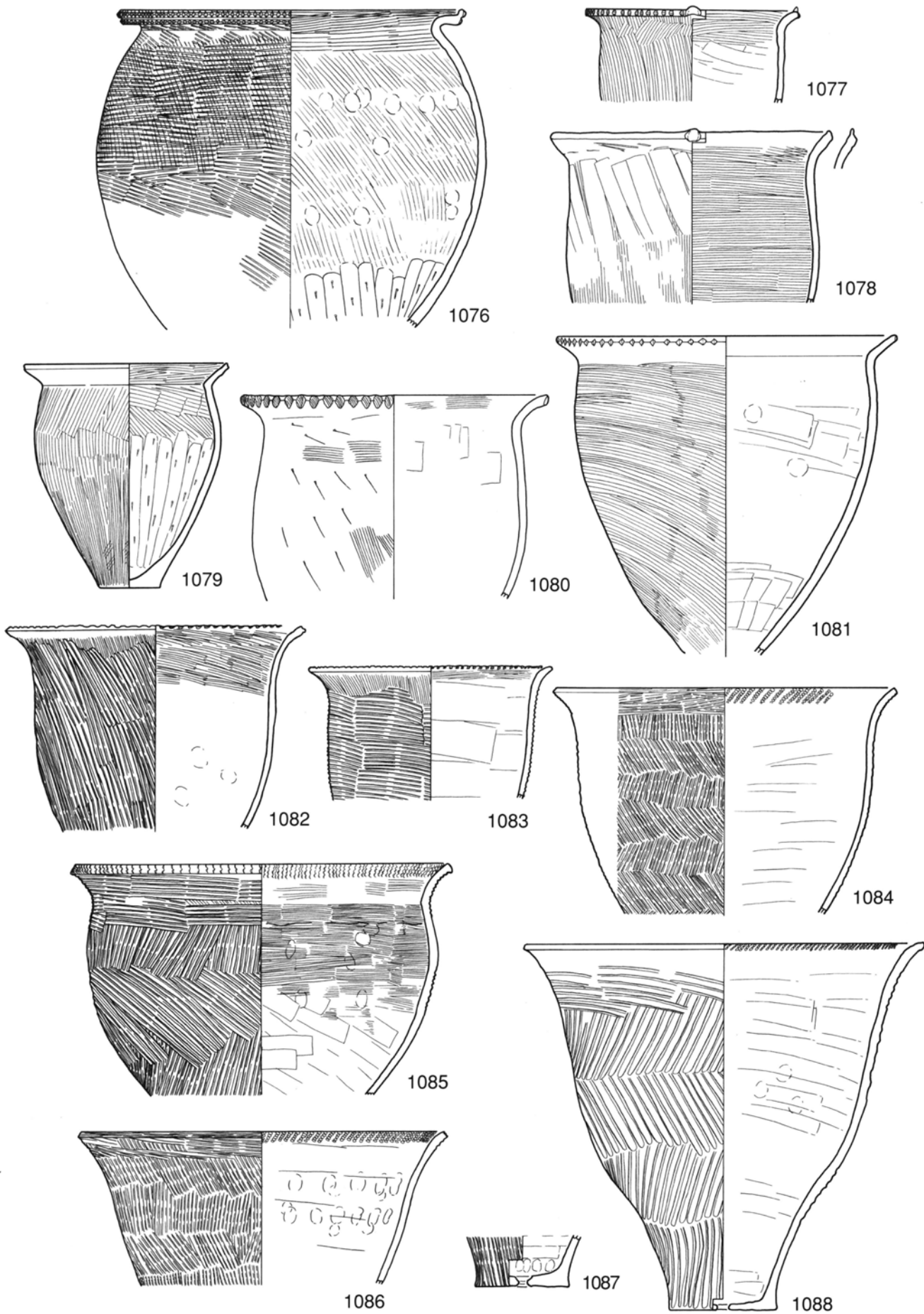


图 107 S D 16 (2)

(1/4)

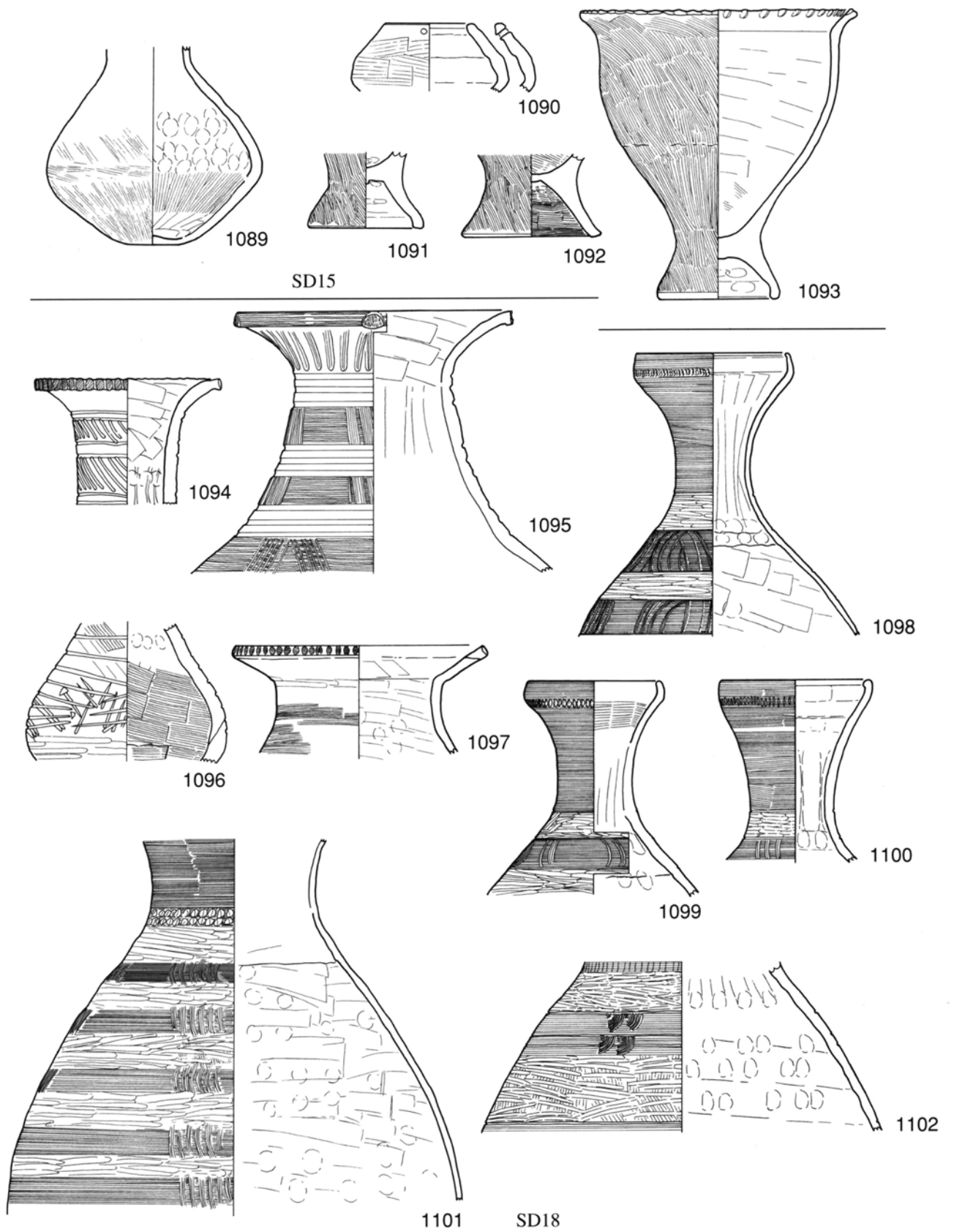
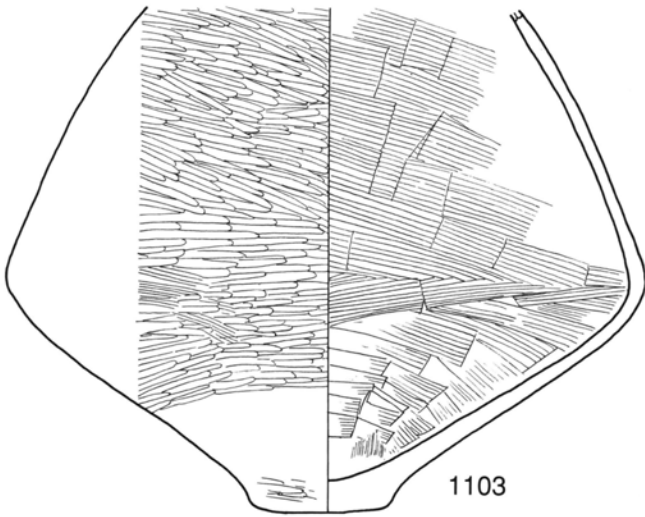
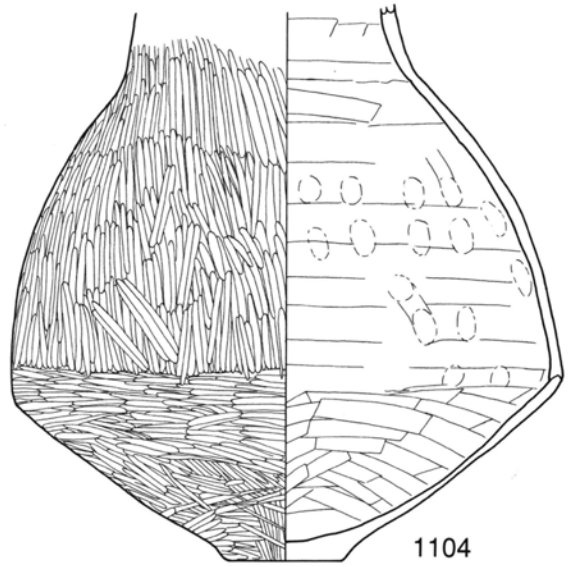


图 108 SD 15 · SD 18 (1)

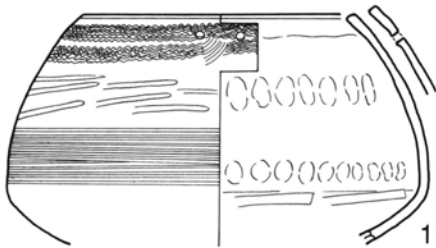
(1/4)



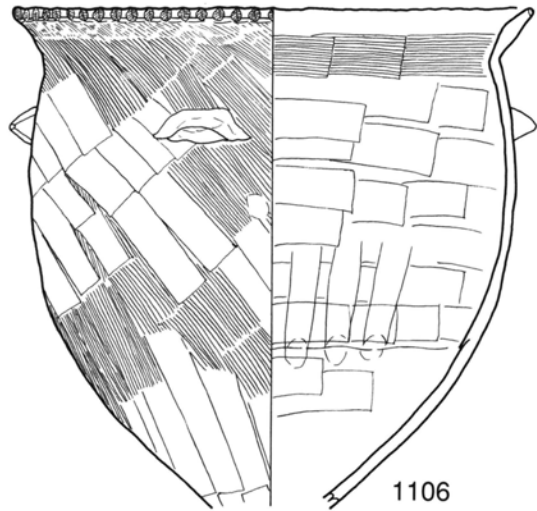
1103



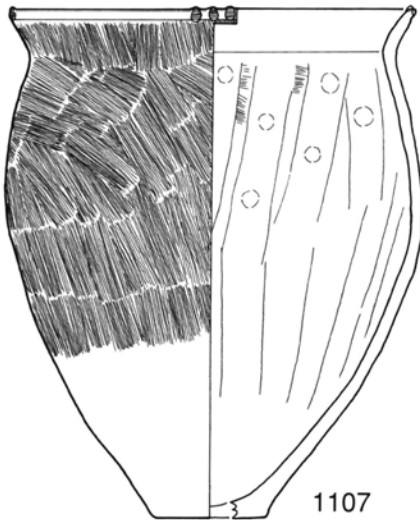
1104



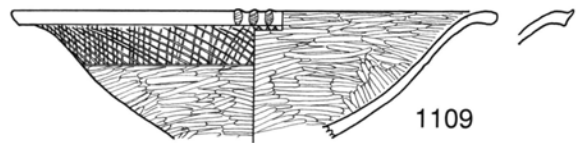
1105



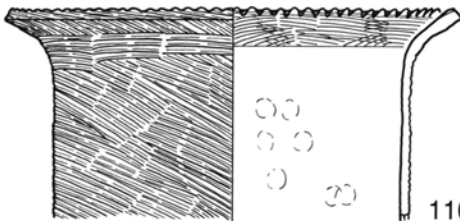
1106



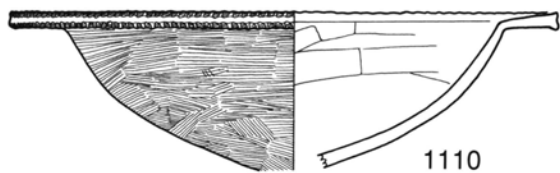
1107



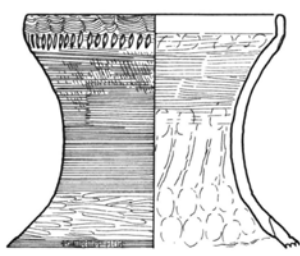
1109



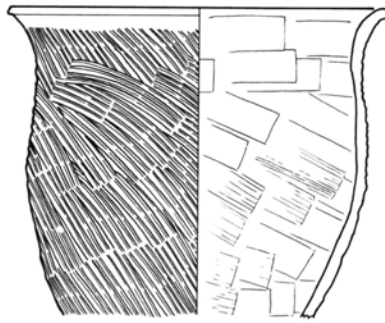
1108



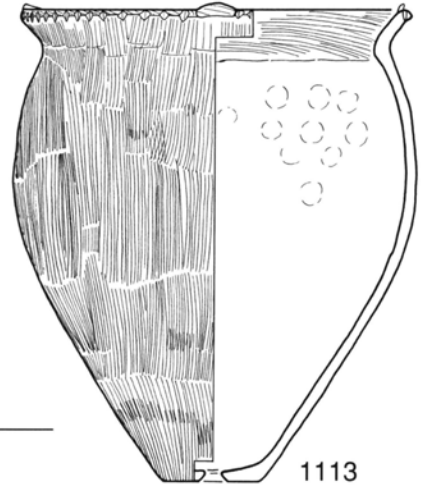
1110



1111

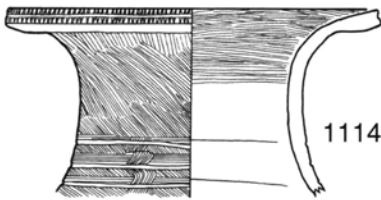


1112

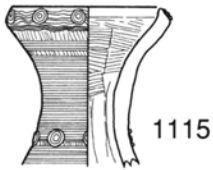


1113

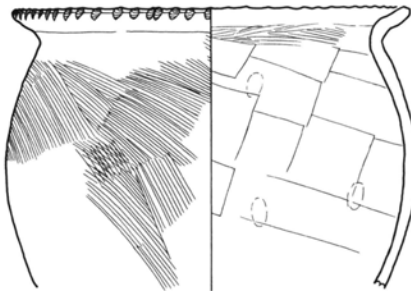
SD19



1114



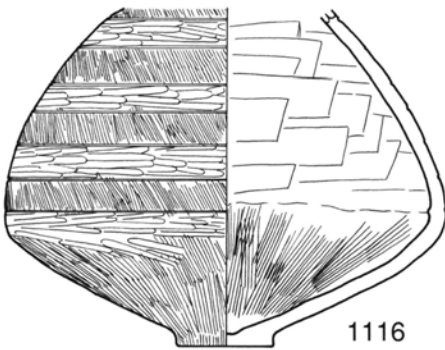
1115



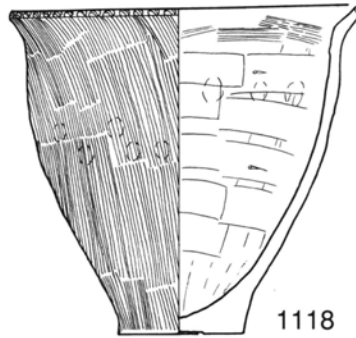
1117



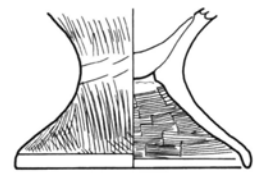
1119



1116

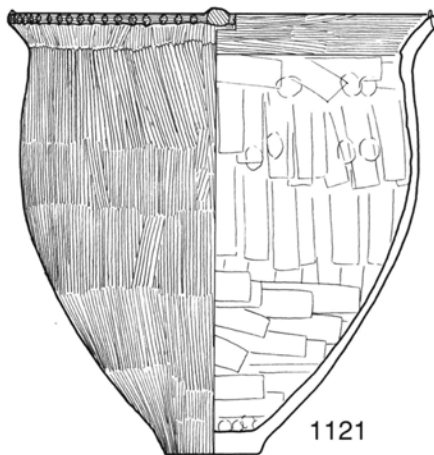


1118

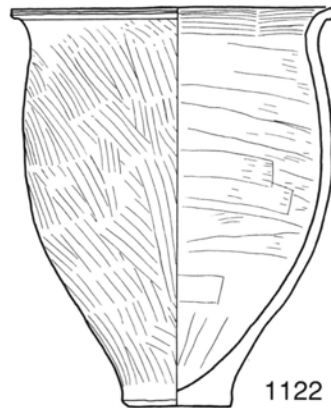


1120

SD20



1121

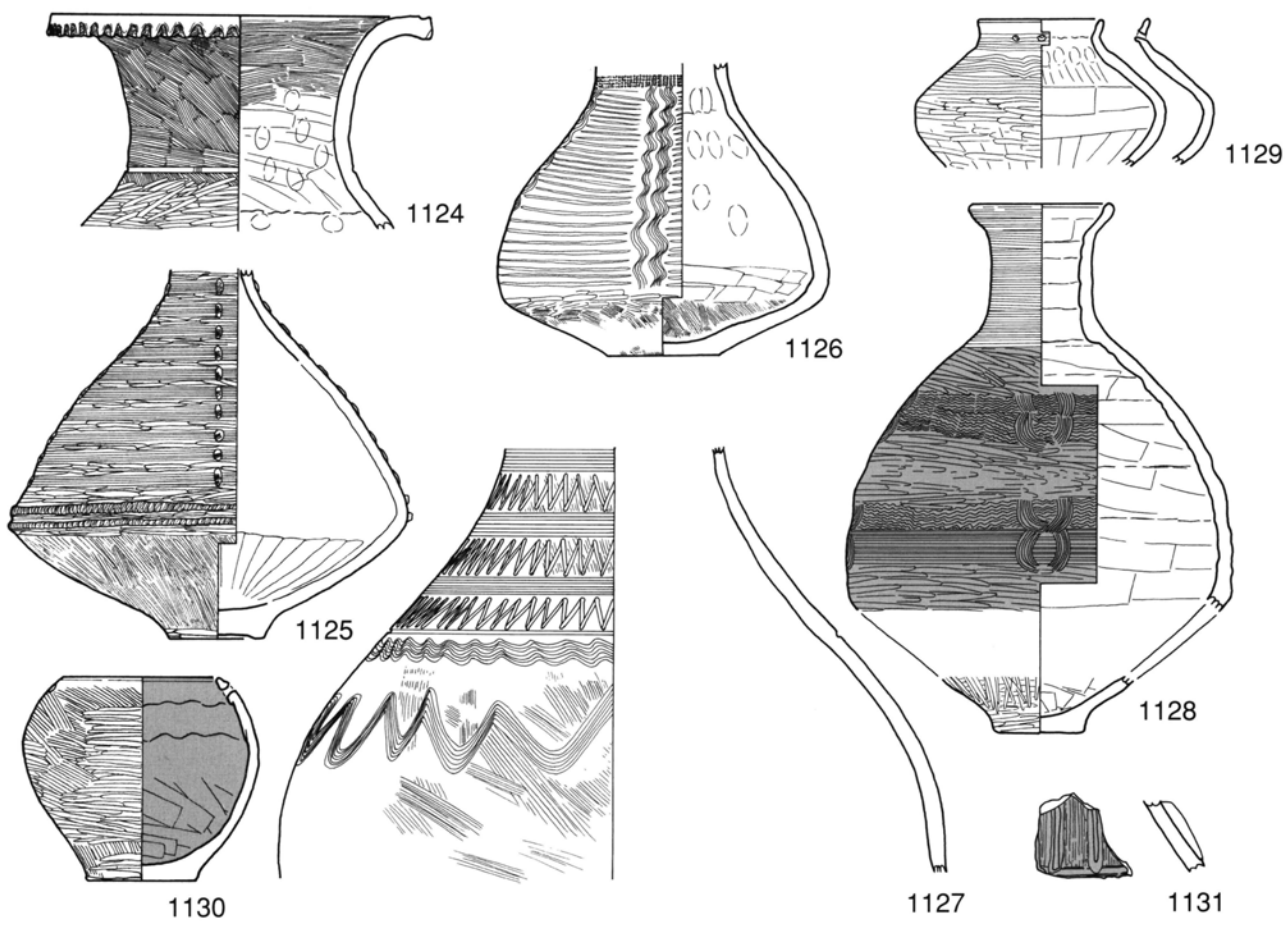


1122

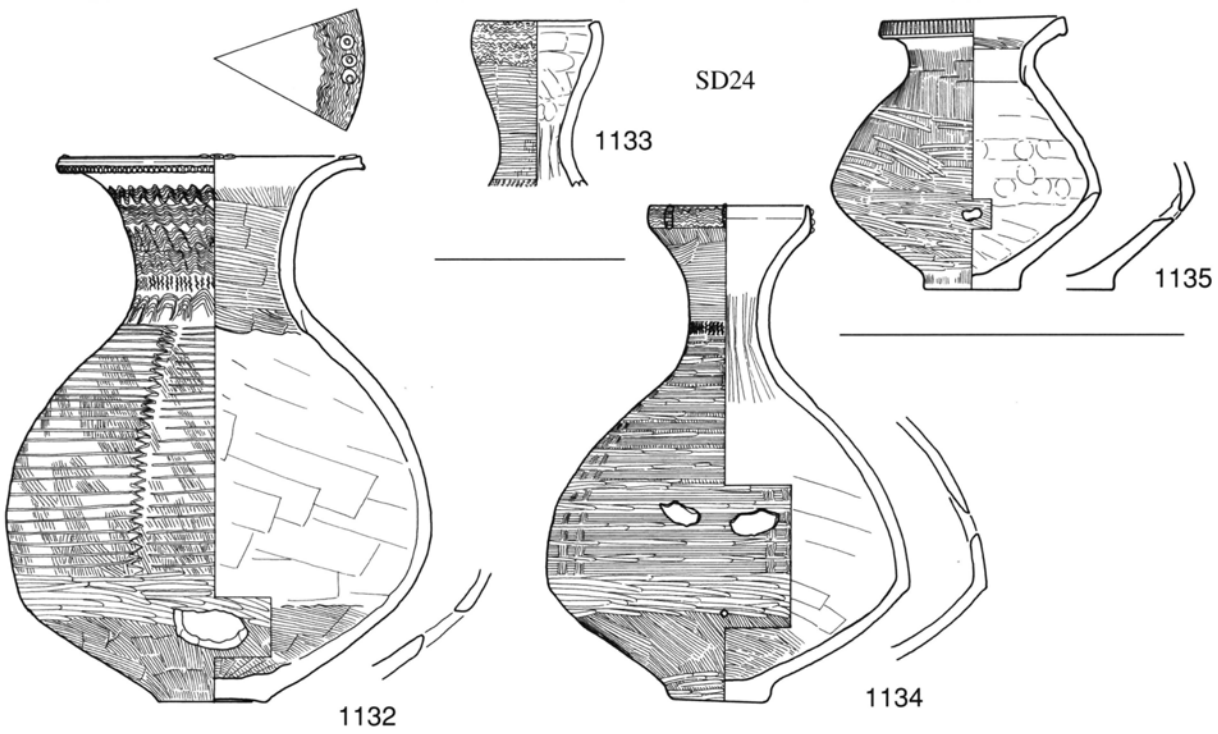
SD23

图 110 SD 19 · SD 20 · SD 23

(1/4)



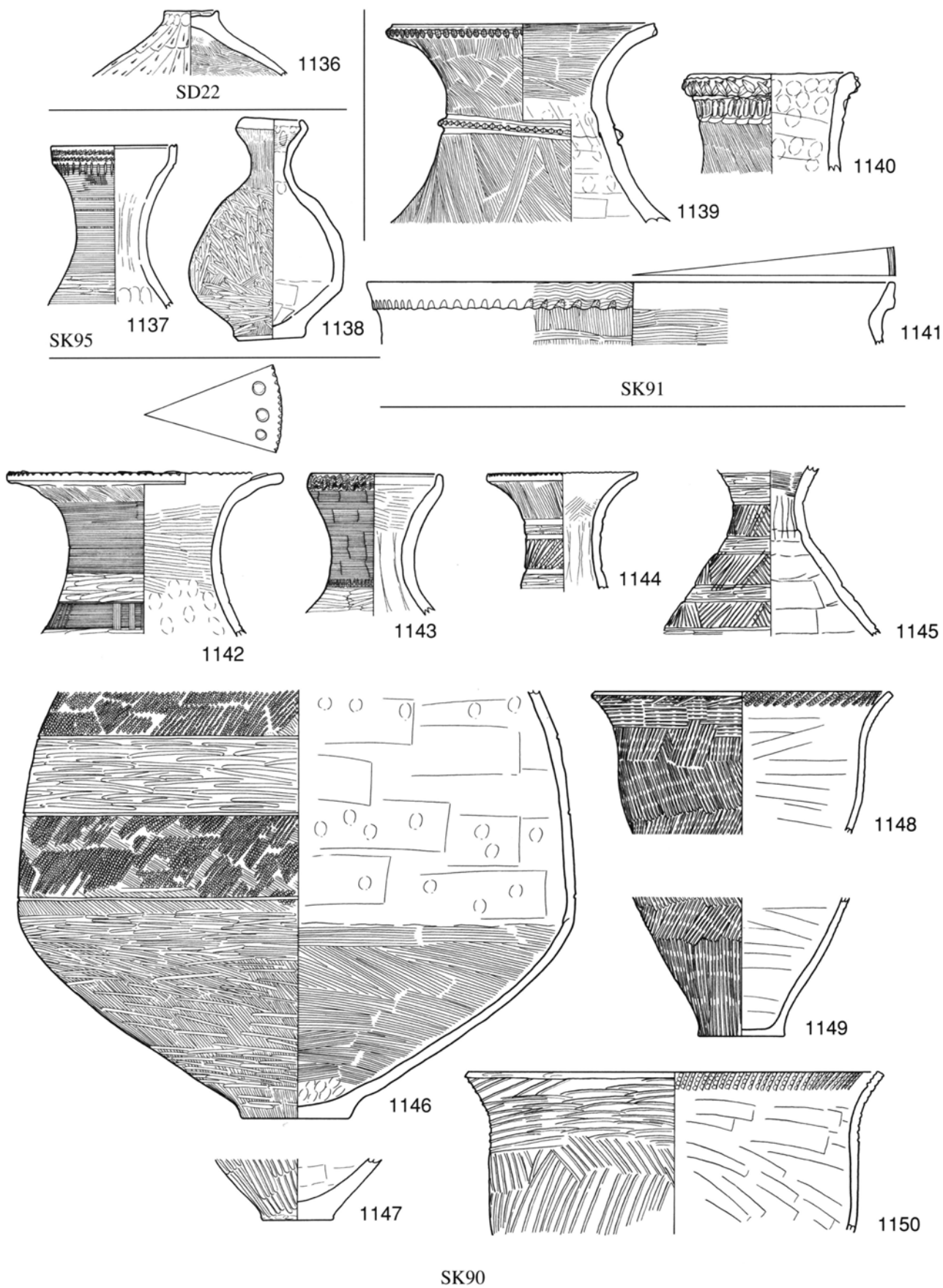
SD21



SD25

图 111 SD 21 · SD 24 · SD 25

(1/4)



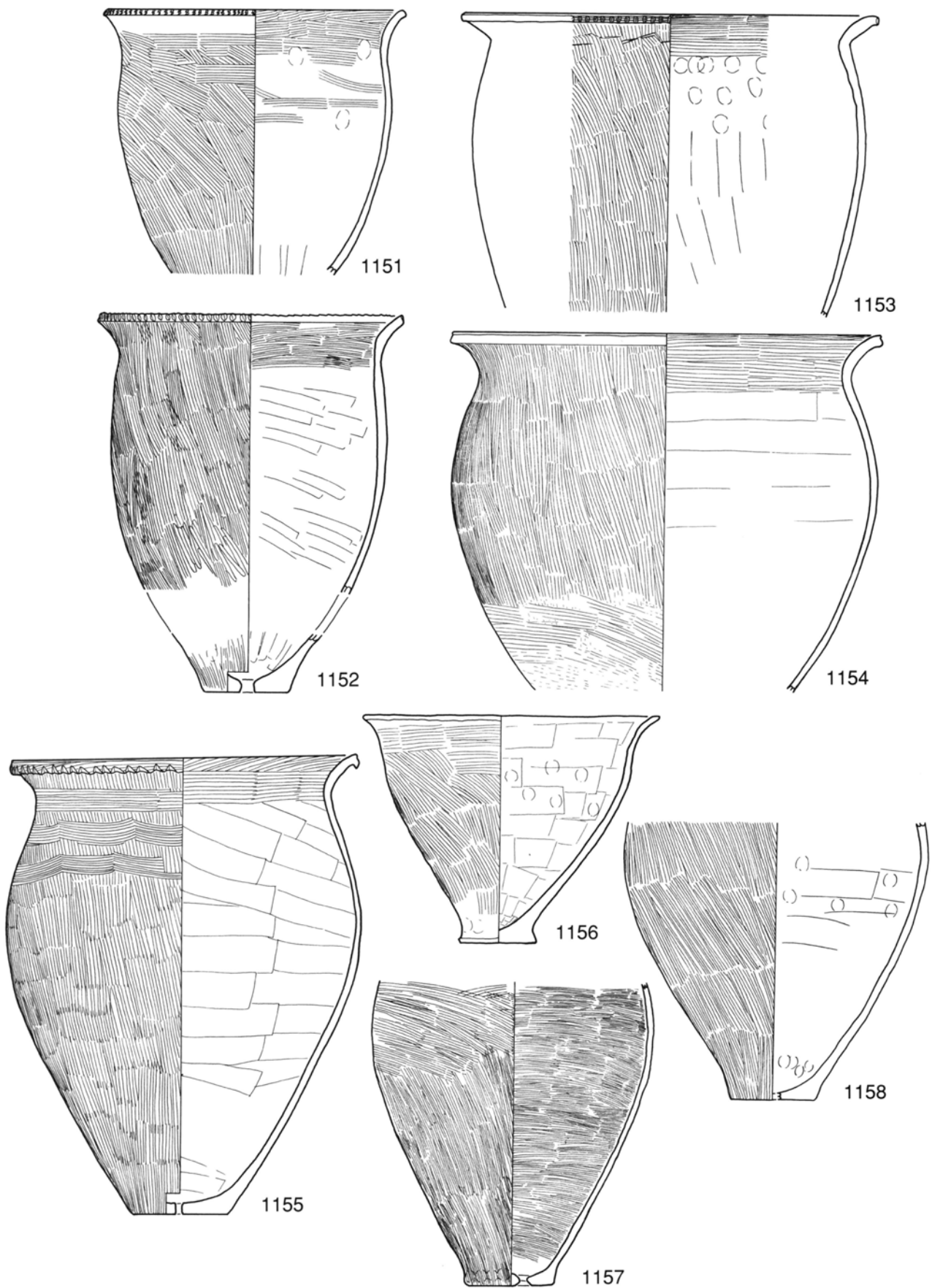


图 113 S K 90 (2)

(1/4)

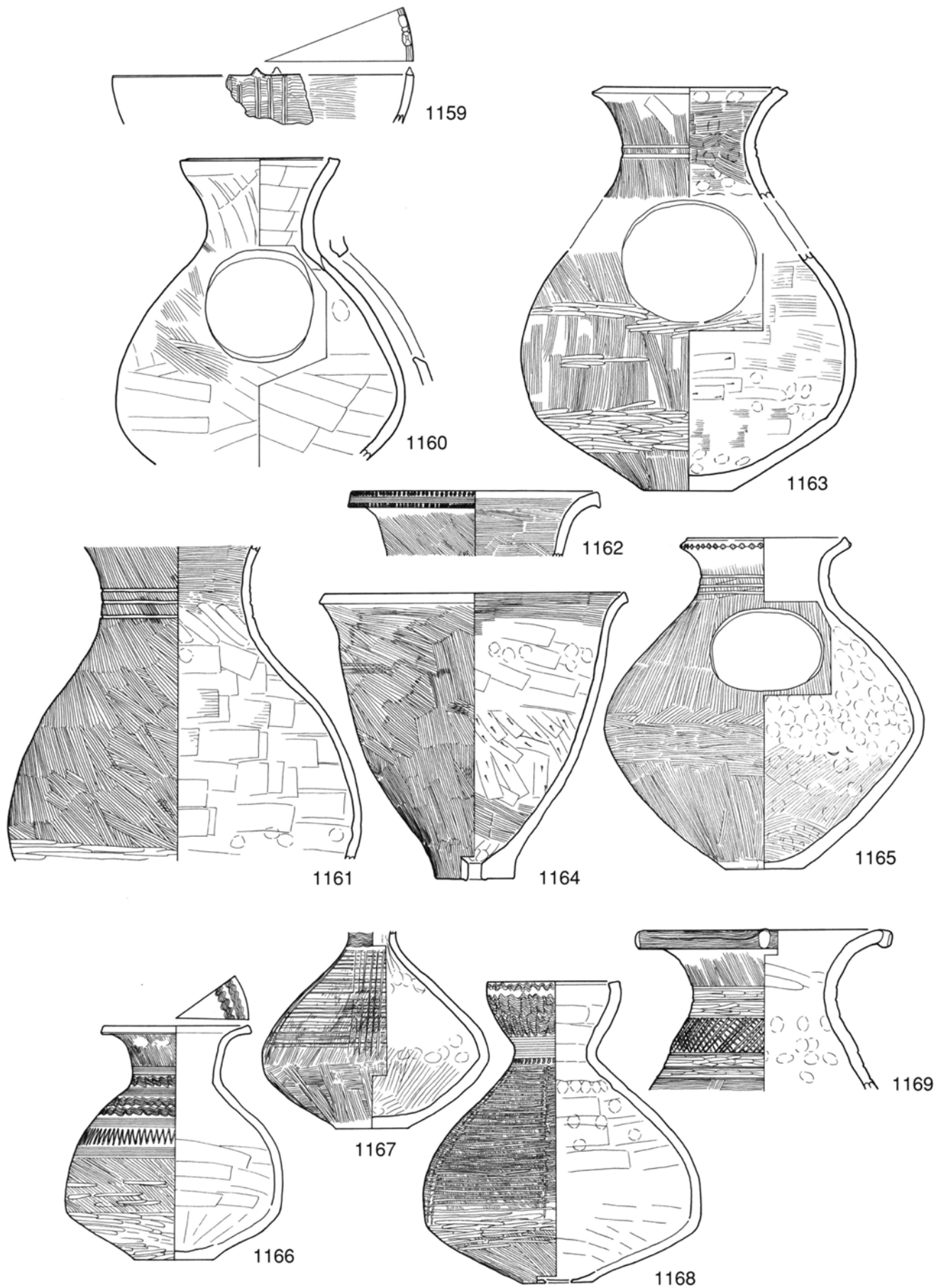


图 114 SK 89

(1/4)

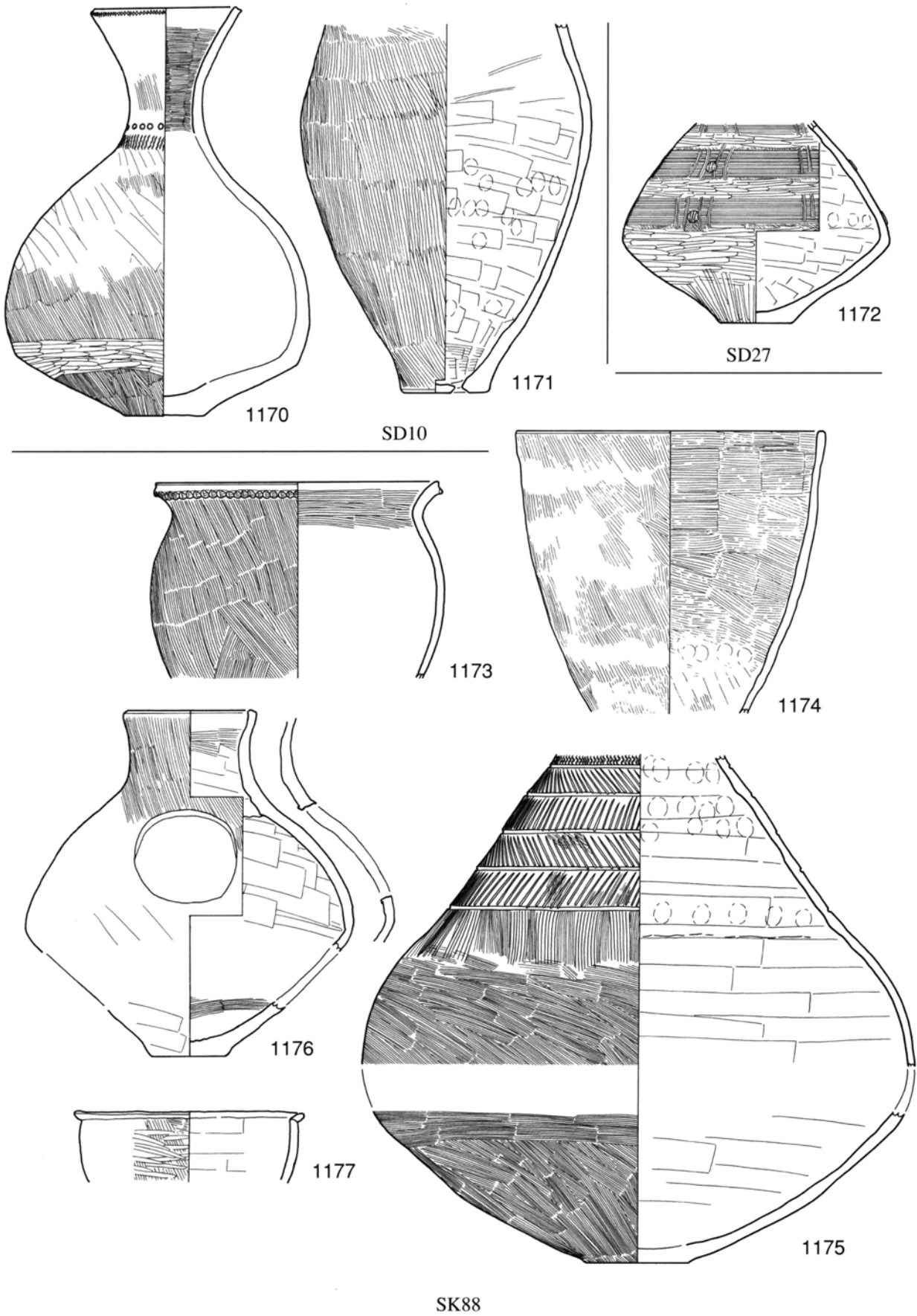


图 115 SD 10 · SD 27 · SK 88

(1/4)

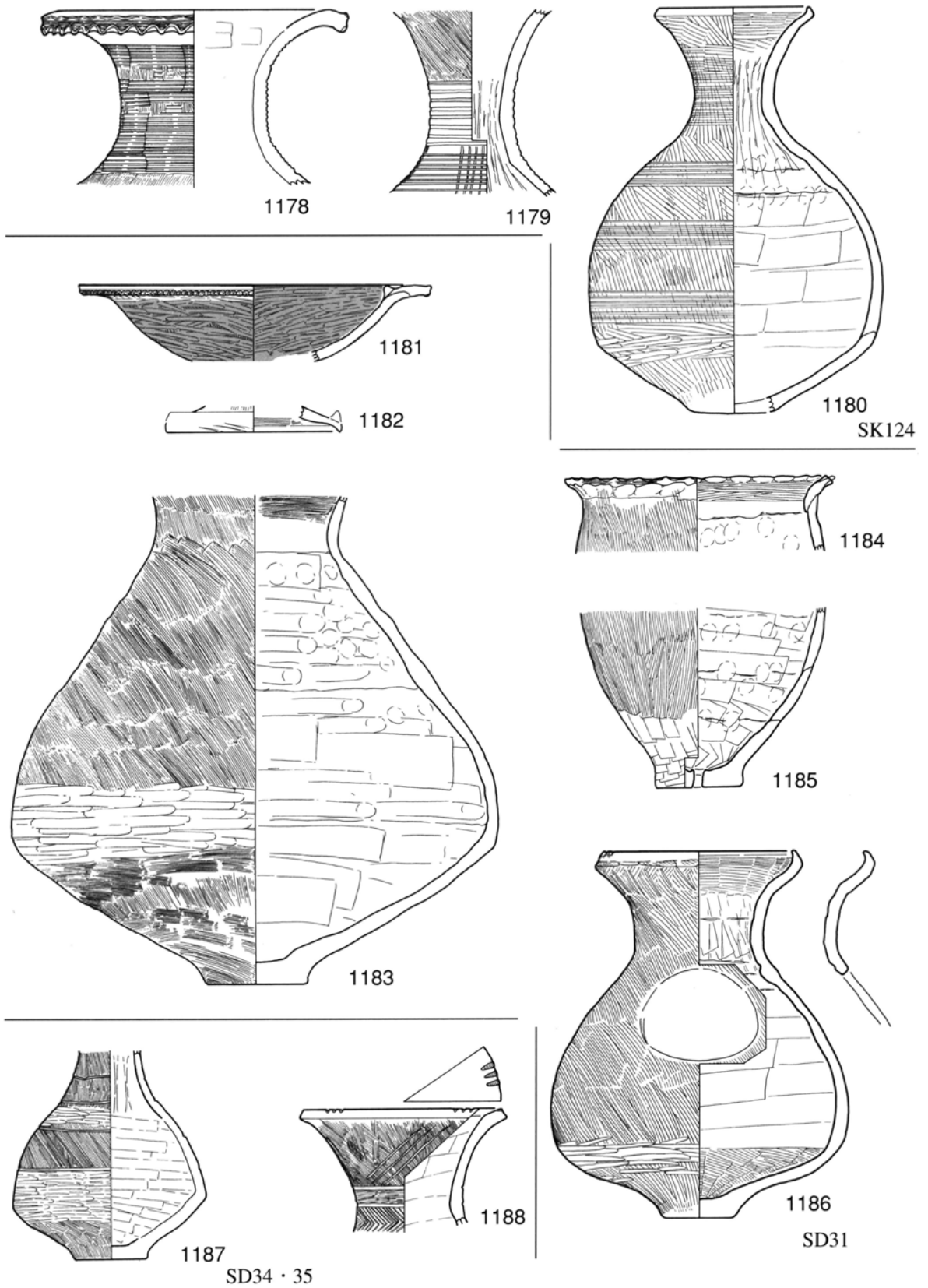
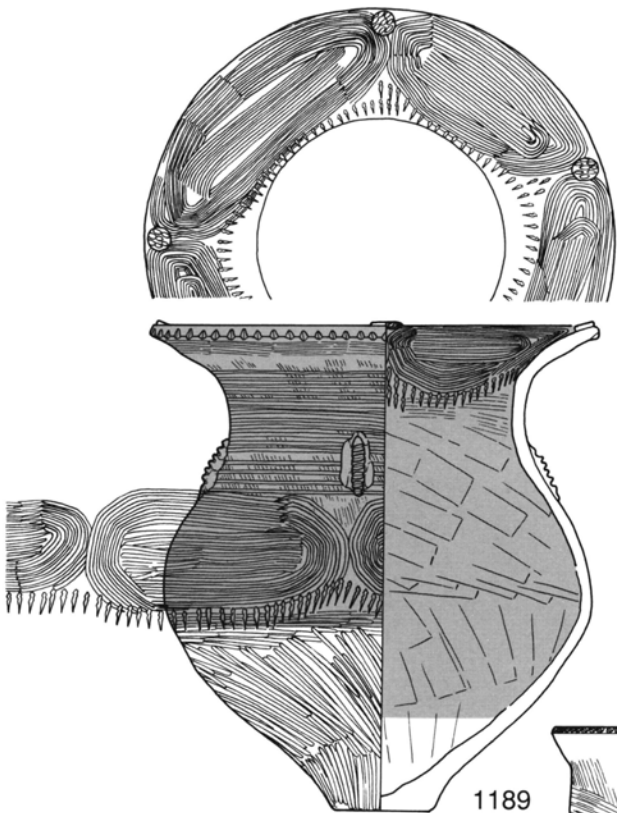
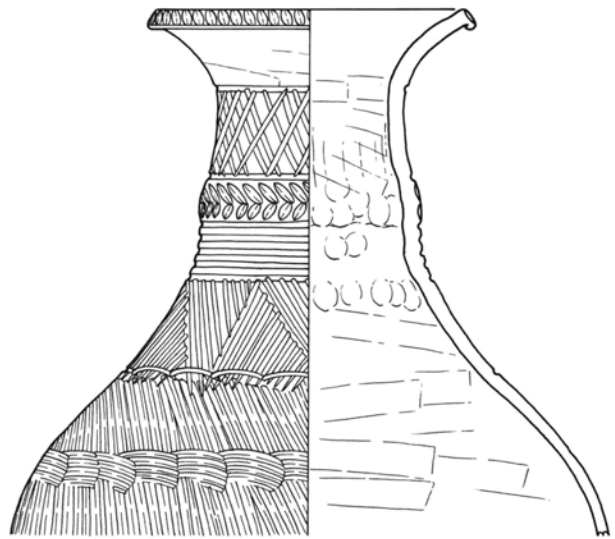


図 116 S K 124 ・ S D 31 ・ S D 34 ・ S D 35

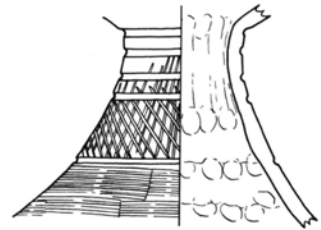
(1/4)



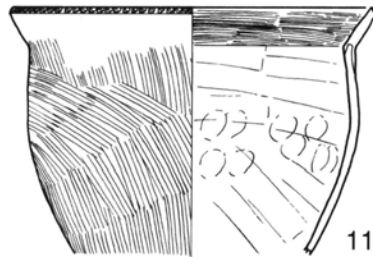
1189



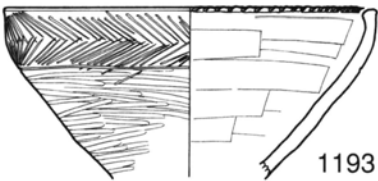
1190



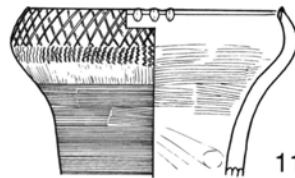
1191



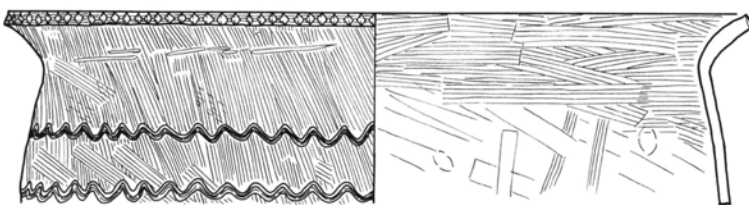
1192



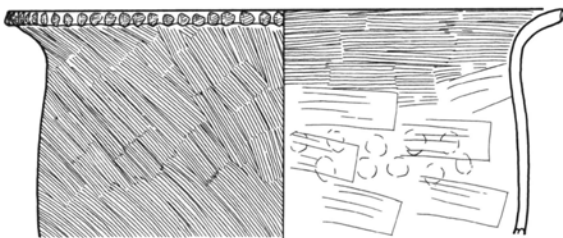
1193



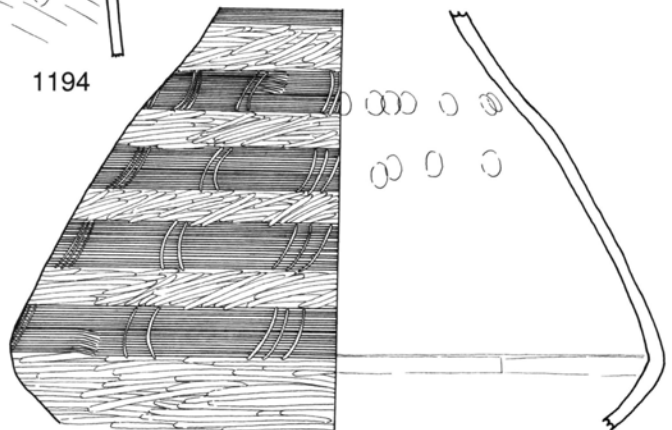
1196



1194



1195



1197

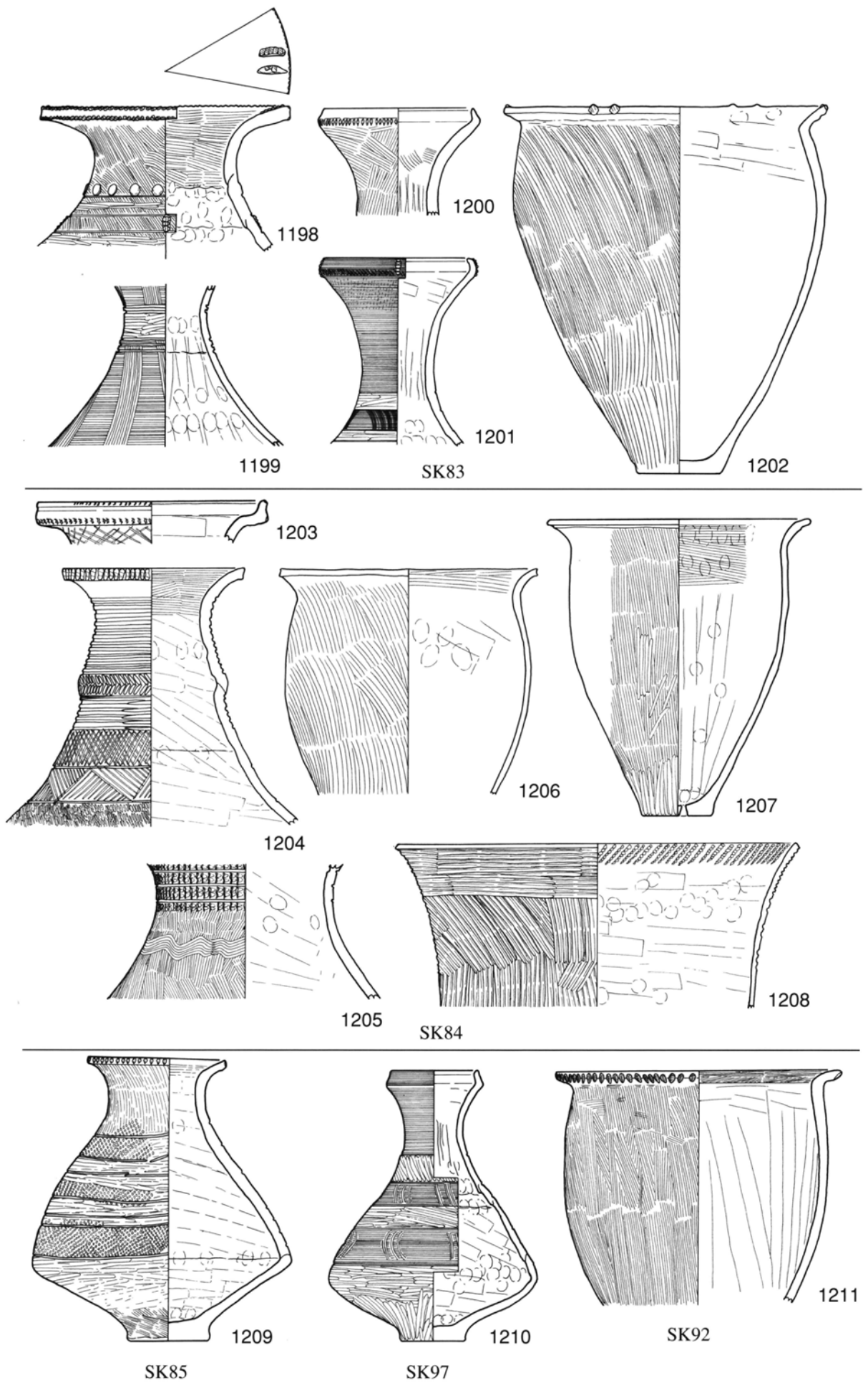


图 118 S K 83 · S K 84 · S K 85 · S K 97 · S K 92

(1/4)

(27) S K 83 (図 118)

1198はI系の壺。口縁内面に棒状浮紋を2×4単位で付ける。1199は半截竹管状工具を多用するII系の細頸壺か？1200・1201はI系の細頸壺。1202はI系のハケ甕。口縁端部の2ヶ所1単位のハケ押圧は円周5分割の位置に付く。

(28) S K 84 (図 118)

1203はIII系の壺。口縁部上下端に二枚貝腹縁による連続刺突を加える。1204はII系の細頸壺。ヘラ状工具による複合鋸歯紋の下には二枚貝背面圧による擬似縄紋を施す。1205はI系の壺。頸部の刺突紋は二枚貝腹縁。1206・1207はI系のハケ甕。1208はII N系の深鉢。

(29) S K 85 (図 118)

1209は縄紋を紋様帯にもつI系の壺。底部外面に木葉痕がある。

(30) S K 97 (図 118)

1210は付加沈線研磨手法が用いるI系の細頸壺。

(31) S K 92 (図 118)

1211はIハケ甕。

(32) S K 86 (図 119・120)

1212～1222はI系の壺。1212は縄紋帯を施し、付加沈線研磨手法を用いる。1213～1216は赤彩帯をもつ細頸壺。1222は櫛条痕を用いるII系の壺。胴部下半に赤彩がある。

(33) S K 93 (図 120)

1223は板ナデ調整の鉢。

(34) S K 94 (図 120)

1224はハケ調整の高坏。

(35) S K 87 (図 120)

1225～1229は、すべてI系の壺。1226と1229は底部に近い胴部下位に焼成後穿孔が1ヶ所ある。1227は底部外面に木葉痕がある。

(36) S K 100 (図 121)

1230～1232はI系の壺。1230は頸部に二枚貝腹縁による連続刺突紋がめぐる。1231は口縁端部に二枚貝腹縁による施紋を行う。端部上半は条線と円形浮紋、さらに内面には円形浮紋の位置に弧状紋を付ける。端部下半は連続刺突がめぐる。1232は付加沈線研磨手法を用いる。1233はII系の壺。1234はI系のハケ甕。1235～1245はI系の細頸壺。口縁部の特徴を列記すると、1235～1237は二枚貝腹縁あるいはハケメ工具による刺突と棒状浮紋、1238～1240は波状紋、1241～1245はハケメ工具による刺突となる。1246は台付甕の脚台。

(37) S K 101 (図 121)

1247・1248はI系のハケ甕。1249はI系の壺。1250は胴部上半に羽状沈線がめぐる鉢。

(38) S K 102 (図 122)

1251はIV系のタタキ甕の底部。1252はI系の甕。1253はII系の鉢か？胴部の横羽状条痕および口縁内面の刺突は櫛状工具による。

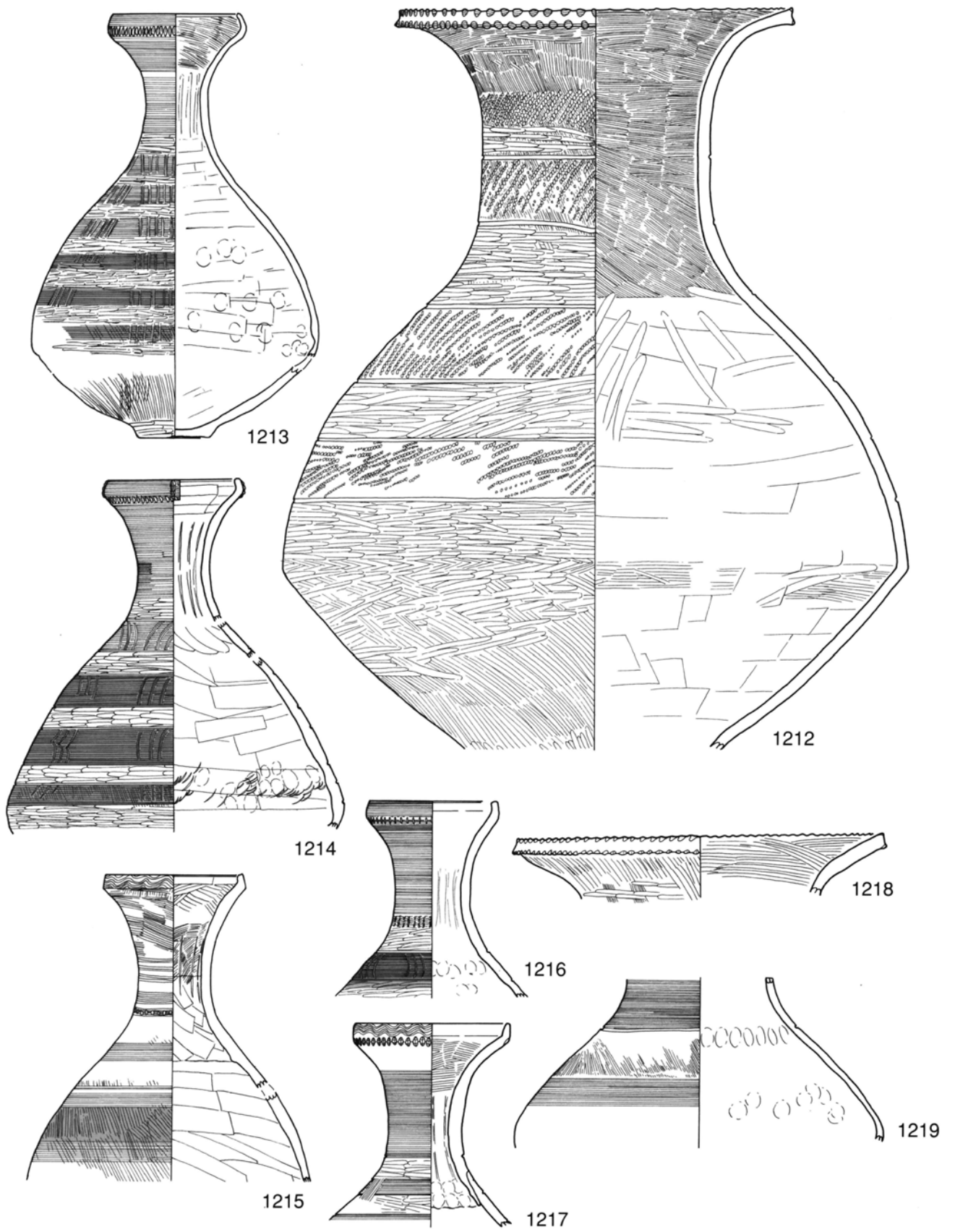


图 119 SK 86 (1)

(1/4)

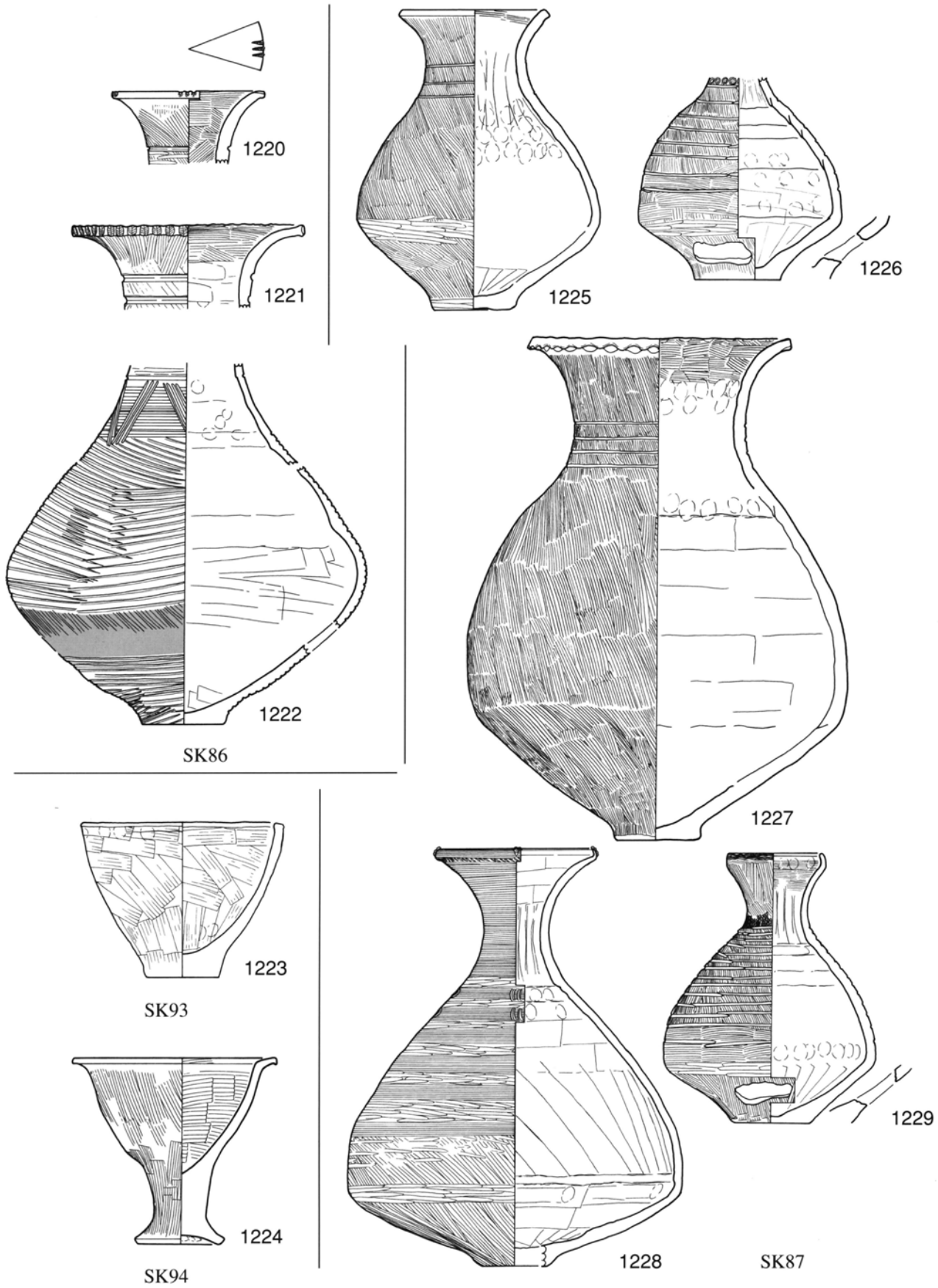
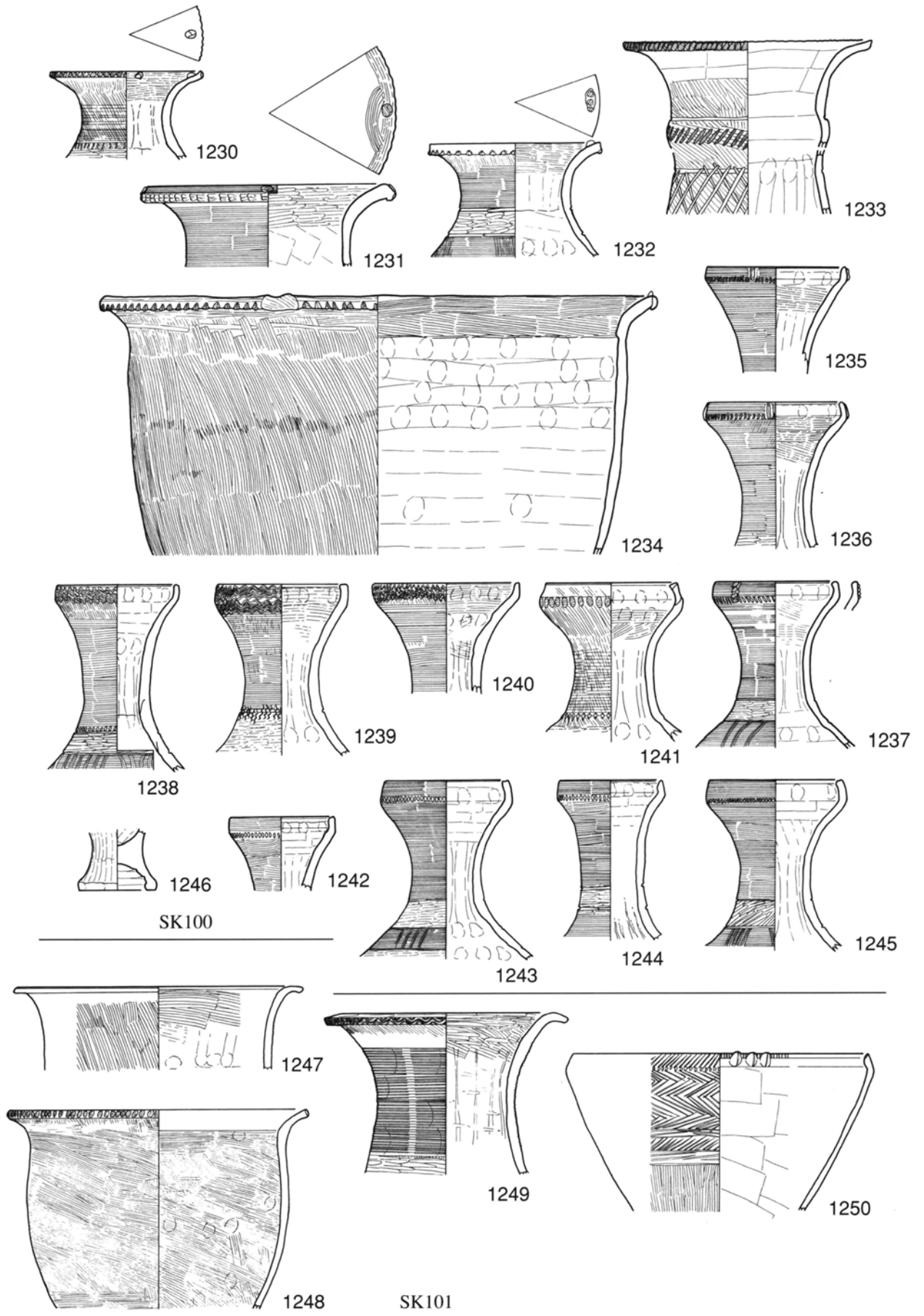


图 120 S K 86 (2) · S D 18 · S K 94 · S K 87

(1/4)



(39) S K 103 (図 122)

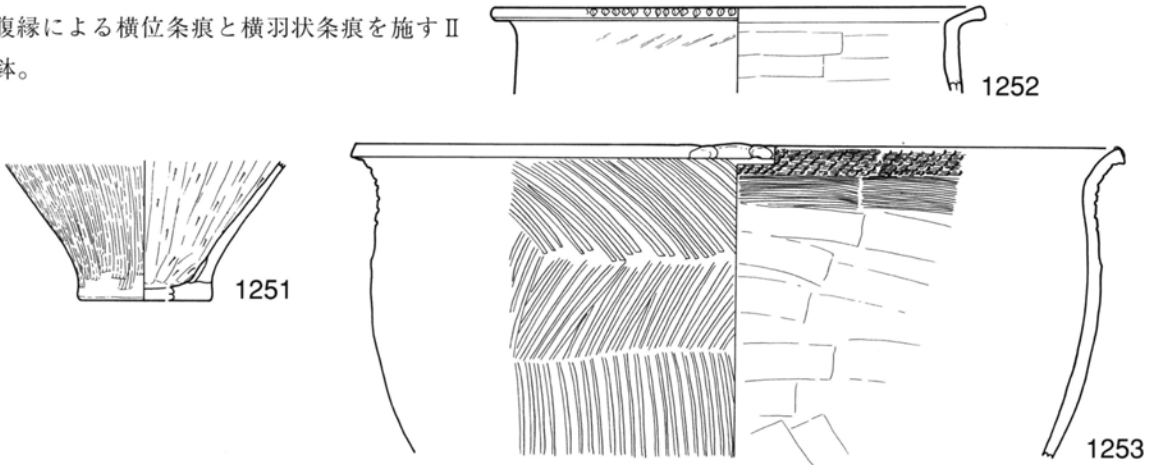
1254はI系の壺。頸部に貼付突帯、突帯上にハケメ工具によるX字状刺突がめぐる。1255は頸部に沈線が1条めぐる甕。1256は円盤に棒状浮紋がつき、端部に2孔1対の穿孔をもつ蓋? 1257は口縁内面に櫛状工具による刺突紋と波状紋、胴部に二枚貝腹縁による横位条痕と横羽状条痕を施すII系の深鉢。

(40) S K 105 (図 122)

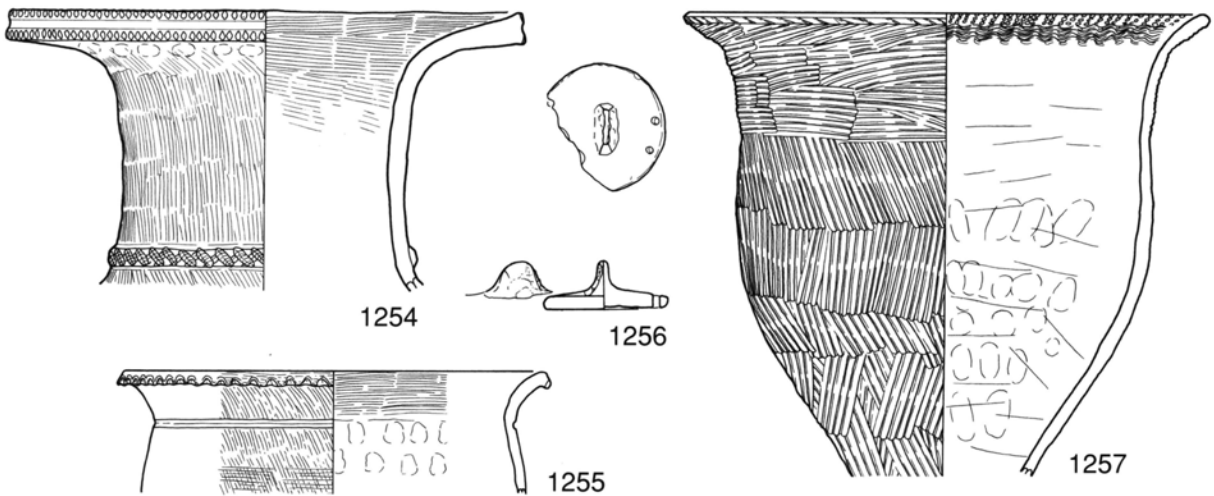
1258はI系の壺。

(41) S X 03 (図 123)

1259 ~ 1262はI系のハケ甕。



SK102



SK103

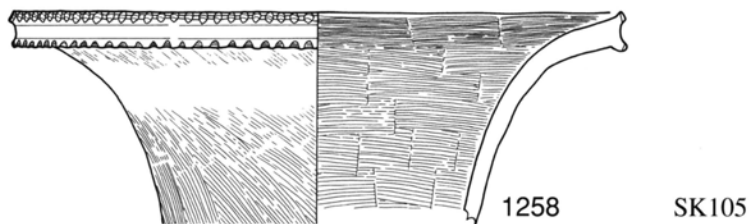
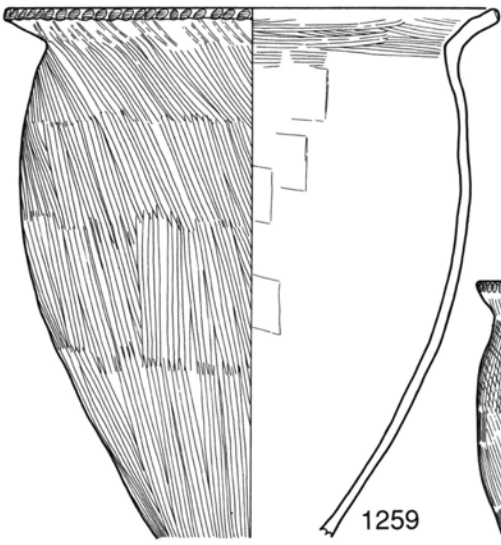
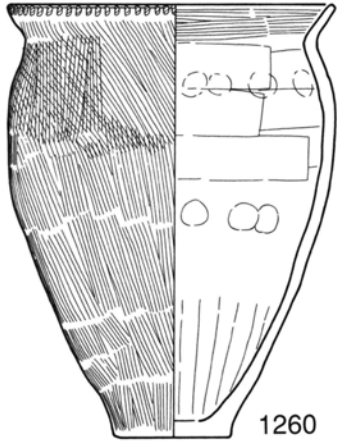


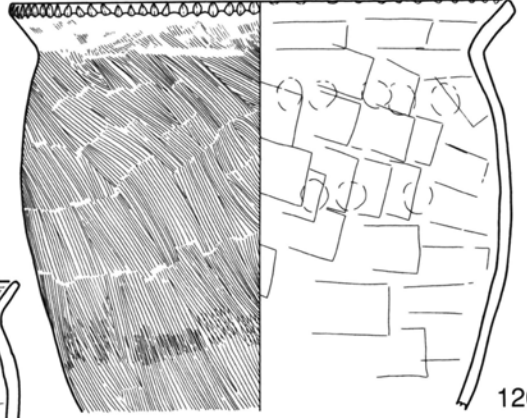
図 122 S K 102・S K 103・S K 105



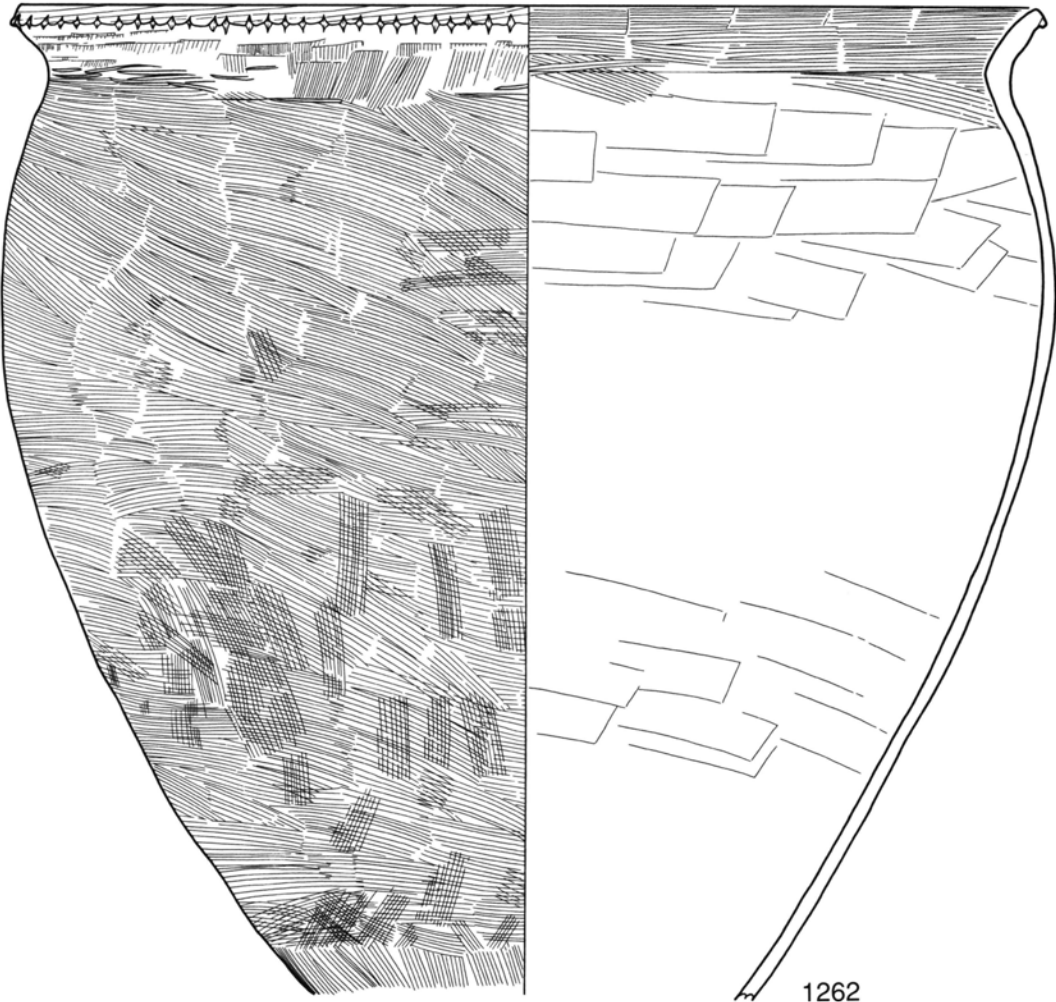
1259



1260



1261



1262

图 123 S X 03

(1/4)

方形周溝墓関連の遺物

(42) S Z 351 (図 124)

A. 北溝 (1263 ~ 1267)

下層はⅣ・Ⅴ期、上層はⅥ期の資料が出土。

1263~1265はⅣ系の壺。1266はⅠ系の高坏。口縁端部に櫛状工具による波状紋、口縁内面に突帯が1条めぐり。1267はⅠ系の細頸壺。頸部の刺突紋は二枚貝腹縁による。

B. 南溝 (1268)

1268はⅠ系の壺。頸部の直線紋は櫛状工具によるもので、短いピッチで7帯めぐり。

(43) S Z 351 関連遺構 (図 124)

A. S D 26・S D 27 (1269 ~ 1271)

1269はⅠ系の細頸壺。1270はⅠ系の壺。口縁部上下端の刻みと胴部上半の波状紋+直線紋は櫛状工具による、頸部の直線紋帯(3帯)と口縁端部の条線は二枚貝腹縁による。1271はⅠ系の高坏。

(44) S Z 354・355 (図 124)

A. 北溝 (1272)

1272は小型のⅠ系壺。

(45) S Z 352・353 (図 125)

A. 西溝 (1273 ~ 1276)

1273~1276はすべてⅠ系の壺。1275は弱い横ナデを口縁部周辺に行う。

B. 南溝 (1277 ~ 1281)

すべてⅠ系の壺。1277は胴部下半に焼成後穿孔が1孔丁寧に穿たれる。1279の胴部縦区画線および胴部最大径をめぐり2条突帯上の刻みは二枚貝腹縁。1280の頸部刺突および胴部縦区画刺突は二枚貝腹縁。

C. 北溝 (1282・1283)

1282はⅣ系の台付鉢になるもので、透し孔が8方向に開く。鉢部の内外面ともヘラミガキ調整される。1283はⅠ系の壺。頸部の刺突紋は二枚貝腹縁か？

(46) S Z 356・357 (図 126 ~ 129)

A. 北溝層位不明 (1284 ~ 1288)

1284~1287はⅠ系の壺。1286の頸部刺突紋と胴部縦区画刺突紋は櫛状工具。縦区画は6方向。1288は小型の壺か？

B. 北溝上層 (1289 ~ 1293)

1289はⅢ系の壺。1290は口縁端部に波状紋を施すハケ甕。1291は口縁端部下位と胴部上位に板状工具による刺突紋がめぐり甕。1292は小型の壺。脚が付くか？1293はⅠ系の壺。

C. 北溝下層 (1294 ~ 1303)

1294は円窓付土器。1295は小型の鉢。1296はミニチュア土器。1298・1299・1302はⅣ系の壺。1300・1303はⅠ系の細頸壺。1301はⅣ系のタタキ甕で、口縁部下端にイタ刺突がなされる。体部外面の成形・調整は。口縁部から頸部の斜位タタキ→ハケ→横位のタタキの順に行われる。

D. 北溝最下層 (1304 ~ 1312)

1304はⅠ系の壺。口縁端部に刻みがめぐり。1305・1308はⅠ系の細頸壺。1306・1307・1309はⅣ系の壺。1309は体部外面下半にタタキ痕がみられ、半裁竹管による縦位の刺突列があるが、列数は不明である。1311はⅣ系のタタキ甕で、口縁部下端にイタ刺突がなされる。体部外面は口縁部のタタキ、上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→口縁部から上位のハケ→下位のハケ→上位のクシ横線の順に成形・調整される。1312はⅡ系の深鉢。

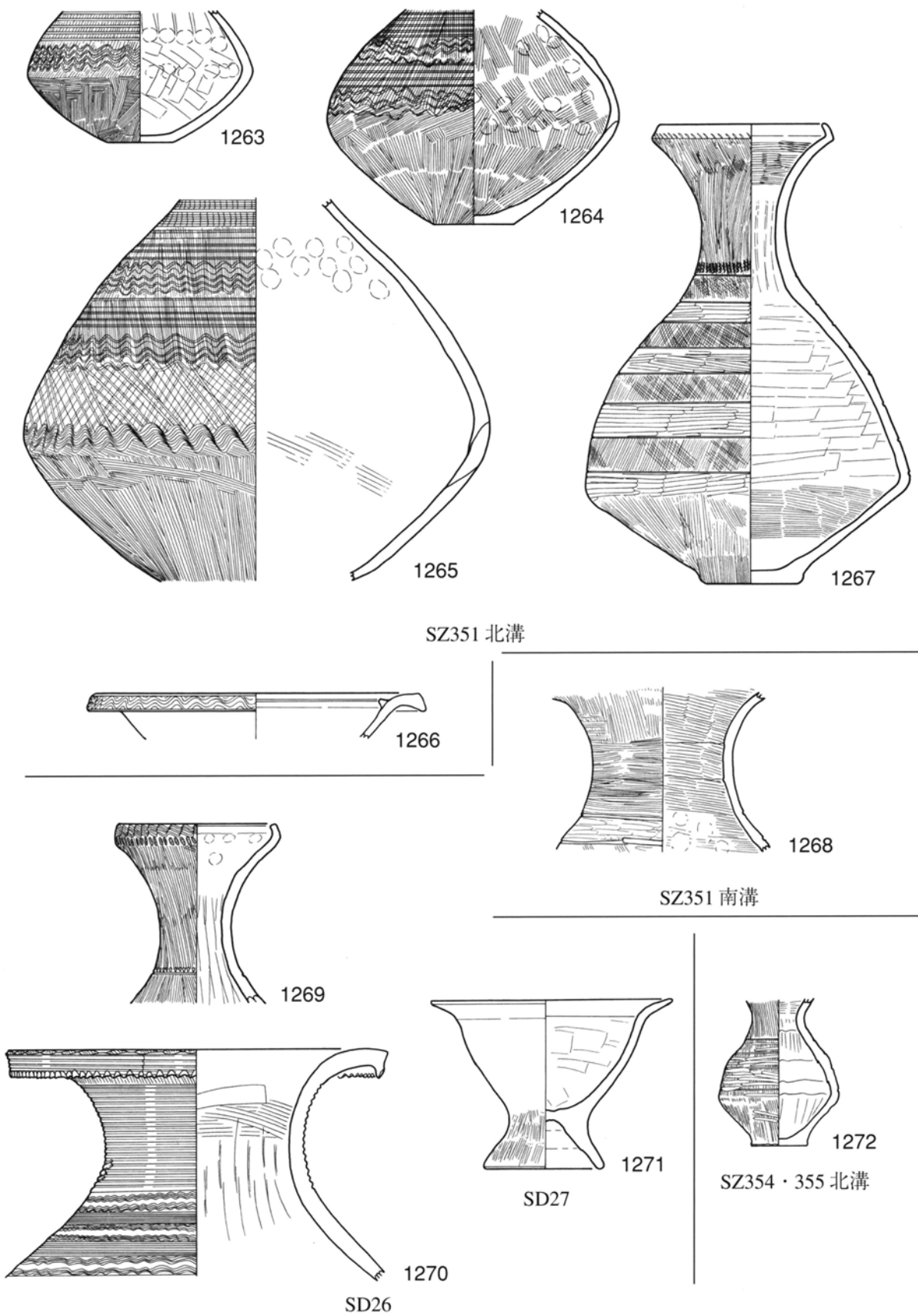
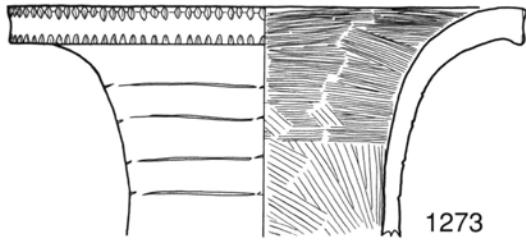


图 124 S Z 351 · 354 · 355、S D 26 · 27

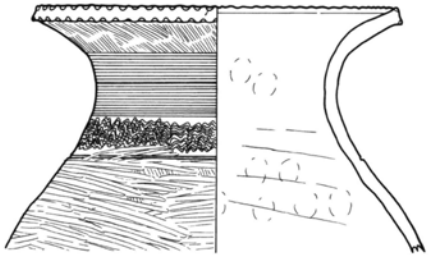
(1/4)



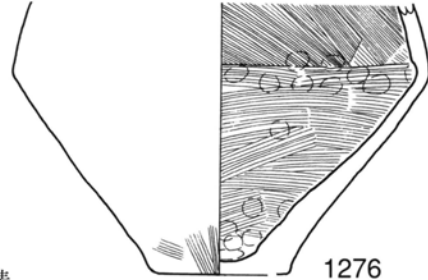
1273



1275

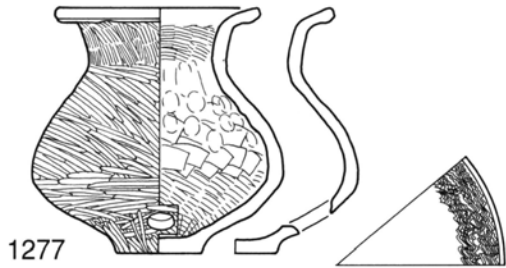


1274

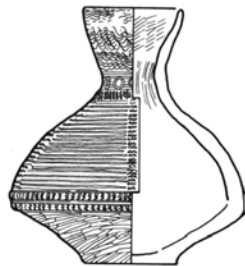


1276

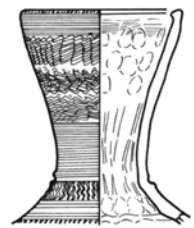
SZ352 · 353 西溝



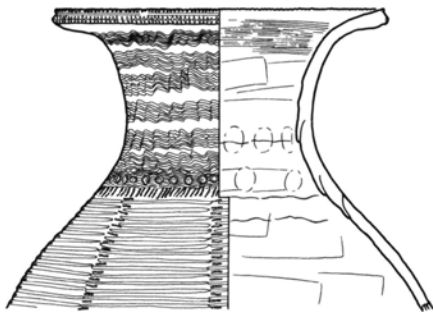
1277



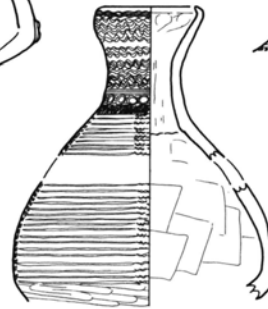
1279



1281



1278

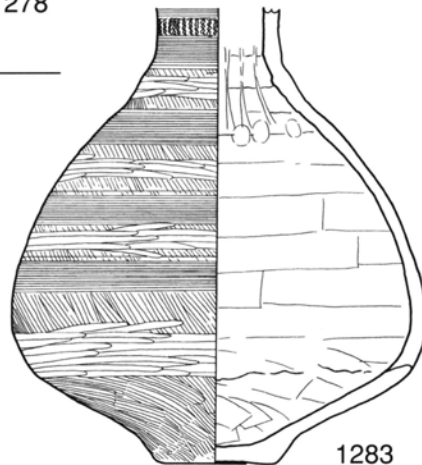


1280

SD352 · 353 南溝



1282

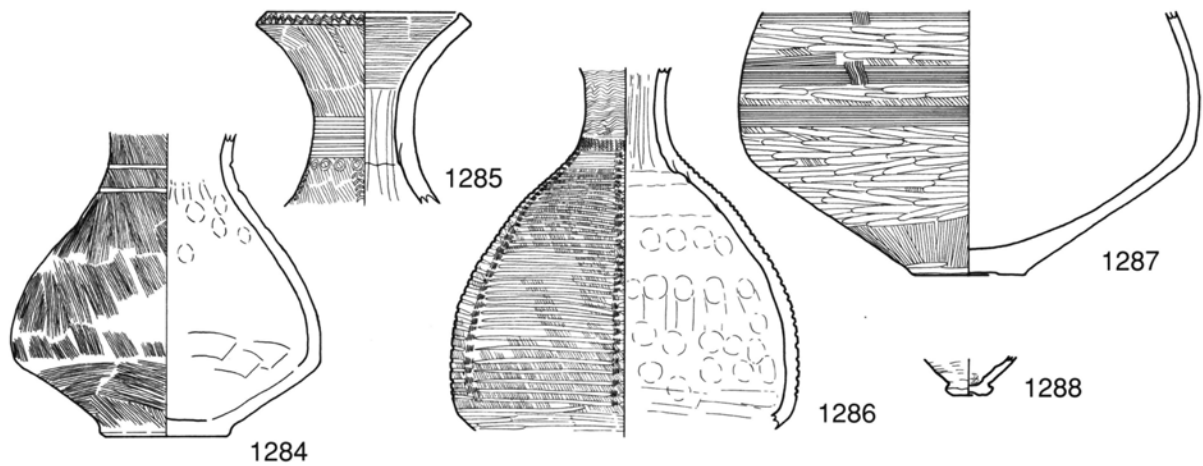


1283

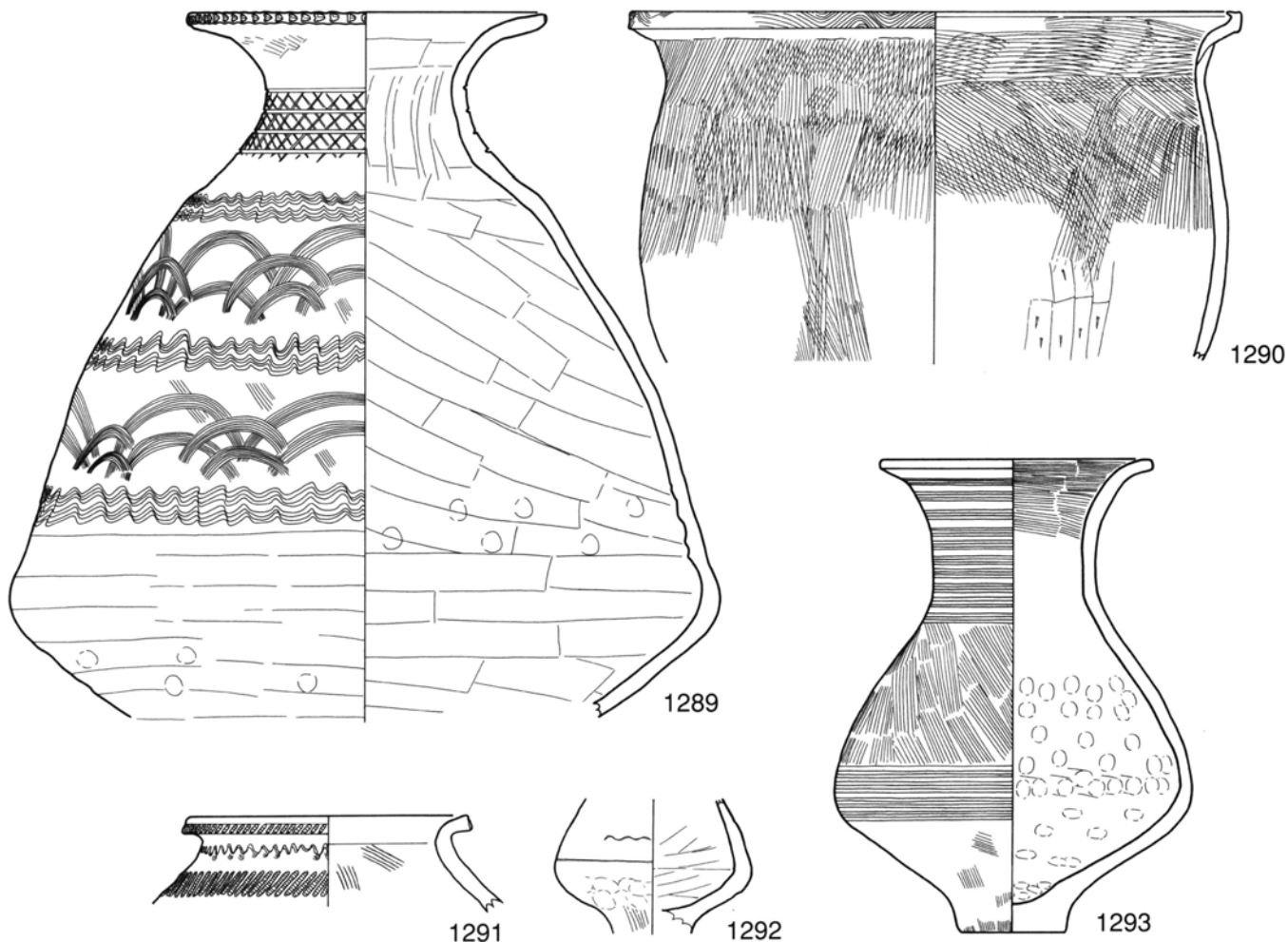
SZ352 · 353 北溝

图 125 S Z 352 · 353

(1/4)



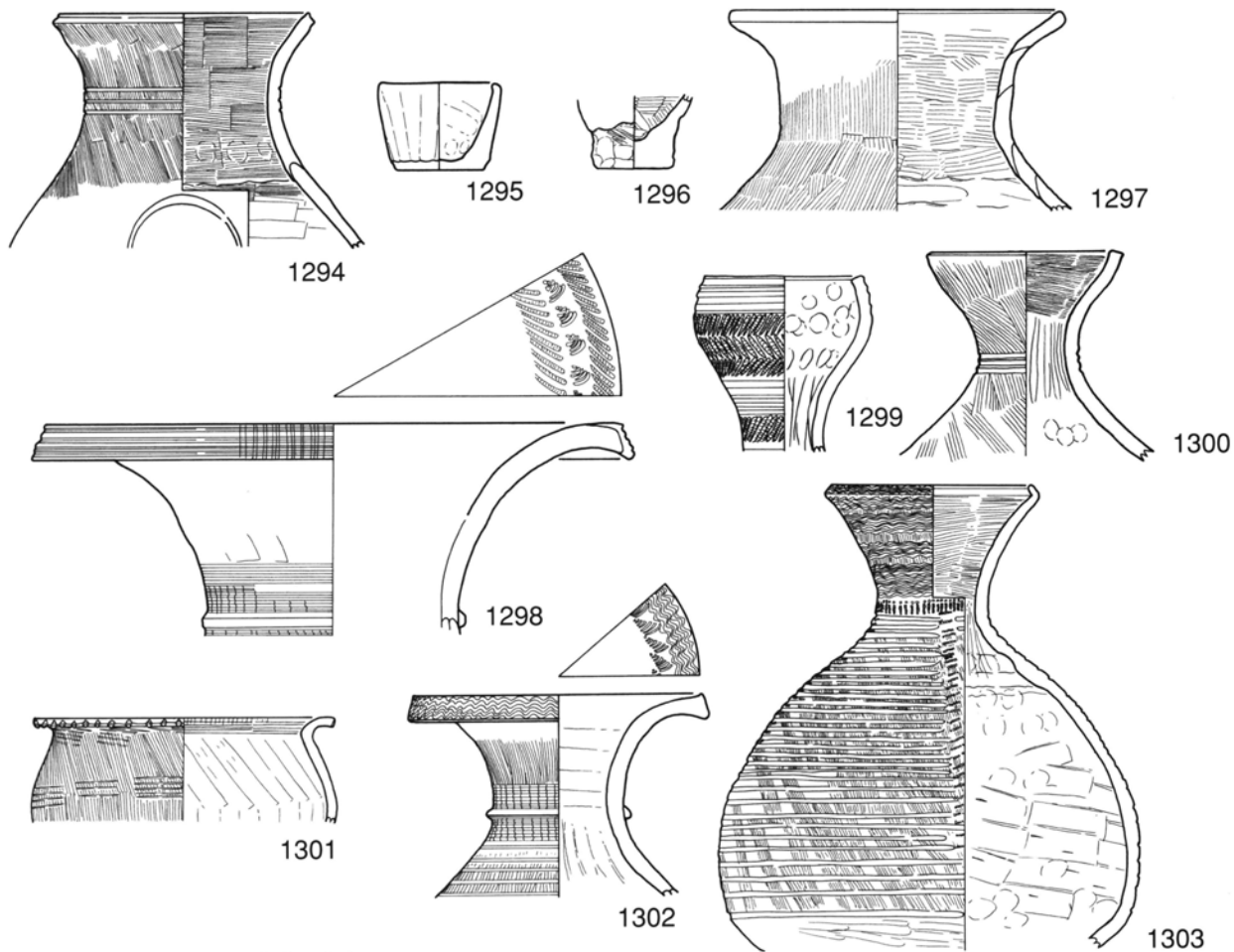
北溝層位不明



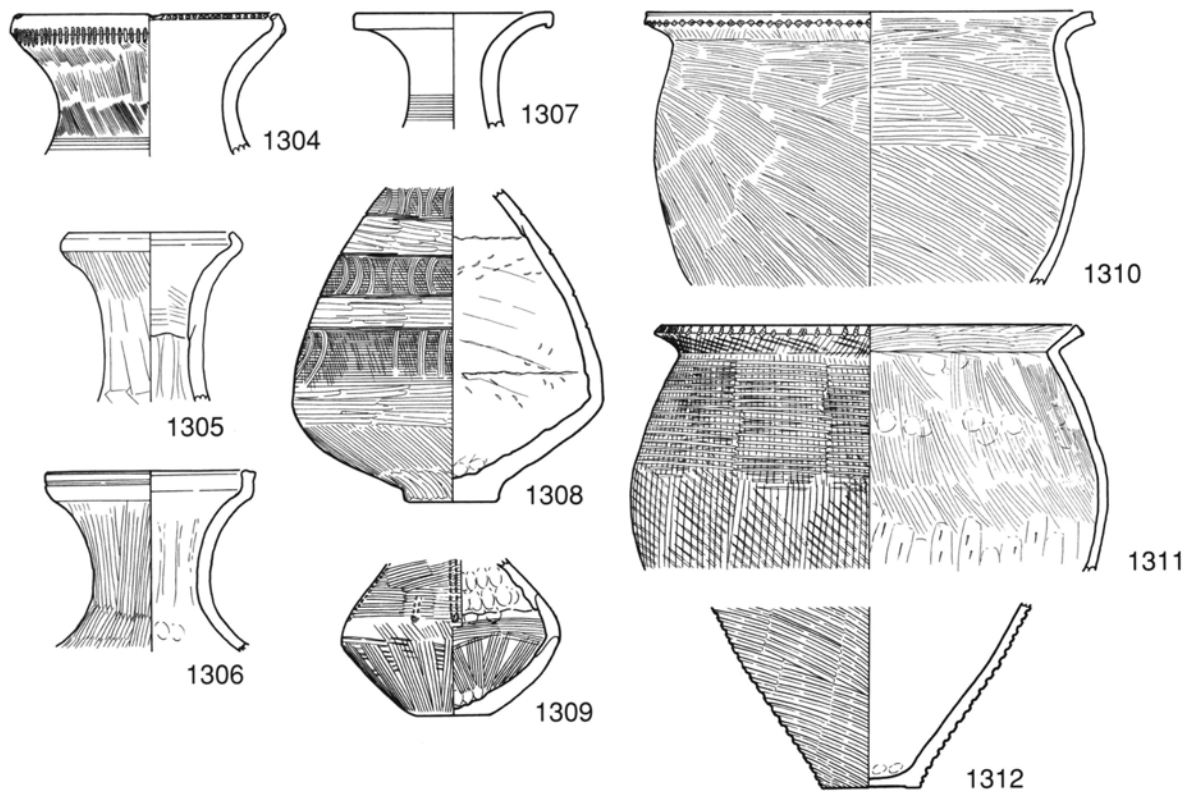
北溝上層

图 126 S Z 356 · 357 (1)

(1/4)



北溝下層



北溝最下層

E. 下層土器集中地点 (1313～1318)

1313・1317は円窓付土器。1314・1315はIV系の細頸壺。1316はI系のハケ甕。底部に焼成前穿孔、底部外面に木葉痕が付く。1318はIV系の高坏。

F. 西溝 (1319～1321)

1319・1320はI系の壺。1320の口縁内面の瘤状突起は3×3単位か？1321はI系のハケ甕。

G. 東溝 (1322～1329)

1322・1323・1325・1328はI系の壺。1324はIV系の細頸壺。1326・1327はI系のハケ甕。両者ともに口縁部下端に刻目を入れる。1329はI系の高坏。

(47) S Z 358・359 (図129・131)

A. 北溝 (1330)・西溝 (1331)

1330・1331はI系の壺。1331は内面の瘤状突起は3×4単位。その間を竹管状工具による刺突が埋める。

B. 東溝 (1332～1335)

1332・1334・1335はI系の壺。1333は高坏の脚部。

C. S Z 358西溝 (1343・1344)

1343はI系の細頸壺。1344はイタまたはクシによる条痕状の調整がなされ、直線紋と不安定な波状紋が巡らされる。

(48) 95 方形周溝墓群関連遺構 (図130)

A. S D 28 (1336～1338)

1336はI系の細頸壺。1337は縦方向のヘラミガキ調整をおこなう甕。1338はI系のハケ甕。

B. S D 29 (1339)

1339はI系の細頸壺。

C. S K 98 (1340)・S K 99 (1341・1342)

1340・1341はI系の細頸壺。1340は体部が横位に大きく延びるもので、クシによる刺突列と連続弧紋が巡る。1342は円窓付土器で、縦位の扇形紋

列が4または5方向に描かれ、その後穿孔されている。

(49) その他の溝 (図131)

S Z 360北溝 (1345・1346) I系の細頸壺。S Z 361南溝 (1347) 鉢。S Z 363西溝? (1348) I系のハケ甕。S Z 363西溝 (1349) IV系の壺。S Z 363東溝 (1350) I系のハケ甕。1次調整に荒いハケメ工具、2次調整に胴部上半を細いハケメ工具を用いる。

(50) S Z 364 (図132)

A. 南溝 (1351)

1351はIV系のタタキのみが施されるタタキ甕で、口縁部外面の斜位タタキ→上位の横位タタキ→中位の斜位タタキの順になされている。

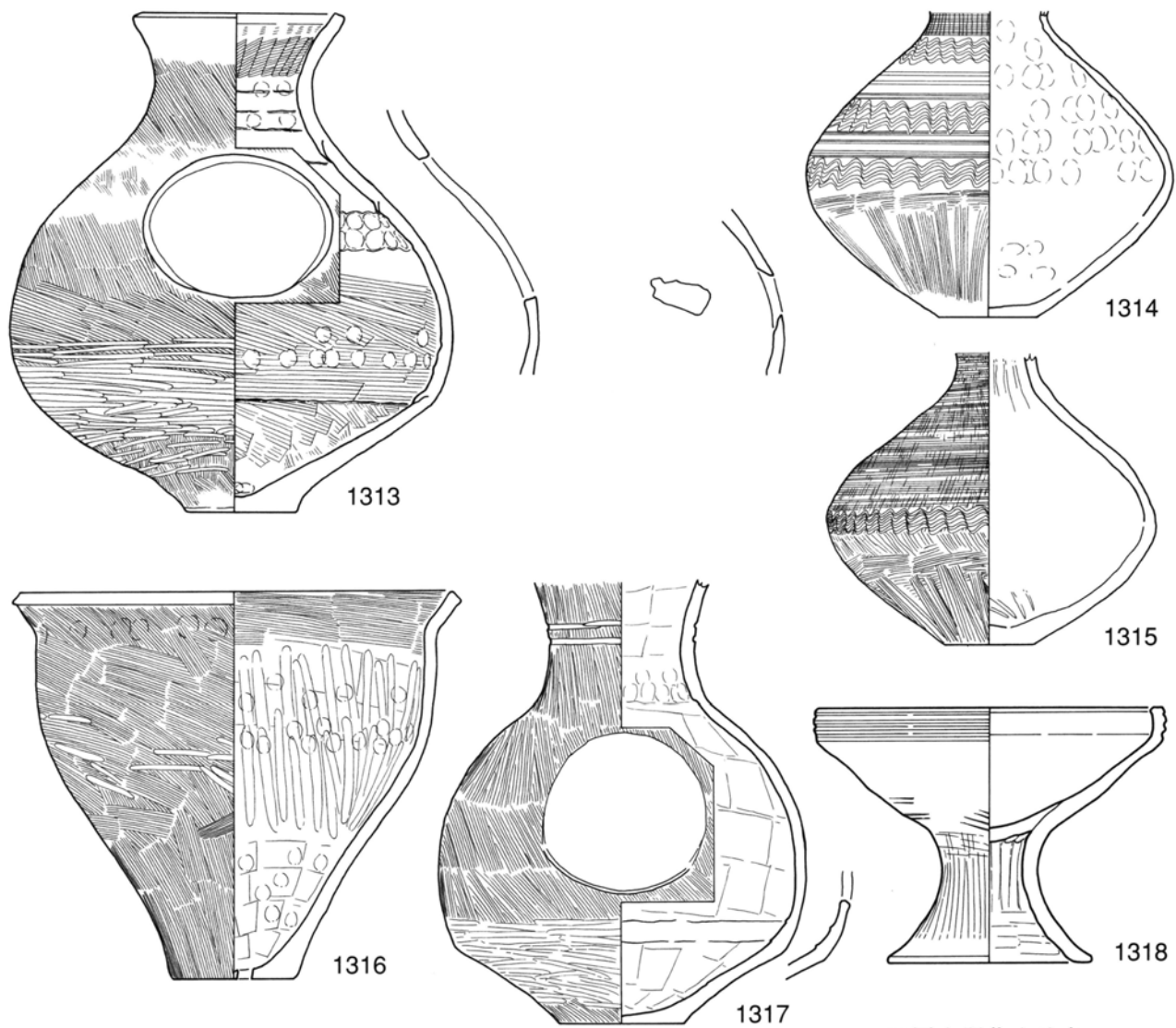
B. 北・西溝 (1352～1354)

1352は無頸壺。口縁下は2孔1対の焼成前穿孔がある。1353は口縁部端面がヨコナデにより上下にわずかに拡張し、凹面をなすもので、下端に細かい刺突がなされる。外面の成形・調整は上位の横位タタキ→中位から下位の斜位タタキ→下位の斜位タタキ、上位のハケ→下位から中位のハケの順に行われ、その後2段のイタ角による刺突列が中位に巡る。1354は口縁部がヨコナデによりゆるやかに屈曲するもので、端面はやや凹面となる。体部外面は口縁部から中位のハケ→上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→下位のハケが行われ、その後中位やや下位にイタ角による刺突列が巡る。

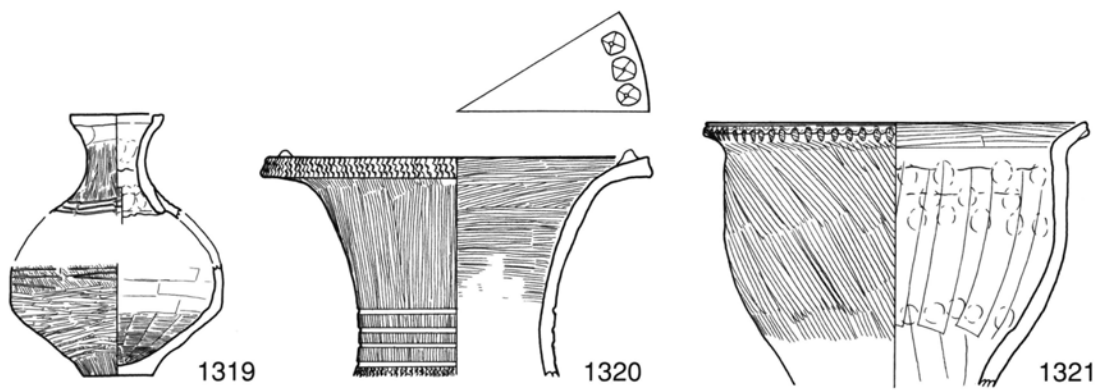
(51) 96 方形周溝墓群関連遺構 (図132)

A. S K 104 (1355～1367)

1355は上部上位に焼成後穿孔が1ヶ所あるI系の壺。1356は胴部下位に焼成後穿孔が1ヶ所あるI系の壺。1357は口縁部を強く横ナデするI系の細頸壺。1358はI系の壺。1359～1364は台付甕



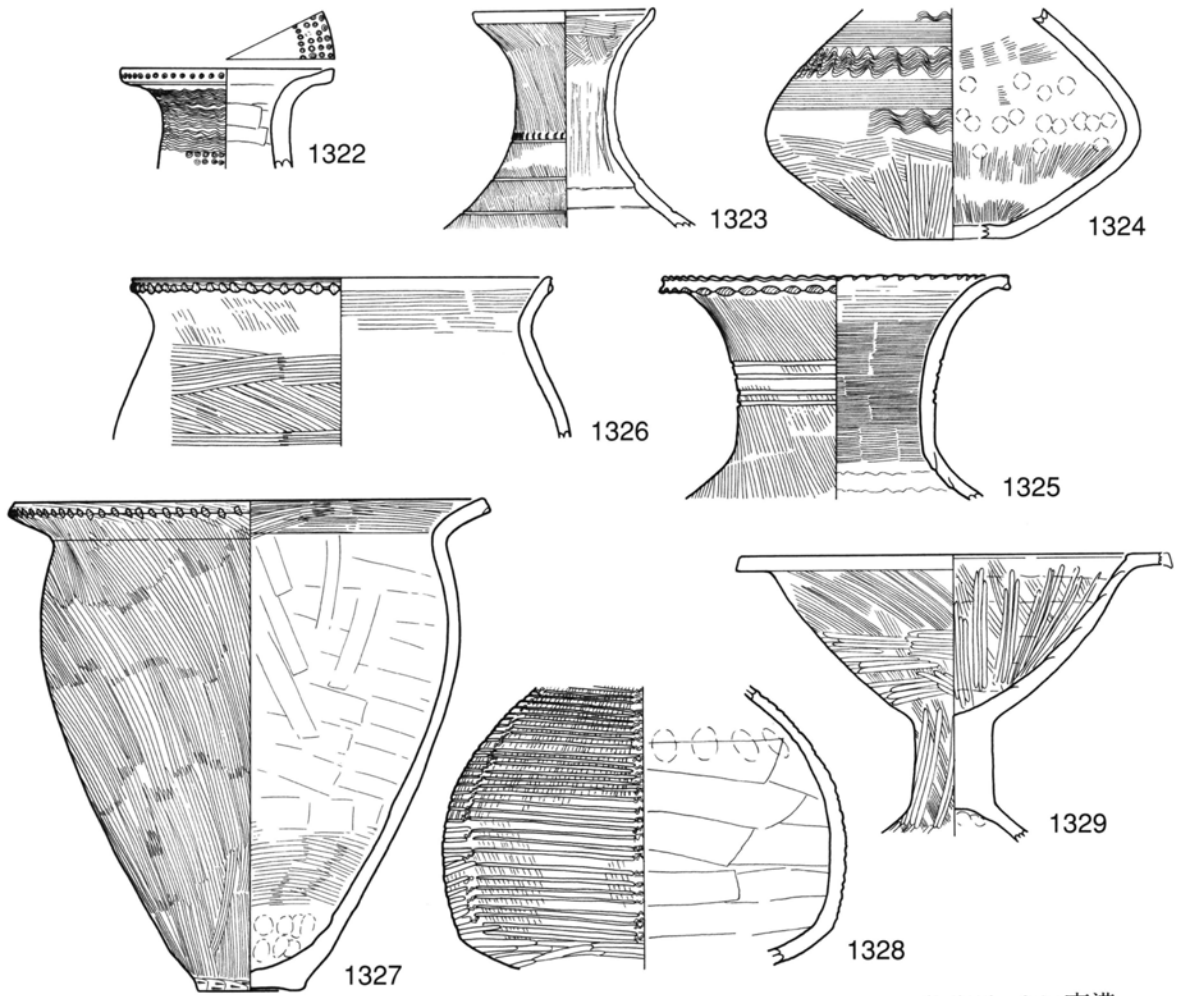
下層土器集中地点



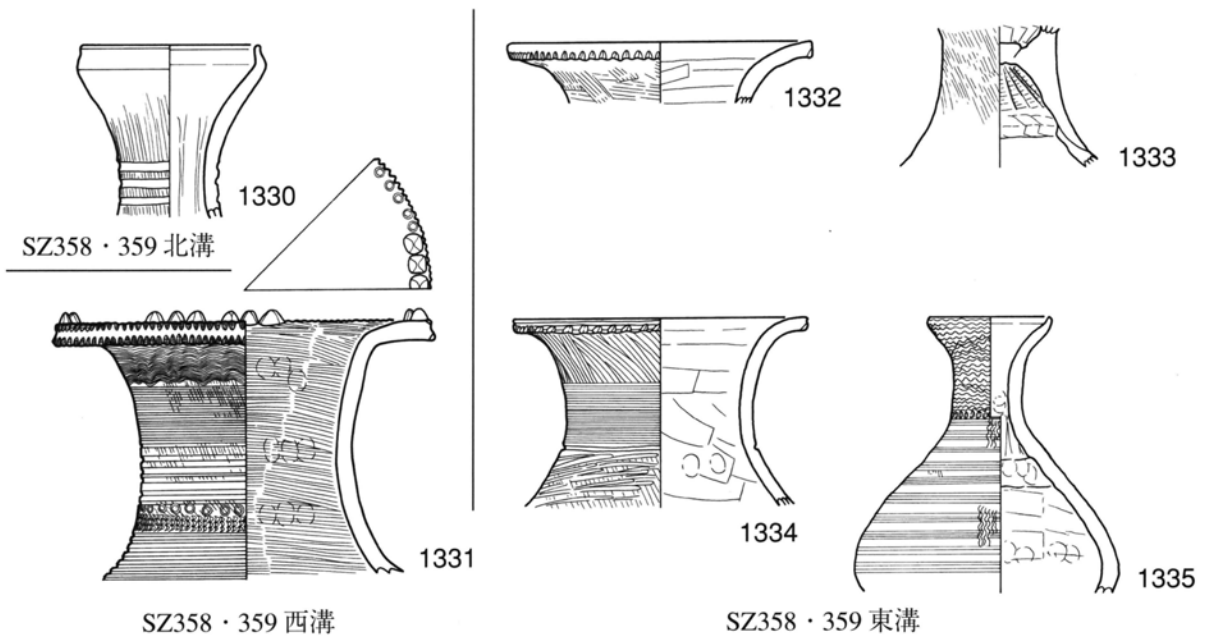
西溝

图 128 S Z 356 · 357 (3)

(1/4)



SZ356 · 357 東溝



SZ358 · 359 北溝

SZ358 · 359 西溝

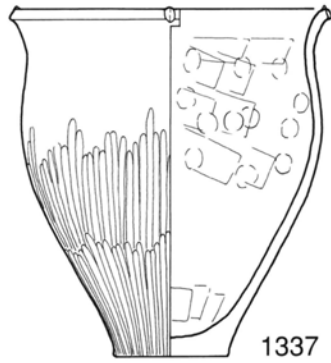
SZ358 · 359 東溝

图 129 S Z 356 · 357 (4) · S Z 358 · 359

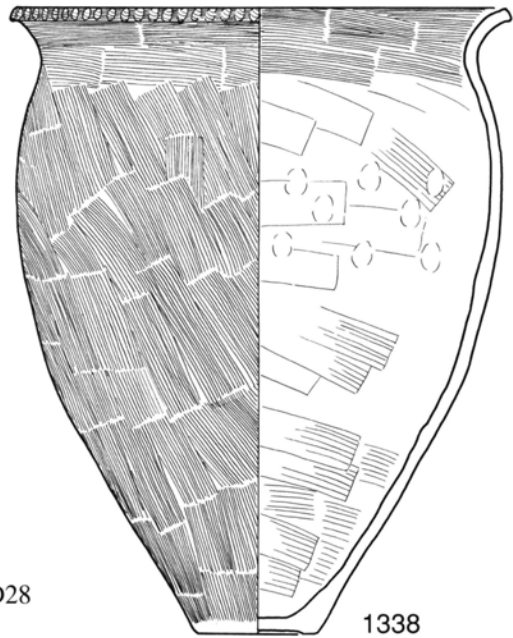
(1/4)



1336

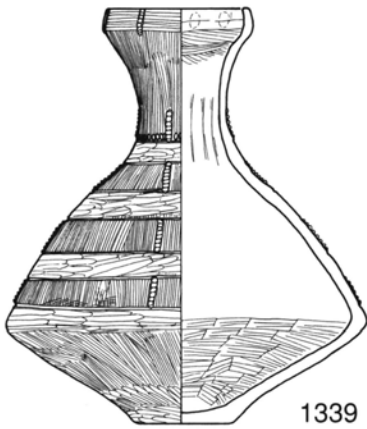


1337



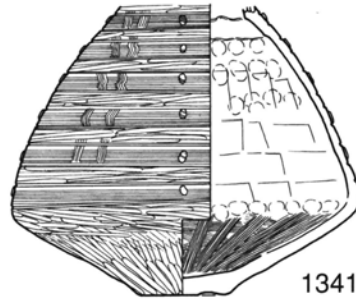
SD28

1338

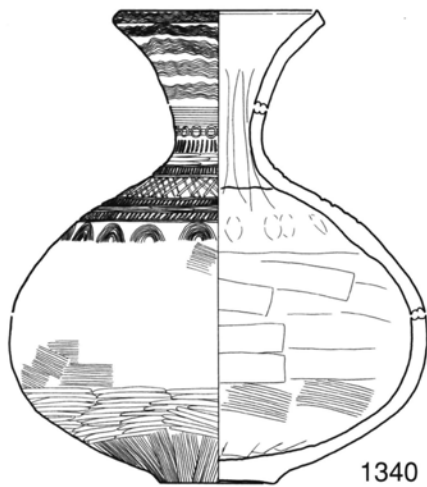


SD29

1339

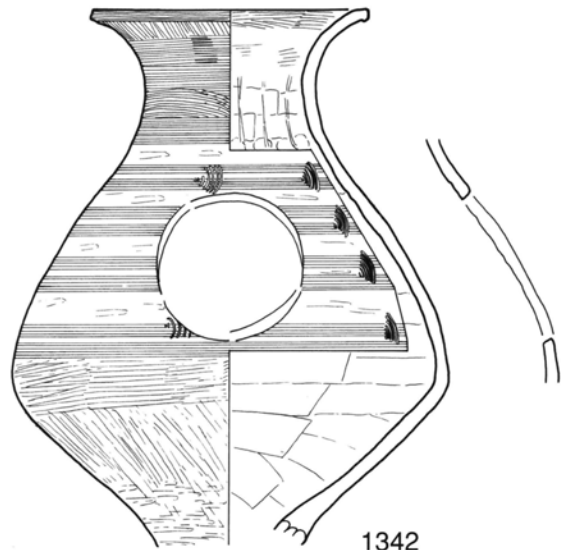


1341



SK98

1340



SK99

1342

图 130 S D 28 · S D 29 · S K 98 · S K 99

(1/4)

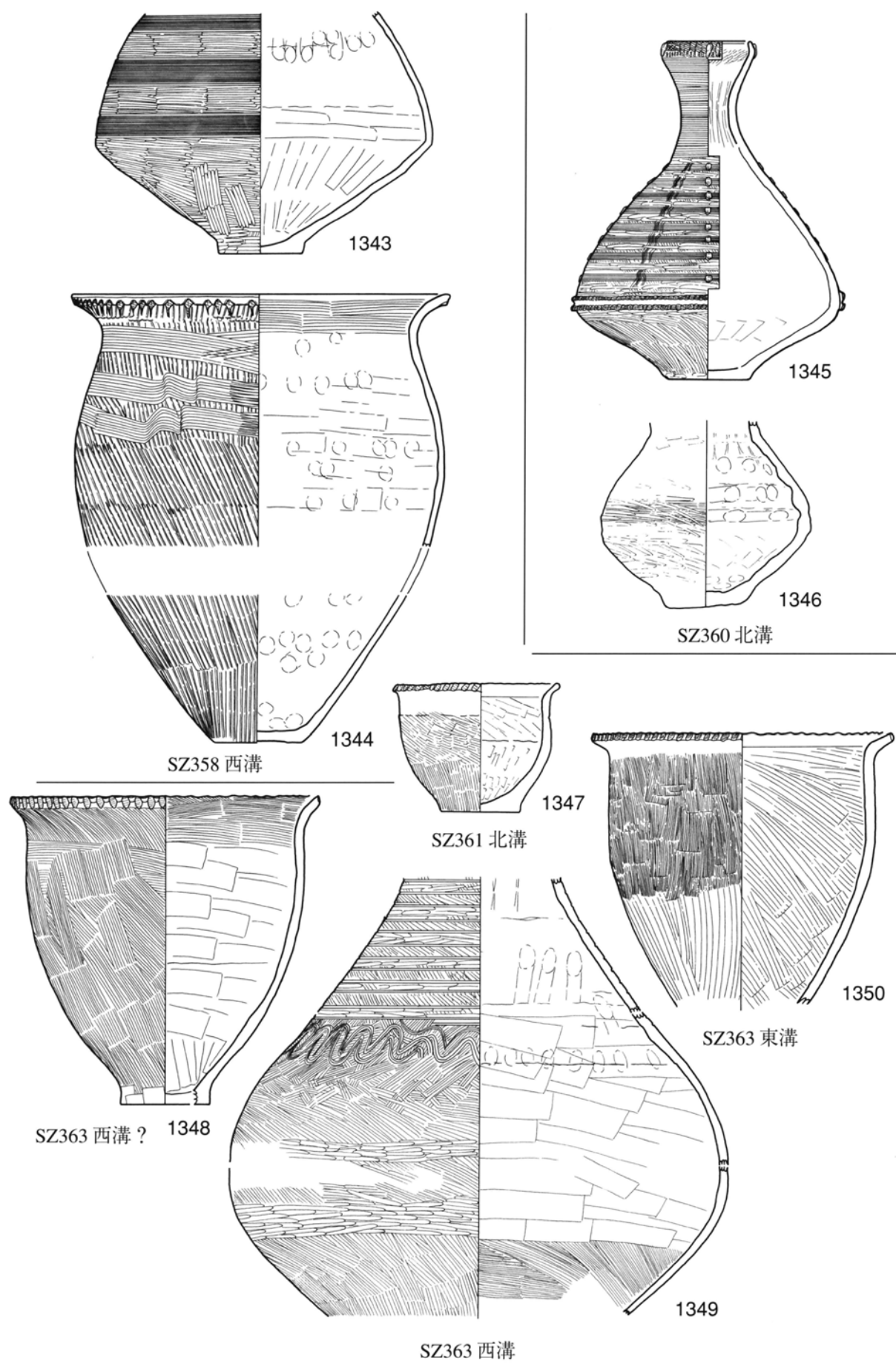


图 131 S Z 358 · S Z 360 · S Z 361 · S Z 363

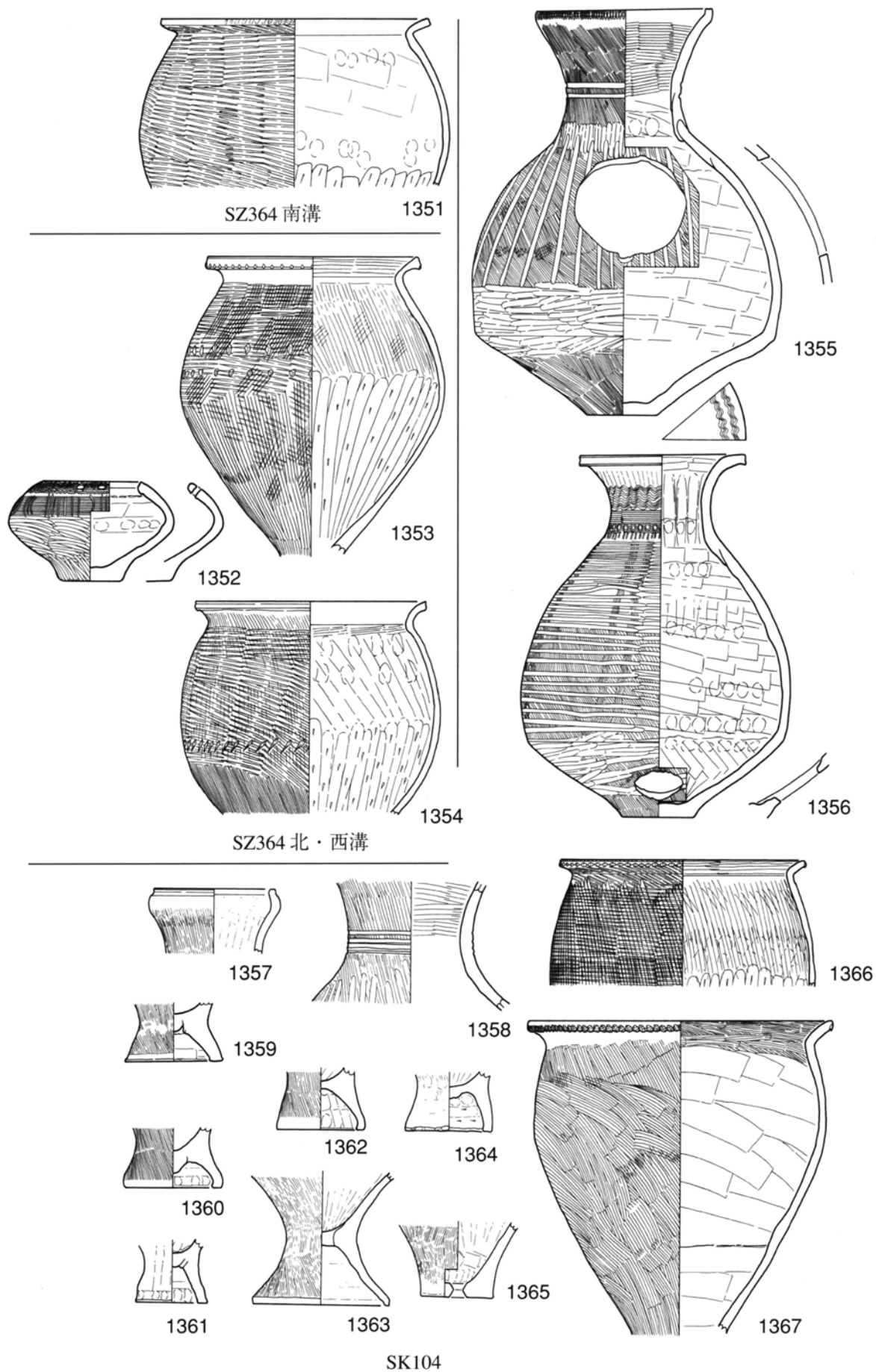


图 132 S Z 364 · S K 104

(1/4)

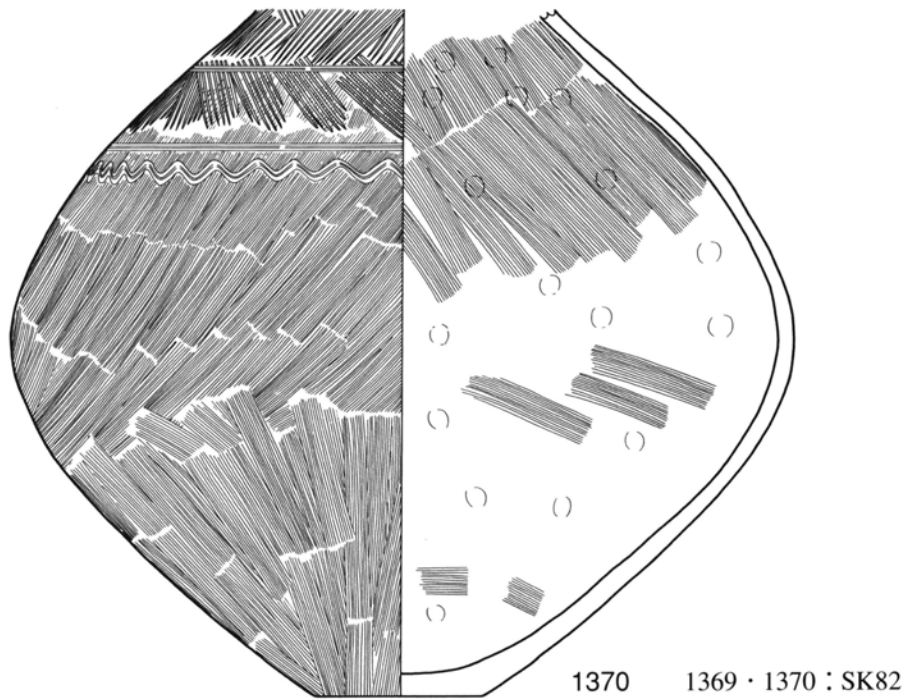
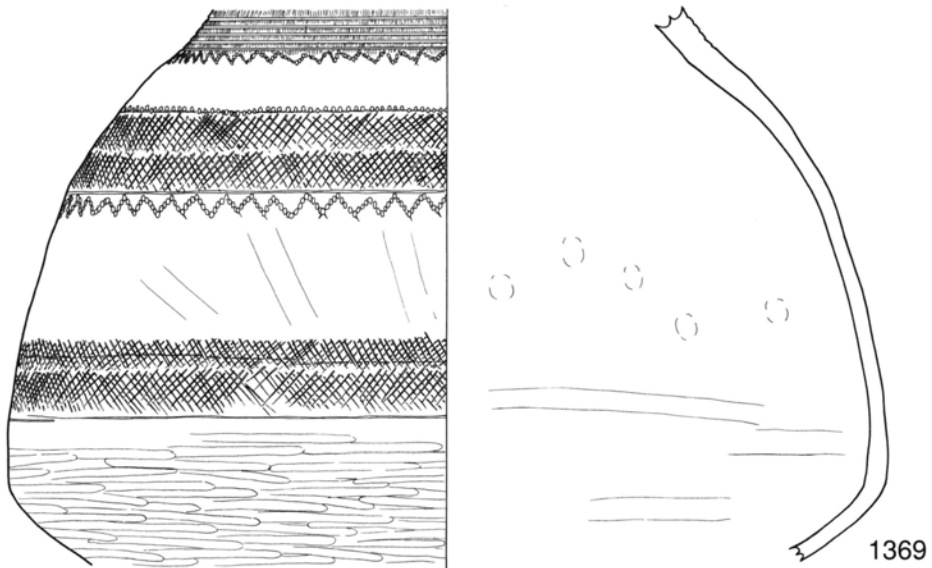
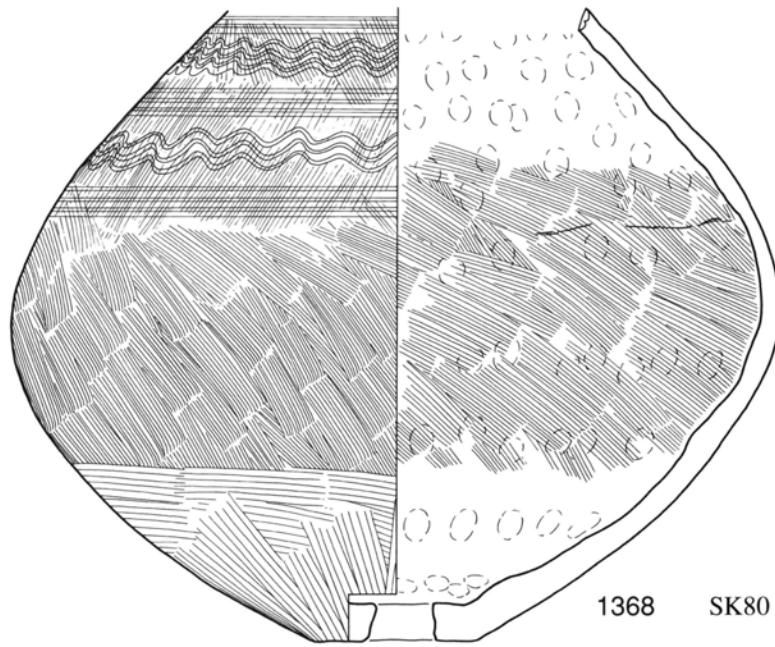
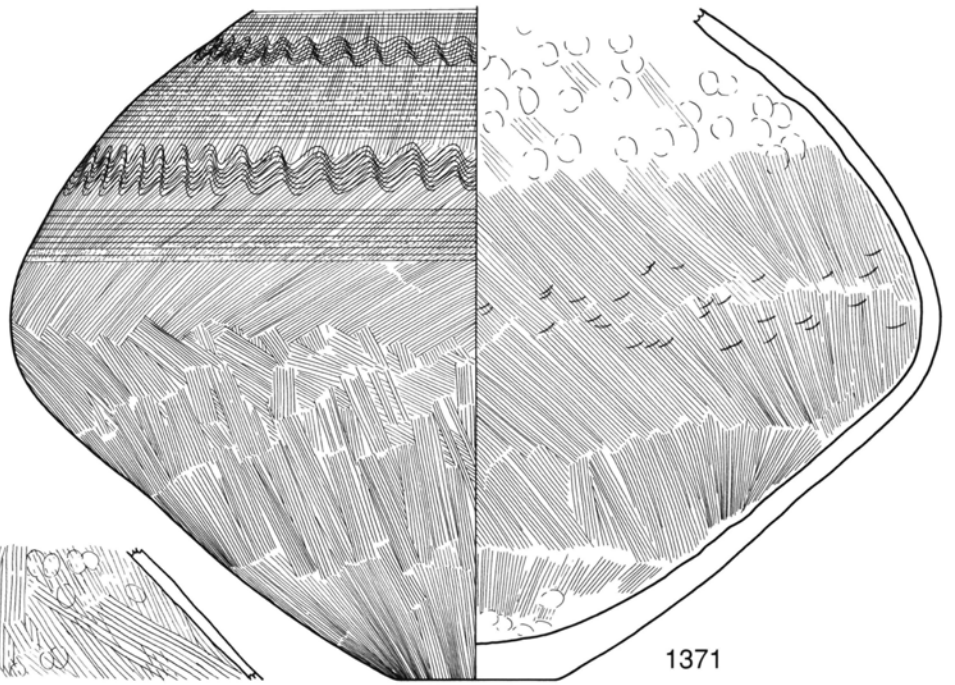


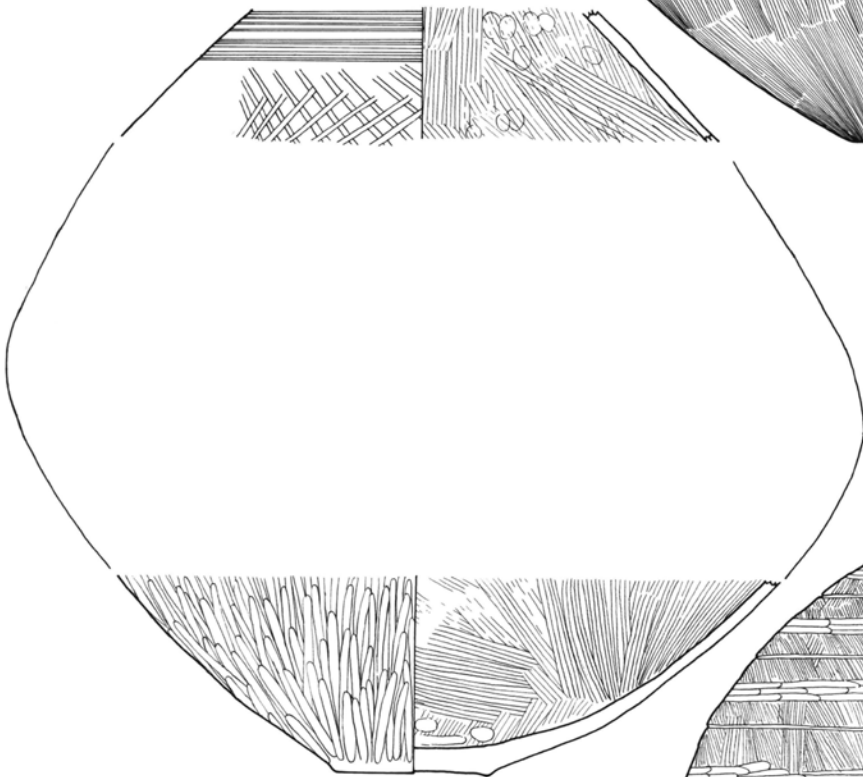
图 133 S K 80 · S K 82

(1/4)



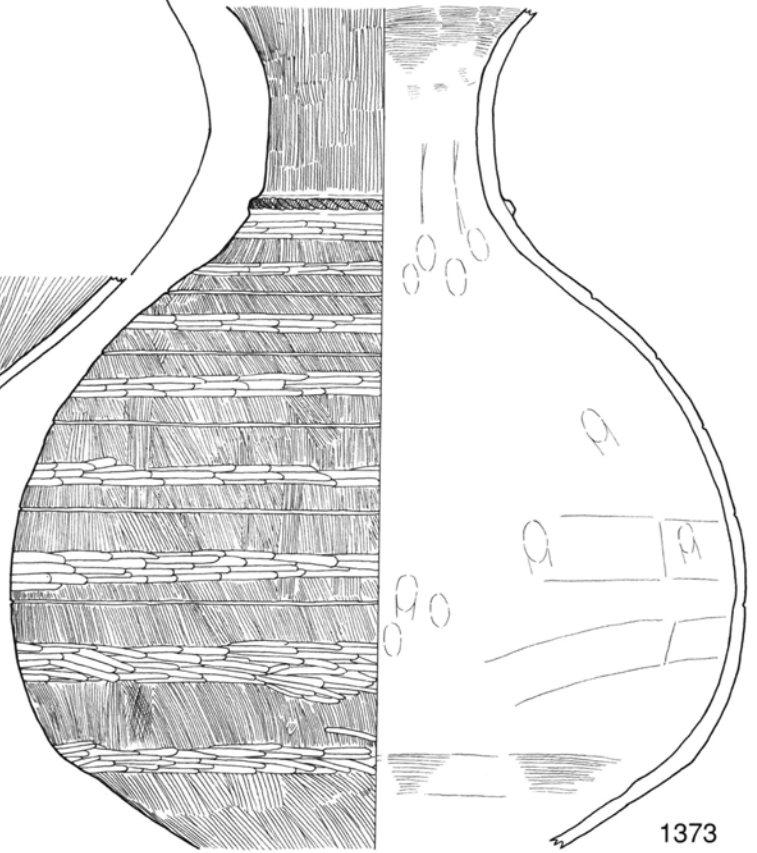
1371

SK81



1372

SK79



1373

SK78

图 134 SK 81 · SK 79 · SK 78

(1/4)

の脚台。1365は丁寧な焼成後穿孔が穿たれる甕底部。1366はIV系のタタキ甕で、口縁部から頸部の斜位タタキ→横位タタキ後ハケ調整される。。1367はI系のハケ甕。

(52) 土器棺墓関連の遺物 (図133～134)

S K 80 (1368) IV系の壺。底部に焼成後穿孔、頸部の破面は打ち欠きによるもの。

S K 82 (1369・1370) 1369はIII系の壺。1370はIV系の壺。

S K 81 (1371) IV系の壺。S K 79 (1372) IV系の壺。S K 78 (1373) I系の壺。

図135は県教委の立会調査の遺物。95方形周溝墓群の可能性ある。県-1は胴部下位に焼成後穿孔がある。県-2は口縁内面に2×4単位の瘤状突起が付く。いずれもI系の壺。

(53) S D 101 土器集積 (図137)

1374～1378はS D 101に掘り込まれた土坑の資料? 1374～1377はI系の壺。1374・1375は縄紋を施す。1377は連弧紋を施す。1378はI系の無頸壺。

1379～1382はS D 101に掘り込まれた土坑の資

料?いずれもII S系の壺。1382は二枚貝腹縁による刺突連弧紋を特徴とする壺。胴部中位に未穿孔の凹みを有する。

(54) 包含層出土 (図136・138・139)

1383は円窓付土器。1384はI系の細頸壺、胴部の紋様帯および円形浮紋上の押圧は二枚貝腹縁刺突。1385はI系の細頸壺、口縁部に波状紋を施す。1386～1388・1391はI系の細頸壺。1389はI系の鉢? 口縁部にヘラ状工具による羽状紋を施す。1390は頸部に2孔の焼成前穿孔をもつ単頸壺。1392・1393はI系の台付鉢。1394は鉢。1395は内外面に赤彩をほどこす。楕円形の透孔をもつ特殊土器。1396は底部に焼成前穿孔と底部外面に木葉痕をもつI系のハケ甕。1397はI系の台付甕。1398は1次調整にハケメ工具、2次調整に二枚貝腹縁を用いるI系の甕。口縁端部と内面に二枚貝腹縁刺突を施す。1399は台付甕の脚台。1400は胴部上位と口縁内面に波状紋をもつ加飾甕。1401は底部に未貫通の穿孔をもつ小型の鉢。1402は須和田式の壺。1403・1404はI系のハケ甕。1405～1408はII N系の深鉢。1406を除き底部のあるものはすべて布目痕をもつ。

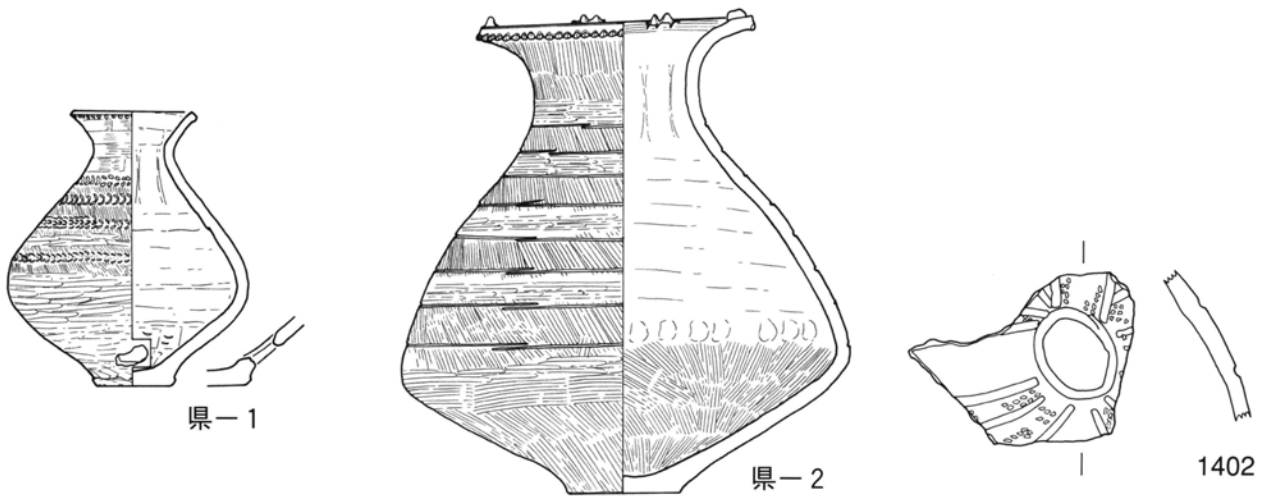


図135 県教委立会調査 (1/4)

図136 IV・V期包含層 (1)
(1/3)

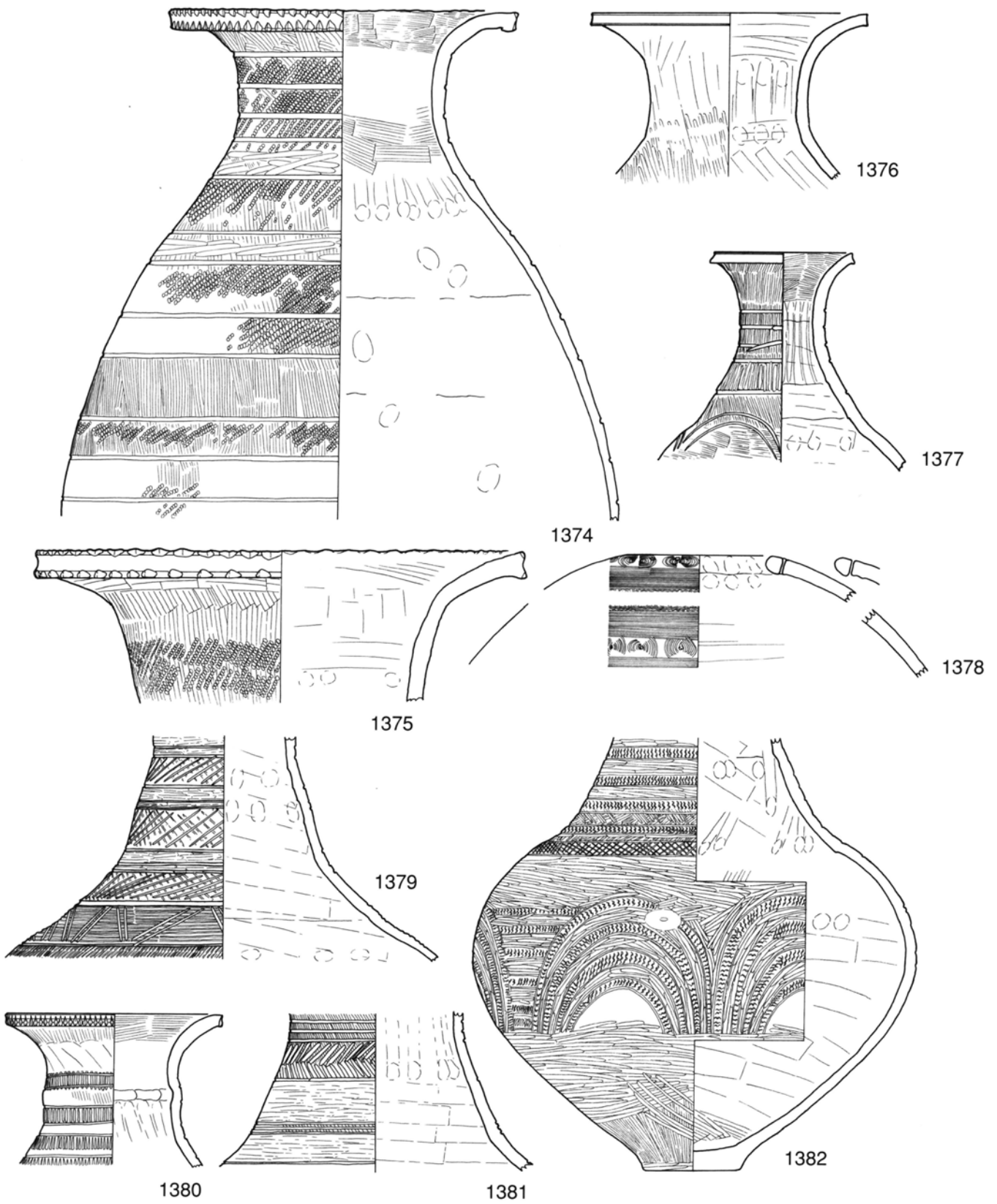


图 137 S D 101 土器集積

(1/4)

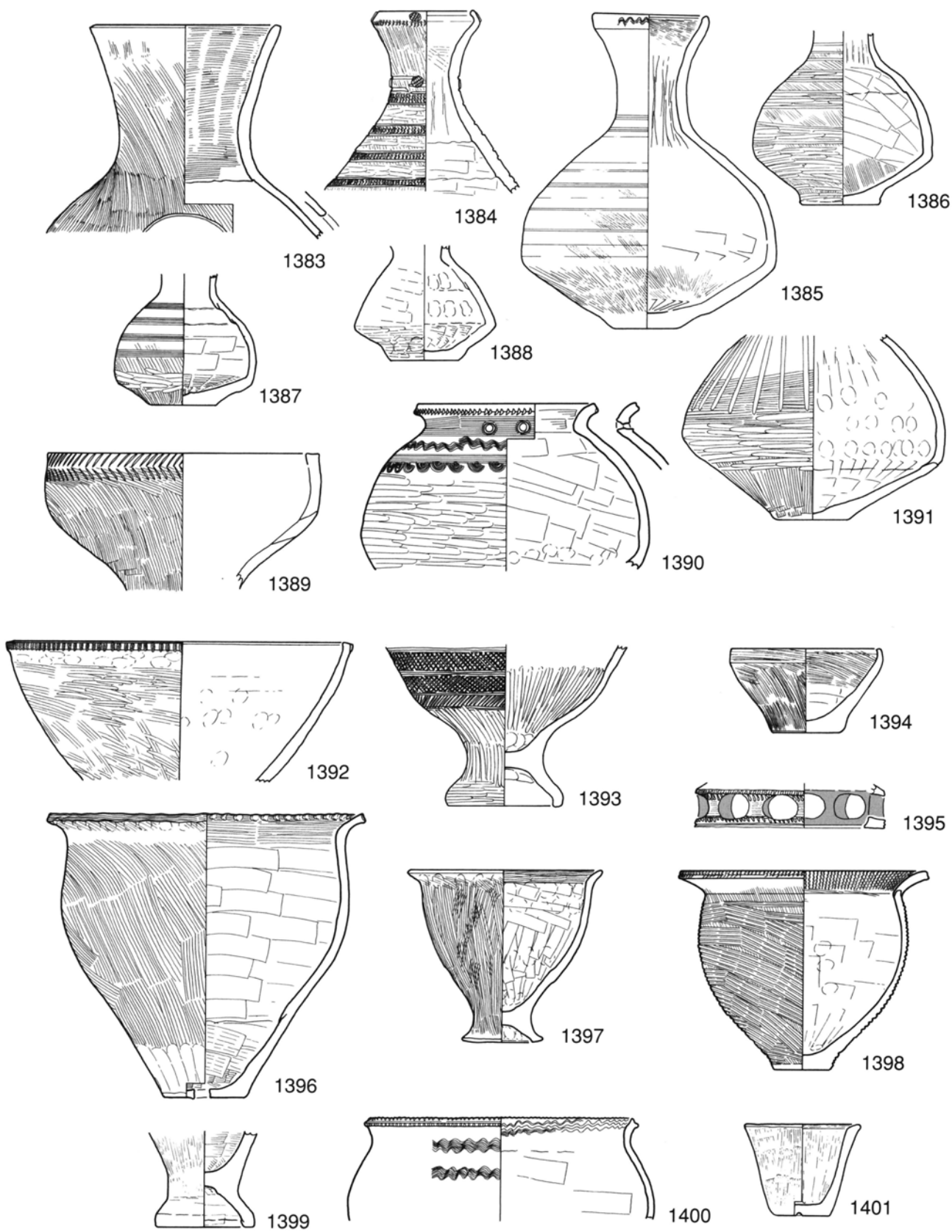
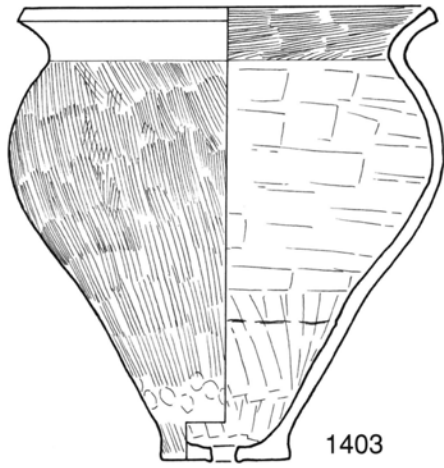
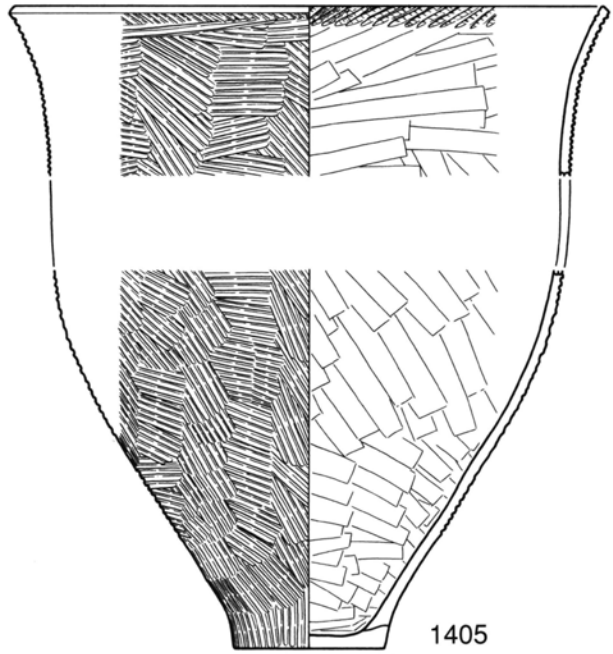


图 138 IV·V期包含层 (2)

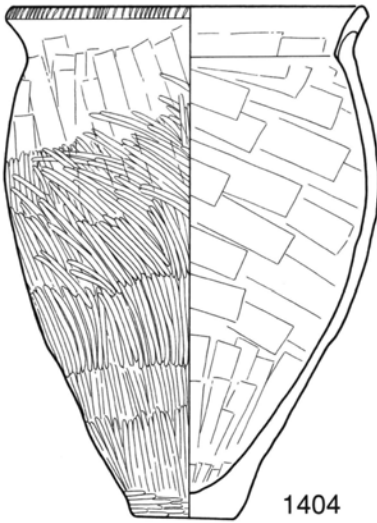
(1/4)



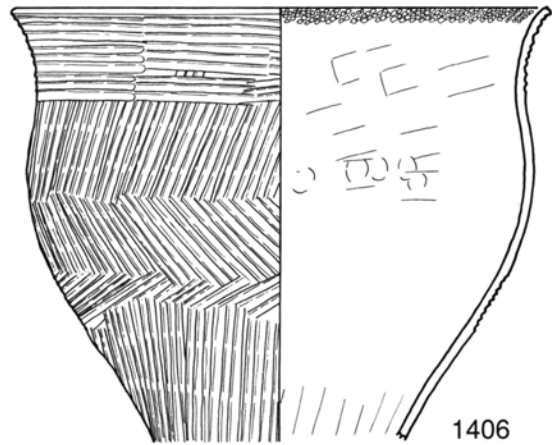
1403



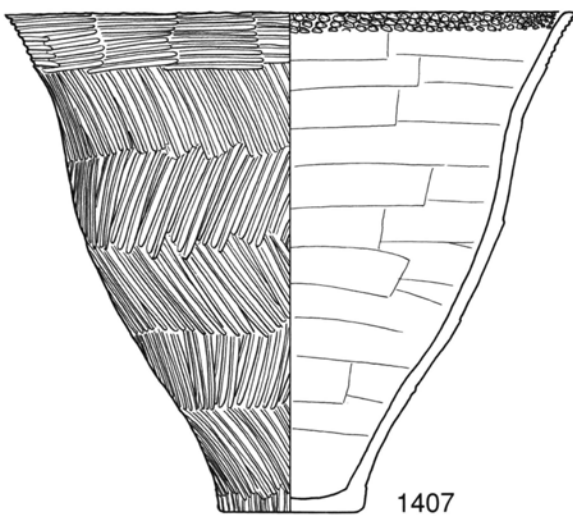
1405



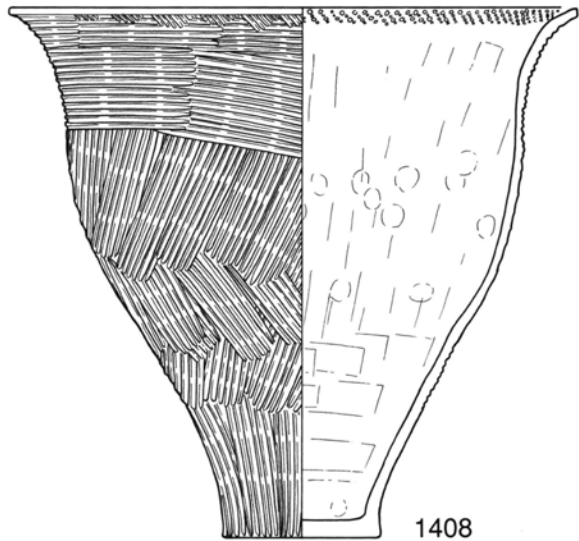
1404



1406



1407



1408

图 139 IV·V期包含层 (3)

(1/4)

5. VI期

(1) S D 05 (図 140 ~ 142)

下層上部からまとまって出土した一群を境に、上層・土器集中・下層に分けて取り上げた。また上層上位には細片の土器が多く出土した。

1409 ~ 1411 は上層から、1412 は下層上位から出土している。

1409 は単純口縁細頸壺で、内傾する口縁端部には波状紋、頸部から口縁部にかけてはクシによる横線、イタによる支点を交互に移動していく山形紋がなされる。1410 の太頸壺は、口縁端部が斜下方に垂下して内傾する面をなし、イタによる格子状の刺突が施される。また内面には3段のイタによる羽状刺突がみられる。頸部には半裁竹管による横線、イタ刺突、簾状紋がある。1411 も太頸壺の口縁部になると思われるもので、ヨコナデにより凹面となった上下にわずかに拡張して、垂直になる端面の上下端に、イタ刺突がなされ、三~四角錐の貼付浮紋が、4×4方向に付けられる。1412 も同様な形態をなし、口縁部端面にはヘラによる凹線が2条巡る。また頸部にはヘラ背によると思われる3条の沈線がある。

1413・1417 は上層から、1414・1416 は土器集中地点から、1415・1418・1419 は下層上位より出土している。

1414 は円窓付太頸壺で、体部外面の上半はやや粗いハケ、下半が細かいハケがなされる。1416 は細頸壺の体部で、半裁竹管による横線・波状紋が施され、頸部に簾状紋、下半に下方へのヘラケズリがなされる。1415 は太頸壺の体部上半で、頸部に束ねた細い竹管による刺突、体部に半裁竹管による横線・波状紋がある。1417 も太頸壺の体部最大径部片になると思われるもので、ヘラミガキ調整され、その上にヘラにより梯子状の紋様が描かれる。

袋状口縁細頸壺のうち、1420・1422 は上層、1423・1424 は下層上位から出土し、1421 は出土位置不明となる。

1420 は大型のもので、口縁部外面には棒状工具による凹線が8条が巡り、クシによる縦位の区画が10方向に施される。区画された凹線上には、2段の二重の竹管刺突がなされる。ただ1方向のみに、縦に6ヶ細い竹管による刺突がみられる。凹線下位には、5段のイタ刺突、二重の竹管刺突、1段のイタ刺突の順に施紋される。さらにその下位には4段の突帯と竹管刺突がある。内面はハケ調整。1421 の口縁部は、棒状工具による凹線、3段のイタまたは貝による刺突、クシ横線がなされる。1422 は台付になるもので、頸部欠損面は意図的に打ち欠かれている可能性が高い。体部外面には、半裁竹管による横線と4方向の縦区画、波状紋、斜格子が描かれる。横線下には扇形紋、体部最大径には斜位のイタ刺突がある。体部下半下位にはタタキ後ハケ調整される。1424 は体部上半に、クシによる横線・波状紋がなされ、下半には上方へのヘラミガキ後粗いハケがなされる。

1425・1426 の受口口縁太頸壺は、両者とも上層より出土している。

1425 は、口縁部端面にイタによる凹線、頸部から体部にかけて、クシによる横線とイタ刺突がなされる。1426 も同様の形態をなすが、口縁部端面は棒状工具による凹線と、上端にイタ刺突がある。

下層上位から出土している鉢1427 は、壺体部下半と同様のやや内彎する体部をもち、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。底部は突出する。口縁部外面には凹線が巡り、体部外面は斜位のタタキ、ハケ、ヘラミガキの順に調整される。内面は下位2/3程に、上方へのヘラミガキがなされる。外面には薄くススが付着する。

高坏のうち、1428は土器集中地点、1429・1430は下層上位より出土している。

1428の高坏は、半円状の坏部と八字状に広がる中空の脚をもつ。坏部外面端には、凹線が2条巡り、ヘラケズリ後ハケまたはナデ調整される。内面はヨコナデ、やや粗いハケ調整。脚部端面は外傾し、ヨコナデによる凹線がみられる。外内面ともナデ調整。罽付高坏1429は、罽部が水平方向に伸びた後斜下方に垂下して内傾する面をなす。坏部内面端は突帯状に突出する。罽部外面には凹線後ヘラによる縦位区画が6方向に施される。上面には、ヘラによる斜格子紋がみられる。坏部外面は、上方へのヘラケズリ後ヘラミガキ、内面がヘラミガキ調整される。脚部は八字状に外反し、端部が斜上方に伸びて外傾する面をなす。外面には9条のヘラ沈線が施紋される。調整は外面が、ハケまたはタタキ、下方へのヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はハケ調整される。裾端部はヨコナデ。1430は1429と同様の形態をなす。罽部外面にはイタによる凹線が巡り、坏部外面が上方へのヘラケズリ、内面は剥離が激しく不明瞭であるが、イタナデ調整される。脚部外面はナデ、内面は横位のナデ調整される。裾端部はヨコナデ。

1432・1433は上層、1431・1436は土器集中地点、1434・1435は下層上位より出土している。

1431はゆるやかに屈曲する口縁部をもち、外面には斜位のイタ刻み、内面は横位の粗いハケ調整される。成形・調整は、外面が口縁部外面のタタキ、体部下位にタタキ→上位に横位のタタキ→上位から中位のハケ→中位の斜位のタタキ→下位にハケの順になされている。内面は下半が上方へのヘラケズリ、上半がイタナデ後ハケ調整される。1432は小型の甕で、口縁部が強いヨコナデにより強く屈曲する。台部は低く、ユビ押圧とナデにより調整される。外面は斜位のタタキ後粗いハケがなされ、中位にイタ角による斜位の刺突がみられる。内面は、下半はヘラケズリに近いイタナデ、上半がイタナデ調整される。

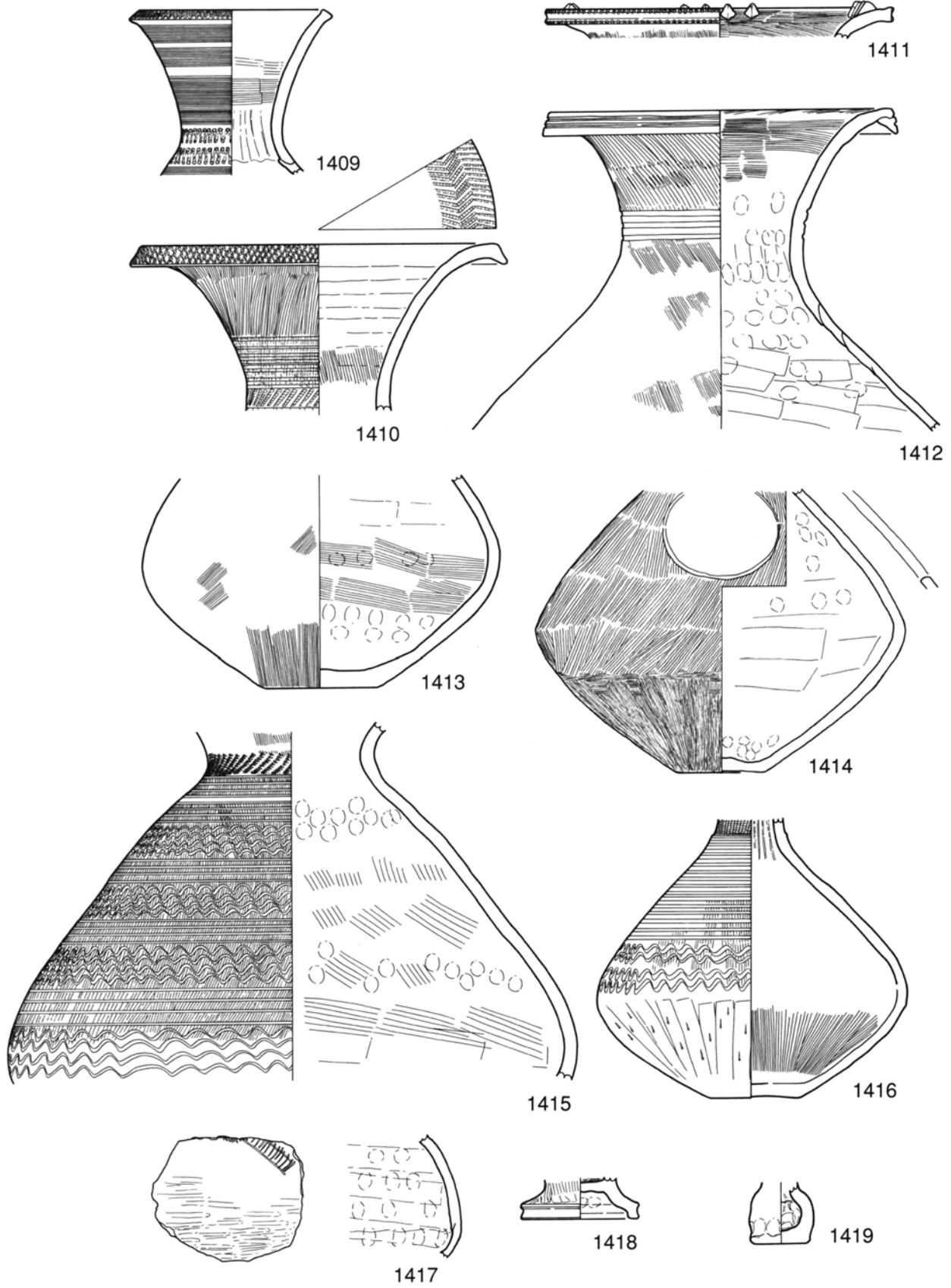
外面にはススが付着する。1433も口縁部は強く屈曲し、外面端はイタ刻み、内面はイタナデ調整される。外面は斜位のタタキ→ハケ→横位のタタキがなされる。内面はイタナデ。1434は口縁部がやや強く屈曲し、端部がわずかに垂下する。外面にはイタ刻み、下端にはイタ角による刺突がなされ、内面はハケにより平坦になっている。体部外面は、上半のハケ→横位のタタキ→斜位のタタキ→下半のハケの順に成形・調整される。内面は下半が上方へのヘラケズリ、上半がハケ調整され、上端にはヨコナデ時のものと思われる横位の沈線がみられる。1435の口縁部はゆるやかに屈曲する。端面外面にはイタによる刺突がなされ、内面はハケ調整される。成形・調整は、口縁部外面タタキ、上位ハケ→タタキ→中位の細かいハケの順になると考えられる。内面は下位から中位までヘラケズリで、上位がハケ調整される。上端にヘラケズリ時に生じたと思われる沈線がみられる。1436は甕と同様の調整がなされる鉢であるが、ススなどの使用痕はみられない。口縁部はややゆるやかに屈曲し、外面にイタ刻み、下端にイタ角刺突が、内面にはハケ調整が施される。成形・調整は、外面が口縁部外面から上位にかけての斜位のタタキ→上位から中位のハケ→上位に横位のタタキ→中位に斜位のタタキ→下位に斜位のタタキ→下位のハケ、中位のハケの順になされる。内面は下半が、上方へのヘラケズリ、上半がハケ調整される。

(2) S D 07 (図 143 ~ 146)

中位に薄い貝層があり、それを境に上層・貝層・下層という順に区分して遺物を取り上げた。また貝層内に土器集中地点がある。

太頸壺のうち1437は上層、1446・1447・1449は土器集中地点、1448は貝層内、1438・1439・1450は下層より出土している。

1437の太頸壺は八字状に口縁部が広がるもので、端部下端が内側にわずかに折り返えされる。端面に



☒ 140 SD05 (1)

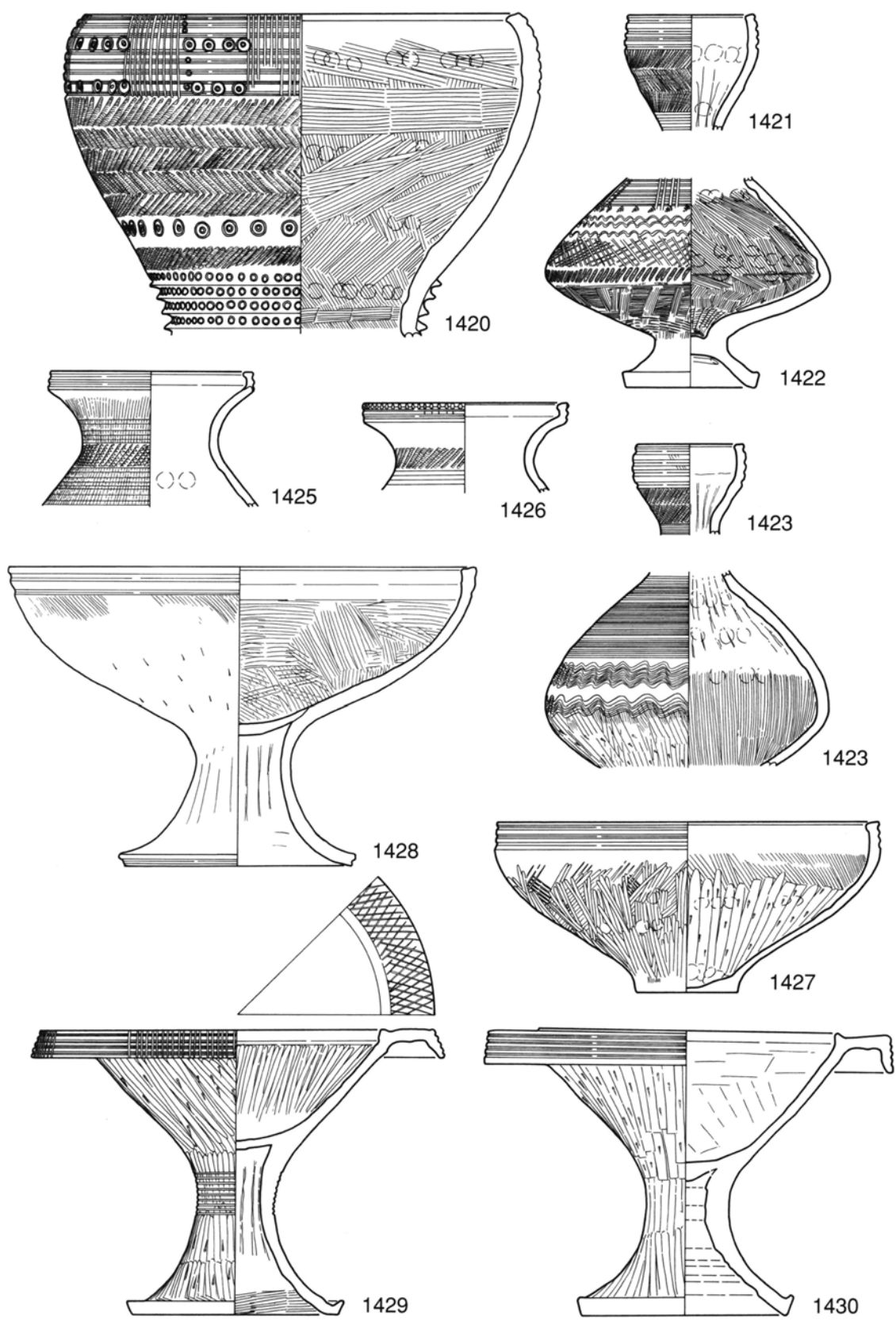
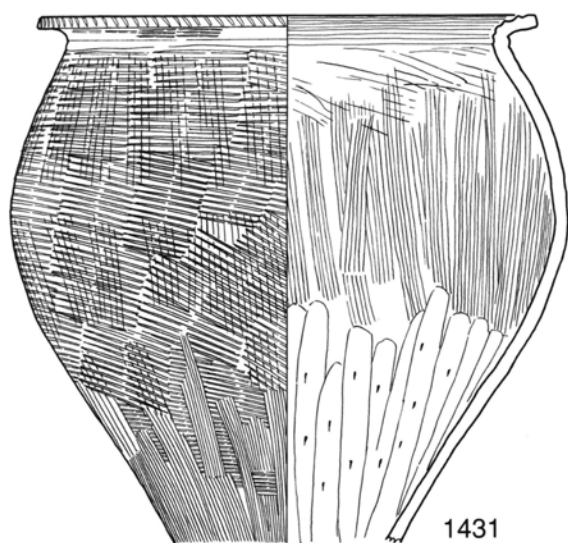


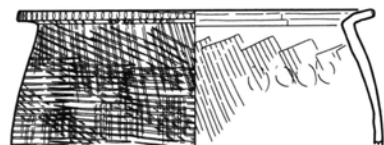
图 141 SD05 (2)



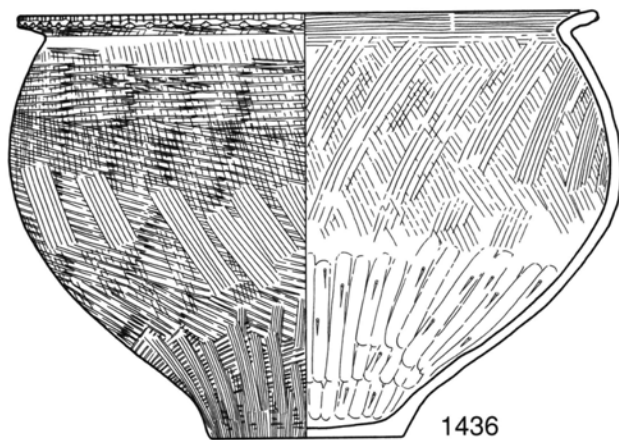
1431



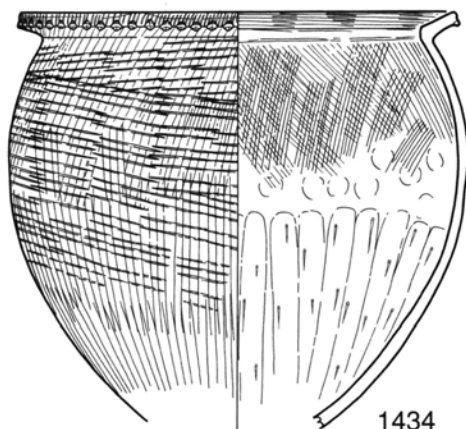
1432



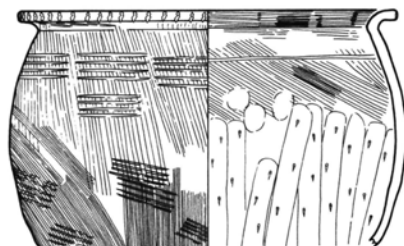
1433



1436



1434



1435

图 142 SD05 (3)

(1/4)

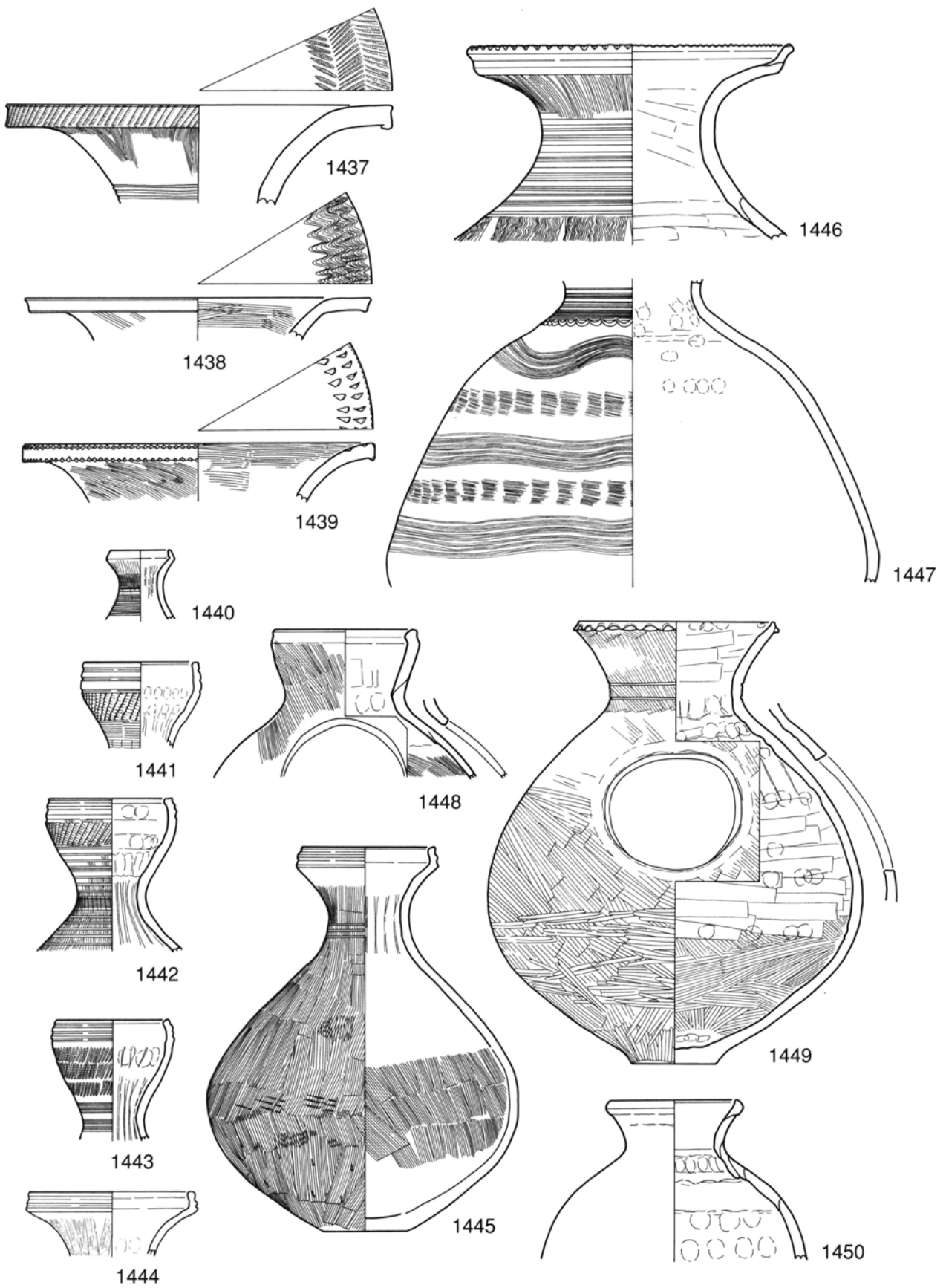


图 143 SD07 (1)

(1/4)

は斜位のイタ刺突、内面には3段のイタ刺突がなされる。頸部外面にはヘラによる沈線が巡る。1438はヨコナデによる外傾する口縁部端面をもち、内面に波状紋が施される。1439の口縁部は下端がわずかに垂下し。上下端にイタ刺突がなされる。また内面にはイタ角による、三角形の2段の刺突がある。1446・1447は受口状口縁太頸壺になるもので、不揃いな工具によって施紋される。1446は、口縁部がヨコナデによって凹面をなし、上端にイタによる刺突がなされる。頸部から体部にかけて、横線の下位に縦位の波状紋が10～11方向に施され、施紋部がヘラにより縦位に区画される。1447は頸部から体部上半部で、全体にナデ調整される。施紋は横線とヘラによる波状紋、ゆるやかな波状紋と短い単位で施される横線がなされる。1448・1449は円窓付太頸壺となる。1448は口縁部端はヨコナデによりやや内彎する。1449は口縁部下端が斜下方に拡張され、やや凹面となる内傾する面となる。下端には、ユビによる連続押圧がなされる。頸部から体部はゆるやかに屈曲し、丸みを帯びた体部をもつ。頸部には2条のヘラによる沈線が巡る。調整は、外面がハケ後下半がヘラミガキ、内面がハケ・イタナデがなされる。底部外面には木葉痕が残り、ナデ調整がなされる。1450の口縁部はヨコナデによって丸く収束する。調整は全体にナデ。

細頸壺のうち、1440・1441は上層、1442・1445は土器集中地点、1443は貝層内、1444は下層より出土している。

1441～1443は袋状口縁細頸壺、1444・1445は受口状口縁細頸壺になる。1445は屈曲して上方に延びる口縁部外面にイタ状工具による凹線が、頸部にヘラによる3条の横線が巡る。体部は中位よりやや下位に最大径があるもので、外面中位にタタキ、下位に下方へのヘラケズリがなされて後ハケ調整される。

1451の短頸壺は、下層より出土する。口縁部はヨコナデにより強く屈曲し、端面は凹面となる。体部

外面はナデ調整され、下位にヘラケズリがなされている。外面にはススが付着する。

1452は土器集中地点より出土した無頸壺で、焼成前に開けられた2孔×2方向の紐孔がある。体部はやや下膨れ状を呈し、底部がやや突出する。外面はハケ、内面はイタナデ、ナデ調整される。内部にはベンガラが入っており、内面の器壁に付着する。

1453は出土位置不明なもので、全体に磨滅が激しく、調整不明。

高坏のうち1454～1456は上層、1457は土器集中地点、1458は貝層内から出土している。

1454は口縁部外面に棒状工具による凹線が巡り、内面には上方へのヘラケズリがなされる。1457は台付鉢になる可能性のあるもので、脚部に4または5方向に丸い透し孔が開く。坏部外面はハケ調整され、スス・有機物が付着する。内面はハケ後縦位の整然としたヘラミガキが施される。1458の鐙付高坏は、鐙端部が垂直に垂下するもので、外面には棒状工具による凹線が巡り、その上半に半裁竹管による縦位の区画が12方向にみられる。脚部は八字状に広がり、端部が斜上方に延びて外傾する面をなす。端面はヨコナデにより凹面をなす。調整は坏部から脚部にかけて、鋭いクシ状のハケがなされる。

ハケ甕のうち1459は上層、1460・1461は下層、1462は最下層より出土している。

1459は口縁部がゆるやかに屈曲するもので、下端にイタ刺突がなされる。体部は中位やや上に最大径があり、下半が細く収束し、低い内彎する台部をもつ。調整は外面が斜位のハケ、内面は横・斜位のハケ後ナデがなされる。1460も1459と同様の形態をなす。1461・1462は体部最大径に比して口縁部が大きく広がる。1461は小型甕で、口縁外部下端にイタ刺突がなされる。1462の内面は、縦位のヘラミガキ調整される。

ナデ甕のうち1463は土器集中地点、1464・1465は貝層内より出土している。

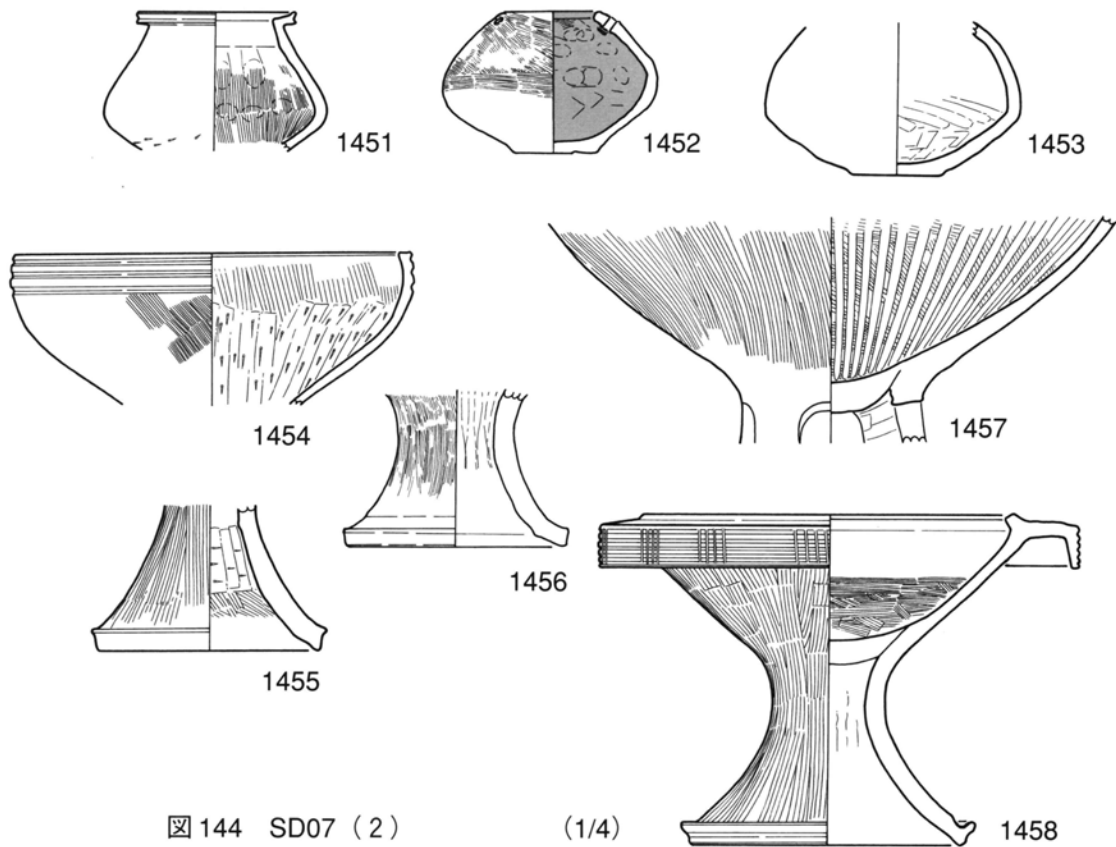


図 144 SD07 (2)

(1/4)

1463のく字状にゆるやかに屈曲する口縁部は端部が丸く、イタによる刺突がなされる。1464は強く外反する口縁部をもち、1463と同様イタ角による刺突がなされる。両者とも中位が最大径となる丸い体部を呈し、ナデ調整される。1465は口縁部がく字状にゆるやかに屈曲し、やや丸い端面下端にイタによる刺突が施される。体部は上位に最大径がくる縦に長い形態を呈し、ハ字状の高い台部をもつ。台部の端面は接地する。調整は、外面がヘラがイタによるナデ、内面はナデがなされる。

タタキ甕のうち。1466・1467は上層、1468～1471は土器集中地点、1472～1474は貝層内、1475～1477は下層から出土している。

1466はタタキがみられないが、形態はタタキ甕と

類似する。口縁部はヨコナデにより強く屈曲し、端面は凹面となる。体部は下位が磨滅が激しく不明であるが、ハケ調整され、下半がヘラケズリ、上半がハケ・ナデ調整される。底部は、上下からの焼成後穿孔が開けられる。1467は口縁部がゆるやかに屈曲した後上方にわずかに延びるもので、受口状になる。外面にはイタ刺突がなされる。調整は、口縁部外面に斜位のタタキ、体部外面にはハケ→上位の横位タタキ→下位の横位のタタキの順になされ、その後イタ角による刺突とヘラによる波状紋が交互に施紋される。1468の口縁部はヨコナデにより強く屈曲し、端面が凹面となる。体部外面は、上位ハケ→上位タタキ→中位から下位タタキ→中位ハケ→下位ハケの順で調整される。内面は下半が上方へのヘラケズリ、

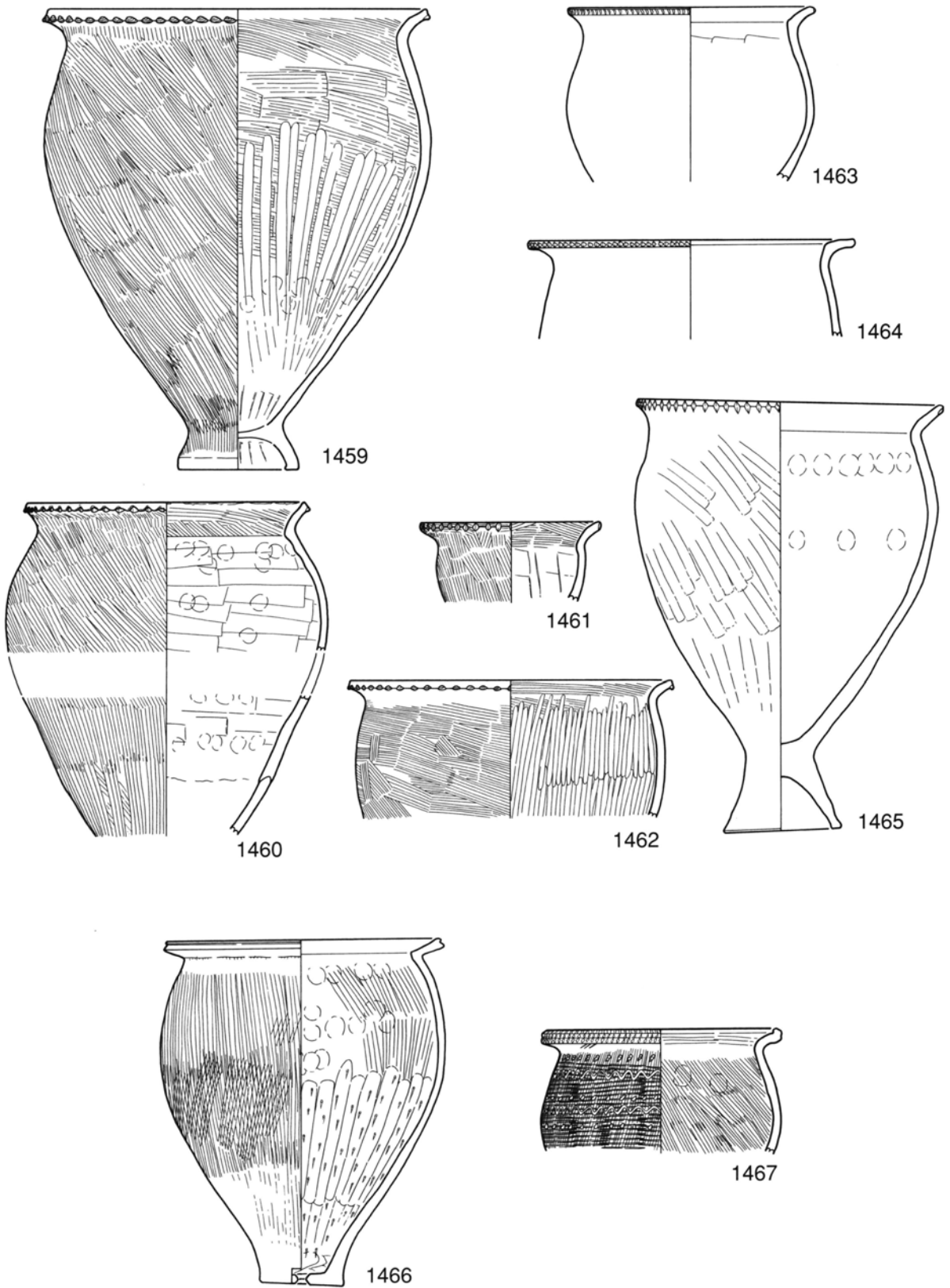
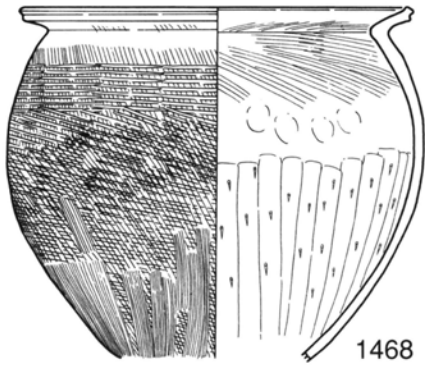
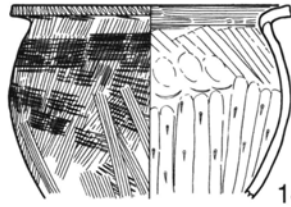


图 145 SD07 (3)

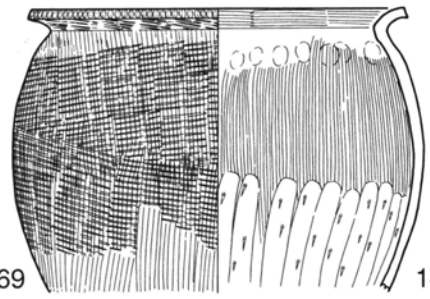
(1/4)



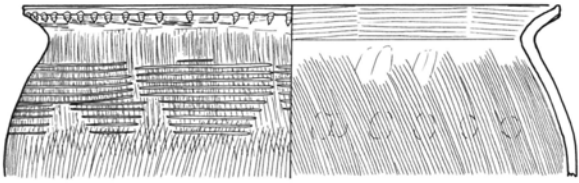
1468



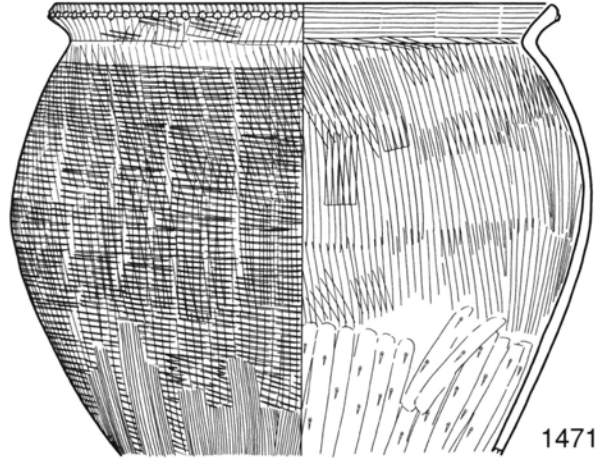
1469



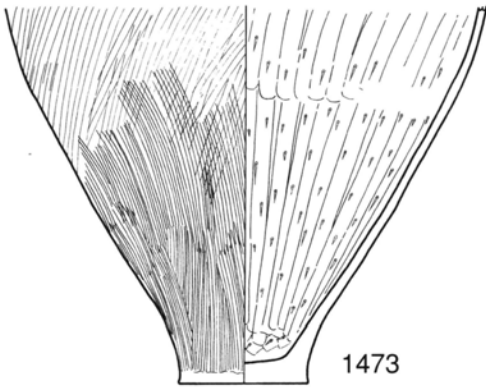
1470



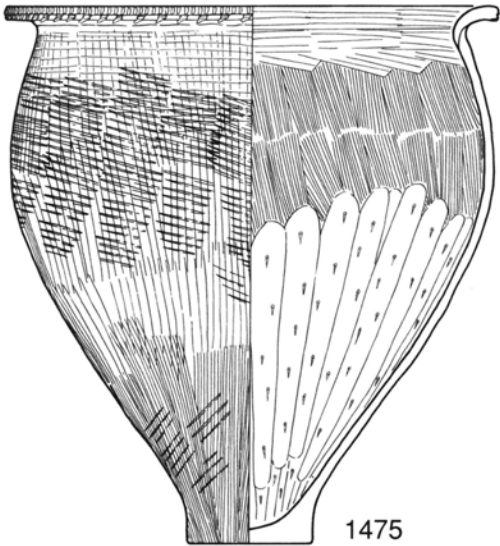
1472



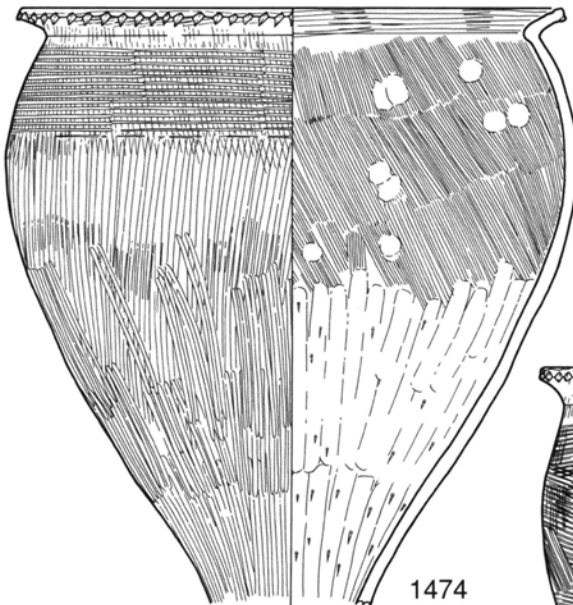
1471



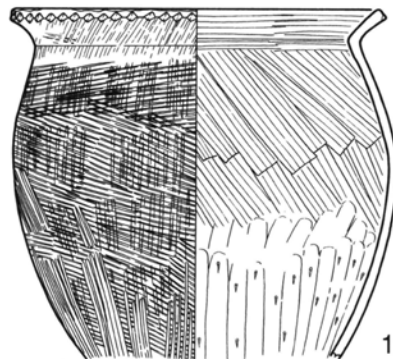
1473



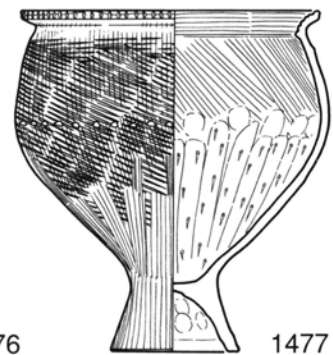
1475



1474



1476



1477

上半がハケ・ナデ調整される。1469は、外面がタタキ後ハケ調整される。内面には中位まで上方へのヘラケズリがみられるが、その時点で付いたと思われる弧状の痕跡が残る。1470の外面調整は、口縁部外面のタタキ、上位の斜位タタキ→下位の斜位タタキ→上半のハケ→下半のハケの順で行われる。また体部には別方向のタタキをごくわずかに確認できる場所があり、上記の調整に先行するタタキが想定される。1471は口縁部がややゆるやかに屈曲するもので、端面にイタによる刻みと下端に刺突が施される。外面の調整は、口縁部外面のタタキ、上位の横位タタキ→下位のやや斜位タタキ→上位から中位のハケ→下位のハケの順で施される。内面は下位に上方へのヘラケズリ、中位から上位はハケ調整される。1472は、口縁部下端にのみイタ刺突がみられる。外面の調整は、口縁部外面にタタキ、体部は縦位のハケ後タタキ状のクシ横線が巡る。1473は体部下半で、外面にはタタキはみられない。1474は、強く屈曲する口縁部下端にのみイタ刺突がなされる。調整は口縁部外面にタタキ、体部には上半がハケ後タタキ状のクシ横線、下半にはヘラミガキが施されている。1475の口縁部は強く外彎しながら屈曲し、端面にイタ刻みと下端に刺突がなされる。体部外面の調整は、下位の斜位タタキ、上位から中位の斜位タタキ→上半ハケ→タタキ状のクシによる横線、→下位の細かいハケの順に行われている。1476は口縁部がく字状にゆるやかに延びるもので、下端のみイタ刺突される。体部は横位に張りださず、縦長となる。調整は、口縁部外面のタタキ、体部上位に斜位タタキ→粗い縦位ハケ→上位の斜位タタキ→中位から下位の斜位タタキ→やや太いクシ状工具によるハケの順になされる。粗い縦位ハケの工具は不明。1477は小型の台付甕で、口縁部がゆるやかに外彎して屈曲し、外面にイタ刺突される。体部外面は、上位の横位タタキ→上位から中位の縦位ハケ→中位から下位の斜位タタキ→下位から台部のハケの順に調整され、最

後に中位にイタ角による刺突がある。胎土にはシャモットが多く含まれる。

(3) S D 08 (図 147 ~ 149)

S D 08は中位に貝層があり、それを境に上層と下層に分けた。また、貝層内には土器集中地点がある。

太頸壺のうち、1478 ~ 1480は上層、1481は土器集中地点、1488・1489は下層より出土している。

1478は口縁部端が垂下し、垂直な面をなすもので、外面には波状紋が、内面には3段のイタ刺突がみられる。頸部には貼付られた幅広の突帯が巡り、斜位のイタ刺突が施される。1479は大型の壺で、口縁部はやや斜下方に垂下し、内傾する面をなす。外面には凹線紋が描かれ、11方向に半裁竹管を用いた縦区画が引かれ、その間に4段の竹管刺突列が配される。内面は羽状になる4段のイタ刺突で、2段目と3段目間に山形の貼付突帯が等間隔で全周する。頸部～体部外面にかけて、半裁竹管による横線と波状紋、4段の断面三角形の貼付突帯とその凹み部に竹管刺突が巡る。突帯上にはイタによる刺突がなされる。頸部上半はイタナデがなされ、一部分にタタキと思われる痕跡が確認できる。内面は剥離が激しい。1480も垂下する口縁部をもち、端面には二重の竹管刺突がみられる。内面には3段のイタ刺突が施され、山形の貼付浮紋が巡る。また、頸部には簾状紋がある。1378も同様の形態を呈し、口縁部端面には凹線が巡る。内面には外側よりイタ刺突、扇形紋、イタ刺突の順に施紋されており、扇形紋上に山形の浮紋が配され、等間隔で全周する。頸部には、クシによる横線と簾状紋、イタ刺突がなされた帯状の貼付突帯がある。1488・1489は、同一個体と考えられる円窓付太頸壺である。口縁部は逆八字状に広がり、端面が内傾する。頸部にはヘラによる3条の沈線が巡る。外内面ともハケ調整され、外面屈曲部にのみ、ヘラミガキが施される。底部外面には木葉痕が残る。

細頸壺のうち、1482は上層、1483・1485 ~ 1487は

土器集中地点、1484は貝層内より出土する。

1483の袋状口縁の外面には、上位よりイタによる凹線、5段のイタ刺突、3段の簾状紋、2列の断面三角形の突帯とその凹み部にある竹管刺突、簾状紋の順に施紋されており、突帯上にはイタ刺突がみられる。1486の体部は、頸部から体部上位にかけての4段の簾状紋、流水紋、屈曲部のイタ刺突の順に施紋される。流水紋は上から下に縦位に書かれており、始点と終点が交互になるように、7方向に配される。1487は、頸部から口縁部を打ち欠かされている可能性がある。体部上半には半裁竹管による横線と波状紋があり、下半は下方へのヘラケズリ後ハケ調整されている。1482・1485が細頸壺の体部で、1482は体部下位に上方へのヘラケズリがなされる。また外面にはススが付着する。1485は頸部より上を打ち欠かれた可能性があるもので、外面下半にススが付着する。

1490の短頸壺は、強く屈曲する口縁部が端部で丸みを帯びて内傾し、頂部にイタの刺突がなされる。体部上半には、4段のイタによる羽状刺突が施される。紐孔は2孔×2方向にある。1491は、土器集中地点より出土する。口縁部は強く屈曲し、内傾する面をもつ。体部はハケ後ナデまたはヘラミガキ調整される。紐孔は2孔×2方向。

1492は壺のミニチュアか。土器集中地点より出土する。1493も同様のものと考えられ、貝層より出土している。中央には縦位の焼成前の穿孔がある。

1494・1495とも台付鉢の台部になると思われ、ともに上層から出土している。1494は5方向に透し孔が開き、その下位にやや不規則ではあるが沈線が巡る。外面はハケ後ヘラミガキ調整される。1495は八字状に開いた脚部が裾部で内彎し、接地面で内側にやや肥厚する。透し孔は小さく、細片のため個数は不明。外面はヘラミガキ調整される。

1496～1499は上層から出土している。

1496はゆるやかに屈曲する口縁部の端面に、イタ刺突される。体部外面は、上位の斜位タタキ→縦位

のハケ→中位から下位の斜位タタキ→上位のタタキ状の横線の順に成形・調整されている。内面は中位に、ハケ調整時に生じたかと思われる横位の沈線があり、その後下半に上方へのヘラケズリがなされる。1497はく字状に折れ、端部が折り返したように肥厚する。端面にはイタ刻みがなされるが、あまり明瞭ではなく、下端にもイタ刺突がある。成形・調整は、口縁部外面のタタキ、下位の斜位タタキ→上位から中位の縦位ハケ→上位から中位の斜位タタキ→下位のハケの順に行われる。ただ上位から中位の縦位ハケについては、やや粗く、木目状を呈している。内面は下半部が上方へのヘラケズリ、上半がハケ調整される。1498は、短くく字状に折れる口縁部端面にイタ刺突が施される。成形・調整は、口縁部外面のタタキ、上位の斜位タタキ→上位から中位のハケ→中位のタタキ→下位のクシ状工具によるヘラミガキの順になされる。内面は上位まで上方へのヘラケズリが行われ、上端には斜位のクシ痕が残る。口縁部内面は、ハケ調整。1499はナデ甕で、ゆるやかに折れ曲がる口縁部端面は丸く、イタ刺突がなされる。体部は丸く、ナデ調整される。

1500～1502は土器集中地点、1504・1505は貝層内、1503・1506は下層から出土している。

1500はゆるやかに屈曲する口縁部端面に、イタによる刺突がなされる。上位の斜位ハケ→上位の横位タタキ→中位から下位の斜位タタキ→中位から下位の斜位ハケ→下位の2本単位の工具によるハケの順に成形・調整がなされる。内面は下半が上方へのヘラケズリ、上半が粗いハケになる。1501は、く字状に屈曲する口縁部端面にイタによる刻み、下端に刺突が行われる。底部はわずかに凹面となる。成形・調整は、口縁部外面のタタキ、上位の横位タタキ→中位から下位の斜位タタキ→上位の縦位ハケ→中位の斜位ハケ→上位の横線、下位のヘラミガキの順に施される。1502はややゆるやかに屈曲する口縁部端面に、イタによる刻みと下端に刺突がされるもので

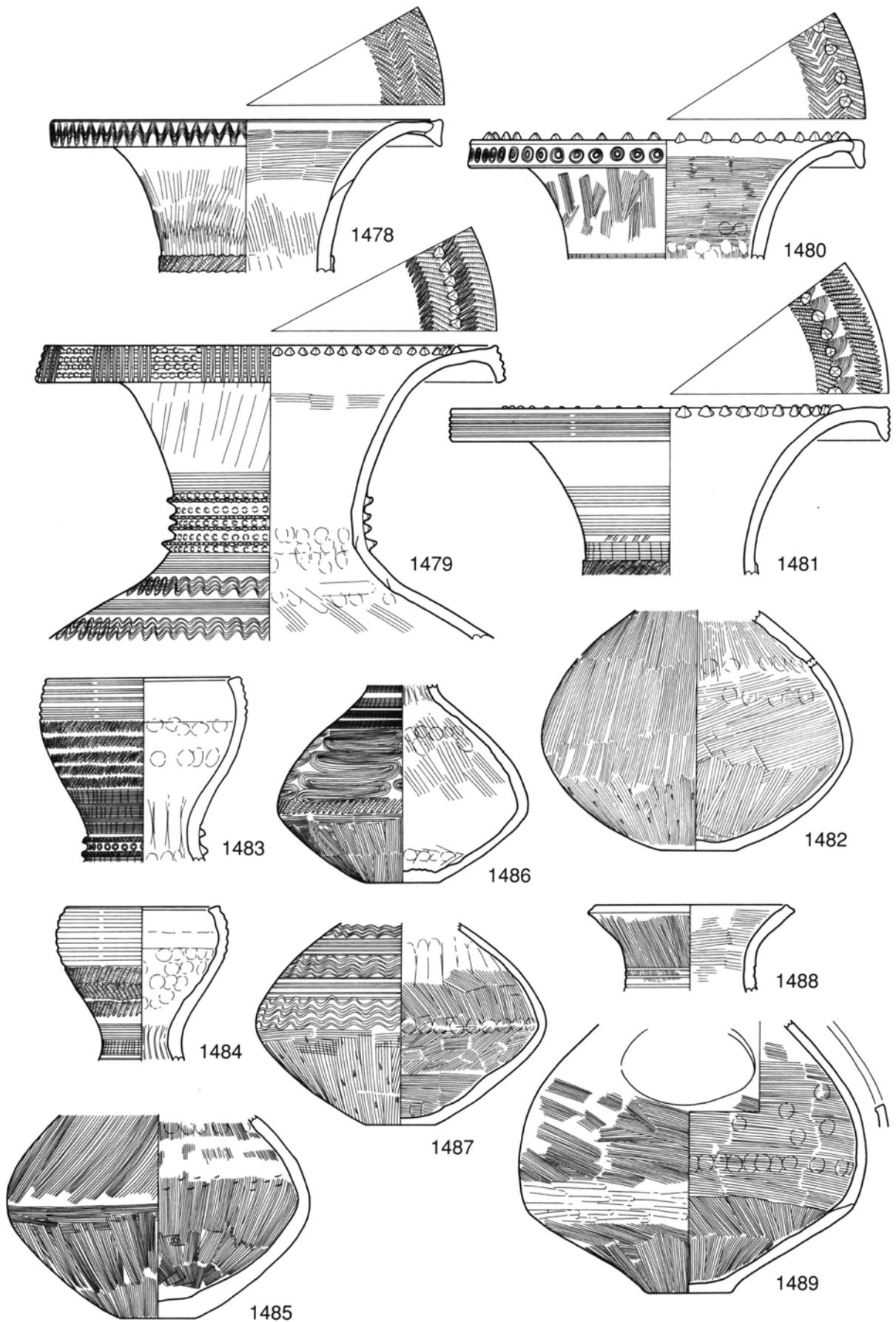
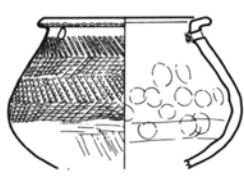


图 147 SD08 (1)

(1/4)



1490



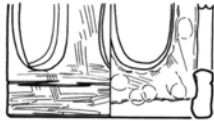
1491



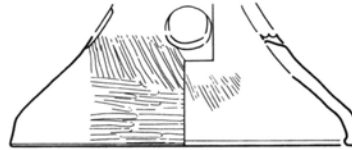
1492



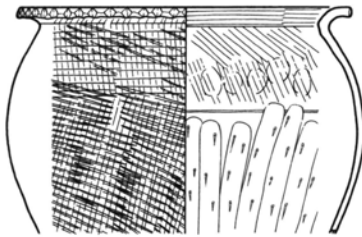
1493



1494



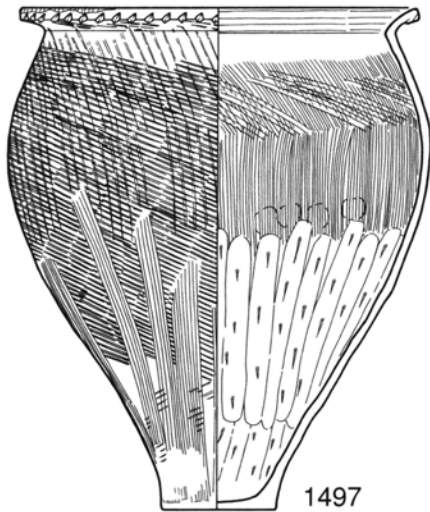
1495



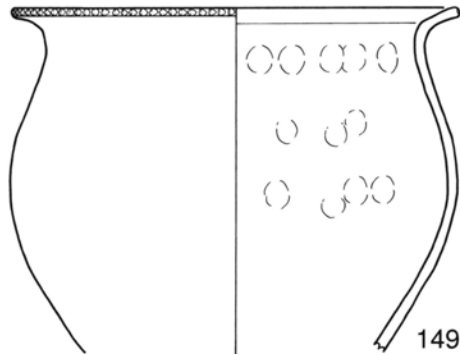
1496



1498



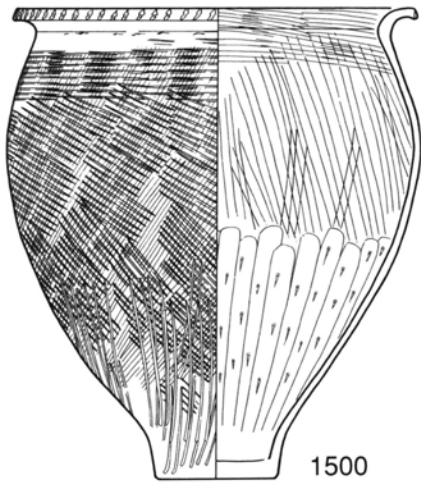
1497



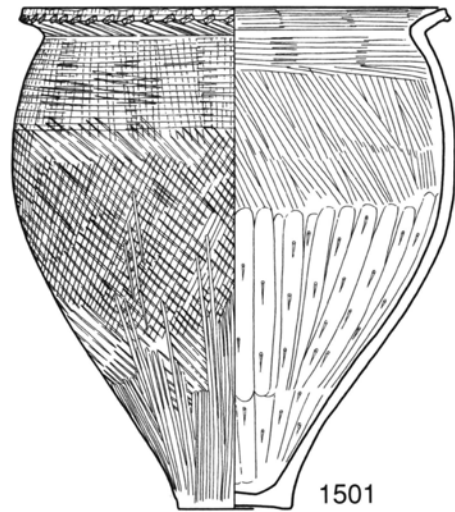
1499

图 148 SD08 (2)

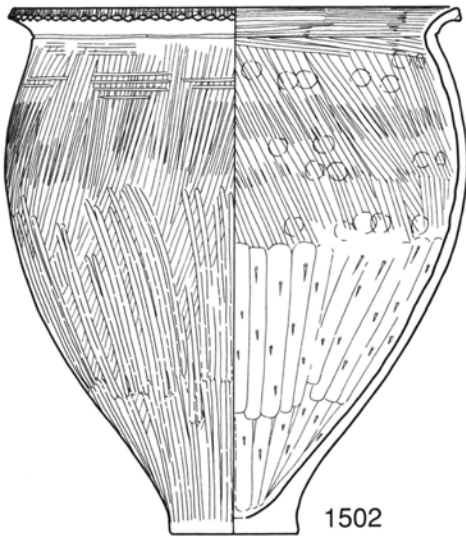
(1/4)



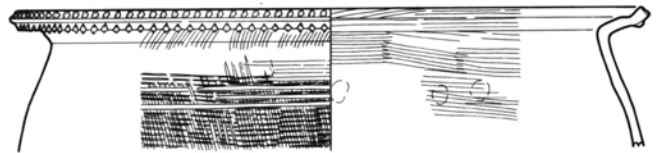
1500



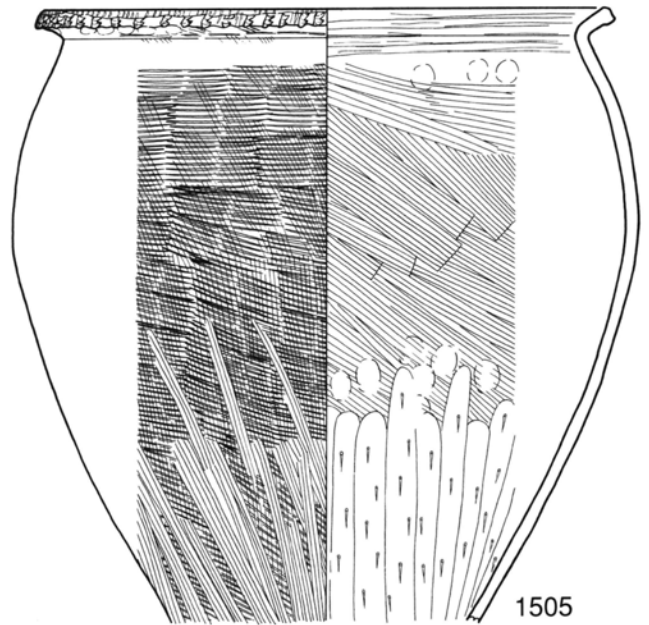
1501



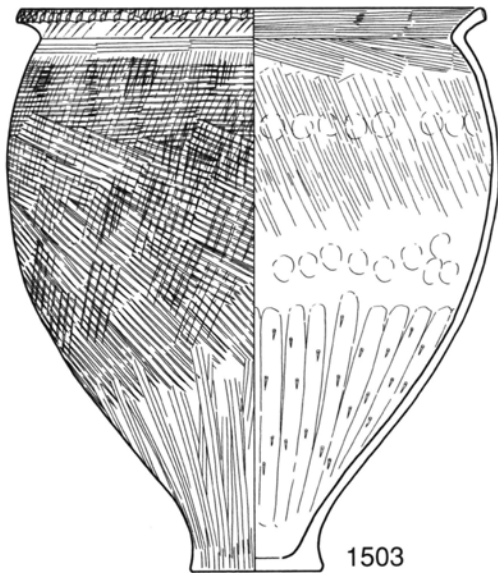
1502



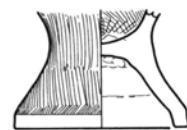
1504



1505



1503



1506

ある。調整は、ハケ後中位から下位に縦位ヘラミガキが施され、上位にも横位のヘラミガキがなされる。タタキは確認できない。内面は下半が上方へのヘラミガキで、上半が粗いハケとなる。1503はく字状に屈曲する口縁部端面に、イタによる刻み後刺突が行われている。成形・調整は、口縁部外面から中位の縦位タタキ、上位の縦位ハケ→上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→下位のやや鋭いハケの順に行われ、最後に頸部下にクシ横線が巡る。内面は下半が上方へのヘラケズリ、上半がイタナデとハケがなされる。1504はゆるやかに屈曲した口縁部が端部でやや上斜方に折れ曲がり、段を作るもので、口縁端部が三角形をなす。その上面と下面下端にイタ刺突がなされる。横位タタキ後縦位のやや太いハケがなされ、その後横位の沈線が引かれる。沈線の工具は、ヘラを束ねたものか。1505は口縁部がく字状に屈曲する。端面では、イタ刺突→口縁部折り曲げによる粘土のはみ出し→イタ刻みの順に調整されていったことが判る。体部外面の調整は、口縁部外面のタタキ、上位から下位のハケ→上位の横位タタキ→中位から下位の斜位タタキ→下位のハケの順で行われている。内面は、下位が上方へのヘラケズリ、それ以外はハケがなされる。1506は甕台部で、八字状に開き、端部がヨコナデにより垂下する。調整はハケ。

(4) S D 06 (図 150 ~ 152)

上層・下層・最下層に分け取り上げた。下層上位には土器集中地点がある。ただ、崩壊部分が多いため、出土層位が不明なものもある。

壺のうち 1507 が上層、1508・1513 ~ 1516 が下層土器集中地点から出土し、1509 ~ 1512 は出土層位不明である。

1507 は口縁部下端が垂下して、やや内傾する面をなすもので、貝による縦位の刺突がなされる。1508 は受口状口縁太頸壺で、口縁部外面には凹線が巡る。凹線上にはクシによる縦位区画が、5 方向に施され

る。頸部にはクシ横線と、イタによる簾状紋状の連続刺突がなされる。1511 は台が付き細頸壺である。体部上半には半裁竹管による、簾状紋・横線・波状紋・やや乱雑な斜格子紋がみられる。下半は、上方へのヘラケズリ後ハケ調整される。台部は八字状に短く開き、端部外面がヨコナデにより凹面をなし垂下して接地する。1513 の短頸壺の口縁部は、強いヨコナデにより屈曲し、外面がヘラミガキ調整される。体部も、ハケ後ヘラミガキがなされる。1514 の円窓付太頸壺は、口縁部が逆八字状に広がり、端面がわずかに上下に拡張して内傾するもので、下端にイタ刺突がなされる。頸部には棒状工具を束ねたもので、横線が引かれる。体部外面上半はハケ、下半は下方へのヘラケズリ後ハケ調整される。内面はイタナデ。1515・1516 は口縁部が八字状に延び、単純な端面をもつ同様な形態をなす。1515 は口縁部外面に 3 条の凹線が巡り、頸部にはイタ刺突がある。1516 は口縁部外面はヨコナデにより凹線状を呈し、頸部には棒状工具による 6 条の横線がある。

高坏のうち、1517 は上層から出土し、他は出土層位不明である。1517 は口縁部から坏部にかけてなだらかな形態を呈するもので、1518・1519 は凹線部分と坏部の境に稜がみられる。1517 の外面は上方へのヘラケズリ後ハケ調整される。内面はハケ後イタナデ。1519 の坏部内面にはスス・有機物が付着する。1521 の脚部は、外面にタタキ、ヘラケズリ後ヘラミガキ成形・調整されている。1520 の台付鉢は透し孔が 6 方向に開き、外面上下端に凹線が巡る。全体にススが薄く付着する。

1522 ~ 1527 は下層土器集中地点から出土する。1522 は口縁部がゆるやかに屈曲するもので、端面外面にはイタによる刻みがなされる。体部外面の成形・調整は、口縁部外面のタタキ、上位の横位タタキ→中位から下位の斜位タタキ→上位から中位のハケ→下位から中位のハケの順に行われる。内面は下半が上方へのヘラケズリ、上半がイタ調整。1523

は強く屈曲する口縁部をもち、内面が深いハケ、端面がイタによる刻みがなされる。体部外面には、上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→上位から中位のハケ→下位のハケの順に成形・調整される。1524も1523と同様の手順で成形・調整が施される。ただ口縁部内面のハケは浅く、底部には、上下から開けられた、焼成後穿孔がみられる。また被熱痕はまったくみられない。1525の上半部分は、強く屈曲する口縁部外面に、やや深いイタによる刻みがなされ、内面上端にもイタによる刺突がみられる。体部外面は、口縁部外面タタキ後ハケ、上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→太く・深いハケの順に成形・調整されている。1526・1527とも口縁部が強く屈曲して端部が上方に伸び受口状になるもので、ヨコナデによって凹面となった外面と端面上位にイタによる刺突がなされる。1526は口縁部外面のタタキ、上位の斜位タタキ、中位から下位の縦位ハケなどが行われた後、上位の横位タタキ→中位から下位の斜位タタキ→上位のハケ→下位のハケの順に成形・調整が行われる。1527は、口縁部外面から頸部の斜位タタキ→上位の横位タタキ→中位から下位の斜位タタキ→上位から中位のハケ→下位のハケの順におこなわれる。なお外面は被熱し、剥離が激しい。

1530・1531は上層、1528は上層と下層から、1532～1534は下層、1535・1536は最下層から出土し、1529は出土層位不明である。

1528は小型の甕で、口縁部は強いヨコナデによってく字状に屈曲し、内傾する端面は凹面をなす。体部外面の成形・調整は、下位の斜位タタキ→上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→上位かた中位のハケ→下位のハケの順になされる。内面には上方へのヘラケズリ時についてと思われる、工具痕が残る。また外面最大径部分には、イタによる斜位の刺突がある1529はく字状にゆるやかに屈曲する口縁部をもち、口縁部はヨコナデ調整され、体部外面にはハケ、内面にはイタナデがなされる。頸部外面には、ヘラ

またはイタによる沈線が巡る。1530は口縁部端面に2段のイタ刻みが施され、内面はハケ調整される。体部は、上位から中位のハケ→上位の横位タタキ→中位から下位の斜位タタキ→下位のハケの順に成形・調整される。台部が付くか。1531の口縁部はやや強く屈曲するもので、端面はヨコナデのみがなされる。内面はハケ調整。成形・調整は、中位の斜位タタキ→上位の横位タタキ→中位の横位タタキ→上位から中位のハケ→下位から中位のハケの順に行われる。内面は上位まで上方のヘラケズリが施される。底部は、焼成後に上下から穿孔される。1532の体部外面は剥離が激しく詳細は不明であるが、タタキがみられる。内面は上位まで、上方へのヘラケズリがなされる。1533は口縁部端面にイタ刻み、体部外面にはハケ→上位の斜位タタキ→中位の横位タタキ→の順の成形・調整がみられる。1534の強く屈曲する口縁部端面には、2段のイタによる刻み・刺突がなされる。成形・調整は、口縁部外面のタタキ、体部上位の斜位タタキ→上位の横位タタキ→上位から中位のハケ→中位から下位の斜位タタキ→下位のハケの順に行われる。1535は口縁部端面がわずかに斜下方に拡張して、イタによる刻みがなされる。体部外面は、中位の横位のタタキ→上位のハケ→上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→下位の斜位タタキ→中位から下位のハケの順に成形・調整される。1536は全体に器壁が厚く、口縁部が短くく字状に折れ、端面がハケ調整される。底部は横に広がる。外面の成形・調整は、口縁部外面、上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→上位から中位のハケ→下位のハケの順になされる。

(5) S D 09 (図 153～155)

1537は口縁部下端が斜下方に拡張され、内傾する面をなすもので、外面にはイタ状工具による凹線と4方向の縦区画、内面に扇形紋と波状紋が描かれる。頸部には帯状の貼付突帯が巡り、イラによる刺突が

なされる。1538は口縁部端がわずかに上下に拡張するもので、外面には波状紋、内面には3段のイタ刺突が施される。1541も同様な形態をなし、外面に凹線、内面に2段の扇形紋がみられる。1539は丸みを帯びた体部をもち、上半に横線と波状紋が施紋される。下半はハケ後ヘラミガキ、ナデ調整される。1540はⅢ系の壺の下半部で、外面はイタナデ調整される。内面は剥離が激しく調整は不明瞭。不揃いな工具による不定な横線と波状紋がなされる。1542は口縁部端面がヨコナデによってやや凹面となる。外内面ともハケ調整される。1543は円窓付太頸壺で、中位にある焼成前穿孔と下位にある焼成後穿孔がある。焼成前穿孔は欠損部が多く、やや不定形な形を呈する。焼成後穿孔は外から開けられる。口縁部端は単純に収束するが、端面はヨコナデにより凹面となる。また外端部にイタによる細かい刺突がなされる。頸部にはヘラ沈線が、体部にはハケ後縦位、斜位のヘラミガキが等間隔に施される。

1544は大型の受口状口縁細頸壺で、口縁部外面にはイタ状工具による凹線、頸部から体部上半にかけて半裁竹管による横線と波状紋が描かれる。頸部にはイタ刺突がなされる。1545は器壁が厚く、端面が丸く収束する。1546は外面に半裁竹管による簾状紋・横線・波状紋が描かれ、内面はイタによる粗いハケがなされ、中位に工具痕が巡る。1547は体部が横に長く、丸みを帯びる。頸部から体部上半にかけては、細かい波状紋がなされ、下半には横位ヘラミガキ後斜格子のヘラミガキが施される。1548の施紋工具は、半裁竹管。1549は頸部がやや太く、体部最大径が下位にあるもので、稜をなす。体部上半にはクシによる縦線によって6区画に分けられ、3区画に横位のヘラ沈線、残り3区画がヘラミガキのみがなされ、施紋されない。外面にはススが付着する。

1550は、あまり体部が張りださず、縦長になるもので、口縁部外面がやや肥厚し、斜位のクシ条痕がなされ、内面にはクシ工具による刺突がある。体

部上位は横位、中位が縦位羽状、下位が縦位のクシ条痕で調整される。内面はイタナデ。1551は体部が中位で張りだすもので、1550と同様の調整がなされる。

1552はハケ調整される甕で、口縁部下端にはイタによる刺突がなされる。1553は明瞭な口縁部の屈曲がないもので、ヨコナデが施された端面はわずかに凹面となり内傾する面を作る。外面はハケ、内面はハケ・イタナデ調整される。底部には焼成前穿孔があり、外面に木葉痕が残る。1554・1555とも短い口縁部をもち、端面は丸い。調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がハケ、内面がイタナデ調整される。

1556は口縁部がやや強く屈曲し、外面にはイタ刺突、内面には深いハケがなされる。体部外面の成形・調整は、上位の横位タタキ→中位の横位タタキ→上位から中位のハケ→下位のハケの順になされる。1557の口縁部は外彎しながら屈曲するもので、断面が三角形を呈する。体部外面は、ハケ→横位タタキ→斜位タタキの順に成形・調整される。1558は短く外反する口縁部をもち、端面上位にイタ刻み、下位にはイタ刺突が施される。成形・調整は、頸部のハケ、上位の横位タタキ→中位から下位の斜位タタキ→再度中位の斜位タタキ→粗い深いハケの順に行われている。1559のく字状に折れる口縁部端面には、イタ刻みと下端にイタ刺突がなされる。底部は薄く、上げ底となり、焼成後に穿孔される。外面の成形・調整は、口縁部外面のタタキ、上位から中位のハケ→上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→再度頸部の横位タタキ?→外位のハケの順になされる。内面の上方へのヘラケズリは上位までみられる。1560は口縁部下半に、イタ刺突が施される。体部外面は、上位から中位のハケ→上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→下位のヘラミガキの順に成形・調整が行われる。また頸部付近には口縁部刺突時のイタ角の痕跡が残り、内面にも工具による沈線が巡る。1561は口縁部端面にイタ刻みがなされ、下端がユビ

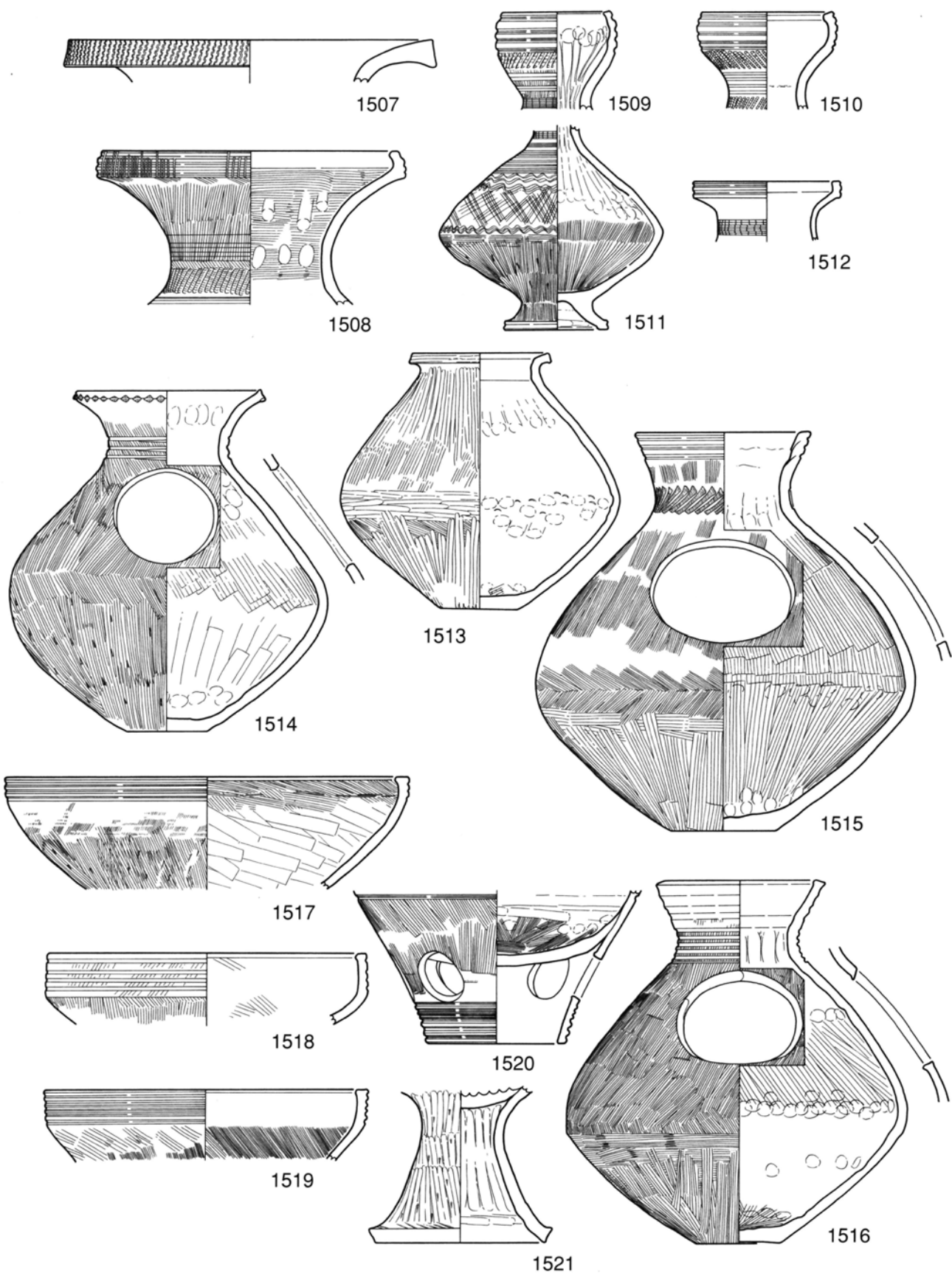


图 150 SD06 (1)

(1/4)

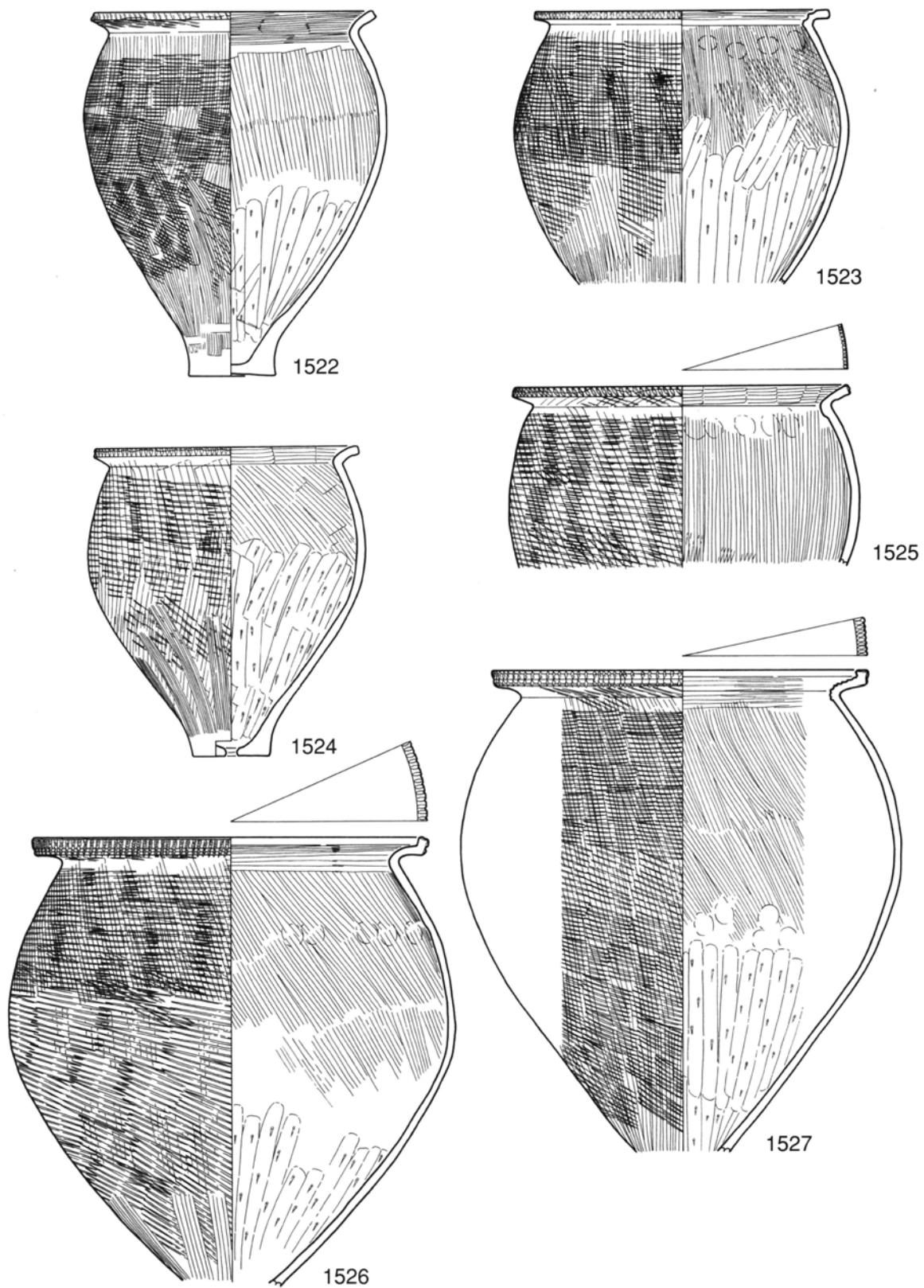


图 151 SD06 (2)

(1/4)

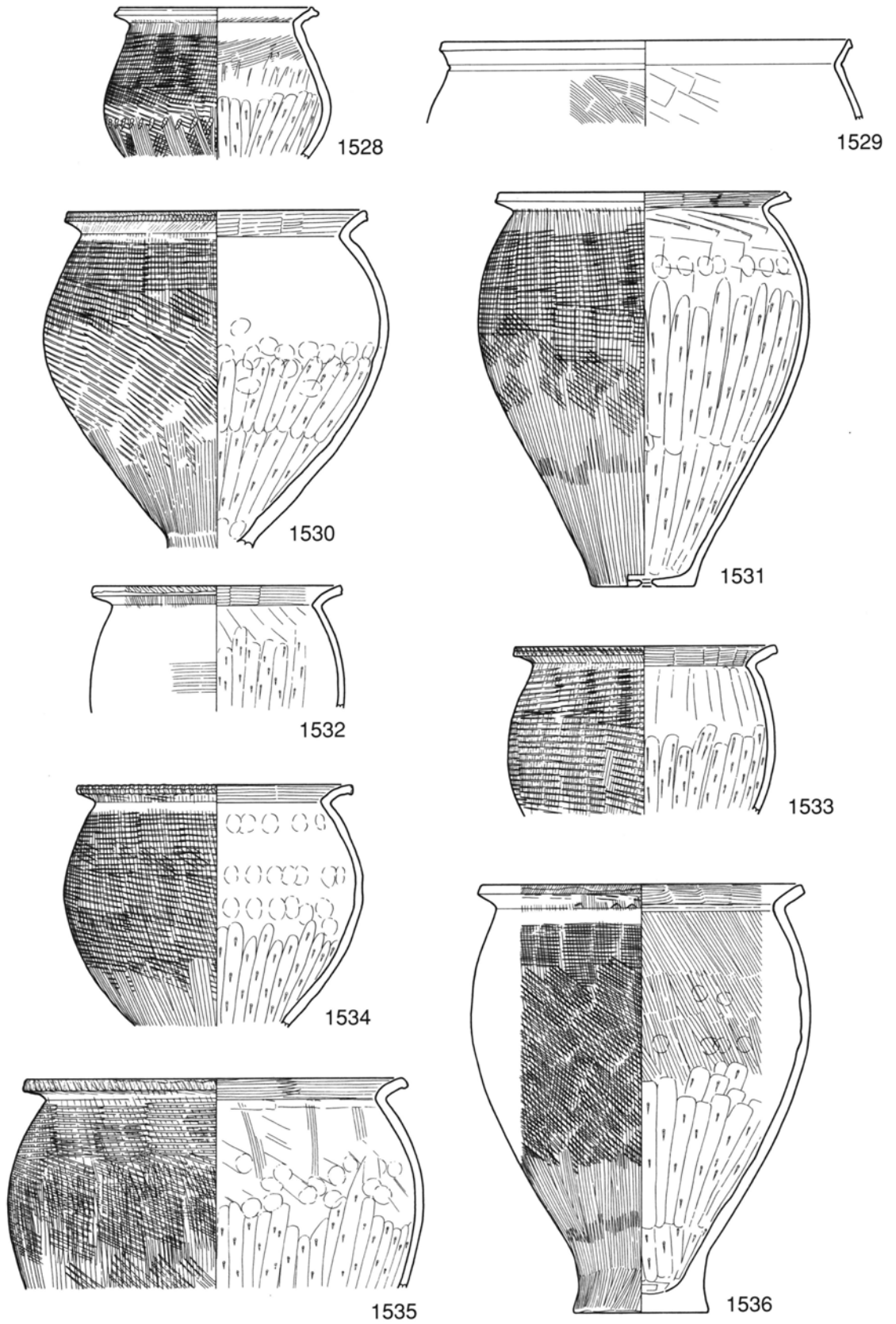
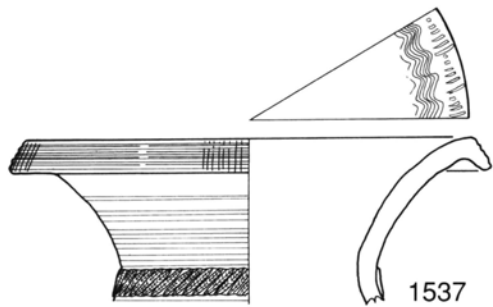
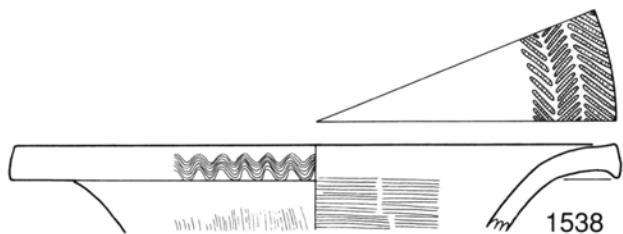


图 152 SD06 (3)

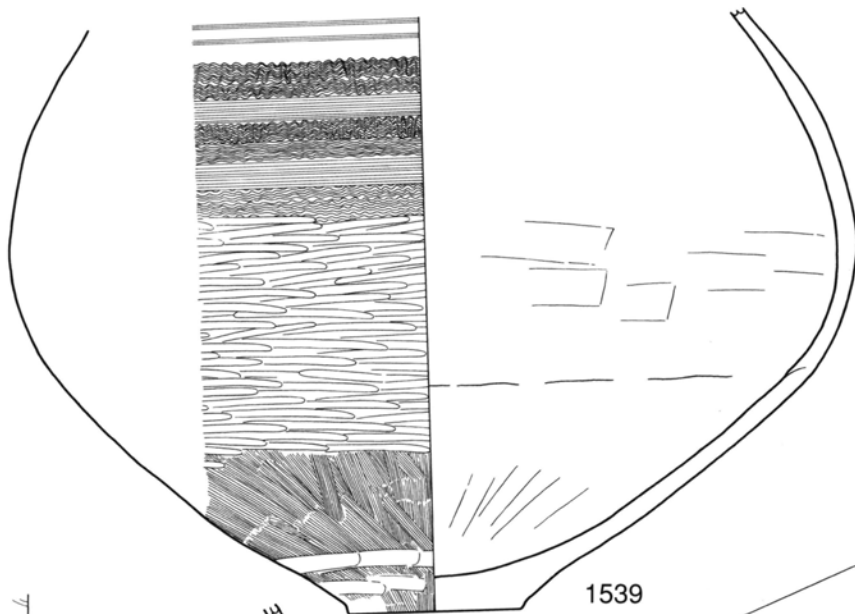
(1/4)



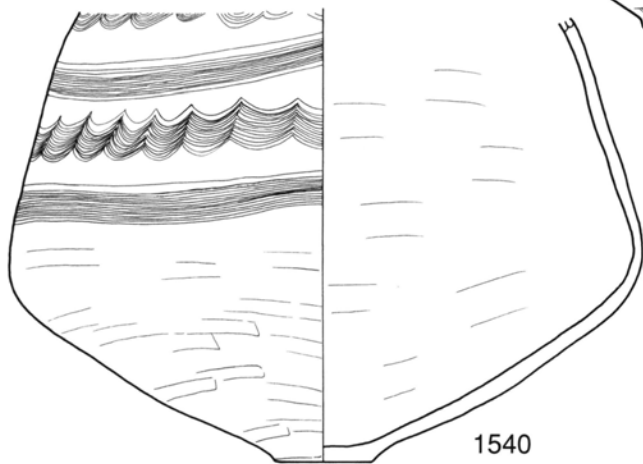
1537



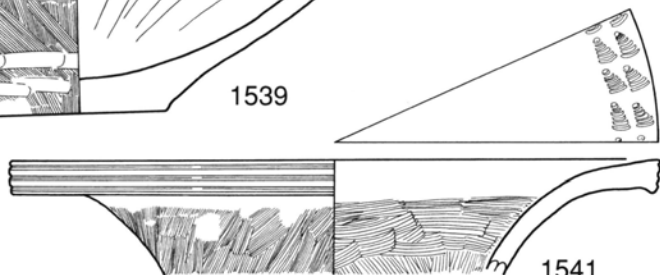
1538



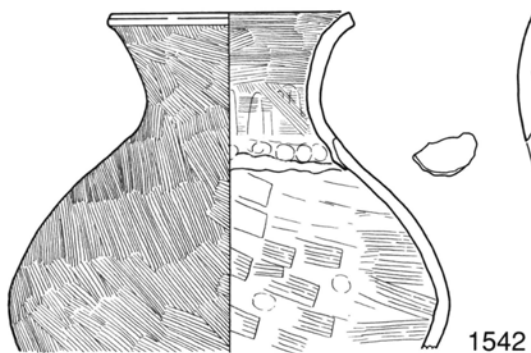
1539



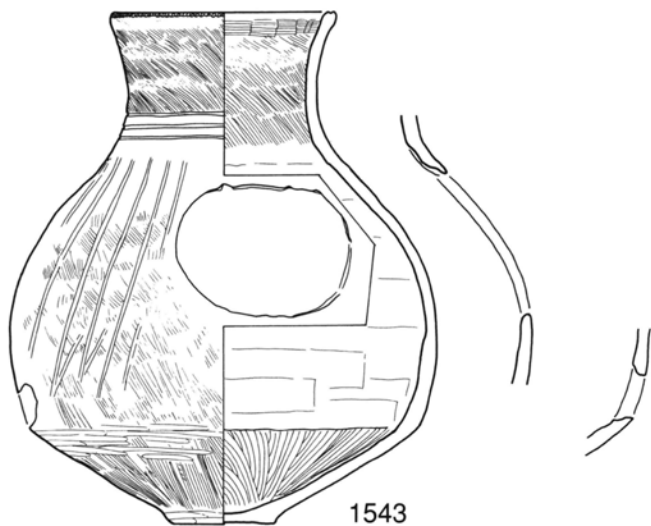
1540



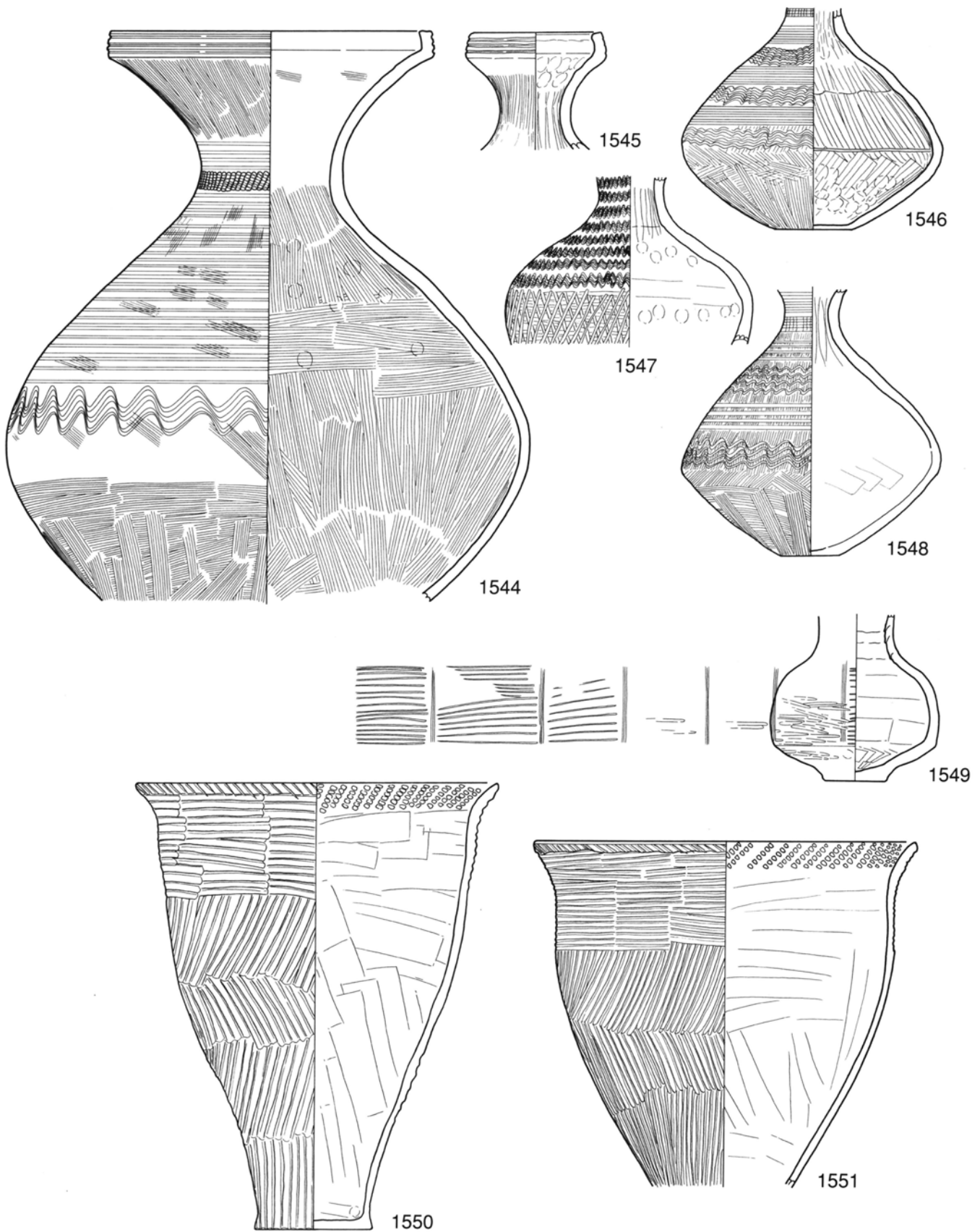
1541



1542



1543



☒ 154 SD09 (2)

(1/4)

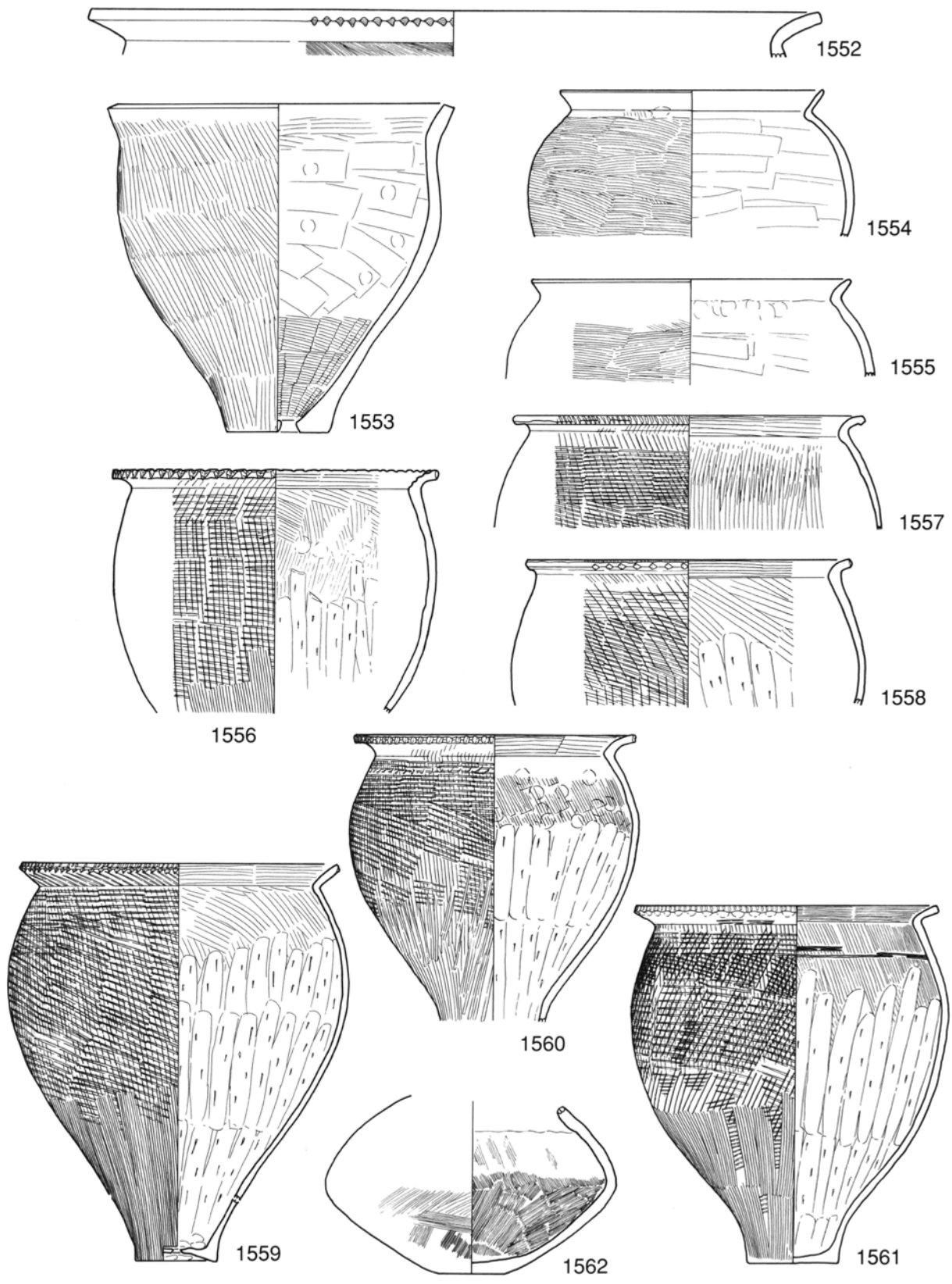


图 155 SD09 (3)

押圧により波状を呈する。外面は、口縁部外面のタタキ、中位の横位タタキ→下位の斜位タタキ、上位の斜位タタキ→上位から中位の縦位ハケ→上位の横位タタキ・中位の横位タタキ→上位から中位への斜位ハケ→下位のハケの順に成形・調整がなされる。内面上位には、工具による沈線が巡る。

1562は細頸壺の体部で、頸部は打ち欠かれて欠損している。内外面とも、ハケ調整。

(6) S D 13 (図 156 ~ 158)

S D 13は上層に土器集中地点があり、多くはそこから出土している。またこの層位を境に上層と下層に分かれる。

1563 ~ 1570は土器集中地点から出土する。

1563は口縁部端が垂下するもので、外面に凹線、内面に2段の羽状のイタ刺突がなされる。1564は口縁部が逆八字状に開くもので、端面がヨコナデにより内傾する凹面をなし、下端にイタによる刺突がみられる。頸部にはヘラによる沈線が2条巡る。1565は台付太頸壺で、口縁部がヨコナデにより強く屈曲し、端面が凹面をなす。下端にはイタによる刺突が施される。頸部はやや太く、外面にイタ刺突がある。体部上半は、ハケ後半裁竹管による横線と波状紋、イタ刺突による施紋がなされ、その後窓部が開けられる。下半には下方へのヘラケズリ後ハケ・ナデ調整される。内面はハケ調整され、工具痕が沈線状に残る。台部は八字状に広がり、端面が強いヨコナデにより凹面となる。1566~1570は円窓付太頸壺になる。1566は口縁部外面に凹線が巡り、わずかに袋状を呈する。頸部外面にはイタ刺突と下位にその工具痕が残る。1567は頸部外面に、クシによる横線がある。1568・1570は体部最大径が下位にくるもので、外面屈曲部分が横位のヘラミガキ調整される。また1570は底部が突出し、内面下位にヘラケズリが施される。

1574・1575・1578は上層から、1576は下層下位か

ら、1571~1573・1577は土器集中地点から出土する。

1571の逆八字状に開く口縁部端は丸く、イタによる刺突がなされる。頸部~体部外面には、縦位ハケ後不揃いなクシによる横線、短い単位の横線、弧状線、ヘラによる波状紋が描かれる。1572の袋状口縁細頸壺は、口縁部端面がヨコナデにより凹む。口縁部から頸部にかけて波状紋、横線が描かれ、その後施紋の目安とされたと思われるクシによる6方向の縦区画が引かれ、ヘラによる右下方から左上方への斜線→左下方から右上方への斜線→縦線の順に施紋される。下半はハケ後ヘラミガキ調整。1573は、口縁部外面に凹線とイタ刺突、頸部にクシによる簾状紋、頸部から体部上半にかけて半裁竹管による横線と波状紋、4方向の縦区画がある。体部下半は下方へのヘラケズリ後ハケ調整される。底部はわずかに凹面となる。1574は台付袋状口縁細頸壺で、口縁部外面には棒状工具による4条の凹線と上端には竹管刺突、2段のイタ刺突がなされる。頸部から体部上半にはクシ横線、竹管刺突が巡り、その下位に横位に、4方向に縦位に扇形紋が施される。さらにその下位にはクシによる斜格子と波状紋がある。台部は八字状に低く広がり、端部が垂下するもので、外面には棒状工具により凹線がある。1575はナデ調整される。1577は大型の袋状口縁細頸壺の頸部から体部上半で、頸部には断面三角形の貼付突帯が4条巡り、凹み部に竹管刺突がなされる。体部には横線とイタ刺突が交互に施され、2段目の横線上に竹管が刺突される。1578は口縁部がわずかに屈曲するもので、ハケ調整される。脚部になる可能性もある。

1579の高坏は上層から出土する。口縁部から坏部にかけて、あまり稜がなくなだらかな形態をなすもので、口縁部外面と脚部外面に凹線が巡る。透し孔は3方向。

1580~1582は上層より出土する。1580は底部充填部が欠損している。1581はく字状に屈曲する口縁部端面にはイタによる刻みがなされる。成形・調整

は、上位の横位タタキ→上位から中位のハケ→中位から下位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→下位のハケの順に行われる。1582は体部は丸く、口縁部は短く端部は丸い。口縁部下端にはイタによる刺突がなされる。成形・調整は、口縁部外面のタタキ、体部上位のハケ→上位から下位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→再度上位に横位タタキ→中位ハケの順になされる。内面は不定方向のハケ後中位から上位にかけてヘラミガキが施される。

1583・1584・1586～1588が土器集中地点から、1590は土器集中部分の下位から出土する。1585・1589は下層から出土する。

1583は強く外反する口縁部をもち、内面のみハケ調整される。体部外面は、上位横位タタキ→中位の斜位タタキ→ハケの順に成形・調整される。1584はゆるやかに口縁部が折れるもので、端面はやや丸く、イタによる刻みがなされる。外面は、横位タタキ後ハケが施される。1586は頸部から口縁部にかけてゆるやかに屈曲するもので、端部が上方に伸び、受口状になる。調整はハケ。1587は口縁部が強く屈曲し、下端にイタによる刺突がなされる。外面は、口縁部のタタキ→口縁部のハケ→体部ハケ→体部タタキの順に成形・調整される。内面は粗いハケ。1585の底部は外面がハケ、内面がイタによるケズリが施される。底面には焼成前の穿孔が開けられる。1590も底面に焼成前の穿孔がある。口縁部はく字状に折れ、端面にはイタによる刻みがなされる。外面の成形・調整は、口縁部外面のタタキ、上位の横位タタキ、中位の斜位タタキ→口縁部外面から中位のハケ→下位のハケの順に行われる。

1593の細頸壺は土器集中地点から出土する。口縁部は端部で内側に折れ、受口状になる。口縁部外面から頸部にはクシによる不定な波状紋が描かれ、5方向に棒状の貼付浮紋が付き、イタ刺突が施される。頸部から体部上半には、等間隔にクシ横線が引かれ、3方向のクシによる縦区画後、不定なヘラミガキが

横位に等間隔に施される。横線とヘラミガキは重複する部分が多い。

1595の高坏も土器集中地点から出土する。脚部から坏部外面にかけてハケ、坏部内面はヘラミガキ調整される。

1591・1592・1594は土器集中地点の中でも下位から出土する。1591の円窓付太頸壺は口縁部が短く、外面端には2条の凹線が巡る。円窓下には、ハケ工具でできたと思われる疵がみられる。1592は口縁部が口縁端部が下位が肥厚するもので、内面にクシによる波状紋が施される。外面はクシによる波状紋と横線、斜格子が施紋され、同工具による支点を交互に移動する山形紋もある。体部下位の屈曲部は、ハケ後ヘラミガキがなされるが、その部分に焼成前に生じたひび割れを粘土によって補修した痕跡が残る。内面はイタナデ。1594は、口縁部が強く屈曲し端部が垂下し垂直の面をなすもので、外面にイタ刺突、内面には2段の羽状のイタ刺突とその上に山形の貼付浮紋が巡る。頸部から体部上半には、半裁竹管に横線と波状紋があり、頸部にはイタ刺突がある。下半は上方へのヘラケズリがなされる。

(7) S K 74 (図 159・160)

上層ではひとつの土坑として取り上げたが、下層では2つの土坑として分けて取り上げ、北のものをS K 74-1、南のものをS K 74-2とした。

壺のうち1596・1603がS K 74-1、1601・1604・1605がS K 74-2から出土している。

1596の口縁部外面には貝による刺突が巡り、内面にはイタ刺突された横位の棒状浮紋が2×6方向にある。頸部にはクシによる横線、貝刺突、ヘラミガキが交互に行われる。1597は口縁部外面にイタ刺突がなされ、頸部には2条のヘラ沈線と貝刺突がある。また頸部から口縁部にかけて、縦位のヘラ沈線がある。さらに体部外面にもわずかにヘラ沈線があるか、上位の沈線と同様なものかは不明である。1601～

1604はそれぞれ半裁竹管によって横線、波状紋が施紋されている。1603は頸部より上が打ち欠かれた可能性がある。1604には体部最大径から下半には横位タタキがある。1605の太頸壺は口縁は受口となり、外面には棒状工具による凹線が巡る。頸部から体部上半の横線、連続刺突、波状紋はクシによってなされる。成形・調整は、タタキ→中位のハケ→上位のハケ、下位のハケの順に行われる。内面は剥離が激しい。1606は壺体部になり、クシによる連弧状紋が描かれる。

高坏のうち1609はS K 74-2より出土している。1607は口縁部外面に、棒状工具による凹線が巡り、坏部外面には上方へのヘラケズリがなされる。1608の脚部外面には上方へのヘラケズリがみられ、端面はヨコナデによって沈線状になる。1609は脚部端面が上下に拡張し、ヨコナデによって凹面となる。透し孔は1×3方向。

甕のうち、1610・1618はS K 74-1から、1615・1616・1619・1620はS K 74-2から出土している。

1610～1613はハケ甕となり、体部外面には縦・斜位のハケがなされる。1610・1613の口縁部端面下端にはイタによる刺突がみられる。1614はナデ甕で、く字状に屈曲する口縁部は丸い端面をもち、イタによる刻みが施される。1615は口縁部端面にイタ刻みがなされ、成形・調整は口縁部外面のタタキ、下位の斜位タタキ、中位のハケ→上位の斜位タタキ→中位の横位タタキ→上位のハケ、下位のハケの順に行われる。1616の口縁部外面にはイタによる刻みがあり、頸部下の横位タタキ→口縁部から中位にかけての深く鋭いハケ→上位の斜位タタキ→中位の斜位タタキ→下位のヘラミガキの順に成形・調整がなされる。また内面にも深く鋭いハケが使用される。1617の口縁部端面には2段のイタ刻みがみられ、ハケ後横位のタタキがされる。やや下端が肥厚した1618の口縁部は、上面・下端にイタ刻みが施され、口縁部外面から頸部下にかけての斜位タタキ→上位から中

位のハケ→上位の横位タタキ→中位から下位の斜位タタキ→下位のハケの順で成形・調整が行われる。1619は外面全体に斜位のタタキで成形された後、上位から中位のハケ→上位の横位タタキ→下位のハケの順で調整される。1620は口縁部外面にイタによる刻みがあり、口縁部外面にはハケ後タタキがなされる。体部の成形・調整は、上位から中位のハケ→上位の斜位タタキ→中位の斜位タタキ→下位のやや太いハケ、半裁竹管？による波状紋の順になされる。1621の口縁部端面はヨコナデのみで仕上げられ、タタキ後上位から中位のハケ→下位のハケの順に調整される。波状紋はクシ。

(8) S X 02 (図 161)

S X 02は包含層内の土器集中地点である。

1622の受口状口縁太頸壺は外面には、イタによる凹線があり、クシによる縦区画が4方向に描かれる。頸部はクシによる横線とイタ刺突がみられる。1623は口縁部端が垂下してやや内傾する面をもつもので、外面に羽状のイタ刺突、内面には3段の羽状刺突があり、山形の浮紋が4×3方向に付けられる。1624は丸い体部をもつもので、口縁部端面下端にはイタによる刺突がなされる。成形・調整は、斜位の細かいハケ→上位に斜位タタキ→縦位ハケが行われ、その後上位のクシ横線が引かれる。内面は、中位まで上方へのヘラケズリがなされ、その工具痕かと思われる弧状の痕跡が残る。

(9) S X 01 (図 161・162)

S X 01は包含層内の土器集中地点である。

1625の太頸壺の口縁部外面にはイタによる凹線が巡り、内面には羽状のイタ刺突がなされ、その上の扇形紋が描かれる。頸部から体部にかけては、半裁竹管によると思われる、簾状紋と横線が引かれるが、やや安定に欠ける。1626の受口状口縁太頸壺の口縁部外面には、棒状工具による凹線があり、頸部には

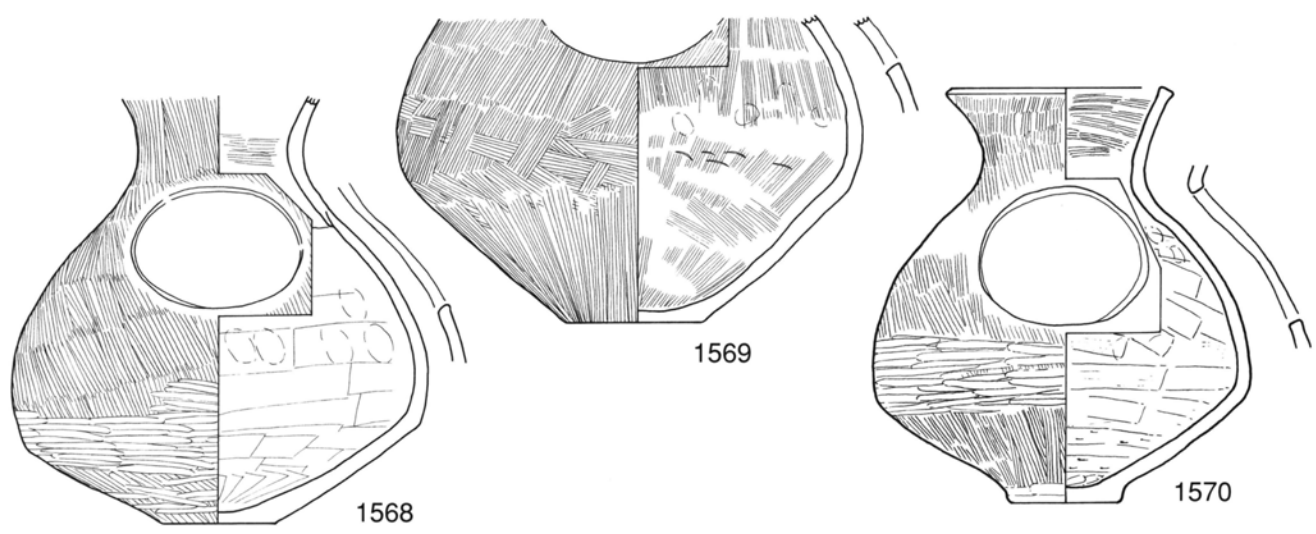
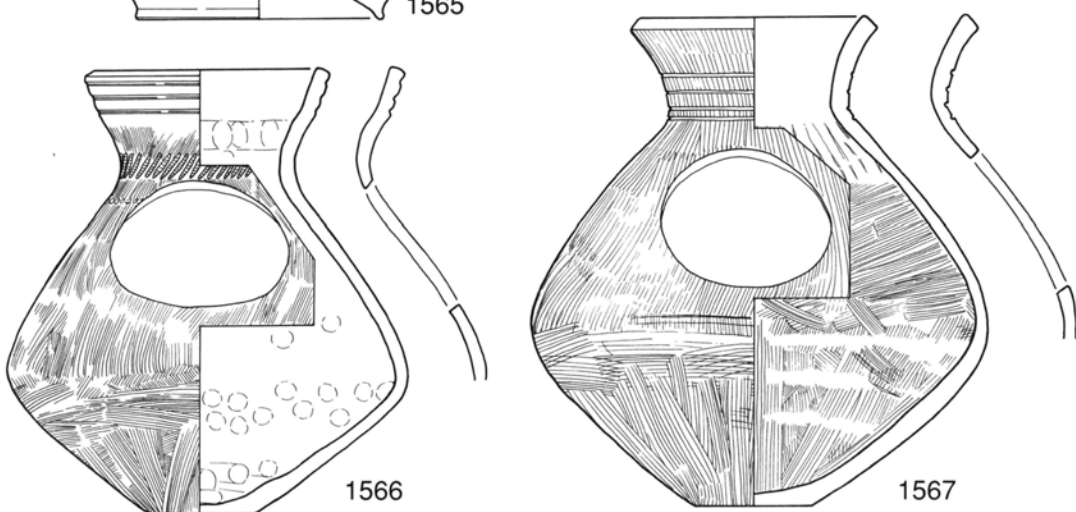
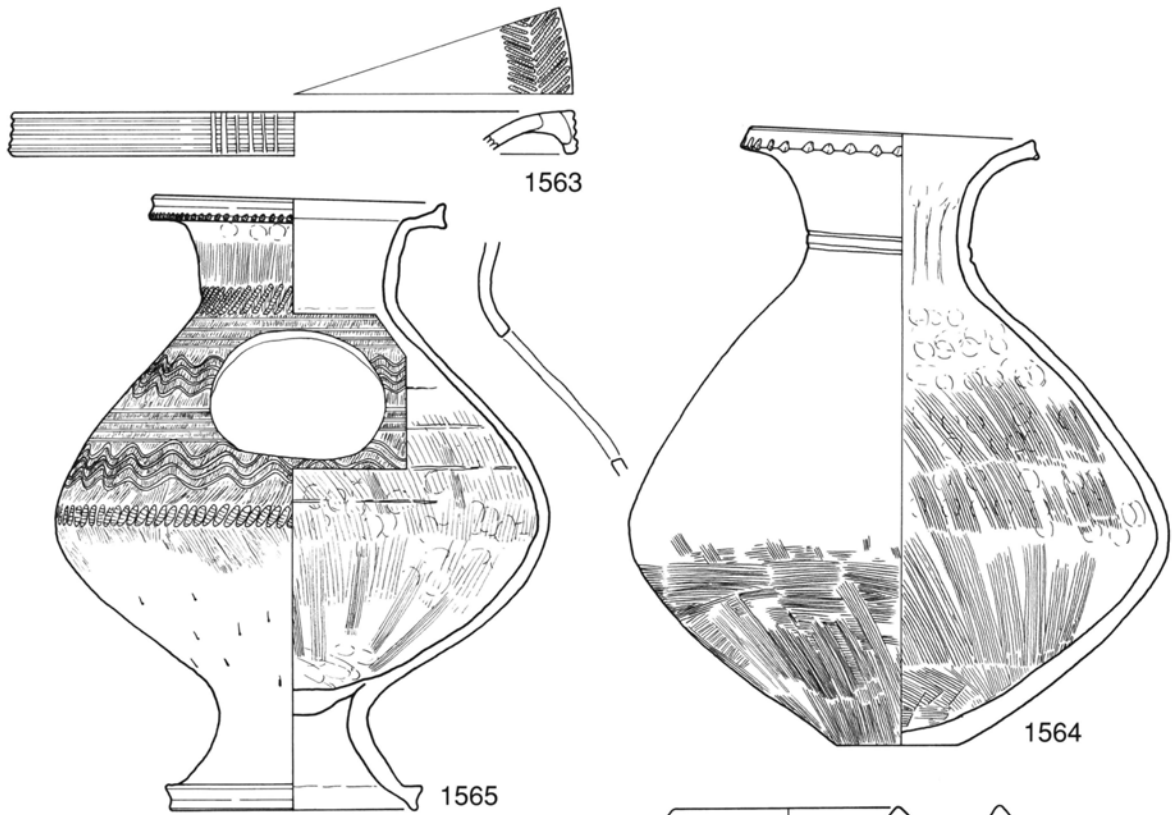


图 156 SD13 (1)

(1/4)

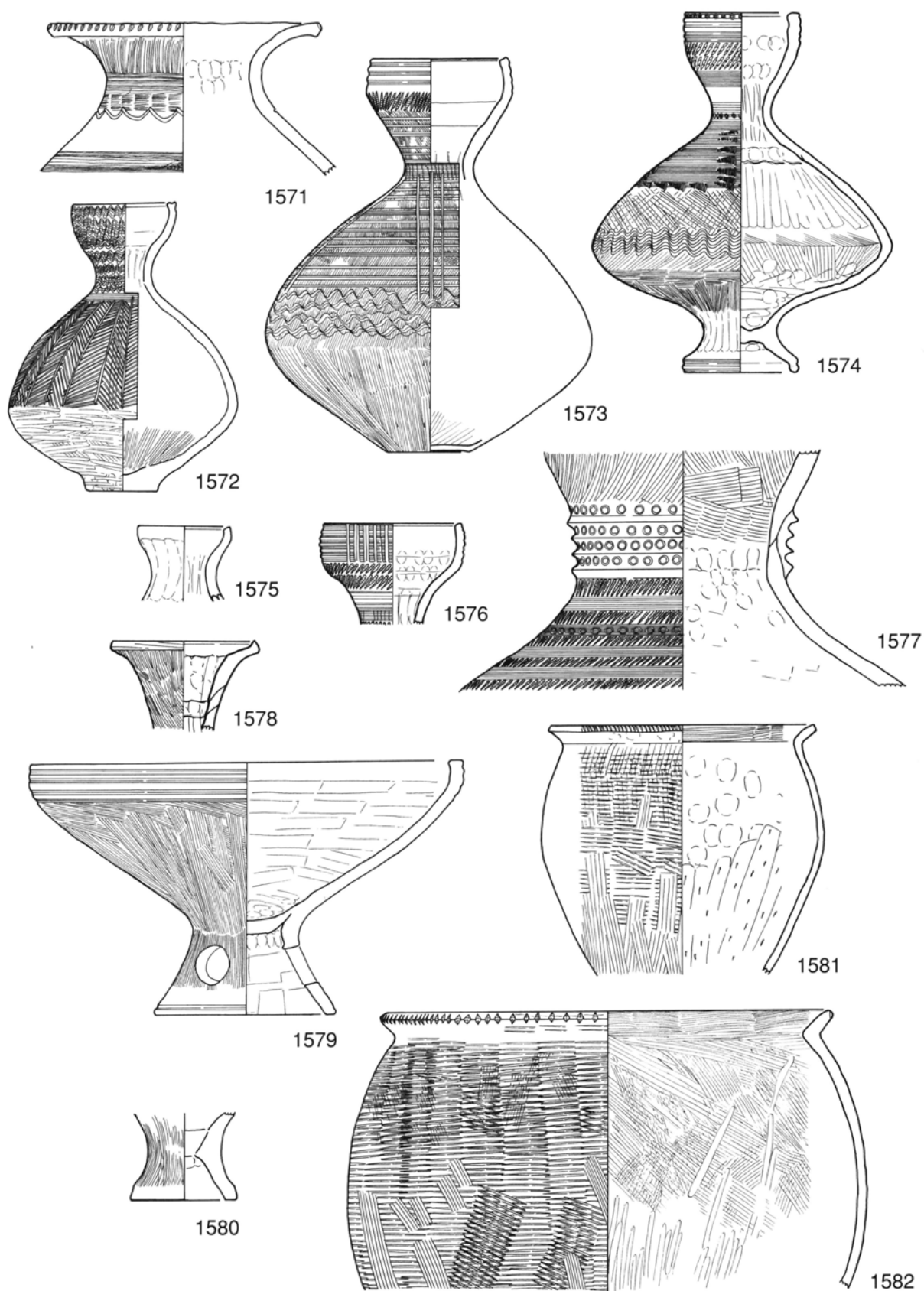


图 157 SD13 (2)

(1/4)

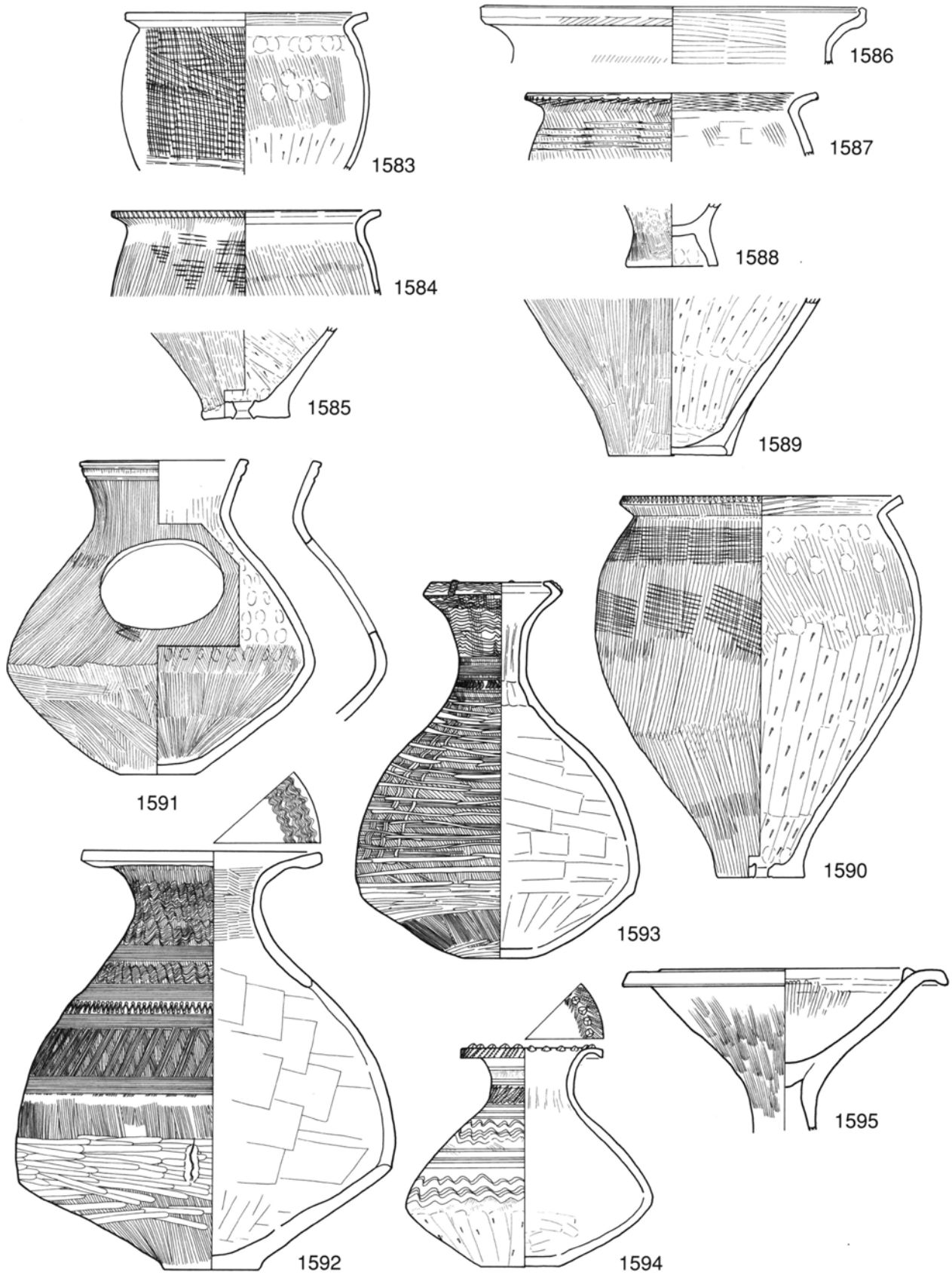


图 158 SD13 (3)

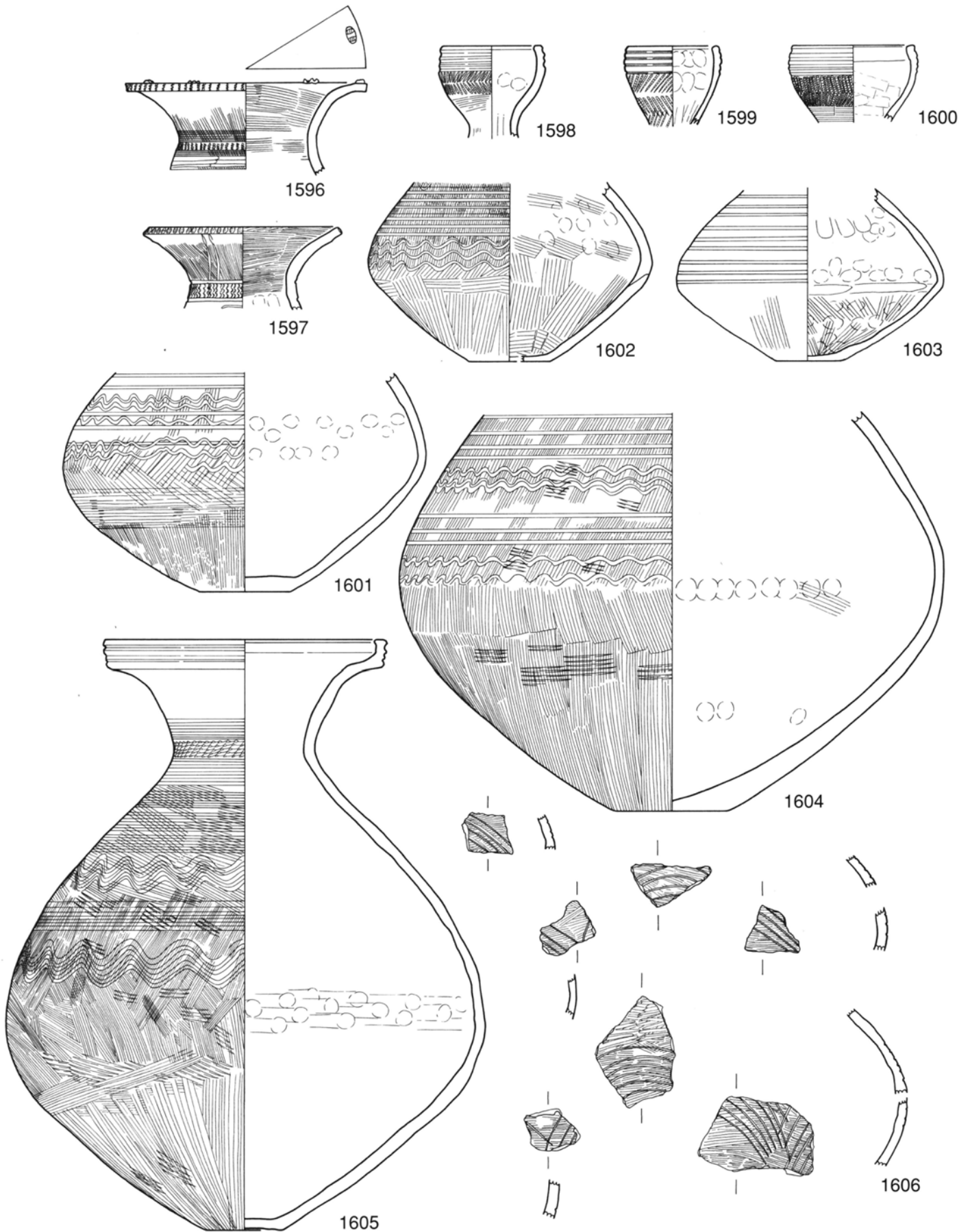


图 159 SK74 (1)

(1/4)

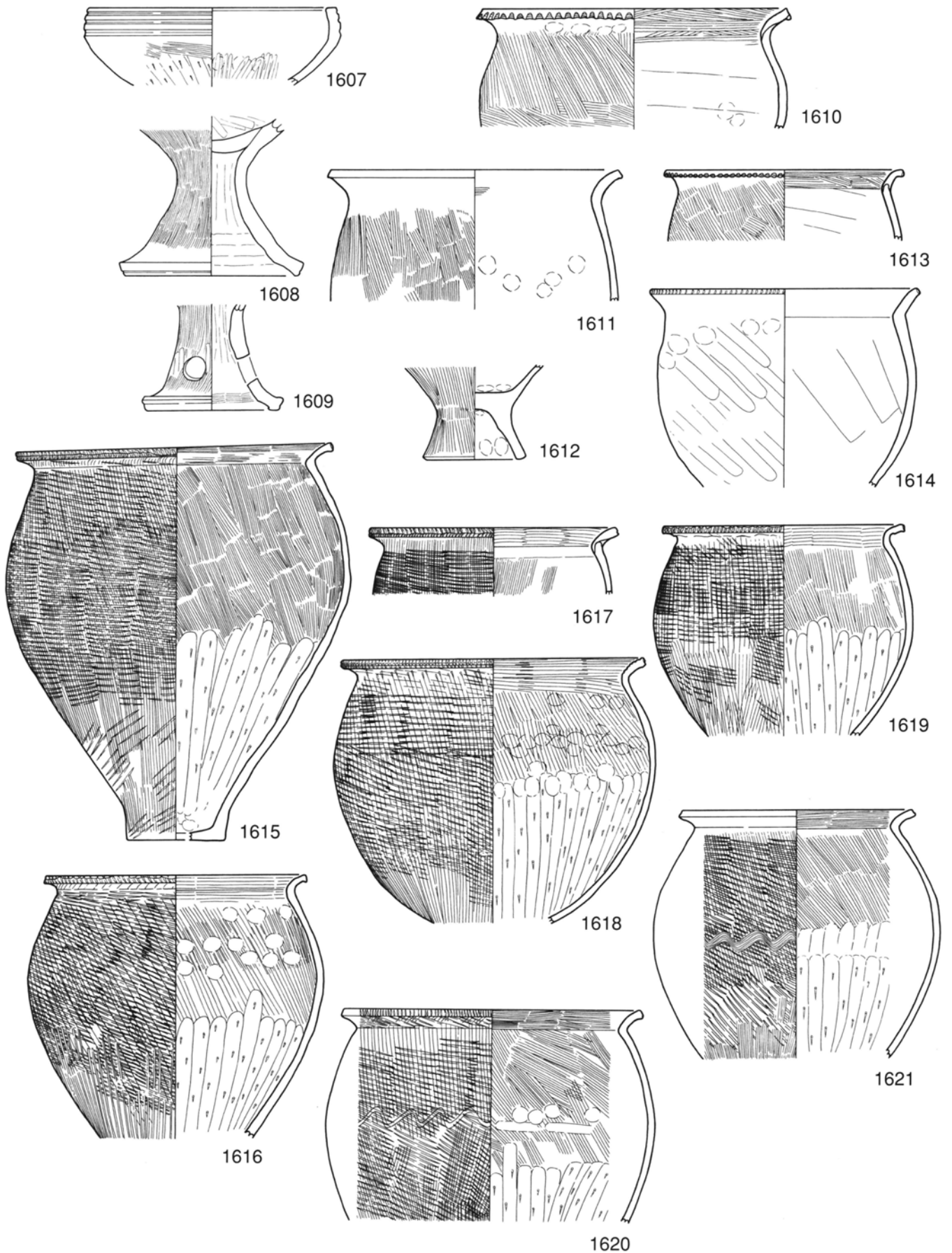
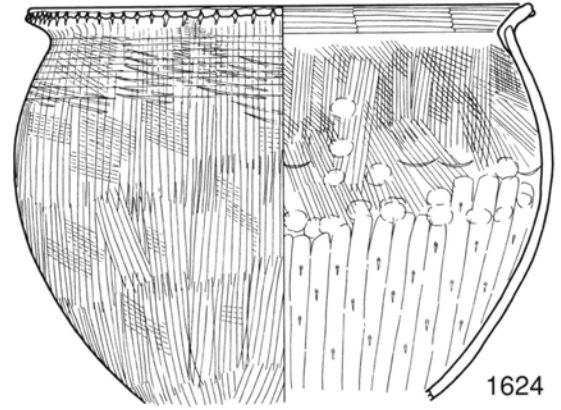
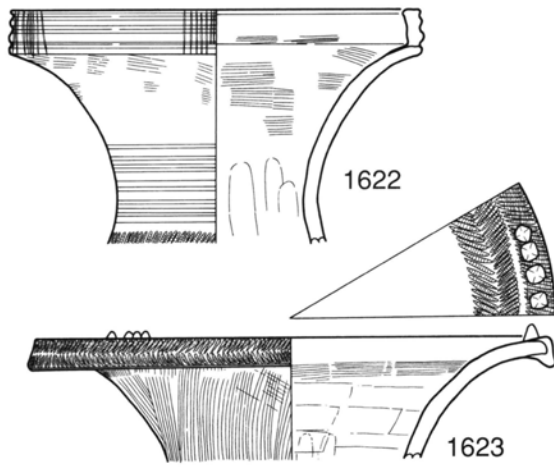
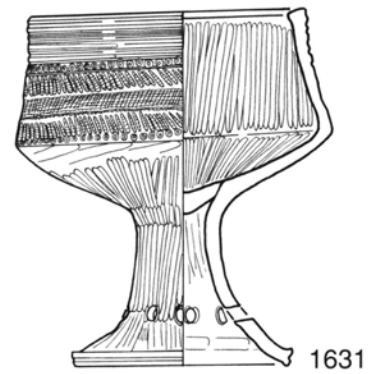
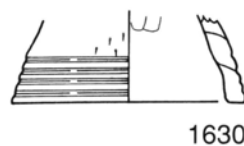
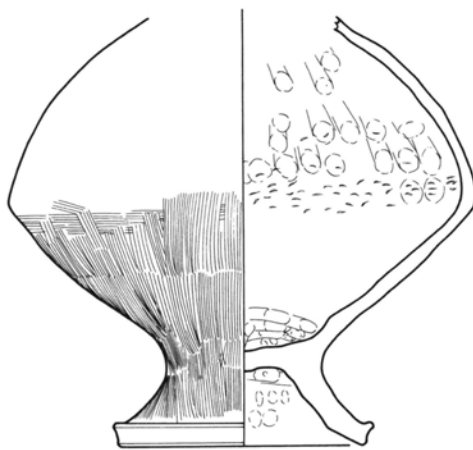
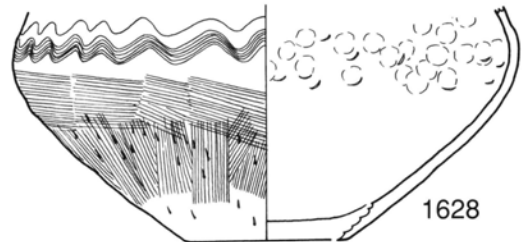
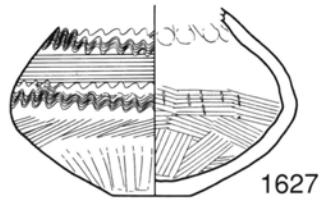
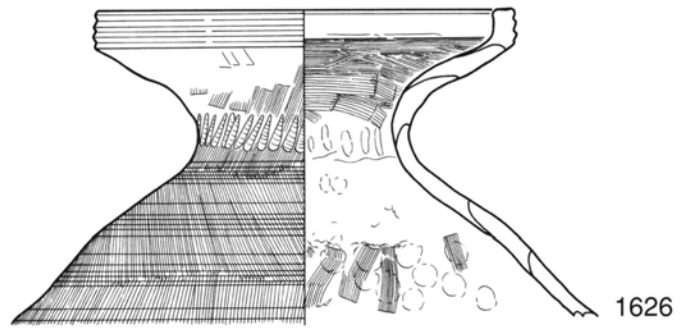
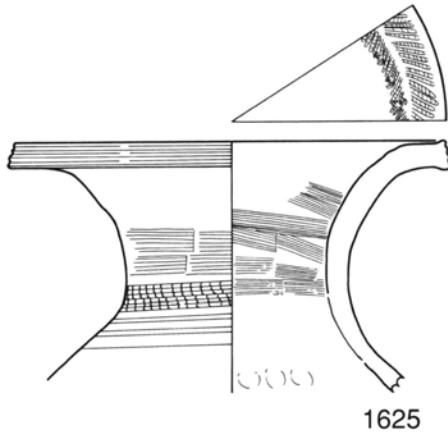


图 160 SK74 (2)



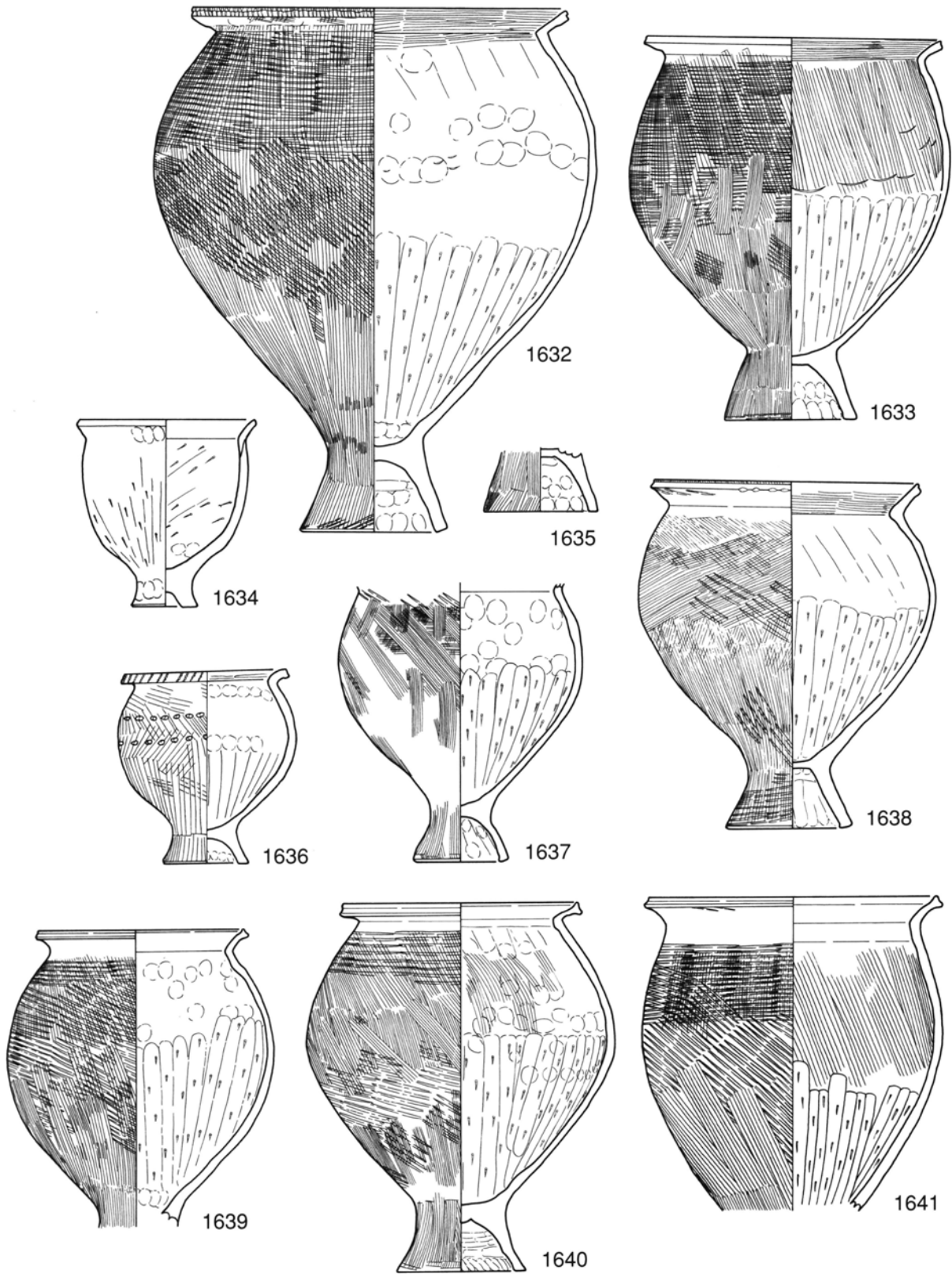
SX02



1629 SX01

☒ 161 SX01 (1) · SX02

(1/4)



☒ 162 SX01 (2)

(1/4)

イタ刺突、体部には半裁竹管による横線が巡る。1627は頸部より上が打ち欠かれた可能性のある細頸壺で、クシによる波状紋・横線がある。1628の体部下半には下方へのヘラケズリが行われる。内面にはツメ痕。1629は台付太頸壺で、体部内面のいはツメ痕が残る。台部は八字状に広がり、端面がやや上下に拡張して、やや凹面をなす。

1630は高坏または台付鉢の脚部。外面端にはイタによる凹線があり、上方へのヘラケズリがなされる。1631は椀型高坏になるもので、坏部下位に稜がみられる。坏立ち上がり部外面には、上位から棒状工具による凹線、竹管刺突、羽状のイタ刺突、竹管刺突の順に施紋される。坏受部外面と内面は、ヘラミガキ調整される。脚部は筒状に延び、裾部で広がるもので、端面は上下にわずかに拡張して外傾する面をなす。外面にはヨコナデによる沈線が巡る。外面はヘラミガキ調整され、7方向に透し孔が開く。

1632は口縁部がく字状に強く折れ、内面は平坦になる。外面にはイタによる刻みが施される。成形・調整は、口縁部外面のタタキ、口縁部外面から体部中位のハケ→上位の横位タタキ→中位から下位の斜位タタキ、台部端の斜位タタキ→台部から下位のハケの順に行われる。台部端面はわずかに外傾する。1633は口縁部に強いヨコナデがなされる。外面はタタキ後ハケ調整される。内面は、下半に上方へのヘラケズリがあり、その上位に工具痕と思われる弧状の沈線がみられる。1634は小型甕で、ゆるやかに外反する口縁部と低い台部をもつ。口縁部端面は丸く、ヨコナデがなされる。台部は厚く、端面は接地する。体部外面は上方へのヘラケズリ、内面は全体に斜位のヘラケズリが施される。1636も小型甕で、口縁部端面にはイタ刺突がなされる。体部は、斜位タタキ後粗いハケ調整される。内面はナデ。1637はやや内彎する台部をもつもので、体部は上位の斜位タタキ後ハケが施される。1638は強いヨコナデによってく字状に屈曲する口縁部をもつもので、上端には細か

いイタ刻み、下端には大きいイタ刺突が1方向のみにみられる。ただ下端のものについては意図的ではない可能性もある。成形・調整は体部の斜位タタキ・台部の横位タタキ後ハケがなされる。1639は口縁部がゆるやかに屈曲するもので、丸い体部をもつ。口縁部端面は、強いヨコナデによって深い凹面をなす。上位のハケ→上位の横位タタキ→上位から中位の斜位タタキ→下位から中位のハケの順に成形・調整される。1640は口縁部が強く屈曲するもので、強いヨコナデによって外内面・端面とも凹面となっている。台部は端部でやや広がり、端面は接地する。内面の天井部には、充填部分が突出する。外面はタタキ後ハケ調整される。1641はゆるやかに外反する口縁部をもつもので、強いヨコナデによって外内面・端面とも凹面をなす。体部は横に張りださず、縦に長い形態を呈する。成形・調整は、体部上位のハケ→上位の横位タタキ→上位から中位の斜位タタキ→下位のハケの順に行われる。

(10) S D 17 (図 163)

1642は太頸壺頸部で、低い2条の突帯が巡り、その下位に縦位の扇形紋、クシによる横線がある。器壁は太い。

(11) S D 10 (図 163)

1645～1648は上層から、1643は最下層から出土する。1643は受口状口縁をもつ太頸壺で、半裁竹管による簾状紋、横線、波状紋が施紋される。1644は細頸壺のミニチュアになると思われ、ユビ押圧・ナデで成形・調整される。出土層位は不明。1646は口縁部がゆるやかに屈曲する甕で、体部は横に広がらず、ハケ調整される。1647は円窓付太頸壺で、1645・1648も同様なものになると考えられる。

(12) S D 12 (図 163)

1649～1652は上層から、1653は最下層から出土

する。1649は円窓付太頸壺で、頸部に2条のヘラ沈線が巡る。1650・1651は口縁部が短く強く屈曲する口縁部をもち、端面にイタ刻みと下端にイタ指頭がなされる。1650の体部外面はタタキ・ハケが施される。1651は細かいハケ→横位タタキ→粗いハケが施される。1652は口縁部が強く外反し、内面には粗いハケ調整される。成形・調整は、口縁部外面のタタキ、ハケ→横位タタキの順に行われる。1653は口縁部端面下端にのみイタ刺突が施されるもので、頸部タタキ、上位横位タタキ→斜位タタキの順に成形・調整がなされる。

(13) S B 01 (図 163)

1654は口縁部端面にイタ刻み、内面に粗いハケが施されるもので、体部外面はタタキ後粗い鋭いハケ調整される。

(14) S K 72 (図 163)

短頸壺 1655の口縁部はヨコナデによって調整され、体部外面にはクシ横線、簾状紋、波状紋が描かれる。内面はハケ後ヘラによるナデがなされる。1656の受口状口縁は、口縁部外面に棒状工具による凹線後上下端にイタ刺突が施される。体部外面には4段の羽状イタ刺突がなされ、クシ横線が引かれる。1657の甕口縁部は強く折れ、端面にはイタ刻みがある。体部外面は、上位から中位のハケ→上位の横位タタキ→再度上位に横位タタキ→中位の斜位タタキ→下位タタキの順に成形・調整が行われる。内面は上位付近にまで上方へのヘラケズリ、上位はハケが施され、沈線状の工具痕が残る。

(15) S B 02 (図 164)

1658の短頸壺は口縁部がゆるやかに外反し、端面はやや丸く、ヨコナデがなされる。紐孔は2孔×2方向に開けられる。内外面ともイタナデ調整。1659は短い口縁部をもつ細頸壺で、頸部にはクシによる

横線と刺突がなされ、体部には多条の横位ヘラ沈線が巡る。1660の太頸壺は、口縁部端面下端が、連続ユビ押圧により波状になる。頸部にはヘラ沈線が5条施紋される。1661は口縁部端面にイタ刺突が施される。体部の成形・調整は、上位のハケ→上位の横位タタキ→上位から中位の斜位タタキ→下位のハケに順に行われる。内面のヘラケズリは中位やや下までとなる。1662はハケ甕で、頸部と体部下位の破面には打ち欠いた痕跡がみられ、水平に欠損する。1663もハケ甕で、台部はやや内彎する。

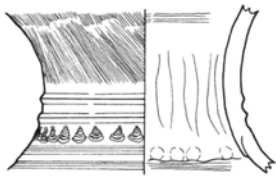
(16) S B 03 (図 164)

1664は細頸壺の頸部が打ち欠かれたもので、台部が付く可能性がある。体部外面は粗いハケ後細かいハケ調整され、半裁竹管による横線・波状紋、イタ刺突がなされる。1665の口縁部端面上端にはイタ刻みが施され、体部はタタキ後粗く鋭いハケ→上位に横位沈線の順に成形・調整される。内面のヘラケズリはやや上位までなされる。1666の甕は体部最大径が中位にあって、やや縦長になる。成形・調整は、口縁部外面のタタキ、ハケ→斜位タタキの順に行われる。内面はハケ調整され、上位に工具痕と思われる沈線が残る。1667は、口縁部外面のタタキ→上位のハケ→上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→下位のハケの順に成形・調整がなされる。1668は横長の丸い体部をもつもので、口縁部端面にはイタ刻みと下端にイタ刺突が施される。成形・調整は口縁部外面のタタキ→頸部下位の山形のハケ→上位から中位のハケ→上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→下位のハケの順である。

(17) S Z 341 南溝 (図 165)

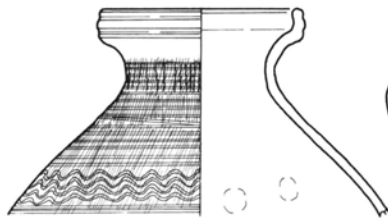
S B 09またはS B 08に属する遺物が混入、再堆積していると考えられる一群である。

1669の袋状口縁細頸壺の頸部には、イタによる連続刺突が行われ、簾状紋状になっている。横線と波



1642

SD17



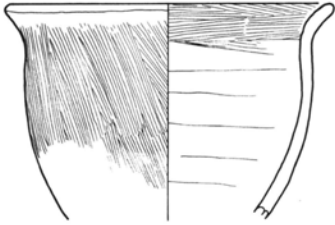
1643



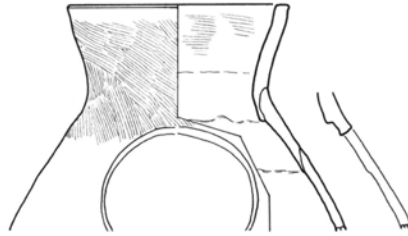
1644



1645

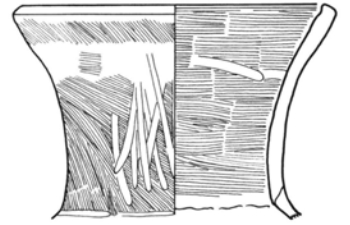


1646

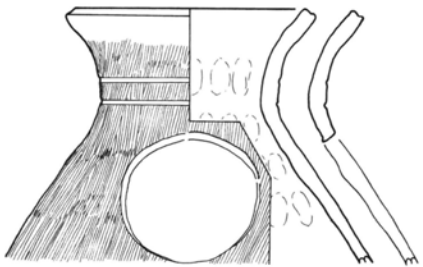


1647

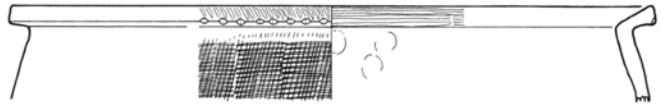
SD10



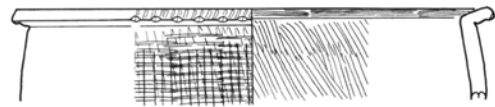
1648



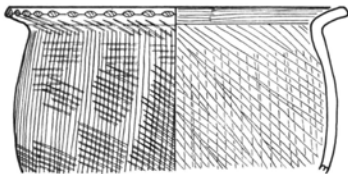
1649



1650

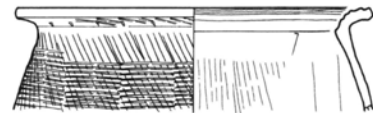


1651

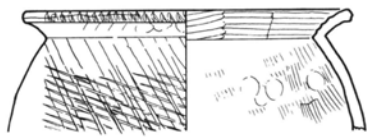


1653

SD12

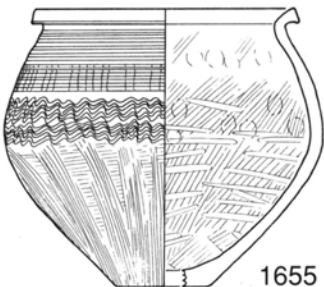


1652

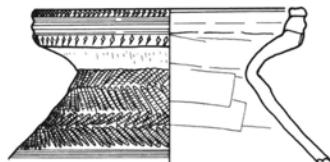


1654

SB01

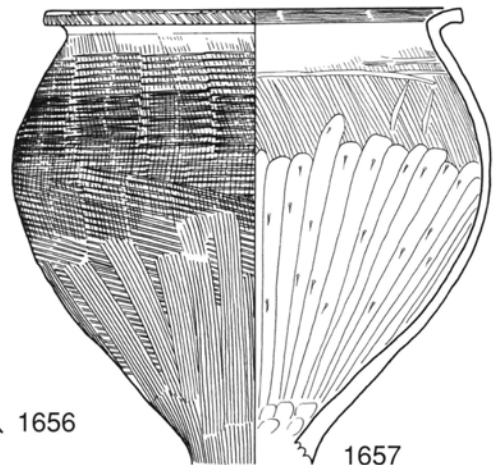


1655

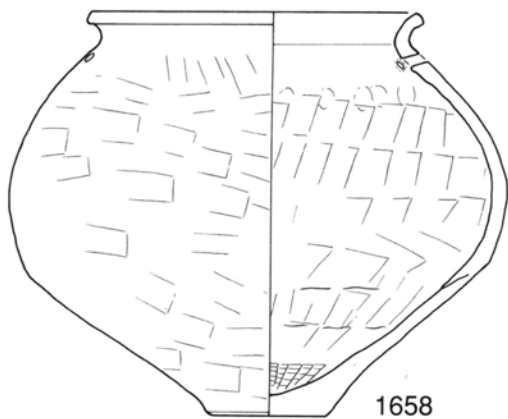


1656

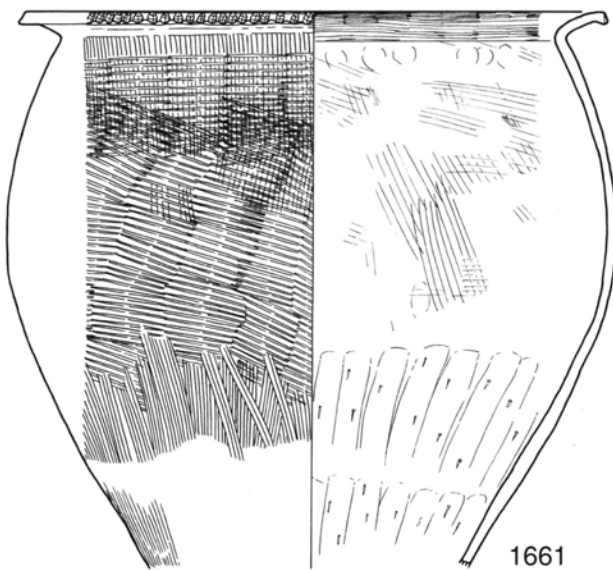
SK72



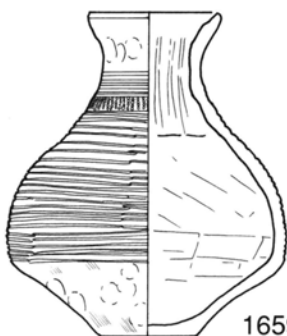
1657



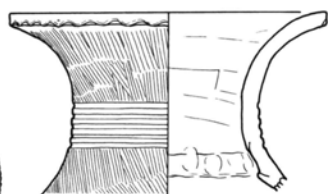
1658



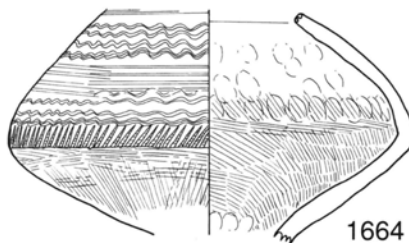
1661



1659

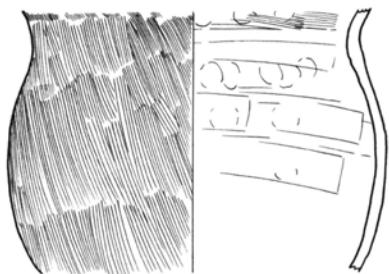


1660

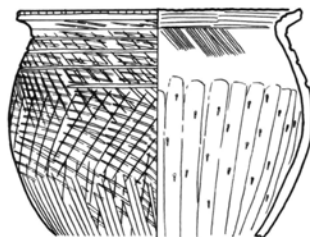


1664

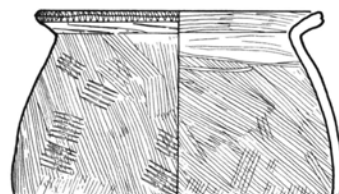
SB02



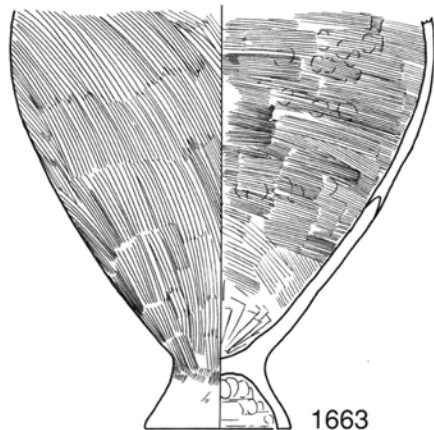
1662



1665

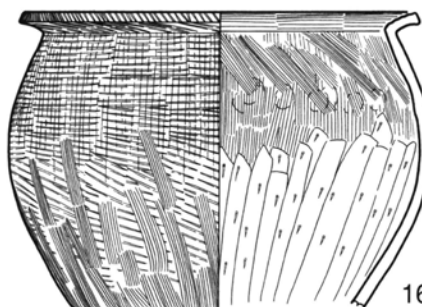


1666

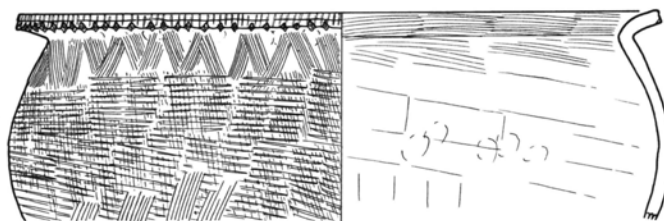


1663

SB03



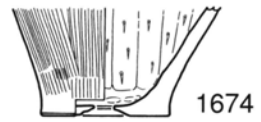
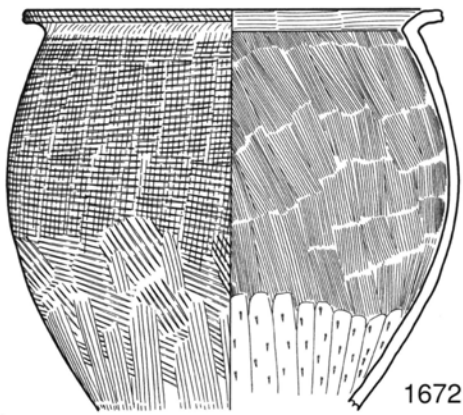
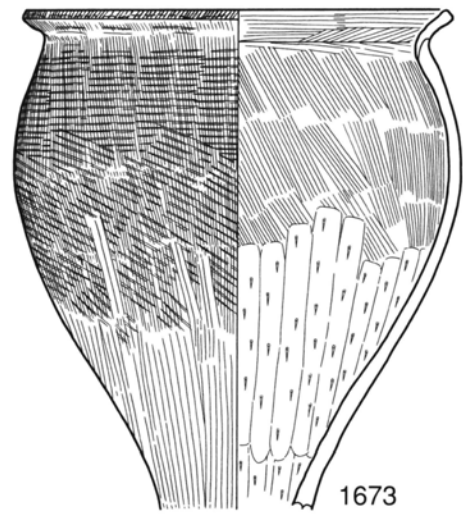
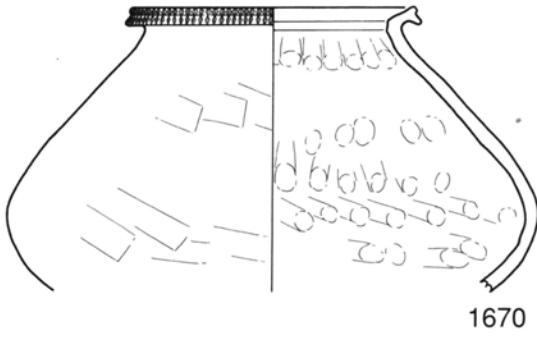
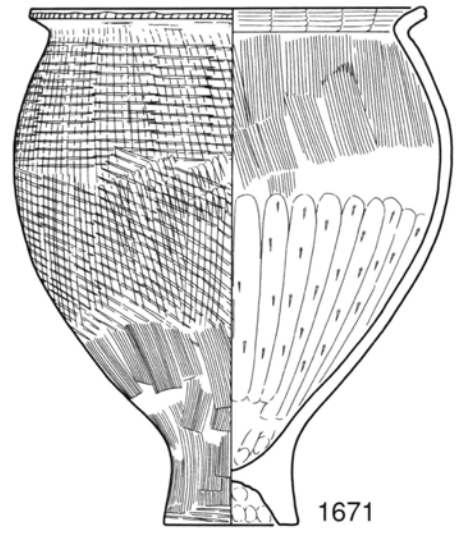
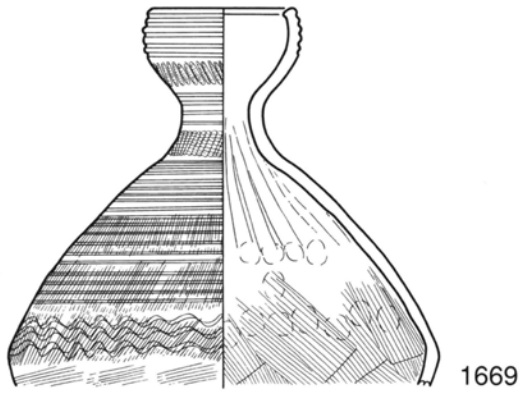
1667



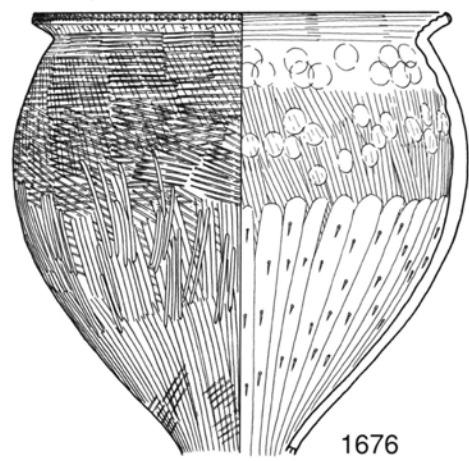
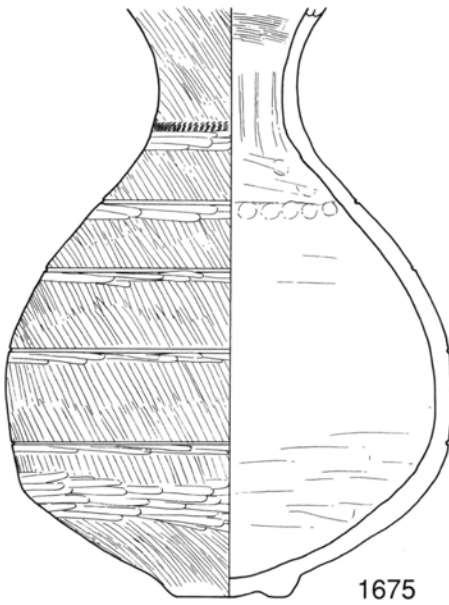
1668

☒ 164 SB02 • SB03

(1/4)

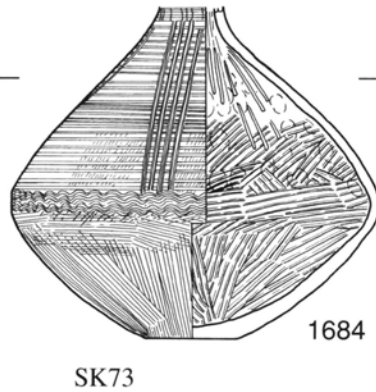
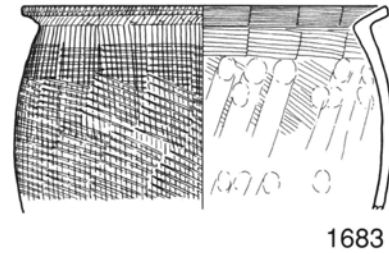
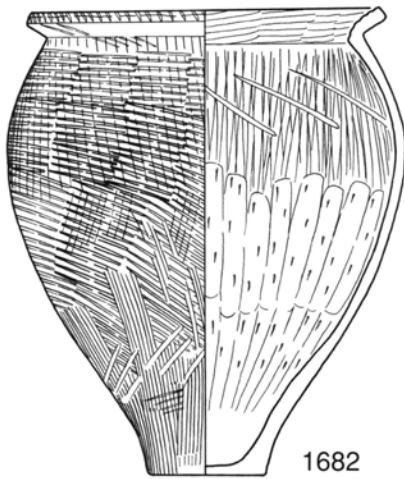
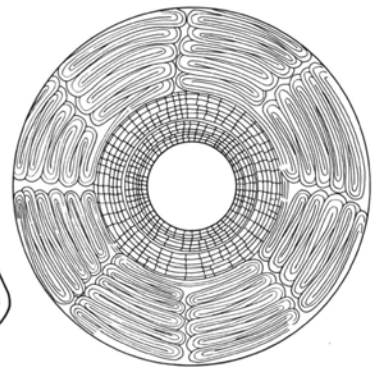
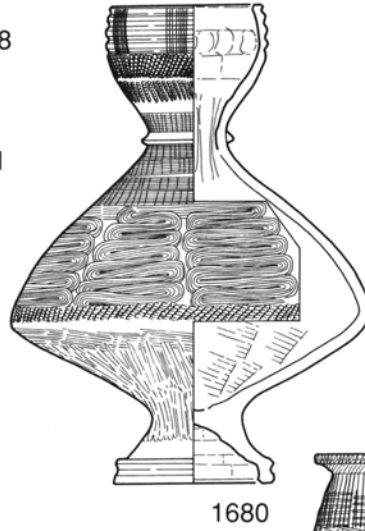
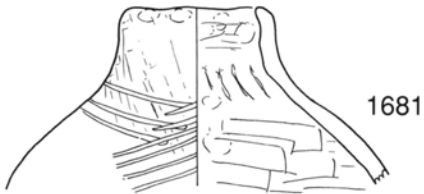
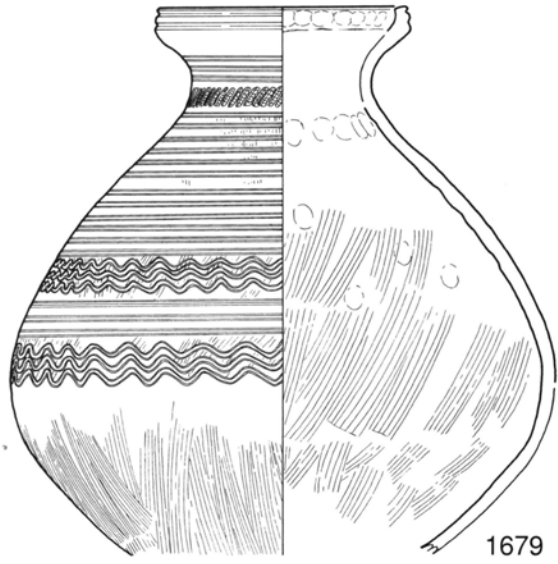
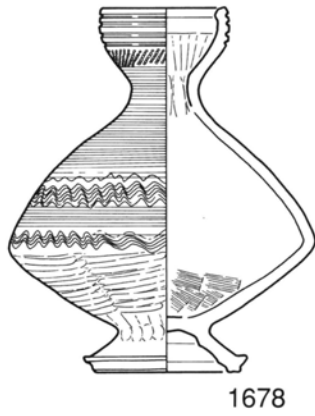
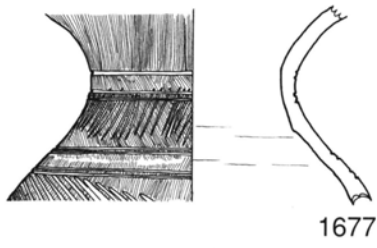


SZ341 南溝



SK71

图 165 SZ341 南溝 · SK71



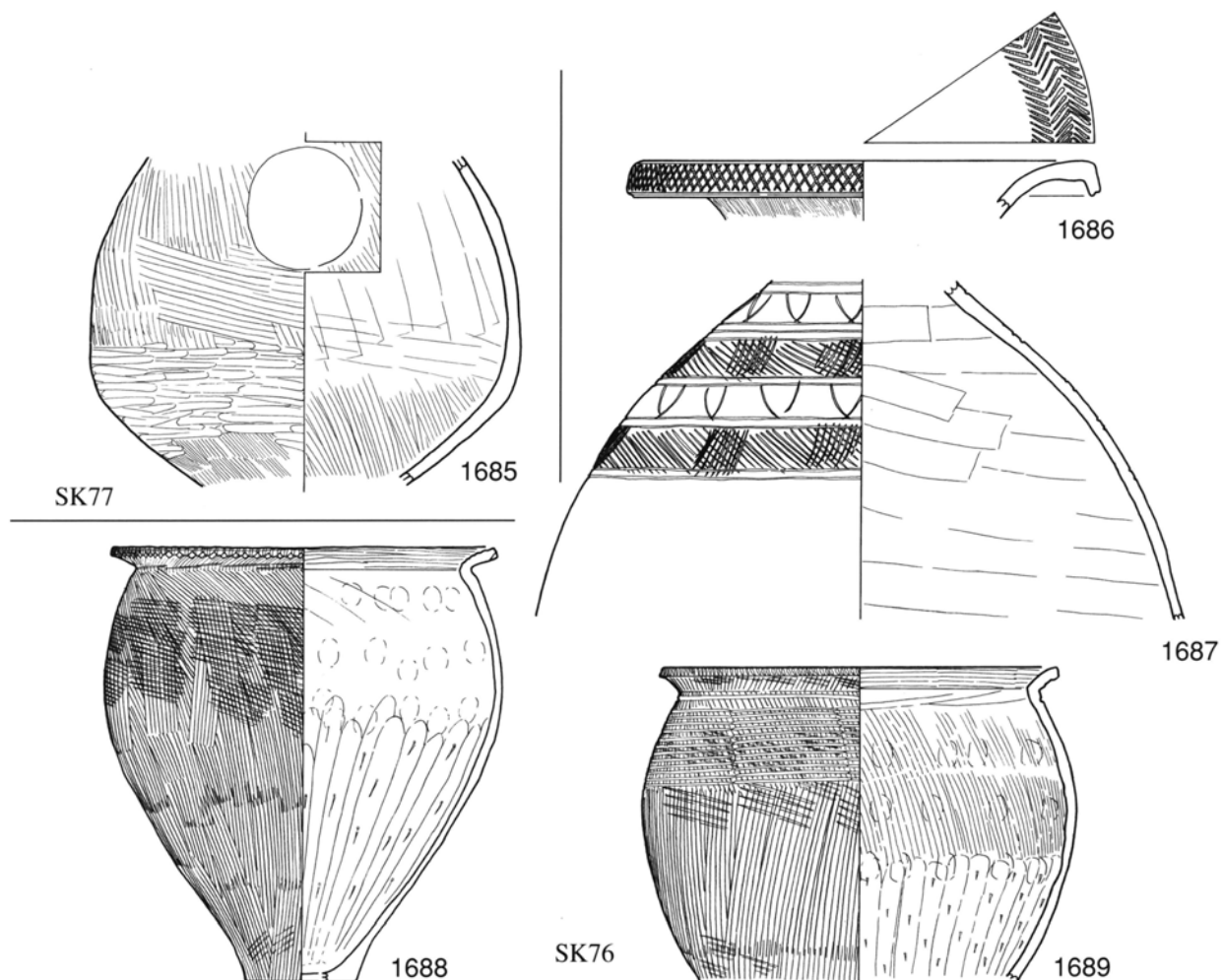


図 167 SK76・SK77

(1/4)

状紋は半裁竹管によって施紋される。1670の短頸壺は口縁部が強く折れ、体部最大径が下位にあり、ゆるやかに屈曲する。口縁部は強いヨコナデにより端面・内外面とも凹面となり、端面にはイタ刺突がなされる。体部外面はイタナデ調整。1671は、口縁部外面のタタキ、台部端のタタキ、体部上位の粗いハケ→上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→中位の折り返しのある粗いハケ→台部から下位の細かいハケの順に成形・調整される。台部の器壁は厚く、高さが低い。1672の成形・調整の順序は、口縁部外面から体部中位のハケ→上位の横位タタキ→上位から下位の斜位タタキ→下位の斜位タタキ→下位のハケ

で行われている。内面のヘラケズリは下位のみになされる。1673は口縁部がややゆるやかに屈曲するもので、体部下半も縦に長くなる。口縁部外面のタタキ、上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→上位から中位の細かいハケ→下位の粗いハケの順に外面の成形・調整が行われる。1674の底部には焼成後穿孔がみられる。

(18) S K 71 (図 165)

1675は体部が丸く、最大径が下位にあり、稜をもつもので、底部は突出する。頸部には貝による刺突が巡る。体部上半はハケ調整され、細いヘラミガキ

帯が5条みられる。1676の外面の成形・調整は、下位の斜位タタキ、上位のハケ→上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→下位から中位のハケ→中位のヘラミガキの順に行われている。

(19) S K 75 (図 166)

1677はⅢ系の太頸壺の頸部で、不揃いなハケで調整される。施紋は、縦位のヘラ沈線後半裁竹管による横線が引かれる。1678は台付袋状口縁細頸壺で、八字状に広がる台部は低く、端面は外傾し、ヨコナデによって凹面となる。横線と波状紋の施紋はクシによってなされ、体部下半はヘラミガキ調整される。1679の受口状口縁太頸壺の体部施紋は半裁竹管で、外面下半は剥離が目立つ。1680の台付袋状口縁細頸壺は、体部上半に流水紋がある。流水紋は、上から下に向かって描かれる単位が8方向にみられる。ただ1単位ごとのばらばらに施紋されるのではなく、3単位でまとまって描かれるものが2ヶ、2単位でまとまっているものが1ヶある。3単位でまとまるものは、右→中→左の順に流水紋が描かれ、2単位でまとまるものは右→左の順となる。口縁部には4条の凹線紋が巡り、ハケ工具による縦区画が6方向にみられる。下位にはイタまたはクシによる羽状の刺突があり、頸部の1条の突帯を挟んで、クシによる簾状紋が描かれる。また体部最大径部分にもイタまたはクシによる刺突がある。体部下半はハケ後ヘラミガキ調整される。台部は八字状に開き、端部で折れ垂下するもので、ヨコナデにより端面は凹面となる。内面はイタナデ調整。1681は体部から口縁部にかけて、短くゆるやかに上方に延びるもので、口縁部はユビナデのみで調整される。体部外面はイタナデ調整され、ヘラによる縦位の羽状沈線が描かれる。1682の甕外面の成形・調整は、口縁部外面から頸部の斜位タタキ、下位の斜位タタキ→上位から中位のハケ→上位の横位タタキ→中位から下位の斜位タタキ→下位のハケの順でなされ、下位には最後に

わずかにナデがみられる。口縁部内面と体部上半のハケは粗いもので、工具痕と思われる沈線が上半部分にある。下半は上方へのヘラケズリ。1683は体部上位の横位タタキ→ハケ→中位の斜位のハケの順になる。

(20) S K 73 (図 166)

1684は細頸壺の頸部から体部部分で、外面上半には、クシによる簾状紋と波状紋、半裁竹管による横線と4方向の縦区画がなされる。また内面は貝による調整が施される。

(21) S K 77 (図 167)

1685はやや縦に長い丸みを帯びた体部をもつ円窓付壺で、外面はハケ後ヘラミガキ調整される。

(22) S K 76 (図 167)

1686は口縁部端が垂下し、端面には斜格子状にイタ刺突がなされる。また内面には3段の羽状のイタ刺突がある。1687はナデ調整され、ヘラによる右下がりの斜線が2段巡らされた後等間隔で左下がりの沈線が描かれ、その後横線、内彎する逆三角形の紋様が施紋される。1688は口縁部がやや強く折れるもので、端面にはイタ刻みと下端に刺突がなされる。体部外面の成形・調整は、下位に斜位タタキ、上位から中位の斜位タタキ→ハケの順に行われる。1689の外表面成形・調整は、口縁部の斜位タタキ、上位の斜位タタキ、下位の斜位タタキ→上位のハケ→上位から中位の斜位タタキ→下位から中位のハケが行われ、その後上位にクシによる横線が引かれる。また最上位の沈線はその工具痕と思われる。

(23) 包含層出土 (図 168 ~ 171)

1690は受口状口縁太頸壺の口縁部から頸部で、口縁部外面の凹線上には、非常に短い間隔でイタ刺突が施されている。1691は袋状口縁細頸壺で、口縁部

はヨコナデされ、端面は外傾する。そのヨコナデ調整された部分に、外面は3段、一部は不定、端面は1列の竹管刺突が施紋される。頸部には半裁竹管による横線と簾状紋があり、1列の竹管刺突もみられる。1692は頸部より上が打ち欠かれて欠損したもので、体部上位にあたる位置に、2孔×2方向の焼成後穿孔された紐孔がある。外面上半には半裁竹管による横線と波状紋が施紋され、最大径部分の沈線状に凹みに、竹管刺突がなされる。1693は縦長の体部をもつもので、半裁竹管による横線と波状紋が描かれる。1694は細頸壺のミニチュアで、イタまたはクシによる連続刺突が施される。1695は細頸壺の体部で、クシによる簾状紋帯と扇形紋列に分かれ、4方向に縦位の扇形紋列が施される。また最下位の簾状紋は波状紋を意図している可能性もある。1696は大型の袋状口縁細頸壺で、器高は68.3cmを測る。外面は口縁部に棒状工具による凹線と、その上に12～13方向にクシによる縦区画が描かれる。その下位にはイタによる羽状の刺突とクシ横線があり、頸部には4段の突帯が巡り、5段の竹管刺突列が施される。さらにその下位の体部上位にもクシ横線とイタ刺突がある。イタ刺突の下位には半裁竹管による横線と波状紋があり、その上半裁竹管による7方向の縦区画と、縦位と横位の竹管刺突列が押される。体部上半下位も半裁竹管による横線と斜格子が描かれ、1列の竹管刺突列がみられる。体部下半には、細かいハケが施される。内面はハケ、イタナデ調整される。

1697は把手が付く台付袋状口縁細頸壺である。口縁部はあまり長くならず、外面には凹線紋が巡り、把手側が抉れ、片口状になる。体部はヘラミガキ調整され、最大径には1条の沈線が引かれる。上位には横位の把手が、両端を内面まで挿入される方法で付けられており、ナデにより調整される。内面はイタナデが施され、中位にはツメ痕が残る。台部は八字状に広がり、外傾する端面には凹線が巡る。1698

は最大径が下位にあり、縦に長い体部をもつもので、外面にはやや不定ではあるがハケが縦羽状に施され、下位はヘラミガキがなされる。白岩式の範疇に入るものか。1699は水平に近く広がる口縁部で、端部が摘みあげられてように、ヨコナデにより上方に延びる。凹面となった端面と内面には波状紋がある。1700～1704は竹管刺突がなされたものである。1700は口縁部内面に、1701は台部と体部の接合部外面と端面外面に横位に、1702は台・脚部に縦位に、1703は台部と体部の接合部外面に横位に、1704も外面に不規則に施される。1705～1708は円窓付き太頸壺になる。1705は焼成前穿孔された窓部がやや不定形な円形となる。1706・1707の底部外面には木葉痕がみられる。

1709は口縁部外面にイタ刺突がなされ、内面は粗いハケが引かれる。体部外面は、頸部から中位のハケ→上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→下位の斜位のタタキ→下位のハケの順に行われる。内面の上方へのヘラケズリは下位のみになされる。また、底部片の外面にのみススが付着し、上部の体部には全く見られず、明瞭な差異がある。1710の体部外面は、上位ハケ→上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→下位から中位のヘラミガキ、上位のクシによる横線の順に成形・調整される。1711は口縁部端が磨減して不明である。成形・調整は上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ、頸部のタタキ→上位から中位のハケ→下位から中位のハケ→底部にナデの順に行われており、底部には焼成後穿孔がみられる。1712は台付甕で、口縁部端面にはイタによる刻みがなされる。外面は、口縁部外面のタタキ→口縁部外面から中位のハケ→上位の横位タタキ→中位の斜位タタキ→下位の横位タタキ→台部から下位のハケの順に成形・調整される。1713は口縁部外面にはイタ刺突がなされ、タタキ後ハケ成形・調整が施される。その後外面には5段のイタ角による連続刺突がある。1714は口縁部端面がヨコナデによりわずかに拡張す

るもので、外面下端にイタ刺突がなされる。外面は、頸部の横位タタキ→上位のハケ→上位横位タタキ→中位の斜位タタキ→中位から下位の斜位タタキ、台部の横位タタキ→台部から下位のハケの順に成形・調整が行われる。体部最大径部分には、2段のイタ角刺突列がある。1715は口縁部が強く屈曲する鉢で、端面にはヨコナデによる凹線が巡る。体部外面にはハケ調整後クシによる横線が引かれる。1715は口縁部が受口状になるもので、端面にはイタ刺突、外面には竹管とイタ刺突、内面には3段のイタ刺突列が8方向に施される。1716は口縁部内面端に2条の凹線が巡る。体部外面の成形・調整はタタキ後ハケ。1717はわずかに受口状になる口縁部で、外面端には、ヨコナデによる沈線が巡る。体部外面はハケ後タタキがなされる。1718・1719は頸部がゆるやかに外反して延びる受口状口縁甕で、1718の口縁部外面には波状紋、体部外面にはクシによる羽状刺突がみられる。1719はヨコナデにより口縁部上面が沈線が巡り、外面が凹面をなす。また外面にはイタ工具の痕跡がみられる。体部はハケ調整され、半裁竹管による横線→波状紋が描かれる。また内面下位にはヘラケズリがなされる。

1720・1722の高坏の坏部外面はヘラケズリ後ハケ成形・調整されている。1723・1724の高坏脚部には、ヘラによる施紋がなされる。1723はヘラミガキ後横位→斜格子（左下がりに→右下がり）の順で、1724はヘラケズリ→ヘラミガキ後3条の横線→下位の斜格子（右下がり→左下がりに）→上位の縦区画→横位・斜位・斜格子沈線の順に行われる。1725・1726は台付鉢の台部で、横位の沈線が巡る。1726の外面と透し孔内面には赤彩が施される。1727・1728は台付鉢または器台となるもので、長方形または三角形の透し孔が開く。1729はミニチュア土器で、6号人骨とともに出土した。1730は、袋口状口縁細頸壺の頸部から口縁部に底部をつけ、そのまま鉢にしたものである。1731は器台になるもので、上面が広がり平坦

面をなす。外面の調整はハケ後ヘラミガキ。

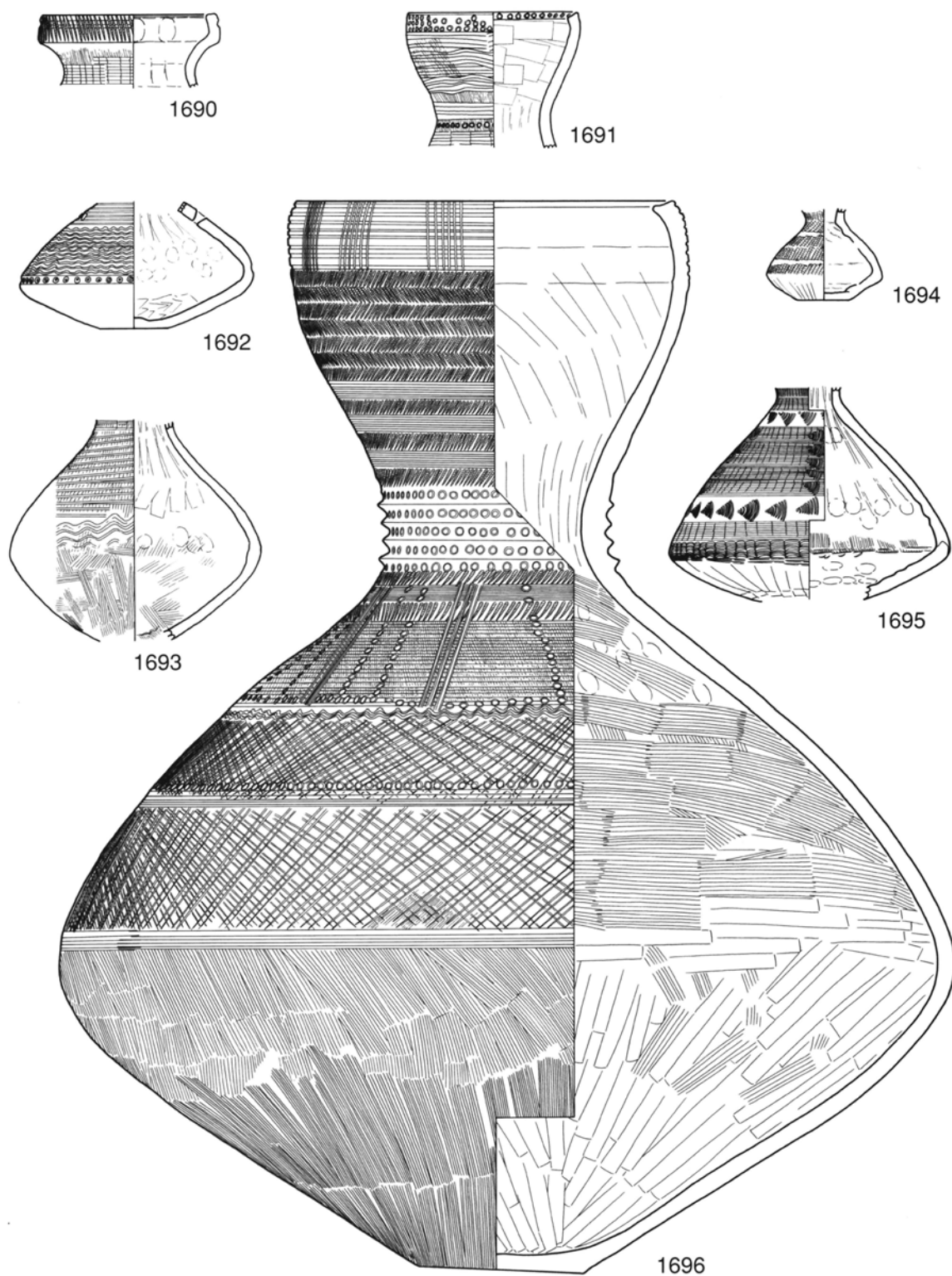


图 168 VI期包含层 (1)

(1/4)

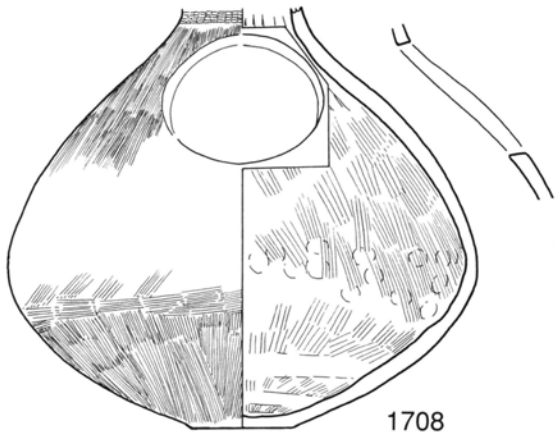
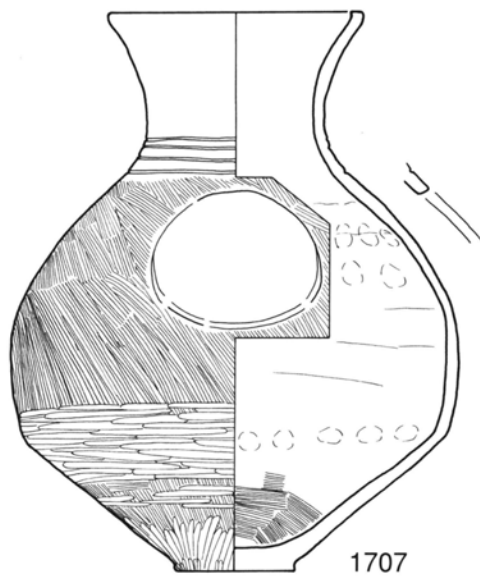
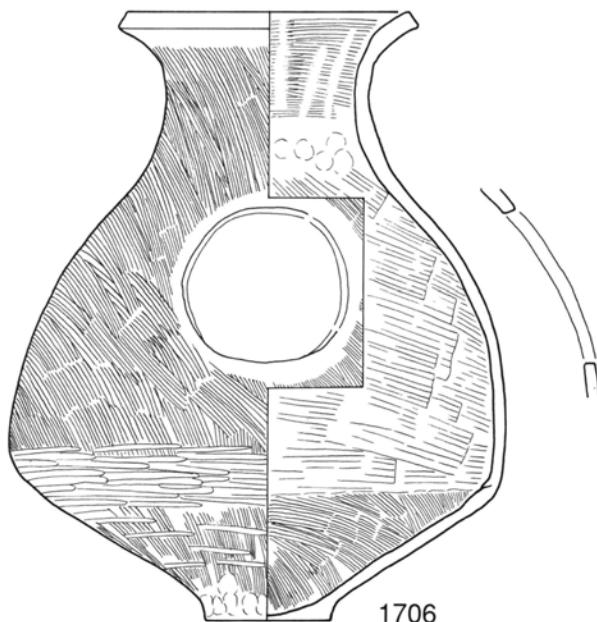
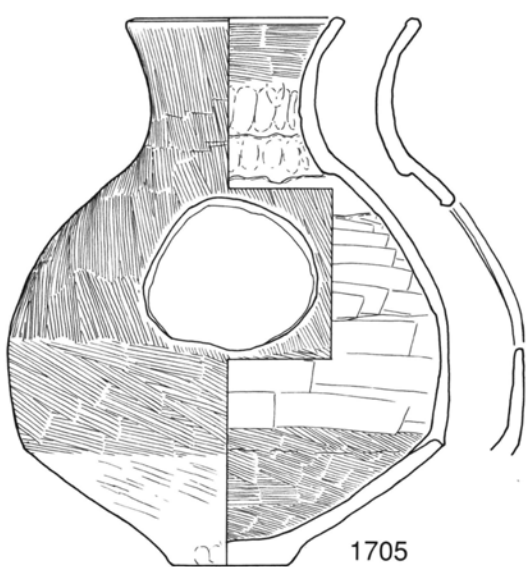
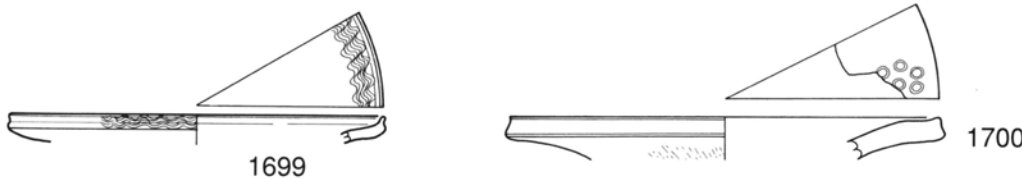
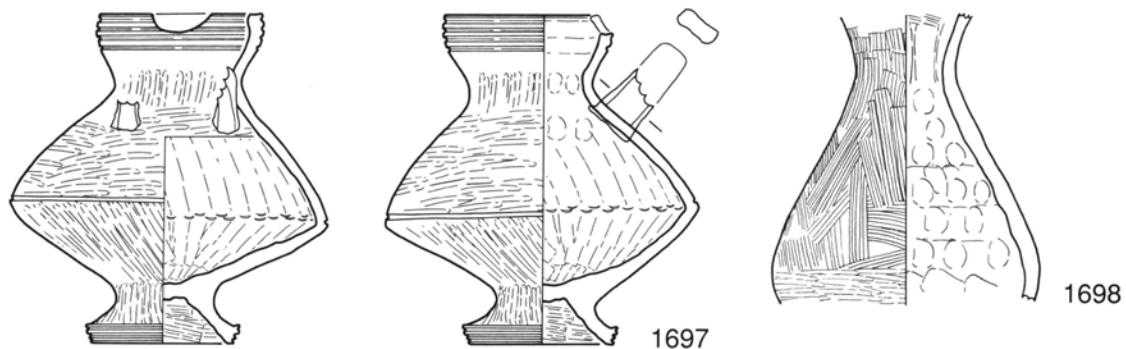


图 169 VI期包含层 (2)

(1/4)

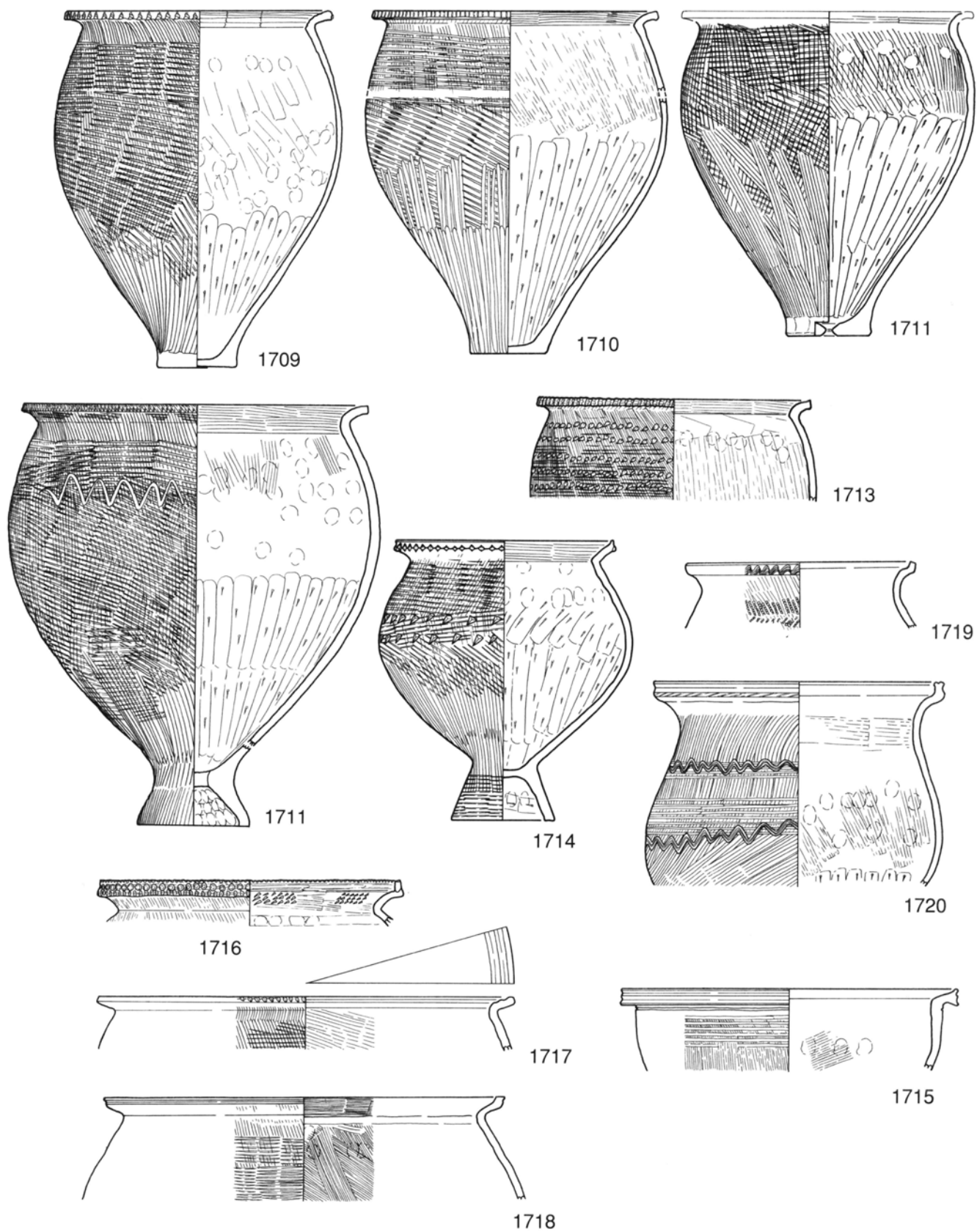


图 170 VI 期包含层 (3)

(1/4)

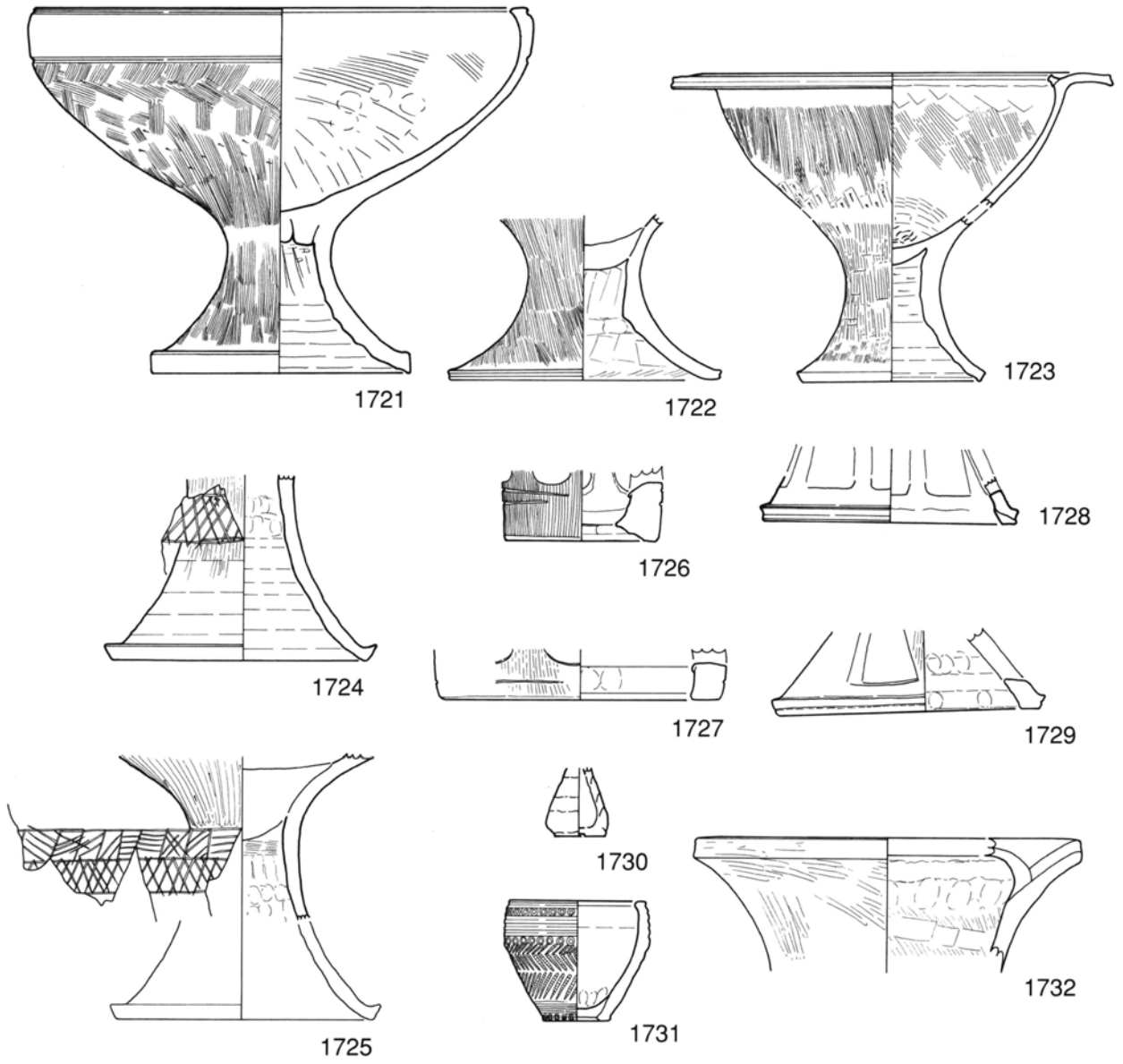


图 171 VI期包含层 (4)

(1/4)

6. VII・VIII期

(1) S Z 339 (図 172 ~ 174)

1733 ~ 1742 は太頸壺で、1733 ~ 1736・1740 が上位から出土、他は下位から出土している。

1733 は頸部に突帯を巡らし、口縁端部は上下に拡張し垂直の面をもつ。口縁部内面には扇形紋がなされる。1734 は小型の太頸壺で、イタの刺突による羽状紋が体部上半と口縁部内面にあり、体部の紋様帯の下には、竹管が近接して連続刺突される。また、体部外面の紋様帯には円形の赤彩がなされる。1735 も口縁部内面にクシによる3段の羽状刺突と扇形紋があり、その上に円形赤彩が施されている。1737 は脚台が付く大型の加飾壺で、体部最大径が中位よりやや下位になる。口縁端部は外反しながら垂下し、内面にはイタによる3段の羽状の刺突と棒状工具による円形の刺突、外面にはヘラによる斜格子が描かれ、長方形の柱状の赤彩が6方向または3ヶ×2方向に施されている。体部外面は横線・波状と扇形の紋様の組み合わせがあり、最下位の横線上に円形の赤彩が6方向みられる。脚部は接地部で折れ、外上方に延びるもので、ヨコナデ調整されている。1738 は体部が丸いもので、口縁部内面に2段の羽状に、外面に斜位にクシ刺突がなされている。1739 も脚が付く太頸壺で、赤彩が口縁部外面と内面の紋様部以外、体部外面の紋様部以外と脚部外面、円形の赤彩が中位の横線上に9方向描かれている。1740 は体部最大径が中位にあり、体部が上下に長い形態をしており、体部外面下位には上方へのヘラケズリがなされる。また体部外面の紋様帯は、横線・波状と扇形紋で構成されている。1741 は体部外面に3 ~ 6 cmの大きさで、楕円形またはそれに類する不定形な形状の赤彩が5または6方向に施されている。また口縁部内面はクシによる2段の羽状刺突と扇形紋で構成

されるが、扇形紋は全周の約半分にしかみられない。1742 は無飾で、体部最大径が中位で横に長く、口縁端部がやや丸い。

1743 ~ 1763 は高坏で、1743 ~ 1748 が上位、他は下位から出土している。

1743 ~ 1745 とも有段高坏で、坏立ち上がり部は外反し、内面に稜をもつ。特に1743・1744 は明瞭な稜・段をなす。1743 は立ち上がり部外面の波状紋下には棒状工具による刺突と貝による斜位の刺突が部分的になされている。1745 は、坏部内面の端部と外面、脚部上半に赤彩が施される。また横線間の1ヶ所のみ貝による刺突がみられる。1758・1759 も有段高坏であるが、立ち上がり端部が拡張して斜位の面を作っている。特に1759 は端面に凹線が巡り、棒状工具による円形の刺突が、裾部では全周、坏部では7ヶが1方向のみに施紋されている。1747 は有段高坏の脚部になるもので、中空の脚に垂下する裾部が付く。裾部には、底部からヘラで穿たれた方形の透し穴が、2孔×3方向または、2孔×2方向×2組開けられている。1748 は皿型高坏の坏部が深くなるタイプのもので、坏部外面と脚裾部外面に赤彩がなされる。脚部上半には横線と貝による刺突がみられる。1749 ~ 1757 は椀形高坏になるもので、坏端部が単純に収束する1750 ~ 1752 とは屈曲して外上方に折れる1754 ~ 1757 がある。単純に収束するものうち、1752・1753 は内彎しながら終わるが、1751 は外彎する。1751 の脚上半には横線と貝刺突が交互に施されている。坏端部が屈曲するものうち、1755・1757 は口縁部外面に凹線状の沈線があり、クシによる刺突がなされている。それに対して1754・1756 は沈線はなく斜位の貝による刺突がみられる。脚部には棒状工具による円形の刺突が巡ることが特徴的であるが、1755 のみ2段の竹管による刺突がある。

1749は椀型高坏の脚部から坏部下半になると思われるが、外面全体に赤彩が施されている。1760～1763は高坏の脚部で、1760の裾部に全周する2段の棒状工具による円形刺突とその間に貝による刺突、透し孔間に不規則な円形刺突がなされる。また1761の貝刺突の最下段のみ、交差する格子状刺突となっている。

1764～1766は直口壺で下位から出土している。

1764は台付のもので、口縁部は上方に垂直に長く延び、体部との接合部に2条の突帯が巡る。調整は口縁部外面に下方へのヘラケズリ、体部外面上半にヘラミガキ、下半に下方へのヘラミガキ、台部はハケ後ヘラミガキがなされている。1765の口縁部は逆八字状に開き、1766の体部は中位やや下位が最大径となり、外面が赤彩される。調整はヘラミガキ。

1767・1768の鉢のうち、1767は下位より出土しており、く字状に屈曲する口縁部に扁平な体部をもつ。口縁部は強いヨコナデがなされ、体部外面はハケ調整される。1768は椀状を呈するもので、底部がわずかに外に肥厚する。調整はナデ。

1769は器台で、口縁端部が上下に拡張し内傾する面をなし、凹線が施される。円形の貼付浮紋は、2×4方向に付けられる。赤彩は貼付浮紋も含め、外面全体に塗布されている。また内面は磨滅する。1770は最下位から出土している台・脚部で、中空の脚になる。裾部外面の垂下し面をなす部分には竹管による連続刺突が施される。1771は器種不明なもので、中空の筒状脚と八字状に開く裾部をもつ。外面はヘラミガキ調整。

1772・1773はミニチュア土器で、1772はユビ押圧で成形され、直口壺状の形態をなす。1773は底部と思われるもので、やや稜をもち五～六角形を呈する。成形はユビ押圧でなされるが、調整はイタによるタキが施される。

1774～1777は甕になる。1774は体部に比して台部が大ききもので、やや外彎してく字状に屈曲する

口縁部は端部で丸く収束する。体部は最大径が上位になり、外面がハケ、内面が上方へのヘラケズリ調整される。台部は強いヨコナデがなされ、端部は外傾して面をなす。1775はく字状に屈曲する短めの口縁部をもつもので、体部外面はスズで不明瞭ではあるが、ナデ調整、内面は斜方・上方へのヘラケズリがなされる。体部最大径はほぼ中位で、器壁は厚い。1776の口縁部も短めで、端面は内傾する面をもつ。体部最大径は上位にあり、外面がハケ、内面がイタナデ調整される。1777は大型の甕で、口縁部端面には、斜位のイタによる刺突がなされる。体部最大径は上位にあり、外面がハケ・ナデ調整、内面が斜方・上方のヘラケズリ調整。

(2) S Z 339 関連資料 (図 174)

1778～1782はS Z 339出土の可能性があるものである。1778は太頸壺口縁部で、端部がやや外傾して丸く垂下し円形の貼付浮紋が付く。内面はイタによる3段の羽状の刺突と、ツメによる連続刺突が施される。浮紋も含め外面全体と内面の紋様部以外に赤彩が塗布される。1781は小型の高坏の脚部となるもので、脚部中位から裾部にかけて赤彩がなされる。

(3) S Z 339・S Z 340 関連資料 (図 174)

S Z 339 または S Z 340 出土の可能性があるものである。

1783は丸い体部をもつ壺で、横線をわずかに確認することができる。調整は、外面がハケ、内面はイタナデで、底部に下方からの焼成後穿孔がなされる。

(4) S Z 340 関連資料 (図 174)

1784～1791はS Z 340出土の可能性があるものである。

1784は無飾の太頸壺で、口縁部端面がヨコナデによりわずかに凹む。体部は下位が最大径となり、底部がわずかに突出する。1785は外彎する坏立ち上が

り部をもつ有段高坏で、端面が拡張して明瞭な段をなし、外面に波状紋が施される。1786・1787は立ち上がり部が直線的なもので、1786は外面全体に、1787は立ち上がり部外面に赤彩される。1788は短い口縁部をもつ鉢で、頸部に紐孔が開けられている。体部内面にはヘラケズリが施される。1790・1791は高坏の脚で、1790はヘラミガキ調整後に坏部と、脚部は横位に帯状の赤彩が塗布される。1791はヘラ沈線による横線紋がなされ、坏・脚部全体に赤彩が施される。

(5) S Z 340 (図 175・176)

1792～1799は太頸壺になる。1792は体部最大径が中位ある無飾のもので、底部はやや丸い。外面は磨減が激しく不明瞭であるが、ヘラミガキ調整か。1793は口縁端部が内傾する面をもち、体部最大径がやや下位にあるもので、頸部が明瞭に屈曲する。口縁部外面全体、体部外面の一部分にヘラミガキがなされる。1795も1793と同様の形態をなすが、体部最大径は中位にある。体部上半にはハケ・ナデ調整の後ハケ工具による直線・波状・U字状の絵画・記号紋が描かれる。1794はⅥ期の細頸壺と同様のソロバン玉状の形態をなす。体部上半には直線・細かい波状・扇形紋が描かれ、中位の横線上に円形赤彩が9方向になされる。1796は体部下位の最大径部分が横に大きく延びるもので、器高に比して横位長が長い。外面がハケ、内面がナデ・ヘラケズリ調整される。1797はやや縦長の形態をもつもので、最大径が中位よりやや下にある、体部下半には、外内面とも上方へのヘラケズリが施される。1798・1799は加飾太頸壺になる。1798は口縁端部が斜外方に垂下し、外面に凹線がなされる。外面全体、内面の施紋部以外に赤彩が塗布される。1799は大型の壺で、口縁部端面が上下に拡張され、外面にはクシによる横線が描かれる。その他、体部外面には横線・波状紋、口縁部内面には2段の扇形紋がつけられる。

1800・1801は離れた位置から出土しているが、大きさ・胎土からみてセットになる可能性がある。1800の蓋は、天井部上が平らになるもので、2孔×2方向の紐孔がみられる。天井部外面には、赤彩が施される。1801は口縁部がわずかに外反する鉢で、外面がヘラミガキ、内面が斜上方のヘラケズリがなされる。紐孔は2孔×2方向にあり、口縁部端面は磨滅している。現状では、赤彩は確認されない。1802は台付直口壺の下半で、体部が下位に横に大きく延び、扁平な形態をなす。体部上半には羽状・格子状・斜位の貝またはヘラによる刺突がなされ、最大径部には竹管による二重の刺突が施された円形浮紋が28ヶ付けられている。台部には8方向に透し孔が穿たれ、端面は外傾する明瞭な面をもちハケ調整される。器壁は全体に厚い。

1803の甕は、口縁部がやや外彎しながら屈曲するもので、体部最大径は上位にある。口縁端面は面をなし、斜位のイタによる刺突が施される。体部外面はハケ、内面は斜方・上方のヘラケズリがなされる。台部端面はわずかに外傾する。1804は外反する立ち上がり部をもつ有段高坏で、口縁端部に棒状工具による凹線が巡り、外面には波長の長い波状紋がある。1805は直線的に延びる立ち上がり部をもつ有段高坏で、受部外面には赤彩されていない。1806は高坏脚部で、ヘラ沈線による横線が3段描かれる。上位の横線間には柱状を呈する斜位の赤彩が6方向に描かれる。下位の横線間から裾部端面にかけては、横線部分を除いて赤彩が塗布される。1807・1808は同一個体の可能性が高い皿型高坏で、ヘラミガキ調整される。1809は椀型の鉢で、底部がわずかに突出し、凹面をなす。調整はヘラミガミ。

(6) S Z 341 関連資料 (図 176)

1815・1816はS Z 341出土の可能性のあるものである。1815は太頸壺口縁部になると思われ、端面にはイタによる縦位の刺突、外面にはヘラ沈線、内面

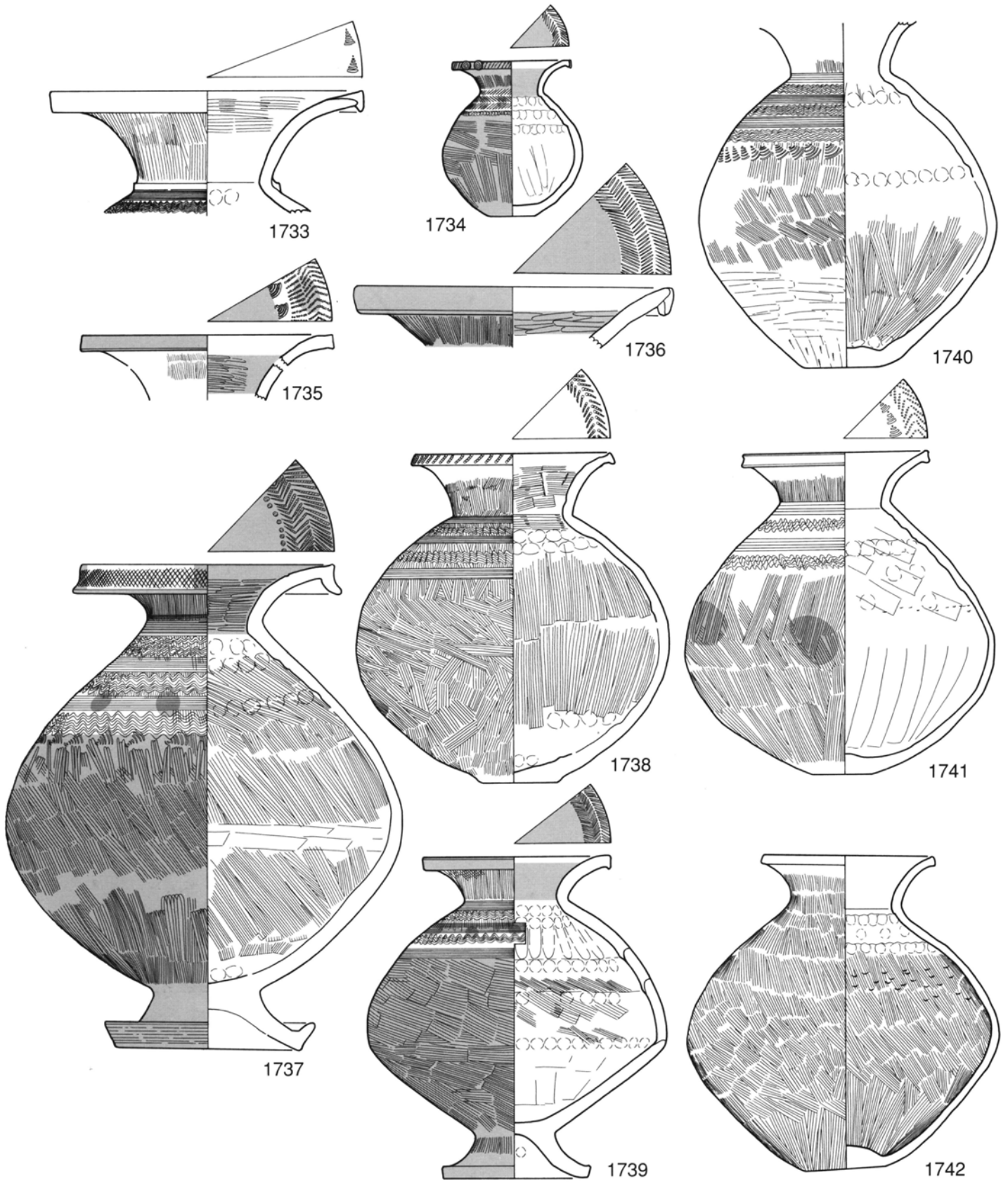


图 172 SZ339 (1)

(1/4)

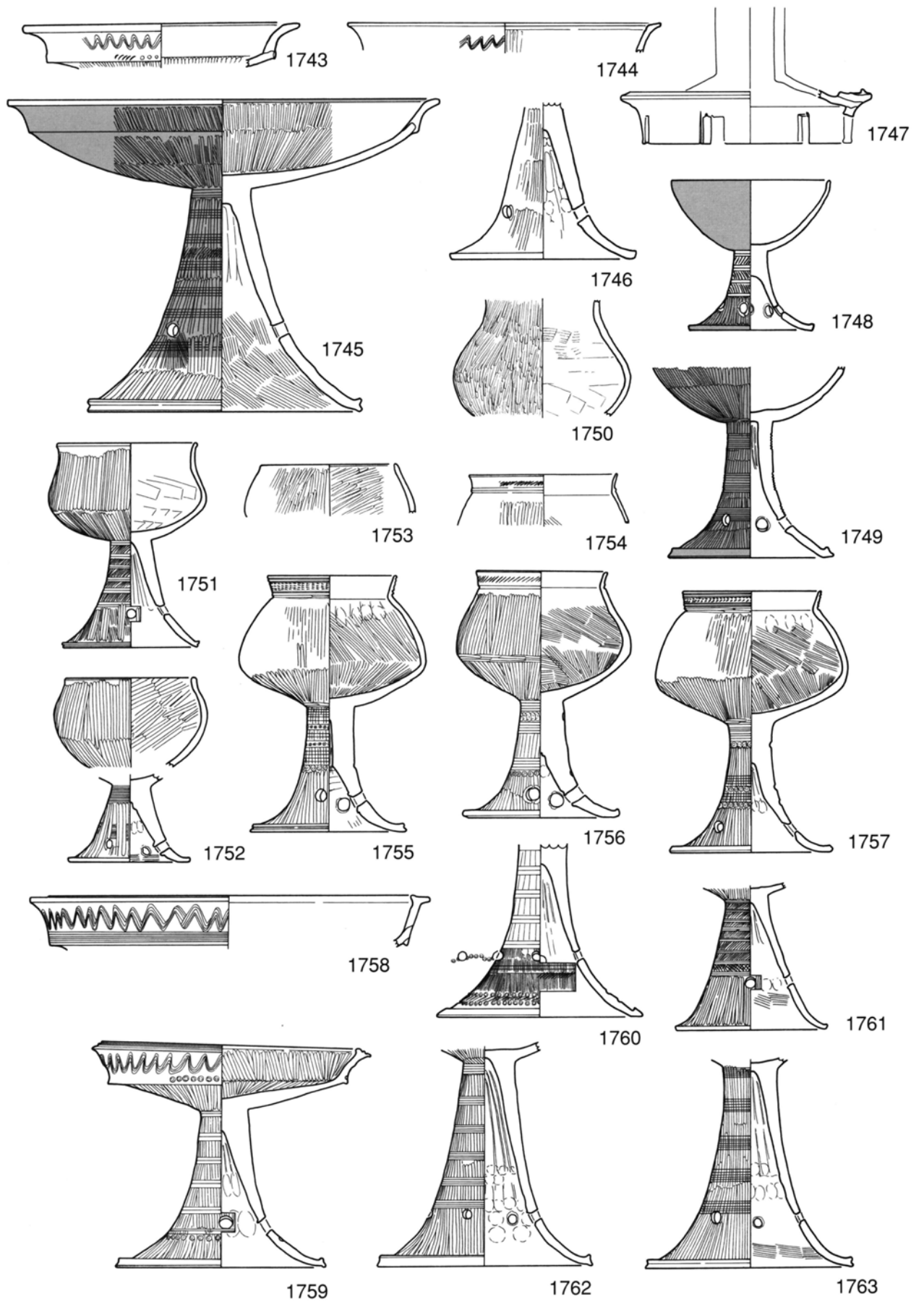


图 173 SZ339 (2)

(1/4)

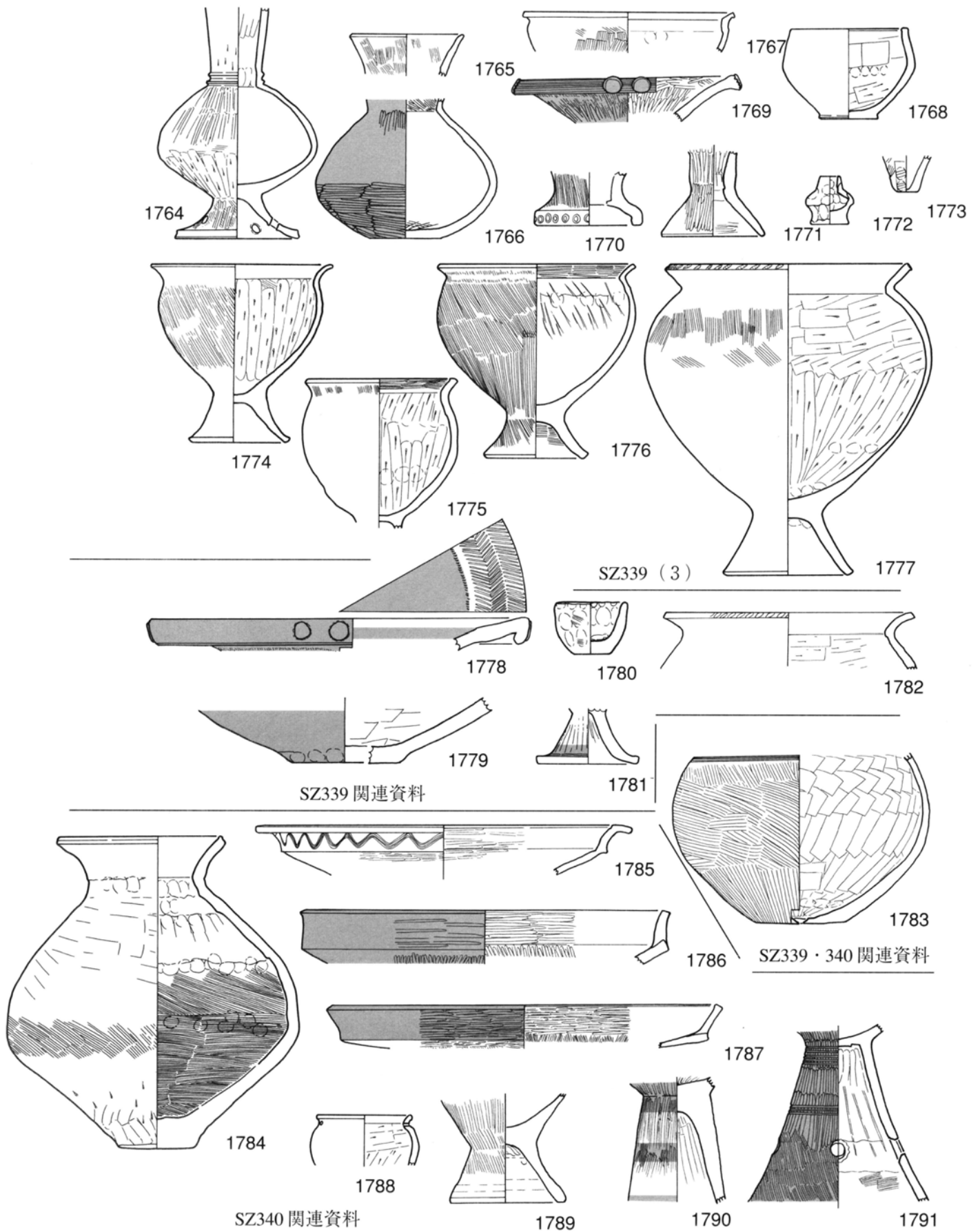


図 174 SZ339・340

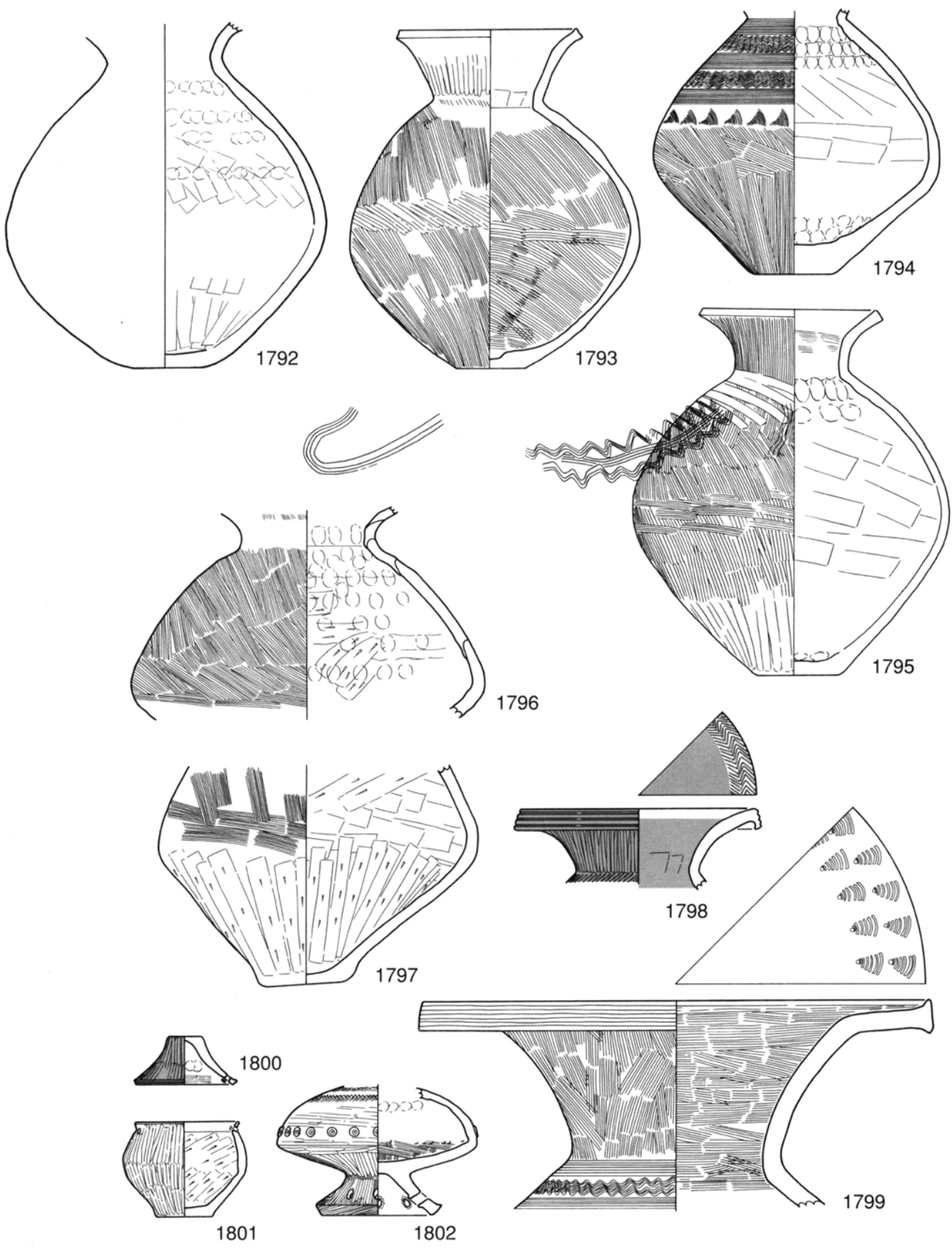
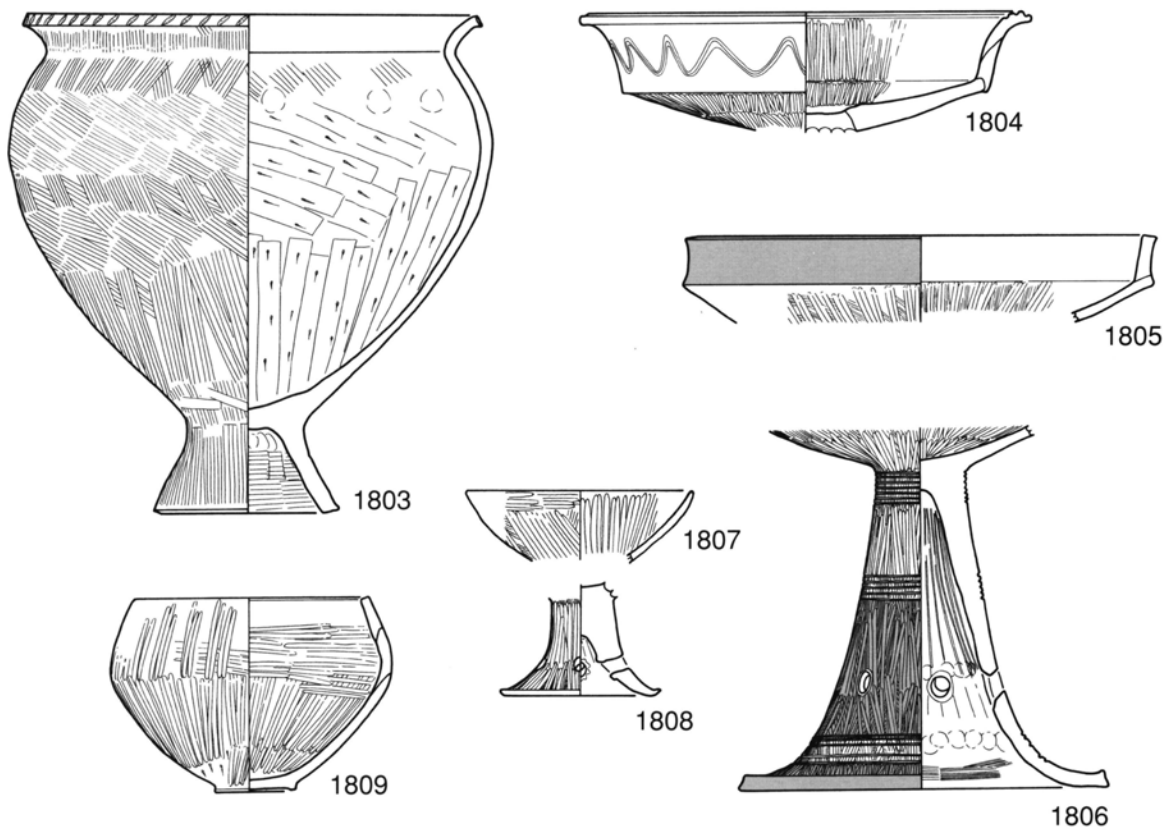
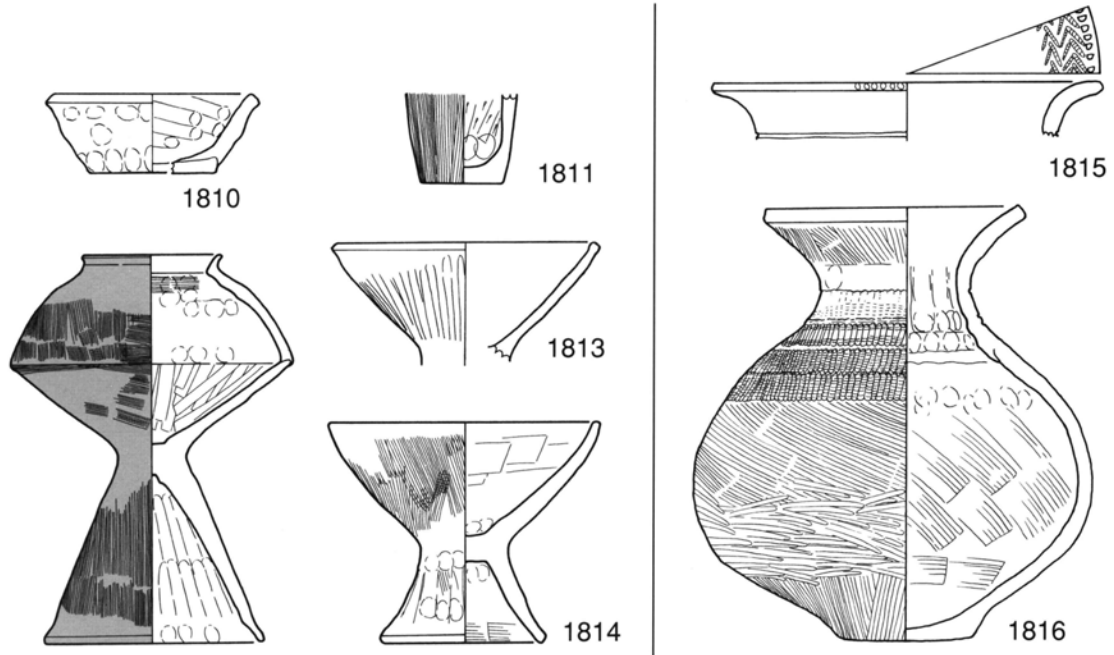


图 175 SZ340 (1)



SZ340 (2)



SZ341 (1)

SZ341 関連資料

にはイタ角による円形刺突、イタによる羽状刺突が施される。器色は暗茶褐色を呈し、砂粒・雲母を多く含んでいる。1816は体部最大径が下位にあり、底部はやや突出する。体部上半には、接しながら連続するイタ刺突が4段巡る。

(7) S Z 341 (図 176・177)

1810～1814はS Z 341出土のもので、全て下位から出土している。

1810は逆台形を呈する鉢で、ユビ押圧・ナデによって調整される。1811は筒状の土製品で、外面はハケ、内面はヘラケズリ調整される。1812は台付鉢で、口縁部がく字状に屈曲する。体部最大径は中位やや下で、鋭く屈曲し稜をなす。台部は高く、八字状にひらき、端部はヨコナデにより内彎する。外面はハケ調整され、赤彩が施される。1813・1814は八字状の坏部をもつ椀型高坏で、台付甕状の台部が付く。

1817～1821は加飾太頸壺になるもので、1817～1819は上位、1820・1821は下位から出土する。

1817・1818は同一個体と思われるもので、1817の口縁端部はわずかに垂下して垂直な面をなし、凹線が施される。頸部から口縁部にかけてはゆるやかに外彎し、2条の低い突帯が巡る。口縁部内面にはイタによる2段の羽状の刺突、体部上半には横線・細かい波状が施紋される。体部外面下半はやや太い工具によるヘラミガキ、口縁部・台部外面はナデ調整される。1818の台部は八字状に広がり、端面が垂直の面をなし、外面には凹線が施される。1819は大型の太頸壺で、頸部から口縁部にかけては逆八字状に大きく広がり、端面は垂下し、ヨコナデによりやや凹凸がある。口縁部外面には竹管刺突が巡るが、一方向のみ2段となり、羽状のヘラ沈線がある。内面には2段の扇形紋とその施紋時についたかと思われる沈線がみられる。頸部には2段の突帯が巡り、凹み部に3段の竹管が刺突される。1821も大型の太

頸壺で、頸部はやや短い。口縁端部は、わずかに垂下して垂直な面をなし、凹線が施される。内面にはイタによる2段の羽状の刺突がなされる。外・内面ともハケで調整され、頸部に斜位のイタによる刺突が巡る。1820はゆるやかに外彎する口縁部～頸部をもつ太頸壺で、端面は垂直の面をもち、凹線が施紋される。内面にはクシによる2段の羽状の刺突、体部外面上半には、横線・斜位のクシ刺突、扇形紋が施される。ただ、頸部の横線状のものはクシではなく棒状工具によってつけられたもので、突帯の可能性もある。

(8) S Z 342 (図 178・179)

1822～1826は上位、1827～1829下位より出土している。

1822は頸部から口縁部にかけてゆるやかに上外方に延びるもので、端面は内傾し、ヨコナデにより凹む。体部は粗いハケ調整され、上位よりクシによる横線、細かい波状紋、波長の長い波状紋、細かいハケ工具による、短い単位の横線が施紋される、内面は細かいハケ調整され、口縁端部には扇形紋がみられる。1823の椀型高坏の坏部は、口縁部を下に1824の加飾太頸壺に蓋をするように頸部内面より出土した。坏はやや台形を呈し、ハケ・ヘラミガキ調整される。赤彩は、坏立ち上がり部外面下部2/3、内面端部、内底面に4ヶの円形赤彩が施される。受部底面外面には赤彩はみられない。外面にはススが付着しており、底面が特に多い。1824は頸部から口縁部にかけてゆるやかに広く広がる加飾太頸壺で、端面はわずかに垂下して垂直な面をなし、凹線が巡る。頸部にはやや太い突帯が2条あり、その下位に横線、簾状紋、交互支点をもつ波状紋、横線という順に施紋されている。体部下半はヘラミガキ調整される。口縁部内面端部には、イタによる羽状刺突がみられる。1825は無飾太頸壺で、体部外・内面はナデ調整がなされ、内面にはツメ痕が残る。1826は口縁部が

短く八字状に広がるもので、外傾する口縁部端面には波状紋が施紋される。全体に磨減・欠損が多いが、特に外面下半に集中している。1827は体部最大径が中位にあるが、大きく横に張り出し鋭く屈曲し、稜をなす。体部下半はヘラケズリの後ハケ調整され、わずかに内彎する。体部上半には、横線、波状紋、斜位のイタ刺突がある。1828は短く屈曲する口縁部をもつ短頸壺で、細かいハケ調整される。1829は低い台部が付く台付直口壺で、外面全体に赤彩が施される。

1830・1831は上位、1832・1833は下位より出土している。

1830の有段高坏は、立ち上がり部に比して受部が深くなるもので、立ち上がり部外面には長方形の赤彩が連続して塗布され、受部外面にも塗布される。また、水平になる受部端面にも赤彩がみられる。1831・1832は椀型高坏の坏部になり、ヘラミガキ調整される。1832は外面に赤彩される。1833の脚部は裾端部が上外方に屈曲して丸く収束する。1834はミニチュア土器で、鉢になるか。上部には焼成前穿孔の紐孔が1孔×4方向に開けられる。1835は上位より出土しており、口縁端部がヨコナデによりわずかに内彎する。調整はハケ。1836の器台は上位より出土する。受部は、八字状に開き端部が上下にわずかに延び、面をなす。端面には凹線が施され、竹管が押された円形浮紋が2×7方向に付けられ、その間に円形赤彩が2ヶづつ塗布される。受部外面はヘラミガキされ、8方向に円形赤彩が塗布される。内面は磨減が進み、ススが付着している。脚部は八字状に広がり、端部で横に延び、上方に肥厚して面をなす。透し孔は2段あり、上段は1孔×4方向、下段には3孔×4方向に開けられる。外面の調整はヘラミガキで、頸部から端面まで赤彩が施される。1837は下位より出土する。口縁部は内彎して面をなし、外面にはクシによる斜位の刺突がなされる。坏部外面には口縁屈曲部から中位まで、下位には柱状と円

形の赤彩の組み合わせが5方向に塗布される。また水平になる口縁部端面と内面底部中央に1ヶ所円形赤彩が施される。台部は八字状に広がり、外面に赤彩がなされる。1838は上位より出土する。外面はナデ調整され、内面は上方・斜方のヘラケズリがなされる。器壁は厚い。1839は下位より出土した甕で、短く屈曲した口縁に最大径が上位にある体部をもつ。口縁部には強いヨコナデがなされ、端面が凹む。体部外面はハケ調整、内面にはイタによるヘラミガキ調整される。

(9) S Z 342 関連資料 (図 179)

1840～1843はS Z 342出土の可能性があるものである。

1840は口縁部が外反しながら上方に延び、やや丸く収束する。体部外面には頸部よりイタ刺突、横線、細かい波状紋の順で施紋され、その下にクシによるJまたU字状の記号が描かれる。1841は器台の脚部になると考えられ、底面中央に焼成前穿孔が縦位に開けられている。外面にはクシによる横線と棒状工具による円形の刺突が巡る。1842も器台の脚部で外面には横線とイタによる斜位の刺突がなされる。1843の小型の甕は、外面ハケ調整、内面はナデ調整される。

(10) S Z 343 (図 180・181)

1844・1849は上位、1845～1848・1850は下位から出土している。

1844は口縁部が短く屈曲する太頸壺で、体部最大径が中位にある。調整は外面がハケ、内面がハケ・イタナデが施される。1845も無飾の太頸壺で、口縁部が逆八字状に外反する。体部最大径は中位にあり、横方向に大きく広がる。外内面ともハケ調整。1846も1845と同様の形態を呈する。口縁部端面はヨコナデによりやや凹面となる。体部外面はハケ、ヘラミガキ調整、内面はハケ調整される。1847は加飾太頸

壺で、口縁内面にはイタによる羽状の刺突と、イタ角による刺突が施される。1848は小型の甕で、外面はナデ調整、内面はヘラケズリ調整される。1849は口縁部がハ字状に広がる直口壺で器高に比して横位が長い。外面はハケ、ヘラミガキ調整され、赤彩が塗布される。1850は台付直口壺で、体部は丸い。口縁部外面の下位、脚部外面の上位には横線が巡る。外面全体に赤彩がみられる。

高坏のうち1853・1855・1858・1860が上位から、1856・1857・1861は下位から出土している。1853は坏口縁部がゆるやかに外反し、端部の器壁が厚くなり段をなす。脚部は柱状で、裾部でハ字状に開く。外面全体と、口縁部内面、脚部内面に赤彩が塗布される。1854は口縁部に粘土が付加されて外面に段ができるもので、クシによる横線と貝による斜位の刺突が施される。

(11) S Z 343 関連資料 (図 180・181)

1851・1852・1862～1868はS Z 343出土の可能性のあるものである。

1851・1852は中世の方形土坑であるS K 09から出土している。1851は加飾太頸壺の口縁部で、端部がやや斜下方に垂下して、内傾する面を作る。内面にはイタによる羽状の刺突があり、その下位に円形の赤彩がある。1852は外反する立ち上がり部をもつ有段高坏で、内面と受部外面には弧状に巡る円形赤彩、立ち上がり部外内面には柱状の長方形の赤彩がなされる。

1862は短く直線的に延びる立ち上がり部を有する有段高坏で、受部外面と磨滅してやや不明瞭ではあるが立ち上がり部外面に連続して縦位の柱状に赤彩がなされる。1864はクシによる横線と貝による斜位の刺突がみられる。1865は1/6片で、ヘラミガキが施された外面に、2段の円形赤彩が巡る。

(12) S Z 344 (図 181)

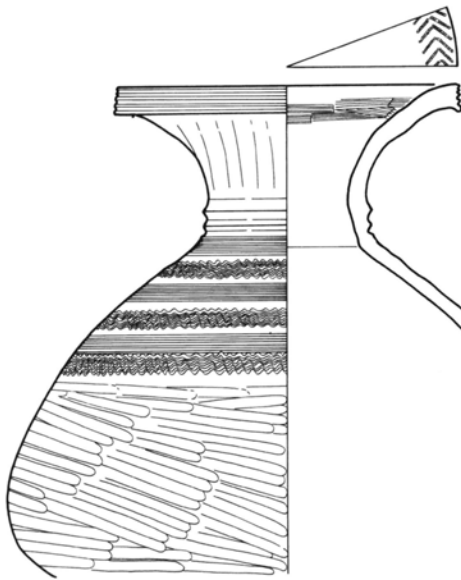
1869～1871は上位、1873は最下位から出土している。1872は出土位置不明。

1869はハ字状に広がり内傾しやや凹む端面をなす口縁部と、中位で横に丸く広がる体部、やや突出する底部を持つ無飾の太頸壺になる。外面は全体にハケ調整され、磨滅が著しく不明瞭ではあるが赤彩の可能性はある。1870の加飾太頸壺は、大きくハ字状に広がる口縁部が、端部で上下に拡張して内傾して面をなし、凹線が施されている。全体にイタ工具によるハケ調整で、口縁部内面にイタによる刺突と扇形紋がある。1871は皿型高坏で、坏部内面に、やや不規則であるが8～9ヶの円形赤彩がある。また外面端部にも横位の赤彩がなされる。脚部はハ字状に開き、透し孔をもたないもので、中位に4方向の円形赤彩がある。裾部にも赤彩が巡るが、全周するのではなく部分的に塗布されている可能性もある。1872の台付鉢で、最大径は下位にあり、横に長く延びやや稜をなす。口縁部はわずかに外彎して、丸く収束する。脚部はハ字状に広がり、裾部でごくわずかに外にむき、端面は外傾する面をもつ。赤彩は、坏部口縁端部外面と下半、その間の空間に12ヶの円形、脚部外面に施される。1873はく字状に短くややゆるやかに屈曲する口縁部と、上位に最大径があり、縦位に長い体部を有する。外面はハケ、内面は斜方・上方へのヘラケズリ調整がなされる。器壁は厚い。

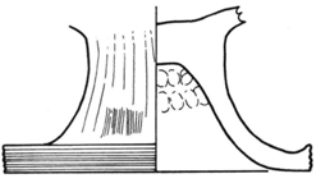
(13) S Z 345 (図 182・183)

1874～1880は下位より、1881は最下位より出土している太頸壺である。

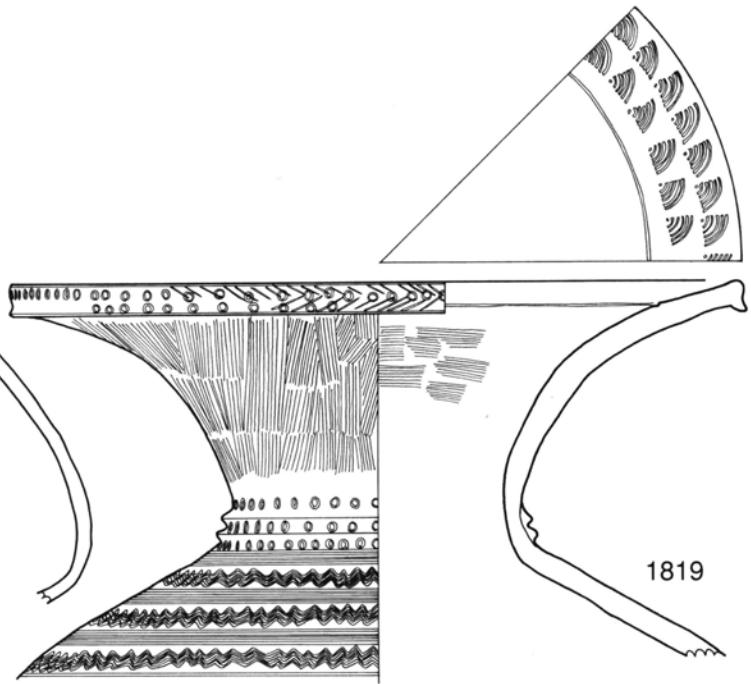
1874は口縁部がハ字状に広がり、端部がやや垂下し、体部が中位で横に大きく広がりやや扁平な形態もつ。底部はわずかに突出する。口縁部端面には竹管による刺突が、内面にはクシによる横線と外面と同じ竹管が施紋される。体部外面は、上半がハケ、下半が上方へのヘラケズリ後に横方向のヘラミガキがなされる。内面は上位が粗いハケ、中～



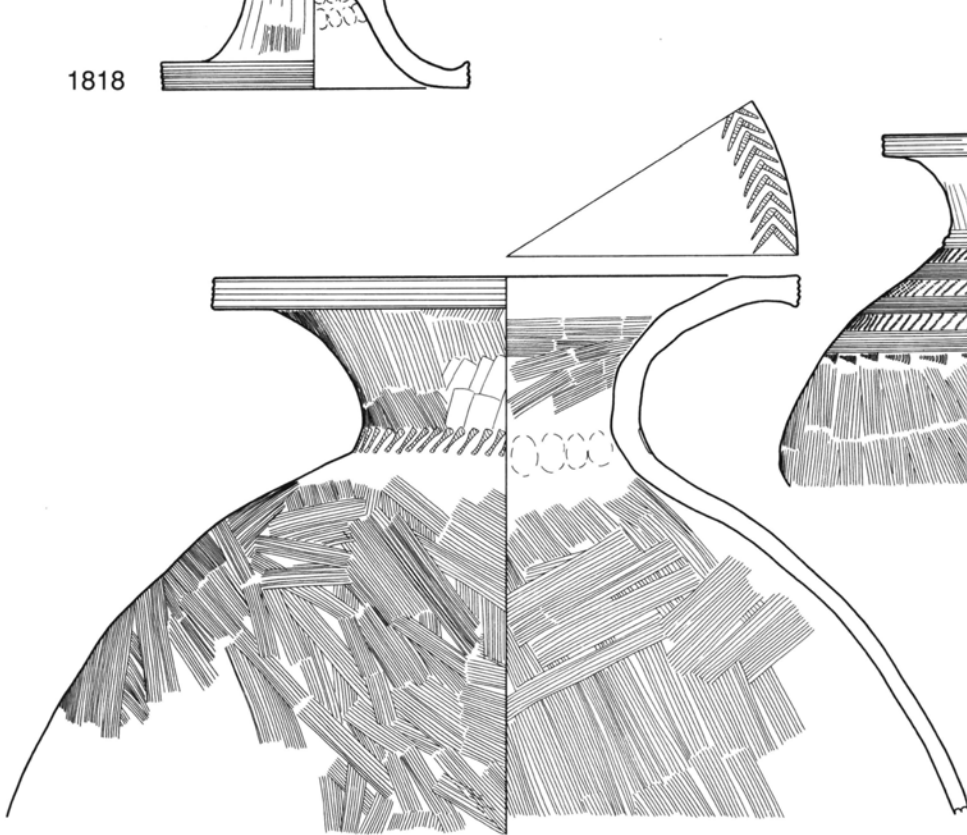
1817



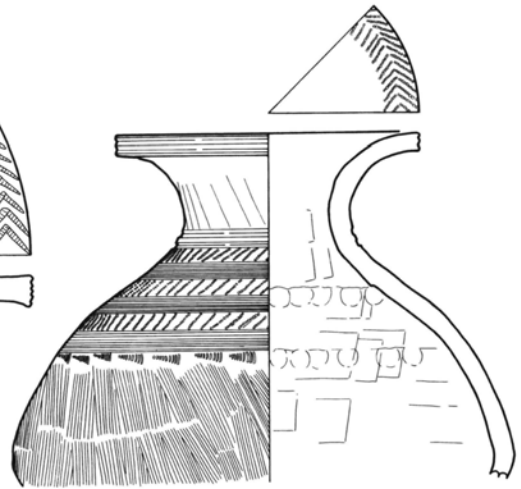
1818



1819



1821



1820

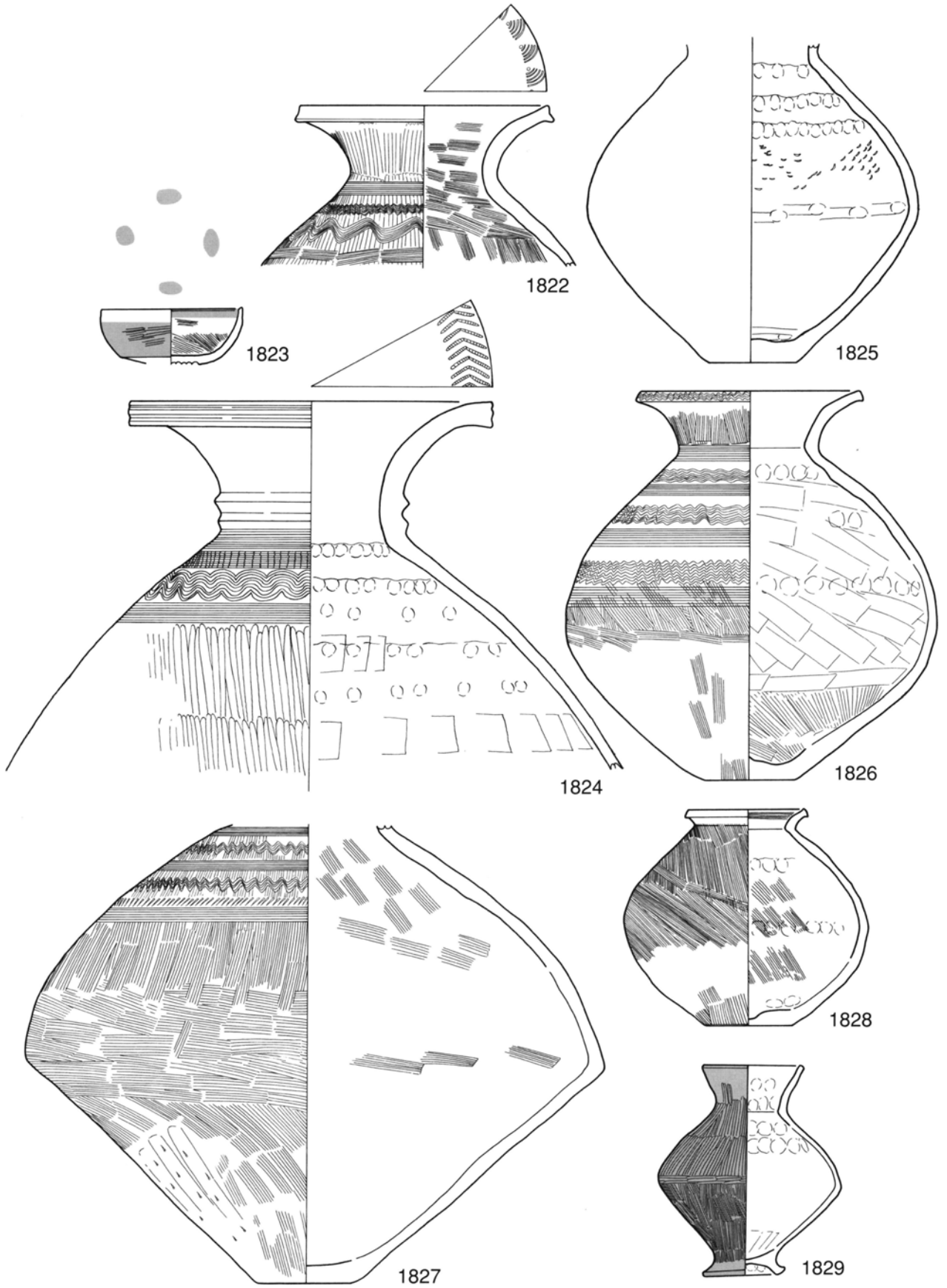


图 178 SZ342 (1)

(1/4)

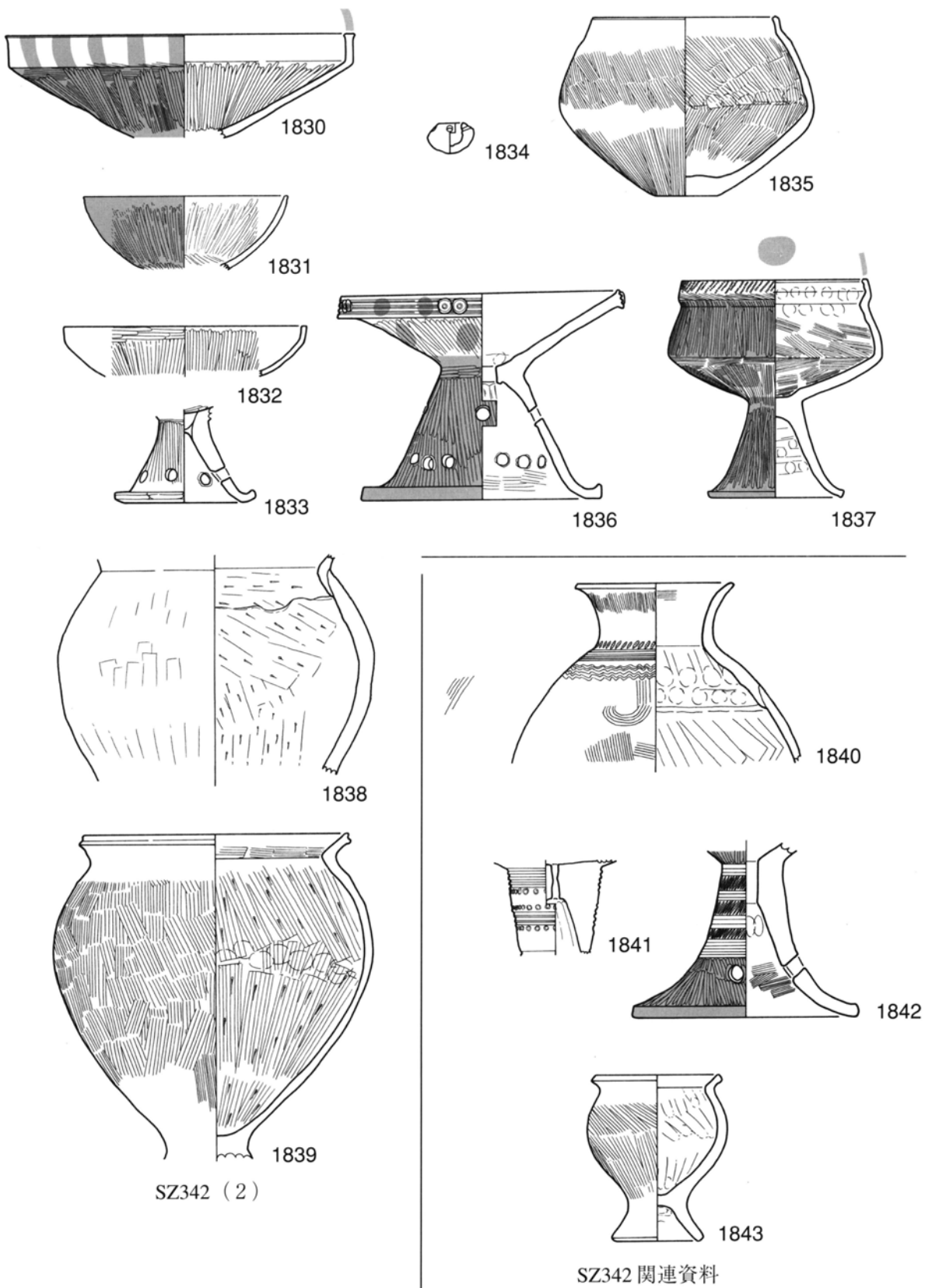


図 179 SZ342

(1/4)

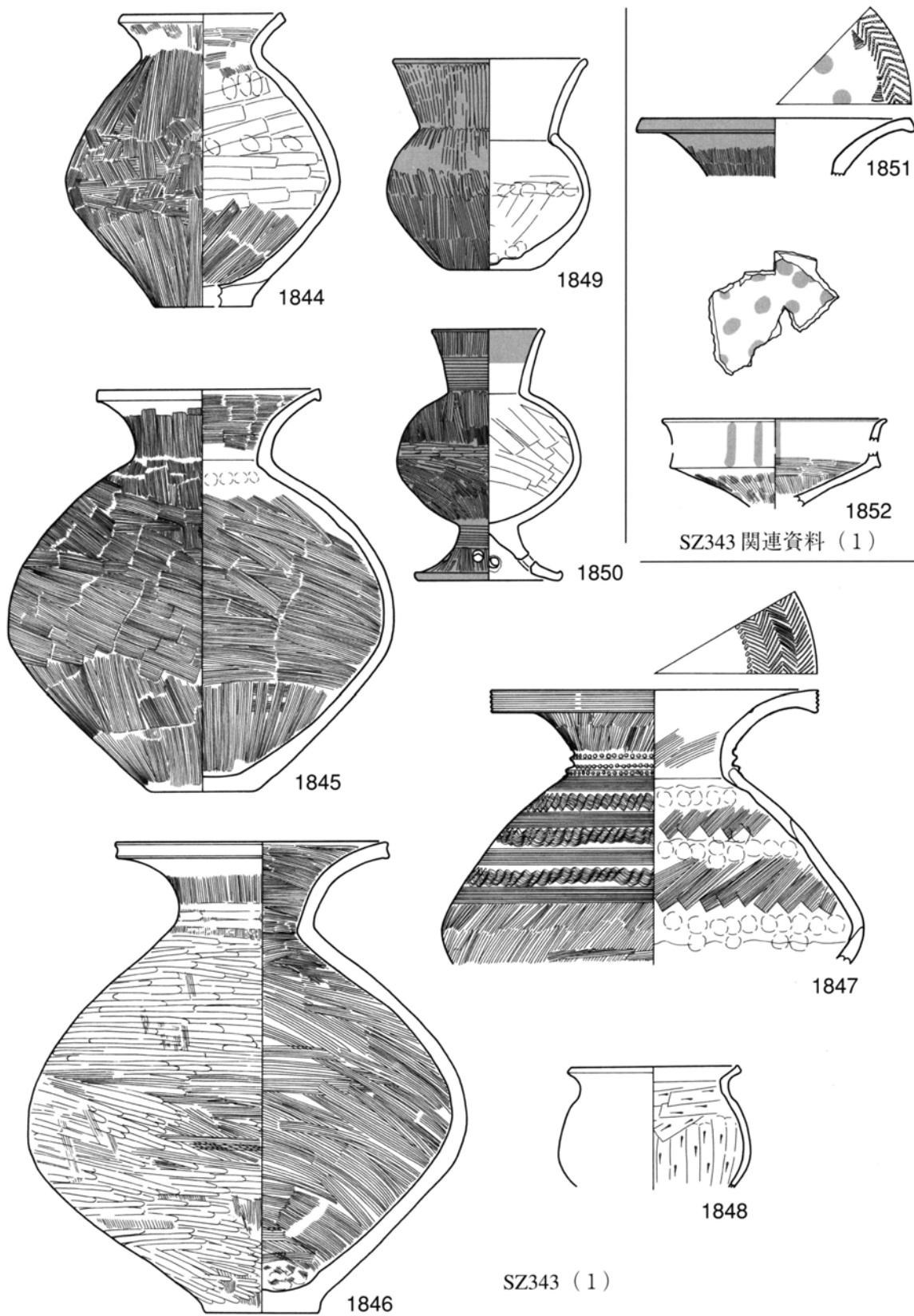
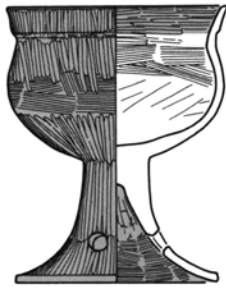
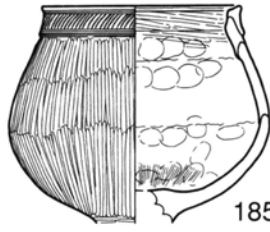


図 180 SZ343

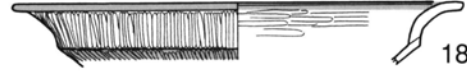
(1/4)



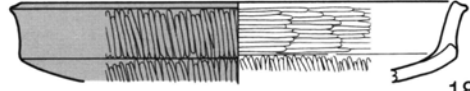
1853



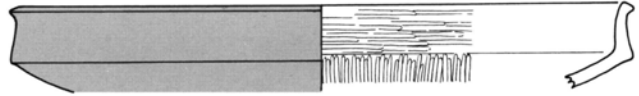
1854



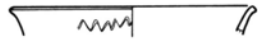
1858



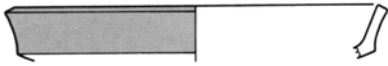
1859



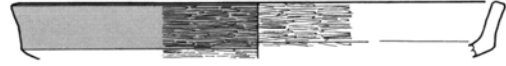
1860



1856

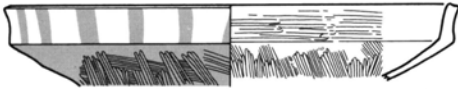


1857

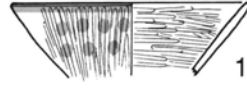


1861

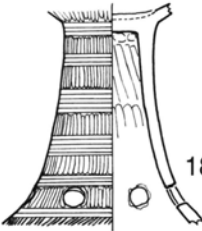
SZ343 (2)



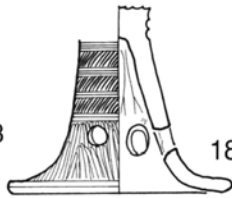
1862



1865



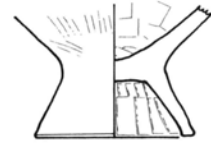
1863



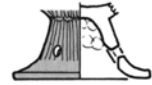
1864



1866

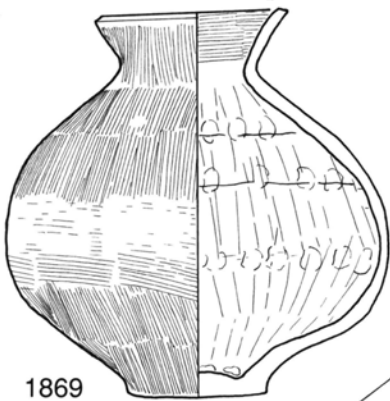


1868

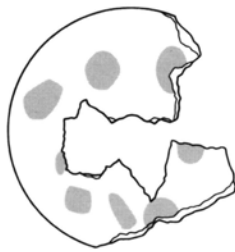


1867

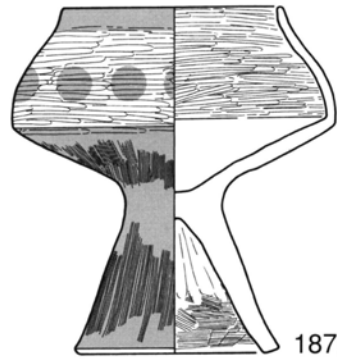
SZ343 関連資料 (2)



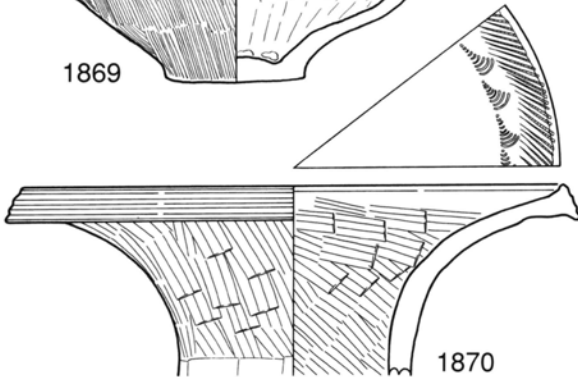
1869



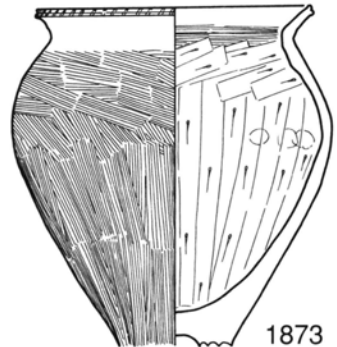
1871



1872



1870



1873

SZ344

图 181 SZ343 · 344

(1/4)

下位が細かいハケ調整され、中位にツメ痕が残る。外面には頸部以下に赤彩が施される。1875に1874と同様の形態をしているが、器高が高く、体部は丸みを帯びている。口縁部端面と頸部外面には1段のイタ刺突が、口縁部内面には2段のイタ刺突がみられる。体部下半は上方へのヘラケズリ後ハケ調整される。1876の体部は1875と同じく丸みを帯びた縦長の形態を呈しているが、口縁部は八字状に大きく広がり、頸部に1段の突帯が巡る。口縁部端面はわずかに上下に拡張して垂直な凹面をなし、竹管刺突が施される。体部外面下半は、ハケ後ヘラミガキ調整される。1877の口縁部内面は1段のイタ刺突、頸部外面はクシ横線で施紋される。1878は体部中位に最大径があり、ソロバン玉状を呈する。口縁部は大きく八字状に広がり、端部がわずかに垂下して、垂直な面を作る。施紋は口縁部内面にのみ行われ、羽状のクシ刺突がなされる。外面はハケ後イタナデ調整される。1879は1874と同様の形態をなすが、口縁部端部がわずかに上方に延び、垂直な面を作っている。焼成前穿孔の紐孔が1孔×2方向にみられるが、高さは不揃いである。口縁部端面には縦位のイタ刺突があり、体部上半にはクシ横線、扇形、交互に支点を移動する波状紋が描かれる。外面下半部は磨減が激しく不明であるが、ハケ後ナデ調整されるか。1880は丸い体部と、やや細い頸部をもっており、下半は下方へのヘラケズリ後ヘラミガキ調整されている。上半は施紋され、クシ横線、イタ刺突、扇形紋が施され、円形の赤彩が8方向巡る。1881も1879と同様の形態を呈するが、口縁部は内傾し、外角にイタによる斜位の刺突がなされる。調整は内外面ともハケで、外面下端にわずかに上方へのヘラケズリがみえる。

短径壺1882・1883は、両者とも下位から出土する。1882は、外面が縦位・横位のヘラミガキ、内面がイタナデ調整され、口縁部内面と外面全体に赤彩が塗布される。1883は、外面が上方へのヘラケズリ、内面

がナデ調整される。底部外面には、木葉痕が残る。また体部外面の中位から下位にはススは付着している。

1884～1886の高坏とも下位より出土している。1886の皿形高坏は、外面と坏部内面がヘラミガキ調整されており、異なる位置で開けられた2段の透し孔が脚部に穿たれる。外面全体と、内面中央部とそれを丸く取り囲むように6ヶ（復元すると8ヶか）の円形赤彩が塗布され、その丸く巡る円形赤彩をつなぐように円が赤彩で描かれる。1887・1888は上位と下位のものが接合した台付鉢である。両者は同一個体になると思われ、外面には赤彩がなされる。

1890は下位より出土したおり、台付壺または鉢になると考えられる。中空の台部外面にはヘラによる横線が巡り、全体にヘラミガキ調整される。1891は最下位から出土しており、受口になる壺口縁かと想定される。調整はハケ後ヘラミガキがなされており、外面の段部に2ヶの山形の貼付浮紋がみられる。1892は高坏または台付壺になると想定されるもので、内面は層状に剥離している。外面はイタナデ後ヘラミガキ調整される。

1893は上位・下位のものが接合し、1894は出土位置不明である。1893は口縁部がく字状に屈曲し端部でわずかに斜下方に拡張され、内傾する面を作っている。面にはイタによる斜位の刺突がなされる。体部は最大径がやや上位あり、丸みを帯びている。外面は、縦・横位の細かいハケ調整がなされる。内面は、イタナデ後上方へのヘラケズリ調整がなされるが、体部下半2/3ほどの高さまでしか行われない。1894も1893と同様のものであるが、口縁部が短く立ち上がる。

1895は出土位置不明、1896は上位より出土する鉢である。1895は口縁部端部がわずかに外下方に突出して内傾する面を作る。外面はハケ調整。1896は焼成前に底部に穿孔された有孔鉢で、外面がハケ、内面がヘラケズリ調整される。

(14) S Z 345 関連資料 (図 183)

1897～1900はS Z 345出土の可能性のあるものである。

1897の台付鉢は、丸い体部と短く屈曲する口縁部をもつ。頸部下にはクシによる2条の横線があり、その下位に長径3～3.5cm、短径2～2.2cmの大きめの円形赤彩が5方向に描かれる。脚部は八字状に広がり裾端部でわずかに外に屈曲する。現状では、赤彩は外面下半部にしか確認できないが、脚部全体にわたっていた可能性もある。1898は台付直口壺で、頸部～上半上部、中位～脚部にかけて赤彩があり、上半下部は帯状の無彩部分となる。1899は短頸壺で、短く屈曲する口縁部が端部で上下にわずかに拡張し、内傾する面をつくるもので、端面は強いヨコナデにより凹面となる。

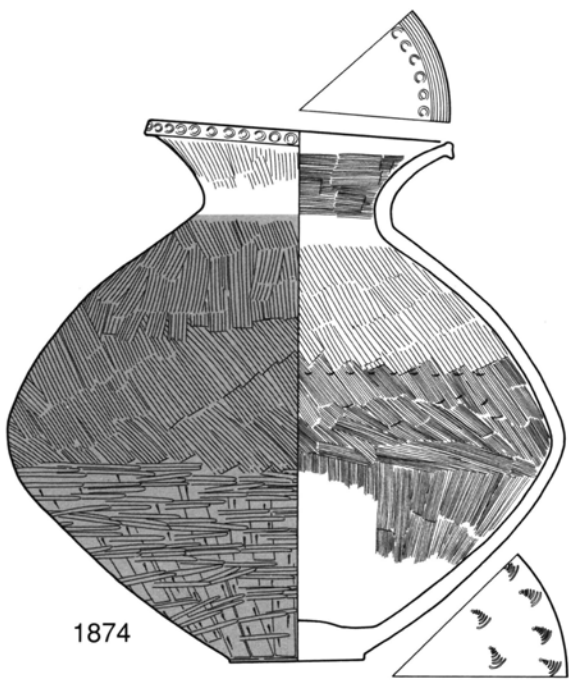
(15) S Z 346 (図 184・185)

1901～1906は上位、1907～1910は下位から出土した太頸壺である。

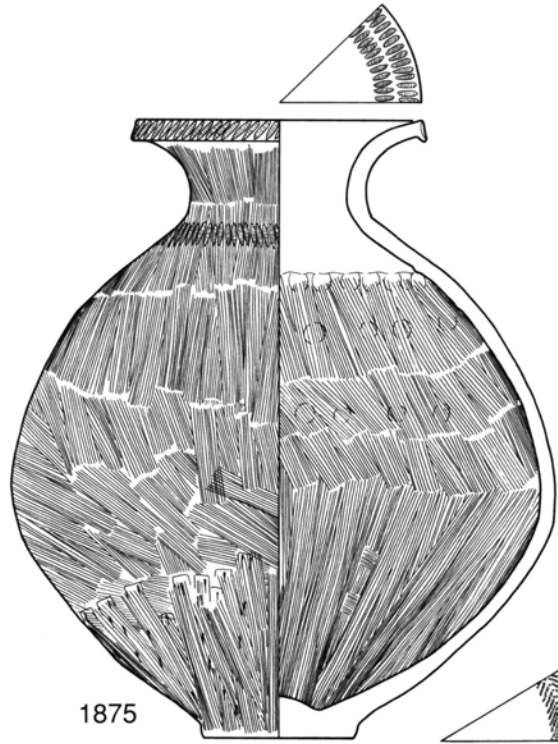
1901は頸部から口縁部にかけて2段にわたり屈曲するもので、口縁部端は内傾し、ヨコナデにより凹面となる。口縁端面にはクシによる刺突、頸部屈曲部にはクシ刺突と横線が施紋される。体部外面はハケ調整で、下位1/3ほどは横方・下方のヘラミケズリ後にヘラミガキ調整される。体部内面はイタナデであるが、イタ角によってできたと思われる沈線がみられる。1902は口縁部が大きく開くもので、端面はそのままやや内傾する面となる。口縁部面にはイタによる刺突、体部上半にはクシによる横線、波状、扇形紋が施される。1903も口縁部が大きく加飾太頸壺で、端部が垂下して、やや丸みを帯びた面をなす。頸部には2条の棒状工具で用いた平行する沈線が巡り、突帯のような効果をだしている。体部外面は、上～中位がハケ、下位が下方へのヘラケズリ後ヘラミガキ調整される。1904は小型の台付太頸壺で、まっ

すぐ上に延びる短い頸部に大きく広がる口縁部をもつ。脚部は八字状に広がり、端面にはヨコナデによる凹線が巡る。口縁部端面にも凹線があり、7ヶの貝殻と思われる工具による刺突がなされる。1905は大型の袋状口縁細頸壺で、口縁部外面上端にはヨコナデによる凹線が巡る。また上面もヨコナデにより凹む。頸部には貼付突帯が付き、イタによる連続押圧がみられる。口縁部の凹線上には4本のクシによる、大きな波長の波状紋が描かれるが、浅く不規則で、始点と終点が連結しない。体部上位には、棒状工具を使用した沈線の上に波状紋の工具と同じもので、山形の紋様がつけられている。1906は2孔の焼成前穿孔の紐孔が1方向のみに開けられている。口縁部は八字状に広がり、端部はわずかに斜下方に延び、内傾する面をなし、浅いイタによる刺突がなされる。体部はイタナデ調整がなされるが、外面下半にはヘラケズリが施されていた可能性もある。また内面中位には、ツメ痕が残る。頸部の1方向のみに、イタ角による不規則な刺突列があるが、調整時に生じた痕跡とも考えられる。1907は直口壺の体部で、底部がやや凹面となる。1908は頸部から口縁部にかけてゆるやかに広がるもので、口縁端部がわずかに垂下して垂直な面をなし、凹線が施される。体部は最大径が中位よりやや下位にくる丸い形態をしており、底部はわずかに突出する。紋様は、口縁部内面にクシによる羽状の刺突、体部上位にクシによる横線と細かい波状紋が描かれている。1909の口縁端面には、凹線が施されている。1910は口縁端部がヨコナデによりやや上につまみあげられるようになり、端面もわずかに凹面となる。

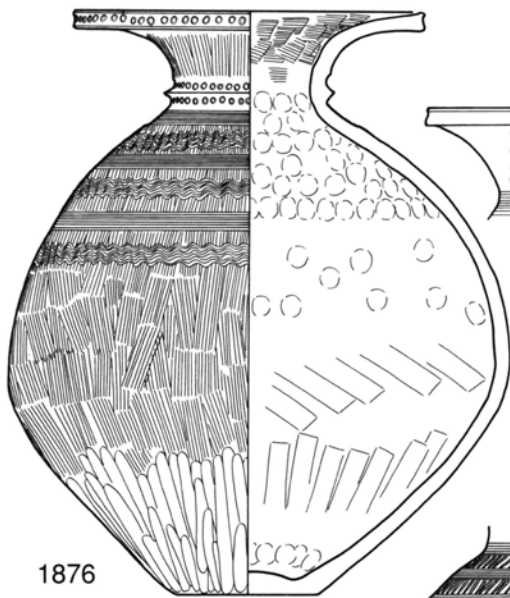
台付鉢1911は上位より出土しており、口縁部はやや内彎して外面に段をもつ。体部は中位よりやや下位に最大径があり、台部は八字状に延び、端部で外に屈曲し垂直な端面をもつ。口縁外面にはイタによる斜位の刺突、頸部から体部上位にはクシによる刺突と横線が施紋される。外面全体と水平になる口縁



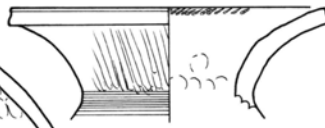
1874



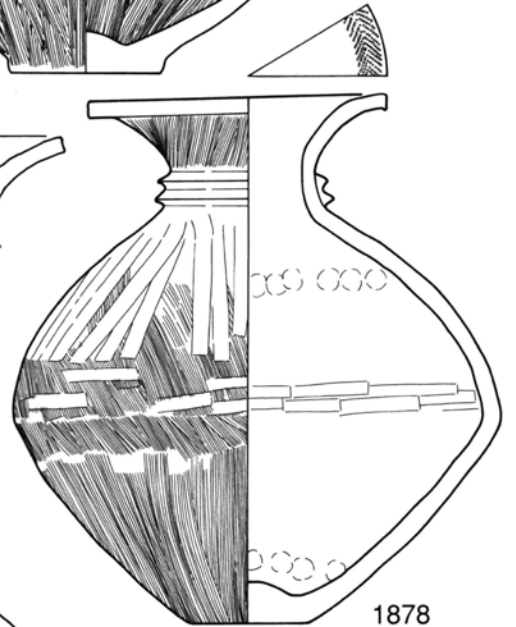
1875



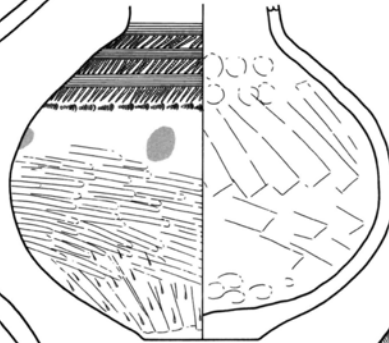
1876



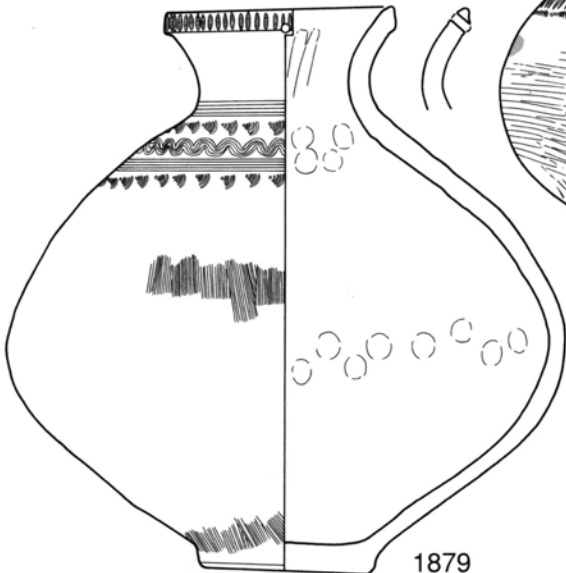
1877



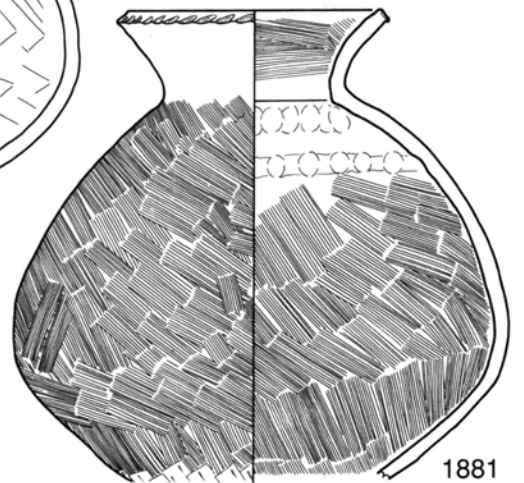
1878



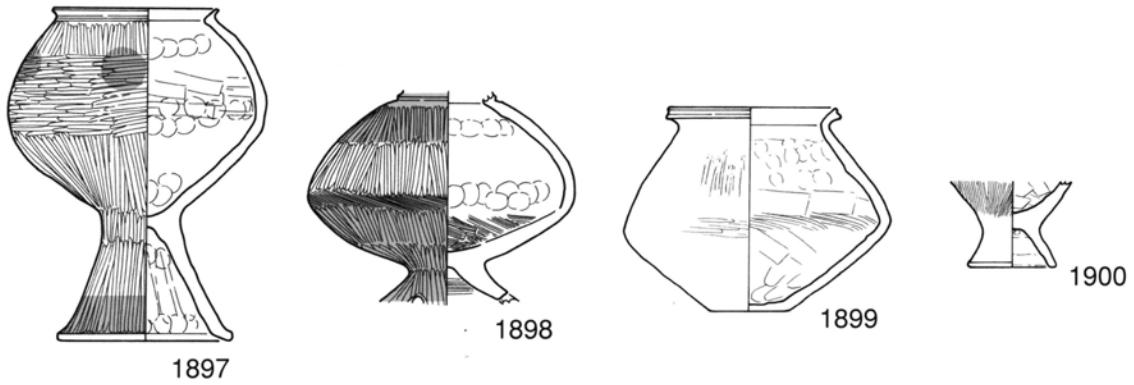
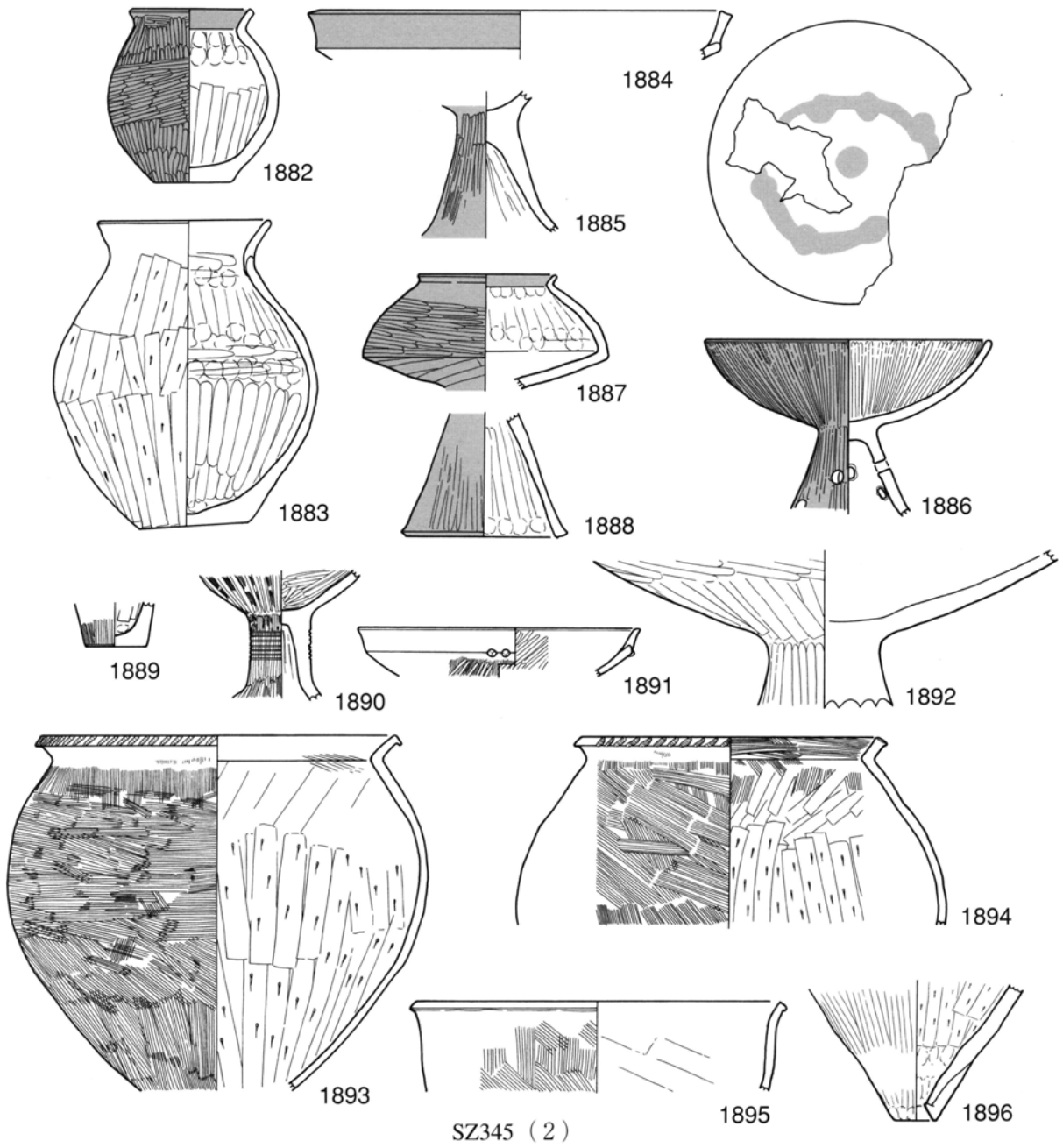
1880



1879



1881



SZ345 関連資料

図 183 SZ345

(1/4)

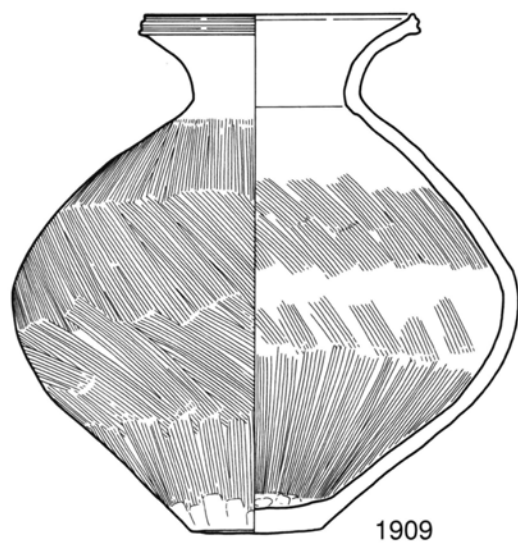
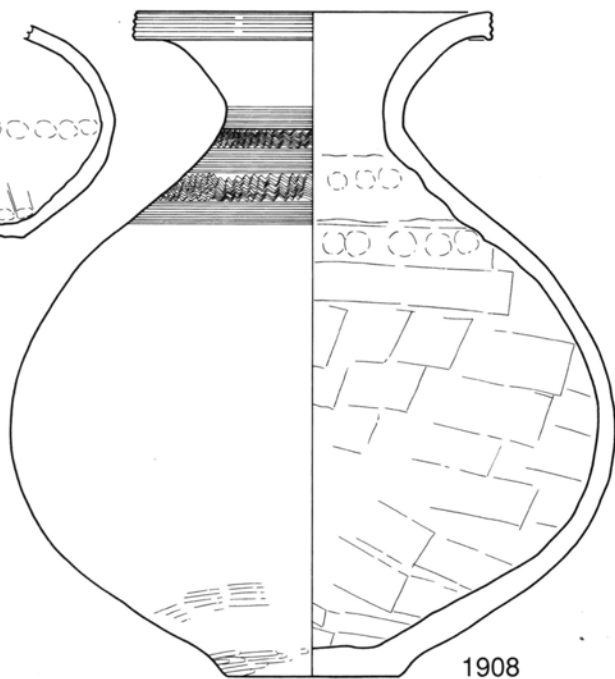
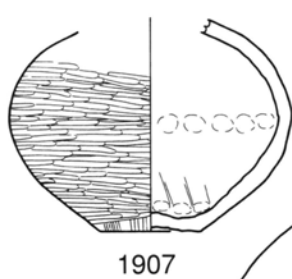
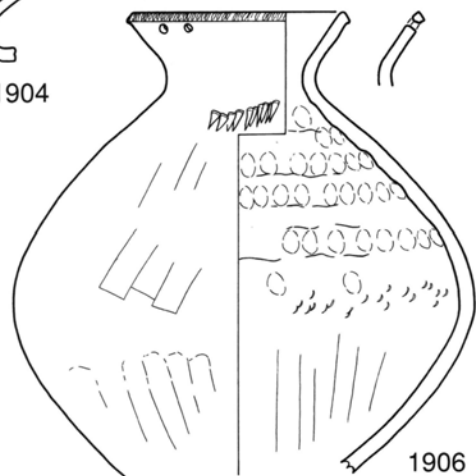
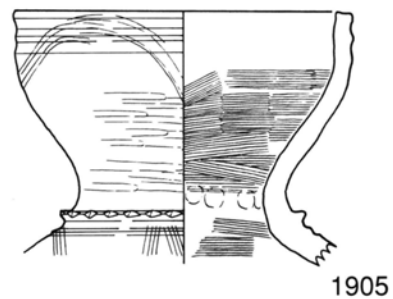
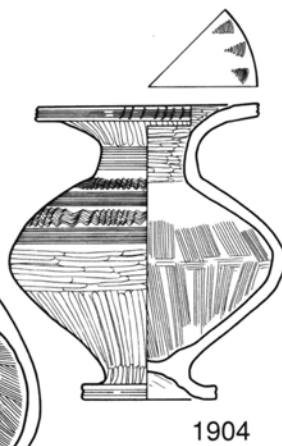
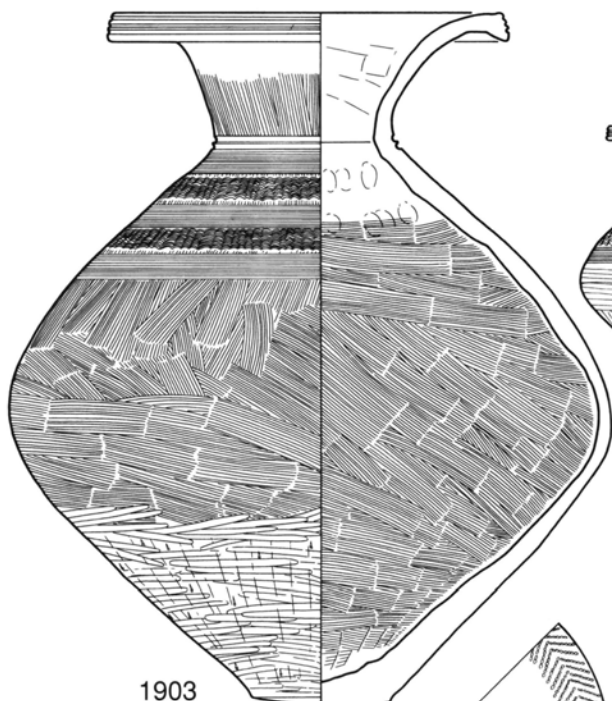
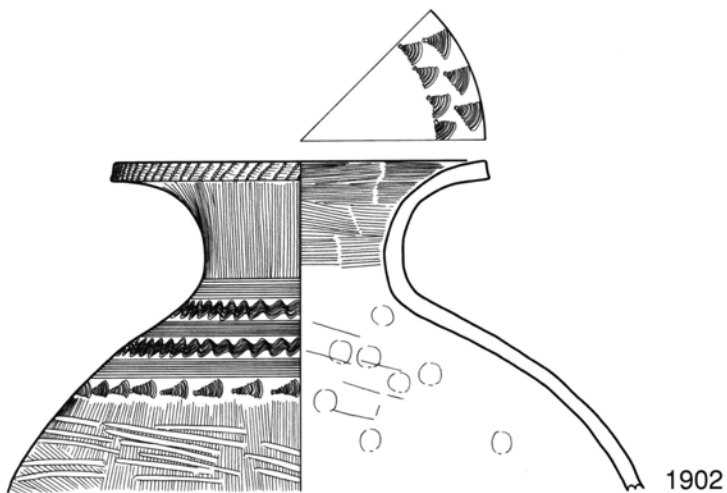
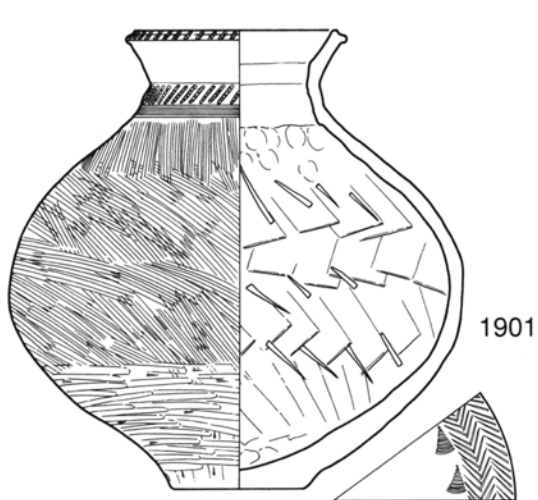
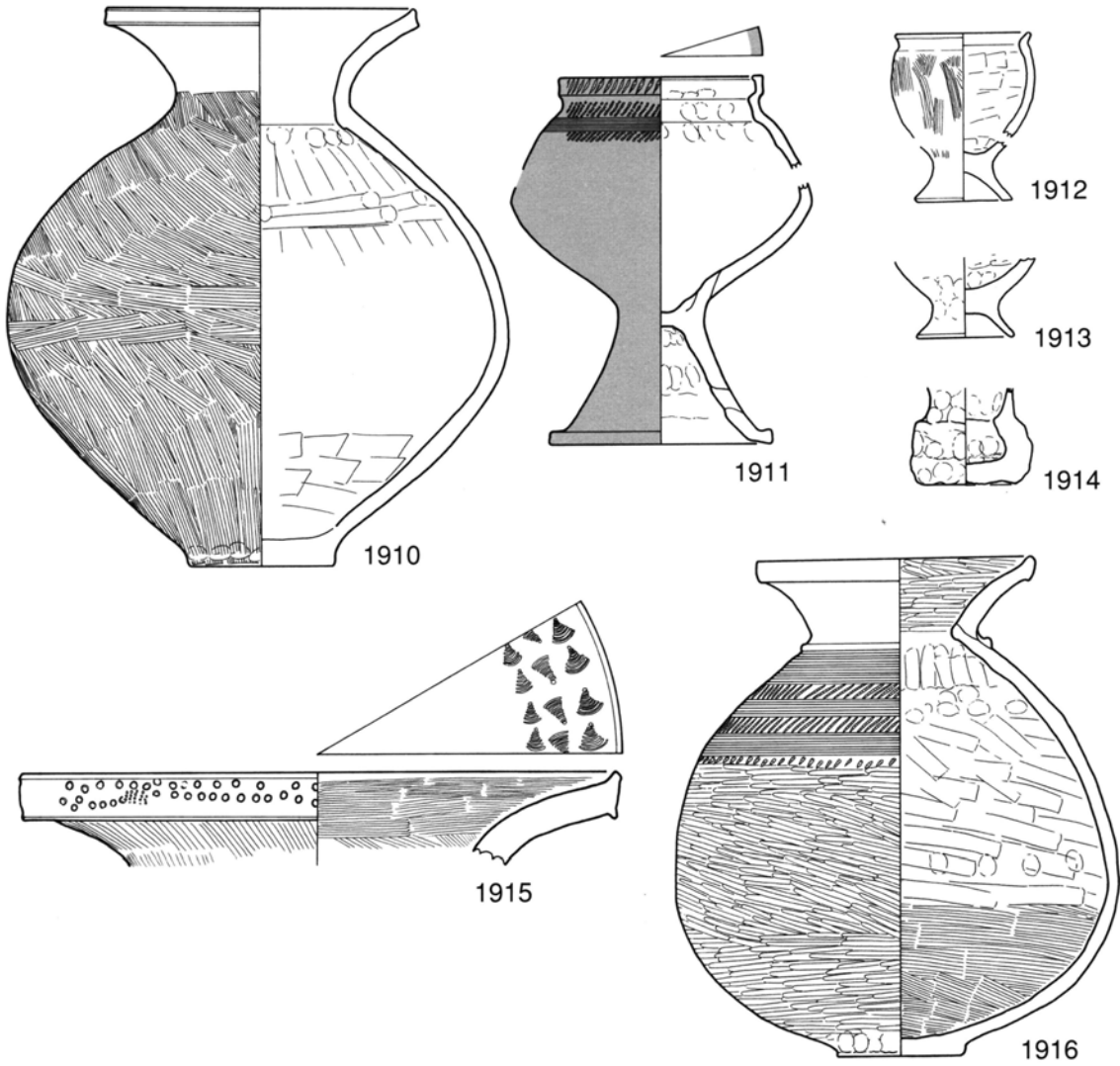


图 184 SZ346 (1)

(1/4)



SZ346 (2)

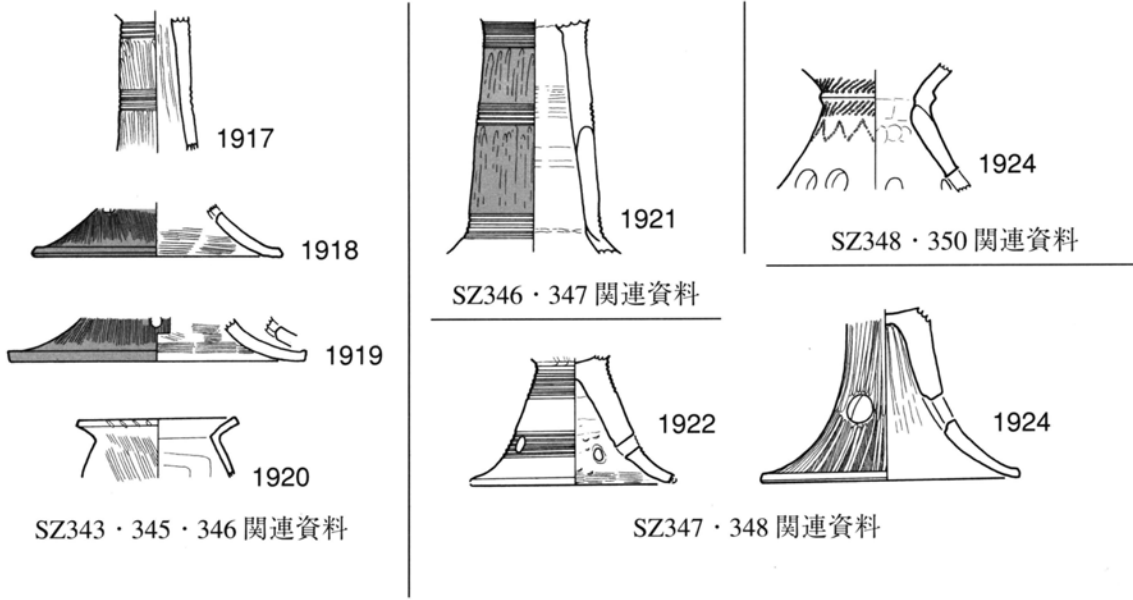


図 185 SZ346 · 343 ~ 348 · 350

端部に赤彩が施される。

1912・1913の小型甕は上位より出土している。1912は短く屈曲する口縁部をもち、強いヨコナデがなされる。体部外面はハケ、内面はイタナデ調整される。1915・1916は上位上部から出土している。1915は加飾太頸壺の口縁部で、端部が上下に突出して垂直な面をもつ。端面には不規則な大小の竹管刺突がなされる。1916は口縁部が上に延び、丸みを帯びた端面をもち、体部最大径が下位にある円形をなす。底部は突出する。頸部やや下位には角がやや丸い突帯が1条巡る。体部上位にはクシ横線とイタ刺突が施紋される。

1914は下位より出土しており、手捏ねで成形される。ただ、上部の口縁部にみえる部分は剥離面である可能性もある。

(16) S Z 343・345・346 関連資料 (図 185)

1917～1920は1917はS Z 343・345・346のいずれかに所属する可能性のあるものである。

1917は高坏の中空の柱状脚部で、クシによる深い横線が巡る。1918・1919は高坏の脚裾部で、外面に赤彩がなされている。1920は小型甕で、口縁部端面に右下がりの斜位のイタ刺突がある。

(17) S Z 346・347 関連資料 (図 185)

1921はS Z 346・347のいずれかに所属する可能性のある高坏の脚部である。形態は中空の柱状を呈し、クシによる深い横線が巡り、その間に赤彩が塗布されている。

(18) S Z 347・348 関連資料 (図 185)

1922・1923はS Z 347・348のいずれかに所属する可能性のあるものである。両者とも高坏の脚で、1922にはヘラによる横線が2段巡る。

(19) S Z 348・350 関連資料 (図 185)

1924はS Z 348・350のいずれかに所属する可能性のあるもので、器台の受部と脚部の接合部分にあたる。接合部分には低い突帯が巡り、その上下にクシによる斜位の刺突、その下位に山形の刺突が施される。透し孔は2孔×5方向に開く。

(20) S Z 347 (図 186・187)

1925～1929は上位、1930～1932は下位から出土している。ただ、1931は一部上位のものと接合する。

1925は加飾太頸壺で、八字状に外反しながら延びる口縁は、端部でわずかに上下に拡張し丸い端面を作る。端面の内外にはイタの刺突がなされ、体部上位には同じくイタでの3段の羽状刺突が巡る。器壁の色は淡茶橙色で、胎土に雲母を多く含む。1929の無飾の太頸壺は体部下半に横方・下方のヘラケズリが施されている。1931は口縁部が八字状に広がり端部で垂直に垂下して面をなすもので、体部は中位で大きく横に広がるソロバン玉状を呈している。口縁部内面にはイタによる3段の刺突と貼付山形浮紋が2×4方向に付けられる。口縁部端面にはイタによる斜位の刺突がなされるが、竹管刺突が施された円形浮紋は2×2方向と考えられるが、4方向である可能性も残る。1932は最大径が中位で横方向に大きく広がる、扁平な体部をもつ無飾太頸壺で、体部外面中位には横方のヘラケズリがみられる。

1926・1927は頸部が細くなる直口壺で、外面はヘラミガキ調整される。1927には円形の赤彩がみられるが、剥離している部分が多く、詳細は不明である。1928は体部から口縁部にかけてゆるやかに延び、端面が水平の面をもつ直口壺で、体部にはヘラケズリ、ヘラミガキがなされる。1930は受口口縁細頸壺で、口縁外面端部には棒状工具による沈線を1条引くことにより、凹線様になっている。調整はヘラミガキ。

1933・1935・1936は上位、1934は下位から出土している。1933はおそらく有段高坏の立ち上がり部になると思われるもので、ヨコナデにより凹線状に

なった口縁部端面と、内面端とそれに重ねて棒・円形の赤彩が塗布されている。1935は椀型高坏は、坏部下位に明瞭な稜をもつもので、外面全体に赤彩がなされる。1936の椀型高坏は外面と、坏部内面端、底面中心に円形、とそれを取り囲むように6方向の円形赤彩が塗布される。

1937の小型鉢は上位より出土しており、体部外面にハケ・ヘラミガキ調整される。1938は下位、1939は上位より出土する。

1940はS Z 343 東溝の上位で出土しているが、1941とセットになると考えられるのでここに掲載した。1941は西溝下位より出土している。1940は蓋で天井部がつまみ状に突出し、受部はわずかに外傾して垂下する。天井部下位には紐孔は、2孔×2方向に開いていると思われる。調整は外面が縦位のヘラミガキ、内面が受部が横位のヘラミガキ、天井部がユビナデがなされている。天井部外面上半には、ごく細いヘラ状工具でつけられた、円弧と羽状の刺突が巡る。赤彩は外面全体と、受部内面に施される。1941は合子型土器になるもので、やや内彎して延び、端面が水平をなす体部とゆるやかに外反する脚部をもつ。体部と脚部の接合部には低い突帯が巡る。体部には2孔×2方向の紐孔があり、脚部には5方向の半楕円形の透し孔がある。調整は外面が縦位のヘラミガキ、体部内面が縦位、底面が放射状のヘラミガキ、脚部内面がユビナデがなされている。赤彩は脚部端面を除いた外面全体と、体部内面にみられる。

(21) S Z 343・347 関連資料 (図 187)

1942・1944は、S Z 343 東溝・347 西溝のともに上位から出土しているものが接合した資料である。1942はゆるやかに外反する口縁部がつく直口壺になると思われ、底部が外から焼成後に穿孔されている。外面はヘラミガキ調整され、1/2が全面に赤彩、残り1/2が体部上下に横位に帯状に赤彩され、その間を縦

位に、2 cm幅の柱状の赤彩がなされている。

1943・1945・1946はS Z 343・347のいずれかに所属する可能性が高いものである。1945の有段高坏は受部内外面とも連続する柱状の赤彩がなされており、受部外面にも同様な赤彩がある可能性がある。1946は椀型高坏の坏部で、外面全体と内面に柱状の赤彩が放射状に塗布されている。

(22) S Z 348 (図 188)

1947～1952は上位、1953・1954は下位から出土している。

1947は台付鉢で、口縁端部がS字に折れて段をもち、体部は下位で鋭く屈曲し稜をもつ。口縁部外面にはイタによる凹線が巡り、体部外面にはハケ・イタナデ調整がなされる。脚部は八字状に延び、裾端部が横に屈曲して、接地面を作る。透し孔は1孔×5方向。1948の高坏脚部は、上下に1孔ずつ、4方向に透し孔をもつ。1949は縦長の丸い体部の無飾太頸壺で、口縁部はゆるやかに外反する。底部はやや突出し、厚みがある。体部内面は細かいハケが施される。1950は大きくひろがる口縁部と、中位で横に長くなり、ややソロバン玉状の体部をもつ。体部外面下半には、アバタ状の剥離が多く見られる。口縁端部は垂直の面をなし、ヨコナデでやや凹む。1951も1950と同様の体部を呈するが、体部外面上位の紋様が、横線・波状・竹管刺突の組み合わせとなる。1952は短頸壺で、体部下半に横方・下方のヘラミガキが施されている。1954は体部最大径がやや下であり、縦長の体部をもつ太頸壺で、上位の横線・波状の紋様帯の下に、細いヘラ状の工具描かれた記号がある。

(23) S Z 349 (図 189)

1955・1956が下位、1958が上位と下位のものが接合、その他のものは上位より出土している。

1955は最大径が中位あり、やや横長の丸い体部を

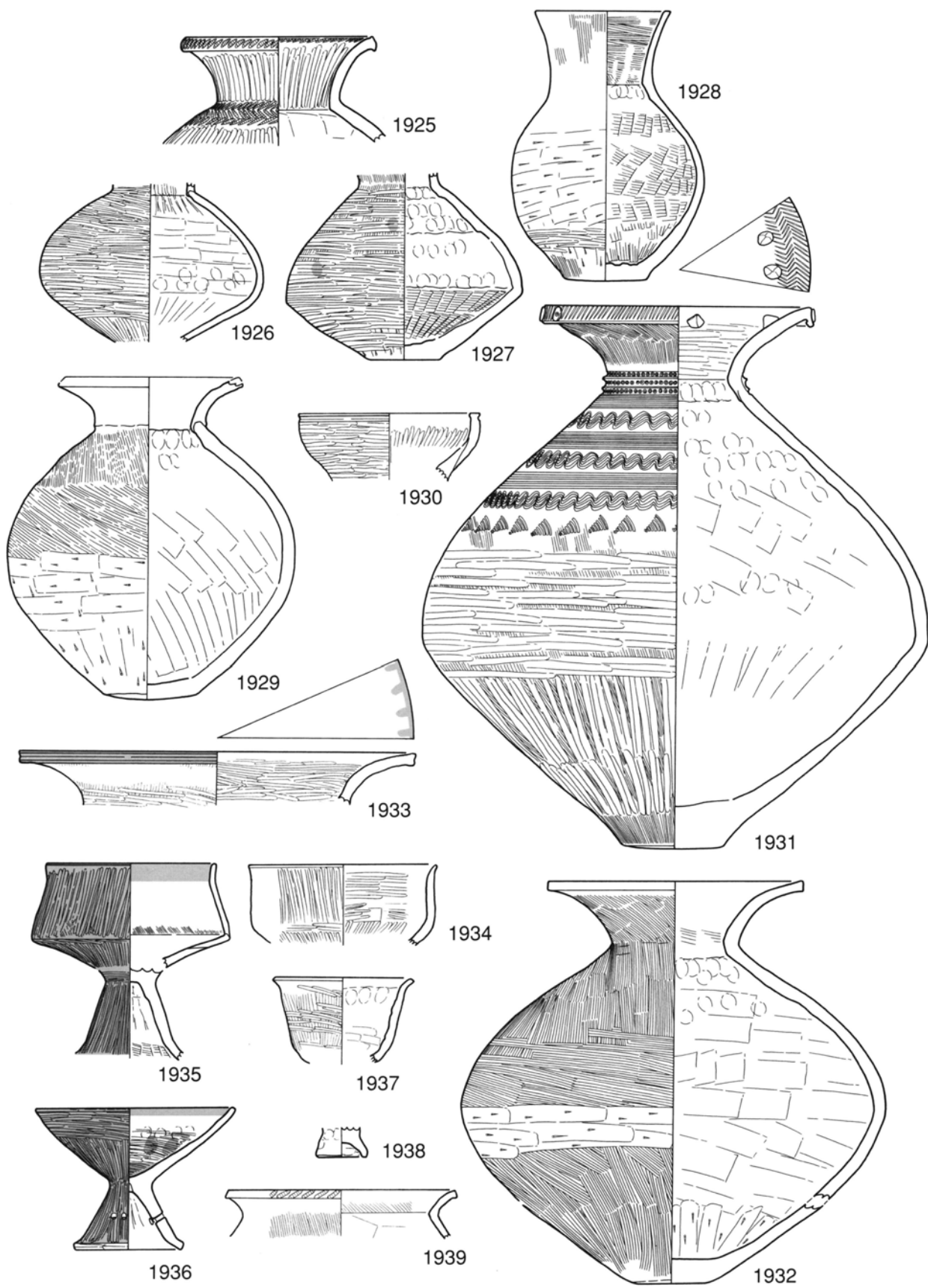
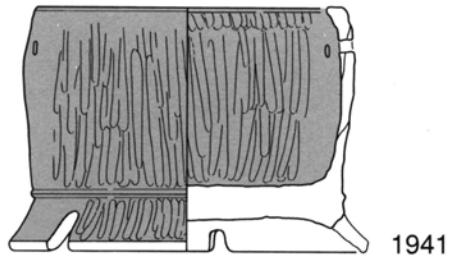
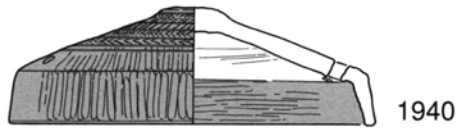
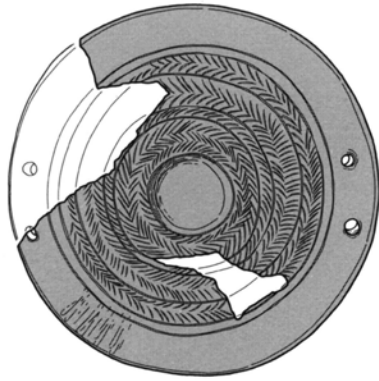


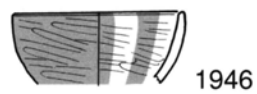
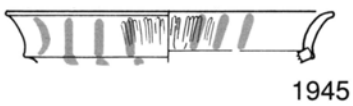
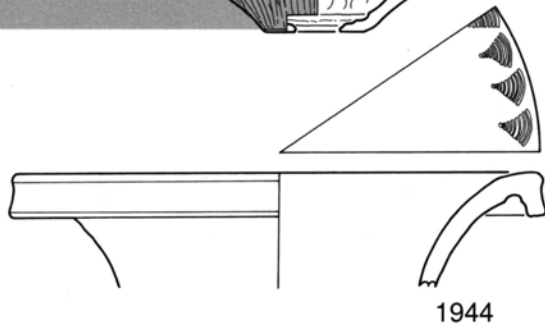
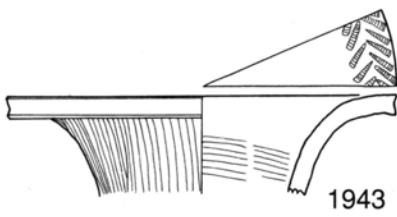
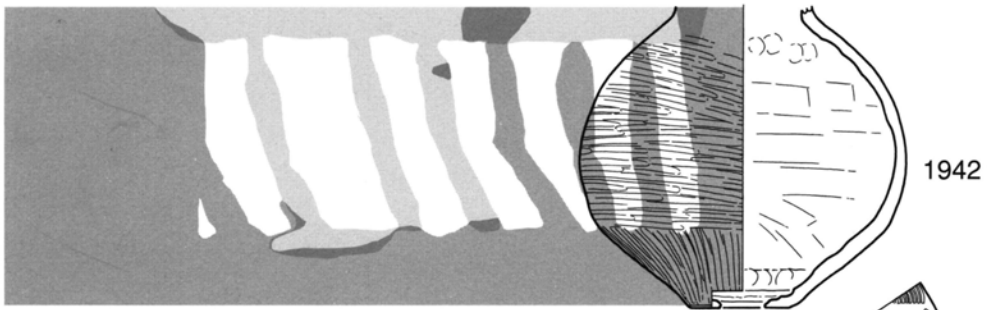
图 186 SZ347 (1)

(1/4)



SZ347 (2)

(1940・1941は1/2)



SZ343・347 関連資料

図 187 SZ343・347

(1/4)

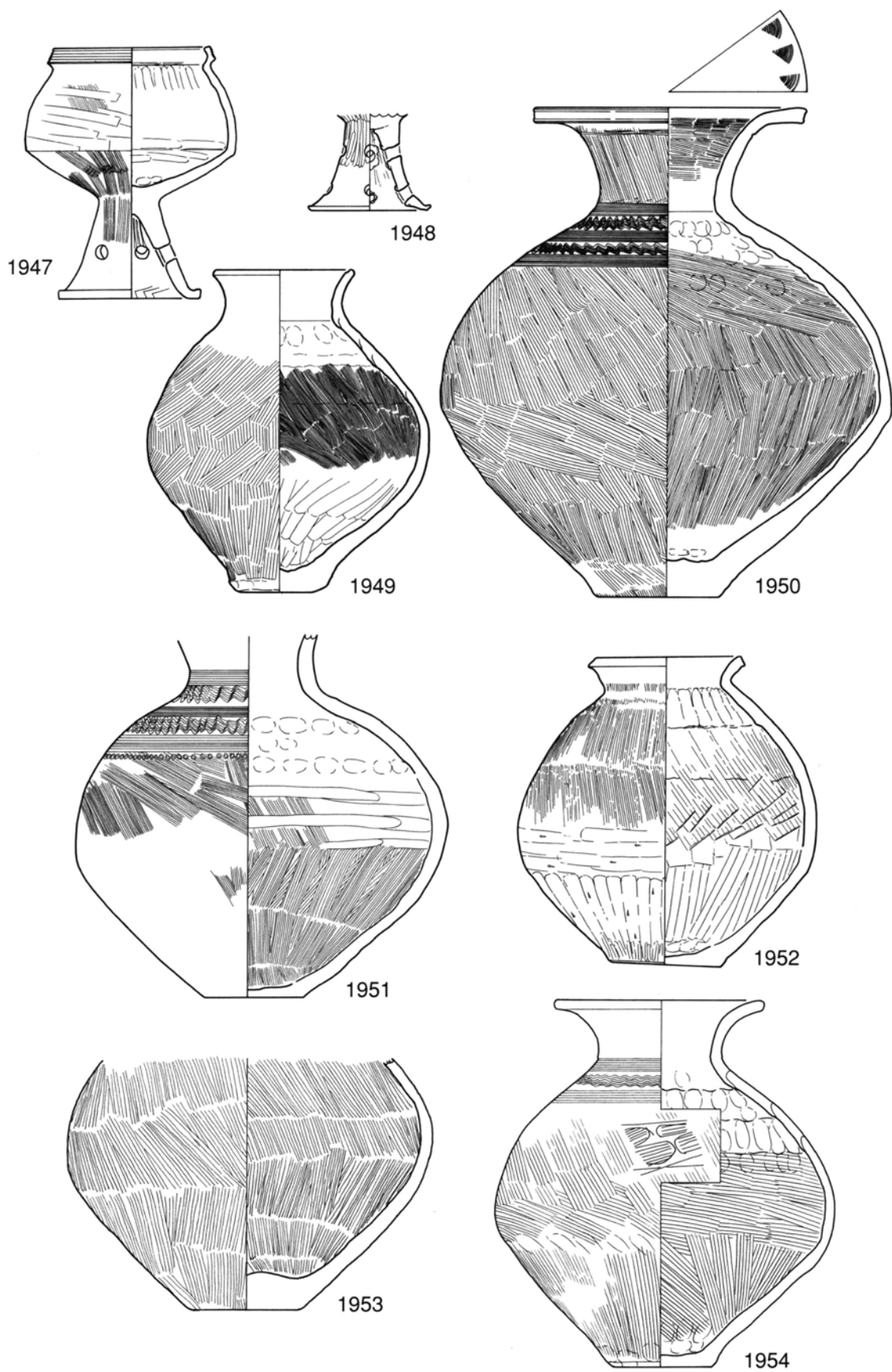
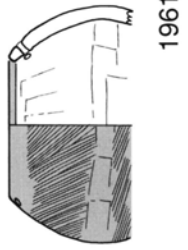
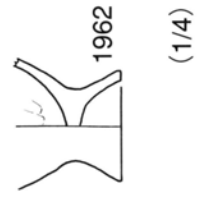
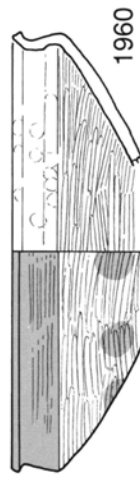
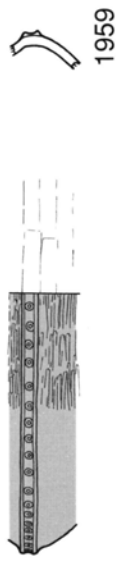
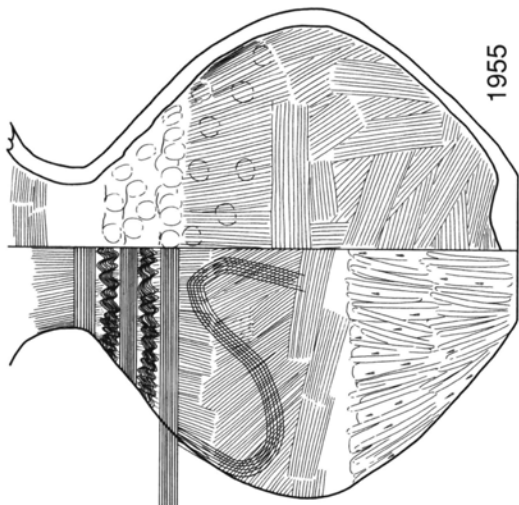


图 188 SZ348

(1/4)



(1/4)

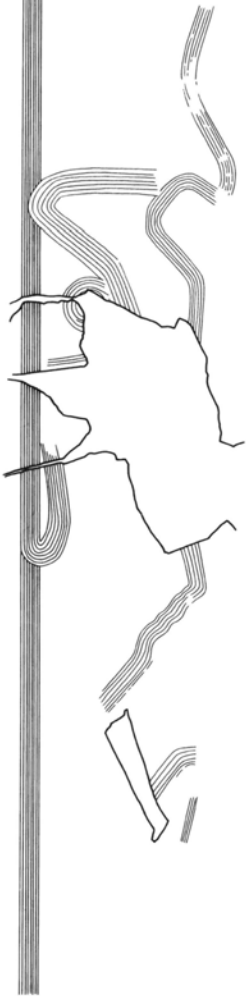
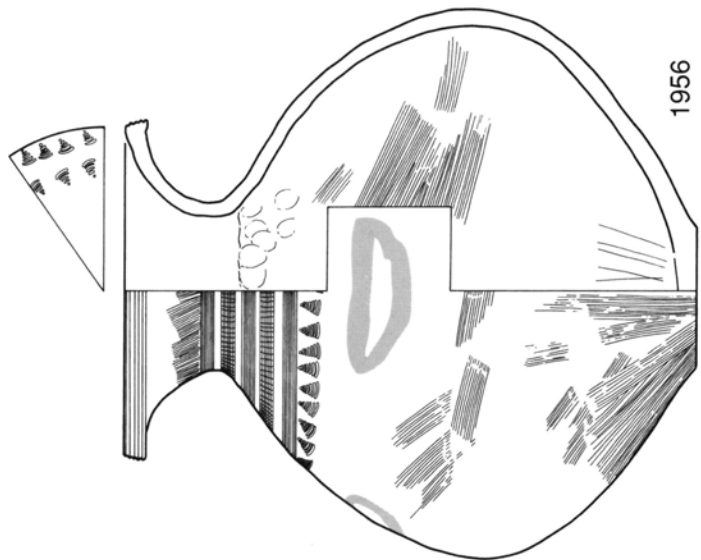
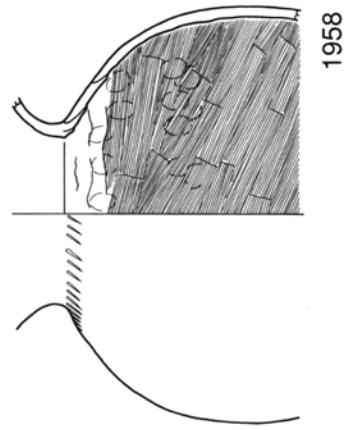
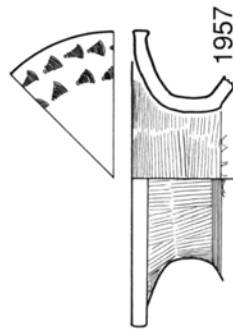


图 189 SZ349

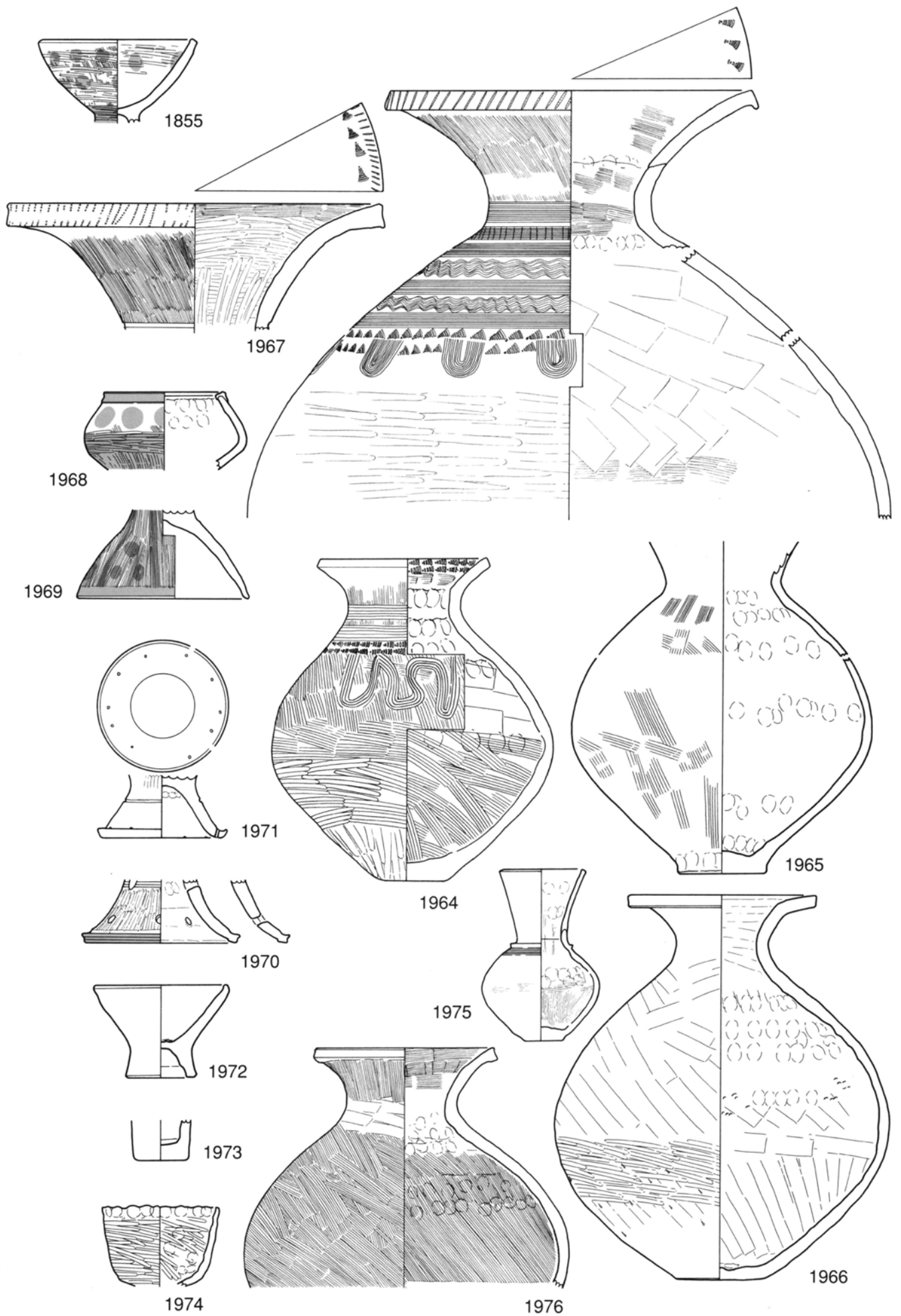


图 190 SZ350

(1/4)

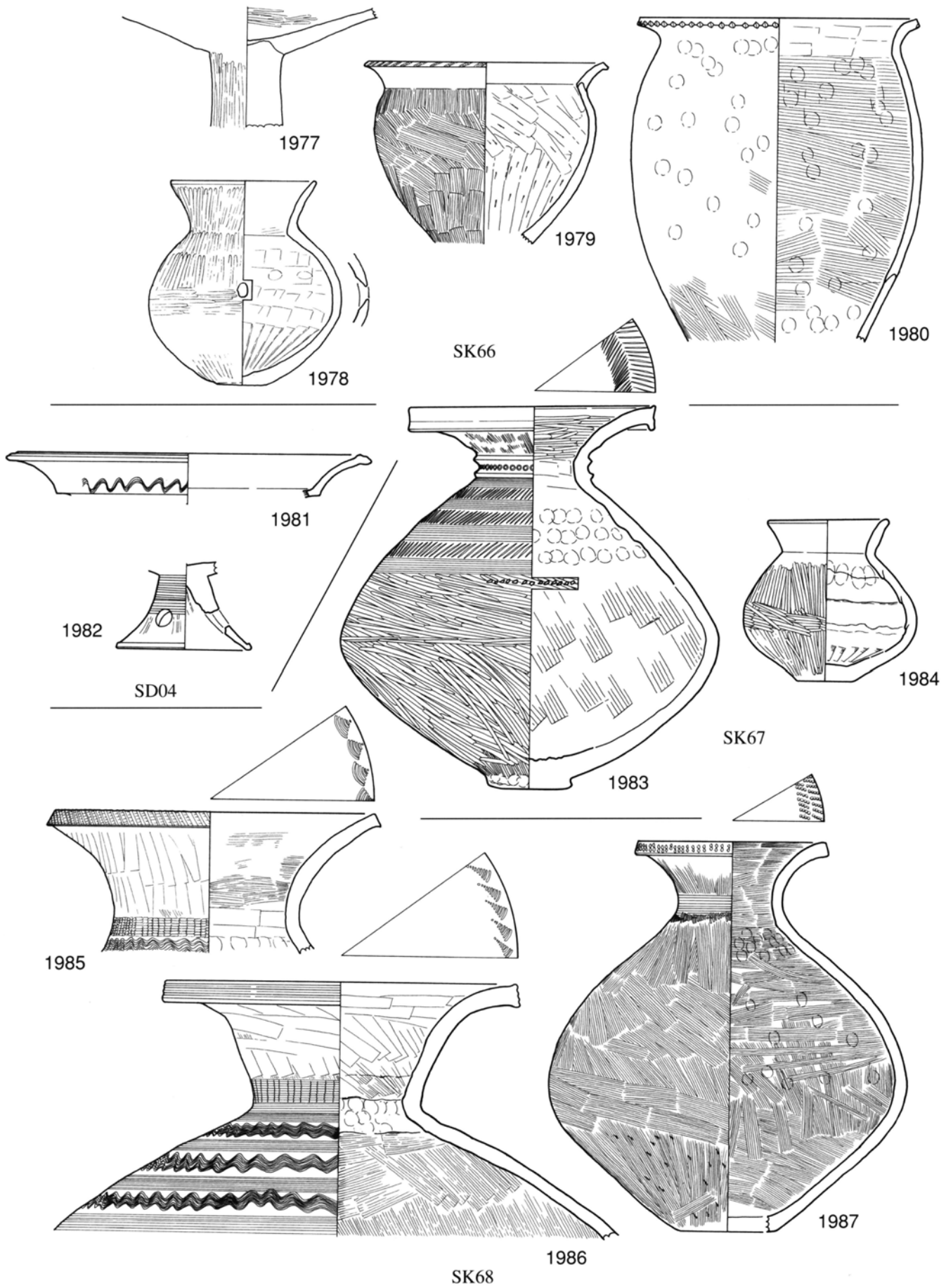
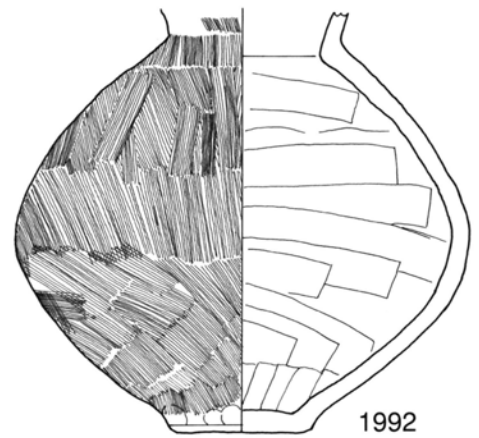
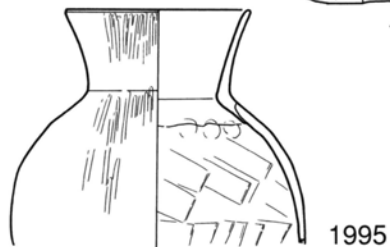
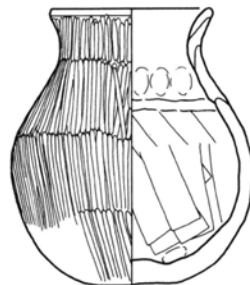
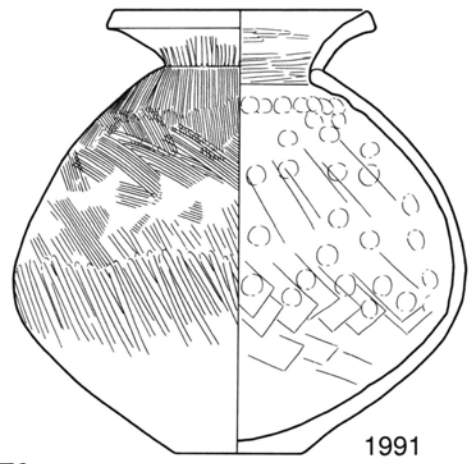
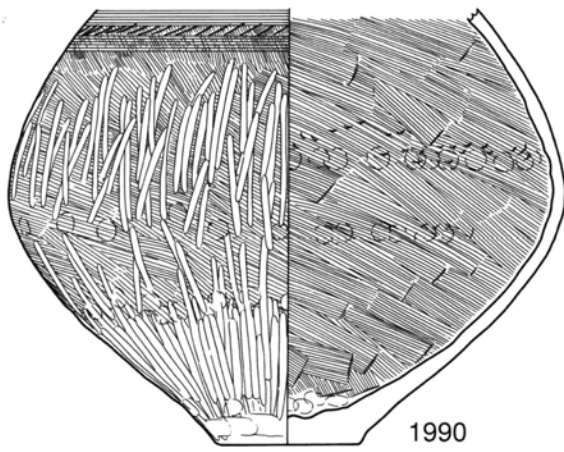
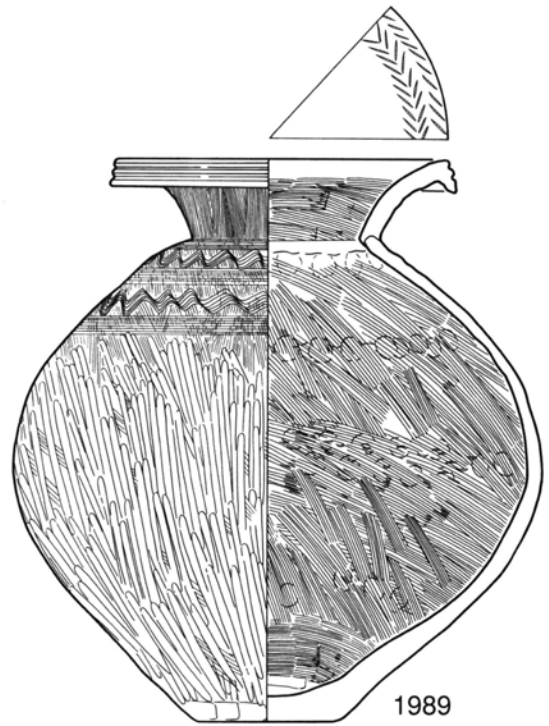
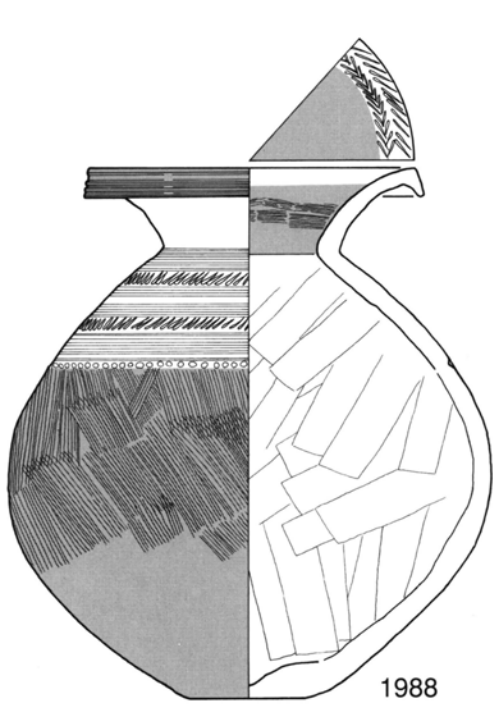


图 191 VII·VIII期遺構

(1/4)



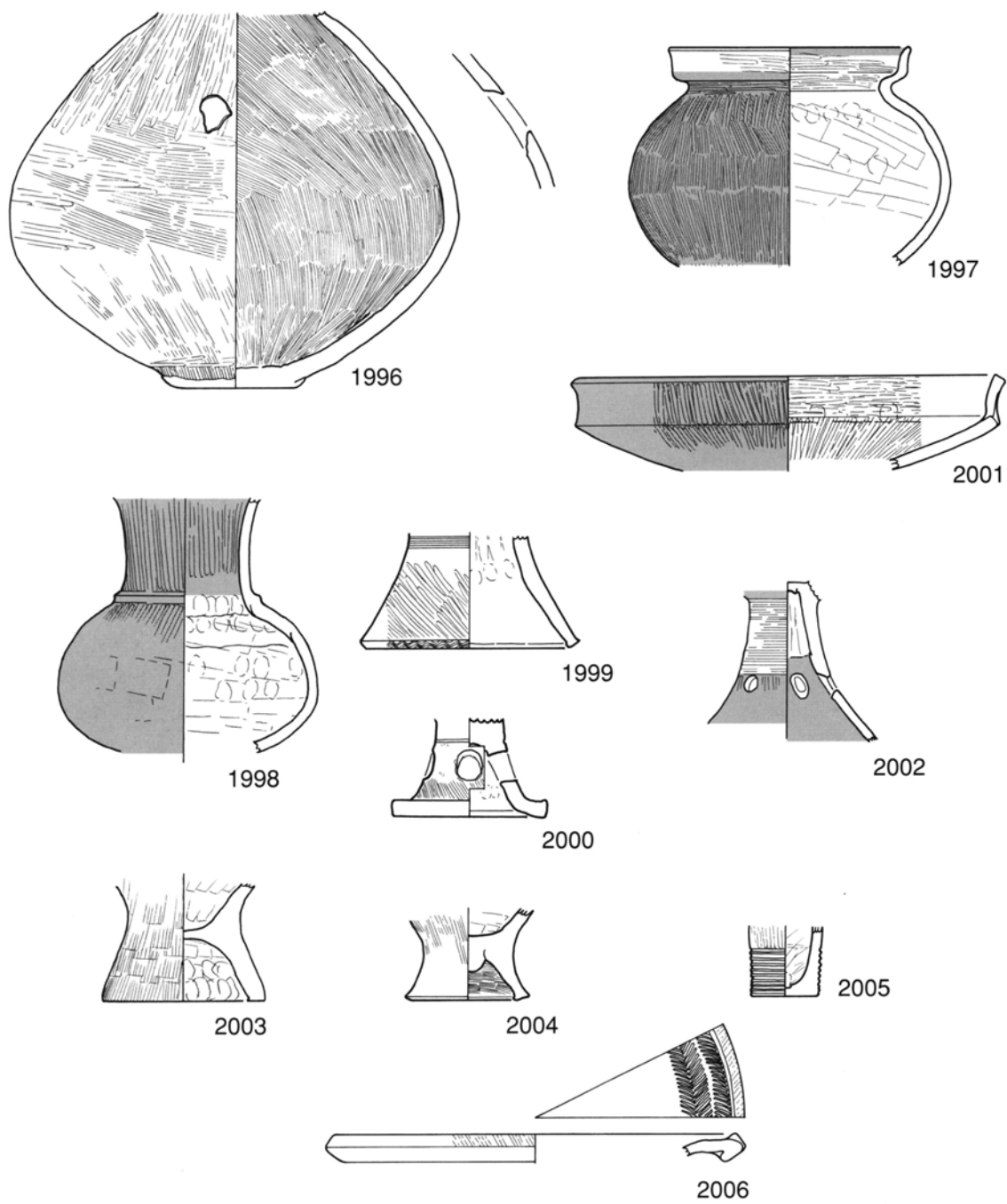


图 193 VII·VIII期包含層

(1/4)

もつ加飾太頸壺で、体部上半と内面がハケ、外面下半が下方のヘラケズリ後ヘラミガキ調整がなされる。紋様は、体部上位にクシによる横線・波状が描かれるが、最下位の横線は左廻りの最後がU字状に転回する。施紋後、同じ工具で、不規則な波状・弧状の記号がつけられる。記号の施紋方向は右廻りである。ただ、最下位の横線から縦に5cm程下に延びる直線は、横線の前につけられている。1956も1957と同様の形態をなす。調整はハケが主体となる。口縁部端面はやや内傾し、クシか棒状工具による凹線が巡る。内面には相反する扇形紋が施紋される。体部上位には、横線と簾状紋の組み合わせの紋様帯があり、その縦位の扇形紋がつく。さらにその下には、幅1cm程の原体で、横8cm、縦約3cmの逆台形を呈する赤彩が、4方向に塗布される。1958は正円形に近い体部をもつもので、頸部下に斜位のイタ刺突がなされる。

1959は直口壺の体部で、最大径にあたる屈曲部に、幅広の突帯が巡り、ヨコナデによって凹面となった部分に竹管が施紋される。外面全体に赤彩がみられる。1960は有段高坏で、立ち上がり部は短く外彎し、端面が内傾する面をなす。調整はヘラミガキで、立ち上がり部外面全体と、受部外面に10ヶの円形赤彩が施される。1961は無頸壺で、2孔×2方向に紐孔が想定され、外面と口縁部端面に赤彩がなされる。

(24) S Z 350 (図 190)

太頸壺のうち、1963・1964・1967は上位、1965・1966は上位・下位のもの接合している。

1963は大型の加飾太頸壺で、ハ字状に広がる口縁部が端部でやや垂下して内傾する面をなす。端面にはイタによる斜位刺突と、内面には扇形紋が施紋される。体部はソロバン玉状に横に張りだし、上位には横線、簾状、波状、2段の扇形紋がつけられ、下位の扇形紋の間に10方向、クシによるU字状の紋様

がある。1964は頸部からゆるやかに延びる短い口縁部と、中位に最大径があるやや縦長の体部をもつ。口縁部内面には2段の扇形紋、頸部から体部上位にかけて2段の横線、2段の扇形紋があり、その体部紋様帯の下位にクシによる、振幅の大きい、やや角張った波状が1方向のみ右廻りに描かれる。器壁は厚い。1966は八字状に広がり、垂直な端面をもつ口縁部と、横に張りだす丸い体部を有する。外内面ともイタナデ調整が主体であるが、体部外面下半には下方へのヘラケズリとヘラミガキがなされている。また内面中位にはツメ痕が残る。1967の口縁部端面、内面ともクシによる刺突がある。頸部はヘラまたは竹管による沈線。円形の丸い体部をもつ1976は、口縁部下端に粘土紐を貼ったようあ肥厚がみられる。調整はハケ主体、頸部外面のみイタナデされる。

1968～1970は椀型高坏になる。1968は椀部で、口縁端部に粘土が付加されて、外面がわずかに段をもつ。端面は外傾し、やや凹む。赤彩は口縁部端面と外面の有段部、坏下半に施され、上半に2cm程の円形赤彩が10～11ヶ塗布される。1969は脚部で、縦に6方向柱状の赤彩で分割され、3区画には3ヶ、残りの3区画には2ヶの円形赤彩がつけられ、最後に裾端部に横位に帯状赤彩が塗られる。1970の脚部は裾部端面にのみ赤彩がみられる。1971は台付壺の脚部の可能性もあるもので、裾部で横位に屈曲し接地面をもち、外傾する端面はやや丸みを帯びる。その裾端部にほぼ上方から径2mmの孔が10方向に穿たれている。また外面中位には、ヘラによる沈線が巡る。1972は台付鉢になると考えられるもので、底部内面がヨコナデによりやや凹面をなす。調整はナデ。1974は椀型高坏または鉢になるもので、口縁端部が連続するユビ押圧により波状を呈する。内外面とも調整はヘラミガキが施されている。1975は口縁部がハ字状に開く直口壺で、中位に最大径があるソロバン玉状のた体部をなす。頸部には突帯が1条巡り、

その下位にクシ横線がなされる。全体に磨減が激しく不明であるが、赤彩がなされている可能性がある。1855は逆八字状の坏部をもつ椀型高坏で、外面に2段、内面に1段の円形赤彩が巡る。円形赤彩の個数は、外面上段が、14～15ヶ、下段が8～9ヶ、内面が8ヶである。1858の急激に外反する立ち上がり部をもつ有段高坏は、水平に延びる口縁部内面と端面と受部外面に赤彩がみられる。

(25) S K 66 (図 191)

1977は有段高坏の受部と脚部になるもので、脚は柱状で中実である。1978の直口壺は体部中央に1ヶ所、約1cm程の外からの焼成後穿孔がある。1979の甕は口縁部が外に大きく外反し、端面に斜位のイタ刺突がなされる。体部は最大径が上位にあり、底部にかけて急にすぼまる。外面は縦・横位のハケ、内面は上方・斜方のヘラケズ調整される。1980は、ゆるやかに外反する口縁部と縦長の体部をもつ。口縁部は端面がヨコナデで、凹面の内傾する面をもち、下端部にイタによる縦位の刺突がなされる。調整は体部がナデで、下位にやや粗いハケがみえる。内面も同様にやや粗い横位のハケ。

(26) S D 04 (図 191)

1981の有段高坏は立ち上がり部端部が肥厚して、内傾する面を作り、そこに棒状工具による凹線がつけられる。1982は皿形高坏の脚部か。

(27) S K 67 (図 191)

1983の加飾太頸壺は、口縁端部が強いヨコナデによって上下に拡張されて垂直の面をもち、内面に細く鋭い工具による羽状の刺突がある。頸部には2条の突帯が巡り、その間に竹管刺突がなされる。体部は中位でソロバン玉状に横に張りだすもので、底部は突出する。体部上位にはクシ横線と口縁部内面に施された工具と同じものでつけられた斜位の刺突が

ある。さらに最下位の横線の下位には、1方向のみに、イタ角によってつけられた円または三～四角の刺突が13ヶある。底部外面はヘラケズリ調整。1984は直口壺で外面はヘラミガキ調整される。器壁は厚い。

(28) S K 68 (図 191)

3点とも加飾太頸壺になる。1985は大きく外に広がらない口縁部で、端部はわずかに斜下方に延びる。端面にはイタによる刺突、内面には支点が端部側にある扇形紋が描かれる。ゆるやかに屈曲する頸部外面には、簾状紋と波状紋がある。1986は頸部の屈折点が明瞭で、大きく開く口縁部をもつ。ほぼ垂直になる端面には凹線が、頸部から体部にかけては簾状、横線、波状紋が施紋される。体部内面はイタナデ。1987は頸部がゆるやかに屈曲する。口縁部はやや内傾する面をもち、イタ角による刺突がなされ、内面にはクシまたは竹管を束ねたような工具によって2段の斜位の刺突がなされる。頸部には横線があり、その下位に扇形紋がつけられる。調整は内外面ともハケが主体であるが、体部外面下半には、ヘラケズリの痕跡が伺える。

(29) S D 03 (図 192)

1988・1989とも頸部で明瞭に屈曲し、逆八字状に延びて端部が斜下方に垂下して内傾する面をなすもので、端面には棒状工具による凹線が巡る。1988は口縁部内面にイタによる3段の羽状刺突、体部外面上位に横線、イタ刺突、棒状工具による円形刺突がなされる。調整は外面がハケ、内面がイタナデが施され、口縁端面と内面、体部外面の紋様帯以外に赤彩がみられる。1989は口縁部施紋に関しては1988と同様であるが、体部紋様が横線よ波状紋の組み合わせになる。また外面調整もヘラミガキとなる。1990も上記の壺と同様のもので、横線と斜位のイタ刺突が組み合わせられる。体部外面の調整はハケ後ヘラミ

ガキ。内面はハケ調整。1991も頸部の屈折点が明瞭なもので体部に比して、口縁部が短く外反する。

1993～1995は直口壺で、各々外面はヘラミガキ調整で丁寧に仕上げられるが、1993は体部に比して口縁部が長い、1994は短い、1995はその中間というように形態が異なっている。また体部も、1993は最大径が上位にあって底部にかけてすぼまり、底部がやや突出するもので、1994は縦長の丸い体部をもち、体部が平らになり、1995の体部は円形を呈している。

(30) 包含層出土 (図 193)

1996～2006は遺構外出土のものである。

1996はやや下膨れの体部で、底部が突出する。外面はハケ後ヘラミガキ、内面がハケ調整される。体部やや上位には、焼成後外から開けられた、 2×1.6 cmの不定形な穿孔がある。1997はやや外反する有段口縁をもつ鉢で、口縁部には横位のヘラミガキ、体部外面にはハケ後縦いのヘラミガキ、内面はイタナデ調整される。口縁部内面端と外面下端～体部にかけて赤彩がなされる。1999は脚としたが、口縁部の可能性をもつものである。八字状に、わずかに外反しながら裾部に至るもので、端面がやや肥厚して外傾する面をもつ。外面には波状紋が描かれ、脚部中位には横線がある。外面は斜位のヘラミガキ調整、内面は絞り痕があり、ナデ調整される。2000は高坏脚部になるもので、裾部が強く屈曲し、垂直な面をもつ。脚部は低く、それに比して、4方向に開く透し孔は大きめである。透し孔上には不定な太い沈線が1条巡る。筒状の形態をなす2005は、この時期になるか不明なものである。外面下端には、やや太い9条のヘラ沈線が巡り、その上位はヘラミガキ調整されている。2006は壺口縁部端で、ほぼ水平に延び、上・下・外に拡張して、断面が三角形を呈する。内面には3段のイタ刺突が、やや不明瞭であるが外面の端面上部にもイタ刺突が施される。外面にはわずかにススが付着する。

7. IX期 (図194)

廻間期に属するものである。

2007の高坏は口縁部端が、ヨコナデによりわずかに内彎して上外方に延びる。坏身は深い。調整はヘラミガキがなされる。2009の高坏脚は、柱状の脚部とやや内彎して広がる裾部をもつもので、裾部に透し孔がある。外面はヘラミガキ後横位のイタナデが施される。2010は壺底部で、突出部分の外面と内面上端に、砂粒を多く含む橙白色の粘土帯が廻る。2012は小型の鉢になり、底部が小さく上げ底になる。2013~2017の直口壺外面にはヘラミガキ調整が

なされる。2018の鉢は頸部があまり締まらず、口縁部端が内彎しながら外反するもので、ヘラミガキ調整される。2019は受口状口縁甕で、口縁部端面が水平となり、外面には斜位のイタ刺突がなされる。2020・2021はS字状口縁甕で、2020の口縁部外面にはクシ刺突がなされ、2021の台部は端面が折り返され、外面は粗いハケが施される。

2013・2019が廻間I期前半に、2009はIII期に、他は概ねI期後半に属すると考えられる。

8. X期 (図195・196)

松河戸期・宇田期に属するものである。

2022~2038は土師器になる。

2022は口縁部がく字状に延び、最大径が上位にあつて縦長の体部をなし、ハ字状に開き内面に折り返しをもつ台部をもつ。口縁部は内面に横位ハケ後

ヨコナデがなされ、内面がわずかに凹面となる。体部は、外面が下位から頸部にかけてハケ調整され、内面はイタナデか。2023も同様の形態をなすと思われるが、体部は2022に比べてやや丸い。口縁部端面はヨコナデによりやや凹面をなす。内面はイタナデ、

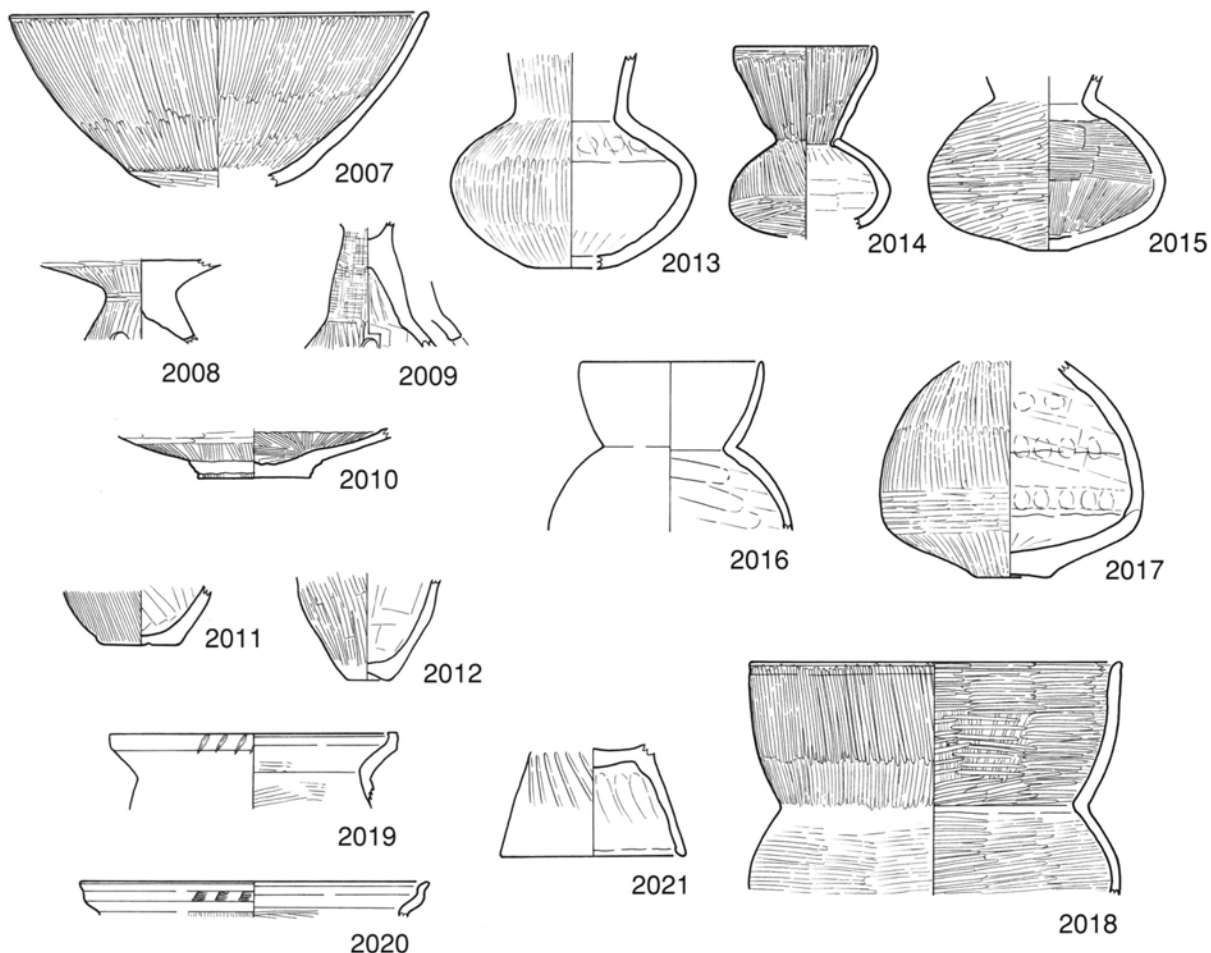


図194 IX期

(1/4)

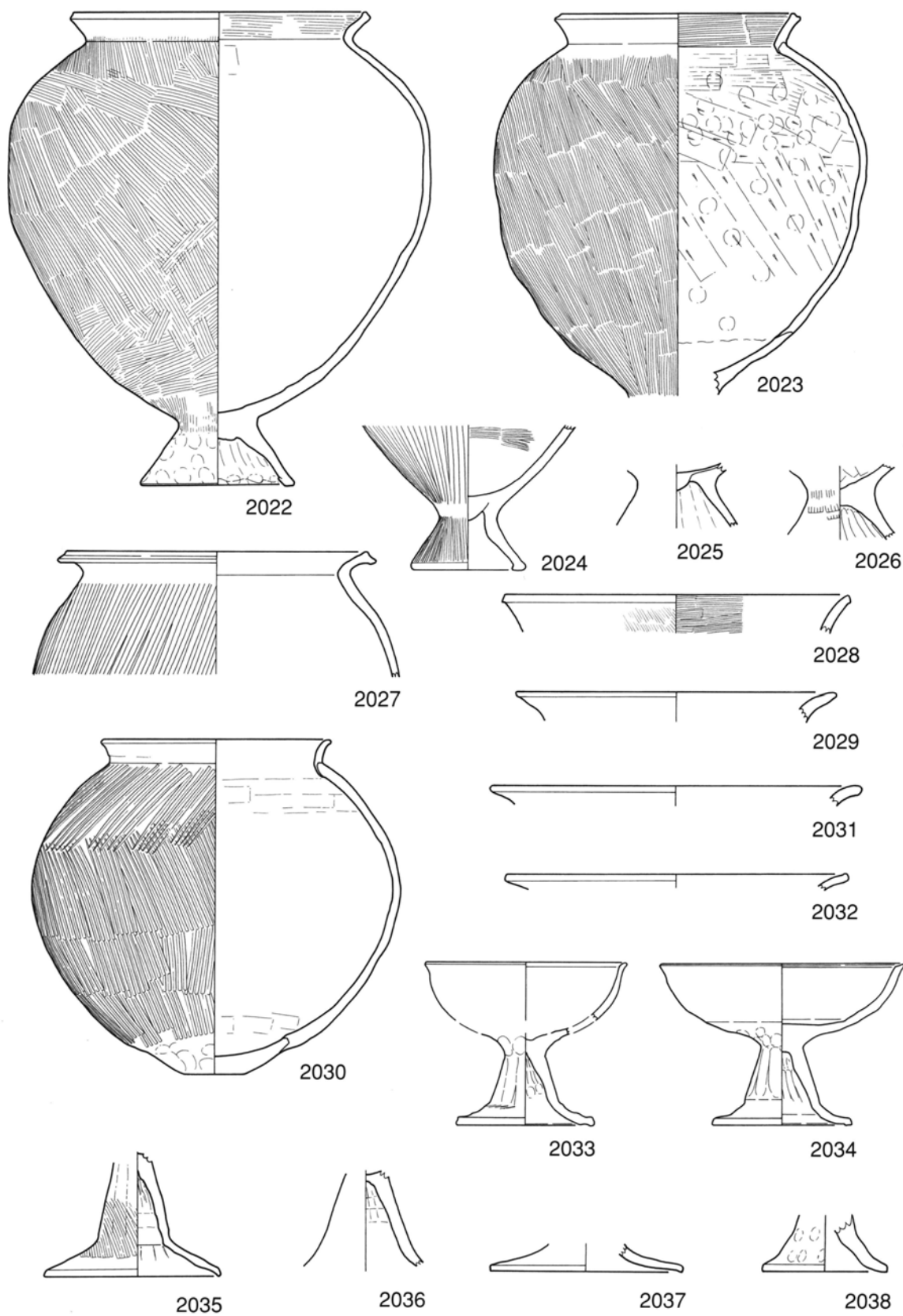


图 195 X 期 (1)

(1/4)

またケズリ状の効果をもつイタナデが施される。2024は体部下位と台部で、台部端面は接地面で横に肥厚する。調整は体部が粗いハケ、台部は細かいハケがなされる。2027は宇田型甕になるもので、口縁部端面下端がヨコナデにより拡張される。外面は粗いハケ。2028は口縁部が上方にやや外反して短く延びるもので、端面は丸い。ヨコナデ調整される。体部は球形をなし、底部は平底になる。外面は粗いクシ状工具によって下位からなされ、上位のみ羽状になされる。内面はイタナデか。

2033・2034は同様の形態をなす高坏である。坏部は端面が上外方に延び、脚部はやや内彎して八字状に広がり、裾部端下端がわずかに拡張する。

2039～2051は須恵質のものになる。

2039は逆八字状に広がる甕口縁部で、端部外面が

肥厚して段をなす。頸部外面にはタタキ成形・調整される。2040の甕体部で、外面にはタタキ成形・調整される。内面はイタナデ調整。2041の坏蓋は天井部がやや平坦となり、上半がヘラケズリ調整される。口縁部はやや内彎して延び、端部内面が凹面をなす。2043の坏身の受部はほぼ水平に横に短く延び、立ち上がり端部は丸い。2044は下半がヘラケズリ成形・調整される。2048は瓦泉の口縁部か。

これらの遺物の時期としては、土師器に不明なものが多いが、概ね5世紀後半～6世紀前葉になると思われる。

その他

奈良時代～平安時代前葉の蓋・坏（2052～2055）が出土している。

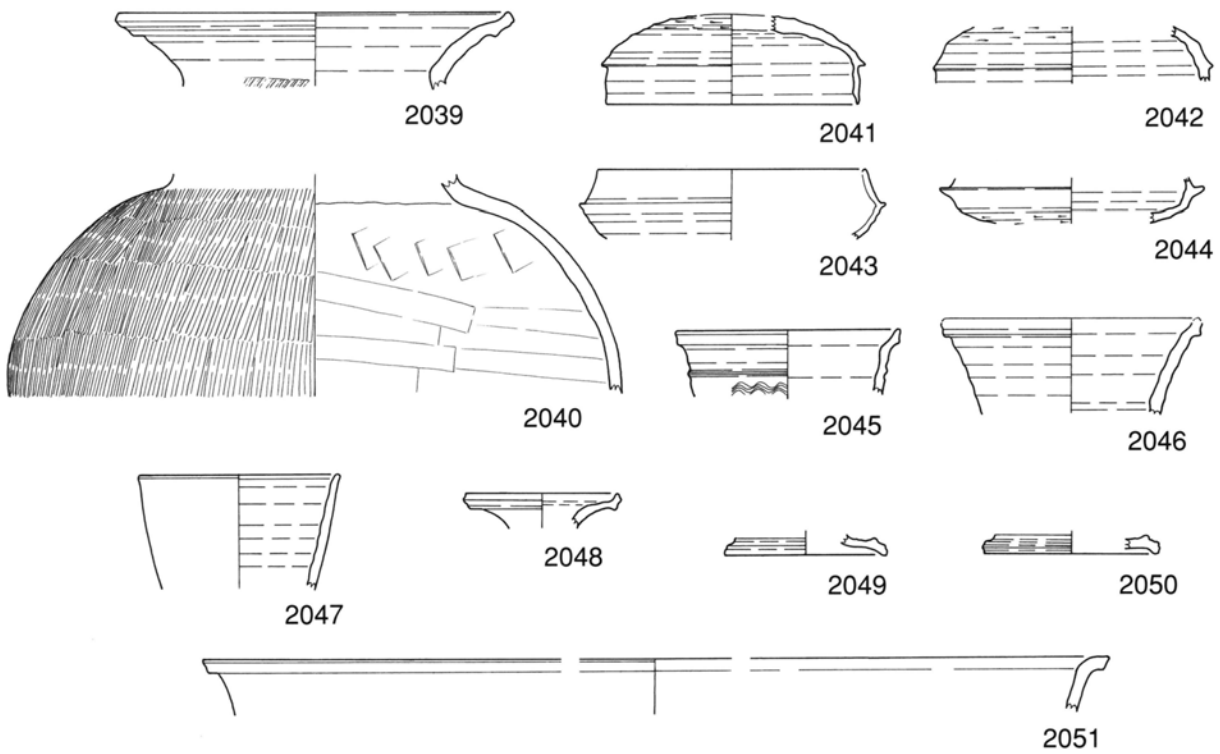


図 196 X 期 (2)

(1/4)



図 197 その他の資料

(1/4)

9. 内傾口縁土器・厚口鉢 (図198)

内傾口縁土器と厚口鉢の形態差で示すことは非常に難しい。ただし、実測図を並べて比較検討すると以下の視点で識別可能になる。

(1) 口縁部の傾き。口縁部の傾きで示せば、水平に屈曲するものを厚口鉢とすると、傾きが水平にならないものが内傾口縁土器。

(2) 口縁部から稜線(胴部)までの長さ。直線距離で半径の1/2以上あるものを内傾口縁土器、1/2以下のものを厚口鉢。

(3) 口縁部が極端に肥大化するものを厚口鉢。

さらに、内傾口縁土器には口縁外面をナデで仕上げる(ナデ系)ものと二枚貝腹縁で仕上げる(条痕系)と2者認められる。

(4) その他、共通点としては、外面に被熱を帯びること、胴部が薄手で残存しない点があげられる。

2056～2059はナデ系の内傾口縁土器。ただし、2059は烏帽子遺跡に類例が多い、口縁内面に接面を残し、口縁端部が内傾する深鉢の可能性がある。2060～2062は条痕系の内傾口縁土器。型式変化の序列からすれば、古から新となる。2063～2068は厚口鉢。口縁部の肥大化傾向が新しい要素とみると、番号順の組列で新しくなる。2067・2068は胴部が厚手となる珍しい資料。2067は内面に赤彩が付き、あるいは赤色顔料の容器の可能性もある。

10. 沈線紋系土器 (図199・200)

沈線紋系土器の定義については、永井1995に準拠する。今回の資料の特徴としては、従来通り、壺・深鉢・鉢・無頸壺といった器種の豊富さもあげられるが、2097の条痕紋系土器に転化(変換)した資料も確認できたことが特筆できる。2097の類例は、野口北出遺跡* (北條2000・図版第24-1)がある。

2070～2076・2078は概ねEあるいはFタイプの

口縁部。2077・2079はGタイプの口縁部。2080～2085は概ねEあるいはFタイプの胴部。2086はGタイプの頸部。2087・2088はEタイプの胴部。2089は深鉢形で口縁部に山形突起を持たないもの。2090・2091・2095・2096は鉢。ただし、2047は口縁部が山形突起となる。2092～2094はEタイプ。2097は前記した条痕紋系土器に転化した壺。

* 北條献示編 2000『野口・北出遺跡発掘調査報告書』稲沢市内遺跡発掘調査委員会

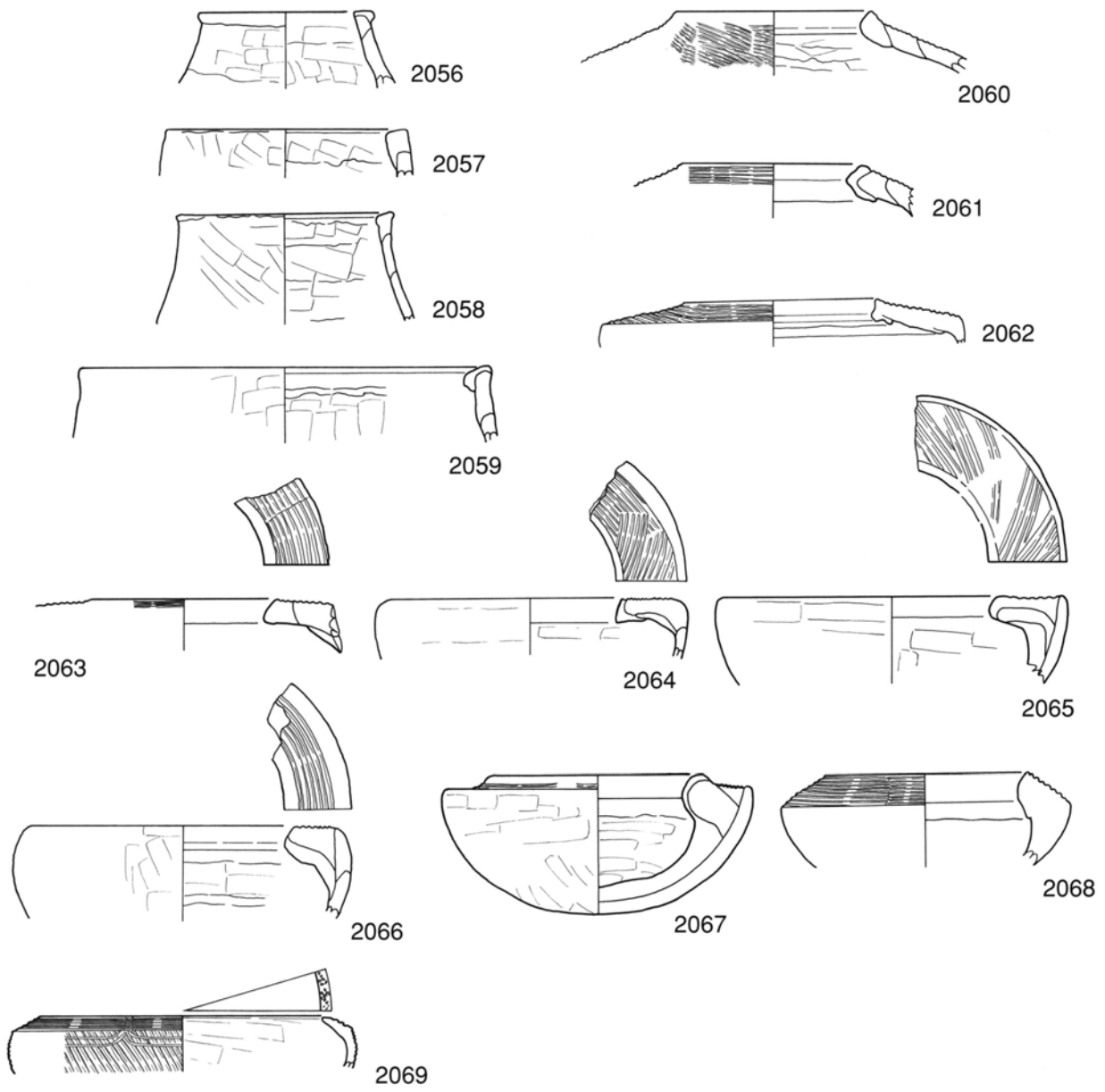


図 198 内傾口縁土器・厚口鉢

(1/4)

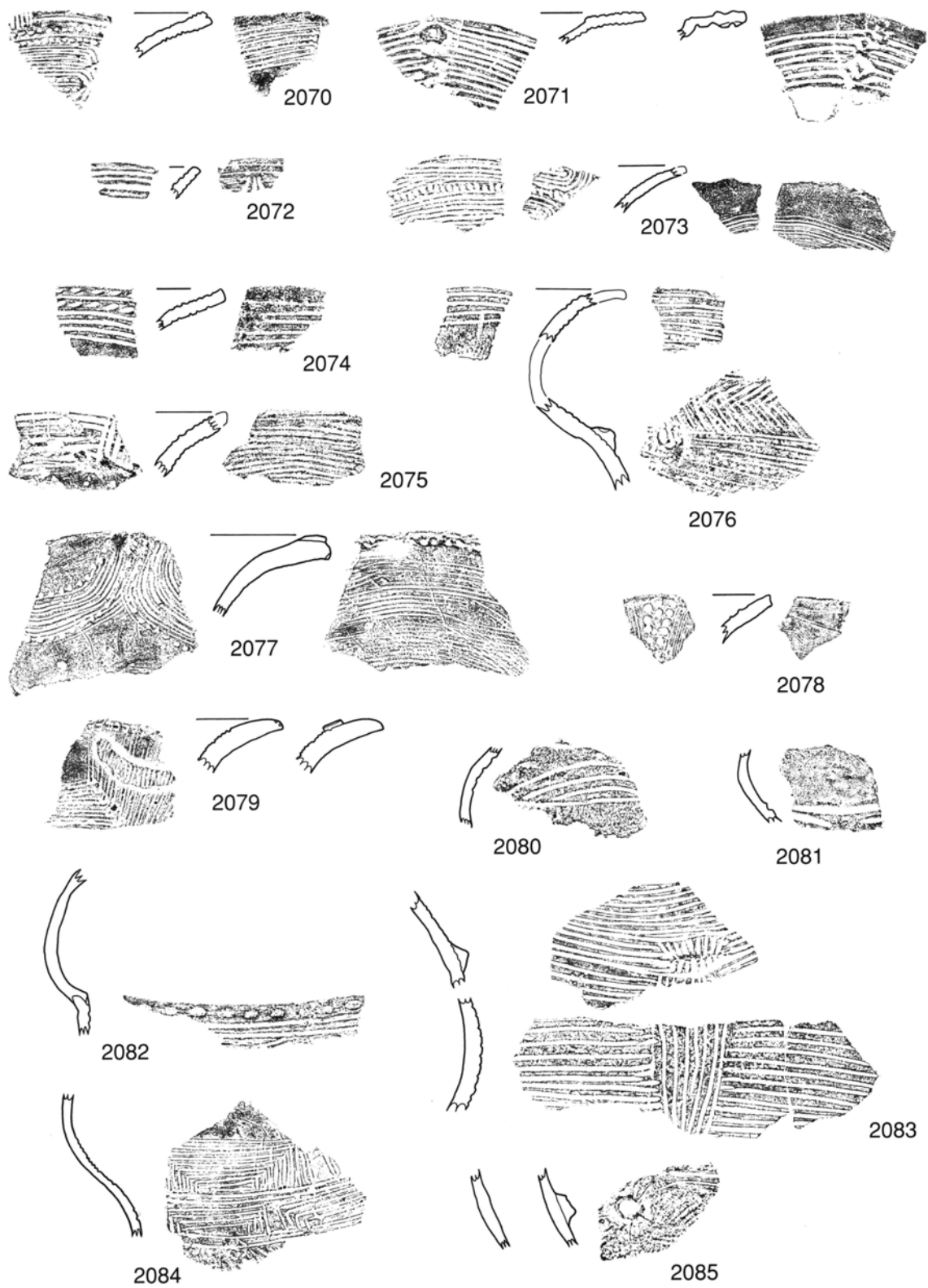


图 199 沈線紋系土器 (1)

(1/3)

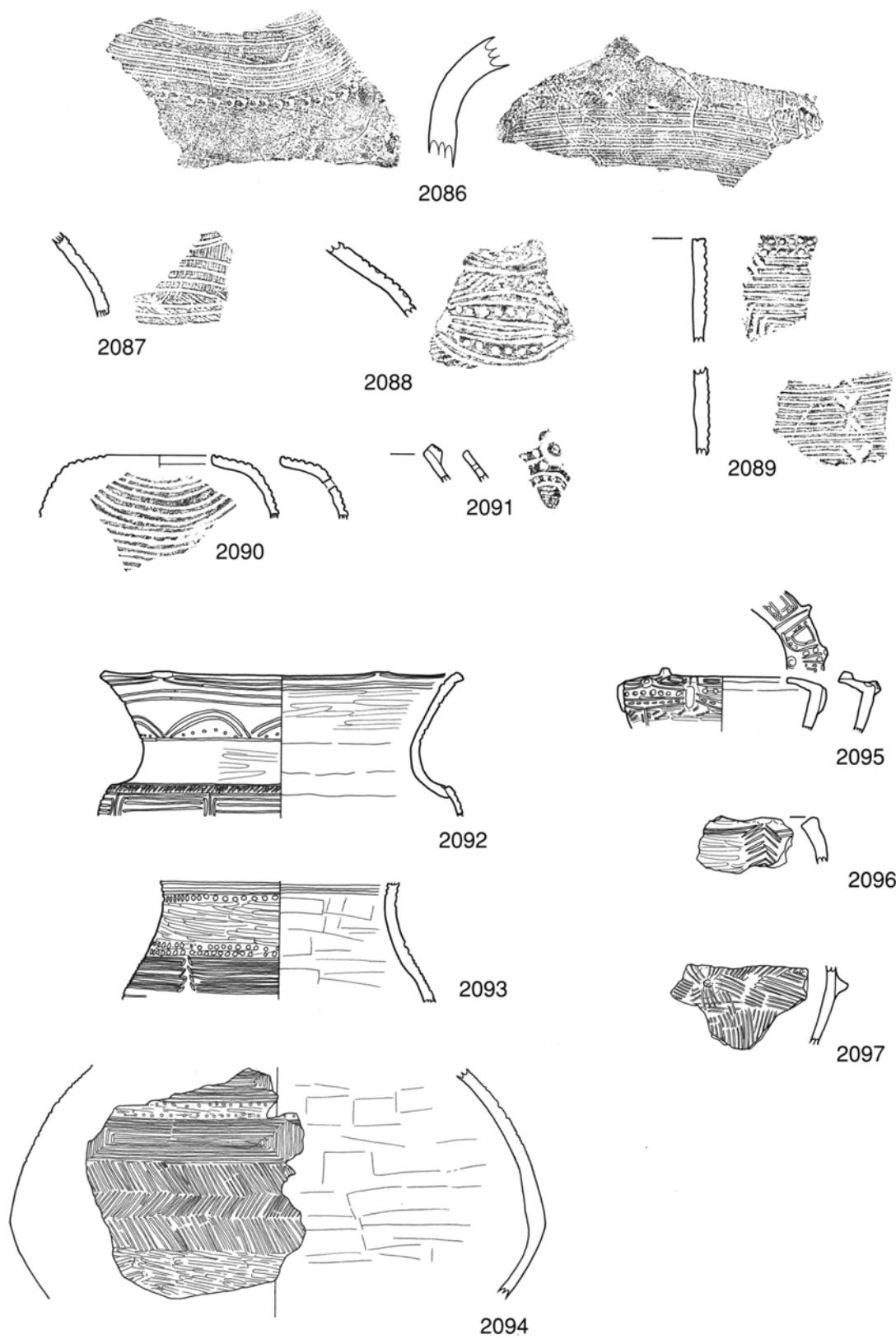


図 200 沈線紋系土器 (2)

(拓本は 1/3、他は 1/4)

11. IV・V期の遺物 (図201～204)

2098は口縁部が緩く湾曲して受口状をなす。頸部外面には刻み突帯が貼り付けられている。口縁部外面には沈線が波状に施され、口縁上端側に二枚貝背面圧痕が充填されている。

2099は口縁部外面と端部に櫛状工具によって刺突紋が加えられている。

2100は長頸壺の頸部で、沈線による複合鋸歯紋、二枚貝による直線紋が施されている。横位の沈線は最後に巡らされる。

2101は受口状というよりは袋状を呈する口縁部で、横位の刻み突帯に口縁端部から縦位の突帯を垂下させている。縦位の区画された内部には二又工具で平行線紋が加えられている。平行線紋は下辺は1条だが、上・左右は3条施され、重方形紋とコ字重ね紋の中間のようである。

2102は二又工具を原体にして直線紋、刺突紋、斜格子紋が施されている。

2103は二又工具による斜格子紋の下部に同一工具で区画された中に二枚貝背面圧痕が充填されている。

2101～2103、そして2098は同一個体ではないが同一系譜にあるものと考えられる。朝日遺跡Ⅱ期後半からⅢ期に属す資料である。

2104は逆ハ字状に開く口縁部の外面に太い沈線で右下がりの短線と左上がりの長線が施されている。すでに受口状口縁ではないが、紋様構成はその名残であろう。

2105は強く屈曲する受口状口縁で刺突紋と複合鋸歯紋が鋭い沈線で施されている。

2106は端部が短く立ち上がる口縁部をもち、外面に波状紋が施されている。頸部は上位に刻み突帯、その下には太い沈線で有軸の羽状紋が施されている。

2107は壺の体部上半で、沈線間に無軸の羽状紋、研磨帯が施されている。

2108は壺の頸部付近で斜格子紋と研磨帯が施され

ている。

2109は壺の体部上半で、横位の沈線間に縦位の短線、斜格子紋が施されている。縦位の短線は二枚貝刺突紋の省略であろうか。

2110は長頸壺の頸部下位で、無軸の羽状紋、3条1単位の沈線帯が施されている。3条1単位の沈線帯は縄文と組み合う例が普通であるが、本例は研磨帯となっている。

以上は朝日遺跡Ⅳ期に属す。

2111は受口状口縁壺か無頸壺の口縁部片である。横位2条と縦位多条の沈線紋による区画紋を構成し、二枚貝背面圧痕を加えている。

2112は壺の頸部から体部へ移行する部分で、横位の沈線に半円を組み合わせ縦位の沈線を加えている。2111・2112は三河地方の瓜郷式で、朝日遺跡Ⅳ期に属す。

2113～2122は二枚貝刺突連弧紋壺の変化系列を配置した。2113は頸部片で、隆起帯部分に斜走沈線を3段向きを違えて施している。構成はやや乱れているが、これは後の斜格子紋につながるのであろうか。その下は二枚貝刺突帯と研磨帯の交互配置である。

体部は2114・2115のように研磨帯を挟む多重連弧紋間にさらに多重連弧紋を充填して青海波紋風な紋様が構成されている。

2117は刺突紋が櫛状工具で施されている。模倣品であろうか。

2119は連弧紋が単純化して二枚貝刺突も欠落している。

2120～2122は多重連弧紋が研磨帯を脱落させたもので、2120は二枚貝刺突も省略されている。しかし、上端には二枚貝刺突が認められるので、変化は体部紋様を中心にしたものといえよう。

以上は朝日遺跡Ⅴ期に属す。

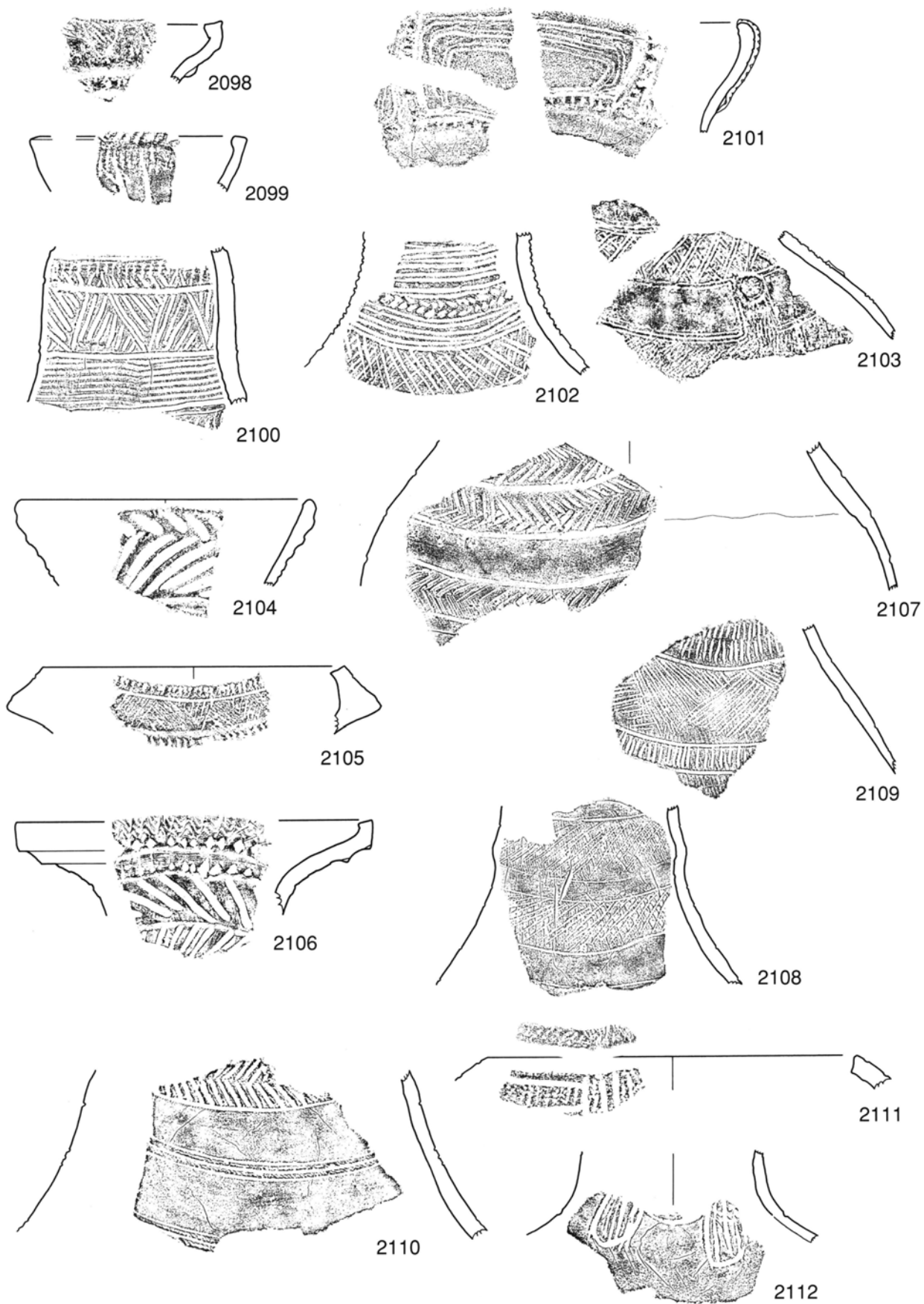


図 201 IV・V期の遺物(1)

(1/4)

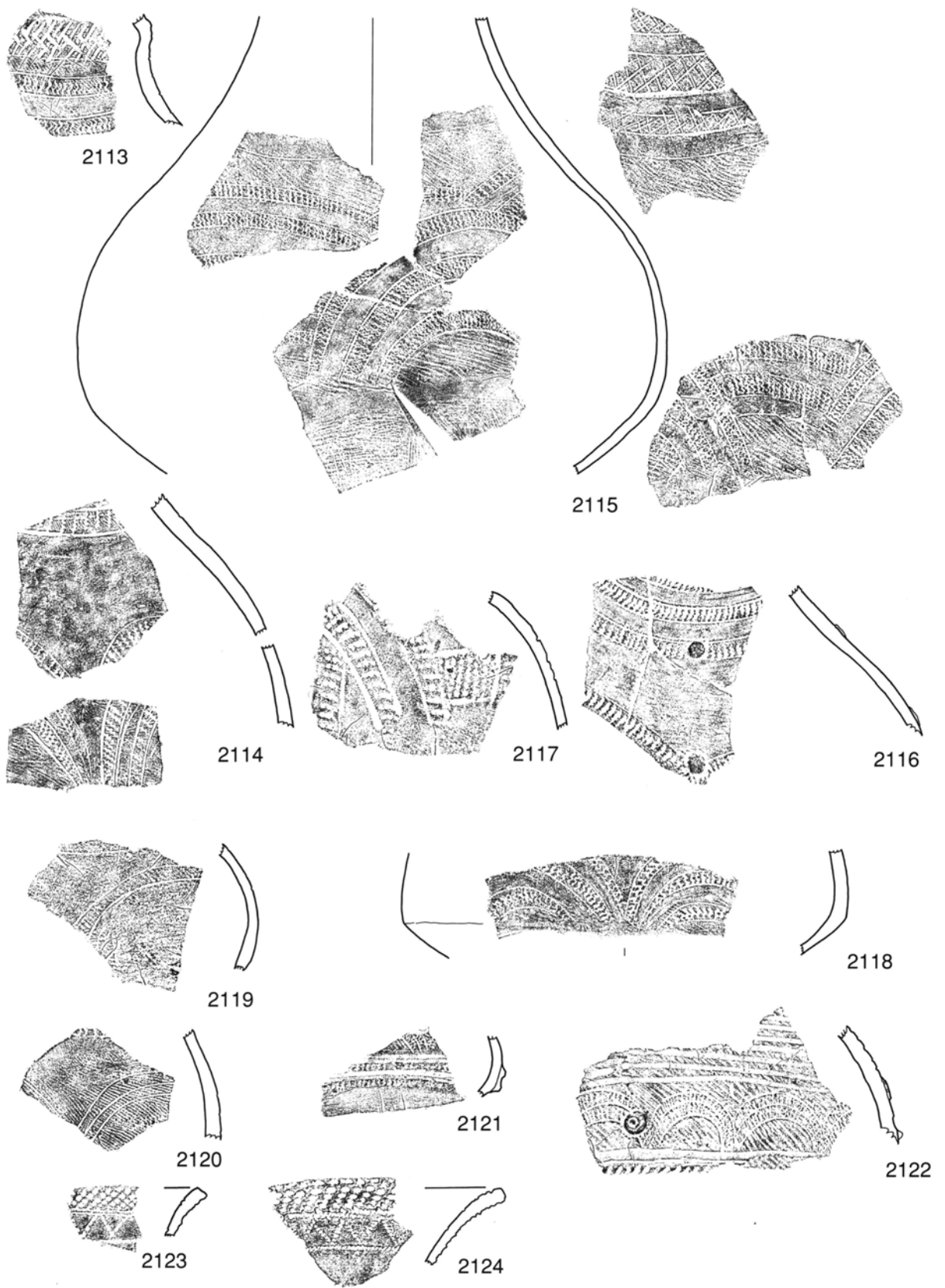


図 202 IV・V期の遺物(2)

(1/3)

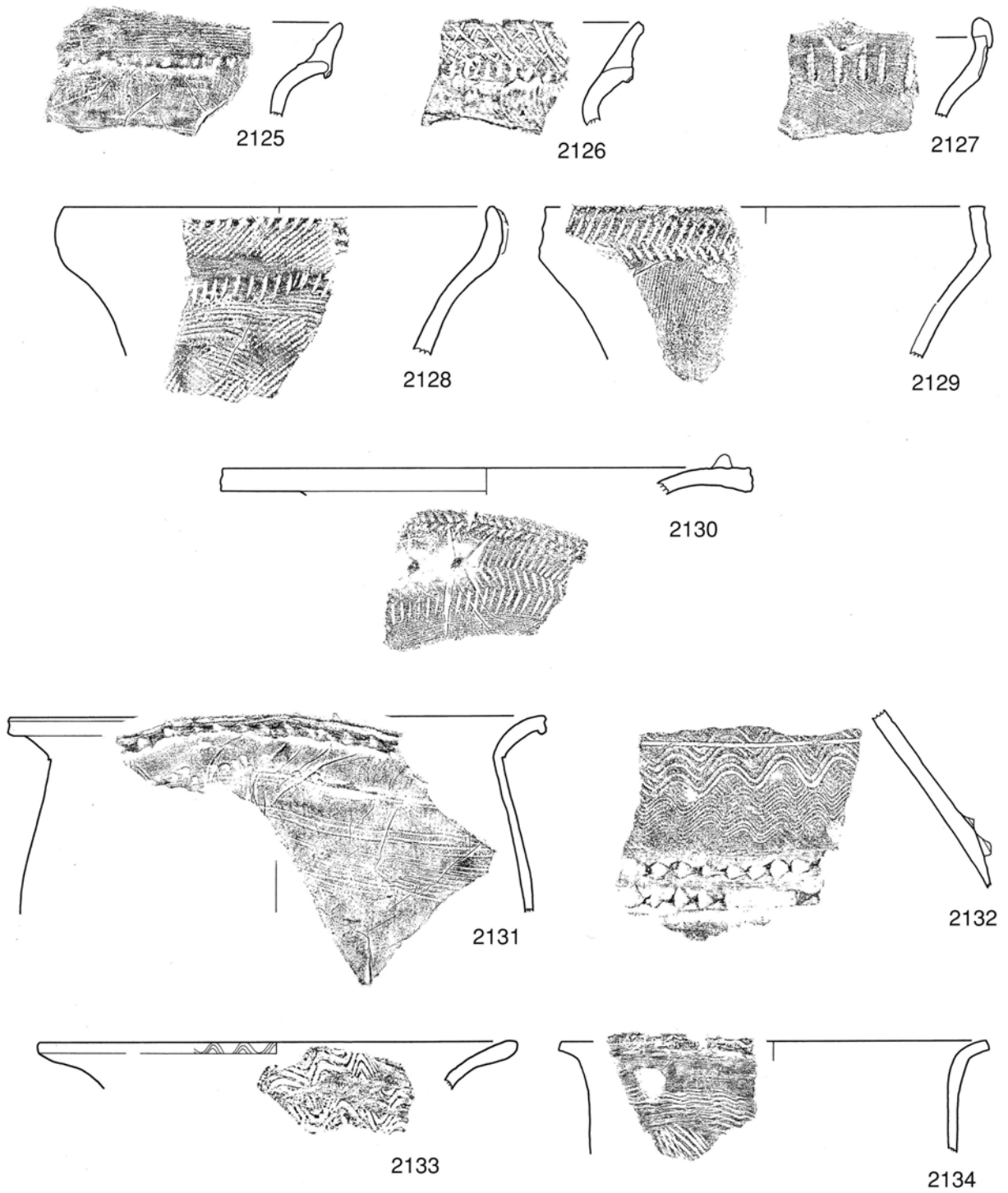


図 203 IV・V期の遺物 (3)

(1/3)

2122は上位に研磨線が施され、本来の紋様構成からは大きく逸脱している。本例は朝日遺跡V期末に位置づけられ、次段階のVI期には二枚貝刺突のみの単純連弧紋に移行する

2123・2124は櫛条痕深鉢の口縁部片で、内面に櫛状工具により通常の斜位列に加え、連続横位と鋸歯紋が施されている。木曾川中流域産であろう。朝日遺跡IV期に属す。

2125～2127は伊勢湾西岸部系と考えられるもので、朝日遺跡IV期～V期に属す。ハケメ工具による施紋が特徴的である。

2125・2126は有段波状口縁甕である。2126は口縁部外面に沈線で斜格子紋が施されている。2127・2129は受口状口縁壺で外面にハケメ工具で刺突紋が施されている。

2130は年代決定がいささか難しいが、朝日遺跡V期で、VI期には下らないであろう。口縁端部には羽状気味の刺突紋、口縁部内面には向きを違えて3段のハケメ刺突紋が施されている。

2128は縄文施紋の受口状口縁壺で、口縁部上端と屈曲部にハケメ刻み、棒状浮紋が施されている。

2131は体部上半にハケメ直線紋が施された甕で、口縁部下端は垂下して刻み突帯のようである。

2132はハケメ工具による波状紋が2帯施された壺の体部片である。付加紋として沈線直線、沈線弧紋が加えられるのが通例で、この手のものはまず搬入品である。

2133・2134は朝日遺跡II期～III期に属すと考えられる甕で、2133は口縁端部と内面に波状紋、2134は体部外面上位に波状紋が施されている。2134はハケメ工具、2133は二枚貝である。

2135は矢作川流域産のような胎土である。口縁部はわずかに受口状を呈する。紋様は沈線主体で構成されているが、構図はかなり乱れている。朝日遺跡IV期に属す。

2136・2137は長頸壺。2136は口縁部から頸部にかけての部分で、隆起帯も認められる。ハケメ調整が優勢で、朝日遺跡V期に属すであろう。

2137は2条1単位の沈線帯を区画帯として、二枚貝刺突紋帯、斜格子紋帯、研磨帯が配置されている。隆起帯もわずかにうかがえる。

2138・2139は伊勢湾西岸部系で、朝日遺跡V期前半以前に属すであろう。2138は受口状口縁の外面にハケメ工具で複線鋸歯紋が施されている。2139は有段波状口縁甕である。

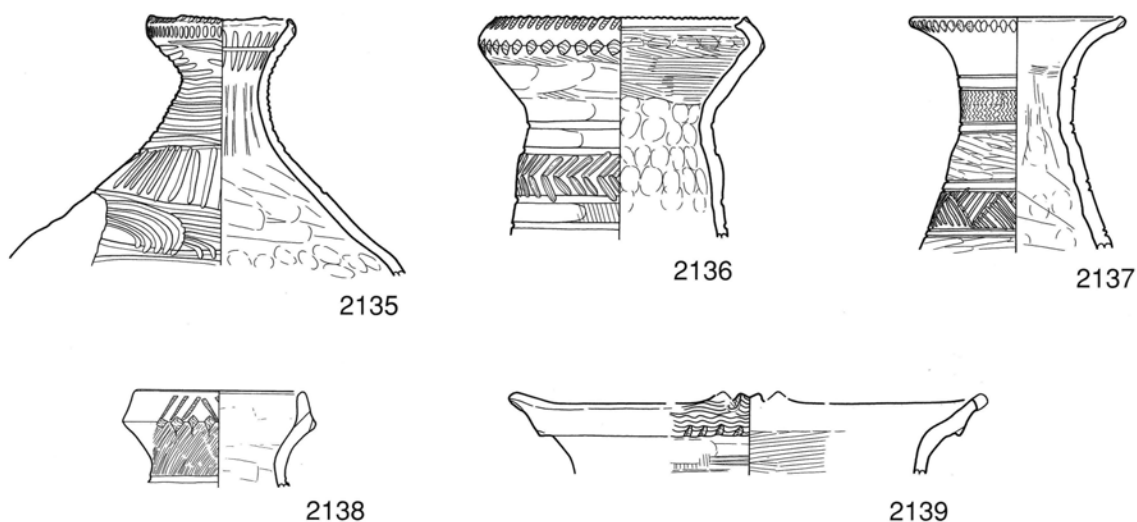


図204 IV・V期の遺物(4)

(1/4)

12. その他の土製品

(1) ミニチュア土器 (図 205)

2140～2160は遺構外から出土したミニチュア土器である。

2141は横に張りだす体部上半に縦位の波状紋、その下位のくびれ部には横線、下位にはクシ刺突が施される。2143は口縁部かと思われるが、端部外面には鋭く細い工具による刺突と、外面にはヘラによる縦位の波状紋が7方向になされる。2144は底部または蓋天井部と考えられるもので、3条の横沈線が引かれた後、左より3条・4条・5条の順で縦沈線が、3方向に施される。2145は棒状工具で内面を作り出したもので、2146は底部まで貫通する。2149は底部に焼成前の穿孔が開けられるもので、外面はヘラミガキがなされる。蓋の可能性もある。2150はVI期の台付鉢のミニチュアで、6方向に透し孔がある。2153は柱状で中実の脚部で、裾部で開く。2154には2孔×2方向の紐孔が開けられる。2155は平面形がやや楕円形をなし、口縁部がユビ押圧により片口状に外反する。調整はヘラミガキ。2156の口縁部端には鋭く細い工具で刺突される。2157は全体にユビ押圧で成形・調整されており、ひび割れがみられる。

(2) 特殊土器・土製品 (図 206～209)

2161～2165は銅鐸型土製品である。2161は円錐形の工具に粘土を巻き付けてユビ押圧で成形され、ナデ調整されたもので、鈕と身の一部が欠損している。成形後、身の上下から押さえられたようで変形がみられる。身中央部には、小石が弾け跳んだような痕跡が残る。2164も2161と同様の作り方をされており、鈕部が欠損する。内面は巻き付けられた工具形そのまま、下方への抜き痕も確認できる。2162は身の上部にあたると考えられ、縦位のやや不規則な波状紋が描かれている。ナデ調整され、胎土には

シャモットを多く含む。2163も身の上部片で、鈕と鱗が欠損している。身外面にはヘラにより横線と山形または斜格子紋が描かれている。また下端の破面には、形持たせ孔になるとと思われる、焼成前の穿孔がある。調整はナデ。2165は身と鱗の片面になる。身はナデ、鱗はユビ押圧成形・調整されている。身外面には、身と鱗の境に縦位の不安定なヘラ縦線、身には7条のヘラ横線が描かれる。

2166は被熱した土製品で、破損後に側面が研磨され砂粒が表面に多く露出している。上面はナデ調整されて強く被熱する。下面はハケ調整され、凹面、方形の凹み面があり、上面に比べて被熱は弱い。また上面には砂粒が付着する。両面ともわずかに凹面となる。

2167は鳥型土製品で、ユビ押圧による成形後丁寧なナデ調整されている。成形時に粘土は底部より立ち上げられたようで、背部分に接合痕が残り、尾部にも孔が開く。

2168～2171は筒型土製品になる。2168の口縁部と2169の底部は同一個体になるとと思われるもので、ハケ後ヘラミガキがなされ、貝による刺突帯が巡る。2170も同様なもので、平行なヘラ沈線後その間に貝刺突が施される。2171の底部は無飾で、ナデ調整されている。

2172は円錐形の上部が欠損したような形態をしているもので、台形の断面形を呈する。底部中央には、中位まで開けられた焼成前穿孔が開けられる。全体にヘラミガキ調整。2173は断面が楕円形状になる環状土製品で、外面はヨコナデにより凹面となる。外面には一部赤彩が認められ、全面に塗布されている可能性がある。2174・2175は土錐状のもので、棒状工具に粘土が巻き付けられて成形される。2174はユビ押圧のみで調整され、工具抜き後変形している。2175はナデ調整されるもので、土製の白玉になる

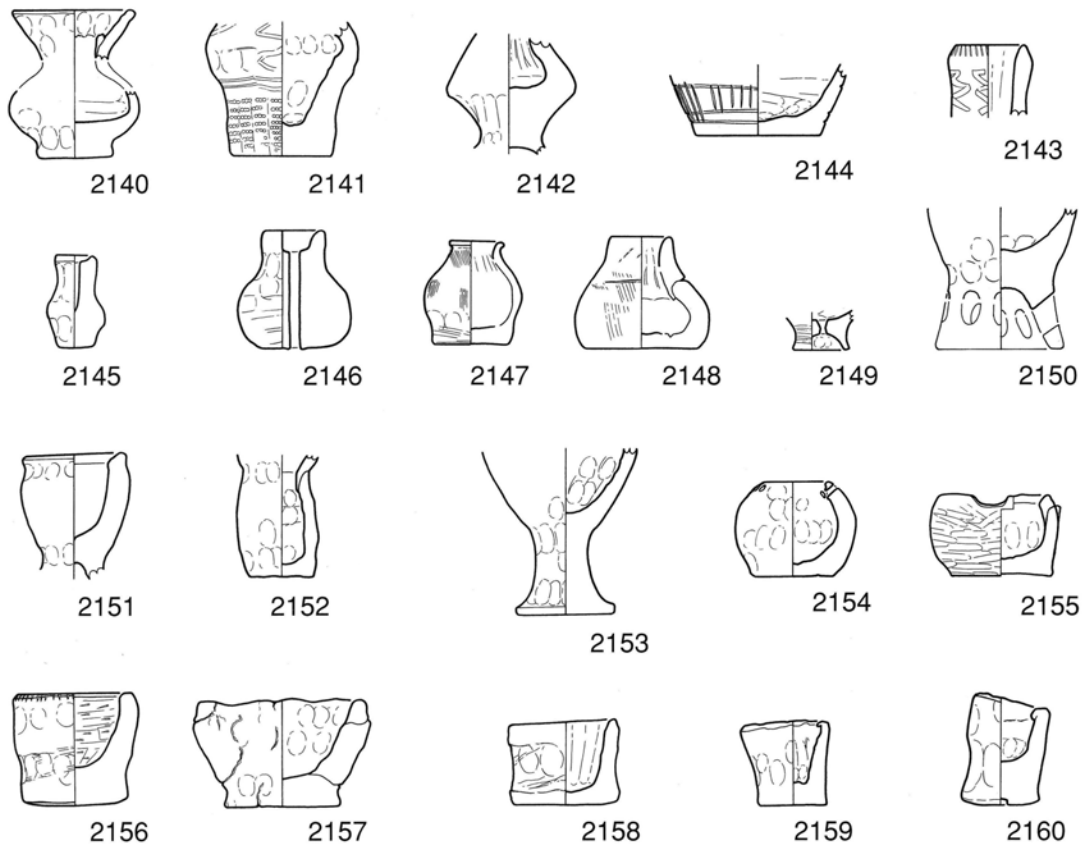


図 205 ミニチュア土器

(1/3)

か。

2176は口縁部端に突出する形で付くと考えられるもので、中世の土坑S K 15から出土するが、胎土からみて弥生時代のもものと判断した。正面形は逆三画形を呈し、上位に浅い沈線、縦位に深い沈線が施され、縦沈線の上端には径1.3cmの小石が側面を前に縦位に埋め込まれている。上面形も三角形をなし、横位の沈線がみられる。調整は全体にナデ。女性器を象ったものか。2177はV～VI期に属するS Z 352・353の東溝の上位から出土している。把手状に付着すると思われ、先端が手のひら状に広がり、内側に折れる。全体にヘラミガキ調整される。2178は平面形がやや楕円形を呈するもので、遺存部の現状では、片側に把手状のものが付く。外面はハケ後ナデ、内

面はヘラケズリ調整。また底部内面には白色の粘土が付着する。十能状もの、または鳥形土製品になるかと考えられる。

2179～2182・2186～2188は把手になると思われる。2179～2182・2186は弧状に彎曲する環状把手で、2187・2188は短く折れる。2187はIV～V期のS D 18から出土する。2183は直線的な柱状を呈するもので、ハケ後ヘラミガキ調整され、赤彩が施される。2184はユビ押圧で作られた棒状の土製品。2185も把手になる可能性があるが、上面形が三角形を呈し、上面には縦位の沈線がある。

2189は円盤状を呈する土製品で、中央に焼成前穿孔がある。全体にナデ調整され、側面には焼成後に、彫られたように付けられた太い沈線が巡る。出土は

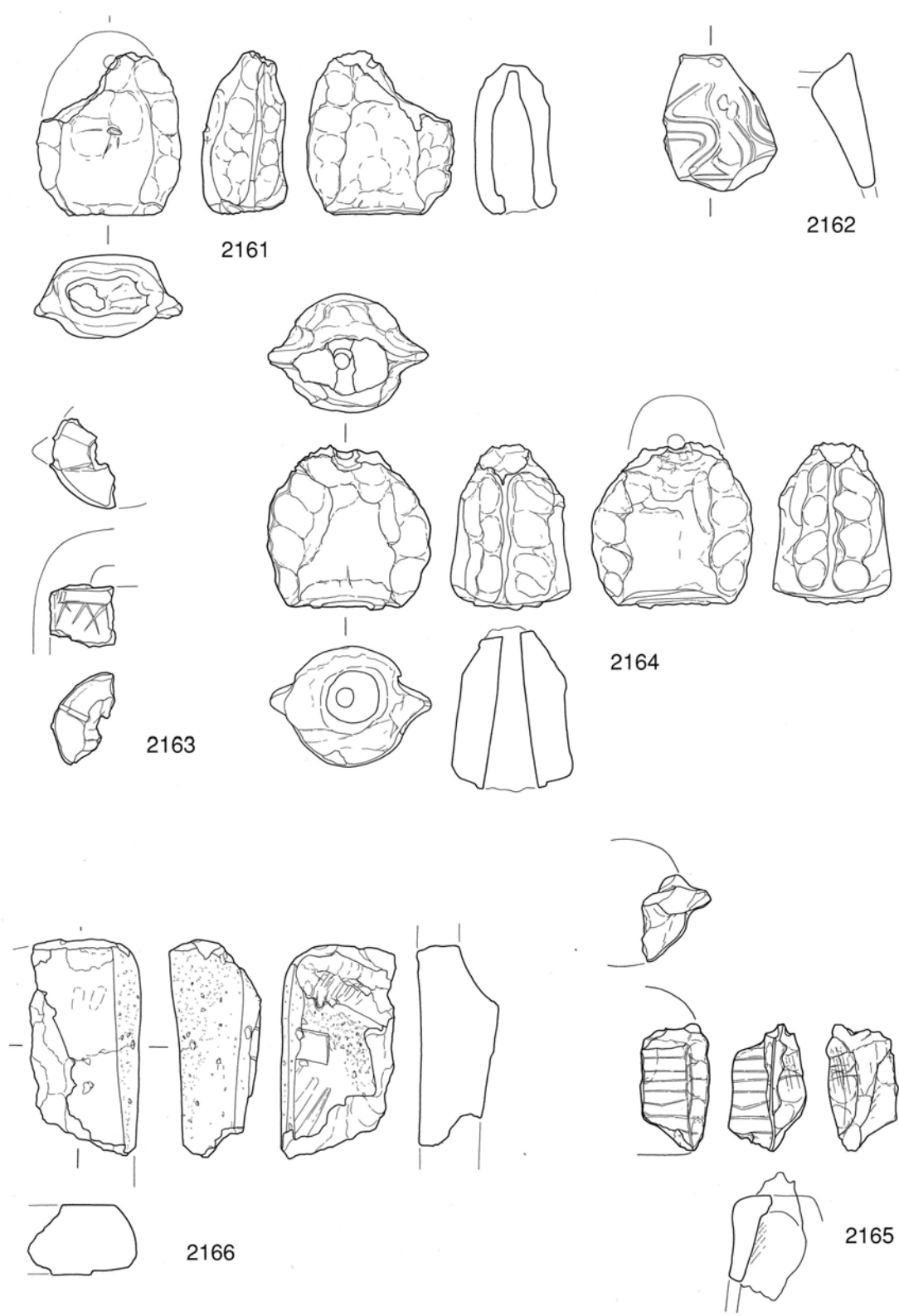


图 206 特殊土器・土製品 (1)

(1/2)

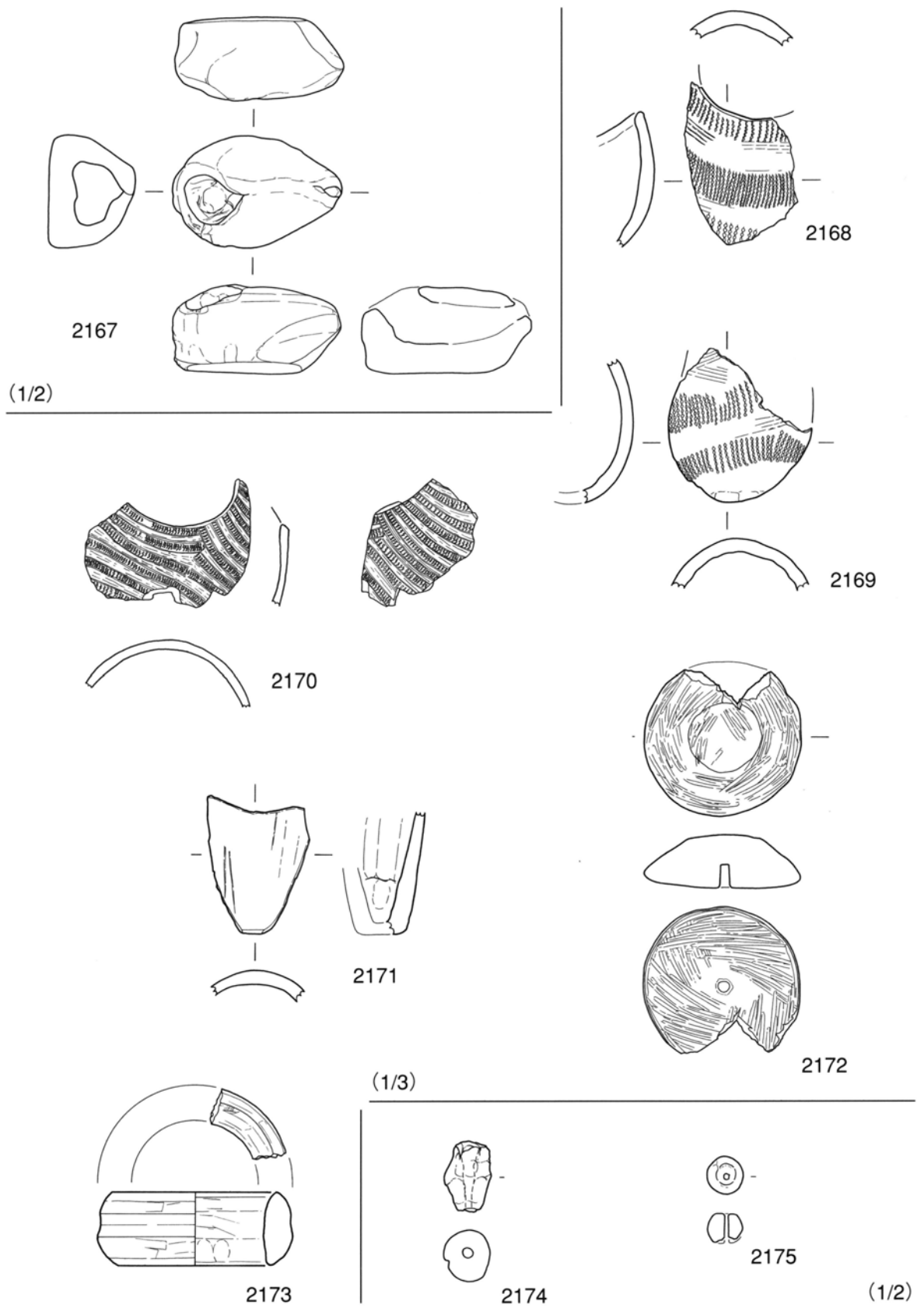
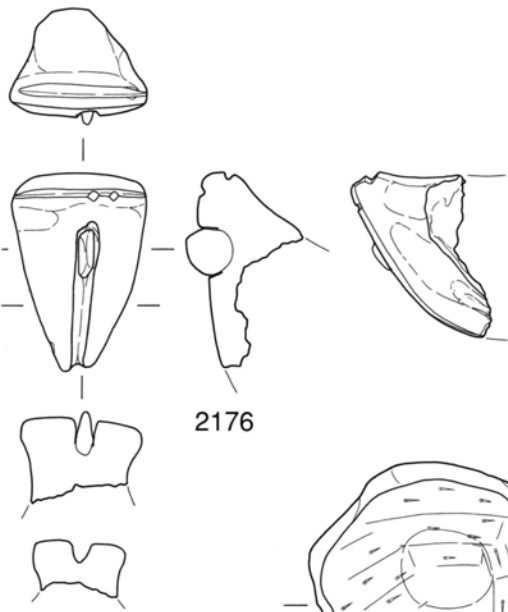
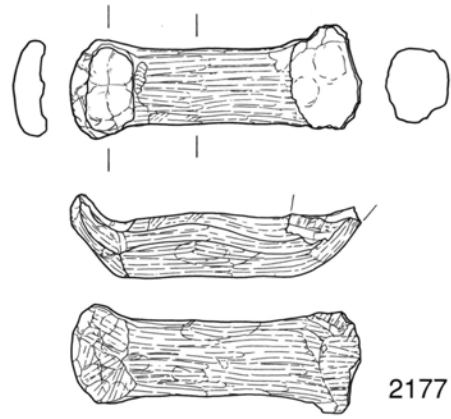


図 207 特殊土器・土製品 (2)

(2167・274・275 は 1/2、他は 1/3)

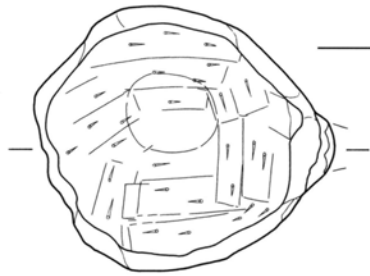


2176



2177

(1/3)



2179



2178

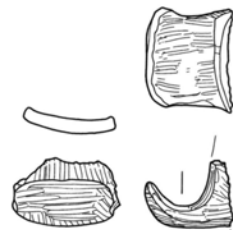
(1/2)



2180



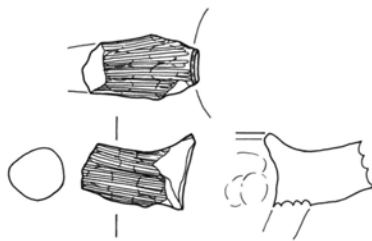
2181



2187



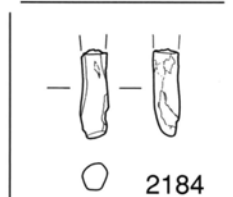
2183



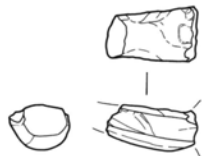
2182



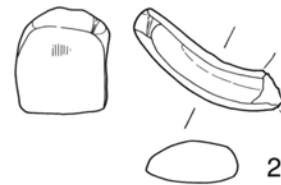
2185



2184



2186



2188

(1/3)

(1/2)

図 208 特殊土器・土製品 (3)

(2176・2178・2184は1/2、他は1/3)

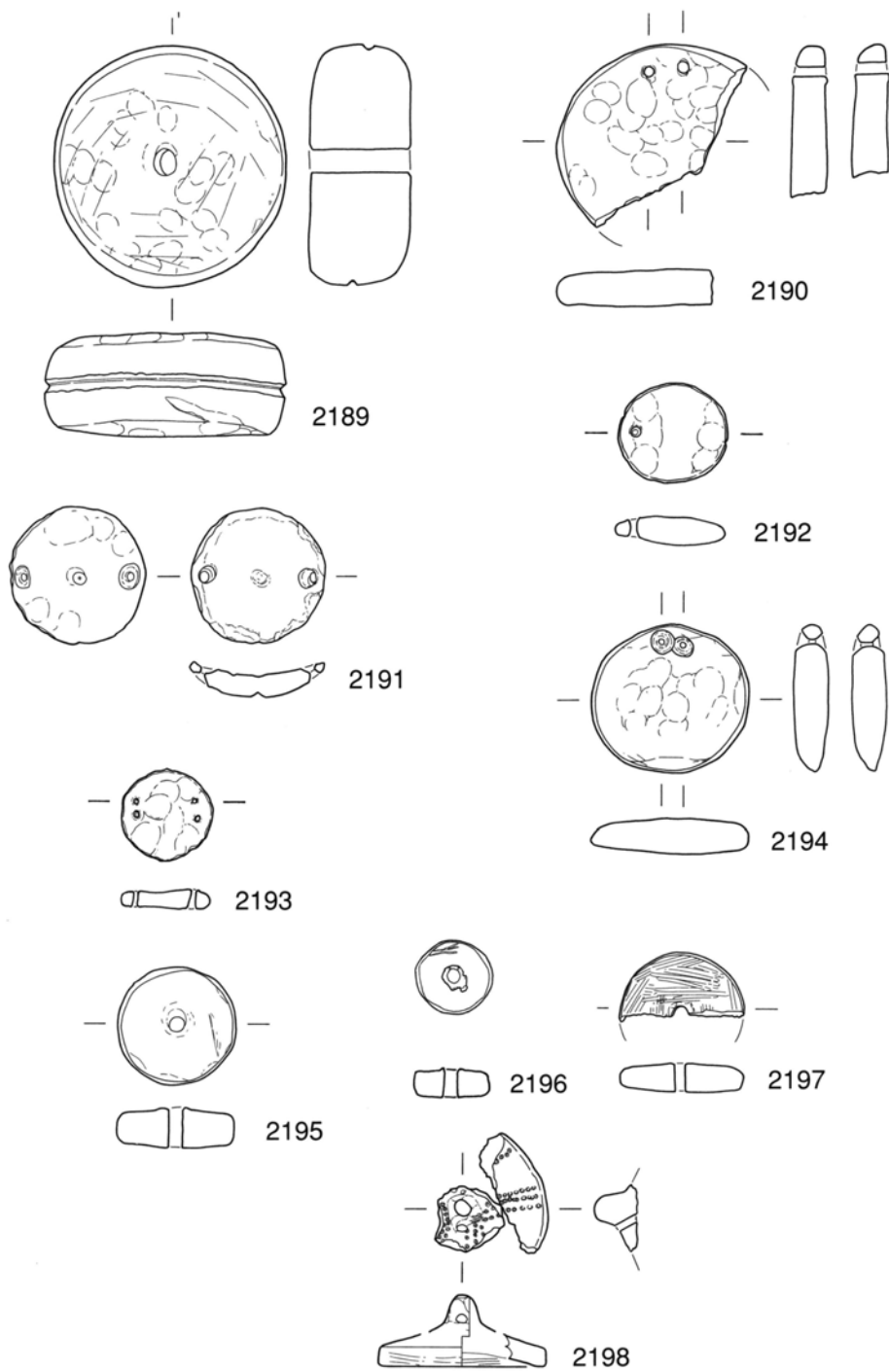


图 209 特殊土器・土製品

(1/3)

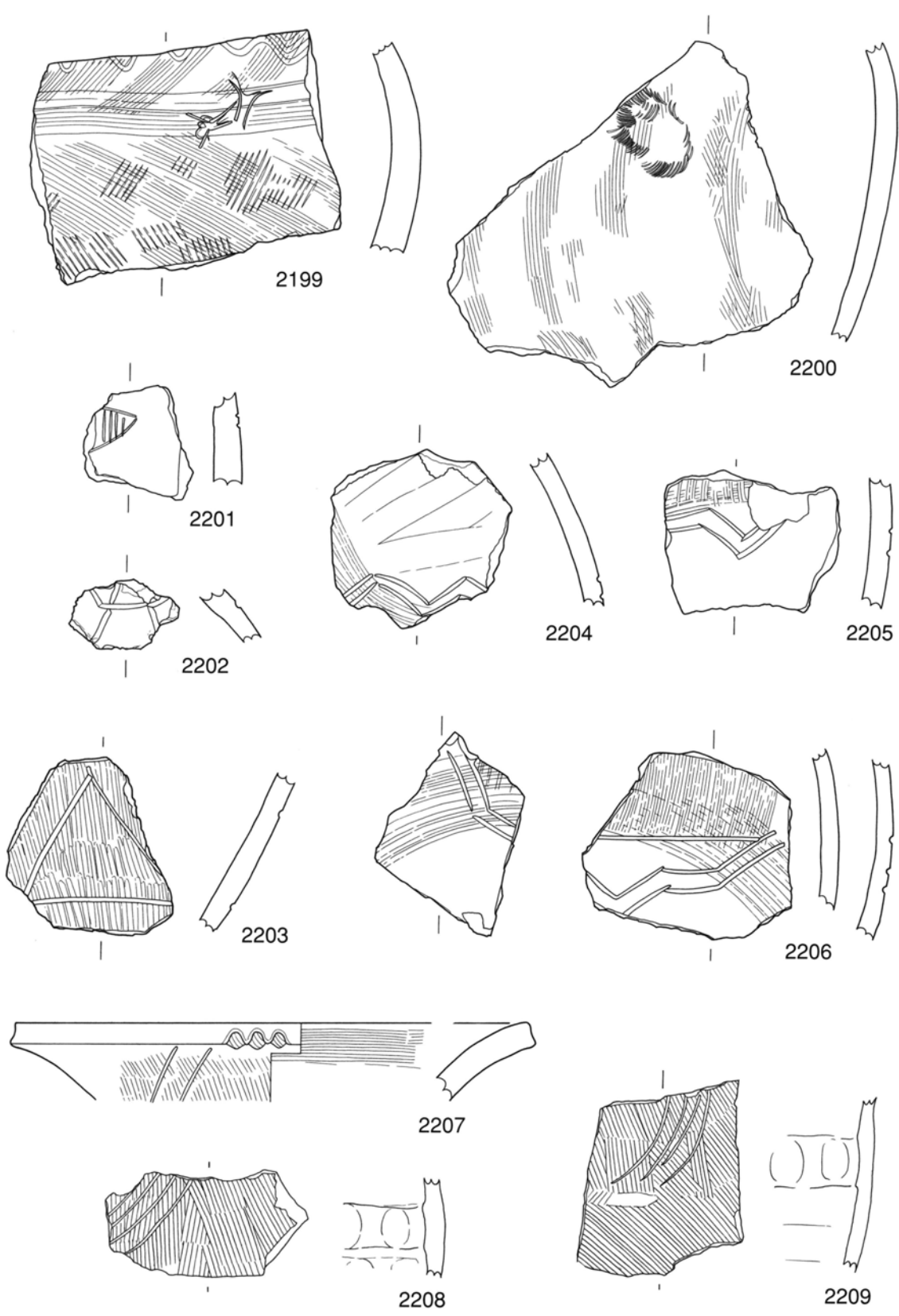
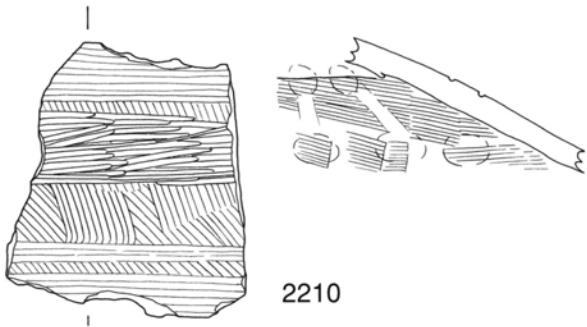
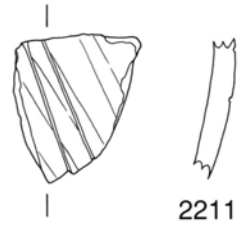


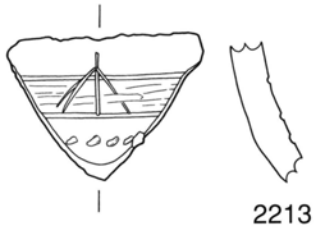
図210 絵画・記号(1)



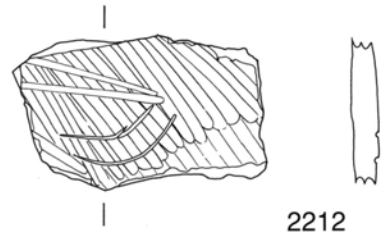
2210



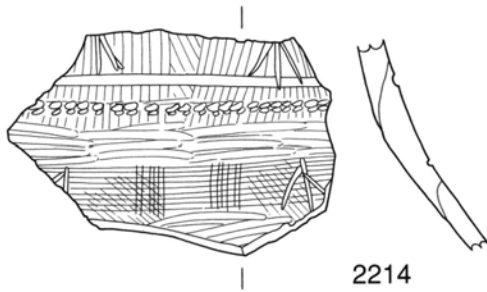
2211



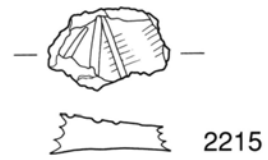
2213



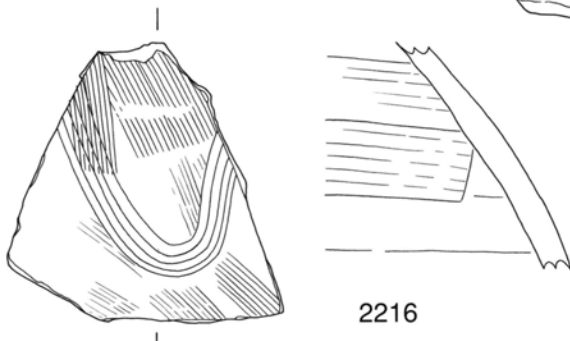
2212



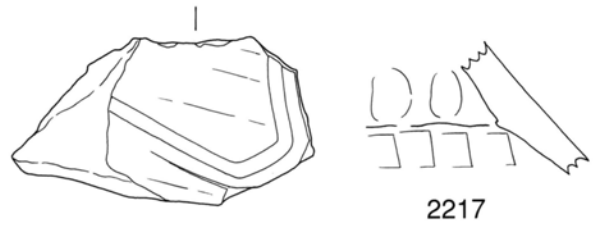
2214



2215



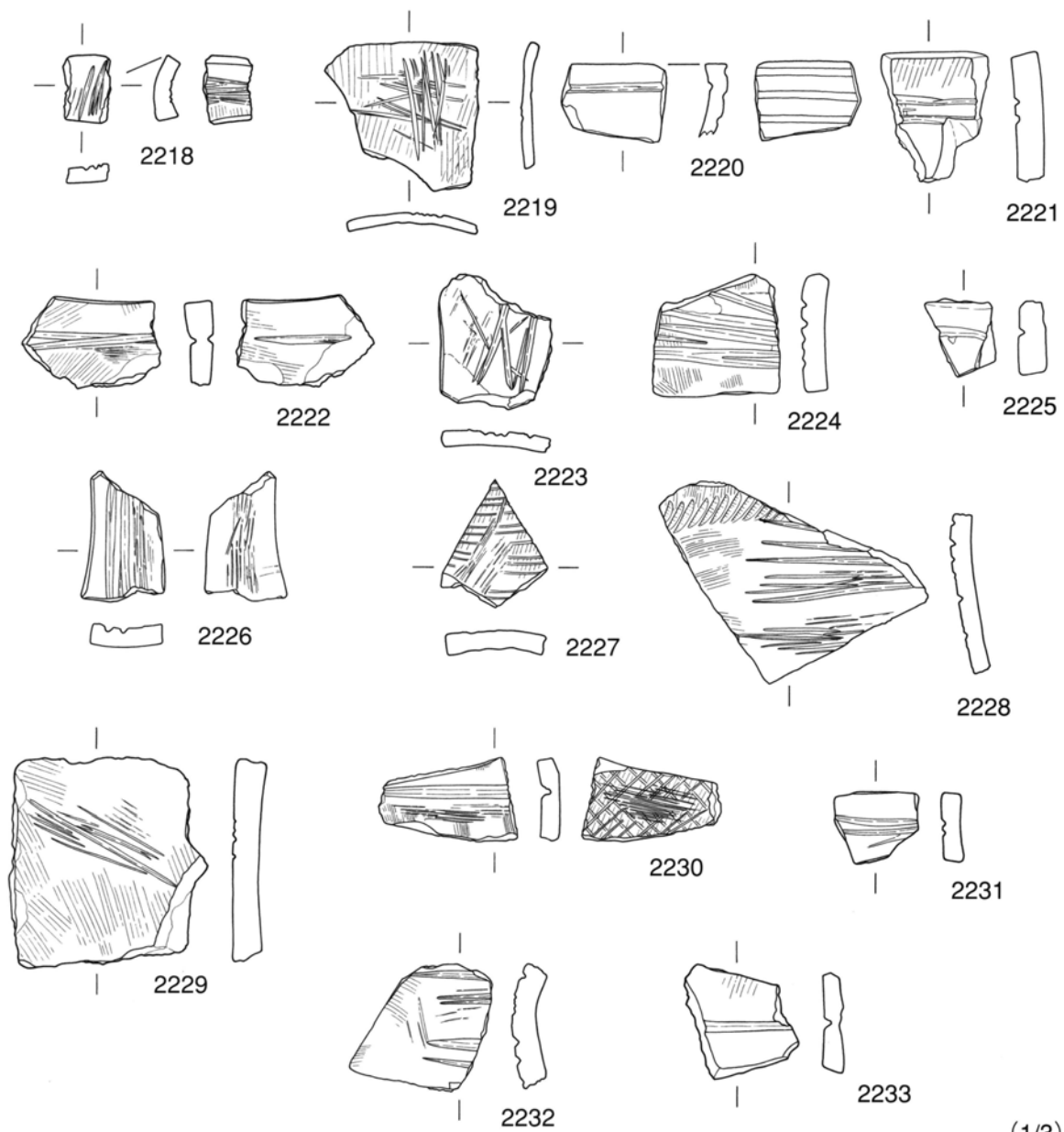
2216



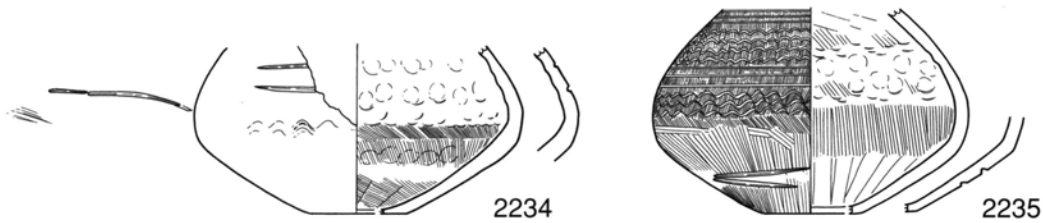
2217

図211 絵画・記号(2)

(1/2)



(1/3)



(1/4)

図212 研磨痕土器

(2234・2235は1/4、他は1/3)

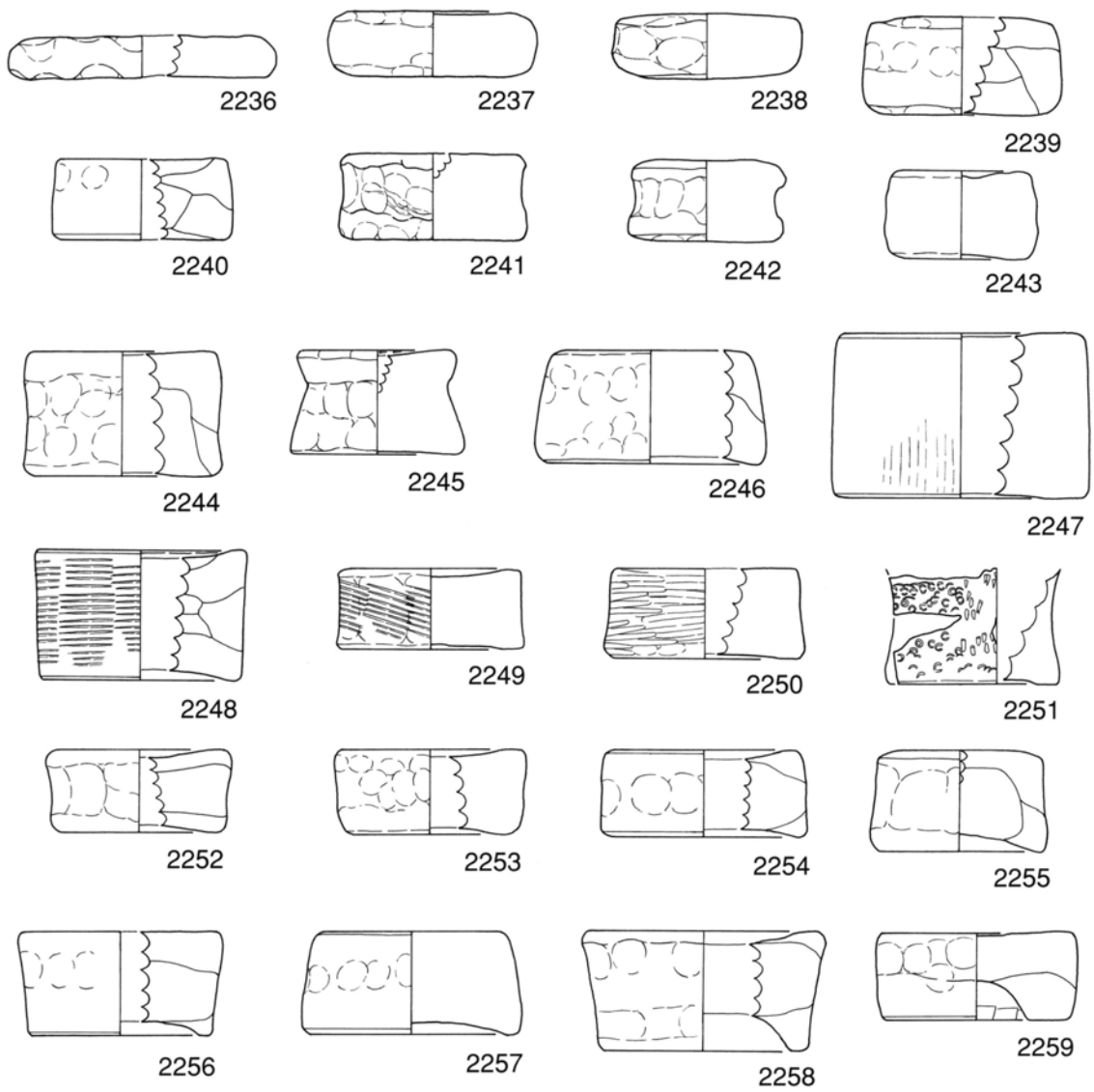


图 213 台盤状土製品 (1)

(1/3)

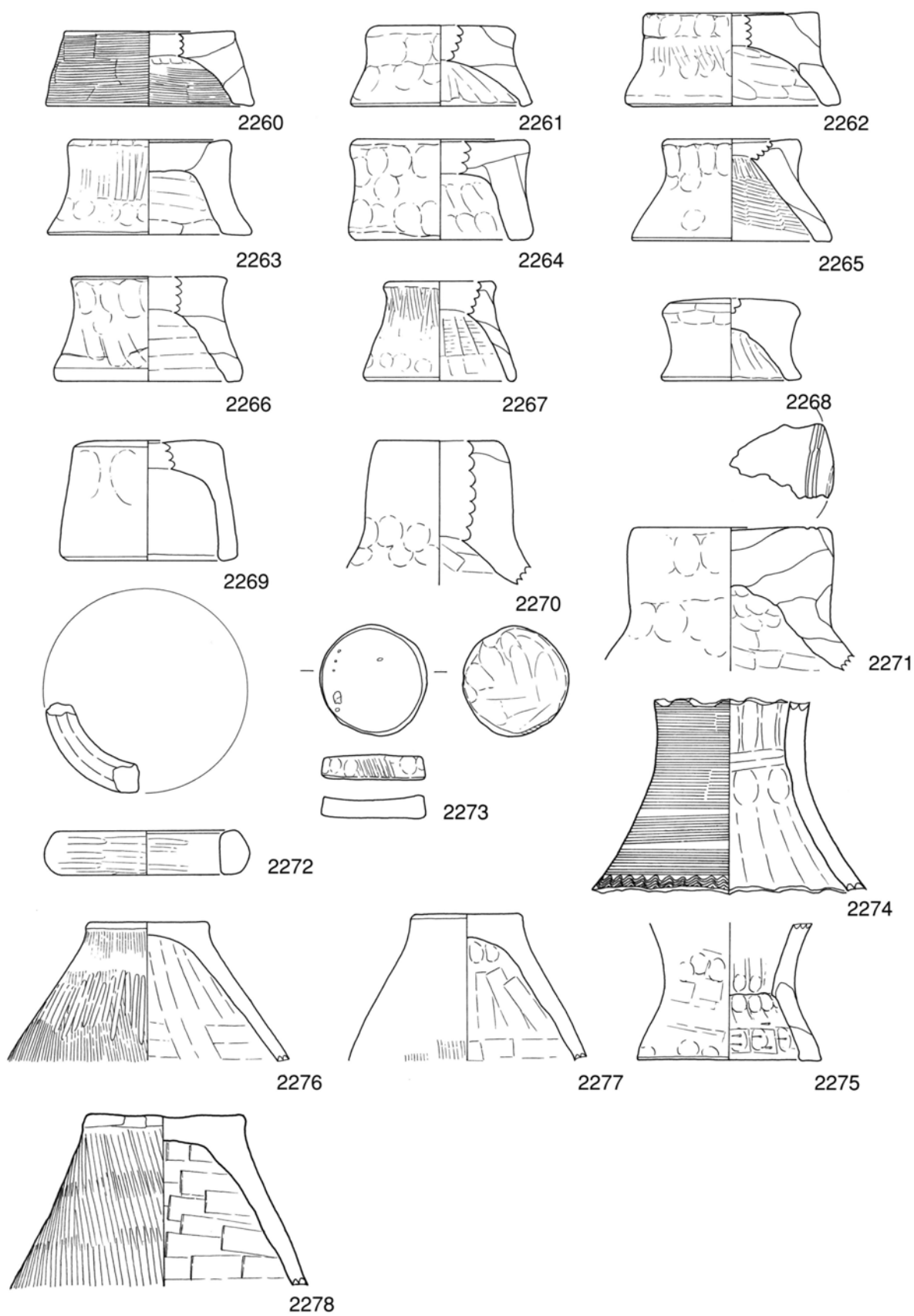


图 214 台盤状土製品 (2)

(1/3)

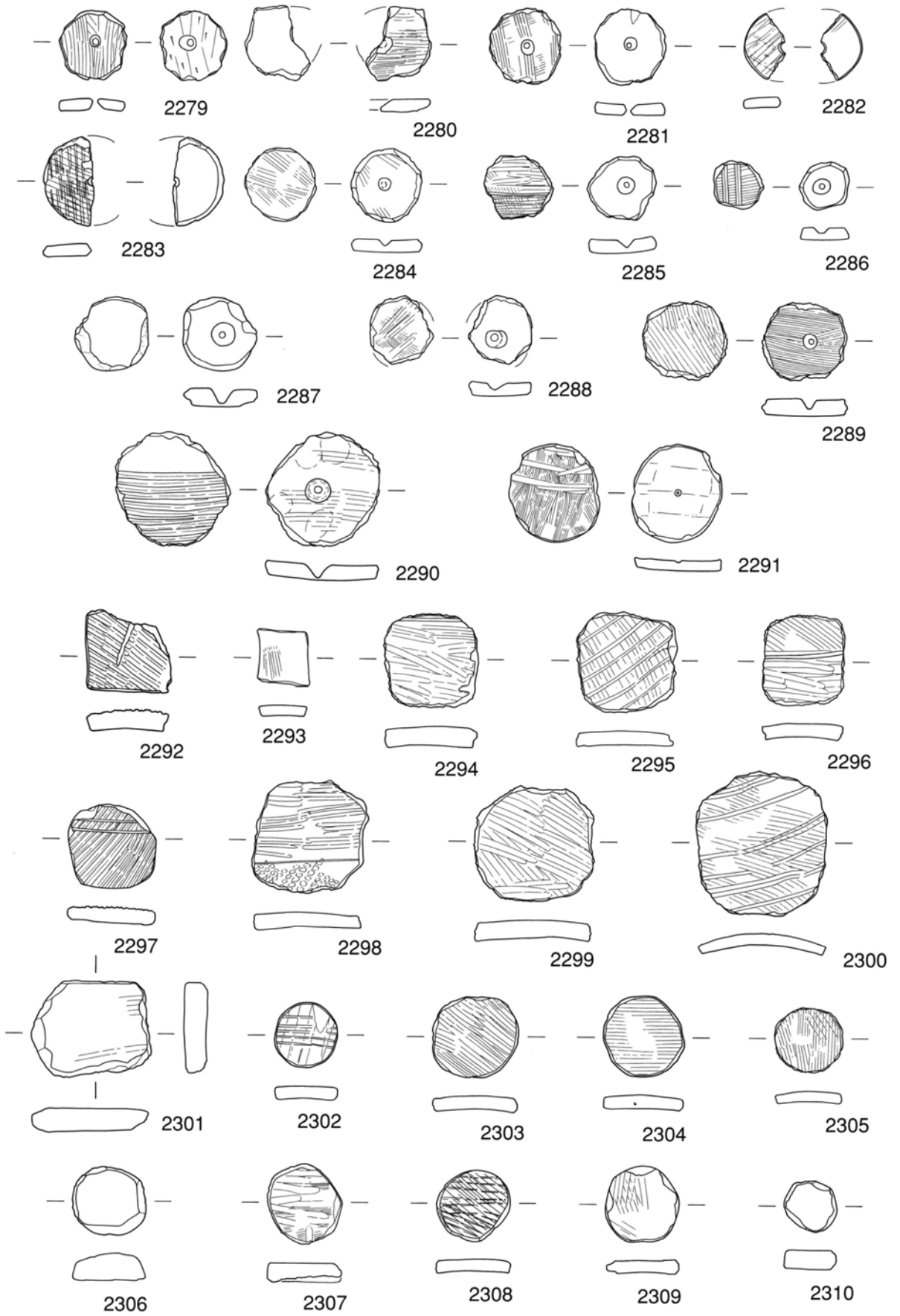


图 215 加工円盤 (1)

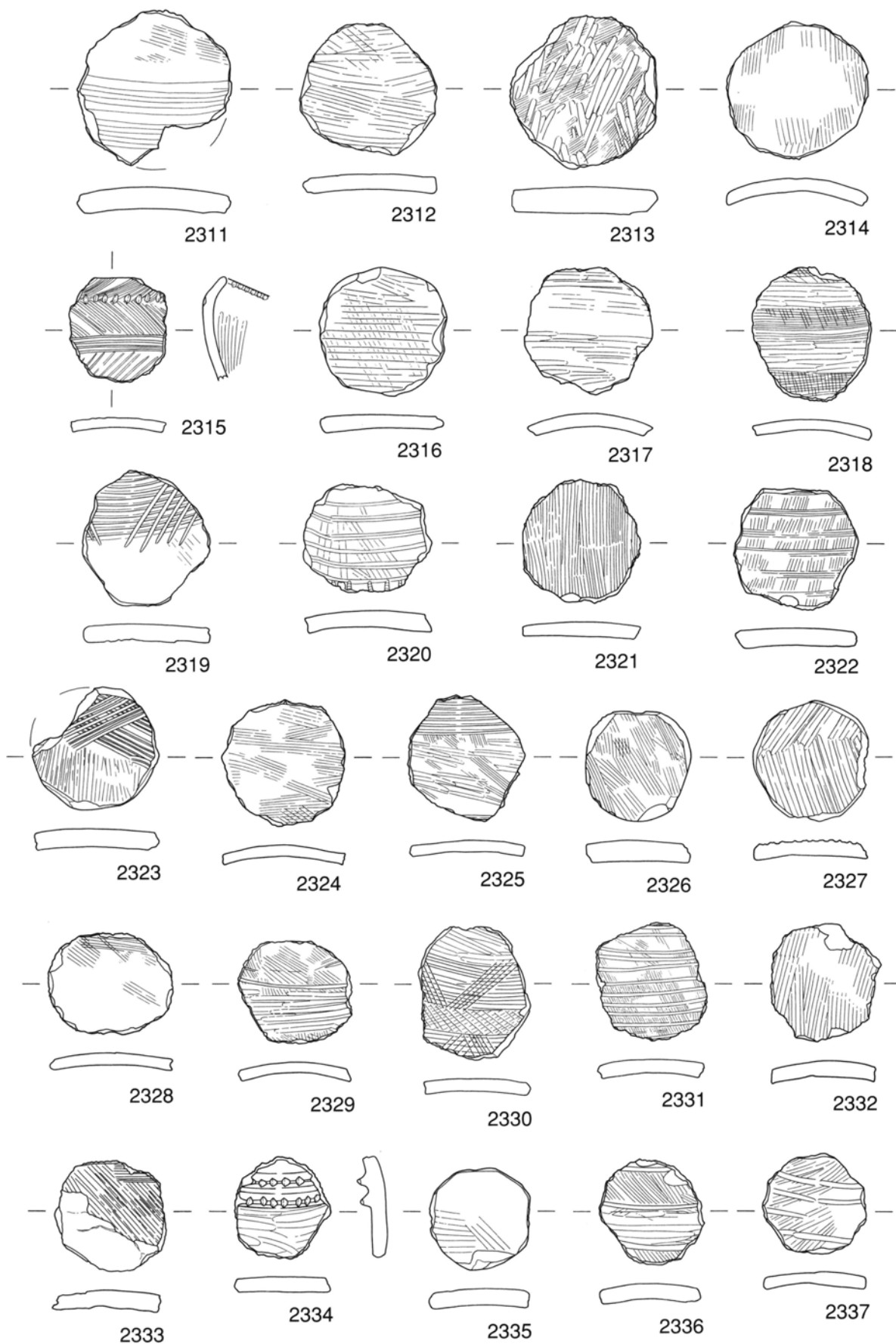


图216 加工円盤(2)

(1/3)

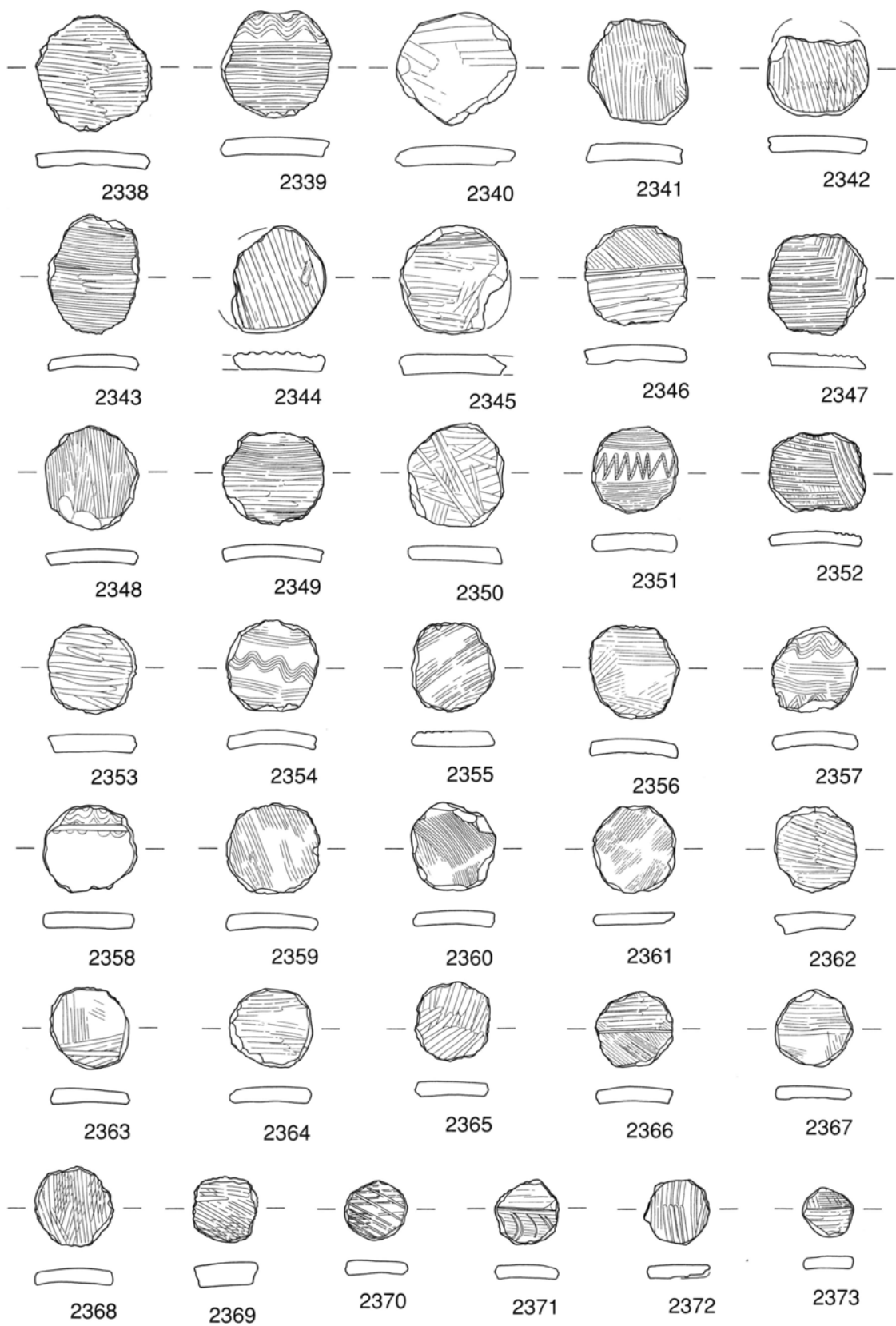


図 217 加工円盤 (3)

(1/3)

S D 102。

2190も円盤状を呈し、端部に焼成前穿孔が2孔あり、蓋である可能性が高い。2191は甕や高坏の台部との境界に充填される円盤状土製品状を呈しており、焼成後に対局の位置に1孔づつ孔が穿たれ、上下の中央にも同様な凹みがある。2192・2193は小型の円盤状の土製品で焼成前の穿孔が、2192は片側に1孔、2193は対局の位置に2孔ある。調整はユビ押圧・ナデ調整。2194は2192・2193と同様なものであるが、やや大きなもので、焼成後穿孔が片側に2孔みられる。

2195～2197は焼成前穿孔が中央にある紡錘車である。2197はIV～V期のS D 104から出土する。

2198は蓋になると思われもので、摘み部には横位の穿孔がある。天井部外面には、山形に3列の竹管刺突列があり、3方向に施されると考えられる。

(3) 絵画・記号 (図 210・211)

2199はS Z 355・356の北溝の上位から出土するVI期の壺の体部最大径部分になる。外面はタタキ後ハケ成形・調整され、クシによる波状紋と横線が施される。絵画と思われるヘラ沈線は、横線上に手をあげた人形状の紋様が横位と斜位に描かれるが、横位のものには不定形な凹みがある。2200は壺下半部で、S D 101の2層から出土する。紋様は、弧状の細かい工具で密に連続して円形に施される。2201はS Z 01の北溝から出土する。壺と思われる破片には、ヘラによる弧状の沈線とその間に縦位の沈線が描かれる。2202も壺片と思われ、横位のヘラ沈線後縦位沈線が引かれる。2203は壺体部で、ヘラミガキ調整され、三角形の沈線が描かれる。2204・2205はVI期のS D 05から、2206は隣接するS Z 03の西溝上位から出土しており、同一個体の可能性もある。4点ともハケ後不揃いなハケ工具により弧状の紋様が描かれており、その後2本1対の工具により山形の平行沈線が施される。2207～2209は、VからVI期の壺

に細いヘラ沈線がなされる。2210はIV～V期の細頸壺の上半部で、ヘラミガキ帯に細いヘラ沈線が横位に引かれる。2211・2212も壺外面に2条の細いヘラ沈線が描かれるもので、2211はナデ調整、2212はヘラミガキ調整される。2213～2215はIV～V期の細頸壺体部に、縦位後斜位の沈線が三角形に描かれる。2216・2217はⅦ・Ⅷ期の壺体部で、クシによる弧状またはU字状の紋様が施される。

(4) 研磨痕土器 (図 212)

2218～2235は、器面に深い沈線状の研磨痕が残るものである。

2218はV～VI期の壺口縁部になると思われ、外面には横位に、内面には縦位に研磨痕があり、下位破面も強く磨られている。2219はS D 103の上層上位から出土するVI期の甕の下半部で、横位・縦位に研磨痕が施される。2220はVI期の受口状口縁壺の口縁部で、外面に3条、内面に1条の横位の研磨痕がある。2221はS D 102の上層から出土する壺体部片で、内面に横位に研磨痕があり、上位の破面は強く磨られる。2222は壺体部片で外内面とも研磨痕がある。2223～2225は壺体部で、外面に研磨痕がある。また2224の下位はわずかに、2225の下位は強く磨られている。2226も壺体部片で、内面には深い研磨痕が、外面には浅い研磨痕がなされ、縦位の両破面とも磨られている。2227はVI期の細頸壺の体部上半片で、外面には浅い研磨痕が残る。2228はVI期壺の下半上位片、2229は壺片で、外面に研磨痕がある。2230はS Z 05の西溝から出土したVI期壺片で、内面には深い、外面には浅い研磨痕がみられる。また上位の破面は磨られている。2231～2233は壺片で、2231・2232は外面に2233は内面に研磨痕がある。また2231の上下位破面に、2232は左位破面に、2233は下位破面に磨り痕がある。2234・2235はVI期細頸壺で、2234はS D 07上層から出土する。2234は体部上半に、2235は下半に研磨痕がある。

(5) 台盤状土製品 (図 213・214)

被熱しているかまたはススが付着している円盤状の土製品で、ユビ押圧とナデが成形・調整の基本となる。森分類^{*}に沿って分類すると、2236～2254がA類、2255～2259がB類、2260～2271がC類、2272がD類となり、2273～2278はその他になる。今回の調査では114点が出土する。

A類のうち、2272～2242は底部が平坦で、2243～2254は凹面をなし、わずかに上げ底になる。2238の上面には環状にススが付着し、中央部は磨滅する。2241の底面は、ハケまたはイタナデ調整される。2243は表面の剥離が激しく、調整は不明である。2247の側面外面には一部ハケ調整がみられる。2248・2249の側面外面にはタタキ痕が残り、2250はヘラミガキ調整されている。2251の側面外面には不規則な竹管刺突と棒状工具による刺突がみられる。

B類のうち、2255～2257は脚部が比較的低いもので、2258・2259はしっかりとした高い脚部をもつ。2257の上面には糊痕が残っている。2259の脚部内面はイタナデ調整される。

C類は台付甕の台部と類似する形態をもつものになる。2260は比較的高さの低いもので、側面の外内面ともハケ調整される。上面はナデ。2262・2263は側面外面に粗いハケ調整がされ、その後ナデが施される。2265は内面がハケ調整される。外内面ともハケ・ナデ調整される2267は、被熱しておらず、ススも付着していない。2270は天井部の器壁が非常に厚いもので、端部は意図的に打ち欠かれているように見える。2271も天井部器壁が厚いもので、上面端には2～3条の沈線が走る。

2272はD類になるもので、全体にヘラミガキ調整され、ススが付着している。

2273は全体に熱を受けた痕跡があり、ユビ押圧とナデ成形・調整で作られていることからみて、台盤状土製品と考えられ、下端部のみ遺存している。下

面はそのままであるが、上面は丁寧な磨られ凹面をなす。外面にはハケまたはクシ痕がみえる。

2274はV～VI期の太頸壺の頸部にあたり、上下破面が打ち欠かれて、ほぼ水平になり、全体に被熱する。2275はV～VI期の台付甕の台部と体部下端部で、内部の円盤充填が欠損し、筒状になる。上部の破面は磨られており、水平かやや外傾する面をなす。全体に被熱しており、外面はハケ後ナデ、内面はユビナデ後ヘラケズリ調整される。

2276～2278はV～VI期のハケ甕底部で、破面が打ち欠きによりほぼ水平になっている。2276・2277に関しては、全体に被熱していることが明瞭に見てとれるが、2278は使用時のものと区別ができない。

時期については、2245がS B 07のベルトから出土しており、I期になるとも考えられるが、遺構の章でもふれたとおり、この堅穴住居の遺存高は浅く、まとまった遺物群以外はサンプリングエラーの可能性もあり、時期については保留しておきたい。また表番号95-24のようにI期の溝S D 101から出土するものも、上層2からであり、IV～VIの遺物が混在する。その中でA類になる表番号96-26はII～III期になるとおもわれる。また新しい方では方形周溝墓溝や主体部土坑から出土しているものもあり、VI期以前のもものが混在していることも十分有りえるが、VII期まで継続している可能性も考えたい。その他遺構出土のものは、IV～VI期のいずれかに属し、表番号95-25と95-32はVI期になる。

(6) 加工円盤 (図 215～217)

土器片の側面を、打ち欠いたり、研磨したりし磨り円または方形に再成形するもので、今回の調査では557点出土している。一覧表として取り上げたものは、比較的打ち欠き痕や磨り痕が明瞭なもので、破損時に偶然に円や方形になったものと峻別できないものはなるべく除いた。

2279～2291が中央部に穿孔があるものになる。出

* 森泰通 1989「台付甕の出現」『古代文化』
1996「台盤状土製品から台付甕へーその変化と背景ー」『鍋と甕 そのデザイン』

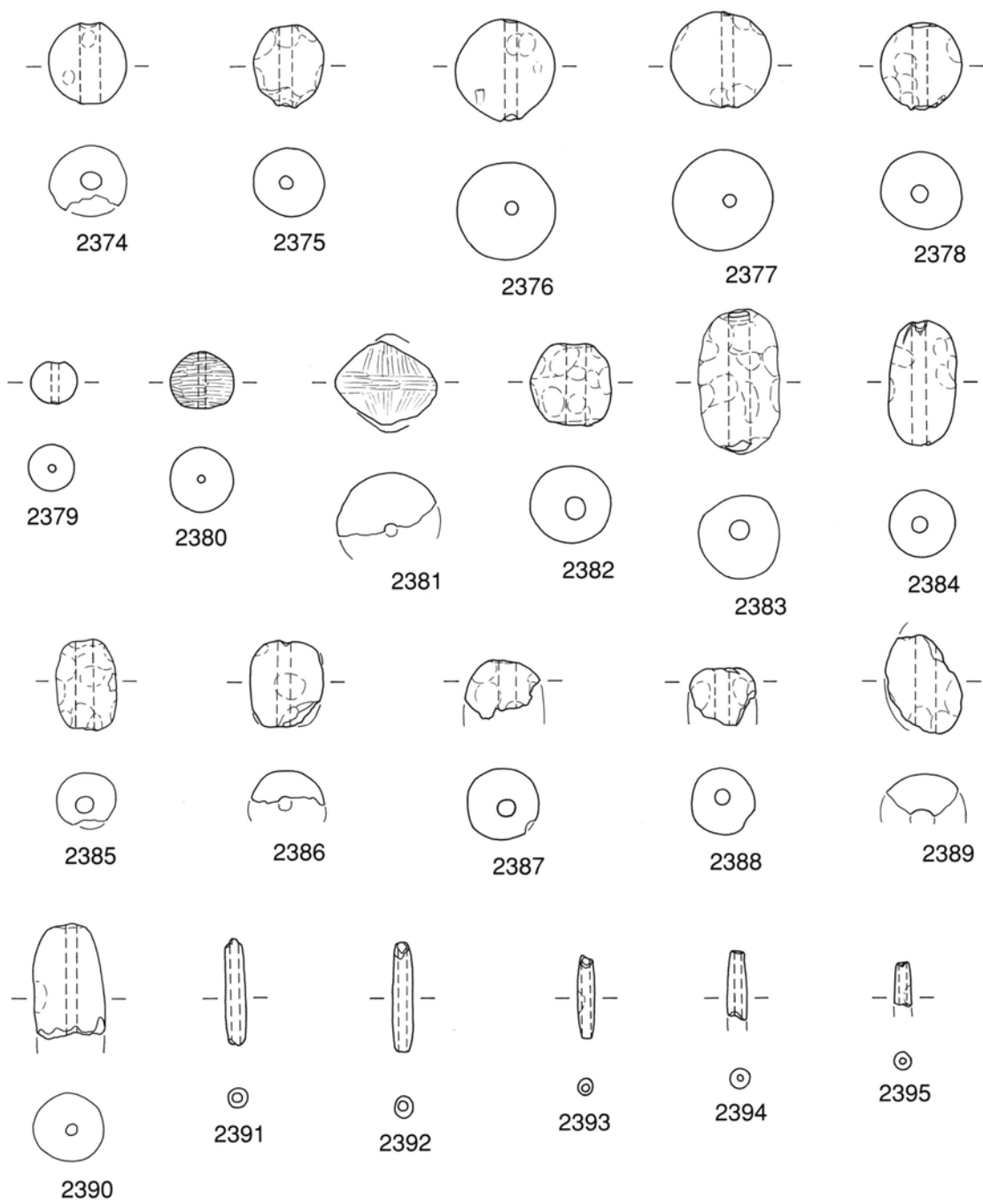


图 218 土錘

(1/3)

土点数は全部で16点あり、そのうち孔が貫通しているものは6点になる。また側面の磨り痕が明瞭なもののは2279・2282・2283・2291である。

2292～2300は方形を呈するもので、2292・2293・2297が側面の研磨が明瞭である。ただ、方か円形かについて、打ち欠きで成形された場合、区別がつきにくいものも存在する。

2301～2310は円形で側面の研磨が明瞭なものである。

2311～2373は円形で打ち欠きが目立つものである。ただ、打ち欠き成形が主体であるものの中にも、一部分に磨痕がみられたりしており、側面が全面研磨されたものが、使用などの理由で打ち欠き状になったことも十分考えられる。

時期については、小型であるため再堆積し、混入している可能性は否定できない。単純に出土遺構からみると、I～Ⅷ期の各時期にわたっており、大型の区画溝から多く出土し、それ以外では方形周溝墓やその周辺の土坑（S K 104やS D 47）から出土する傾向があり、2304や表95-262のように土器棺内からも出土している。ただ土器片をみると、小片でどの時期になるか認識できないものもあるが、大多数がI～Ⅵ期のものが加工されており、確実にⅧ期のものと認定できるものは、今回は確認できなかった。そのためⅦ・Ⅷ期の方形周溝墓、特にⅧ期のものについては再堆積の可能性が考えられる。

(7) 土錘 (図 218)

2374～2378は縦横径がほぼ同じで、球状をなすもので、ユビ押圧とナデがなされる。

同じく球形を呈する小型の2379～2381については、特に2380・2381などはヘラミガキされていることからみて、土錘ではない可能性も考えられる。

2382～2389は横径に対して縦径が長くなるもので、ユビ押圧主体で成形・調整されている。2390も同様の形態であるが、ナデが施されており、紐孔も

細い。

2391～2395は横径が短く細くなるもので、器壁も薄く軽い。

2374・2375・2383・2384はS D 101から出土しており、2384はI期、その他はI～Ⅱ期になる。2381はⅦ期のS Z 03の南溝から出土する。

2390はS K 35、2391はS K 03、2392・2393はS K 02の中世土坑から出土している。

13. 中世以降の遺物 (図 219)

中世以降の遺物には陶磁器、土器、木製品などがあり、総破片数は855点を数える。その内訳は表1の通りである。遺物は近世や近代に属する瓦や陶磁器類などもあるが、その大半は調査区北西端の貝層上位の検0から出土したものである。これらは調査前から一部がゴミ溜となっていた部分であり、今回の報告ではこれらを除外して、遺構出土資料を中心に報告することとした。

17世紀初頭以前の遺物は、以下のように大きく4期に分けることができる。

中世1期……山茶碗の藤澤編年の第5型式期から第7型式期に属する時期で、尾張型山茶碗および小皿が主体となるものである。13世紀を中心とする時期である。

中世2期……山茶碗の藤澤編年の第8型式期から第11型式期に属する時期で、東濃型山茶碗および小皿が主体となるものである。14世紀から15世紀前半の時期である。

中世3期……古瀬戸後期第4小期または山茶碗の藤澤編年の第12型式期に属する時期である。15世紀後葉を中心とする時期に該当する。

中世4期……瀬戸美濃窯産陶器大窯編年第3段階から登窯第1小期に属する時期である。中世というよりも近世に属する時期であるが、ここでは便宜上中世4期としておく。16世紀後葉から17世紀初頭に位置付けられる。

以下、遺構ごとにその概要を記述する。

中世1期

SK11……尾張型山茶碗の片口鉢(2396)が1点出土した。外面に自然釉が掛かる。

SK13……尾張型山茶碗(2397)と東濃型山茶碗4点が出土した。

SK02……尾張型山茶碗2点と東濃型山茶碗1点な

どが出土した。これらは藤澤編年の第6～8型式に属するものである。2400の底部には墨書が認められる。

SK01……尾張型山茶碗3点(2404～2406)と瀬戸窯産尾張型小皿1点(2407)が出土した。これらは藤澤編年の第7型式に属するものである。

SK31……猿投か知多窯産の尾張型小皿1点(2409)が出土した。藤澤編年の第6型式に属するものである。

SK49……第7型式に属する瀬戸窯産尾張型小皿1点(2410)が出土した。

中世2期

SK21……第8型式の東濃型山茶碗(2408)がほぼ成形で出土した。

SD02……青白磁合子蓋(2413)と土師器皿(2411・2412)などが出土した。土師器皿は非ロクロ調整のもので、14世紀後半から15世紀前半に位置付けられよう。

中世3期

SK12……東濃型山茶碗が16点出土し、時期は大洞東型式から生田型式までに属する。土師器皿(2415)はロクロ調整で底部に回転糸切り痕が残るものである。口縁部に向けて体部が直線的に開くタイプで、清須城下町の土師器皿B類に属する。時期は15世紀後葉から16世紀前葉に位置付けられる。

SK23……瀬戸美濃窯産陶器搦鉢(2418)、土師器内耳鍋(2419)などが出土した。搦鉢は古瀬戸後期第4小期新段階に属し、土師器内耳鍋は体部が直線的に伸びることから15世紀後半に位置付けられる。

SK30……木胎漆器碗の口縁部片(木製品-1)が1点出土した。内面は赤色漆、外面は黒色漆が塗布され、外面に赤色漆で俵紋が描かれている。これだけ

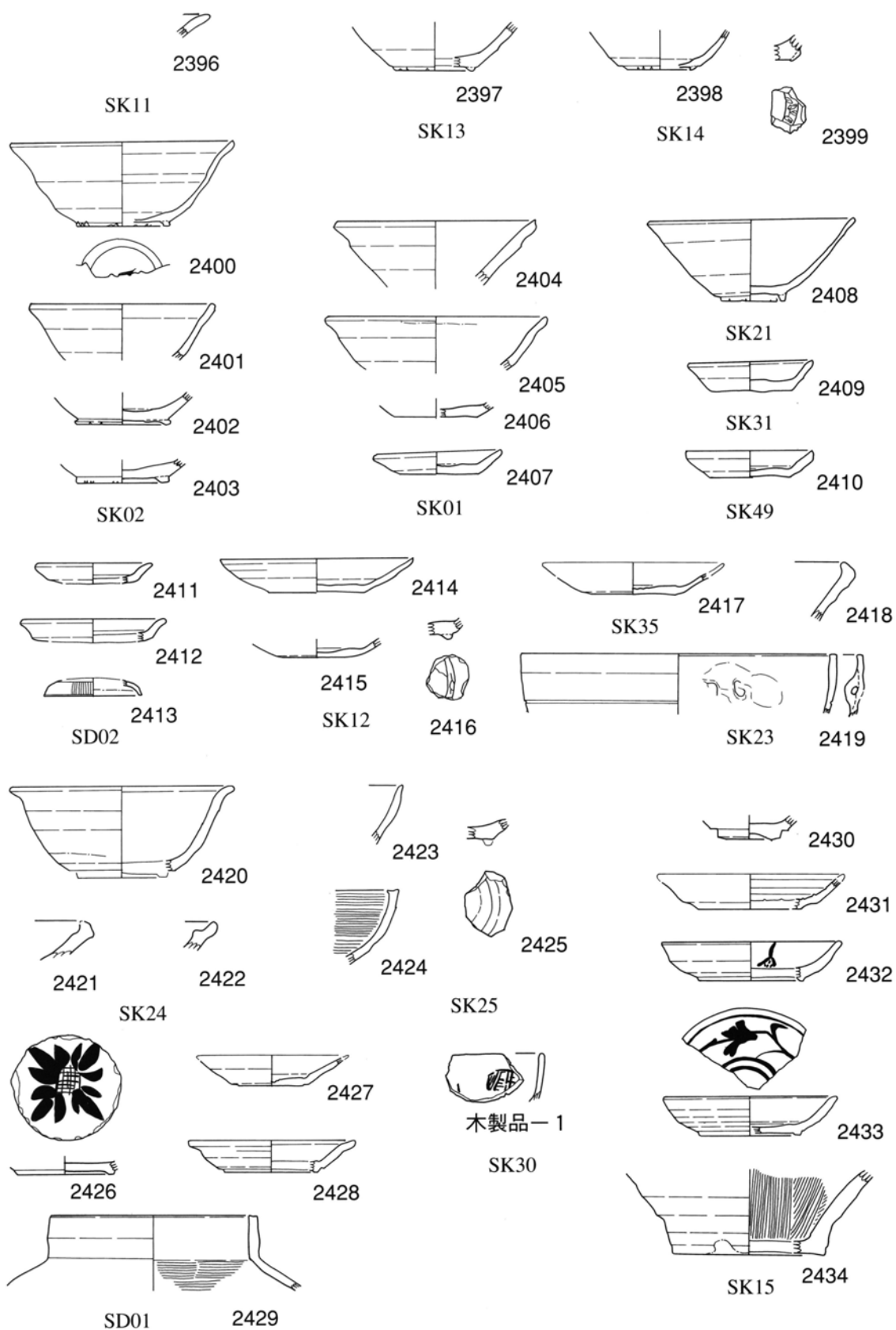


図 219 中世以降の遺物

では時期を特定し得ないが、15世紀後半以降であると思われる。

中世4期

SK24……瀬戸美濃窯産陶器播鉢(2421・2422)や端反碗(2420)などが出土した。多くは古瀬戸後期第4小期に属する資料であるが、播鉢に大窯編年第4段階に属する資料(2422)があることから、この時期に属する遺構と思われる。

SK25……瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗(2423)、土師器焙烙(2424)などが出土した。天目茶碗は大窯編年第1段階に属するが、土師器焙烙の存在から16世

紀後半の遺構と考えられる。

SK15……瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗(2430)、志野皿(2432・2433)、重圈皿(2431)、播鉢(2434)などが出土した。最新の資料は連房式登窯第1小期に属する志野皿である。

SD01……瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗、灰釉皿(2428)、志野皿(2426)、卸目付平鉢や土師器皿(2427)、釜(2429)などが出土した。灰釉皿は大窯第3段階に属するもので、土師器釜は肩がなで肩となっていることから16世紀後半ぐらいに位置付けられよう。

表1 中世以降の遺物出土量

種別(破片数)	95区遺構	95区検1	95区検0	95区合計	96区遺構	96区検1	96区合計	総合計
灰釉陶器以前	4	5	0	9	0	0	0	9
尾張型山茶碗等	67	27	1	95	2	5	7	102
東濃型山茶碗等	81	56	4	141	3	1	4	145
中世常滑陶器	2	9	1	12	1	3	4	16
古瀬戸陶器	15	12	0	27	0	1	1	28
瀬戸大窯陶器	34	61	5	100	2	5	7	107
中国産磁器	3	0	0	3	0	0	0	3
土師器皿	23	32	1	56	4	0	4	60
土師器鍋	34	34	9	77	0	0	0	77
近世瀬戸陶器	25	98	47	170	1	20	21	191
近世磁器	6	29	29	64	1	1	2	66
近世土師器	0	1	0	1	0	1	1	2
近世棧瓦	5	18	0	23	0	1	1	24
近世常滑陶器	0	12	0	12	0	4	4	16
瓦器	0	0	1	1	0	0	0	1
不明	0	3	1	4	0	0	0	4
石製品	0	0	3	3	0	0	0	3
木製品	1	0	0	1	0	0	0	1
合計	300	397	102	799	14	42	56	855

(2) 石器

1. 概要

調査により出土した弥生時代に属す道具としての石器点数は2509点である。

石器は概ね弥生時代に属すが、その形状から縄文時代に属すと考えられるものが一部含まれている。種別の内訳は下表のとおりである。

2. 器種

記述の都合上、石器は大きく、打製石器、磨製石器、礫塊石器に区分する。粗製剥片石器には刃部のみ研磨したものがあがるが、打製石器に含めた。また、研磨が不十分なのかかわからないが、平坦面に剥離痕を残しつつも研磨されているサヌカイト製石剣につ

いては、平坦面が部分的にでも研磨されている点を重視して磨製石器に含めた。

(1) 縄文時代 (図50・51)

石鏃、打製石斧、磨製石斧、石刀がある。

石鏃は、確実に凹基無茎の1点が縄文後期に属す。他に晩期も含んで縄文時代に属す可能性のあるものもあろうが、型式学的に識別することは難しい。

打製石斧は両面とも剥離面で身部の薄い短冊形のものに縄文後期に属すものがあるかもしれない。

磨製石斧は3点で、うち定角式が2点(327・328)ある。327は蛇紋岩製である。

石刀は2点(329・330)出土している。

このほか、タタキ石や磨石に縄文時代のものが含まれている可能性もあるが、選別できていない。

(2) 弥生時代

A. 打製石器

a 石鏃 (図16～18)

出土点数は95調査区133点、96調査区28点である。遺構からの出土で確実に弥生前期に遡るものは確認できなかった。ほとんどが中期以降の遺構・包含層からの出土である。

分布上で注意を引いたのは、チャート製品が96調査区で目だったことで、時期差に関係するかもしれない。

石材 使用されている石材は、下呂石、チャート、サヌカイト、安山岩、黒耀石であり、このうち石核・剥片が出土しているのは下呂石、チャート、サヌカイトで、黒耀石は剥片のみ1点出土している。したがって黒耀石製石鏃(121)は搬入品である可能性が高い。同石材鏃は、濃尾平野では他に一宮市八王子遺跡などで出土している。

表1 朝日遺跡95・96石器種別数量一覧

打製石器	石鏃	161	
	中・大型尖頭器	5	
	石錐	50	
	スクレーパー	21	
	石小刀	2	
	粗製剥片石器	165	*うち21点は肉眼で光沢を確認
	石斧	11	
磨製石器	石鏃	8	
	大型尖頭器	10	
	石庖丁	34	
	石斧	281	両刃 167 柱状片刃 38 扁平片刃 76
	環石	10	
礫塊石器	石錘	18	切目 2 打欠 9 敲打 7
	砥石	364	
	凹石	455	
	敲石	914	

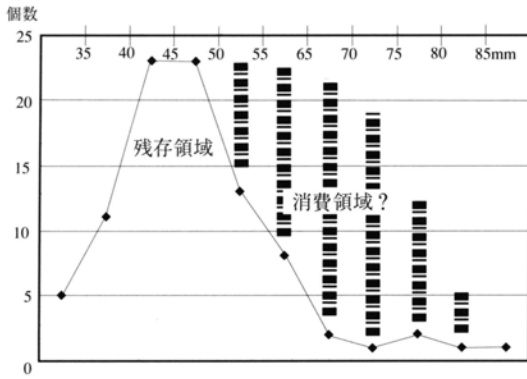


図1 下呂石原石長さ度数分布

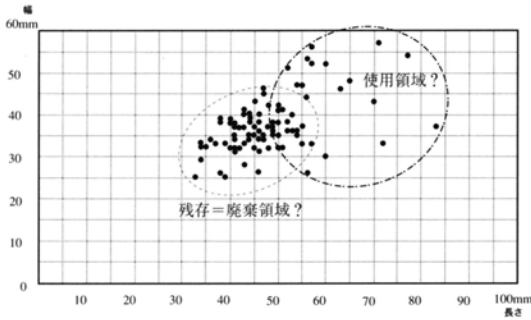


図2 下呂石原石法量分布

ところで、石鏃の製作工程と石材の相関については、下呂石に関して原石・石核・剥片・碎片などが出土していること、下呂石系列の器種分化（石錐・石小刀など）がみられること、などから基本的に集落内生産であったことは疑いがない。しかし、それ以外の石材について、たとえばサヌカイト製石鏃については少量ながら剥片が出土していること、サヌ

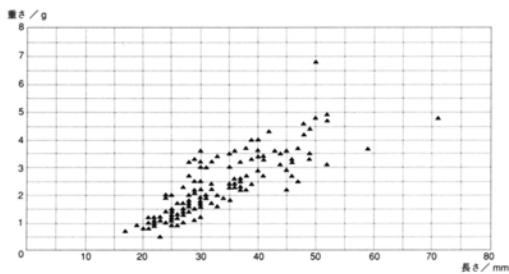


図3 石鏃法量分布

カイト系列の器種分化（朝日遺跡に限定されているとはいえ、石錐・スクレーパー・尖頭器、石小刀など）が安定していることから朝日遺跡で生産された可能性もあるが、在地産石材と思われるチャート製については、下呂石に比べて石核・剥片が点数で一桁少なく、また石器系列としての器種分化も低調であることから、それらが集落内生産であるかどうかは検討の余地がある。先に石鏃の石材別分布に偏りがあると述べたが、このことに関係するかもしれない。

原石／石核／剥片の数値は、下呂石：91／163／2042、チャート：4／42／143、サヌカイト：0／1／55である。

形態 大きくは無茎・有茎の2者にわかれ、基部形態では凹基、平基、凸基、平面形態では三角形、長三角形、五角形、長五角形、柳葉形などに中区分できる。さらに、(長)五角形鏃は側縁が直線的なもの、内彎するもの、肩が突起状に突き出すものなどに小区分できる。本書では側縁が外彎しているものについて五角形鏃から除いているが、先端角の大きいものの中には肩部の屈曲が明確なものもあり、その点で分類上曖昧さを残す。しかし、この点については、長身鏃の中に先端を再生したものが含まれている可能性を考慮しようという立場をとりたい。例えば、21～30は左右の側縁が小さく屈曲して五角形のようなではあるが、21などは肩の位置が相対せず大きくずれており、先端再生が背景にある可能性が高い。このように定型的な五角形鏃とその類似形態とは一

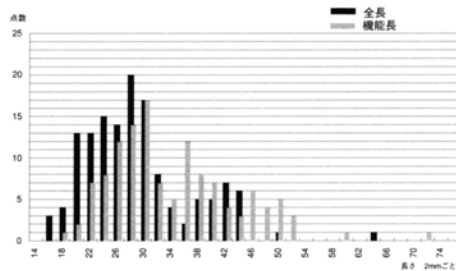


図4 石鏃の全長と機能長の度数分布

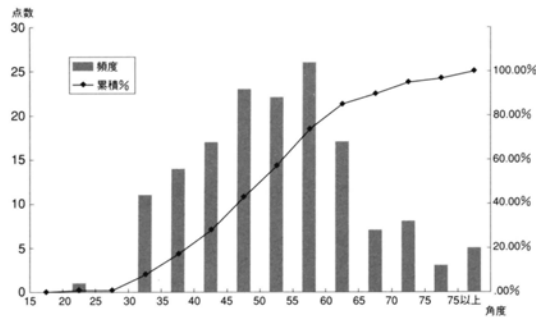


図5 石鏃先端角度数分布

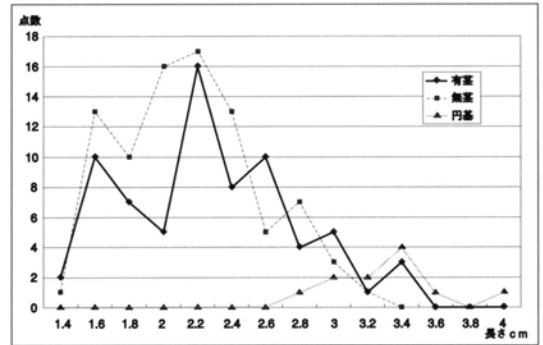


図6 麻生田大橋石鏃長さ数分布

応区別することができると思う。

凹基無茎でサヌカイト製のものには弥生I期に属するものが含まれている可能性があるが、明確に分離できない。基部が凹基をなしてその中央がわずかに突出するのみでとても有茎に含めえないもの(16)、また凸基のうち基部の突出が弱いものは弥生I期である可能性が高い。

先端に槇状剥離の見られるもの、先端付近の側縁に磨耗痕が見られるものがある。前者は御堂島正氏が言われるような衝撃剥離に該当するものであろう。後者は鏃に転用されたことを示している。

b 石鏃 (図19)

形態 製作法からは、I類：頭部と機能部の境が明瞭で、細長い機能部が剥離によって整えられるもの、II類：全体が多角形ないし涙滴状をなし、その尖端部が機能部となるもの、III類：頭部と機能部の境が不明瞭で、棒状のもの、に区分できる。

石材 石材の利用では、下呂石がほぼすべての形態を網羅するのに対し、チャートは棒状系に集中する傾向にある。

使用痕 使用痕については、先端部側面稜線上に白い擦痕を残すものは、顕微鏡下では回転線条痕として観察されるので、土器の穿孔に用いられた可能性が高い。

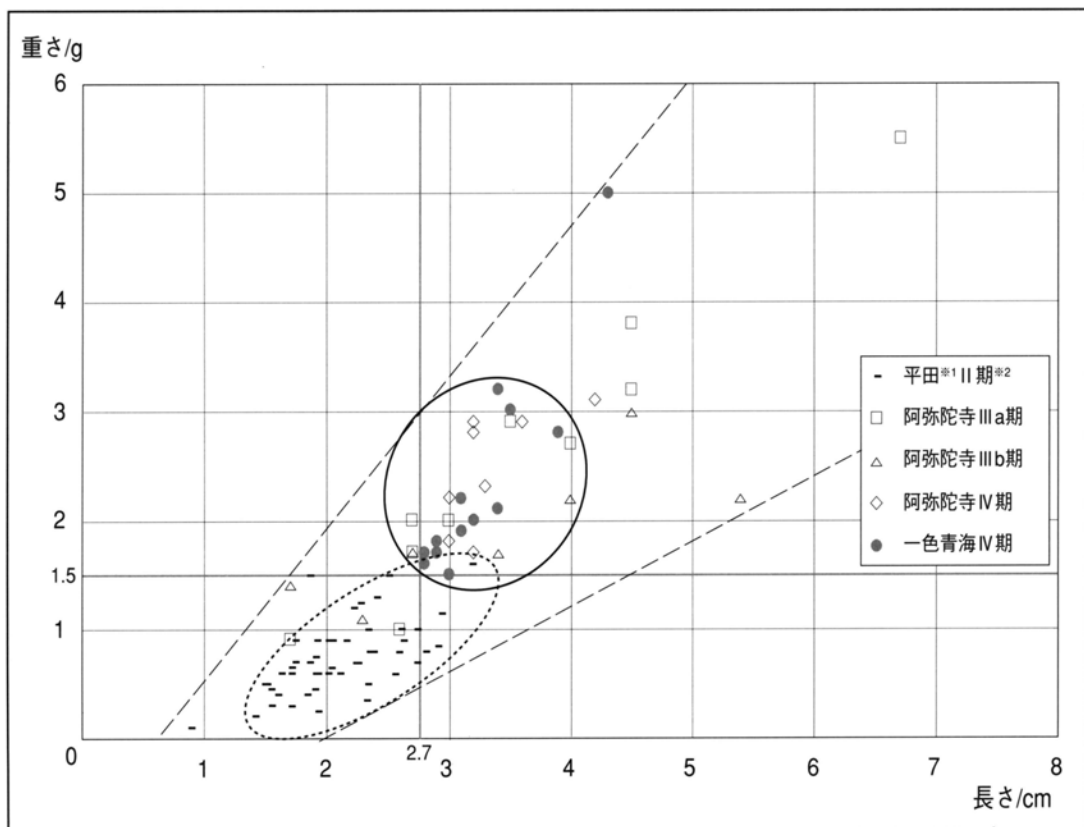


図7 弥生中期石鏃時期別法量分布

※1 三重県安濃町平田古墳群下層竪穴建物
 ※2 弥生時代5期区分

c スクレーパー (図20・21)

石材はサヌカイト製を主として他に下呂石、チャートがある。とりわけ今調査では23点中14点がサヌカイト製であり、前回の報告分をゆうに超えている。約5500㎡の調査面積とはいえ、その集中度には注目すべきものがある。他遺跡では3点出土すれば多い方であり、それに比べれば朝日遺跡での出土量は特異でさえある。単に弥生前期にかかる部分の多いことが理由であるとはいえ、遺跡の性格に関係する可能性もある。

形態 横長剥片を素材として、周縁の剥離がほぼ全周に及ぶか相対する2側縁に剥離が加えられるもの、一側縁が平坦で未調整のもの、に大別できる。ただし、剥離部分が機能部とは限らない。

使用痕および使用法については原田報告を参照。

d 尖頭器 (図22)

石鏃に比べて身が厚く大きいものを尖頭器とした。欄宜田佳男氏が中形尖頭器や大形尖頭器と呼称したものに該当する。

中形尖頭器には下呂石製とチャート製がある。チャート製では東海市烏帽子遺跡や一色青海遺跡等で出土した身幅が広くいささか不整形なものに類似する資料(162)があり、弥生中期後半に属す可能性はある。一方、身幅が狭く整ったものは「石槍」と呼ばれることがある。

159～161は下呂石製で、160は相対する側縁に潰れが認められる。挟み打ち(両極打撃)による剥離が行われた結果であろうか。161は平面形が整っており側縁形状も左右対称形であるが、側縁の磨耗痕が顕著で、錐として使用されている。いずれも身部は厚いのが特徴である。

158はサヌカイト製で、身部中央がやや幅広になる形態である。基部に近い側縁には潰れや磨耗が認められる。この部分が装着部、そして側縁の鋭い部分を刃部(機能部)とすれば、刃部長は推定で5cm程度しかない。しかし、5cmという長さは朝日遺跡

で出土した打製石剣とほぼ同じである。この本体に奈良県唐古遺跡例と同様の木製の装具を装着すれば外見はまさに打製石剣と同じになる。器種分類上問題となるところである。単純に槍先とすることはできない。サヌカイト製。

e 打製石斧 (図23・24)

時期決定について確度は低いが、弥生時代前期に属するものがあると思われる。164はバチ形で側縁の相対する部分に敲打が集中している。165は側縁中央部がややくぼんで分銅形に近い。172はやや大形品でバチ形を呈する。実測図は打製石斧のように表現されているが、石材が結晶片岩であり違うものかもしれない。

f 粗製剥片石器 (図52～図62)

使用痕観察の詳細は原田 幹氏の報告に譲るが、今回の資料中にはイネ科植物の切断(刈る)に使用されたものが多く認められ、しかも弥生前期に遡るものがあり注目される。

今報告例においては、過去の調査例にくらべて側縁が敲打によって潰れているものが多いという特徴をあげることができる。それは光沢をもつものも同様である。また、敲打だけではなく、刃部が磨耗していたり(374・394)、平坦面に擦痕の見られるもの(324・346・355・359・365・370・390・391・396)もあり、多様な痕跡が観察される。少なくとも光沢を有するものについては、貝殻状剥片の獲得がイネ科植物の切断に用いることを目的としたものであったことを確証しているけれども、それ以後は敲打や擦る作業に転用されており、沢田敦氏が言うように道具としての「ライフヒストリー」への注目が必要となる。少なくとも木曾川町門沼遺跡の弥生中期前葉以前の資料ではそのような様相は見られなかったし、それ以後の犬山扇状地域の同種石器においても同様である。このような相違が何に起因するのかを解明することが課題となる。

なお、研磨によって刃部を整えている例(356)が

出土している。濃尾平野では名古屋市月縄手遺跡からも1点出土している。

B. 磨製石器

a 石鏃 (図25)

出土点数は8点で、有孔例は1点ある。基部は単なる突起状のものと茎部を作り出すものがある。断面形は、174・177がやや菱形、175・176が扁平である。前者は大形磨製尖頭器の切先片を再加工したものである可能性もある。178は未成品である。塩基性岩の剥片を挟み打ちで整形したもので、側縁は潰れている。果たして完成品になったのかどうか。

b 磨製尖頭器 (図26)

大型尖頭器では、石斧と同じ塩基性岩製で全面研磨のものと、サヌカイト製で剥離痕を残すものがある。

179は比較的大形の磨製石剣の基部片で、石材は塩基性岩である。図示していないがもう1点大形品がある。身の部分で鏑は明瞭である。

180は側縁に面をもち刃部は形成されていない。相対する位置に半円形の抉り込みがある。「鉞」であろうか。

181・182はサヌカイト製で、剥離痕を残して全面研磨とはなっておらず、塩基性岩製に比べて鏑も明瞭ではない。181は側縁も磨耗(研磨か?)し、刃部をもたない。残存部の最大幅は約6cmで、これまで出土している剣に比べてかなり幅広である。榎宜田佳男氏が指摘するように「剣」というよりは「戈」に含めるべきものであろう。182は剥離痕が小さくよく研磨されている。残存部の最大幅は約5cmで、これも「戈」であろう。この他に同様の大型破片で「戈」の可能性のあるものが1点ある。いずれもサヌカイト製である。同一個体の破片かもしれない。

183は基部片で、半円形に成形されているが剥離調整は雑である。左平面図の左側縁寄りにはわずかに研磨面が認められる。右平面図の剥離稜線上にみ

られる磨耗痕とは明かに異なる。181・182のような部分研磨大形磨製尖頭器の破損品を再調整したものであろうか。

c 石庖丁 (図27)

今回の報告例は35点であり、調査区ごとの出土点数では9・5調査区・9・6調査区ともに前回は凌駕している。

石材は多種であるだけでなく、近在では入手不可能なものが主である。未成品が出土していないことから、おそらく製品が搬入されたのであろう。

完存品がないので法量的な傾向を探るのは難しいが、いちおう厚さが7mm以上あるものを大形石庖丁とすれば20点程度となり、通常サイズよりも多くなる。原田 幹氏の分析では手首を返す「摘む」動作ではなく肘を支点に手を前後に動かす「刈る」動作による使用が想定されるとのことである。とすれば粗製剥片石器と同一動作による使用法ということになるから、朝日遺跡の基本的な身体動作は「刈る」であって、「摘む」はある意味で特殊と言えようか。

今回の出土例では、紐孔に特徴が認められた。基本的には両側からの穿孔で貫通させているようであるが、189は孔径が小さい割に断面が円筒形をなしており、使用された工具が異なると考えられる。穿孔孔と器面との角度では、187・190が斜めに穿孔されている。また187は最終的に円筒形に貫通させられており、穿孔作業が2段階に分かれる可能性がある。

転用品 前回でも報告したように破損品の転用が認められる。

191は紐孔付近を扁平片刃石斧に再加工したものである。左側面は研磨されていないがチーズが剥れたように滑らかで、右側面には節理がみられる。紐孔付近には紐擦れとおもわれる磨耗痕が認められ、紐孔近くでは少し凹面を形成している。おそらく、平面図の刃部側から背部の方向に指を差し込み、指の関節を背に当てて指先を裏面に添えるようにして

使用されたのであろう。磨製石庖丁片を扁平片刃石斧に再加工したものは、弥生中期後葉に属す例が稲沢市一色青海遺跡で出土している。

再生品 破損品の再生については、大形石庖丁では紐孔が複数設けられているもの(184・187)があり、破損後に再加工が行われたことが窺えるが、その場合には大形石庖丁としての再生であった可能性が高い。ただし、184は現状では側縁に敲打が加えられて整形されており、さらに別の製品へと作り変えられようとしているような印象を与える。この点で、189は身も薄く通常サイズではあるが背部に紐孔の痕跡が認められ、もしこれが大形石庖丁の破損品を通常サイズに再生した例とすれば初例となる。188のように身の薄いものがあることからいえば、184も通常サイズへの加工途中にある可能性は残る。

192・193は石庖丁片を加工しているが、何を指したかは不明である。

d 石斧

両刃(図28～31・42)

弥生石器においては通例「大陸系」としての「大型蛤刃石斧」が選別されるようだが、やはりわたしには識別が困難であることから、あえて両刃石斧として一括した。

形態 身部の断面形からおおよそ3種に分類する。つまり、Ⅰ類：身が著しく扁平で幅厚比が0.5前後のもの(たとえば196・202)、Ⅱ類：幅厚比が0.7前後で、断面楕円形のをa類(たとえば198)、主面と側面の間にわずかに稜をもち断面形もやや方形を呈して定角式石斧に類似するものをb類(199)、Ⅲ類：幅厚比が0.9以上で円形に近いもの(たとえば213)、である。

このうち、Ⅲ類はほとんど出土例がなく、Ⅱ類が主体をなす。下条信行氏の説くように単純には大陸系とは呼べないものである。

石材 主要岩石種は塩基性岩、ハイアロクラスタイト、泥岩、頁岩の4種である。このうち色調が黒

色から暗緑色を呈する塩基性岩(前回報告における「玄武岩」はここに含まれる)と緑色から明るい緑色を呈するハイアロクラスタイトを中心とする。前者は縄文時代以来の石材であり、一方後者は弥生時代に使用頻度が上昇する石材である。出土分布ではとりわけ明確な傾向が窺えたわけではないが、前者の頻度が高い点は注目される。この点については弥生中期後葉に属す稲沢市一色青海遺跡では両刃石斧26点中24点がハイアロクラスタイトであったのに対し塩基性岩が磨製石斧関連遺物全体でも66点中1点であったことと、今回の調査区では弥生中期後葉の堅穴建物群が見つかり、両刃石斧にも当該期の資料が確実に含まれていることを考慮するなら、弥生中期前半以前では塩基性岩の使用頻度はさらに高かったものと推測される。

転用品 敲打具への転用が基本的である。197・198は刃部が敲打によって潰れている・主面や側面を使用する場合には凹石と共通した使用痕を残す。200・214は凹部に小さな溝状のくぼみが集積しており、剥片剥離か、挟み打ち(両極打撃)に用いられたのであろう。破損部に敲打痕が見られるものには、205・208・209・214などがある。211は破損部だけでなく主面・側面にも敲打がおよんでおり、敲打調整具として抽出すべきかもしれない。

柱状片刃(図34・35)

形態 抉の有るものと無いものがある。

下条信行氏によれば、抉り入り柱状片刃石斧の場合、身の側面と主面幅の比率から変遷が窺えるとのことである。つまり、主面幅が狭く側面幅が広いものから、主面幅より側面幅が狭くなるものへという扁平化の傾向が年代の変遷に連動しているということである。あわせて抉りの欠落する傾向も見られるらしい。いっぽうそのような変遷観に該当しない資料も存在する。一宮市山中遺跡では確実に弥生前期に属す資料が出土しているが、抉り入り柱状片刃ではあっても、身の幅厚比の小さいものがある。また

朝日遺跡でも塩基性岩ではあっても身の幅厚比の小さいものがあり、この点から柱状片刃石斧に複数の系列があったことが窺える。そこにはサイズと用途の関係が表れていると思われる。

219は右側面に大きな剥離面を残すが剥離縁辺やフィッシャーの凸部が磨耗している。228は刃部後面に敲打が集中し、身の厚さを減じている。再生品であろうか。229は小形品であるにもかかわらず抉り部をもつ。はたして装着方法はどのようであったのだろうか。

抉りの無いものには225のように抉り相当部位の稜線にわずかな凹部の認められるものがある。装着痕というべきか。

石材 両刃石斧や扁平片刃では塩基性岩やハイアロクラスタイトが95%以上であるのに対し、柱状片刃石斧では頁岩・泥岩が21%と比率が高い。これは時期的に弥生前期を含んでいることによるのであろう。この点については、弥生前期単純の石器は少ないが、一宮市山中遺跡出土資料が参考になる。

扁平片刃 (図36～38)

朝日遺跡では破損品が新たに再生されて扁平片刃石斧として使用されるものが出土していることを前回報告した。破損後の再生であるから法量上はばらつく可能性もあるが、それでも長幅比から分類できることがわかった。つまり、破損品が再生されるにあたっては単に刃部が新たに作り出されるのみというわけではなく、柄への装着という規制要因が一定程度働いて規格的となっていたということである。

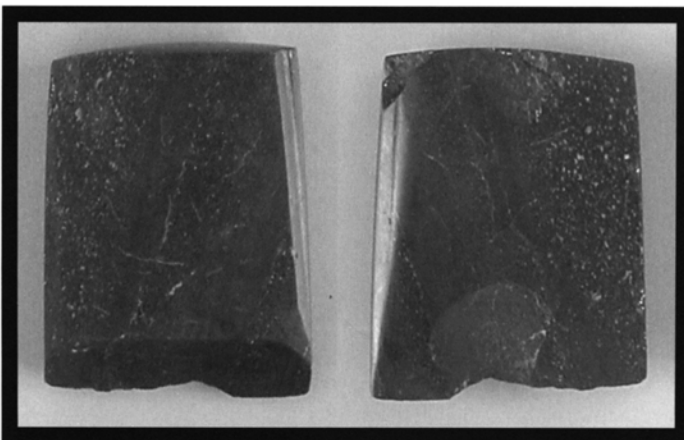
したがって、分類については前回報告案で問題がないと考える。

石材 石材は両刃にくらべてハイアロクラスタイトの比率が上昇する。そして新たにホルンフェルス、泥岩、安山岩、凝灰岩が加わり、珍しいのは下呂石裂が認められることである。ハイアロクラスタイト裂が比率を上げることは弥生中期後半に属す資料の比率が高いことを窺わせるものであり、さらに下呂石や安山岩の使用もハイアロクラスタイトに収斂される弥生中期後葉段階において同種の石材ではないにしてもハイアロクラスタイト以外の石材が出土している甚目寺町大測遺跡の様相に類似するといえる。弥生前期に属す扁平片刃石斧の石材として塩基性岩の使用頻度が高いことを重視するなら、こうした石材の分散傾向は弥生中期後葉の個別生産に関連した可能性が高い。蜂谷晴美氏の説く終末期石器の様相といえるだろうか。まさに自家生産と一元的生産が交代するそのときで、それゆえに遺跡差の把握が重要になるといえようか。

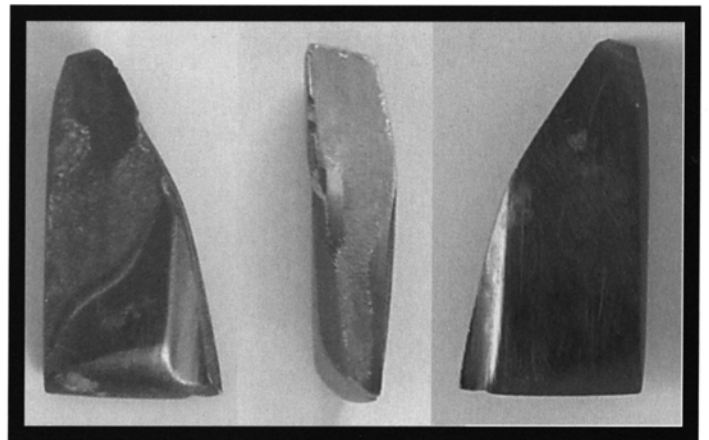
形態 平面形は輪郭が直線的な方形をなし、一方には主面・側面とも整形が丁寧で整った断面形のもの、もう一方には全体に剥離面の占める割合が高く主面・側面とも曲面で断面も不整形なものがあり、その間を各種変異が埋める。後者およびそれに近い一群は再生品がほとんどであると思われる。再生品については後に未成品の項で触れる。

未成品

前回の報告では未成品には2種類認められると述



269



270

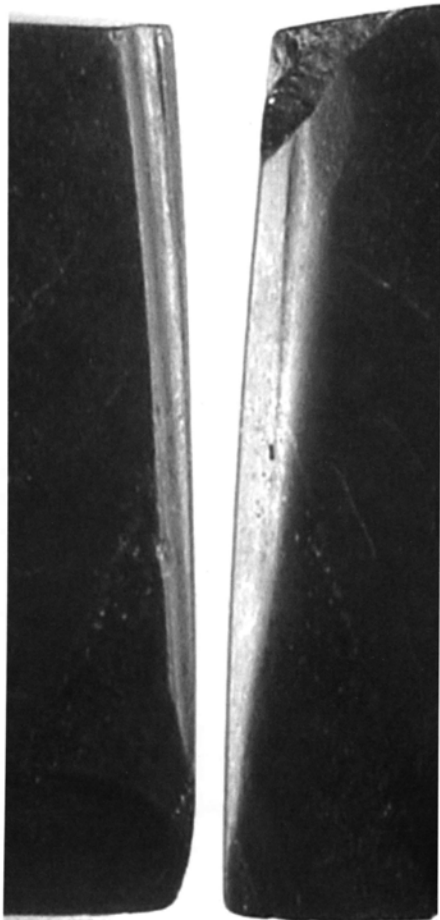
べた。すなわち、Ⅰ類：研磨痕がまったく認められず原石段階からの一貫した生産過程に属すもの、Ⅱ類：研磨痕や磨耗した敲打痕が認められるもので、破損した石斧を素材として再生されたもの、である。

今回もこの区分案を踏襲するが、Ⅱ類がほとんどでⅠ類は僅少である。また、Ⅰ類は製作工程の中途断絶で完成品にならなかったものではなく、ただの失敗品であるために形態としての安定性に欠ける。

Ⅰ類 (図40・43)

12点を抽出したが、石材に不適当なものがあり誤差を含む。282～290が該当する。282～286は扁平片刃、287～289が柱状片刃の未成品であろうか。290はよくわからない。287・288・290は自然面を残している。

291～294は未成品Ⅰ類に含めるべきか迷うものである。291は両刃の破片で、側面に敲打が集中している。292は敲打面と自然面をもつ。製作時における調整剥片であろう。293は打製石斧のようだ。294はハイアロクラストイトだが、不定形である。



269

Ⅱ類 (図32・33・39・41)

未成品Ⅱ類は39点で、前回と同様に多い。しかし、なぜか他遺跡ではほとんど注目されていない資料である。とにかく朝日遺跡では目立つ。

これまで整理したところを言えば、次のようになる。

① 両刃石斧の破損品を素材にして、そのまま長さの短い両刃石斧に再生する場合と、扁平片刃石斧や柱状片刃石斧に再生する場合とがある。215は両刃石斧の刃部側破片を加工しているものだが、扁平片刃にするには身が厚い。柱状片刃石斧の未成品か。212は両刃石斧の破損品を部分的に加工しているが、上下端に磨耗痕が認められ、製品化が放棄されて転用されたものようだ。217は両刃石斧の破片を素材にして小さな両刃石斧を作ろうとしている。242は前主面に一次成形の敲打痕が認められ、しかも曲面であることから、両刃石斧片を素材としている可能性が高い。272・276も両刃石斧破損素材からの製作か？273は平坦面には敲打痕、側面には研磨面が認められる。279は大形扁平片刃石斧の破損素材を整形している。左図の左側縁には再生時の敲打痕、右側縁には一次成形の研磨面が認められる。274・277・280・281は表裏に研磨面が認められ、扁平片刃石斧片であることがわかる。

② 扁平片刃石斧の破損品をもとに、それよりは長さの短い扁平片刃石斧に再生する場合(263・265)と、幅の狭い片刃石斧(240・241・244・277)、もしくは石ノミ(小型柱状片刃石斧)に再生する場合とがあり、後者では成形(粗割に相当するか?)に際して、268～270のように主面両面から縦に溝を切って切断されるものがある。268は溝が片面にしか施されておらず、また浅いので切断用であるのかどうかは確定しない。270は斜めに割れており、溝切りの効果は十分ではないようだ。

③ 柱状片刃石斧の破損品をもとに、それよりは長さが短い柱状片刃石斧に再生する。264や小形品では233が該当しよう。

④ 破損時や再生加工時に生じた剥片をもとに小形の扁平片刃石斧や柱状片刃石斧（石ノミ）を製作する。236・289などが該当しよう。

以上の4つにほぼまとめることができる。

再生品の特徴では、①の場合両刃石斧では側面観が非対称で不安定なものや、扁平片刃石斧では主面が凸面をなしたり、大きな剥離面だけでなく小さな剥離面を多く残す場合がある。

②では、破損部を基部としたものに調整仕上げの悪いものが多いように思う。たとえば、基端面付近で剥離痕や潰れ痕が目立つ、敲打により仕上げられていても基端面が凸面であったり平面形の輪郭が曲線的である、基端面が一方の側面側に傾斜していたりなど、である。破損部を刃部としたものについては、研磨直前の敲打整形段階のものがなく、また剥離整形段階のものもほとんどないためによくわからない。斧としての機能でいえば、刃部が最重要であることはあきらかで、ゆえに不定形なものはないのかもしれない。

④は再生というよりは新規の生産といえるが、丁寧に製作されてしまえば識別は困難である。わかる資料では、残存する剥離面が多く側面観の不安定なものが該当するであろう

ところで、Ⅰ類とⅡ類を含めた未成品出土率では、前回報告分では両刃石斧が製品に対して12%強、扁平と柱状を含めた片刃石斧類が同39%弱であった。今回の未成品比率は、両刃石斧で4%弱、片刃石斧類が20%強であり、片刃類の未成品比率の方が高い。しかも扁平・柱状ともに20%であり、偶然の一致にはできすぎている。

両刃に比べて未成品比率が高いのは、両刃石斧が再加工される場合に片刃石斧である場合が多いという傾向を反映しているのであろう。

e 環石 (図45・46)

朝日遺跡では環石の出土量が他遺跡に比べて圧倒的である。未成品は敲打成形段階破損品と穿孔段階

破損品で、失敗品である。

f 紡錘車 (図49)

非常に整った形態で、弥生前期に属す可能性が高い。

C. その他

a 石錘 (図47・48)

打欠、敲打、切目の3種に区分できる。このうち切目は縄文時代に属す可能性が高い。

b 砥石 (図63～70)

砥石の多くは破損し断片化する傾向にあり、敲打具への転用も通常の流れである。破損を免れたものは少ない。417は弥生Ⅵ期の竪穴建物跡から出土したもので、古墳時代例と形状が共通しており、鉄器用と考えられる。

朝日遺跡では溝をもつものが多い。溝には幅広から幅狭、断面形状も角張ったものから円いものまである。角張ったものは鉄器もしくは刃部の研磨であろう。断面が円く整った溝が多条に平行するものは玉砥石とされるが、今回の調査区から玉石材は出土しているものの確実な工具類の出土がなく、玉関連とは思われない。磨製石器製作における細部研磨、もしくは骨角器製作に関係するのであろう。

c 凹石・叩き石 (図71～81)

凹石を、敲打が表面広くにではなく、部分的に集中してその箇所が凹面をなすものであるとすれば、叩き石との区分は難しくなる。大形で重量があるものは据え置いて使用されるだろうから、故に叩き石にはならないので凹石といえるが、手に持って用いる小型品については区別が難しくなる。すくなくとも、凹石が使用痕跡の形状を指しているのに対して、叩き石が用い方を指しているという分類基準の相違が区分を難しくしていることは明らかで、逆に言えば一個体が叩き石かつ凹石ということもあるわけだから、両者にまたがらない分類基準を設ける必要がある。

そこで、ここでは叩き石を、専ら広い平坦面を機能部とすることなく側面や稜線などの狭い部分を用い、特定部分に集中した使用痕跡を残さないものとする。これに該当するのは、棒状礫の両端に敲打痕のあるものや角礫の稜線に敲打痕を残すものということになる。ただ、これでもどっちつかずのものはあり、最終解決案ではない。

凹石の使用痕 凹部は、平面円形で断面すり鉢状、凹面が比較的滑らかな臼状を呈するものから凹面が不定形な広がりをもちアバタ状をなすものまで、凹部が複数面に分布し多数あるものから単一面に一つのものまで、凹部が明確なものから微弱なものまで、の範囲で多様な変異がある。最後の微弱なものなどは、定義上は凹石とは言えないものまでである。すなわちこれらの変異は、同一の個体がどれだけ使い続けられたか、つまり使用痕の経時変化に対応しているのであり、要は何時廃棄されたのかという時間の問題に集約される。それぞれが特定の用法に対応した固有の使用痕というわけではない。したがって、凹部の分類を厳密にしても、要は程度の問題に過ぎなくなるわけで、凹部の分類を試みてもなかなかうまくいかないのが実情である。

朝日遺跡資料では、アバタ状にも2種類があり、打撃痕が泡状に集中するものと、線状痕が集中するものがある。後者については下呂石以下の石核の稜線、または剥片をはさみ打ちする際に形成されたものと考えられ、同様の痕跡は粗製剥片石器の縁辺や一部平坦面にも認められる。

d 敲打調整具

通常の叩き石とは異なり、敲打痕が立体的かつ面的に発達するもので、部分敲打の叩き石とは区別される。多面体もしくは球状が典型的である。小型のものもあり、手で直接把持するのではなく、対象物とハンマーの間に置いて（かませ）用いるものであろう。敲打成形および敲打整形に用いられる道具と考えられる。

朝日遺跡における石器生産で敲打段階が確認できる石器には、磨製両刃石斧・磨製片刃石斧（中小型扁平、小型柱状を除く）の未成品や、環状石斧、環石、石錘などがあり、これらの製作に使用されたのであろう。

石材は塩基性岩以下各種あり、それぞれの石器岩材種との対応関係が想定される。

e 玉関係

製品は出土していない。溝切具の可能性のある片岩や硅化木が出土している。玉原石はメノウや緑色凝灰岩の石核、緑色凝灰岩の剥片が出土している。

D. 不明石器（図44）

295は敲打整形の途中で廃棄されている。下方の舌状部分が上方で広がって左右側縁に突起をつくるようだが、片方は取り除かれている。突起部分は相対せず、ずれた位置にある。独鈷石にしては扁平で、「戈」にしては下部が長い。「有角石器」に近い印象を受ける。

296は小型のノミ状石器。断面は楕円形でいわゆる石ノミではない。

298は指先状で、豊川市麻生田大橋遺跡の丸ノミ状石器に似ているが、刃部は作り出されていない。

299は穿孔途中の未成品であるが、平面形は不整形で環石ではない。

300は棒状の礫に敲打を加えて整形したもので、未成品であろう。石ノミとするには石材が異なる。

297は石材が塩基性岩である。柱状片刃石斧の未成品にしては身が扁平すぎる。

図示はしていないが、砂岩製でおそらくは砥石片を利用したものであろう、玩具のような異形品がある。この他使用目的は不明だが、平滑な平坦面をもつものを含めて軽石が405点出土している。

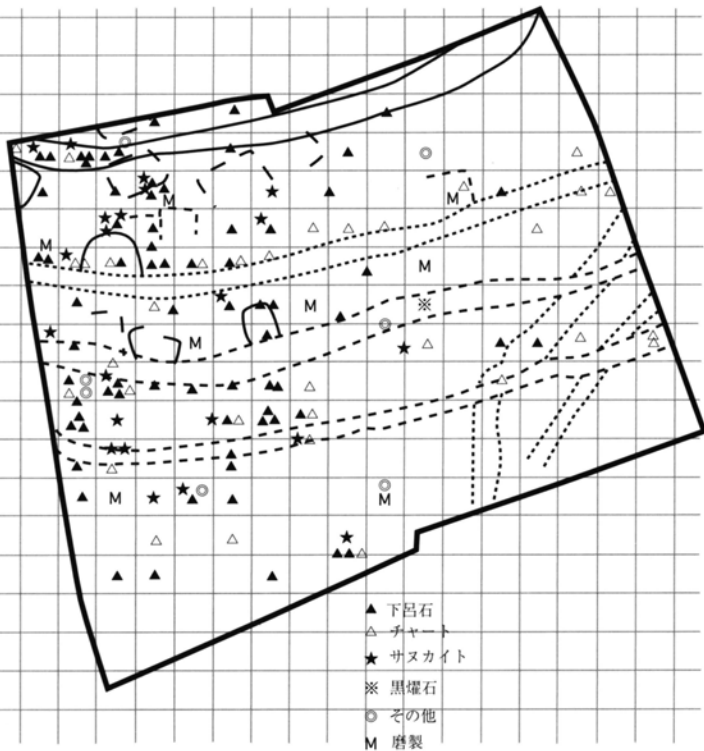


図8 石鏃出土分布

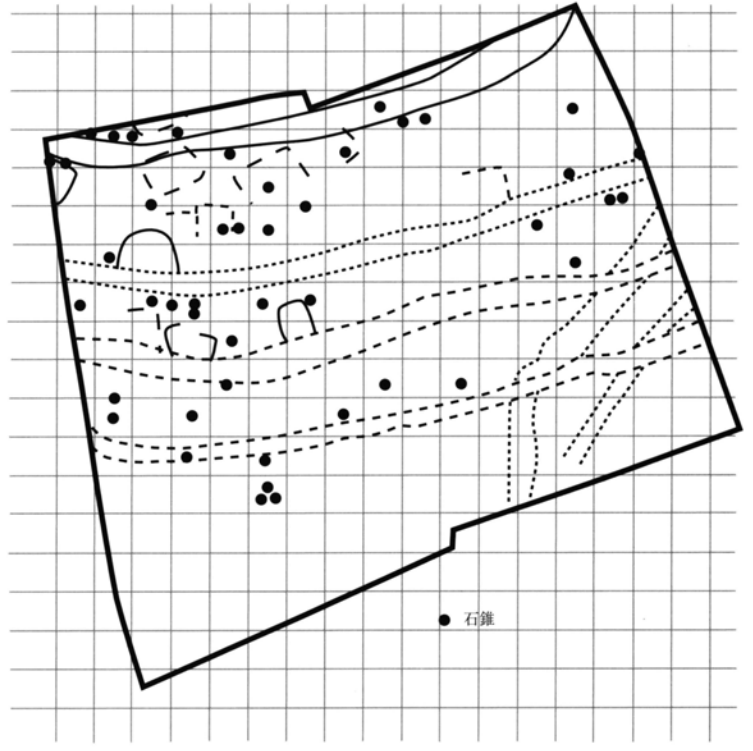


図9 石鏃出土分布

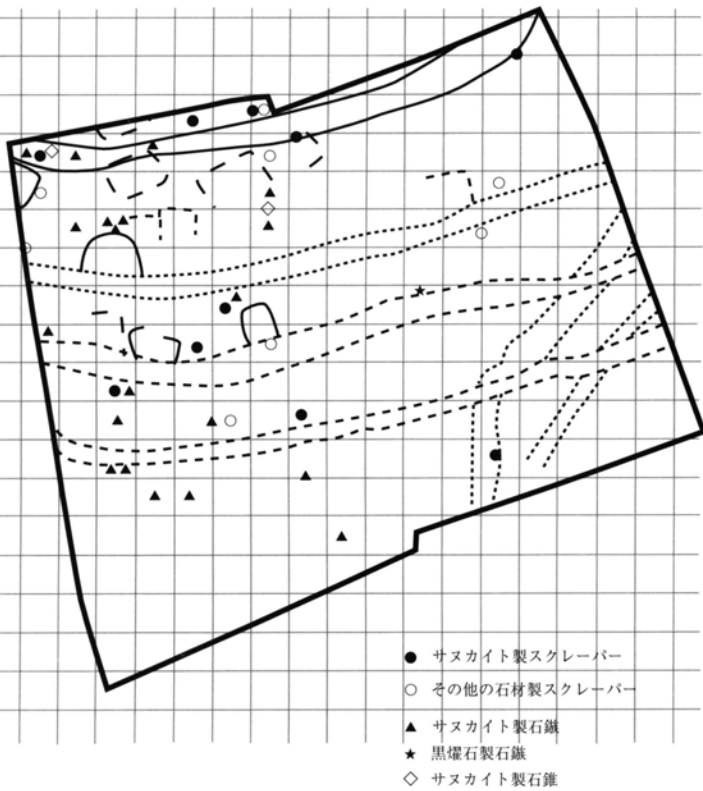


図10 サスカイト製品出土分布

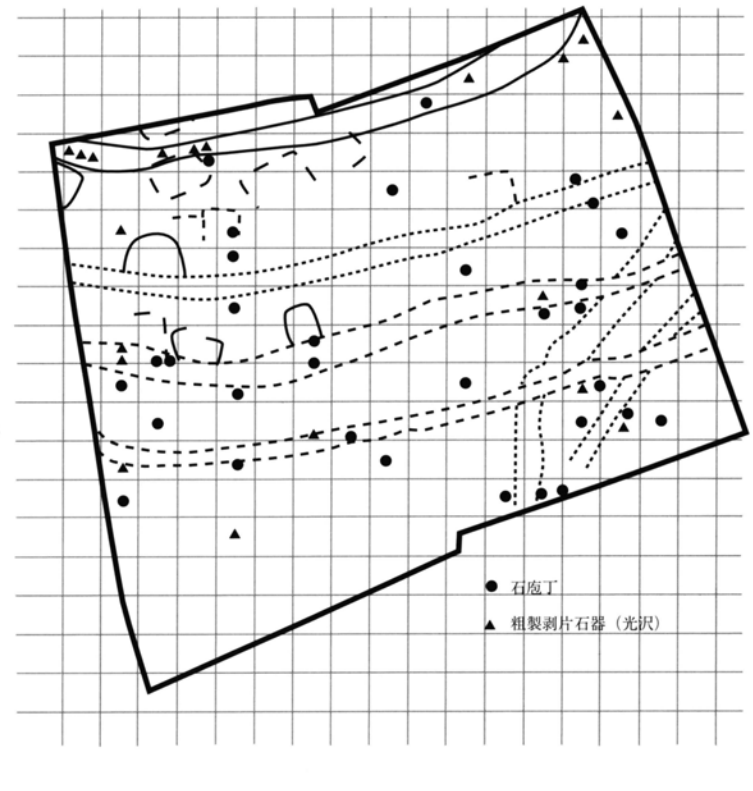


図11 石庖丁と粗製剥片石器 (光沢あり)

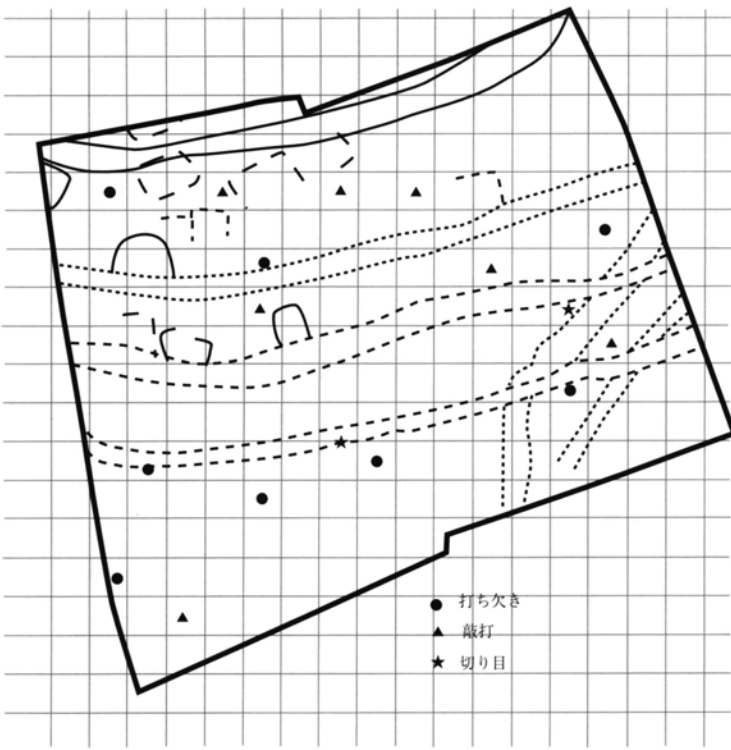


图 12 石錐出土分布

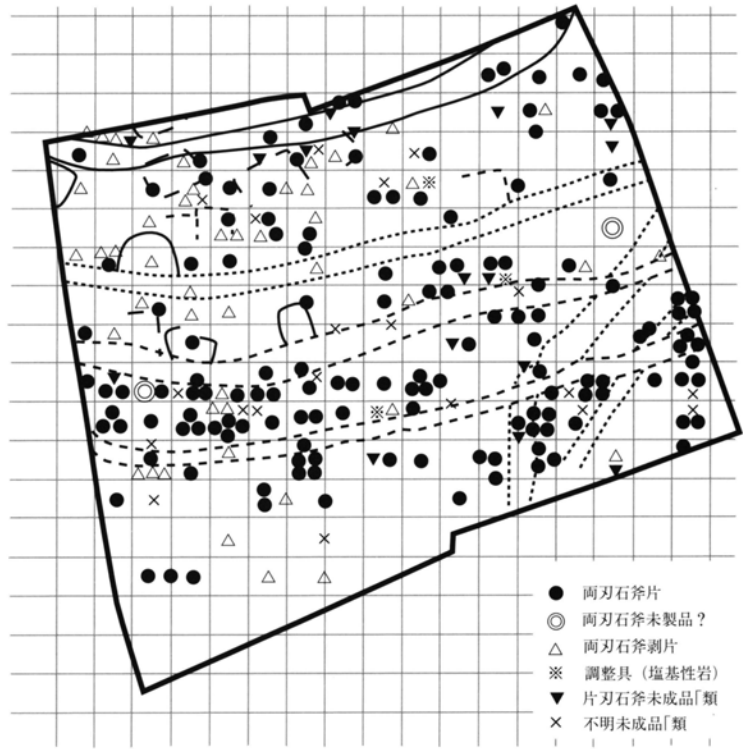


图 13 磨製石斧生産関連分布

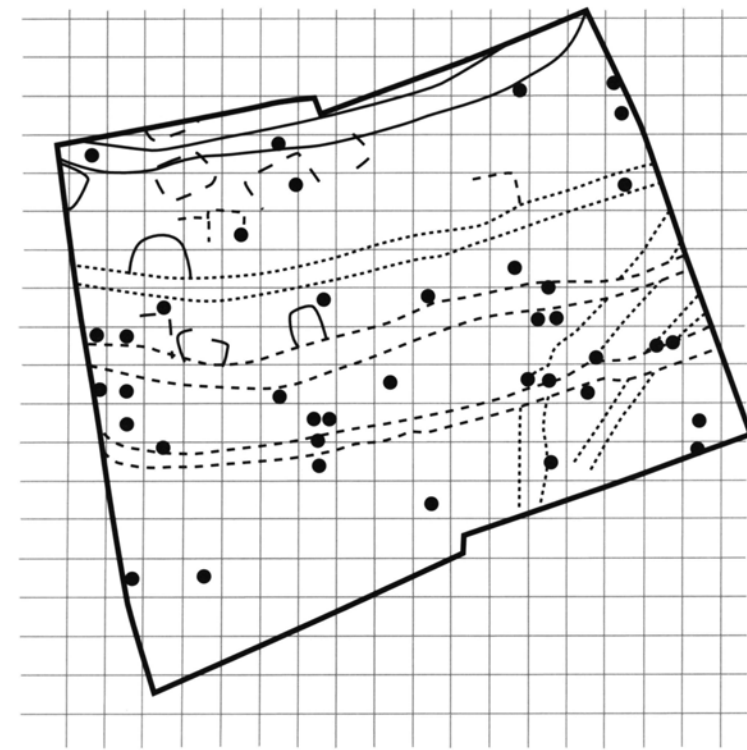


图 14 両刃石斧刃部片分布

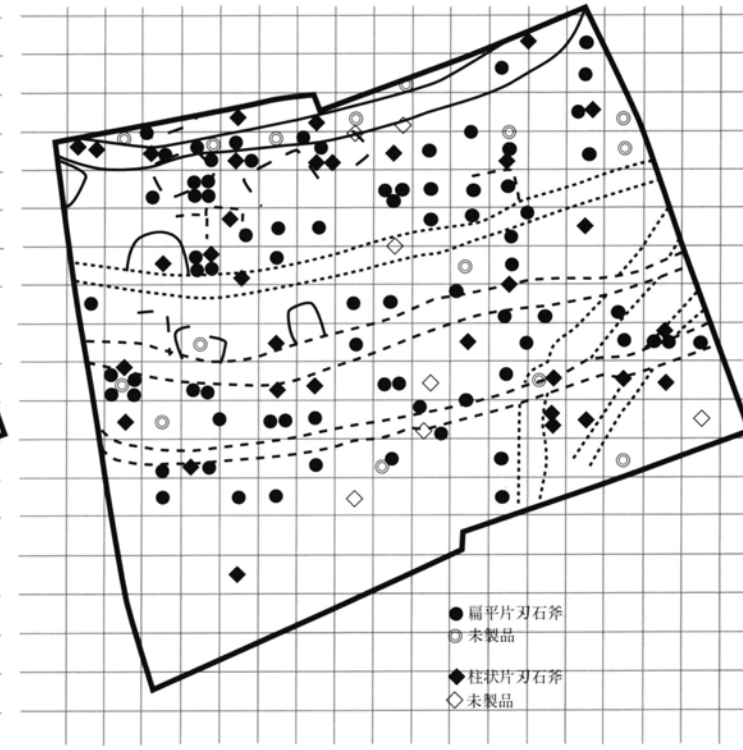


图 15 片刃石斧関連分布

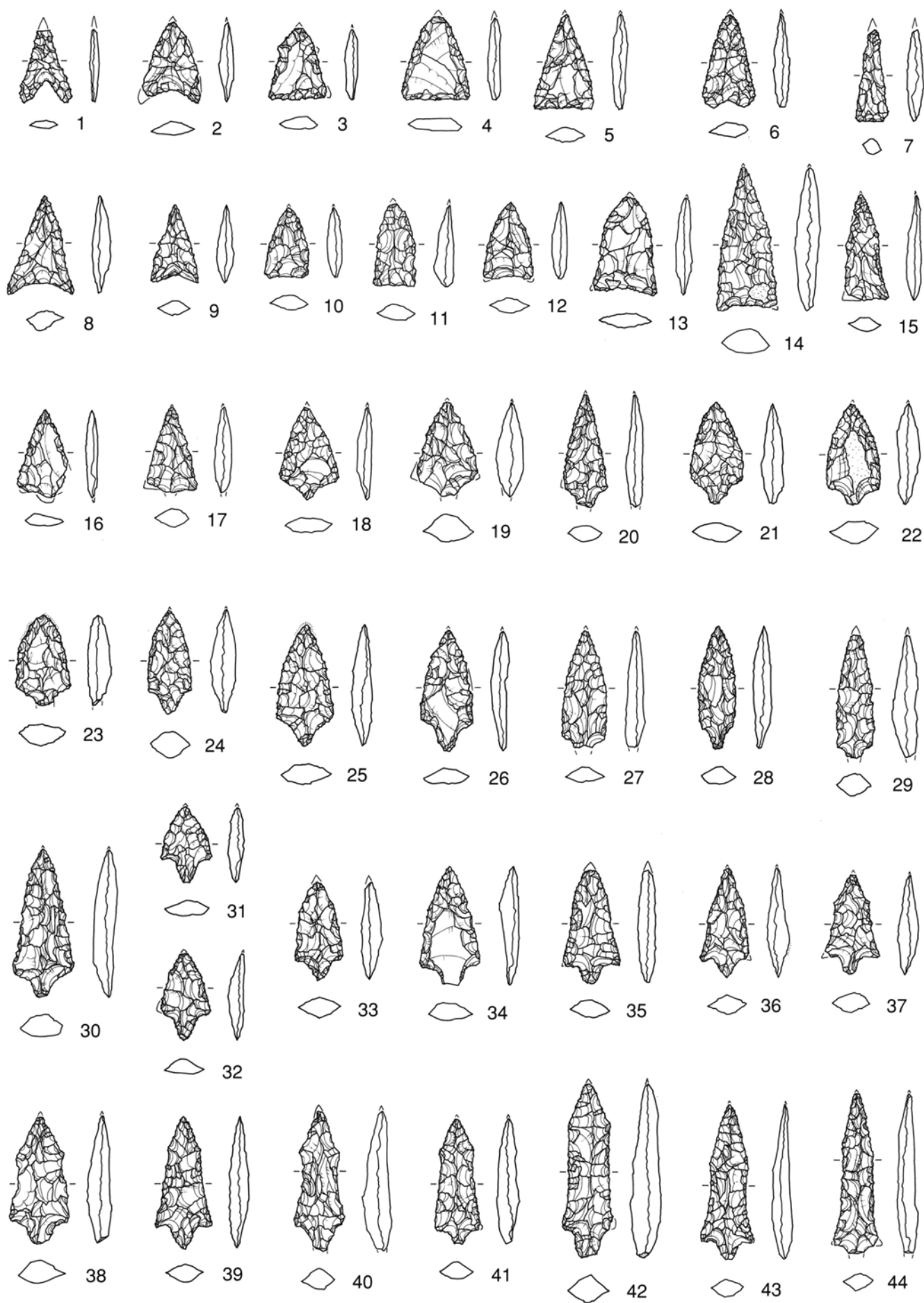


图16 石鏃 (1)

(1/3)

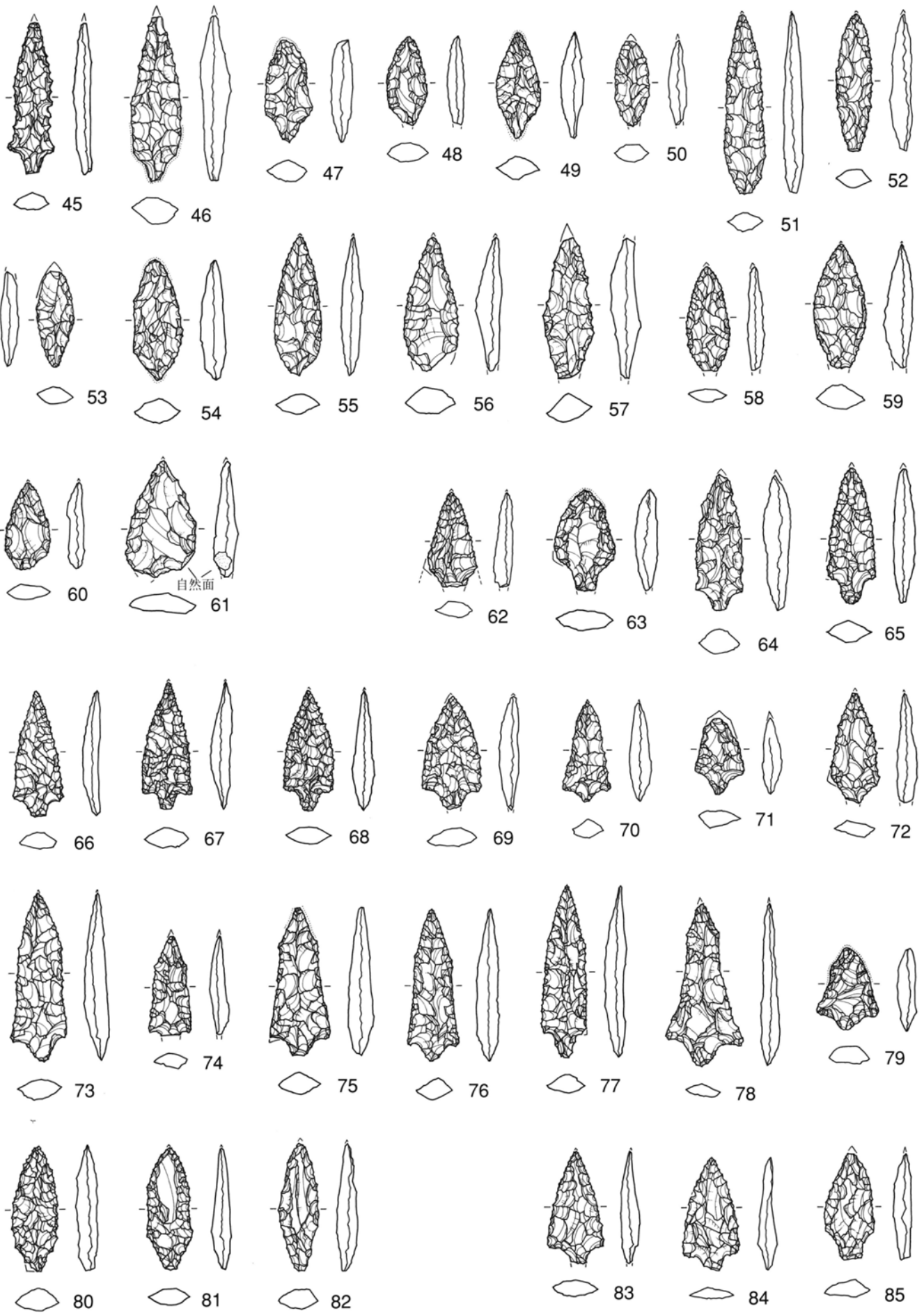


图17 石鏃 (2)

(1/3)

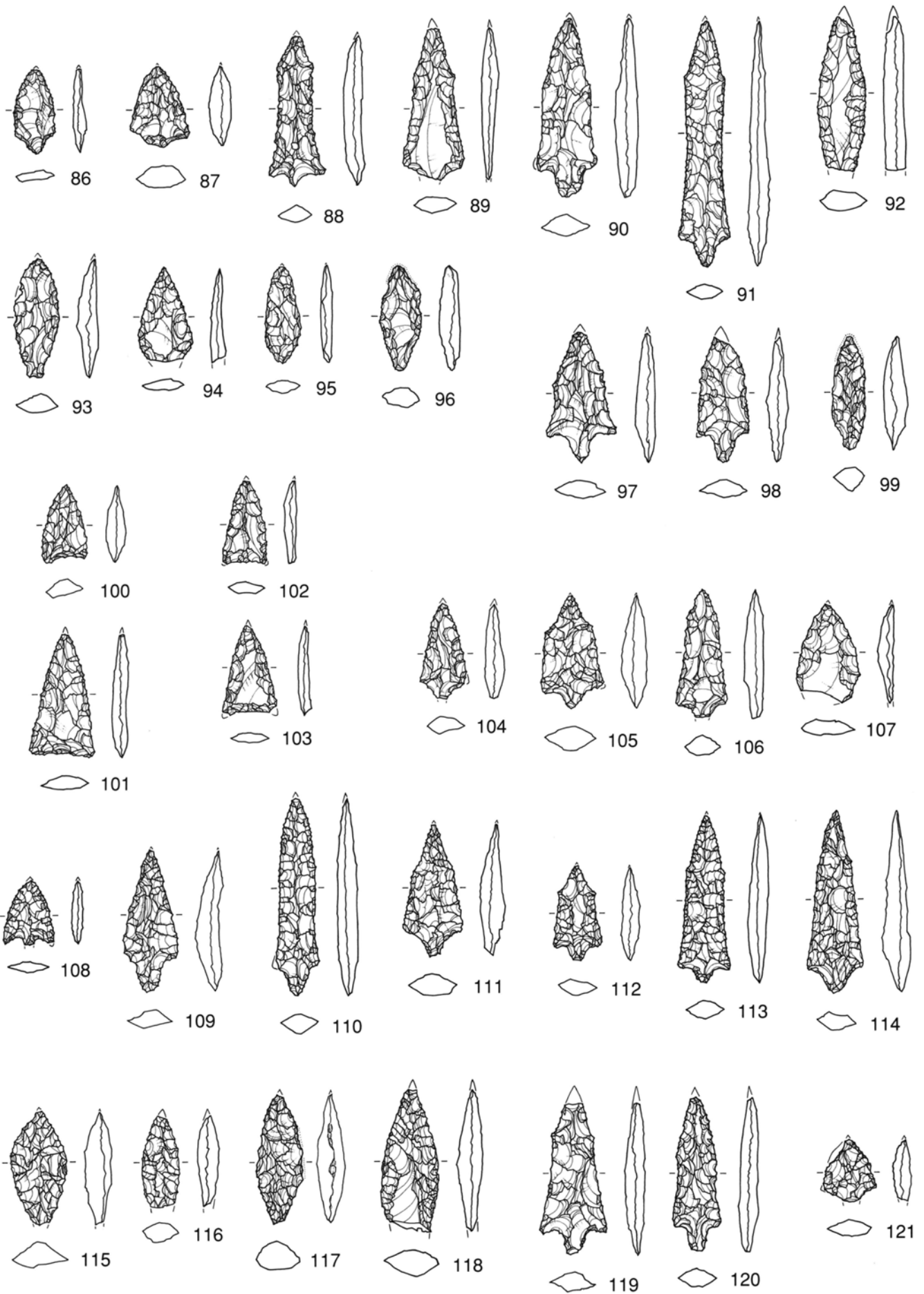


図18 石鏃 (3)

(1/3)

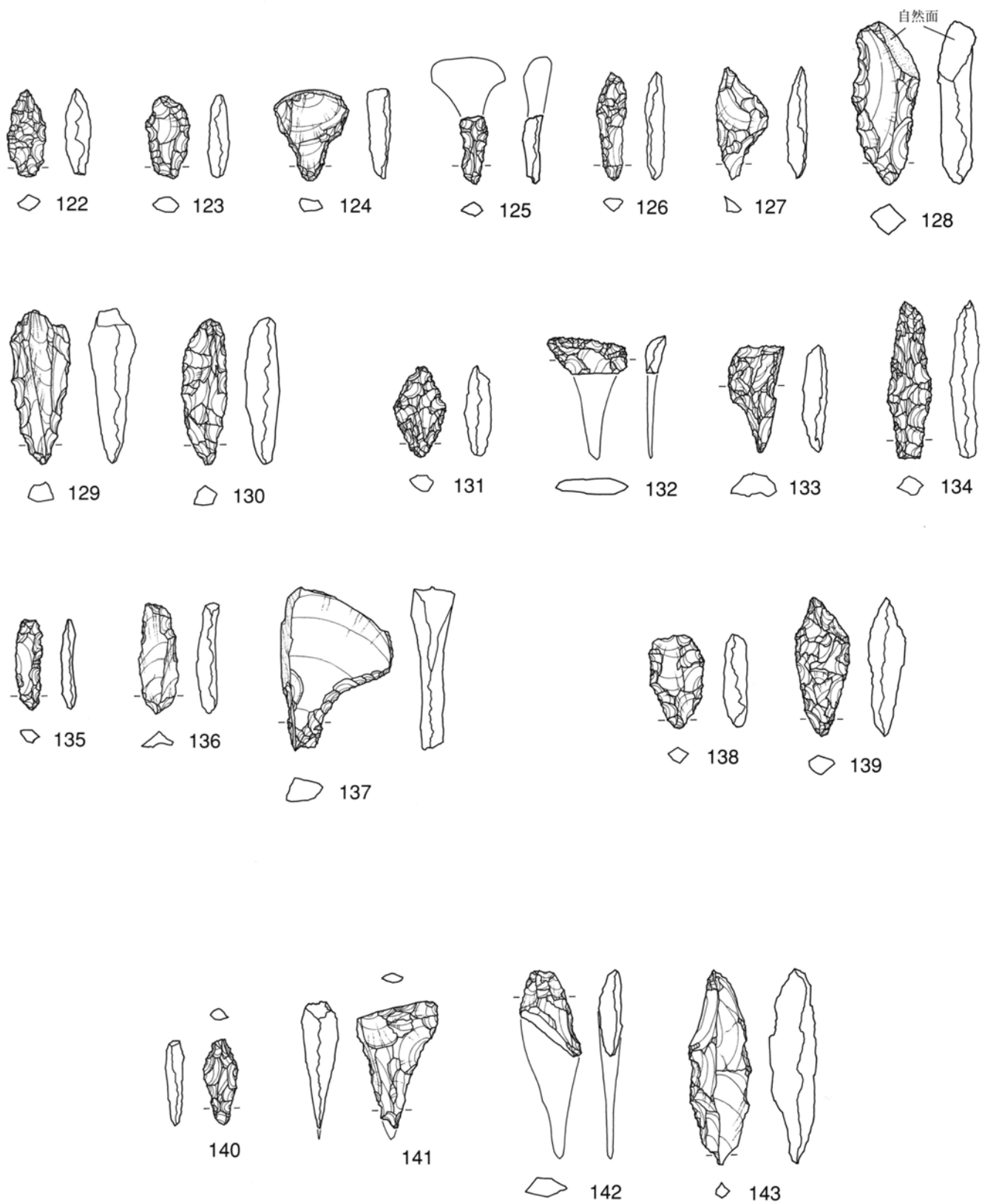
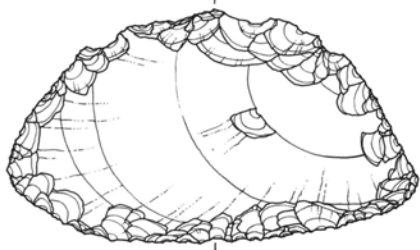
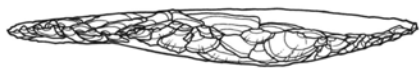
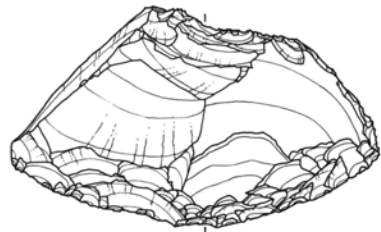


图 19 石錐



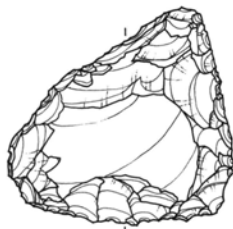
144



145



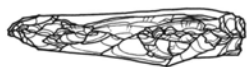
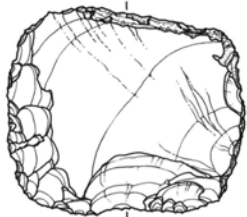
146



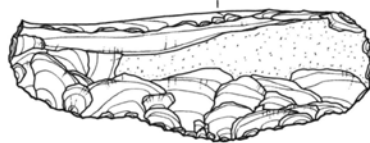
147



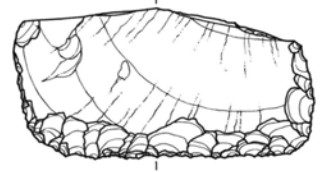
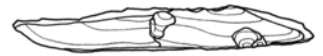
148



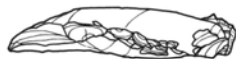
149



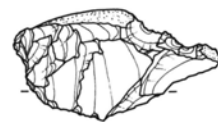
150



151



152



153

図20 スクレーパー (1)

(1/3)

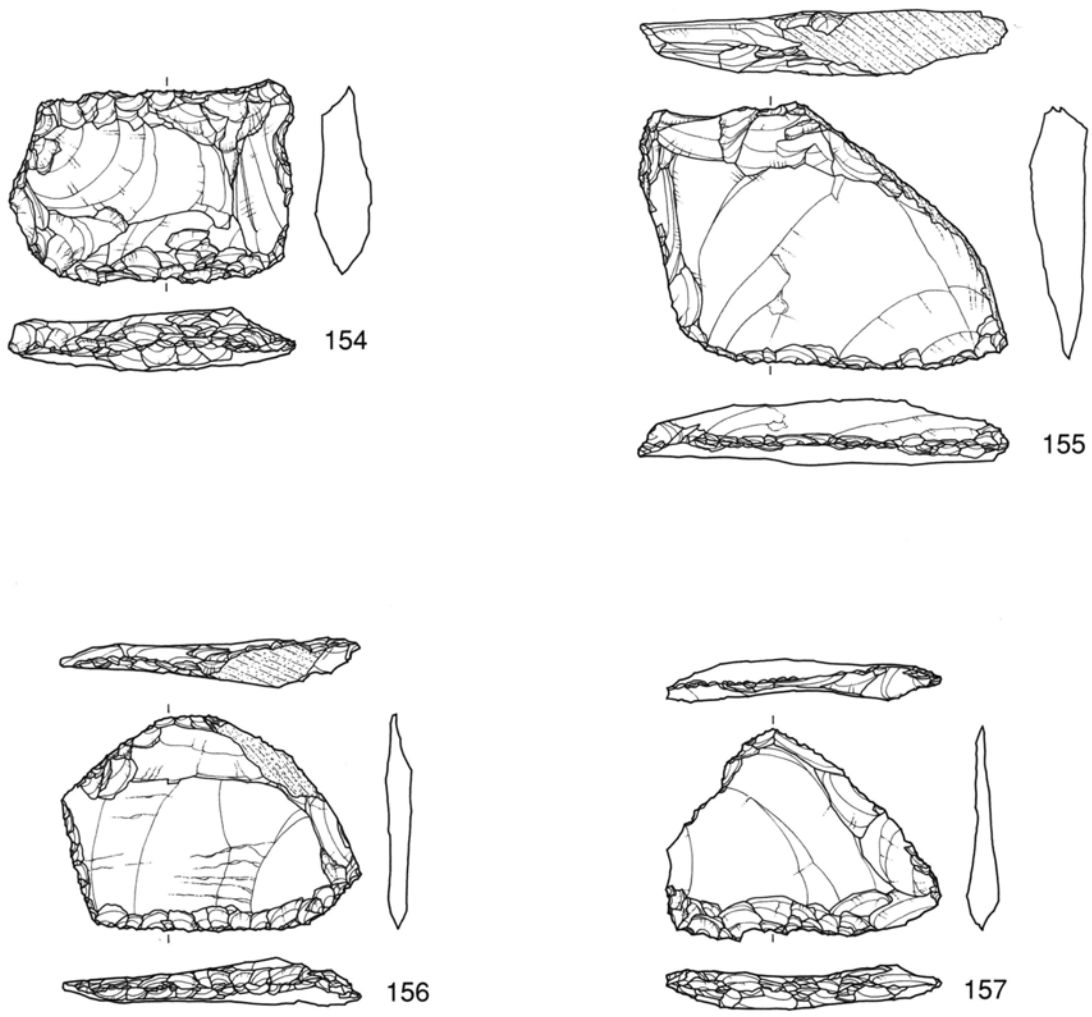
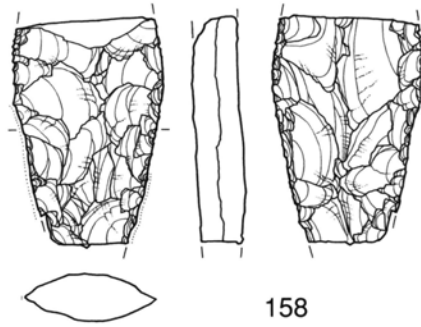
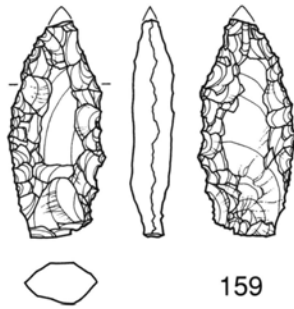


図21 スクレーパー (2)

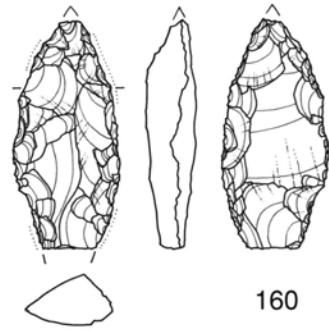
(1/3)



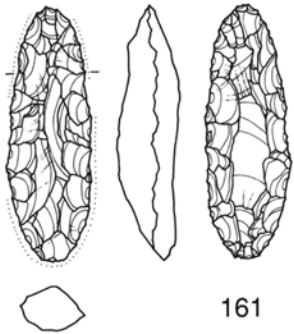
158



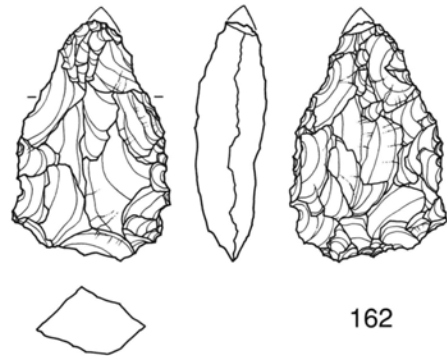
159



160



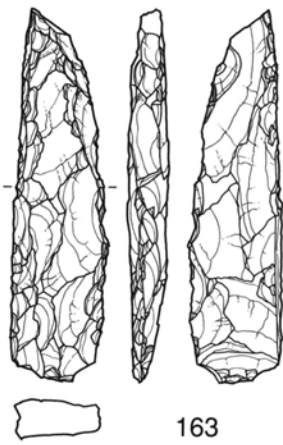
161



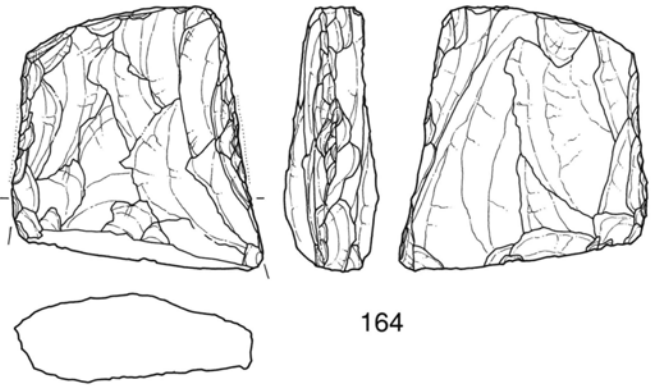
162

图 22 打製尖頭器

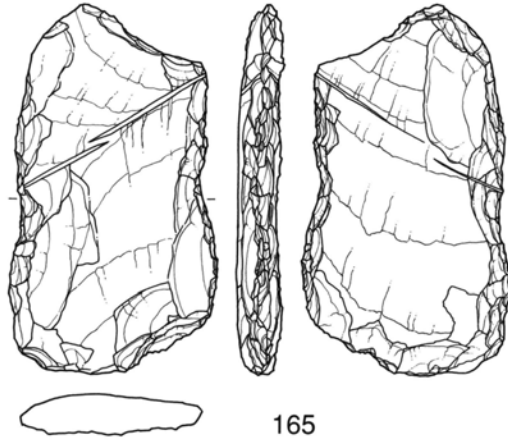
(1/3)



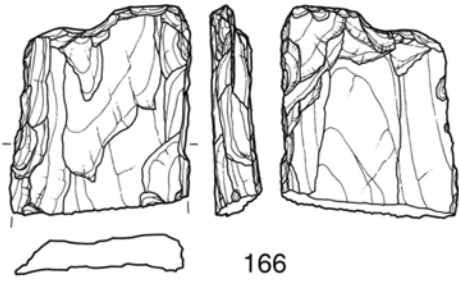
163



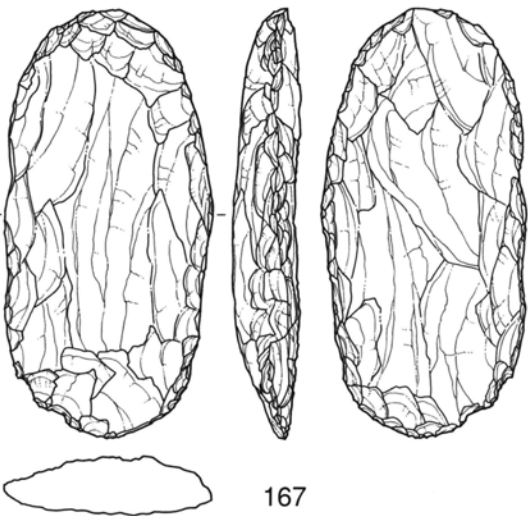
164



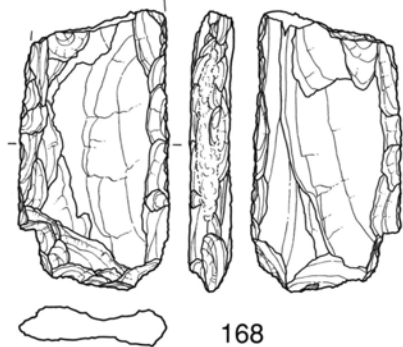
165



166



167



168

图 23 打製石斧 (1)

(1/2)

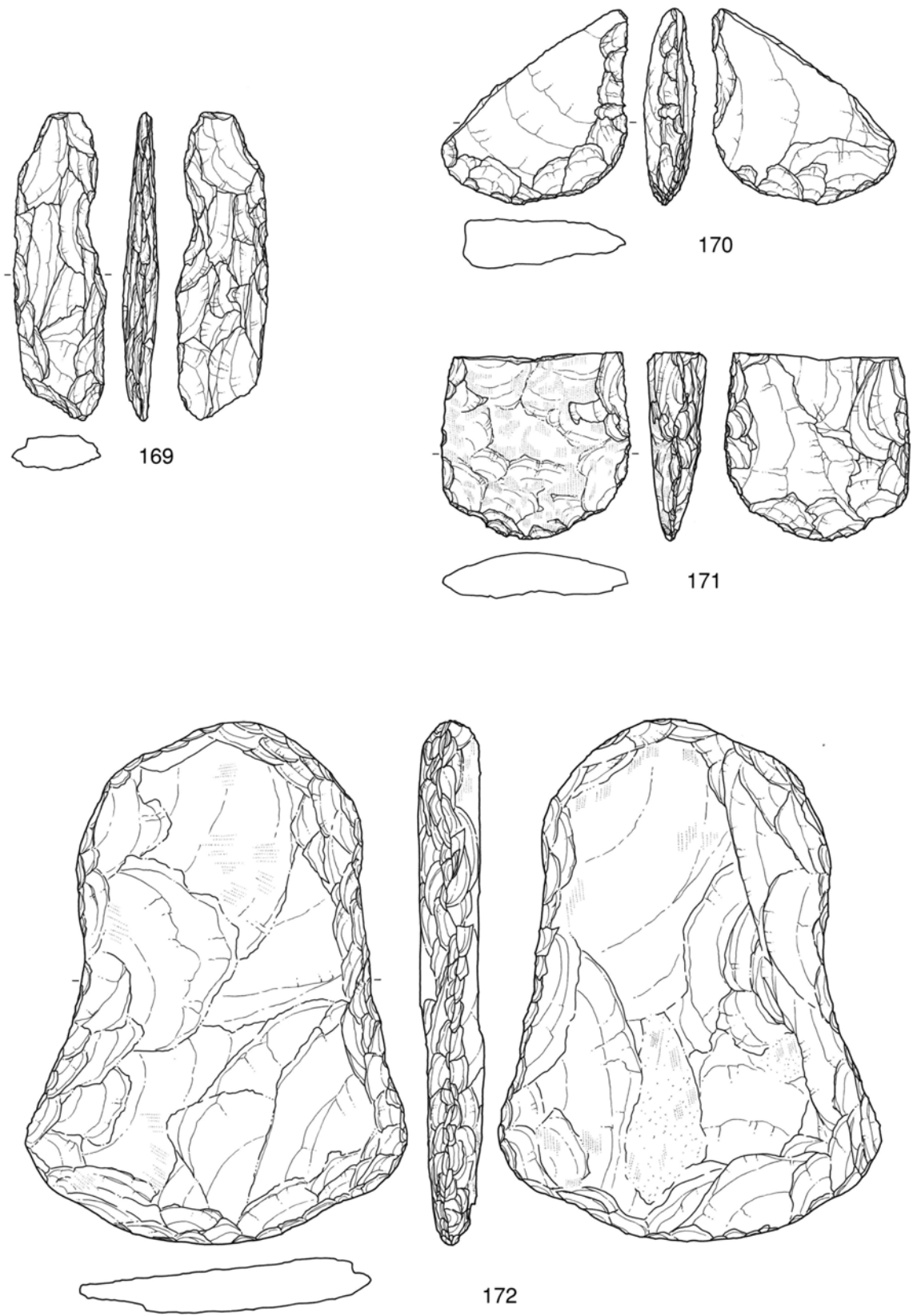


图24 打製石斧(2)

(1/2)

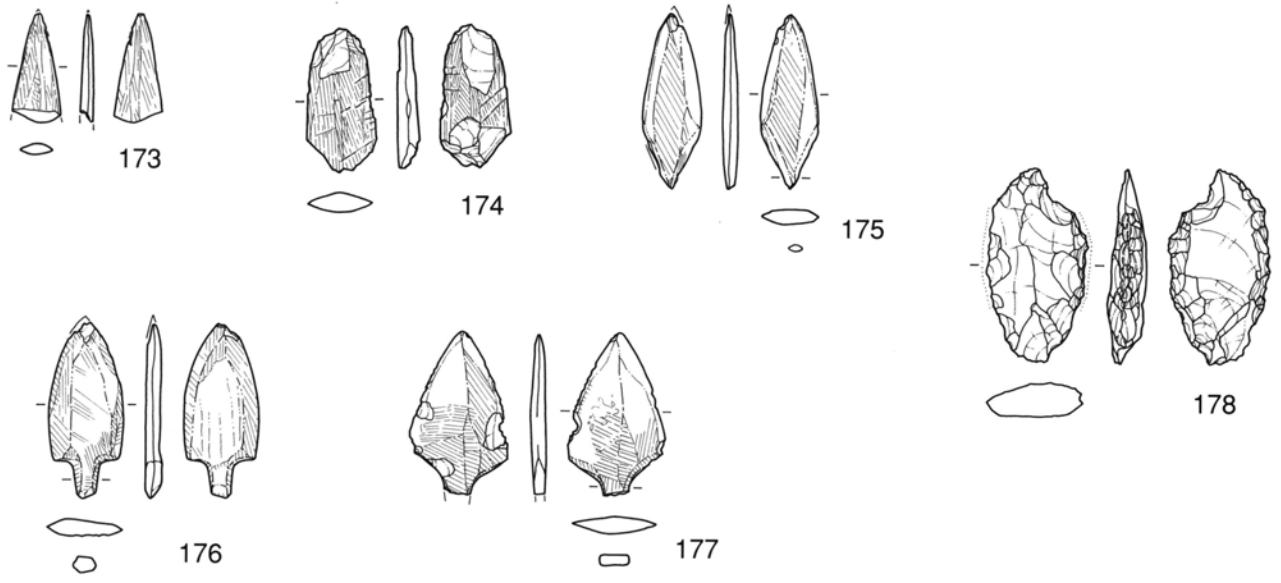


图25 磨製石鏟

(1/2)

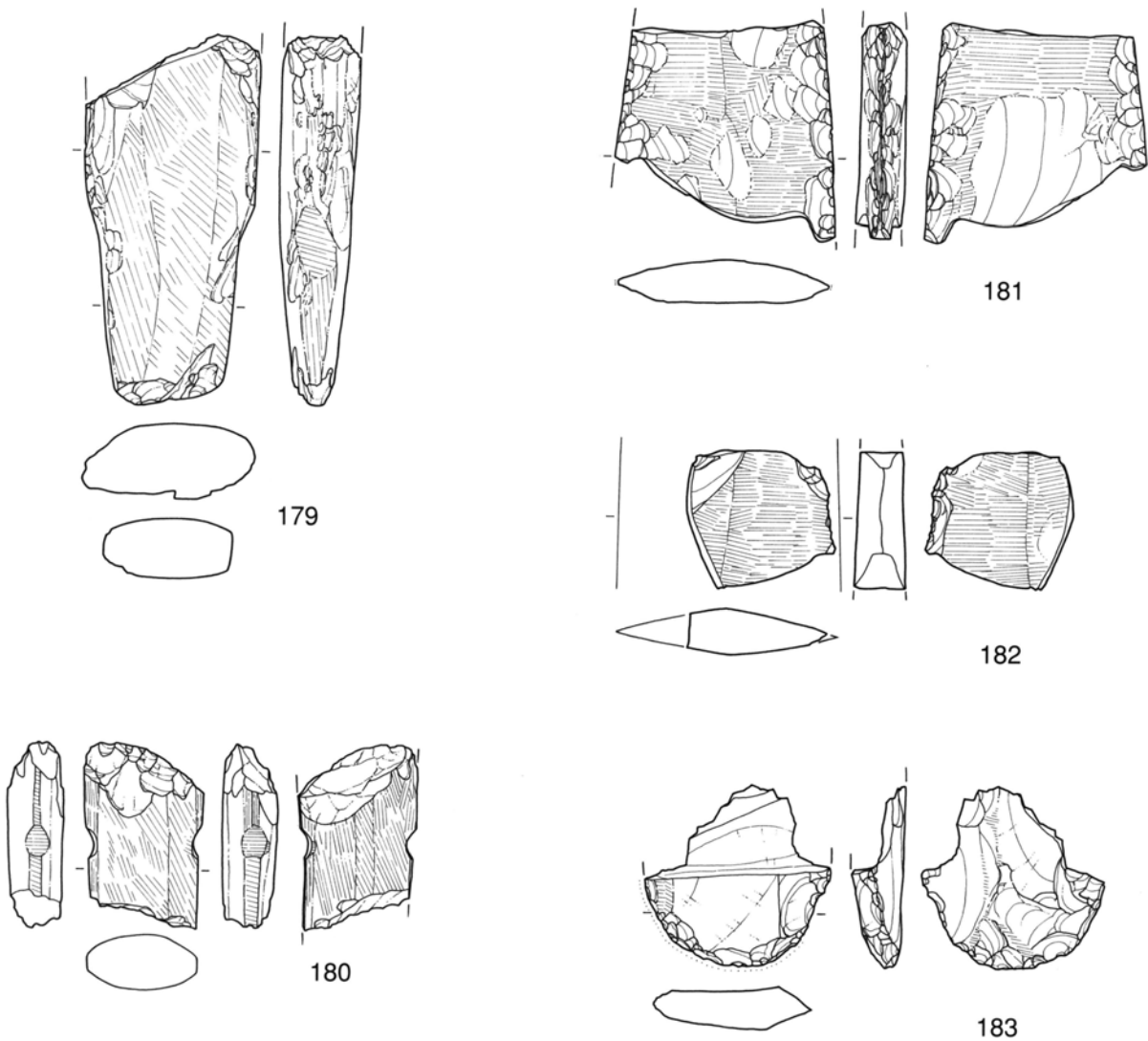
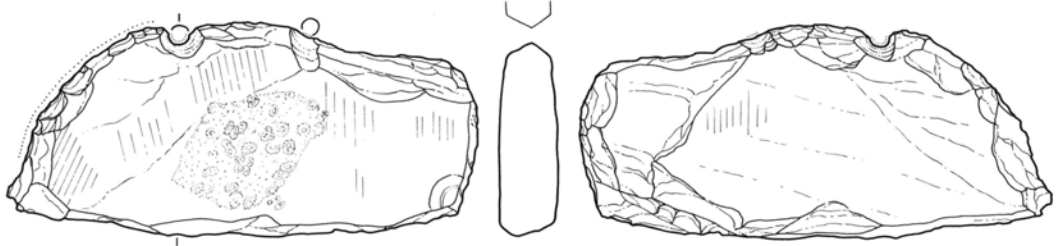
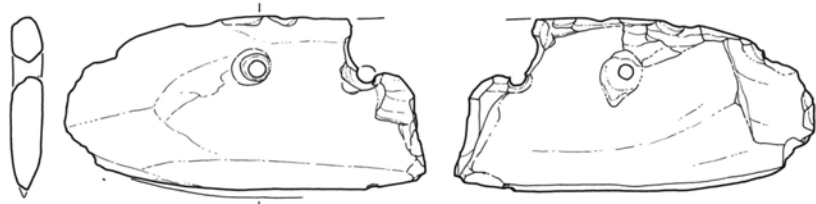


图26 磨製大形尖頭器

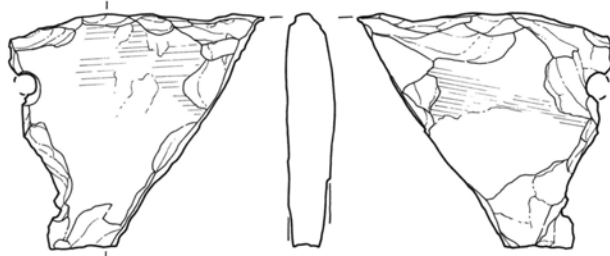
(1/2)



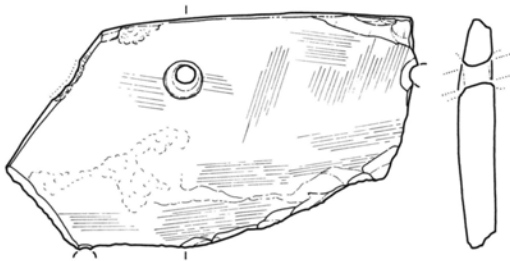
184



185



186



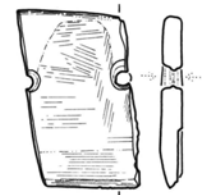
187



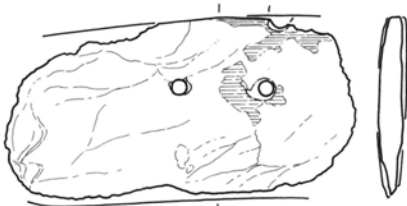
190



188



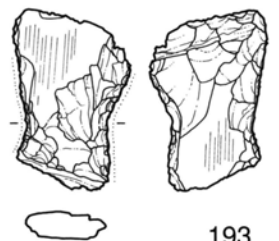
191



189



192



193

图27 石庖丁

(1/2)

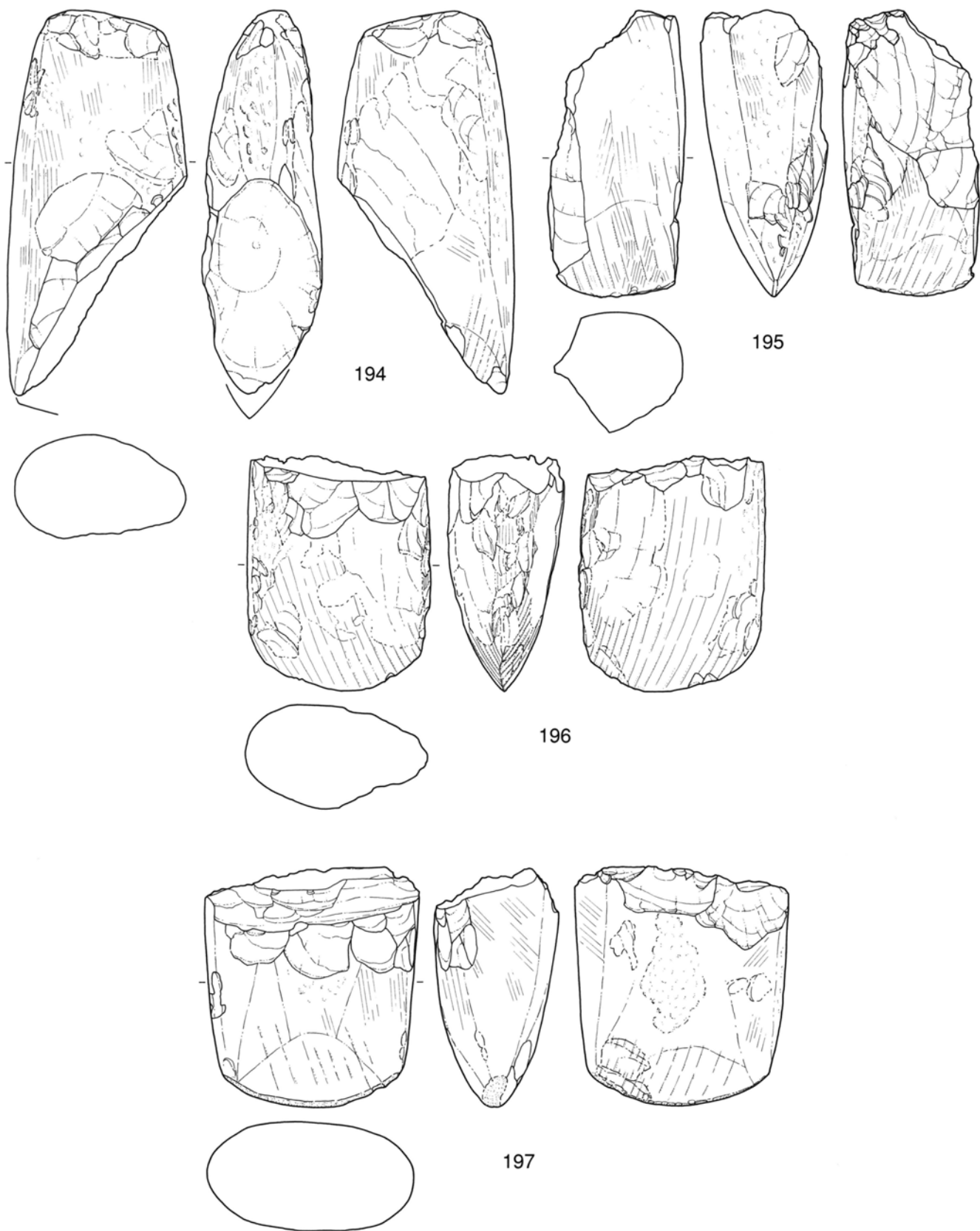


图28 两刃石斧(1)

(1/2)

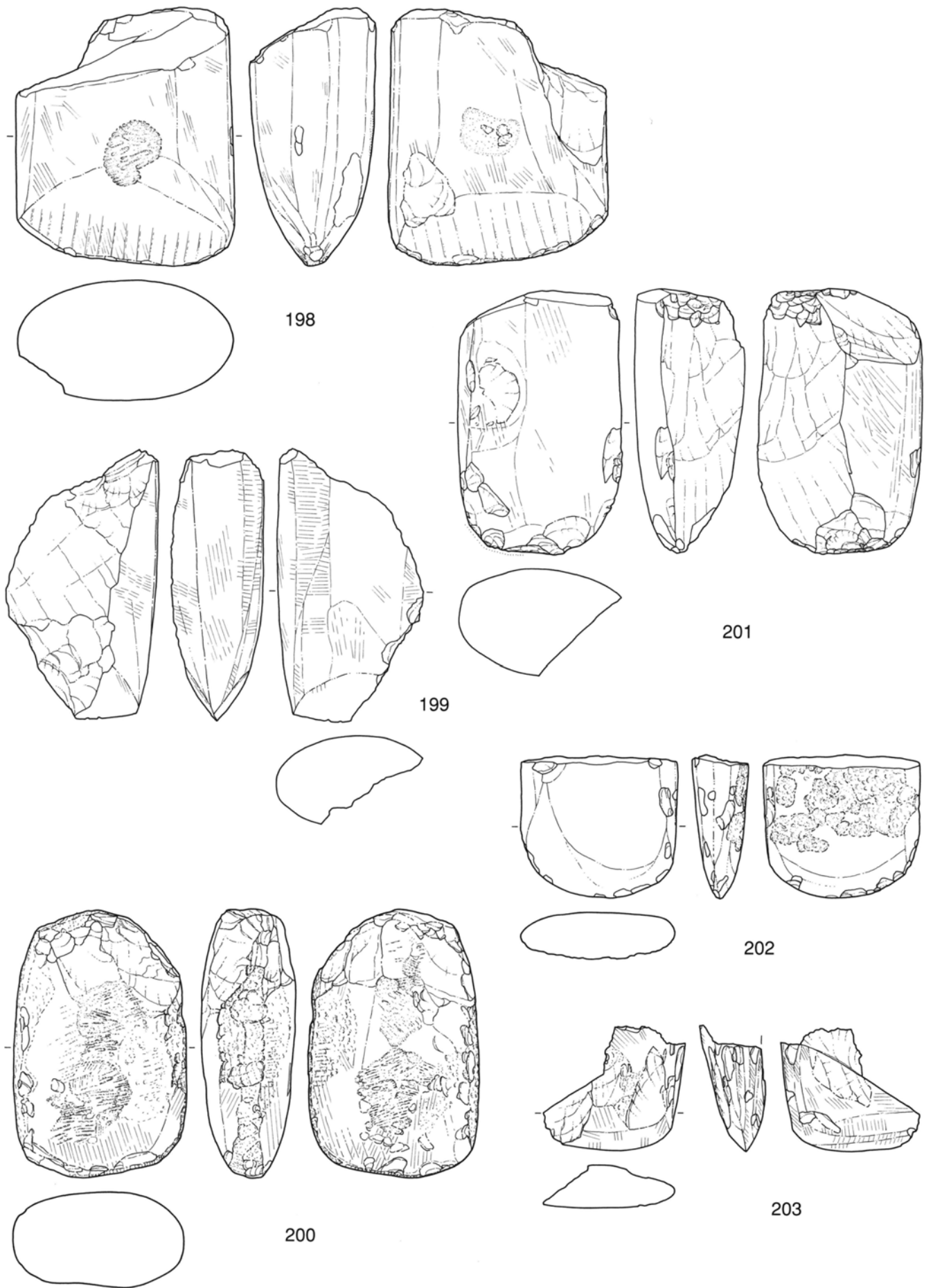


图29 两刃石斧(2)

(1/2)

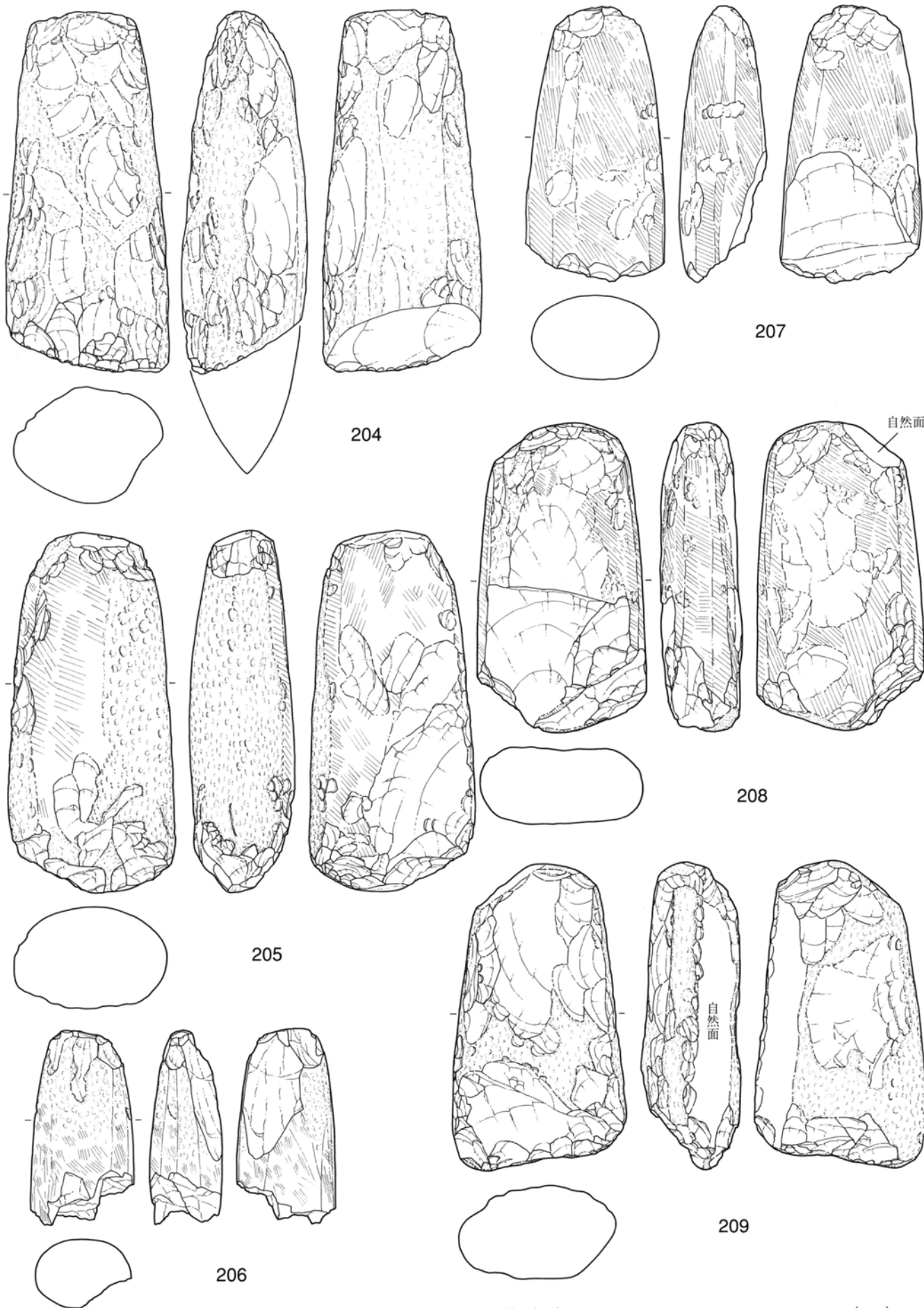
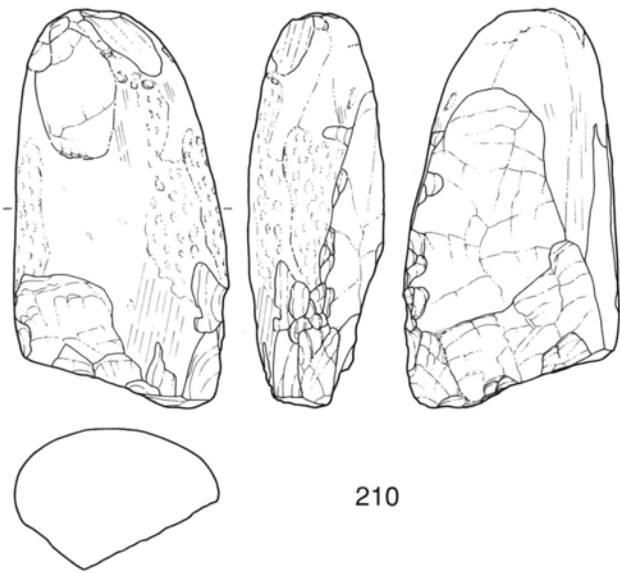
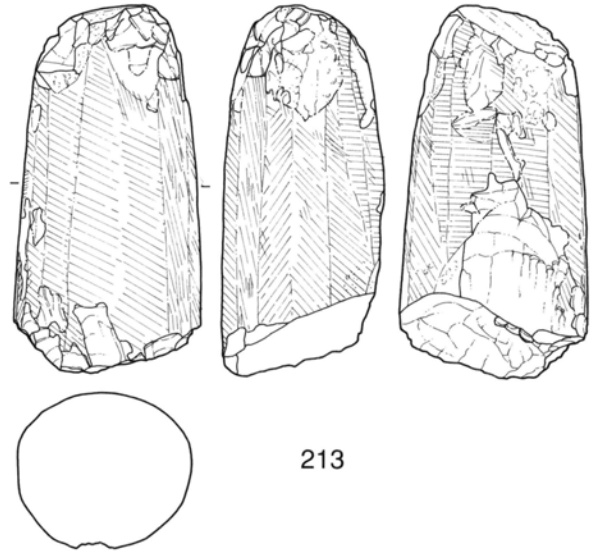


图30 两刃石斧(3)

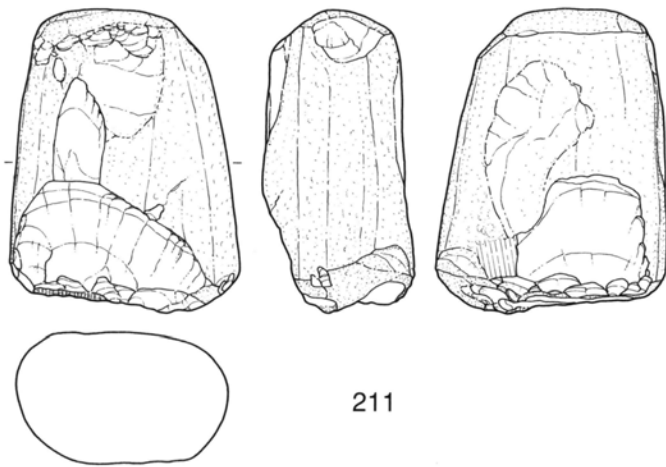
(1/2)



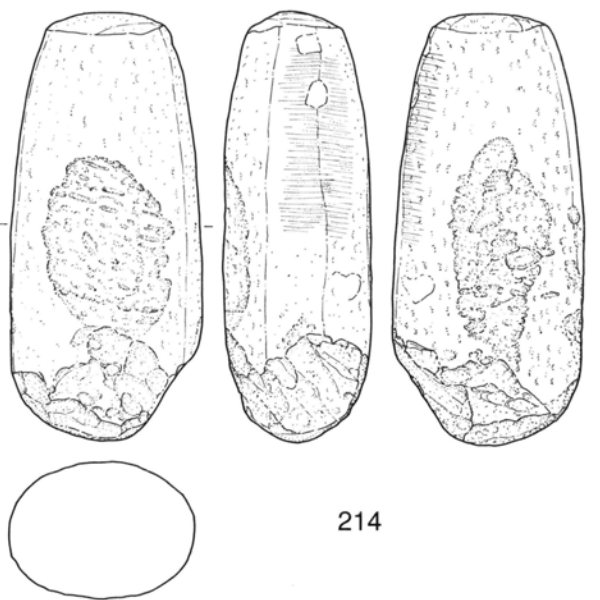
210



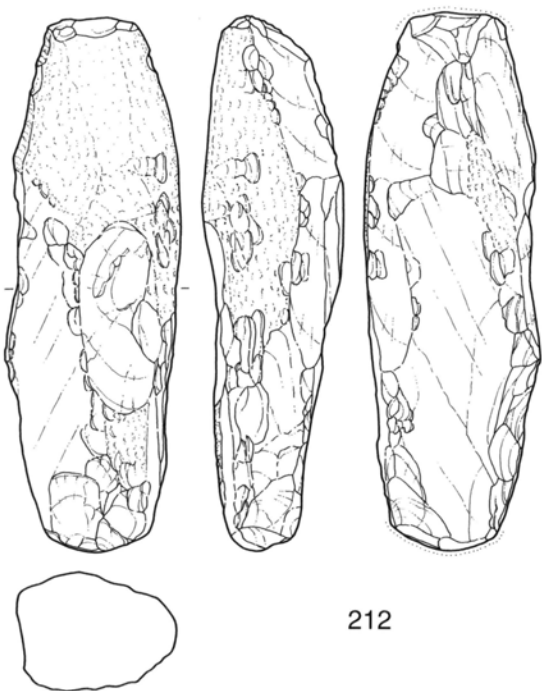
213



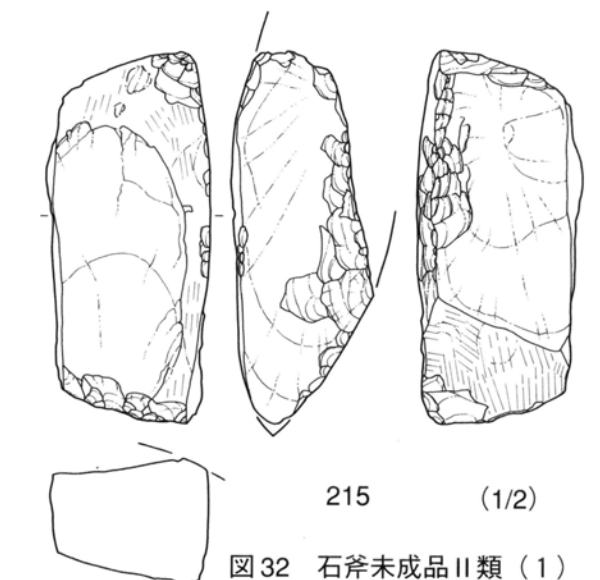
211



214



212

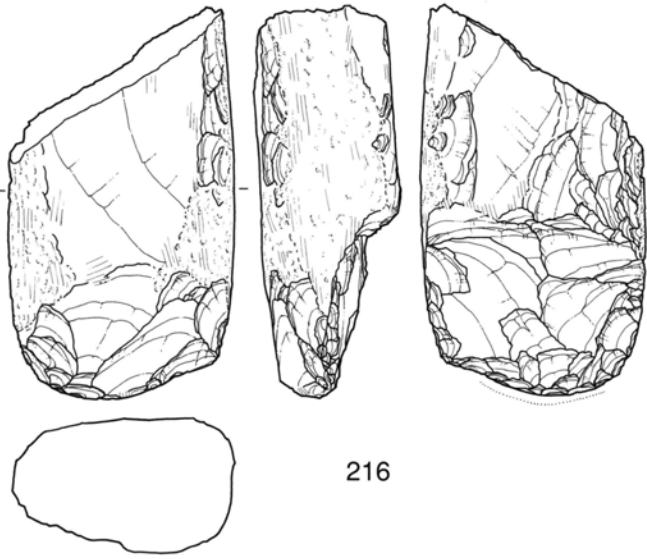


215

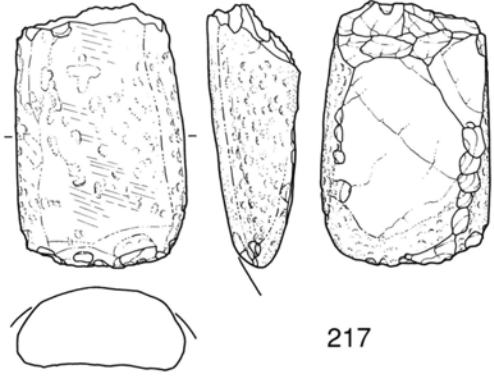
(1/2)

图31 两刃石斧 (4) (1/2)

图32 石斧未成品 II 类 (1)



216



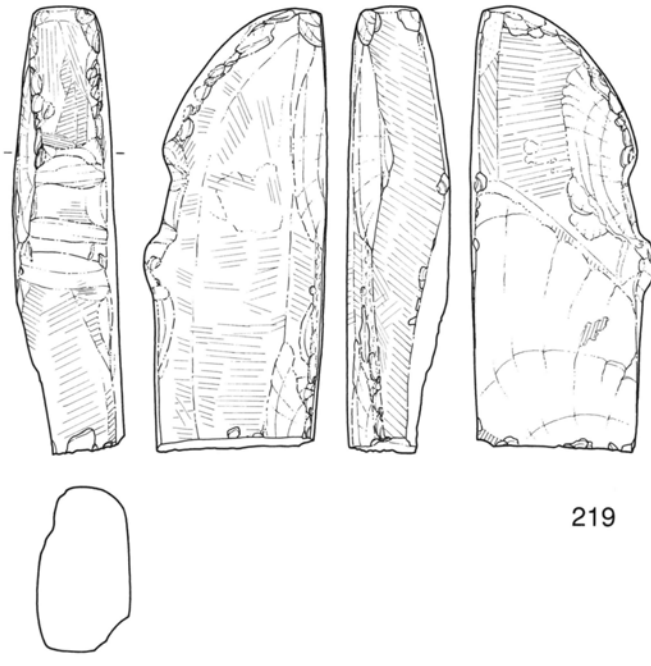
217



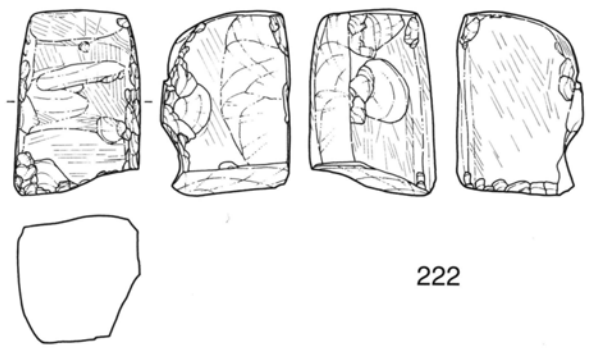
218

图33 石斧未成品II類(2)

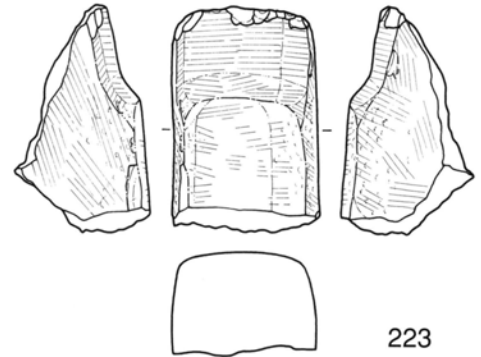
(1/2)



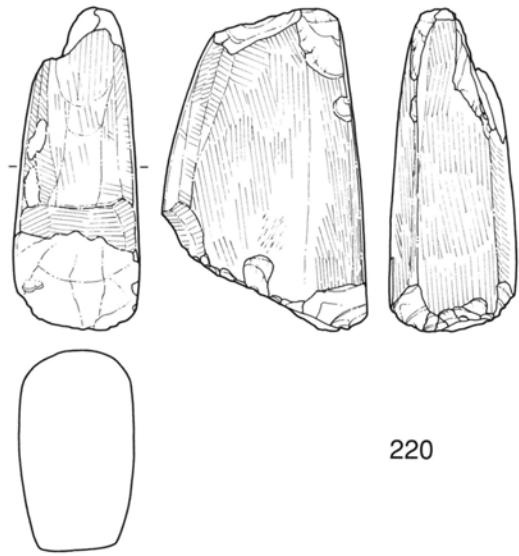
219



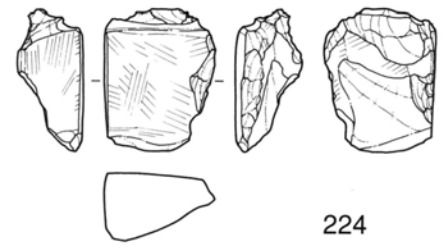
222



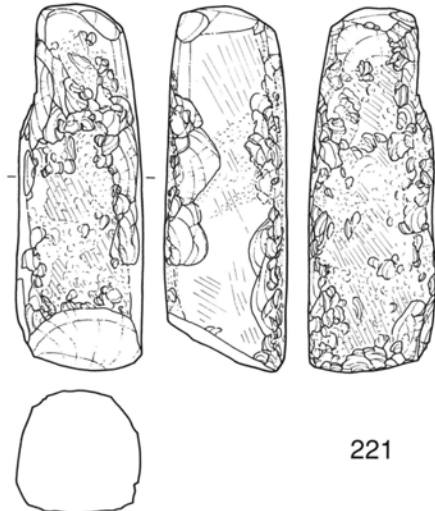
223



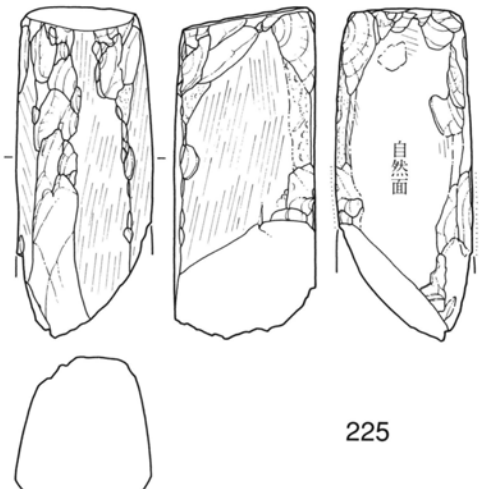
220



224



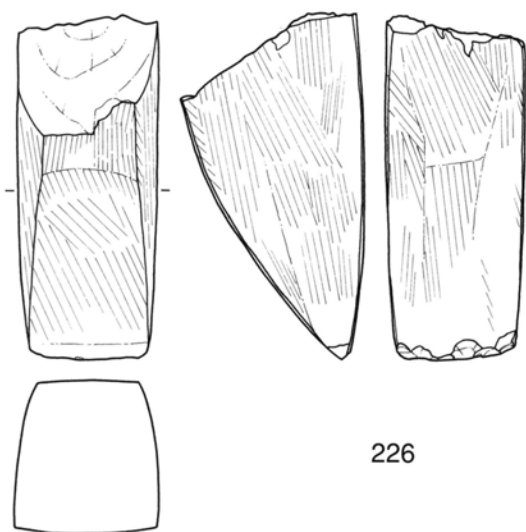
221



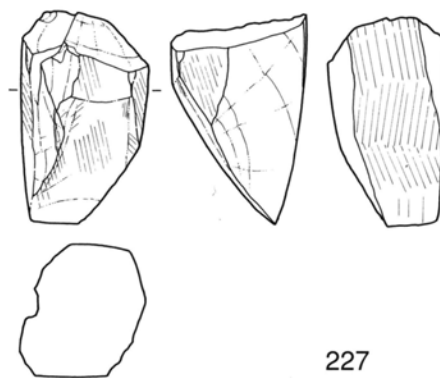
225

图34 柱状片刃 (1)

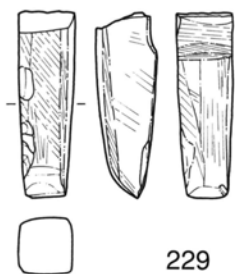
(1/2)



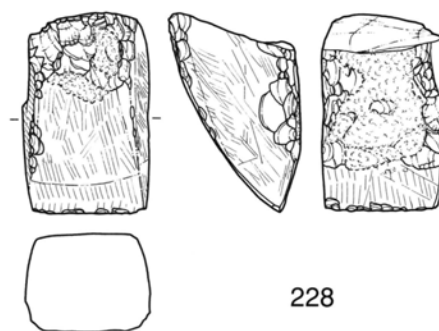
226



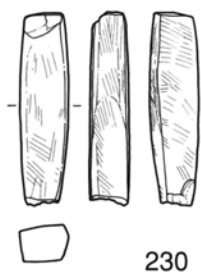
227



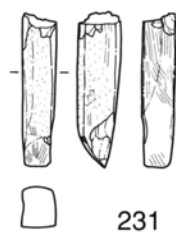
229



228



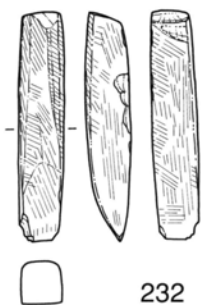
230



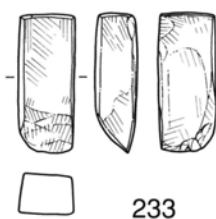
231



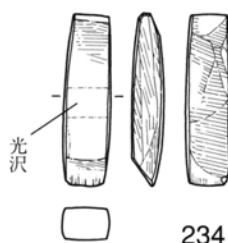
236



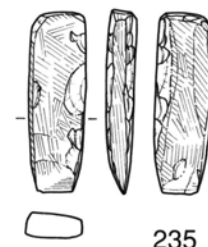
232



233



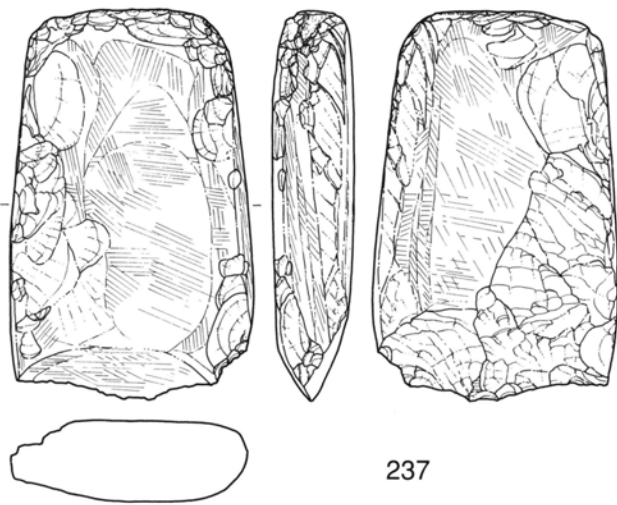
234



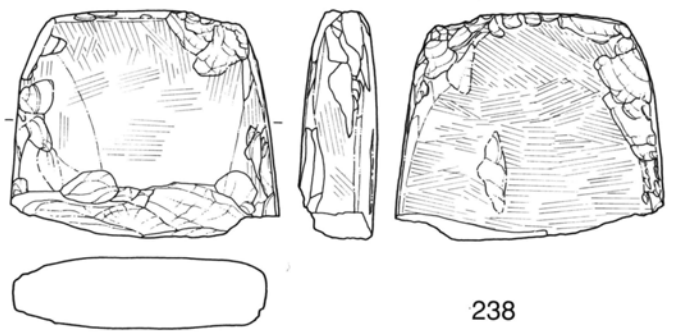
235

图35 柱状片刃 (2)

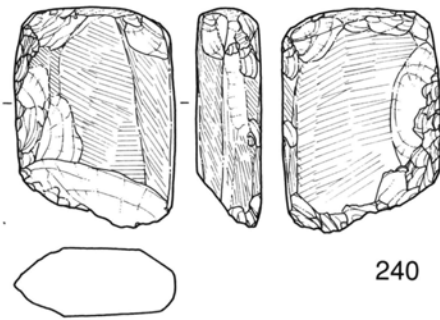
(1/2)



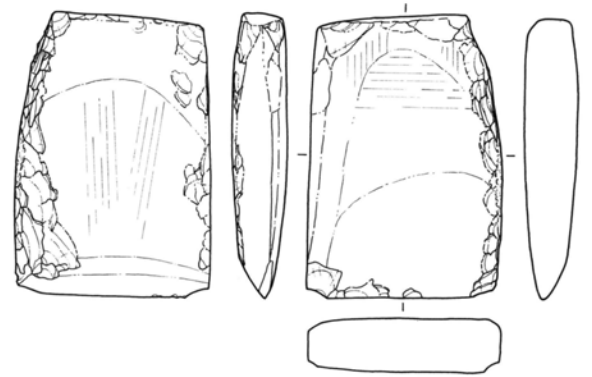
237



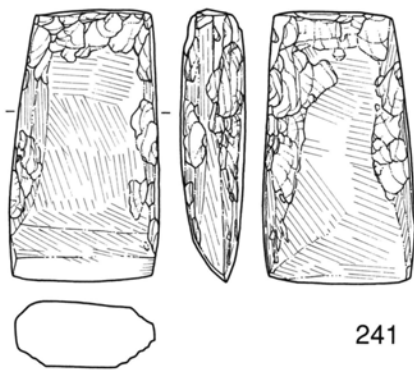
238



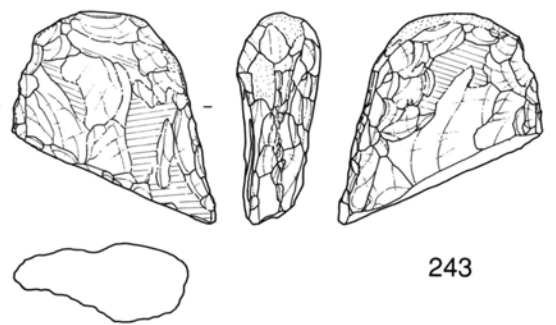
240



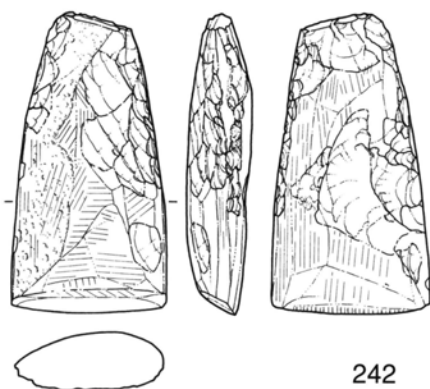
239



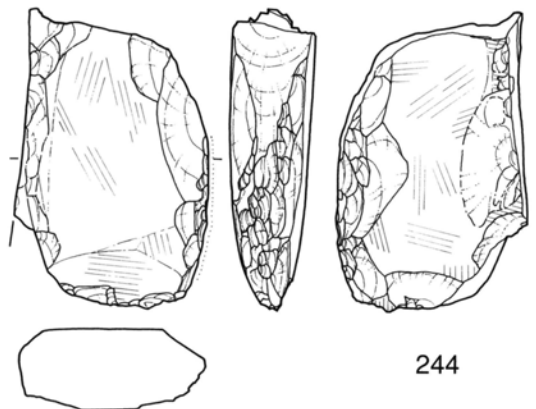
241



243



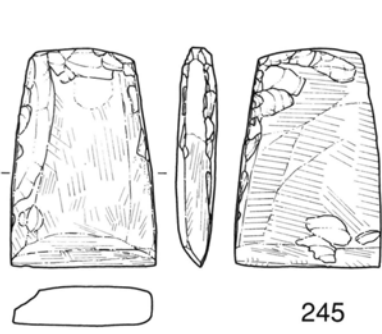
242



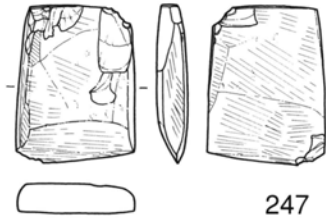
244

图36 扁平片刃 (1)

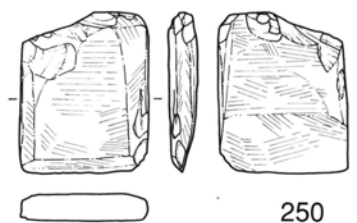
(1/2)



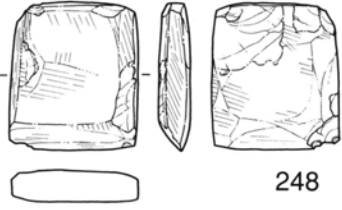
245



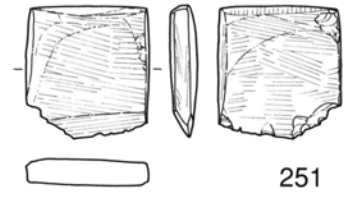
247



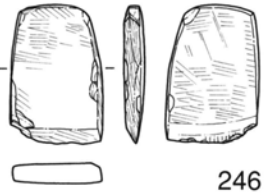
250



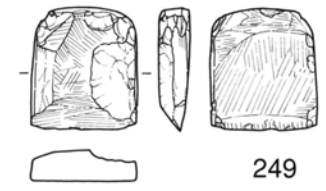
248



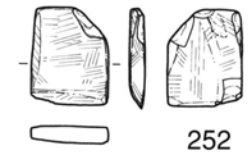
251



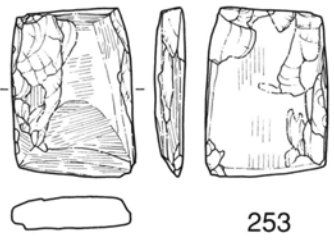
246



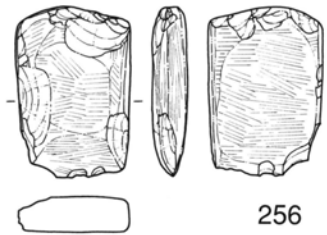
249



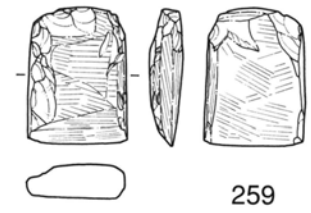
252



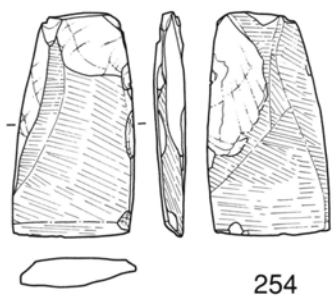
253



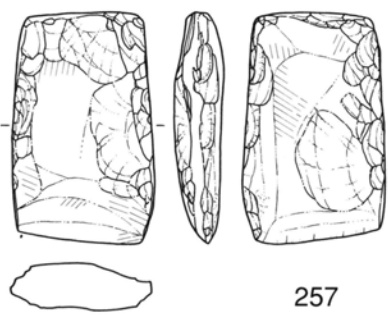
256



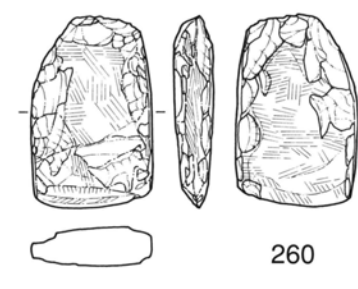
259



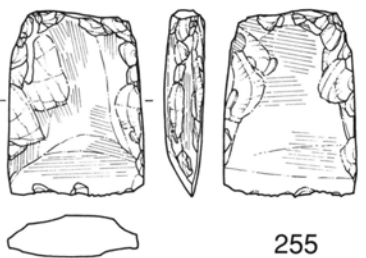
254



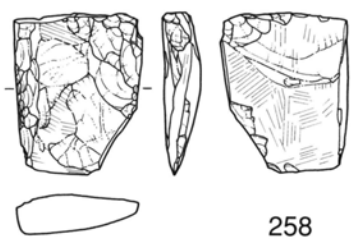
257



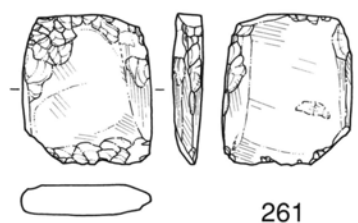
260



255



258



261

图37 扁平片刃 (2)

(1/2)

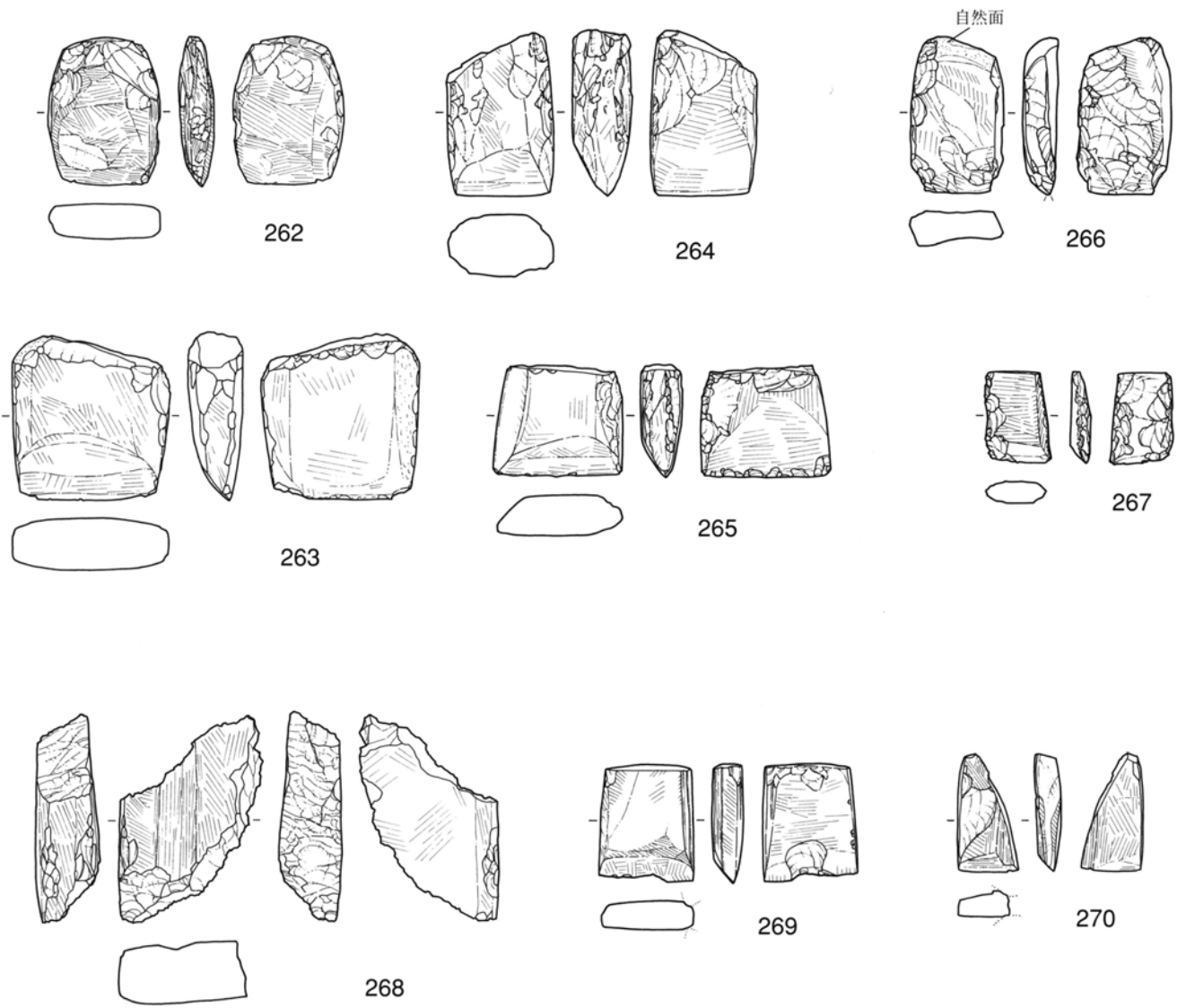


图38 扁平片刃 (3)

(1/2)

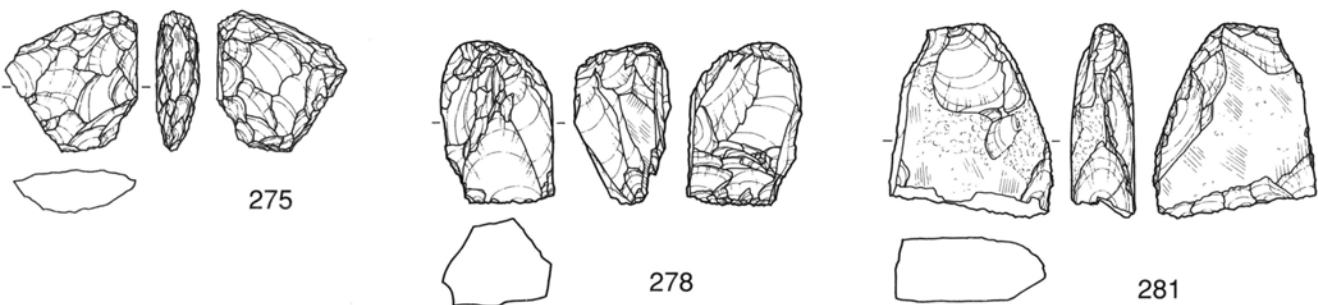
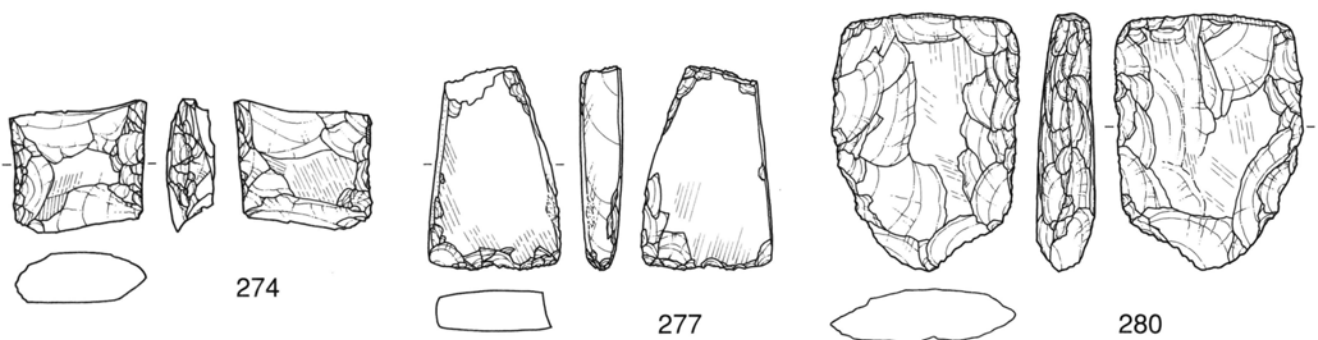
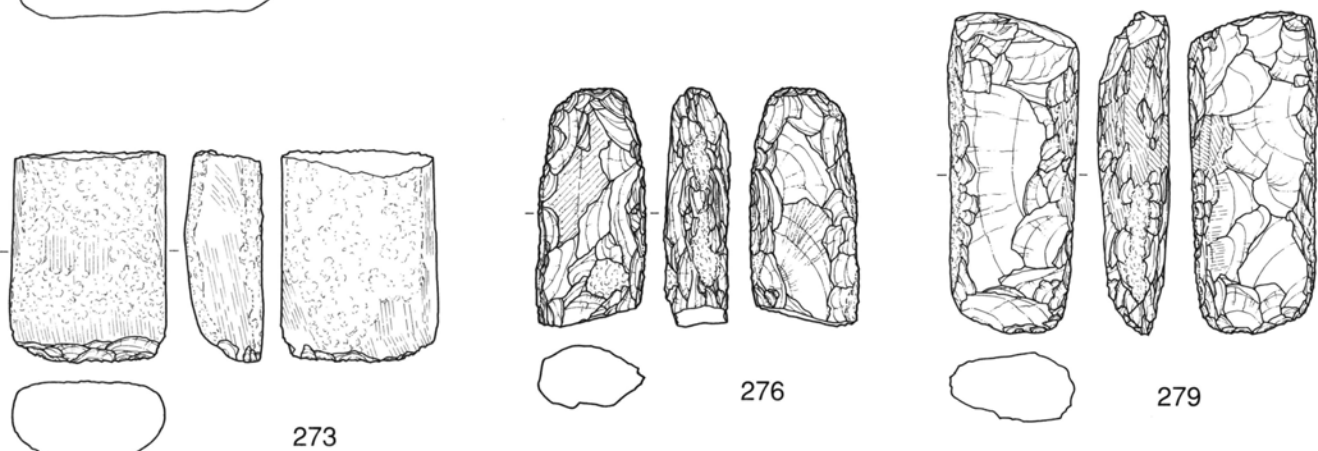
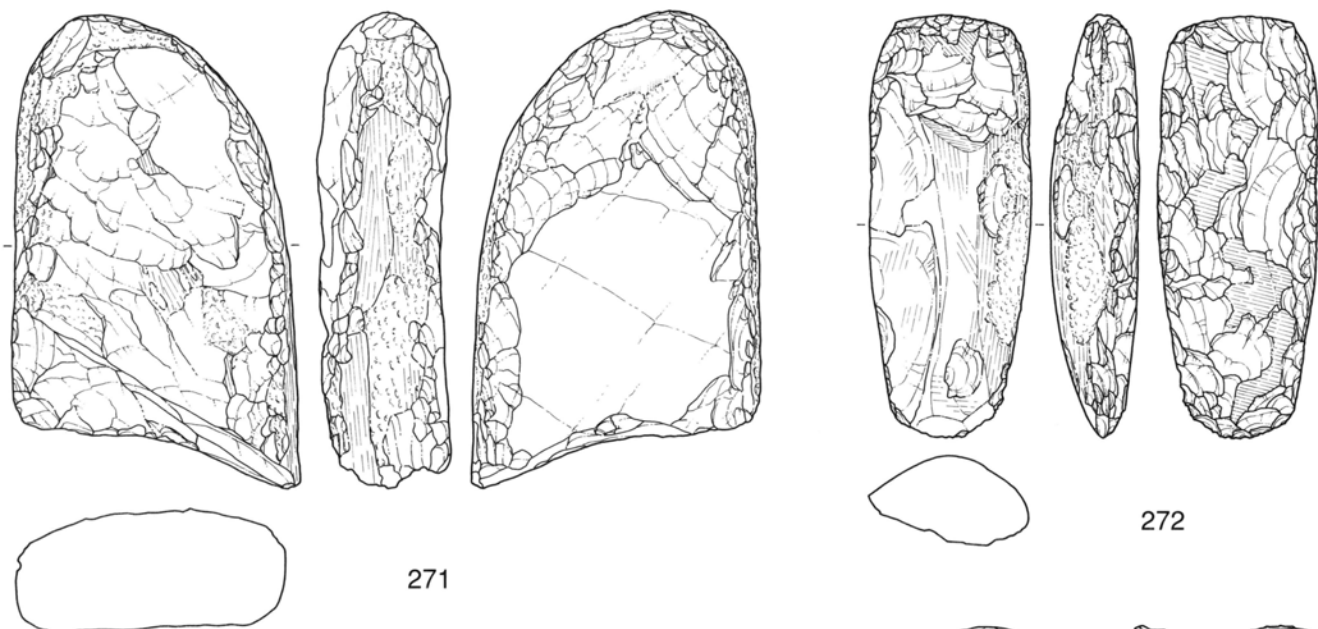


图39 石斧未成品II類(3)

(1/2)

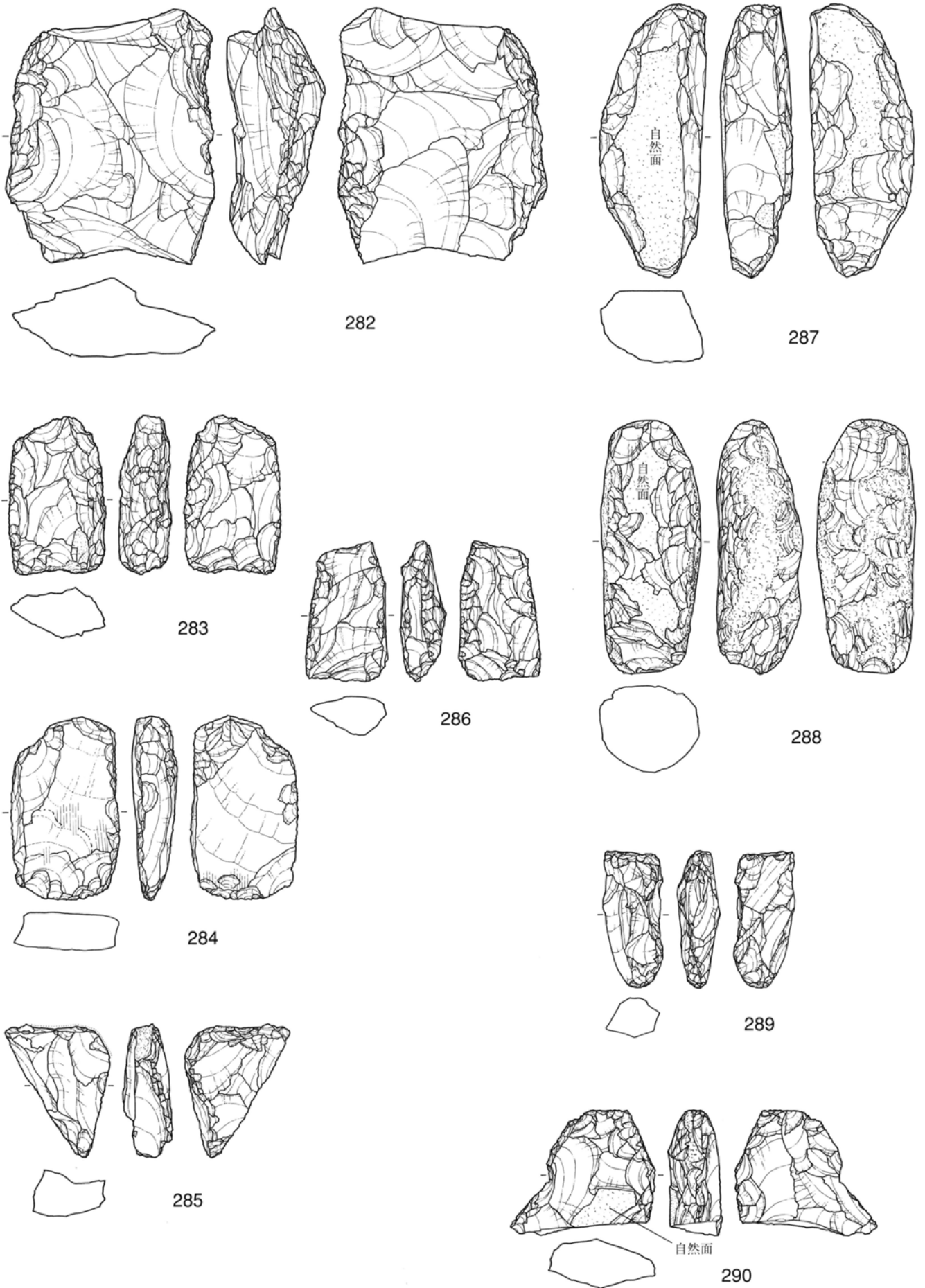
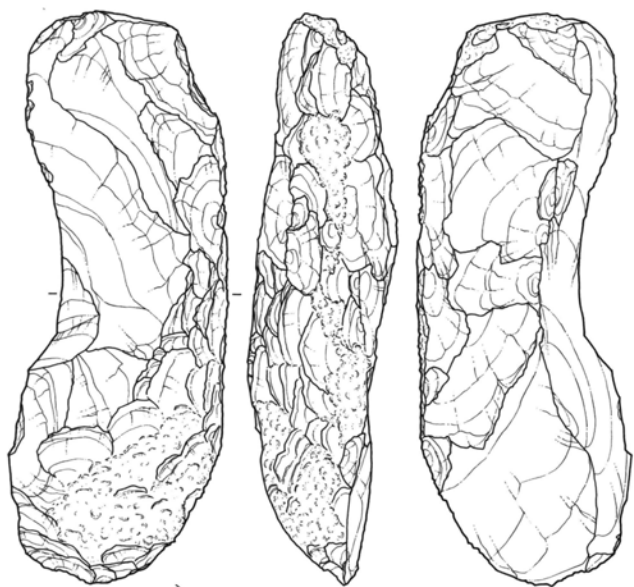


图 40 石斧未成品 I 类 (1)

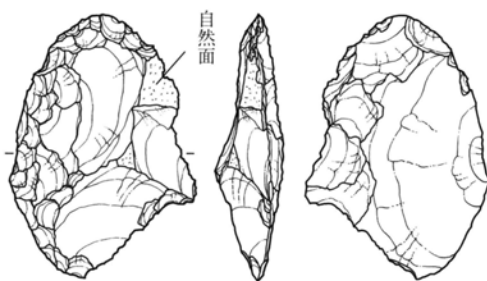
(1/2)



291

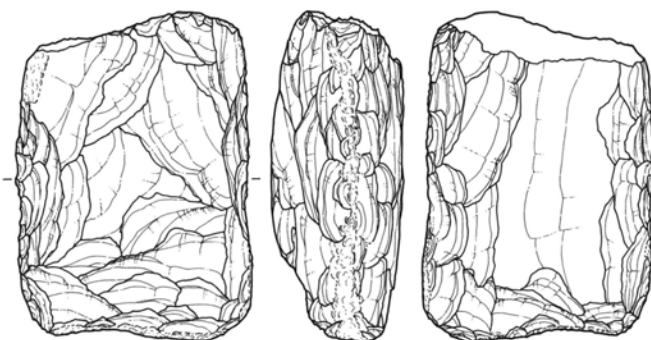
(1/2)

图41 石斧未成品II类(4)

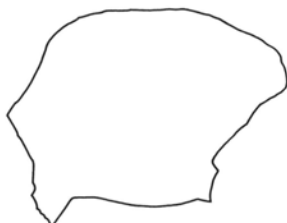


292

图42 两刃石斧(5) (1/2)



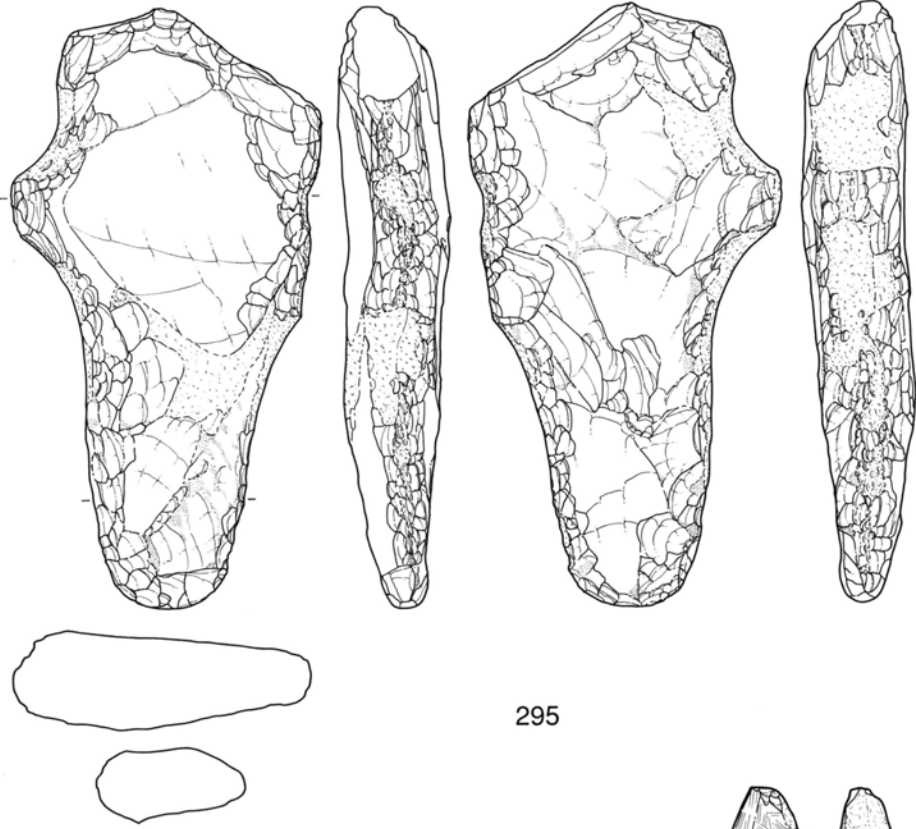
293



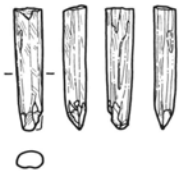
294

图43 石斧未成品I类(2)

(1/2)



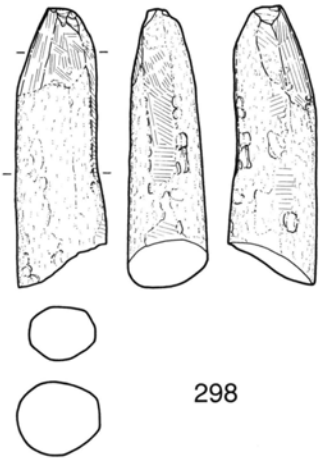
295



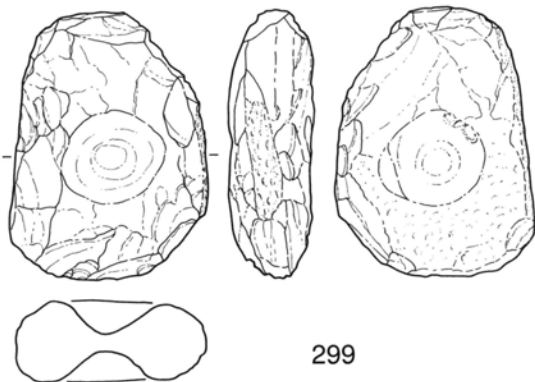
296



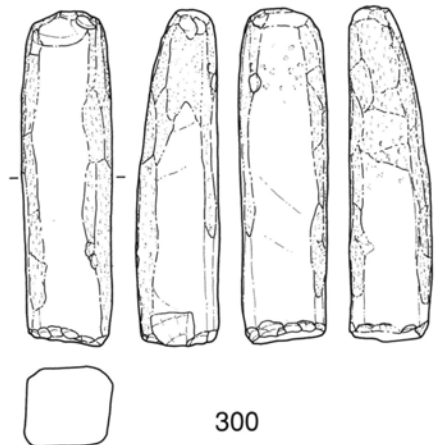
297



298



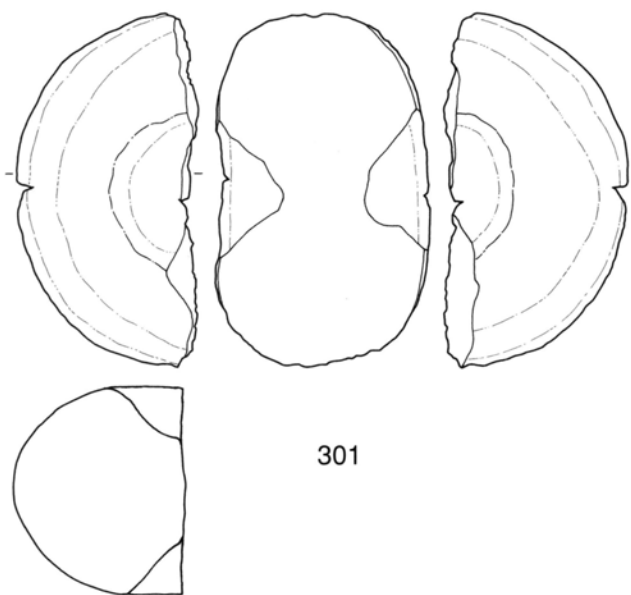
299



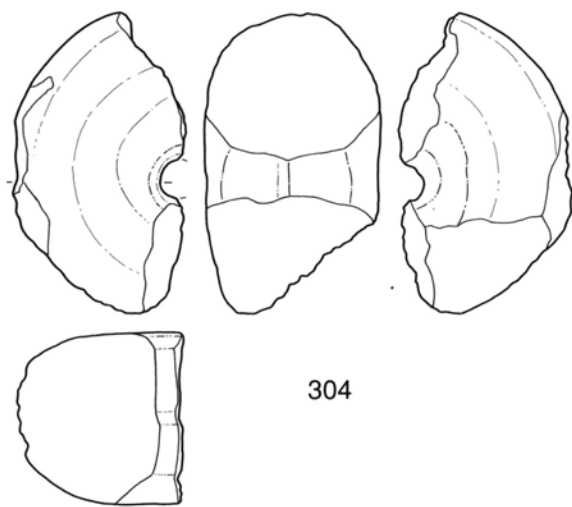
300

図44 その他

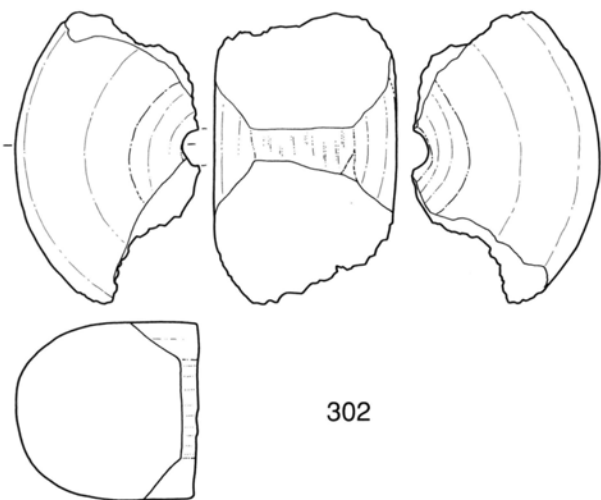
(1/2)



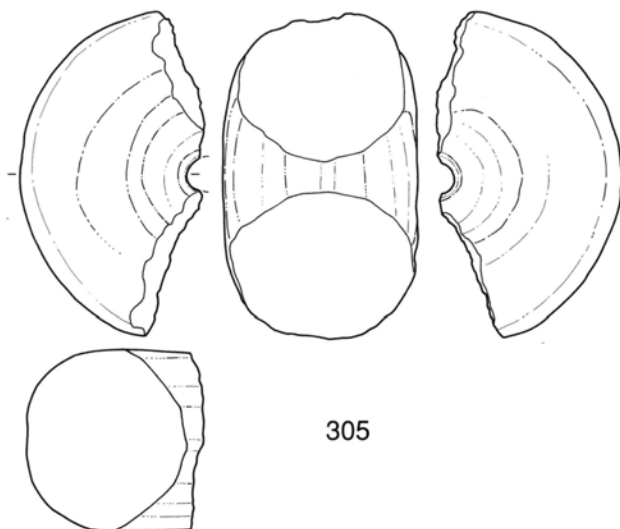
301



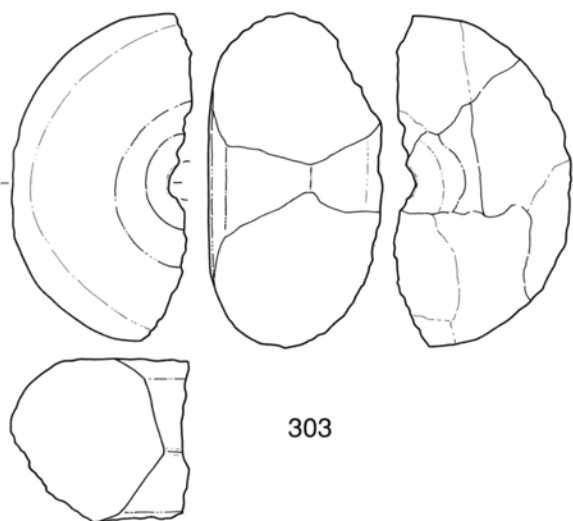
304



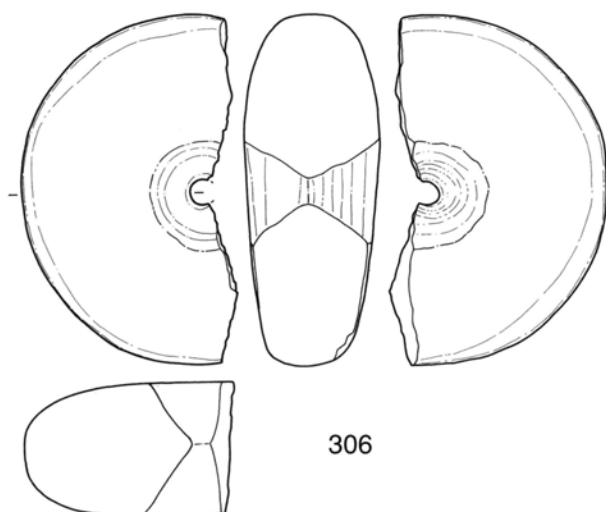
302



305



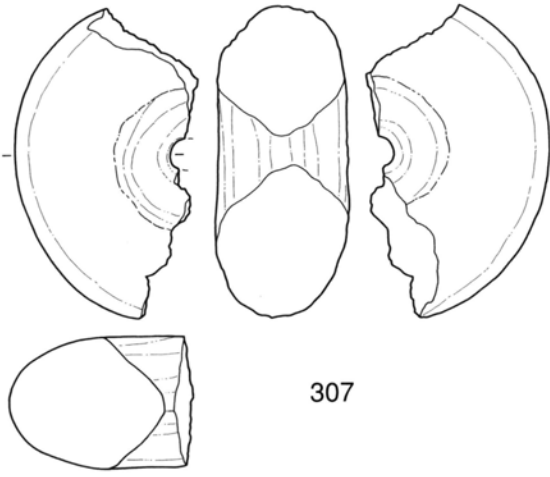
303



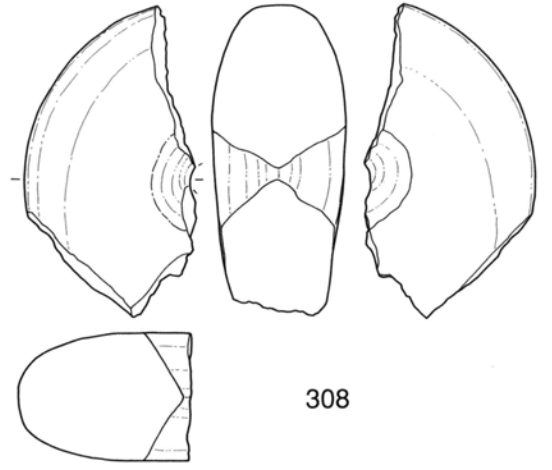
306

图45 環石 (1)

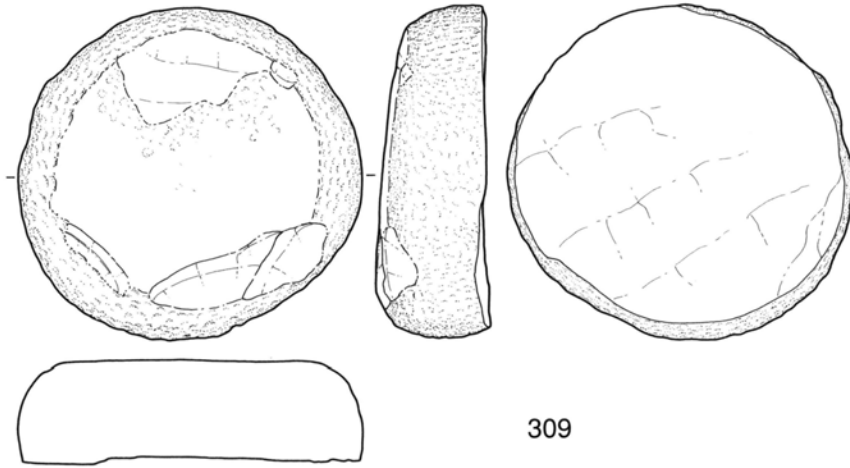
(1/2)



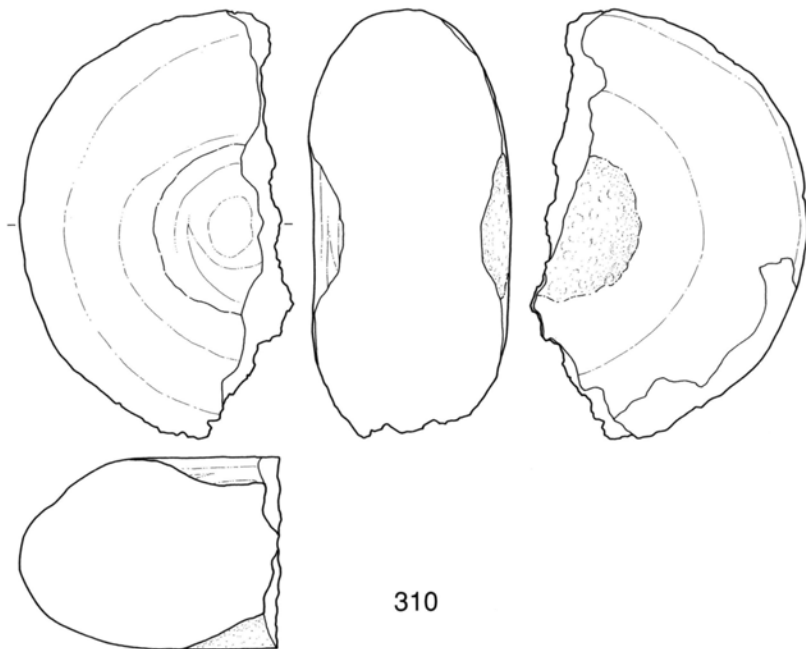
307



308



309



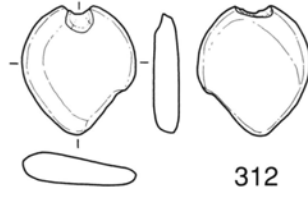
310

图46 環石 (2)

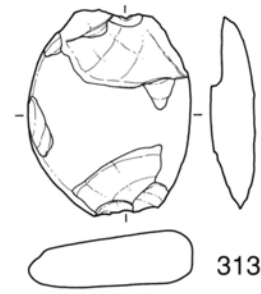
(1/2)



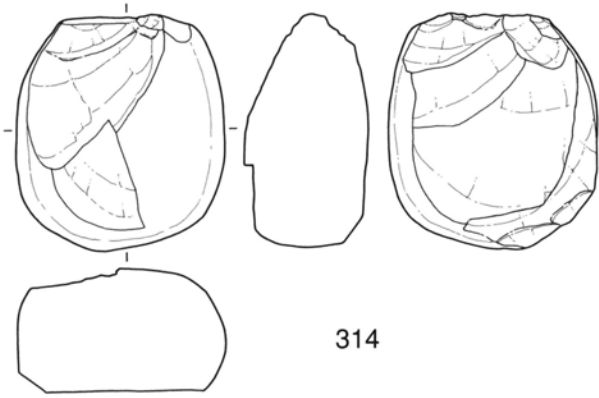
311



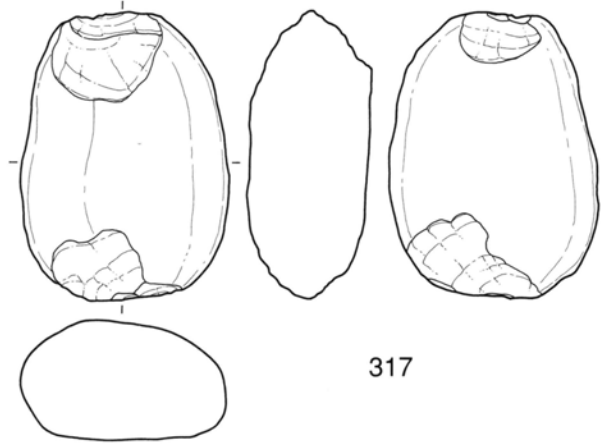
312



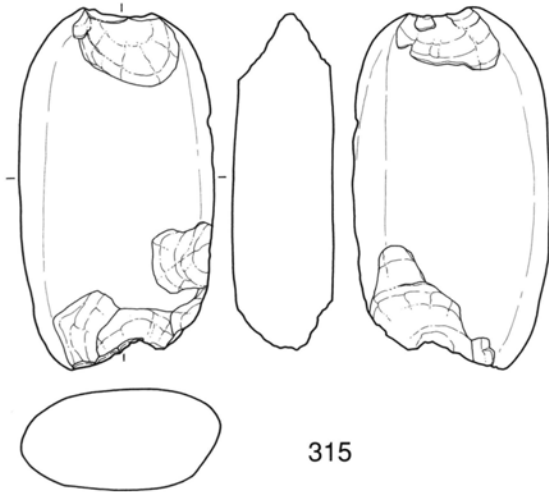
313



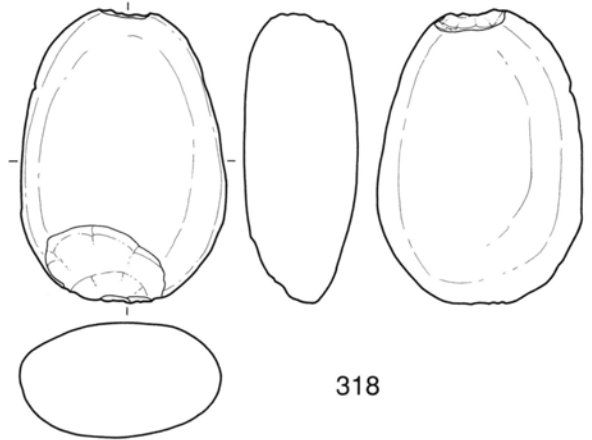
314



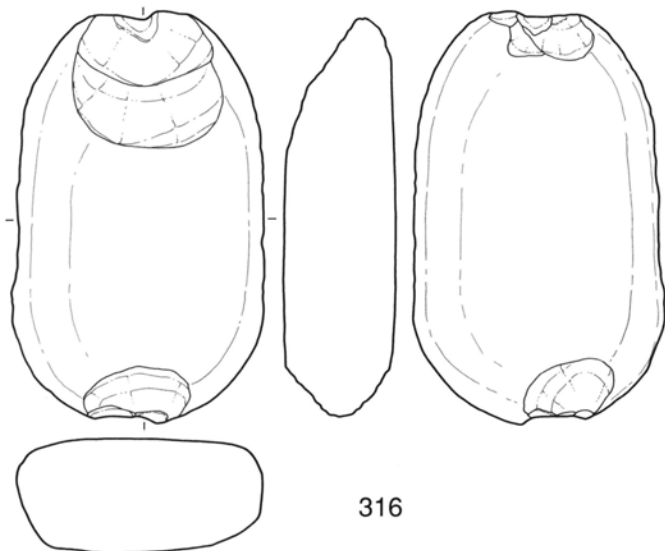
317



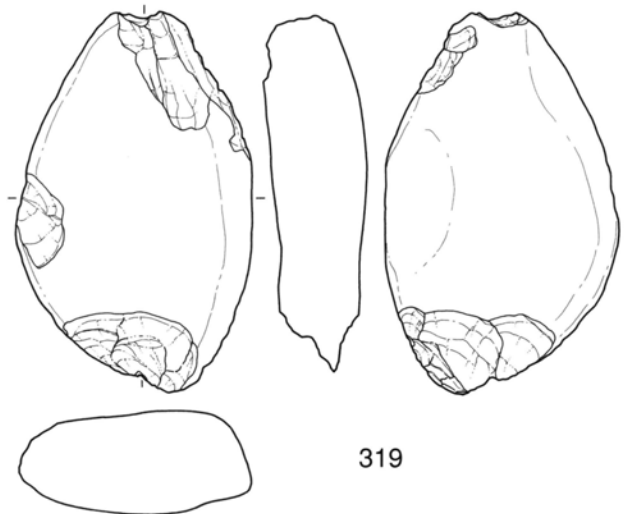
315



318



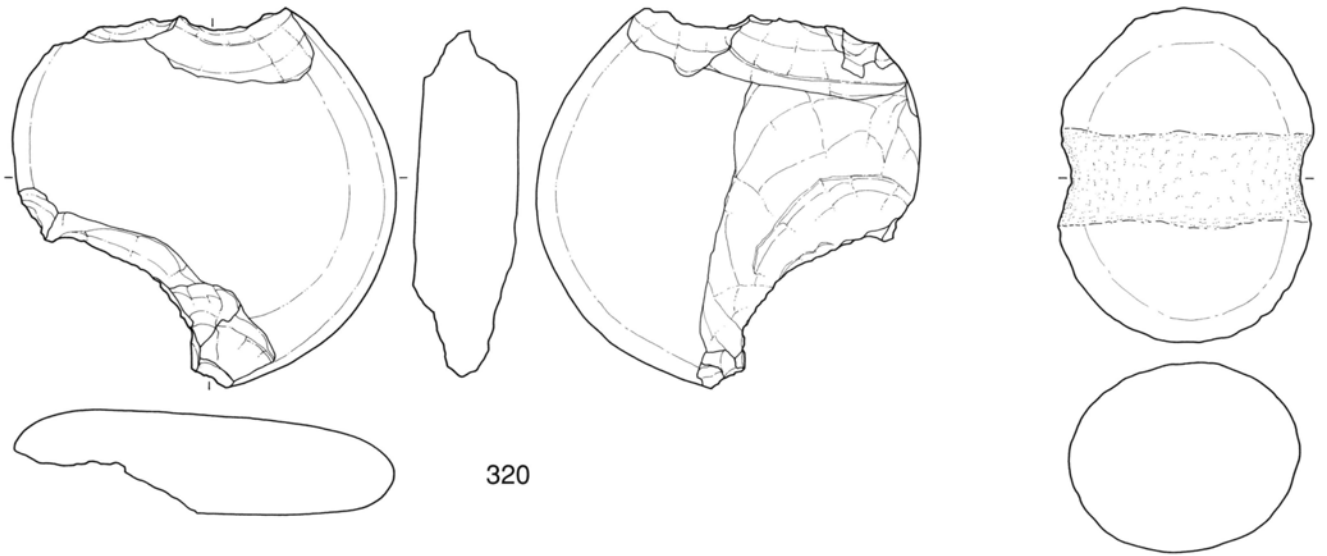
316



319

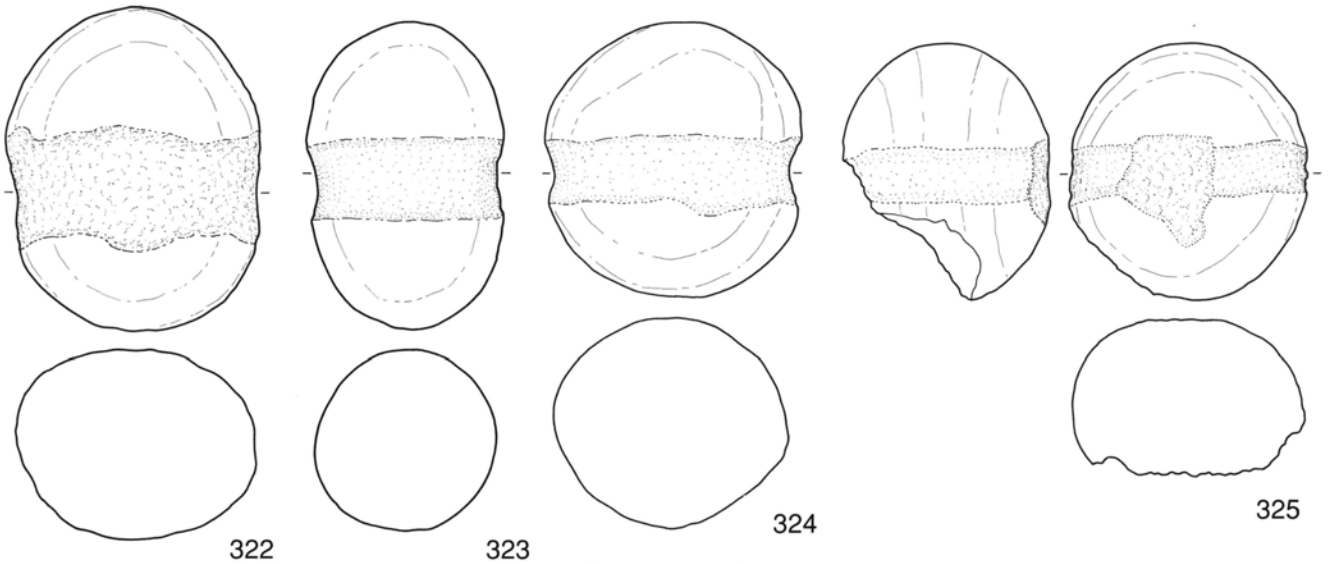
图47 石锤 (1)

(1/2)



320

321



322

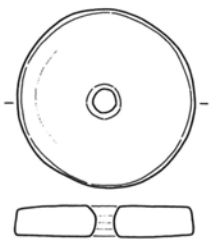
323

324

325

图48 石锤 (2)

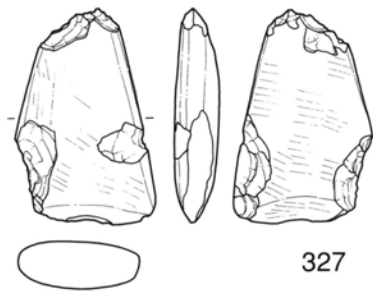
(1/2)



326

图49 紡錘車

(1/2)



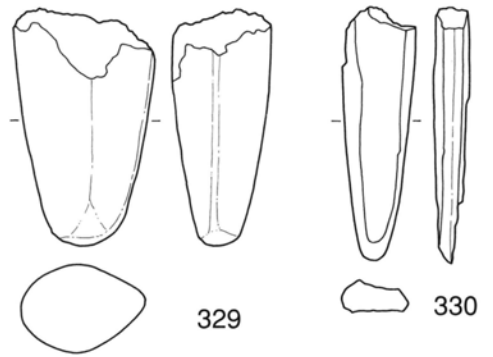
327

(1/2)



328

图50 繩紋斧

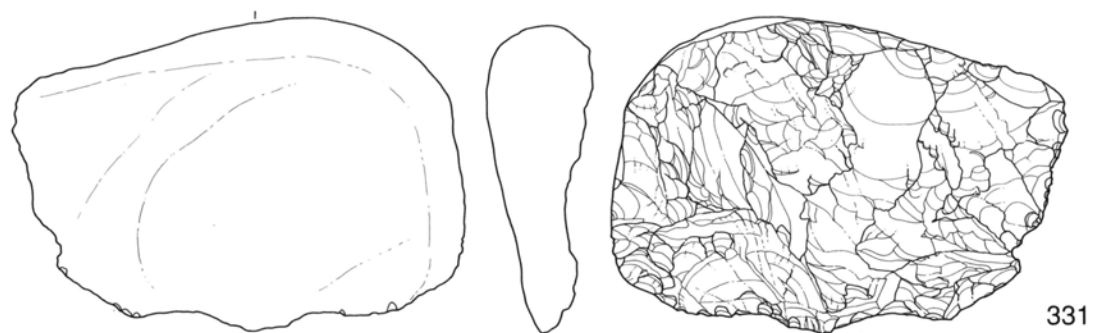


329

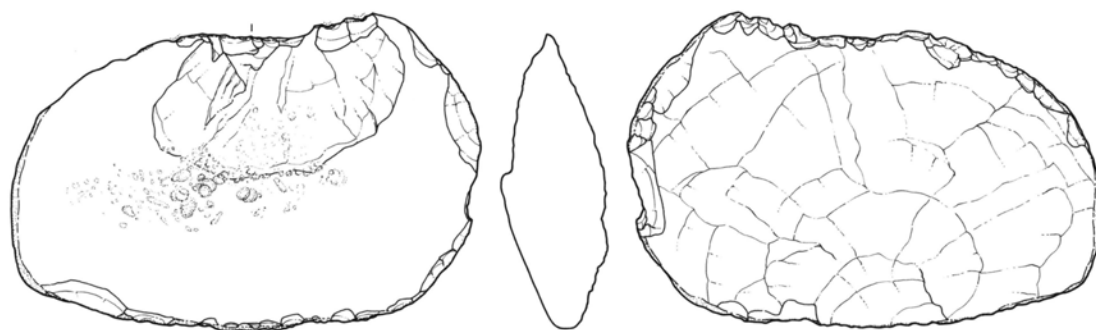
330

图51 石刀

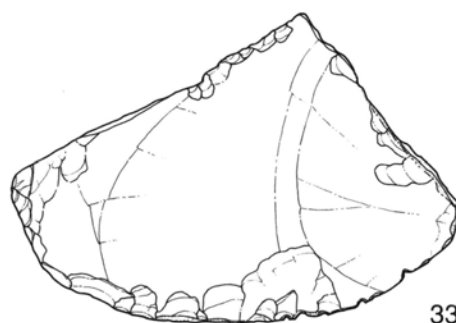
(1/2)



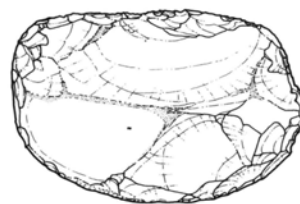
331



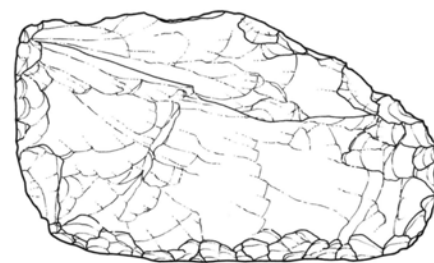
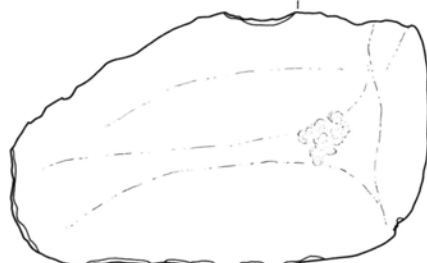
332



333



334



335



336

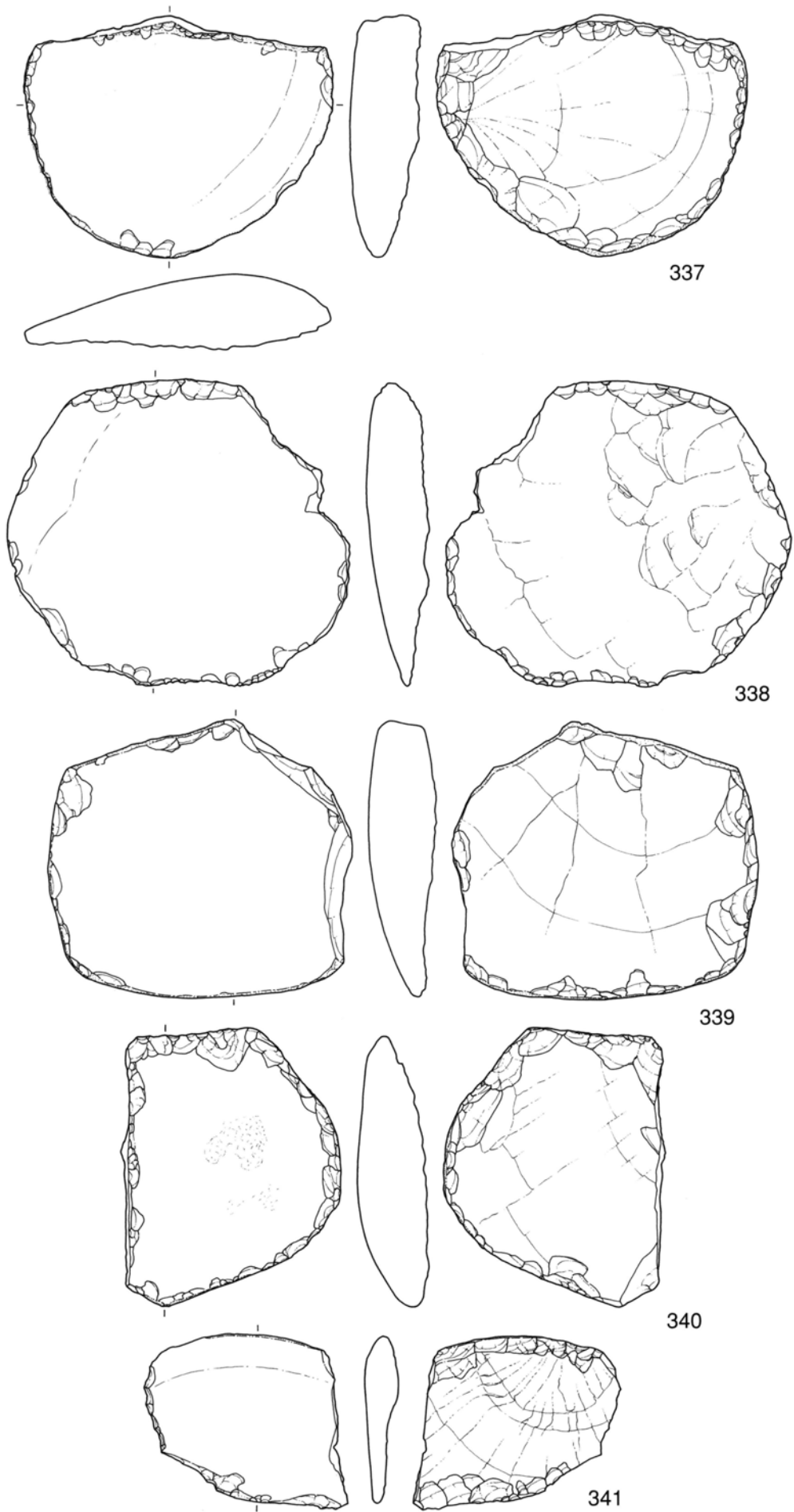


图 53 粗製剥片石器 (2)

(1/2)

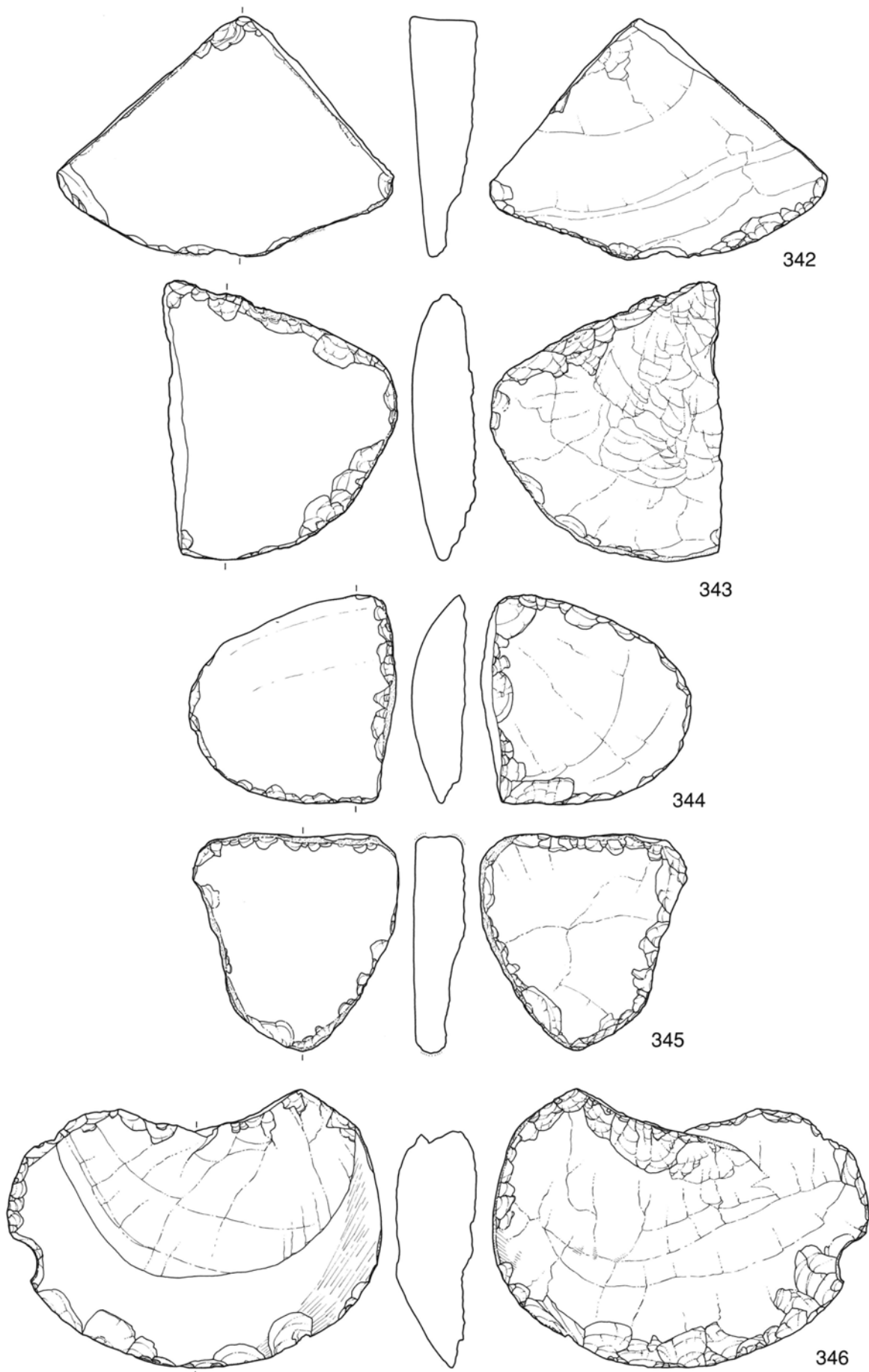


图 54 粗製剥片石器 (3)

(1/2)

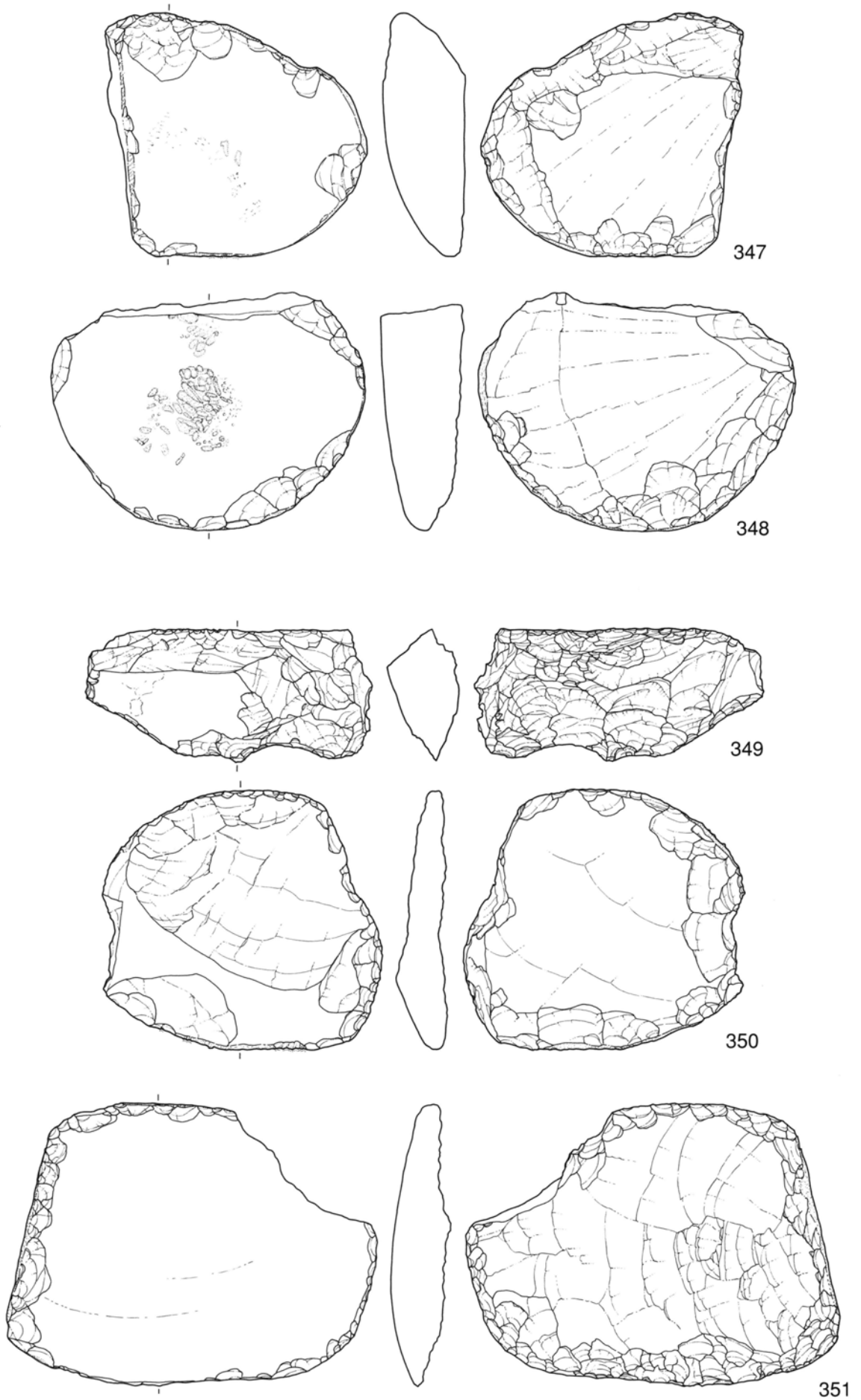


图55 粗製剥片石器 (4)

(1/2)

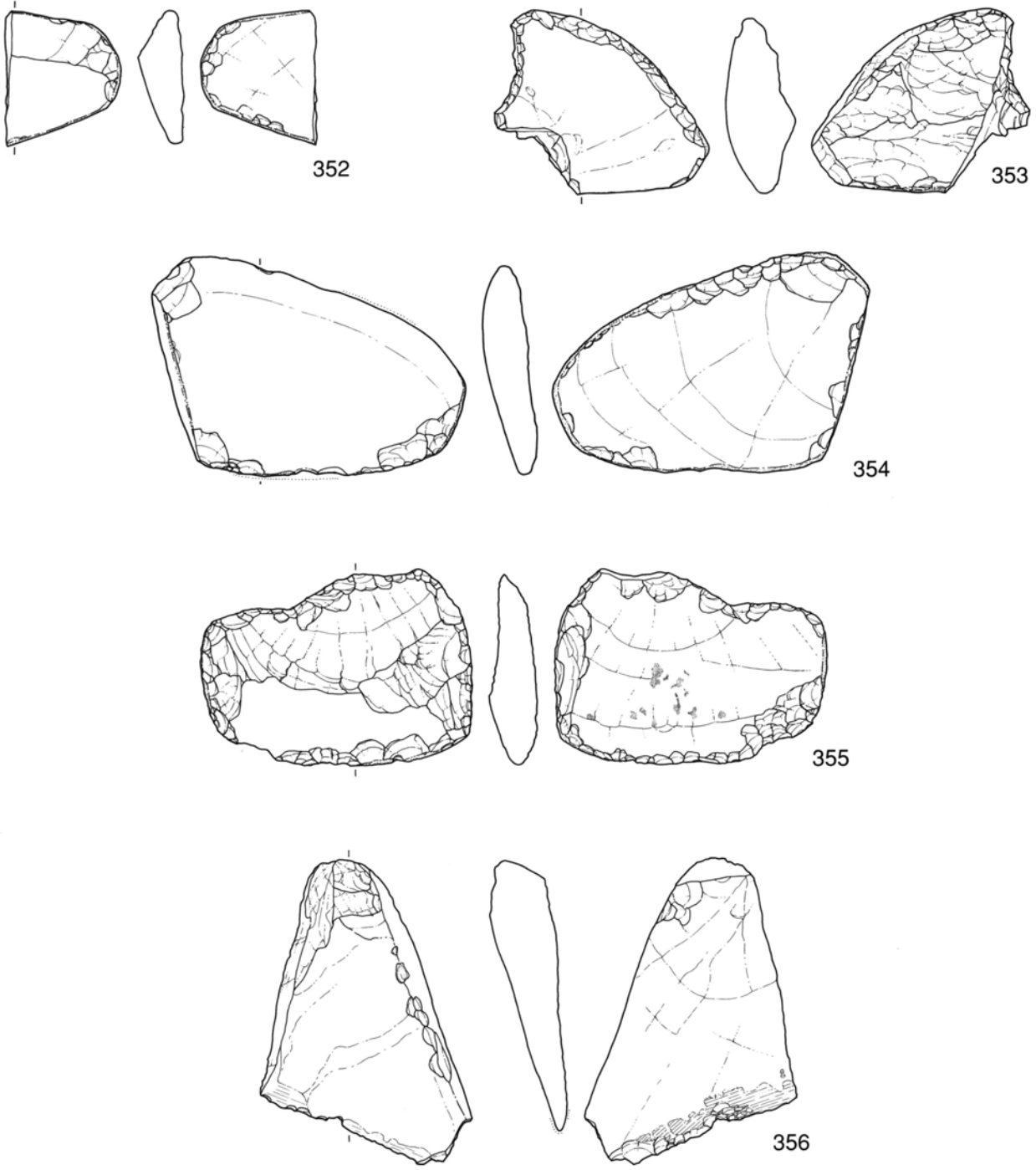


图 56 粗製剥片石器 (5)

(1/2)

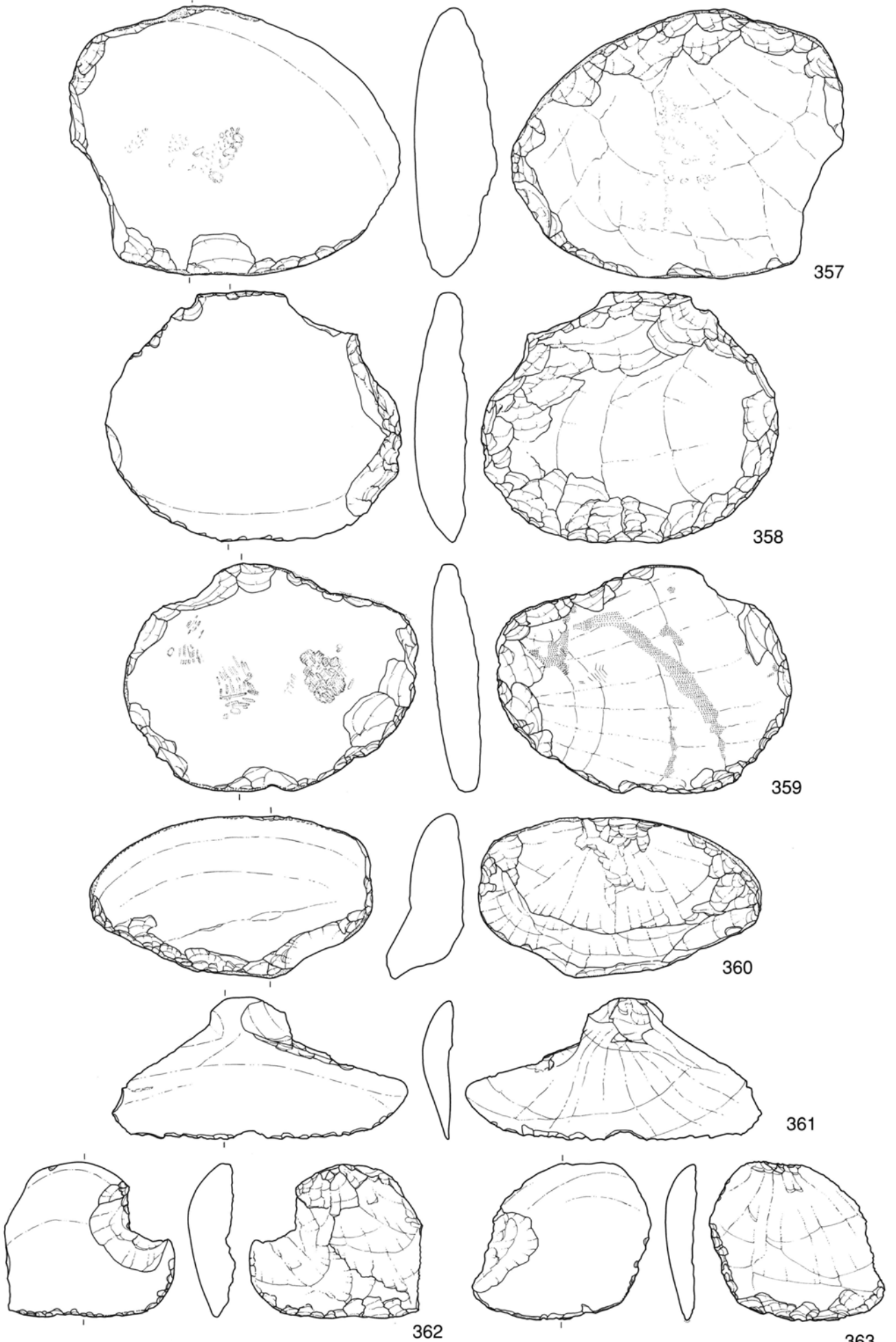


图 57 粗製剥片石器 (6)

363
(1/2)

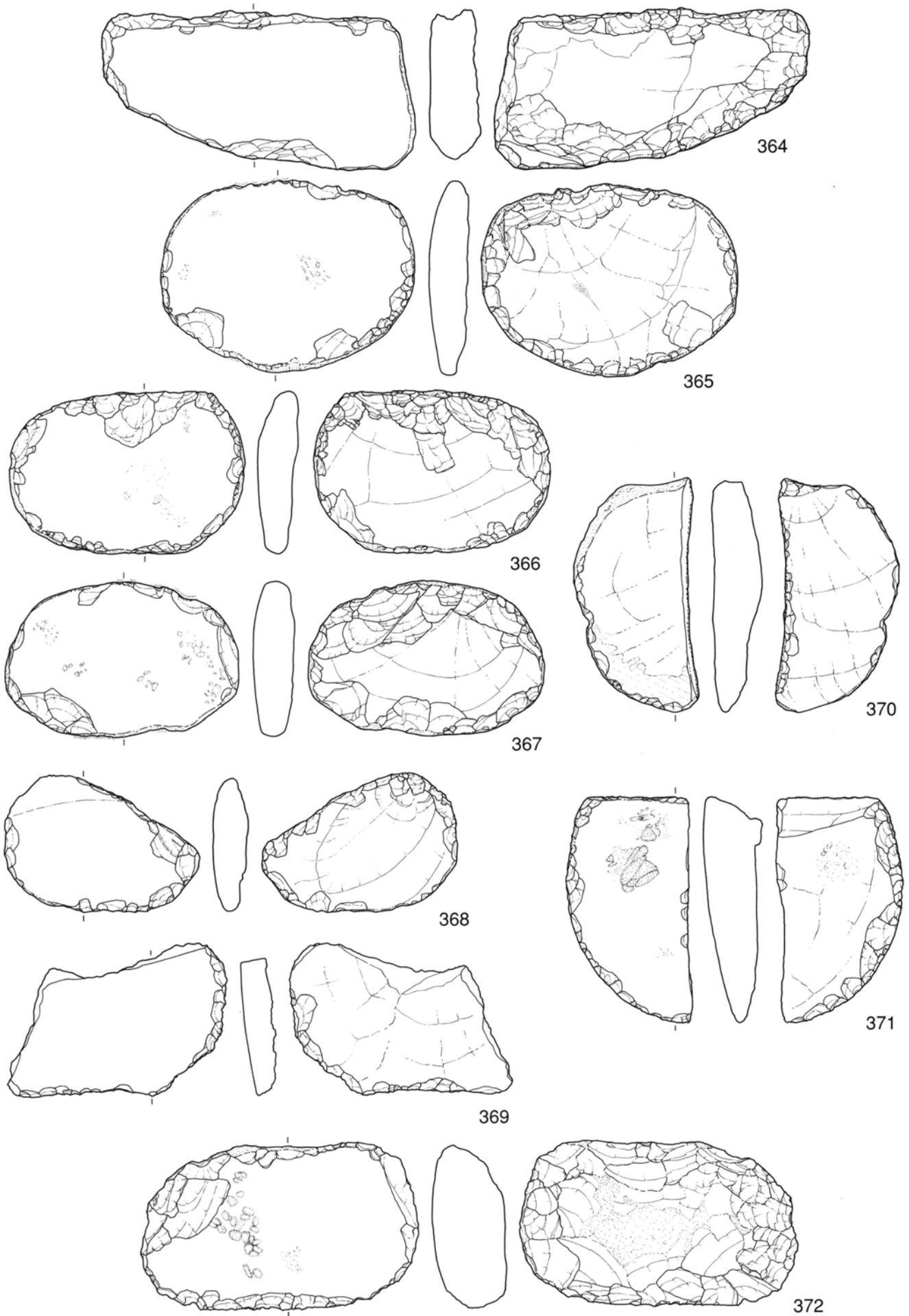


图 58 粗製剥片石器 (7)

(1/2)

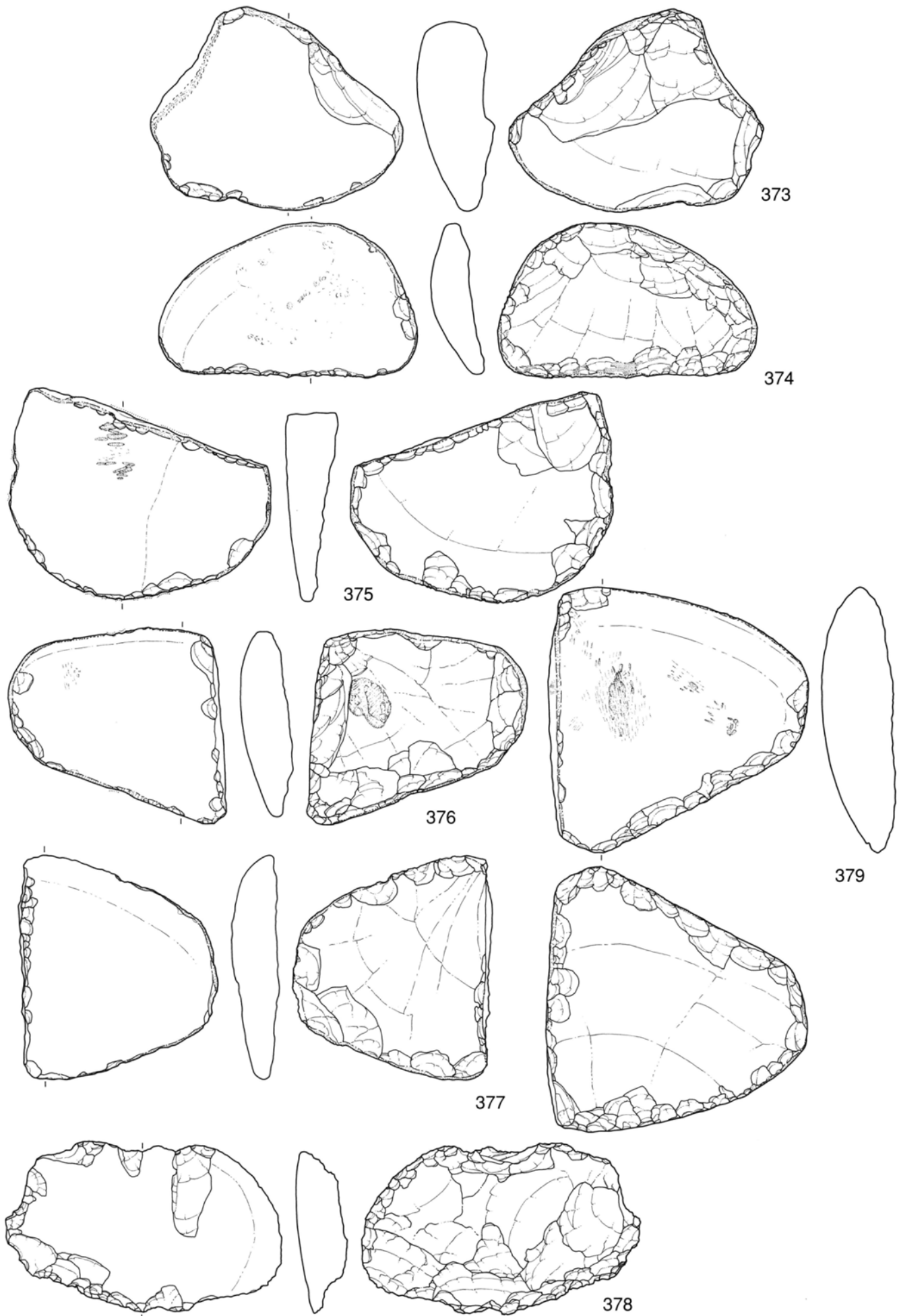


图 59 粗製剥片石器 (8)

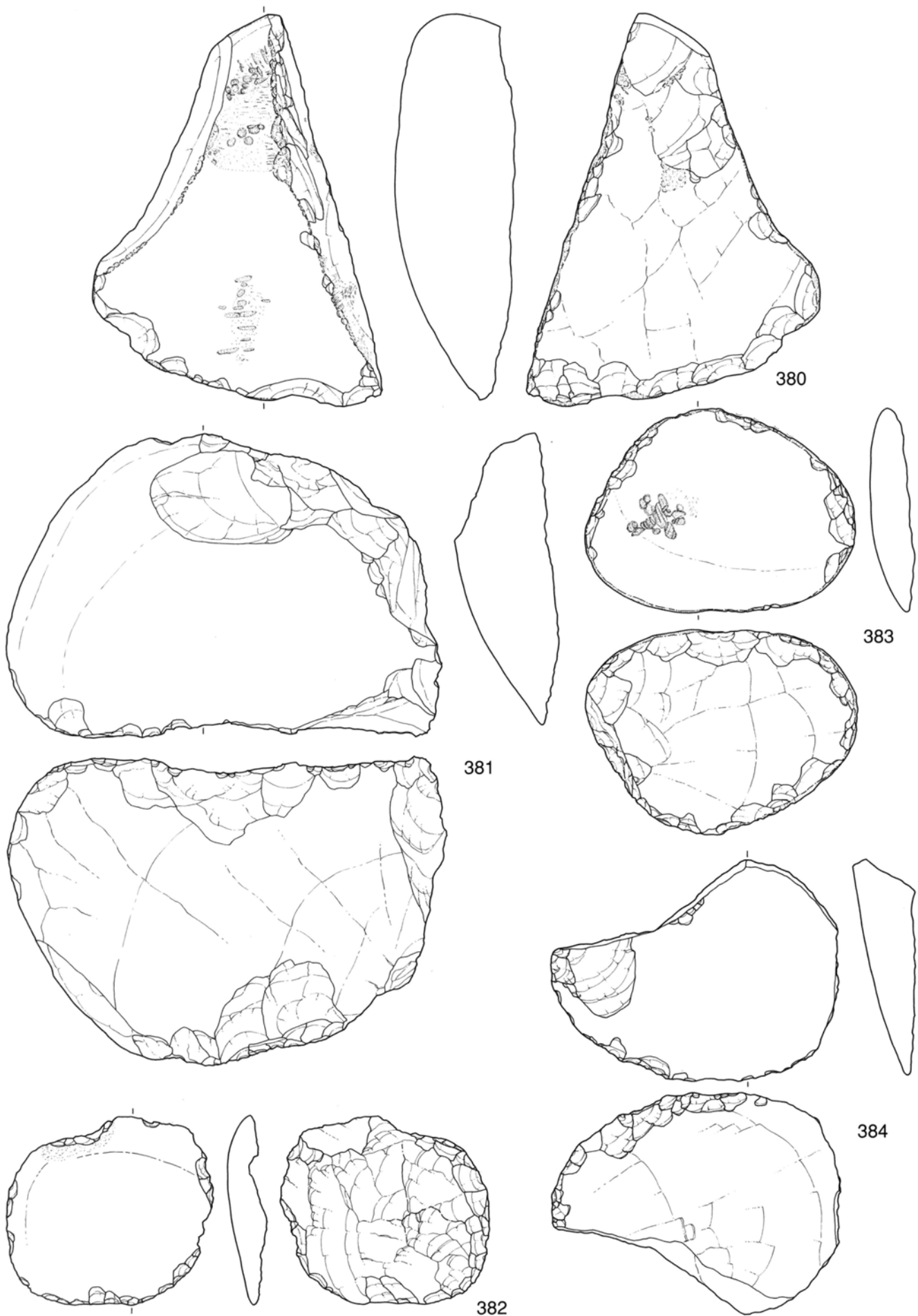


图60 粗製剥片石器 (9)

(1/2)

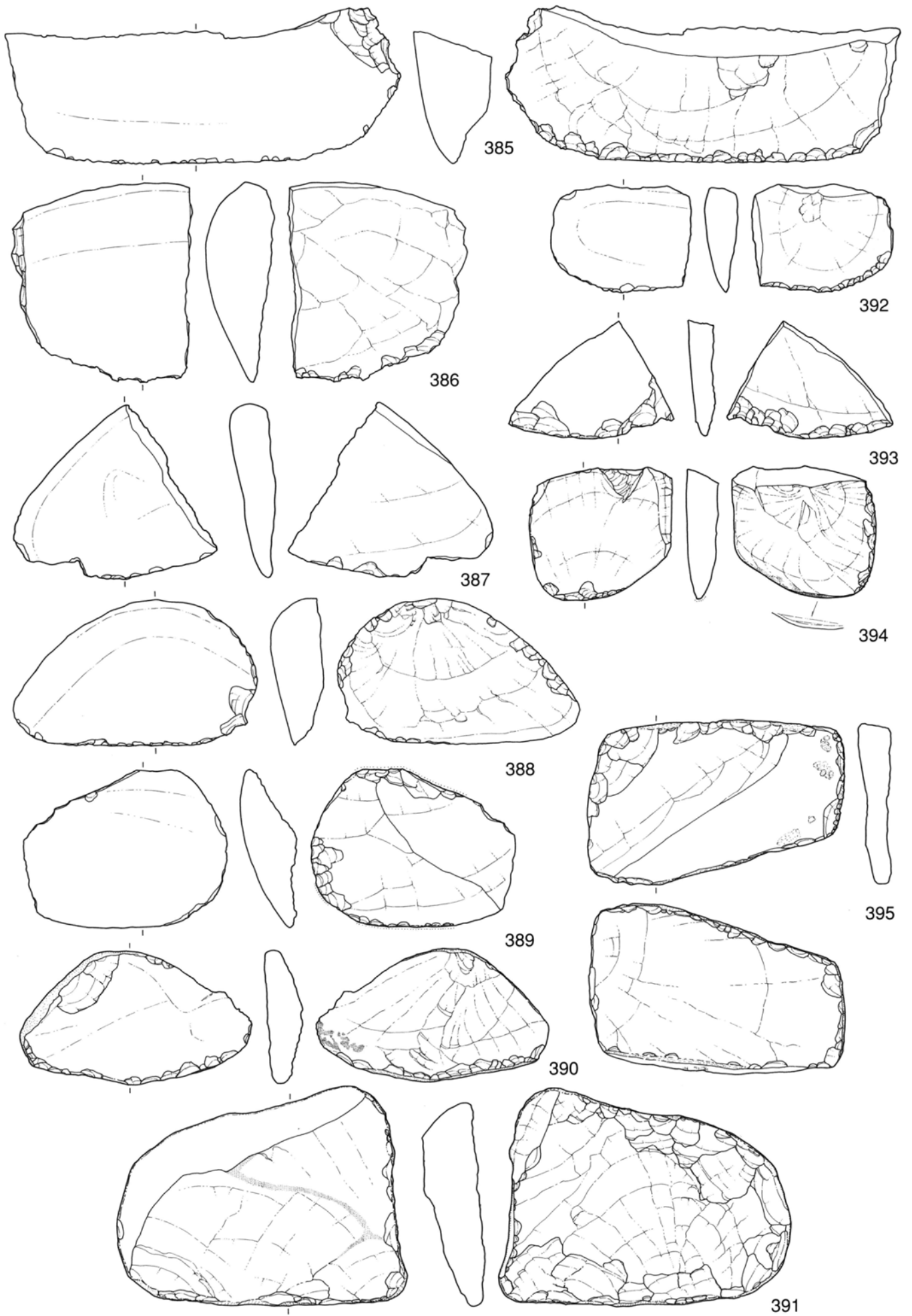


图61 粗製剥片石器 (10)

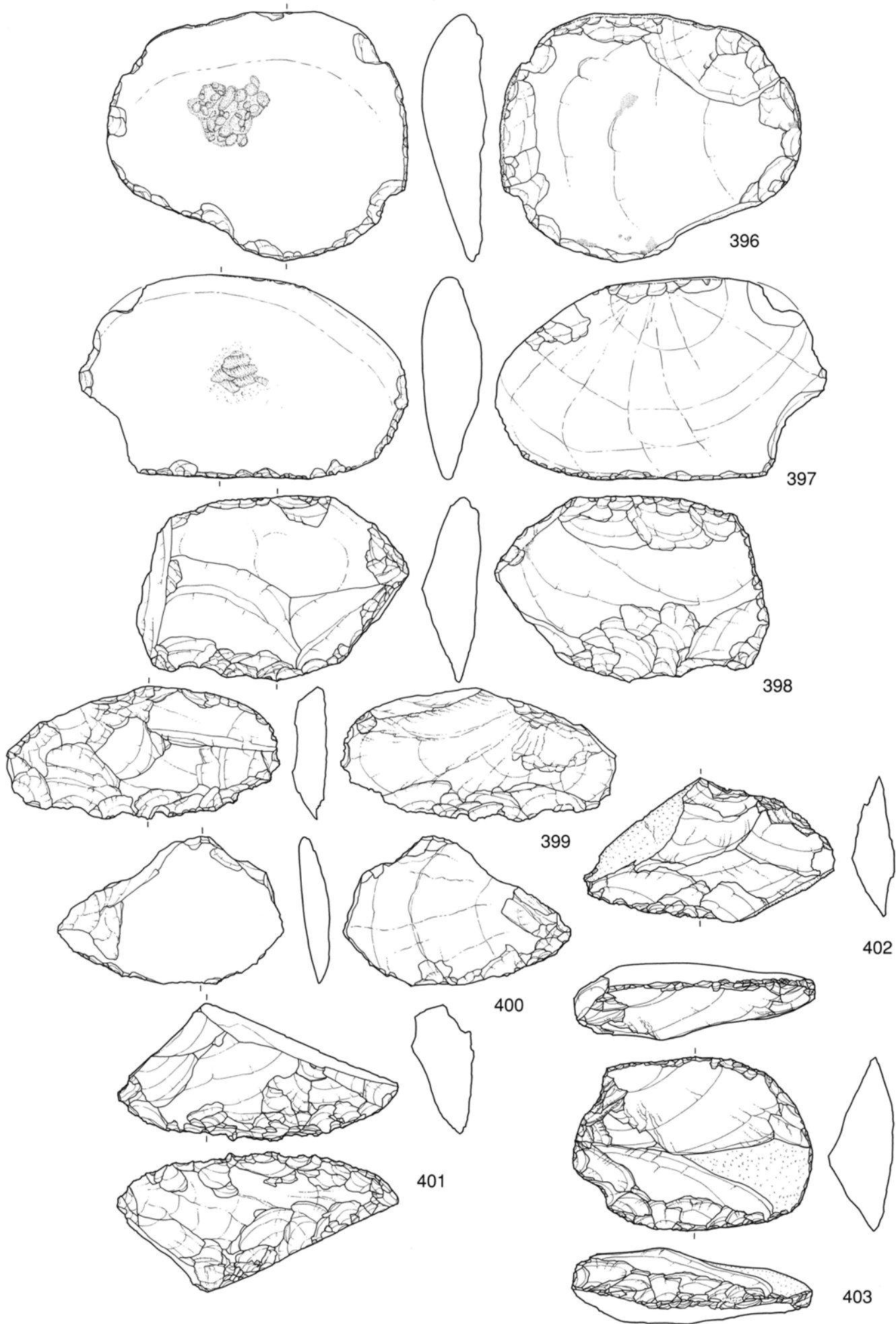


图 62 粗製剥片石器 (11)

(1/2)

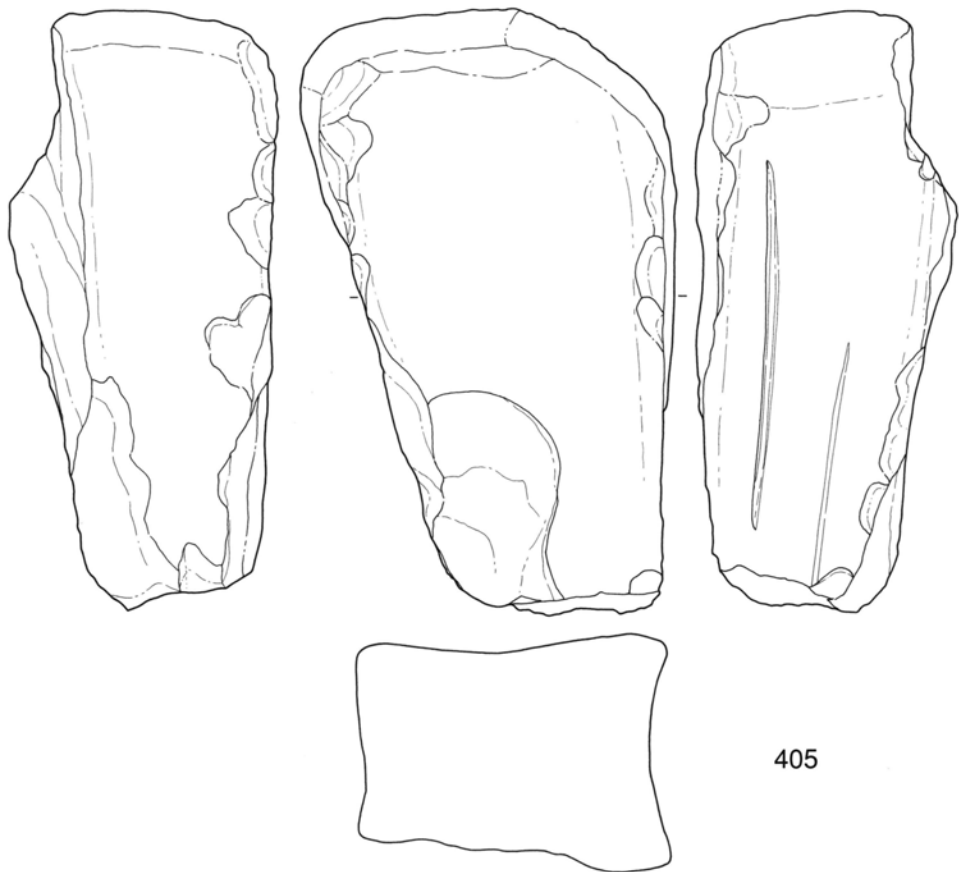
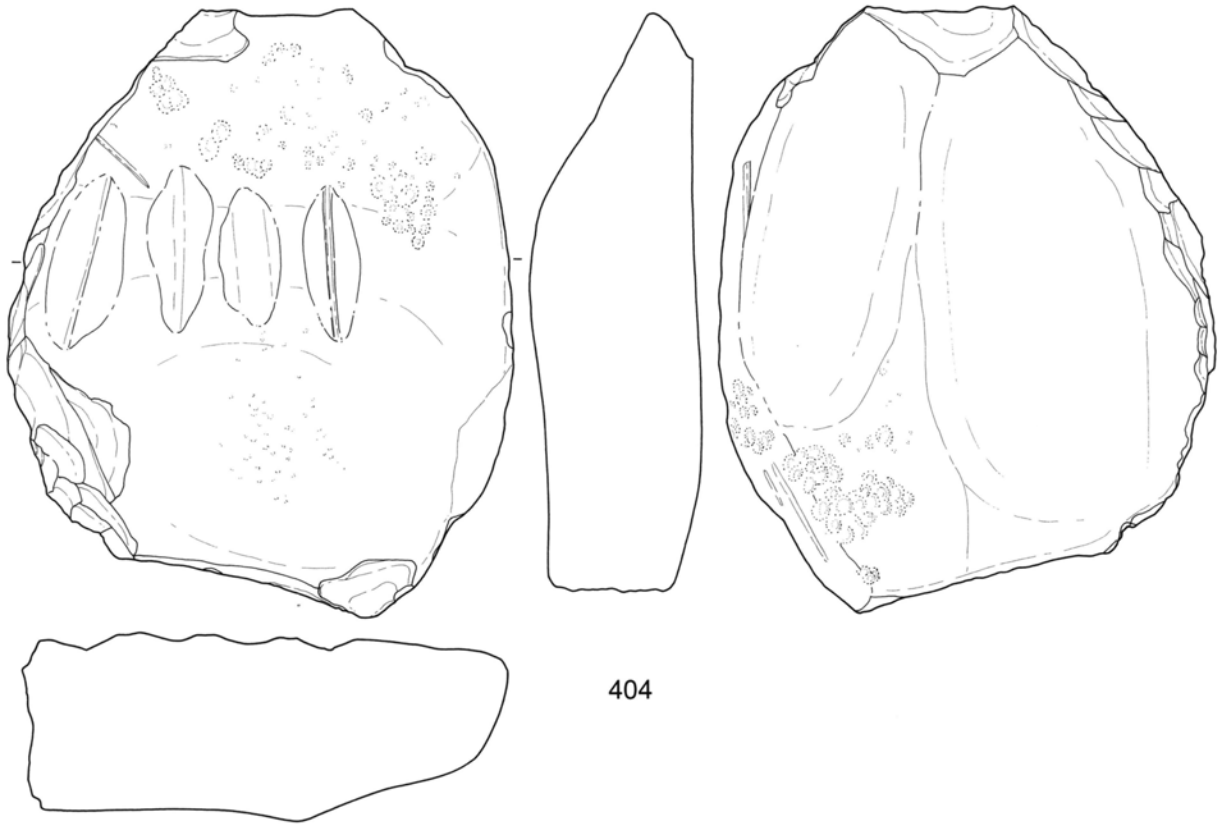
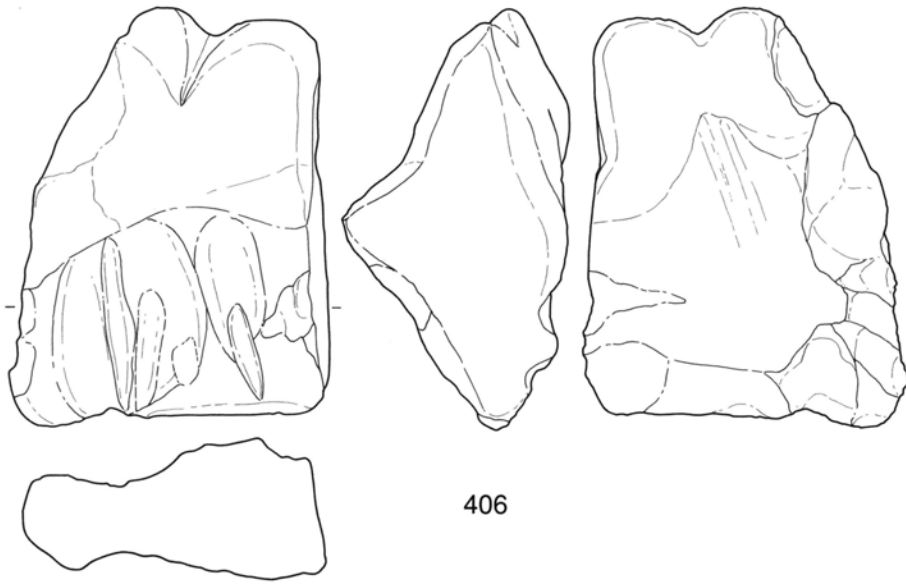
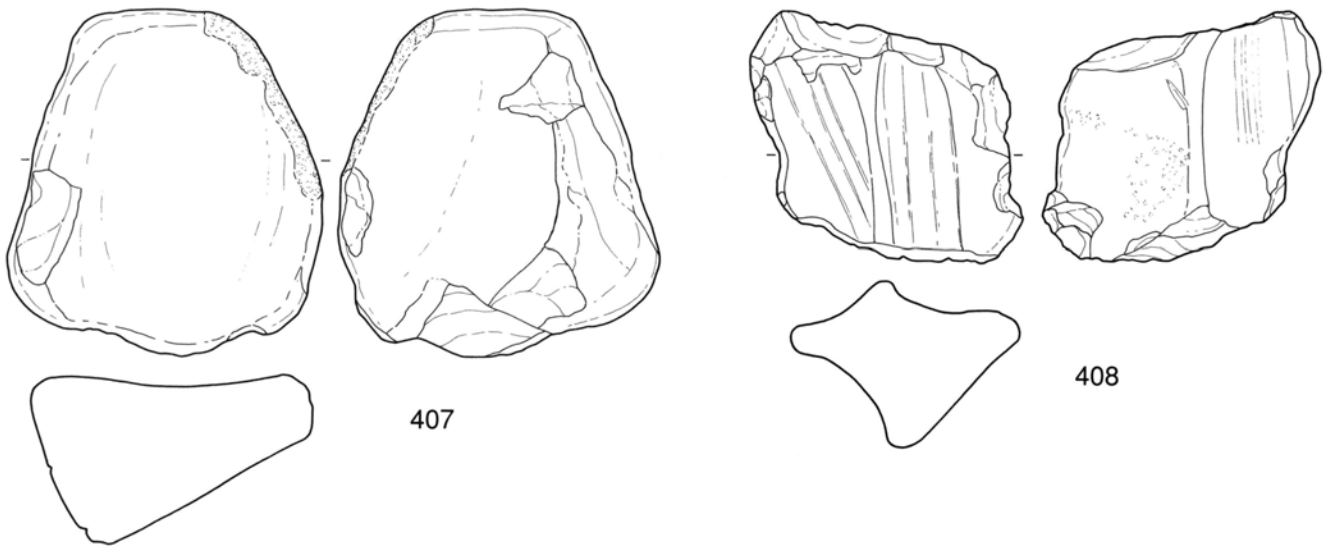


图63 砥石 (1)

(1/2)

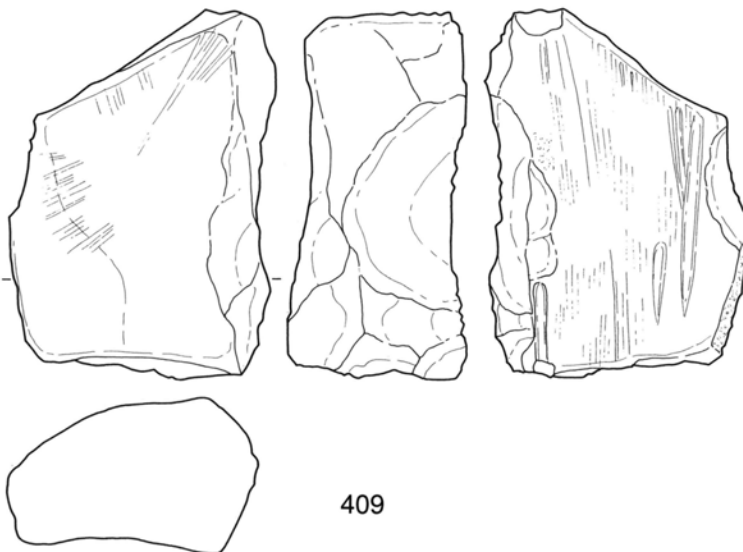


406



407

408



409

图64 砥石 (2)

(1/2)

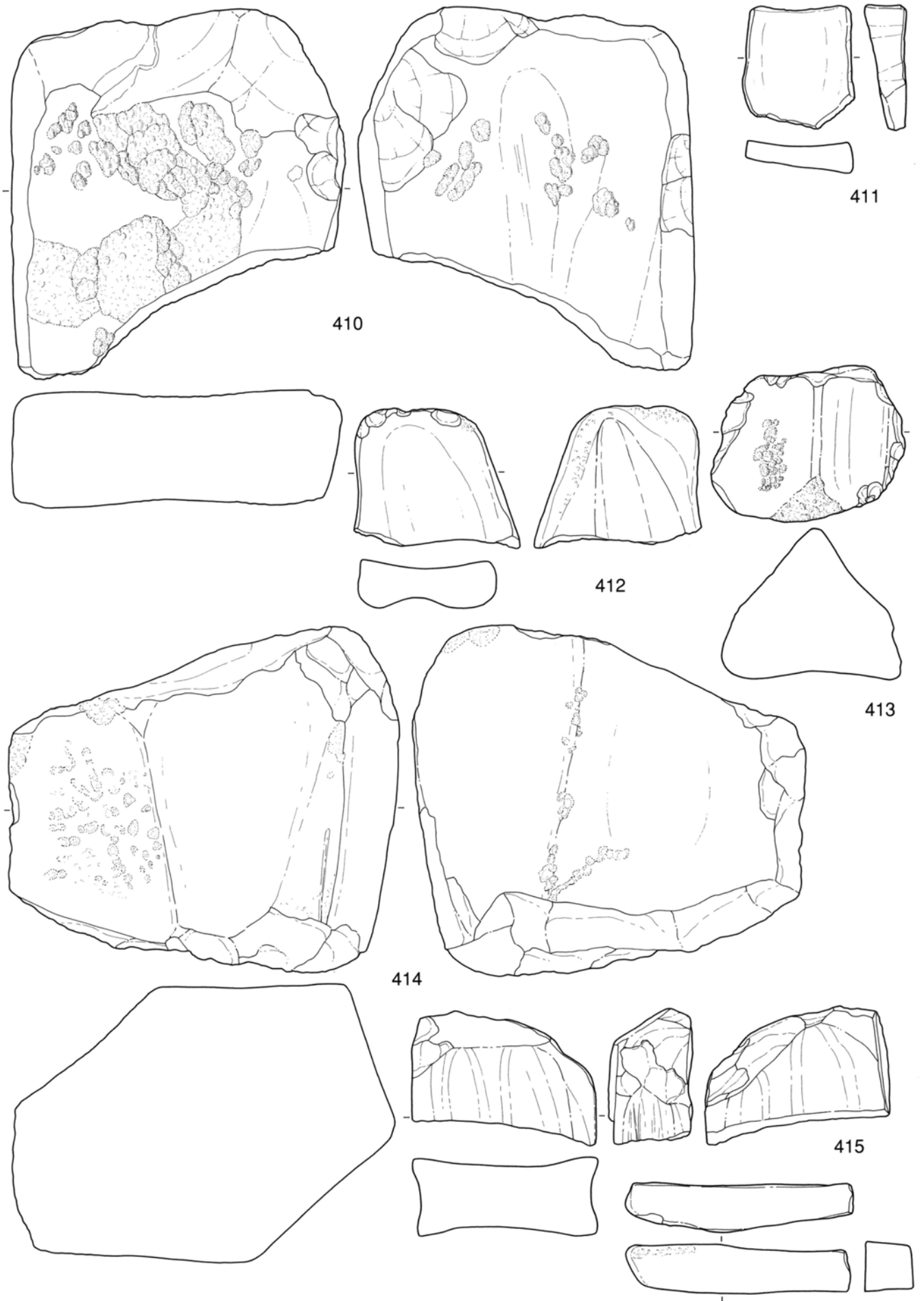
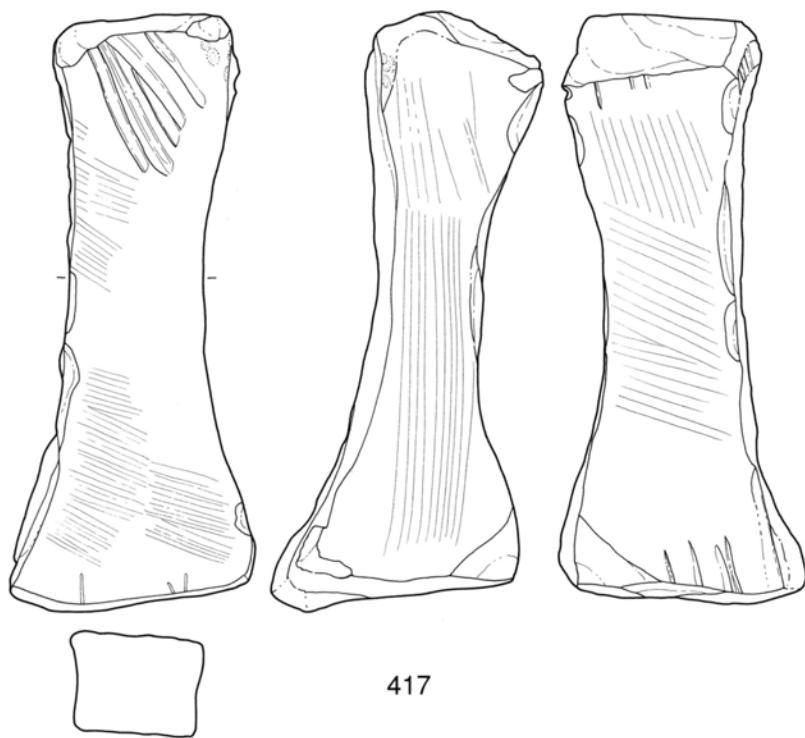
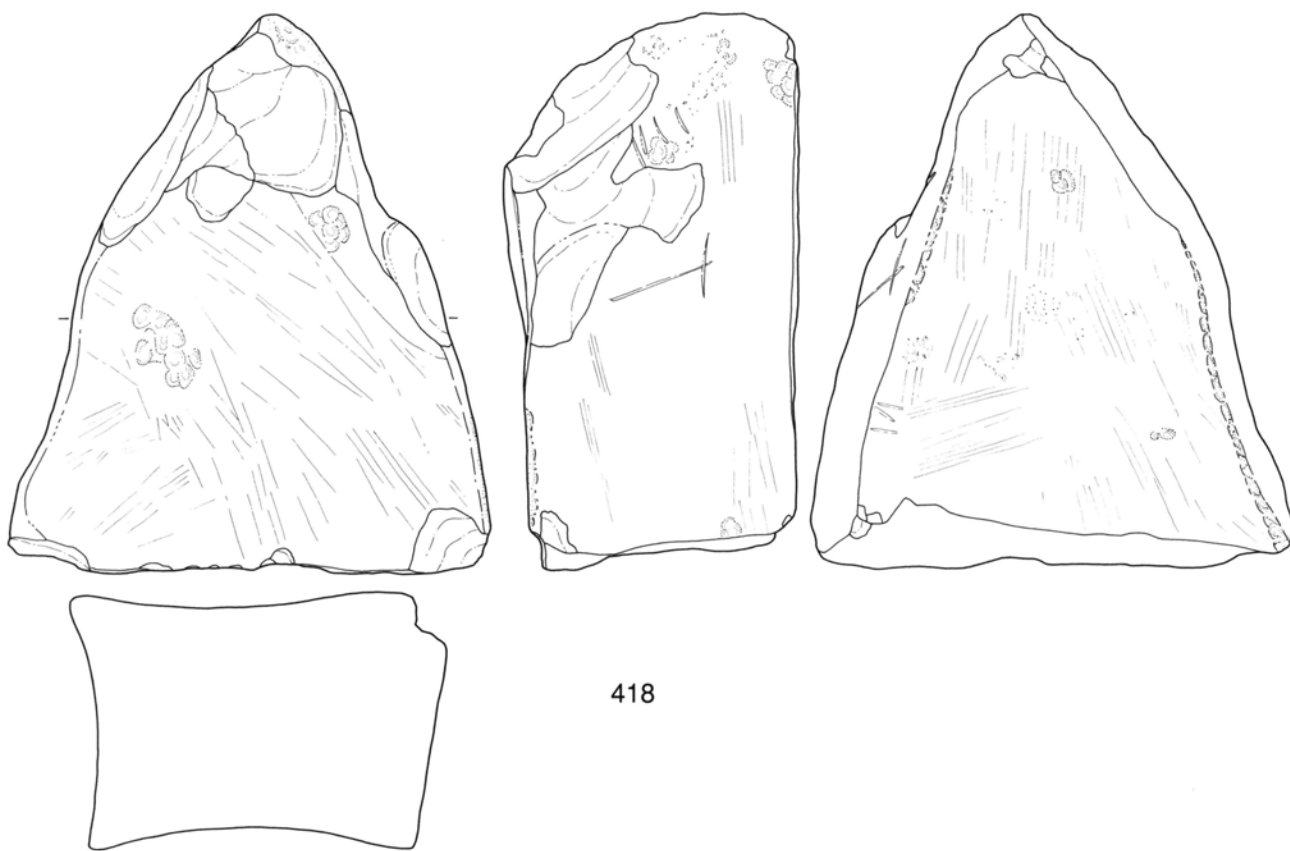


图65 砥石 (3)

416
(1/2)



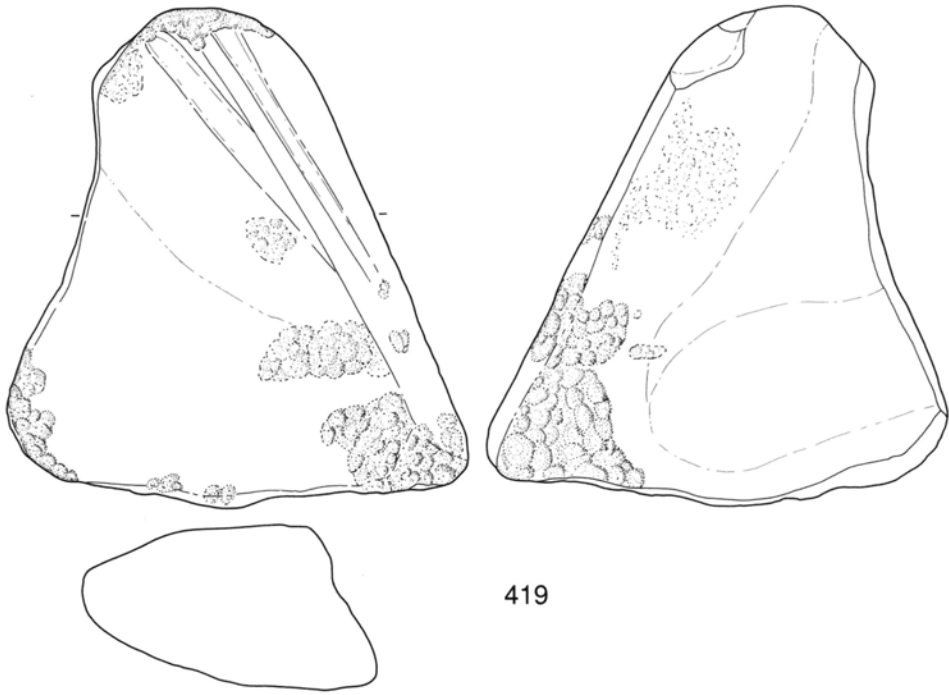
417



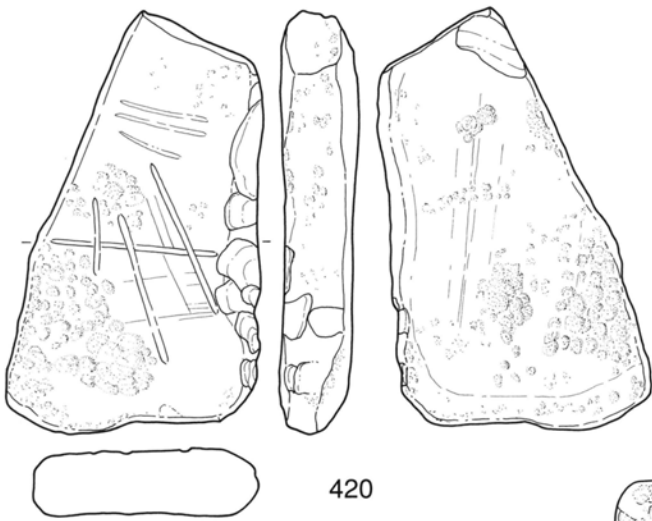
418

图66 砥石 (4)

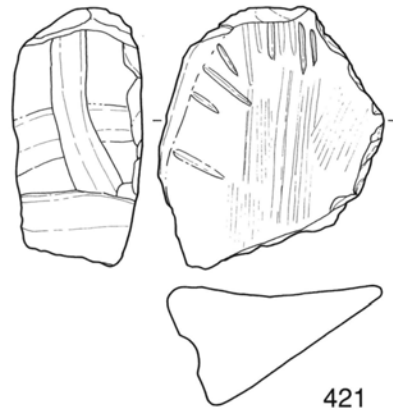
(1/2)



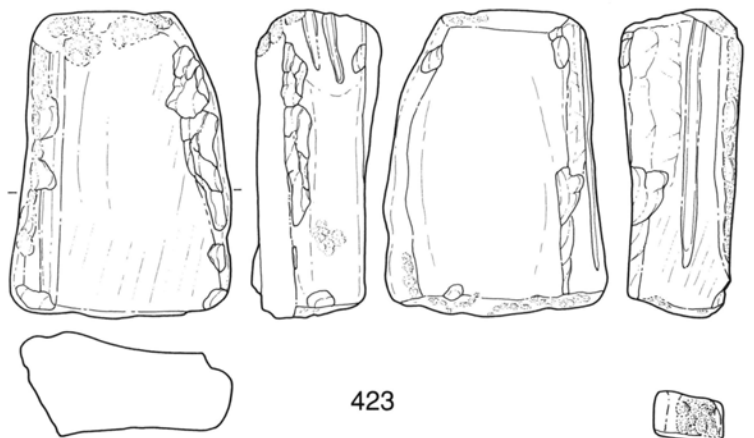
419



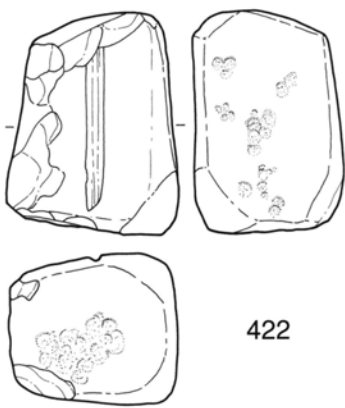
420



421



423



422



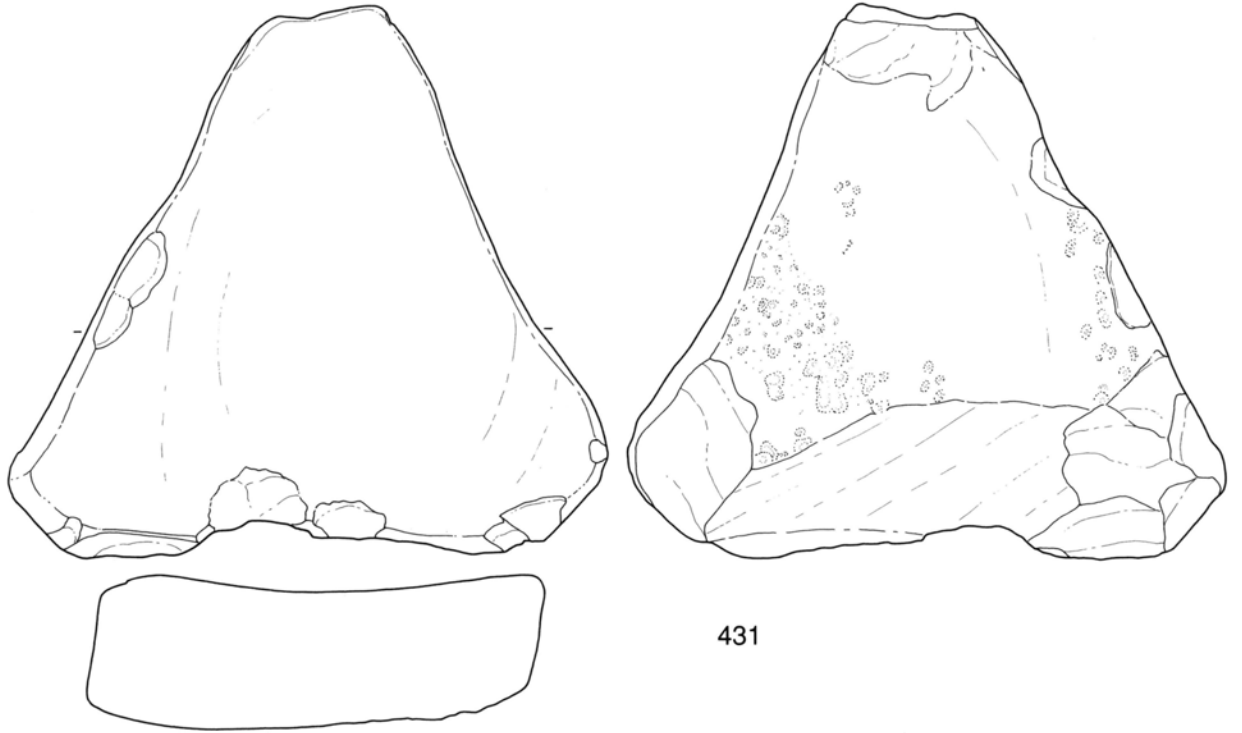
424
(1/2)

图67 砥石 (5)

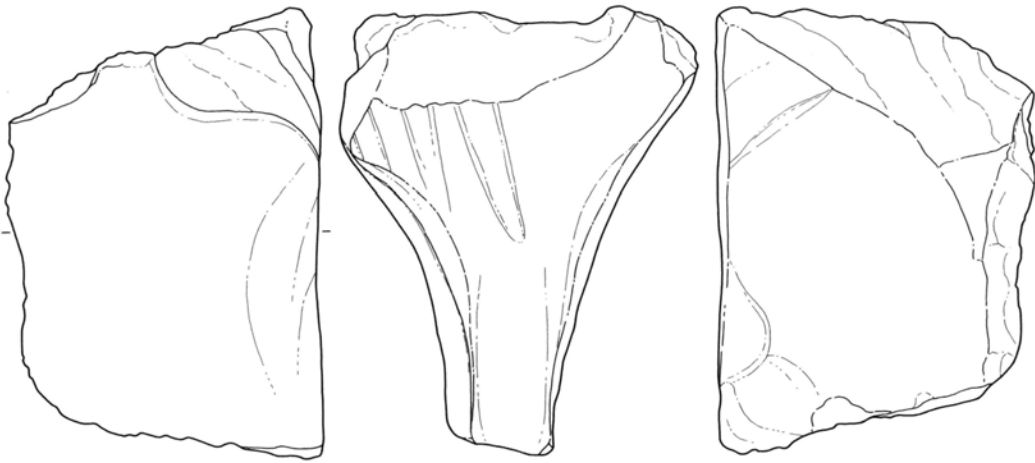


图68 砥石 (6)

(1/2)



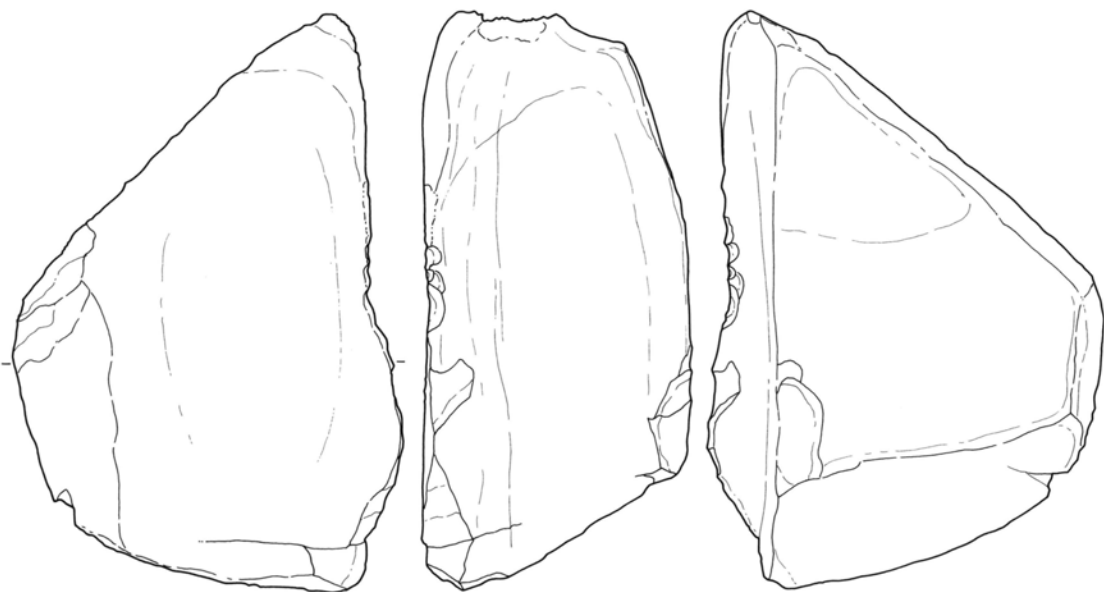
431



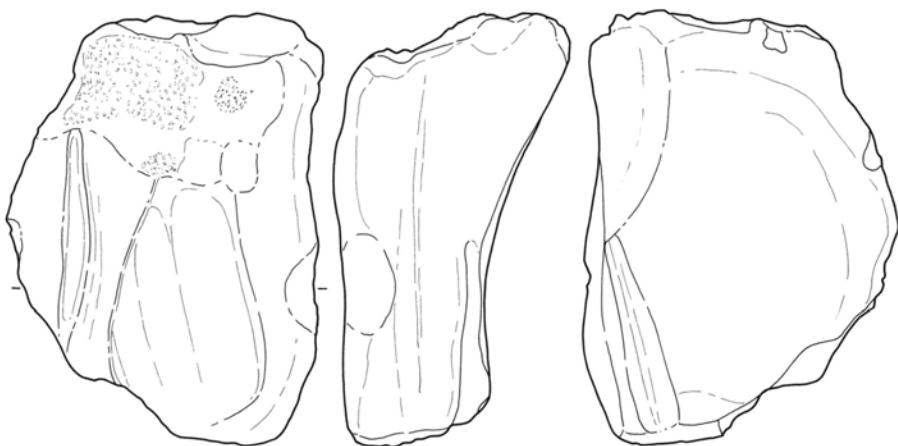
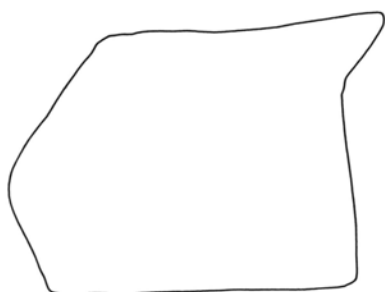
432

433

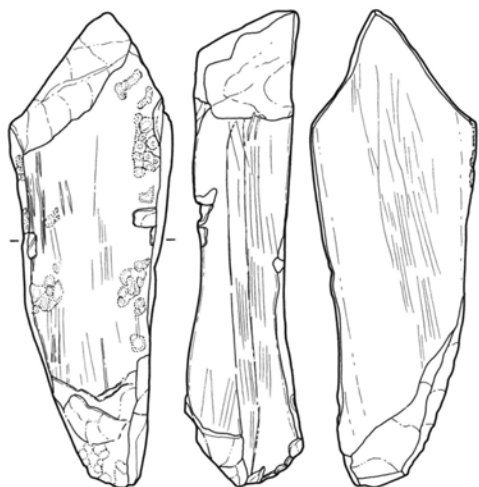
图69 砥石 (7)



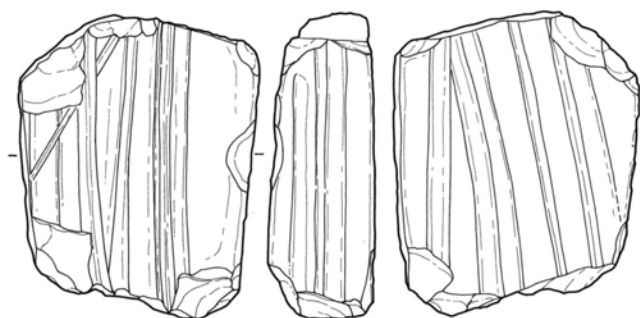
434



435



436

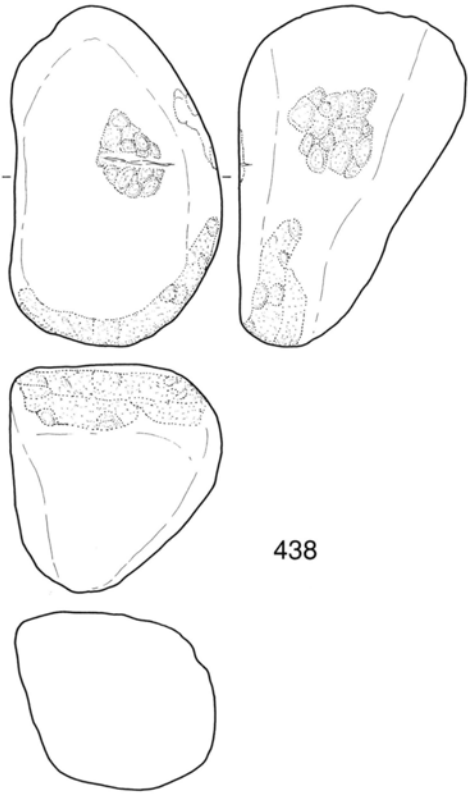


437

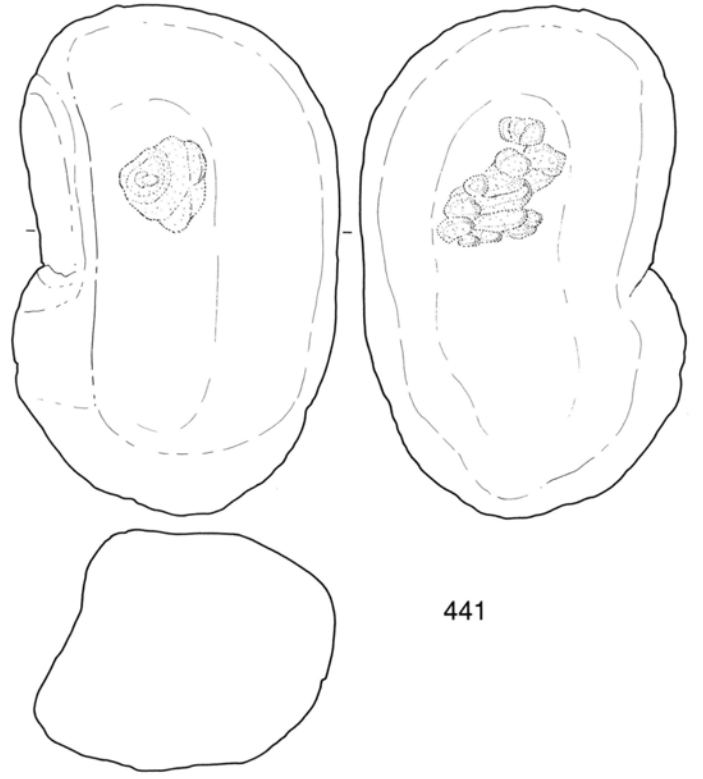


图70 砥石 (8)

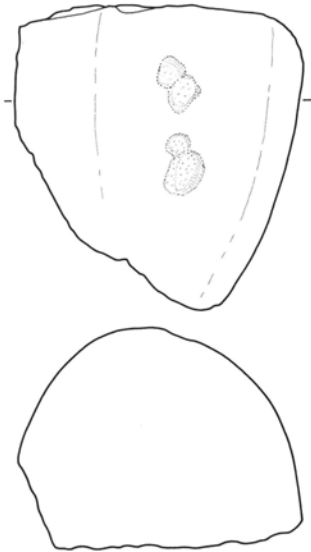
(1/2)



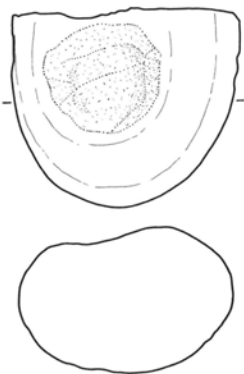
438



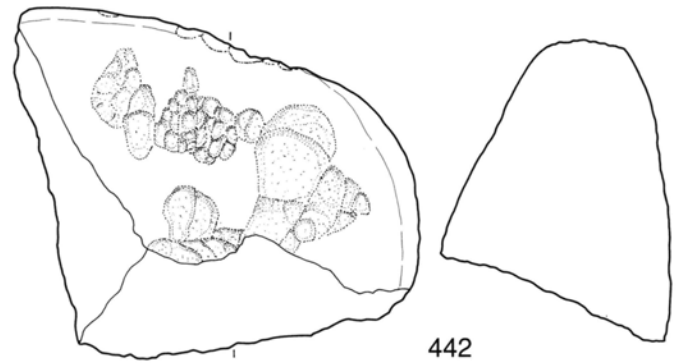
441



439



440



442

图71 凹石 (1)

(1/2)

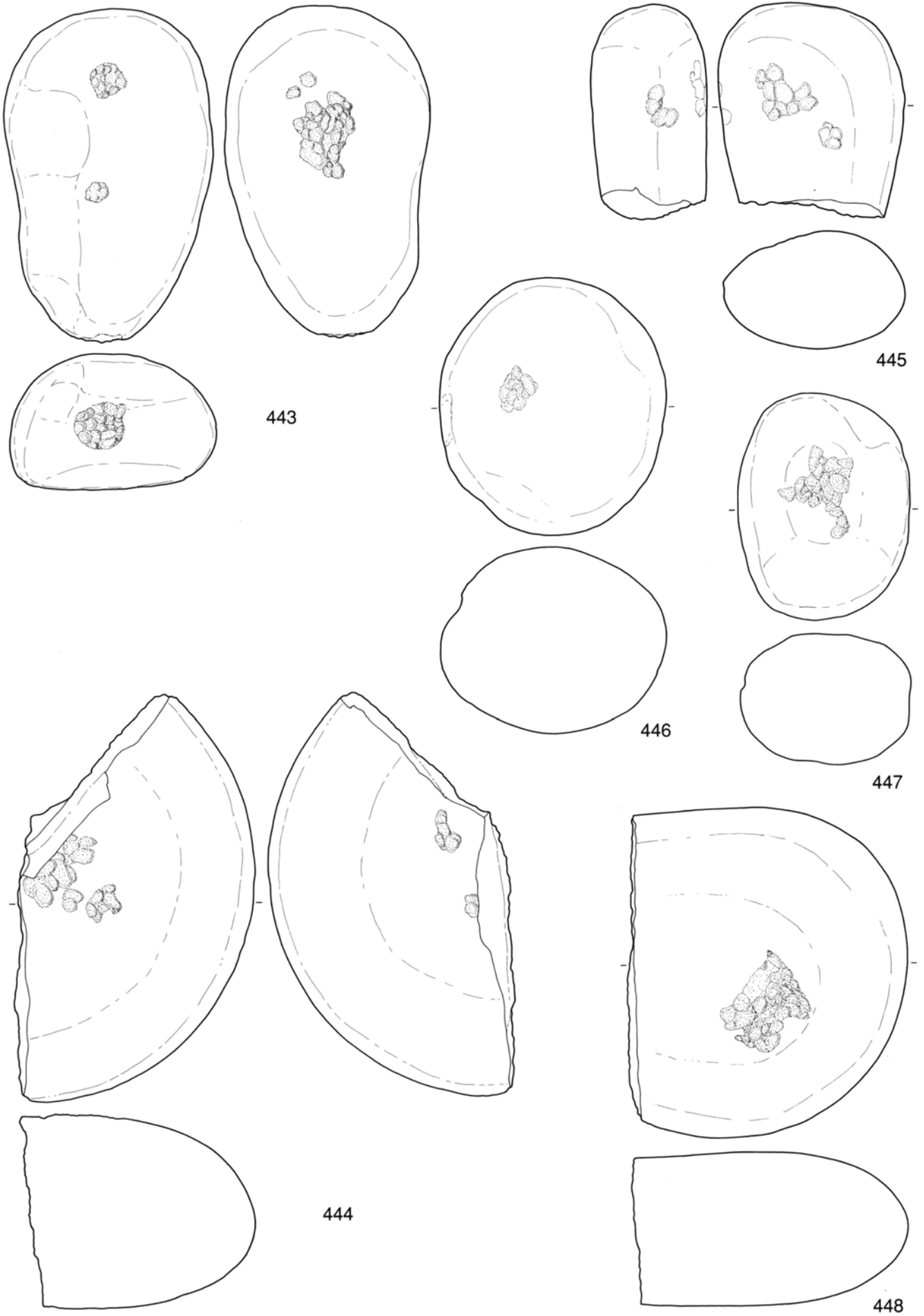


图 72 凹石 (2)

(1/2)



图 73 凹石 (3)

(1/2)

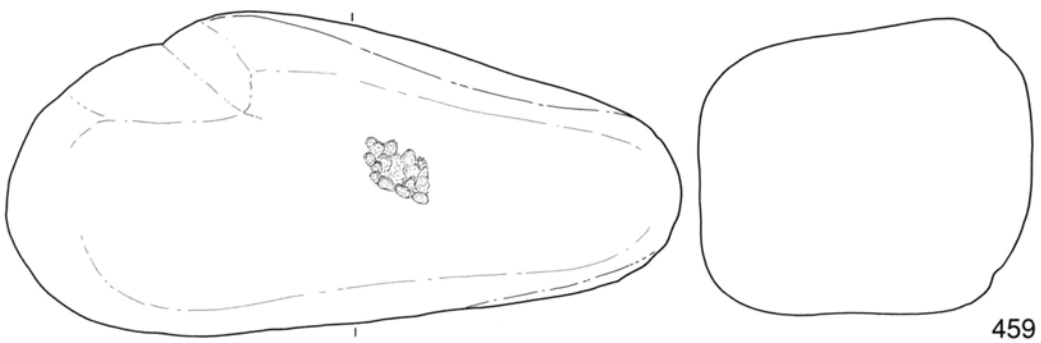
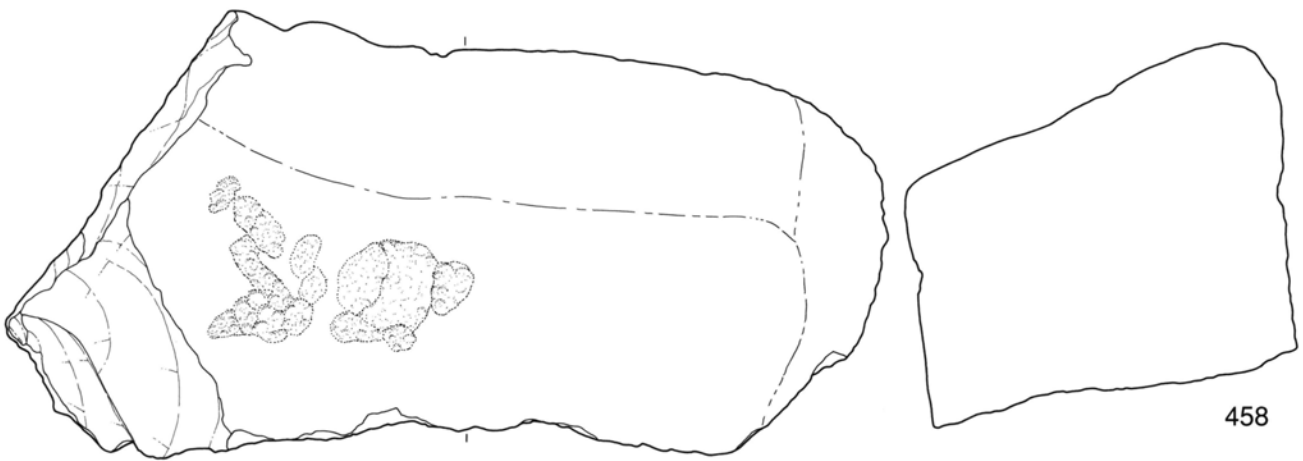
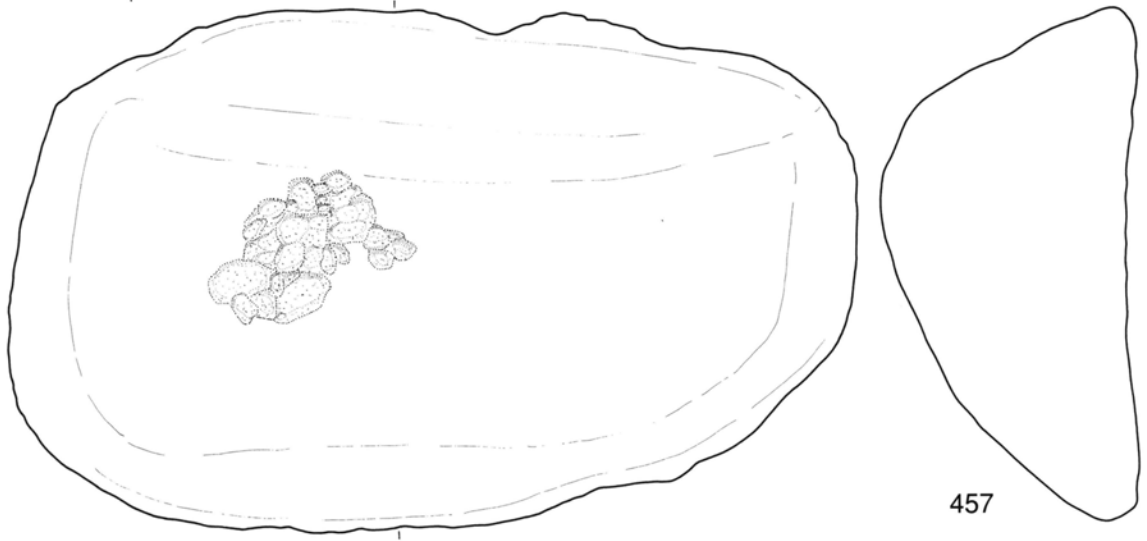
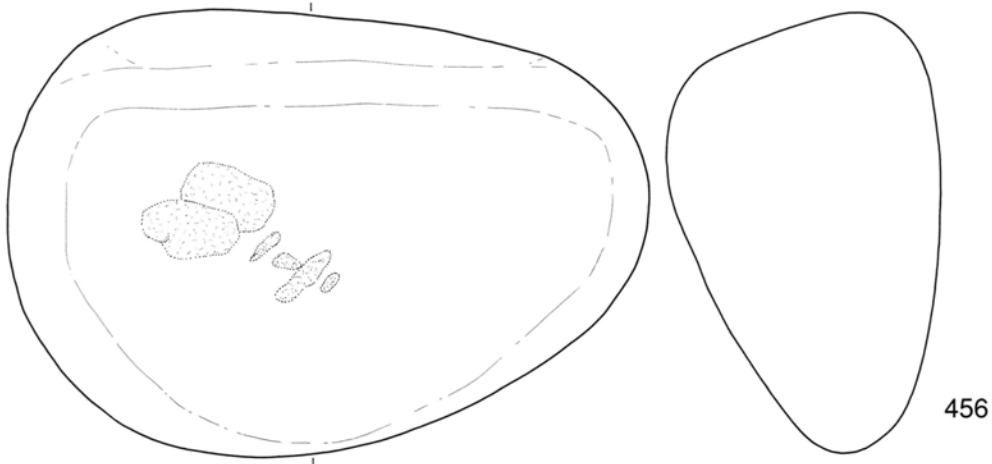
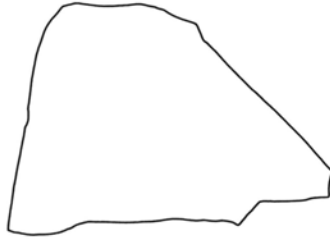
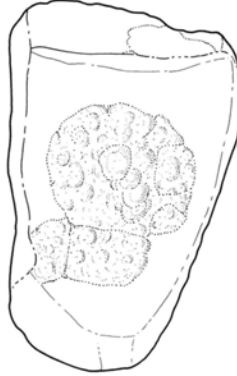
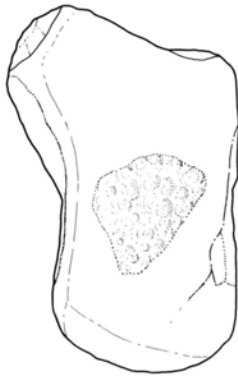
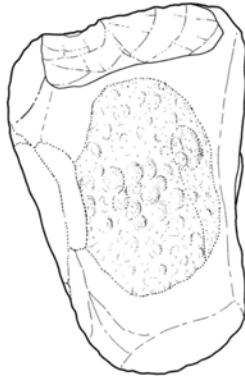
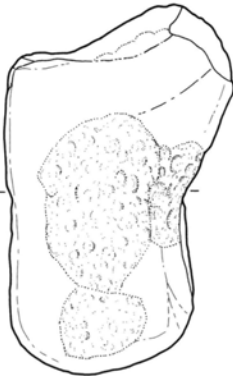


图74 凹石 (4)

(1/2)



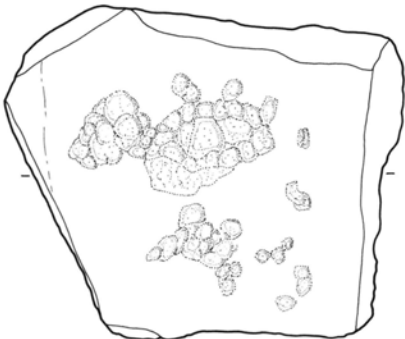
460



461



462

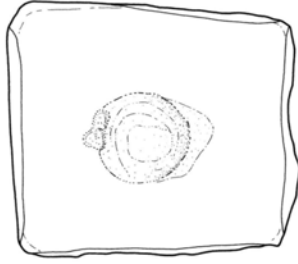
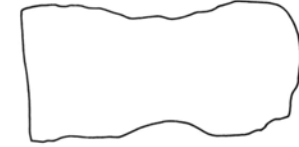
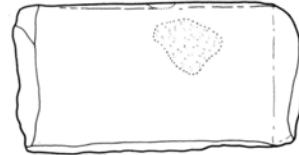
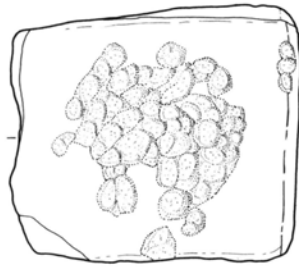
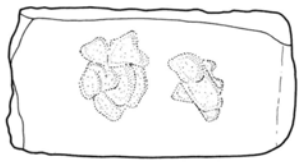


463

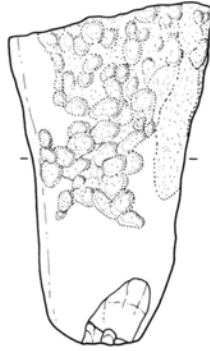


图75 凹石 (5)

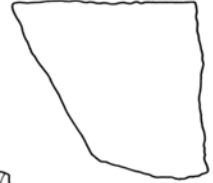
(1/2)



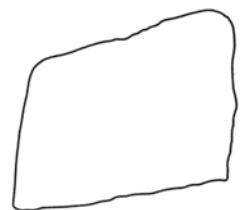
464



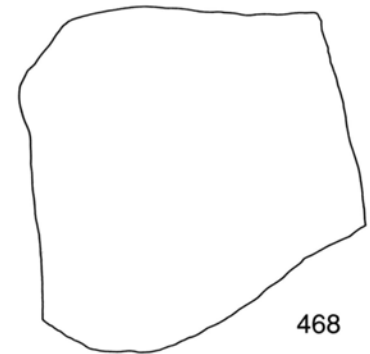
466



465



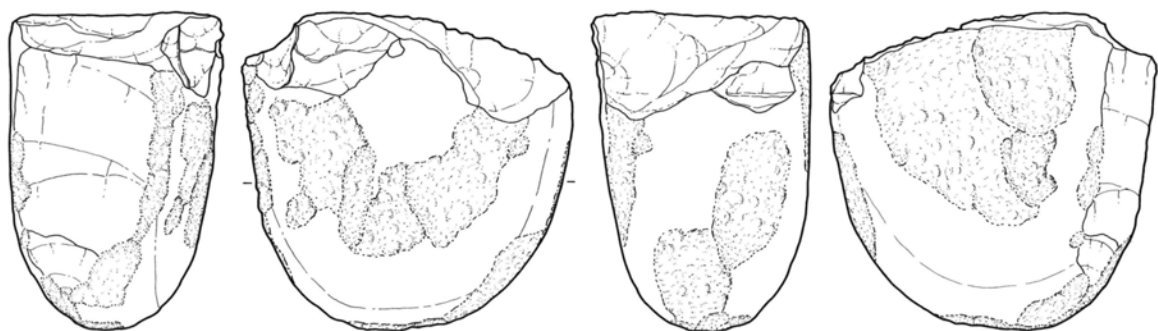
467



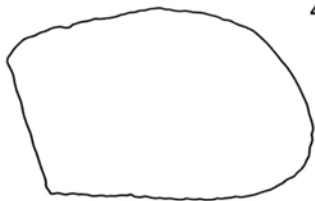
468

图76 凹石 (6)

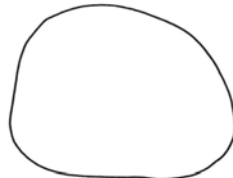
(1/2)



469



470



471

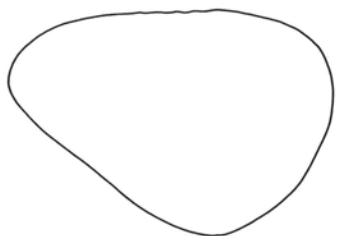
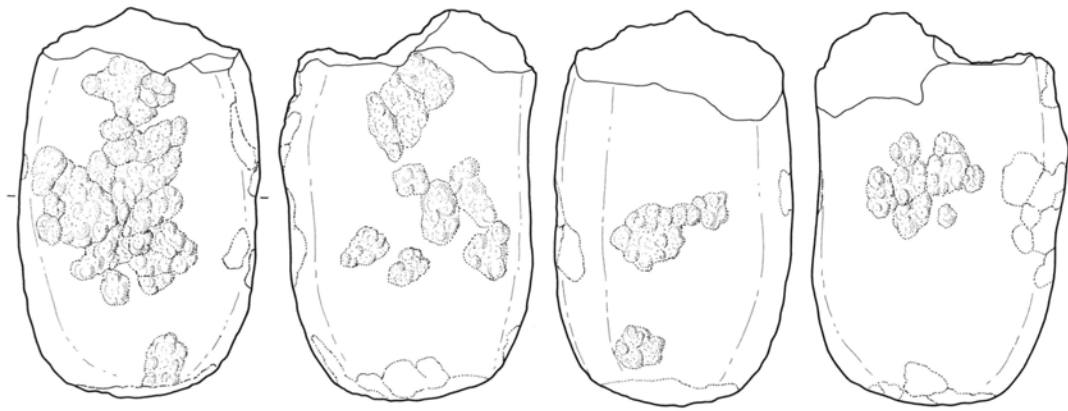
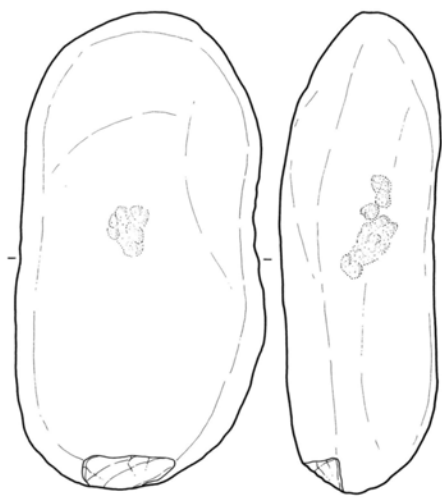
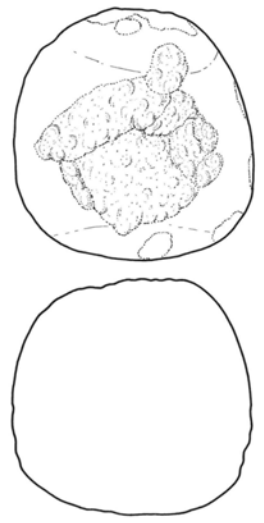


图77 凹石 (7)

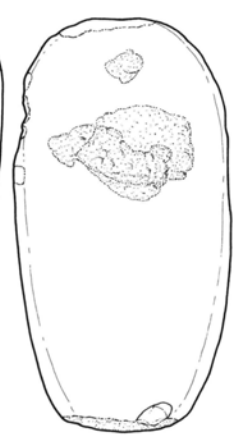
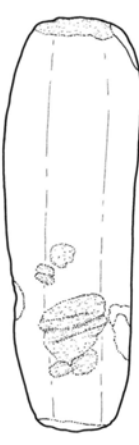
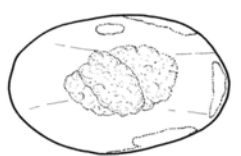
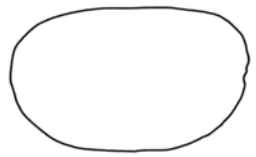
(1/2)



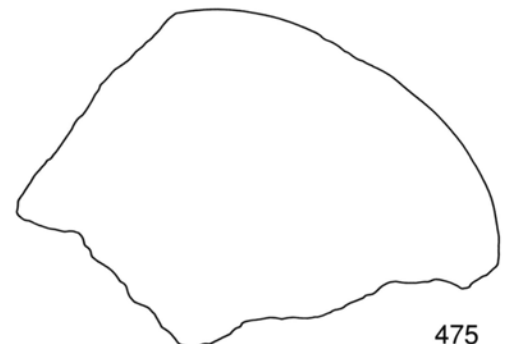
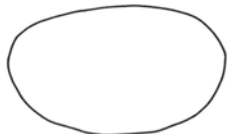
472



473



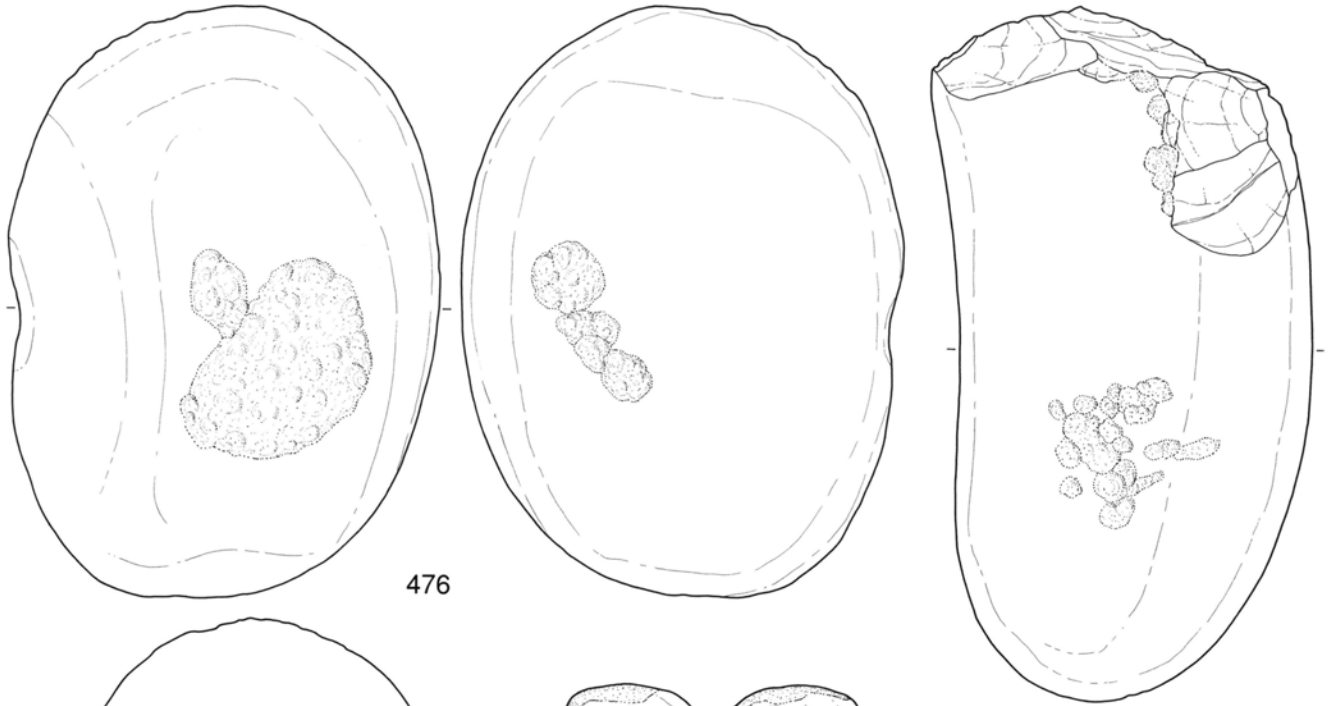
474



475

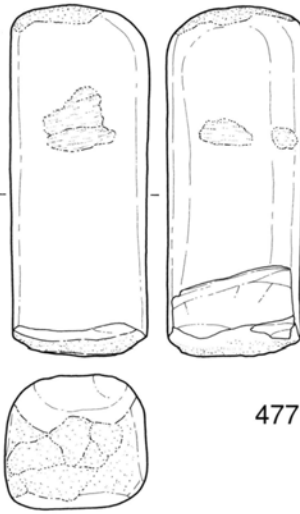
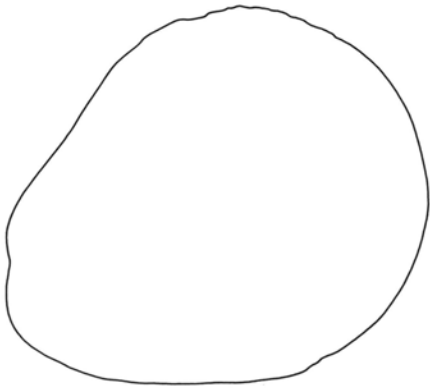
图78 凹石 (8)

(1/2)

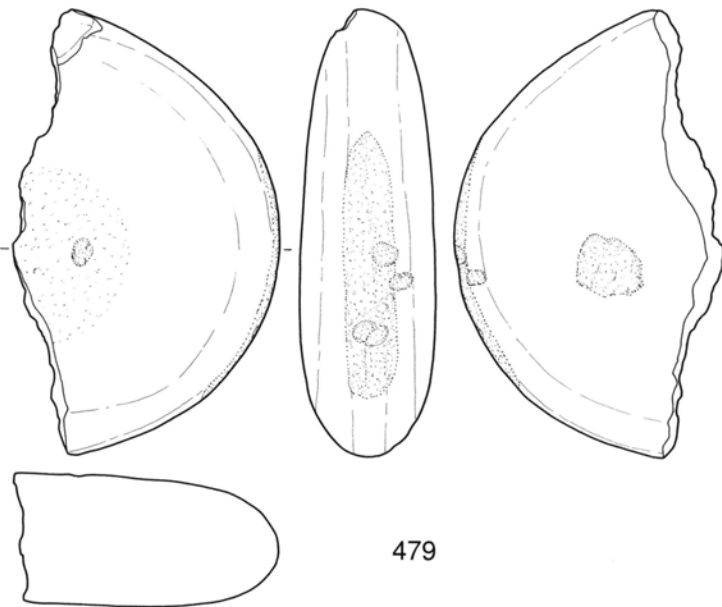


476

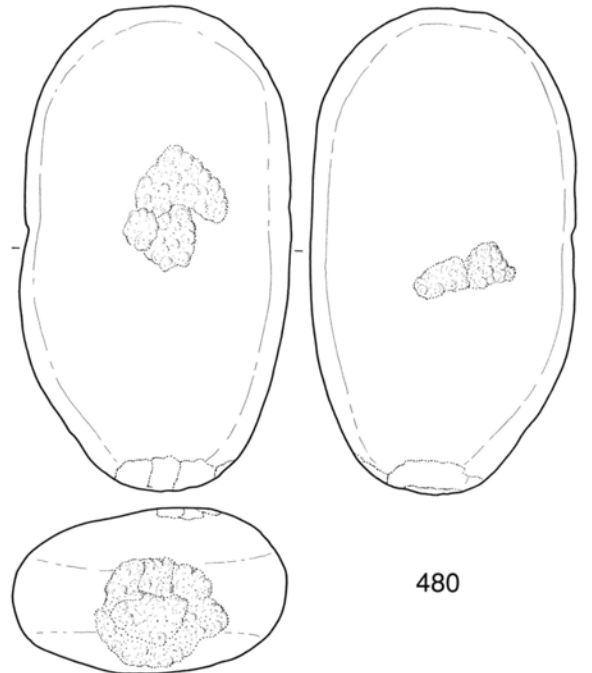
478



477



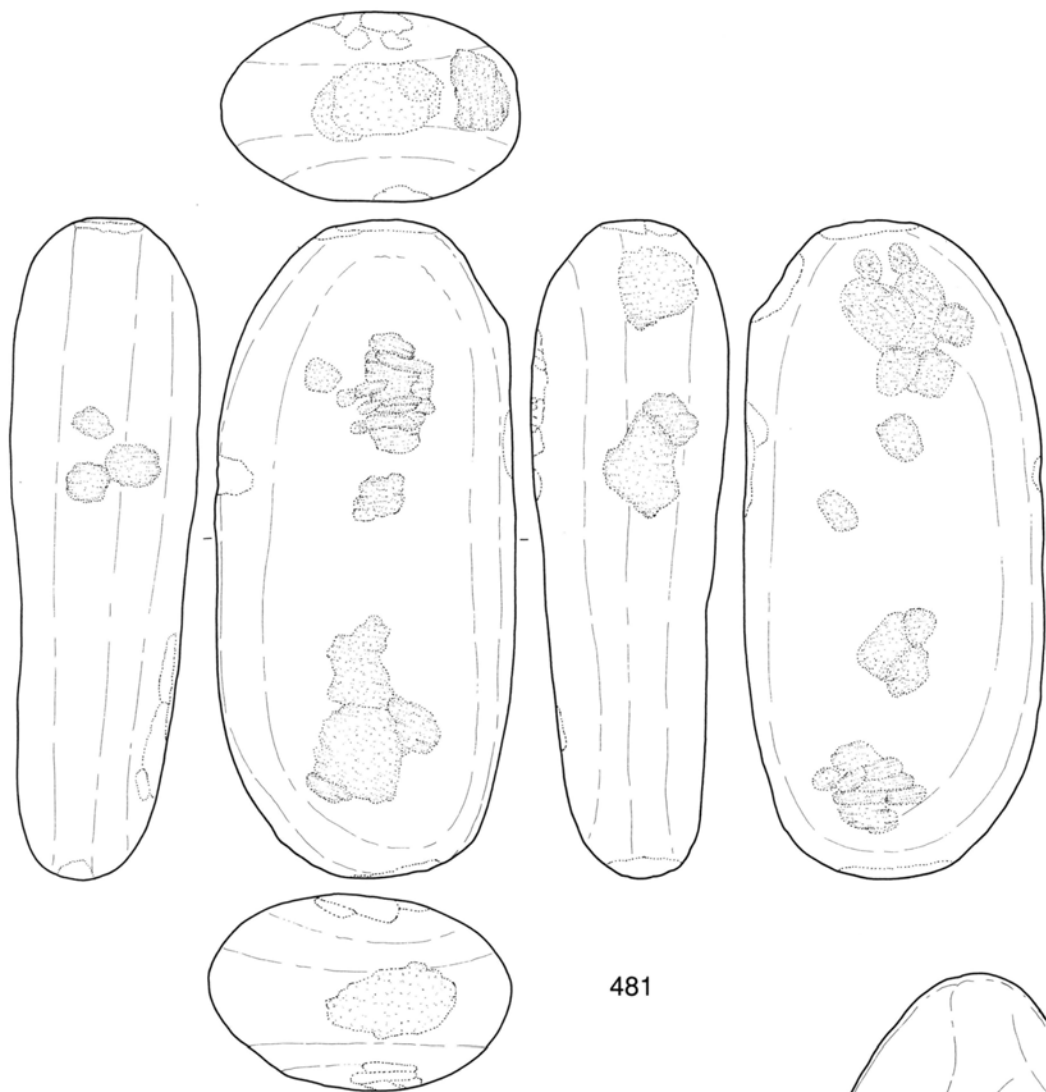
479



480

图79 凹石 (9)

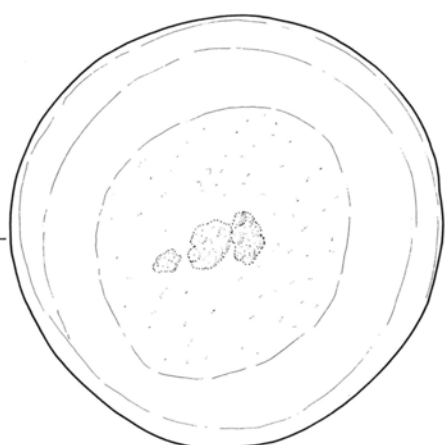
(1/2)



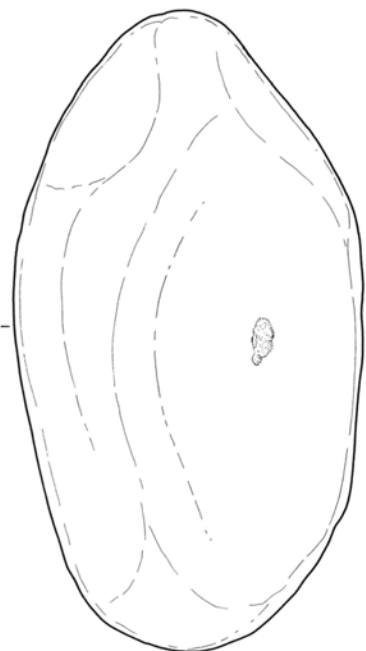
481



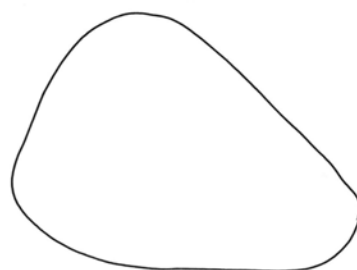
482



483

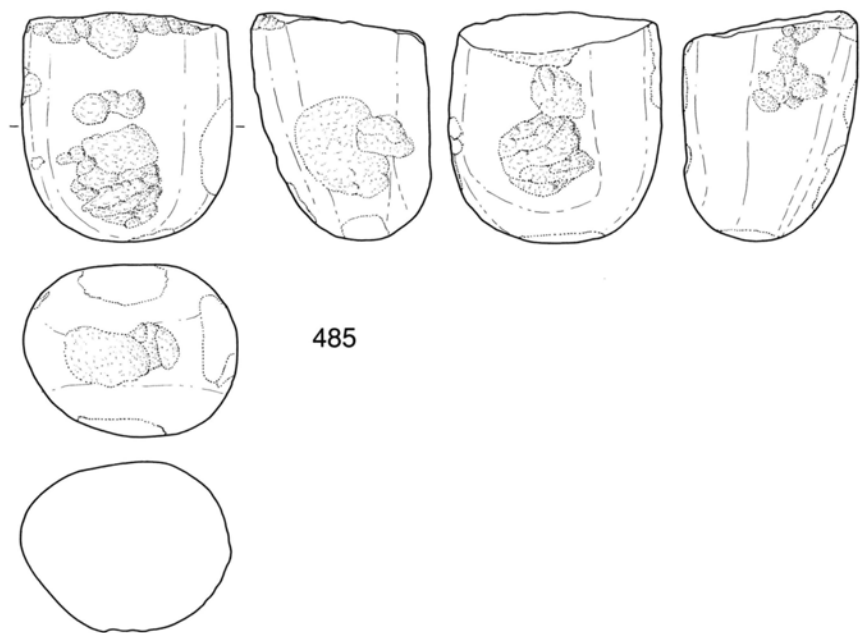


484

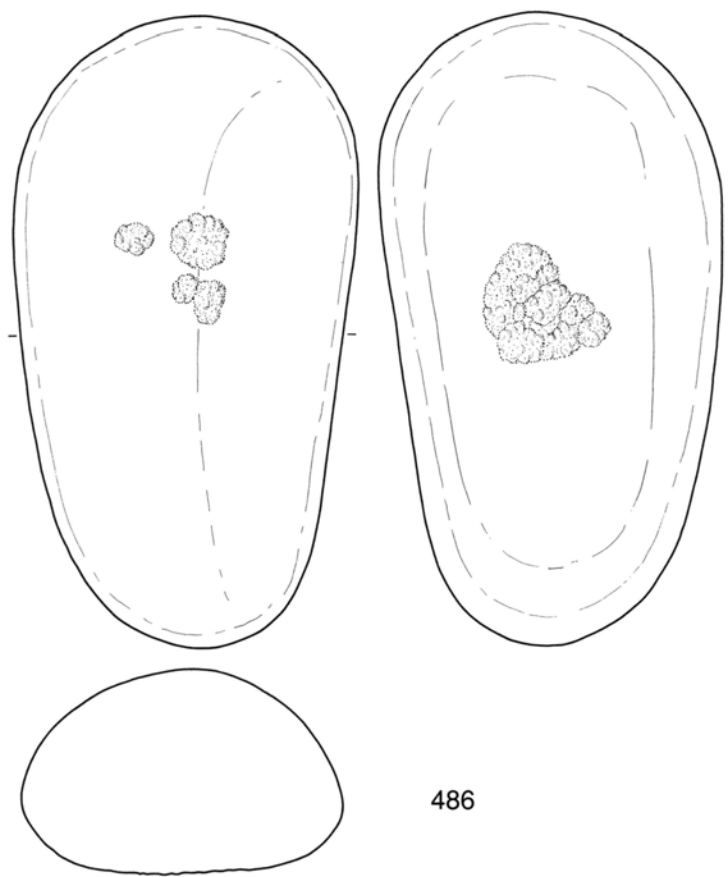


(1/2)

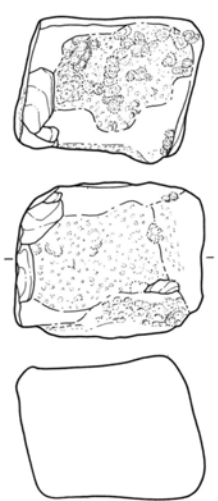
图80 凹石 (10)



485



486



487

图 81 凹石 (11)

(1/2)

(3) 木製品 (図1・2)

2・3は有頭棒で、2は方形の頭部をもつ。SD 96最下層から出土しており、時期はIV～V期になる。樹種はスギ。3は枝部の小枝を切り取り、頸部と頭部頂に削痕がみられる。頭部はそのまま丸い。SD 103・3層からの出土で、時期はII～III期。樹種は不明。4は小型の白で、口縁部端がわずかに欠損している。SD 106・3層から出土しており、時期はI～II期になる。樹種はスギ。5はスギ材を板状に加工したもので、SD 102最下層から出土する。時期はI～II期になる。6はスギ枝の両端を削り棒状にしたもので、SD 102・3層から出土している。時期はI～II期。7・8は同様の形態をするもので、ともにSD 102下層8から出土している。身部は平面形が楕円形を呈し、断面形がやや凹面をなす。片側には身と段差なく柄が付き、櫛になると思われる。

両者とも樹種はスギ。9は断面が長方形をなす板で、木口部分には削痕がみられる。SD 103最下層から出土し、時期はIV～V期になる。樹種はスギ。10・12はSZ 348から出土している板で、時期はVII期になる。10は長さ218cmを測る大型のもので、木口部両端が欠損している。樹種はスギ。12は木口部の片側に斜位の削痕が認められる。樹種はスギ。13は断面が長方形を呈する棒状の木製品で、樹種はスギ。

1(図219ページ参照)と11は中世の土坑SK 30から出土する。1は漆椀で、内面には黒漆の上に赤漆で紋様が描かれ、外面は黒漆の上に赤漆が塗られている。11はハンノキ属になる材を切り取り、枝部を取り払っただけの棒状の木製品で、片側には斜位の削痕が規則的に施されており、杭になると思われる。

(4) 玉類 (図1)

1～15は碧玉製管玉になる。色で分類すると暗緑色を呈する1～5、8～10、15とやや薄い灰緑色の6・7、11～14に分かれる。7はSZ 339の主体部であるSK 53から出土する。

16は扁平な長方形に整えられた板状の碧玉で、上面に短径に沿った方向で溝が規則的に入れられている。側面も欠損している部分もあるが、その後磨られて平坦になっている。管玉の制作途中の素材にな

ると考えられる。

17～24はガラス小玉で、24が藍色を呈し、その他は青色になる。18は中世土坑であるSK 09から、20はSZ 343の主体部のSK 54から出土する。

25～28はヒスイ硬玉製の勾玉で、25・26が淡緑色、27・28が暗緑色を呈する。

29は滑石製の勾玉で、灰黒色を呈する。

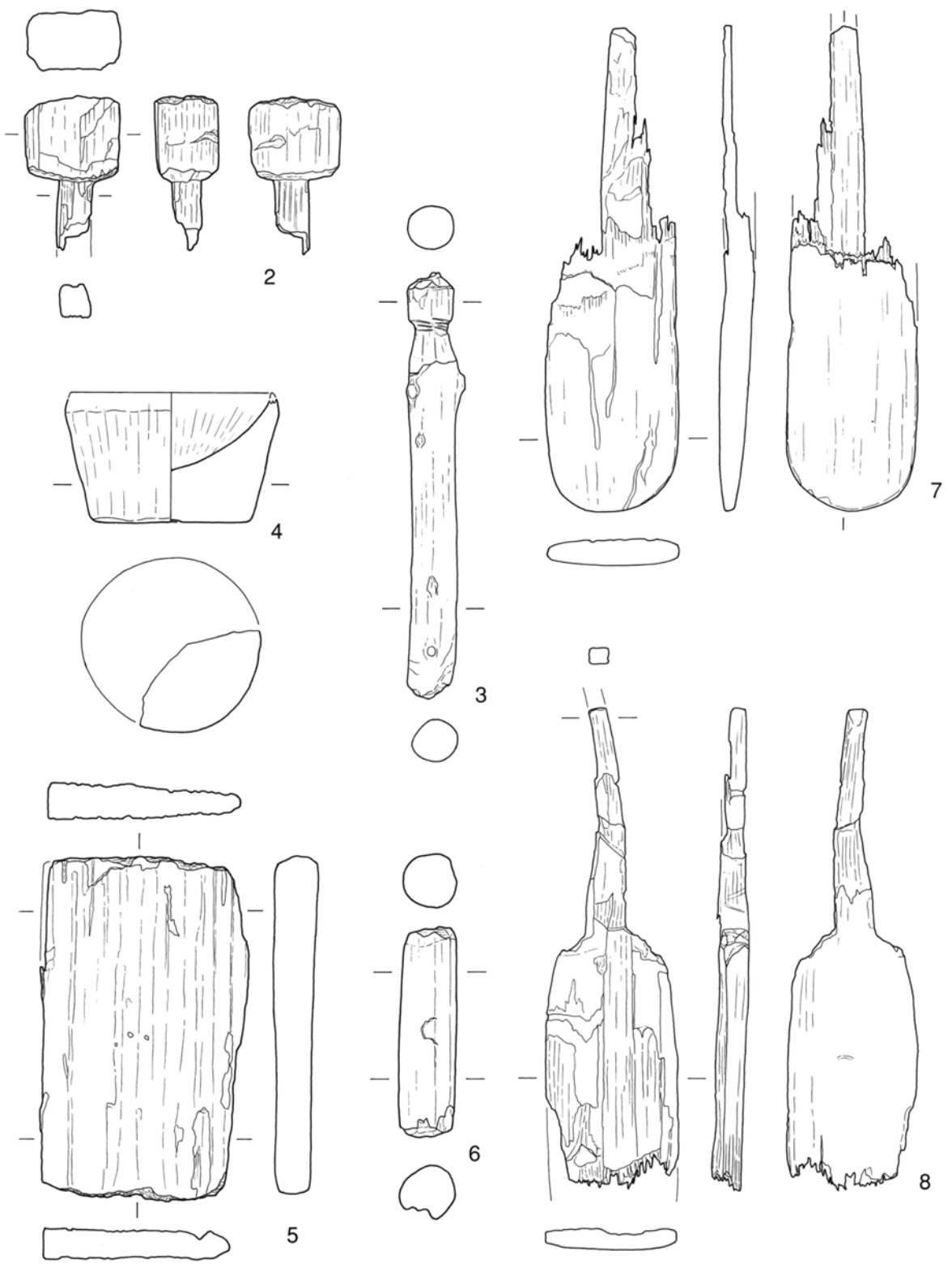


図1 木製品 (1)

(1/4)

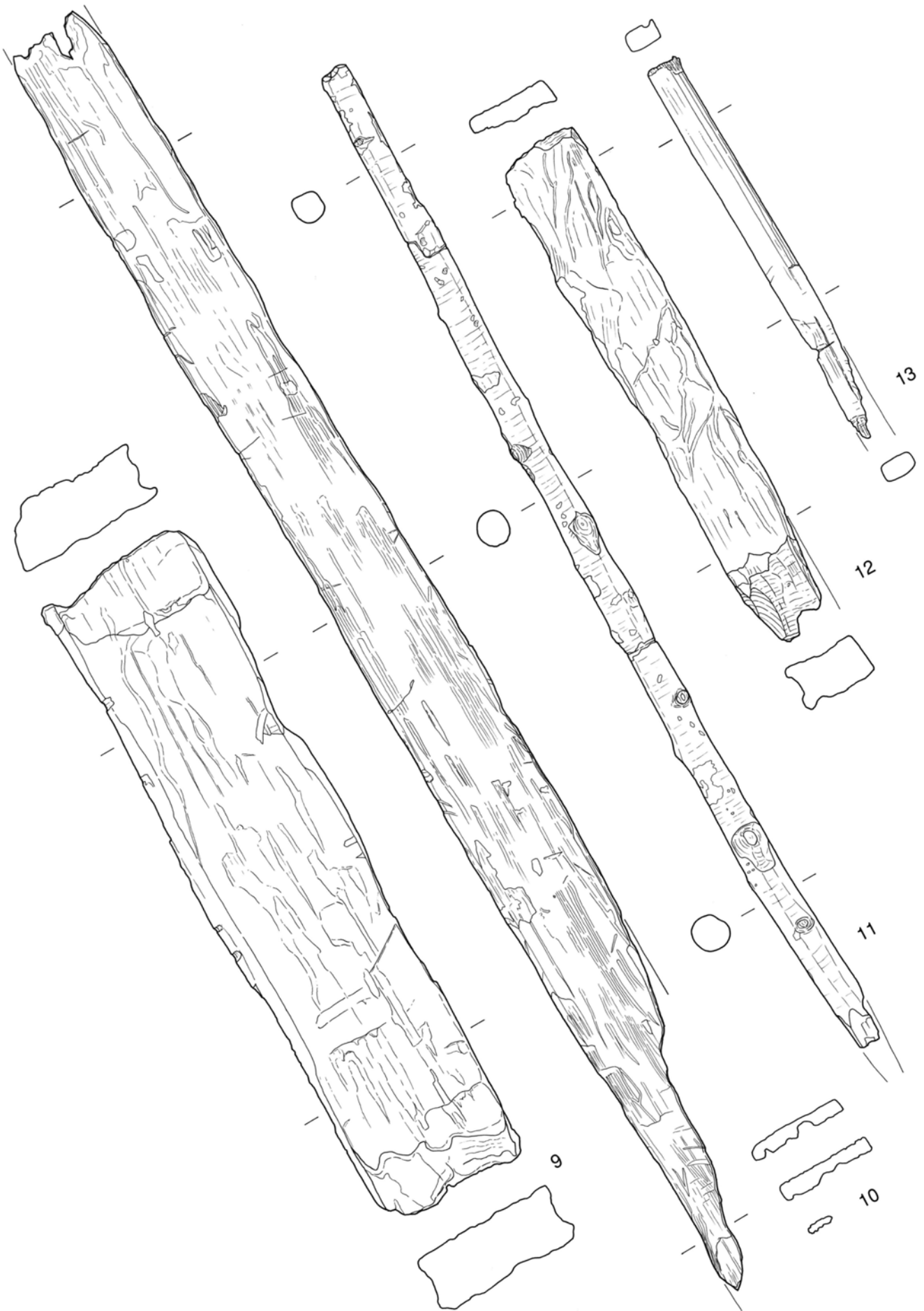


図2 木製品 (2)

(10は 1/8、他は 1/4)

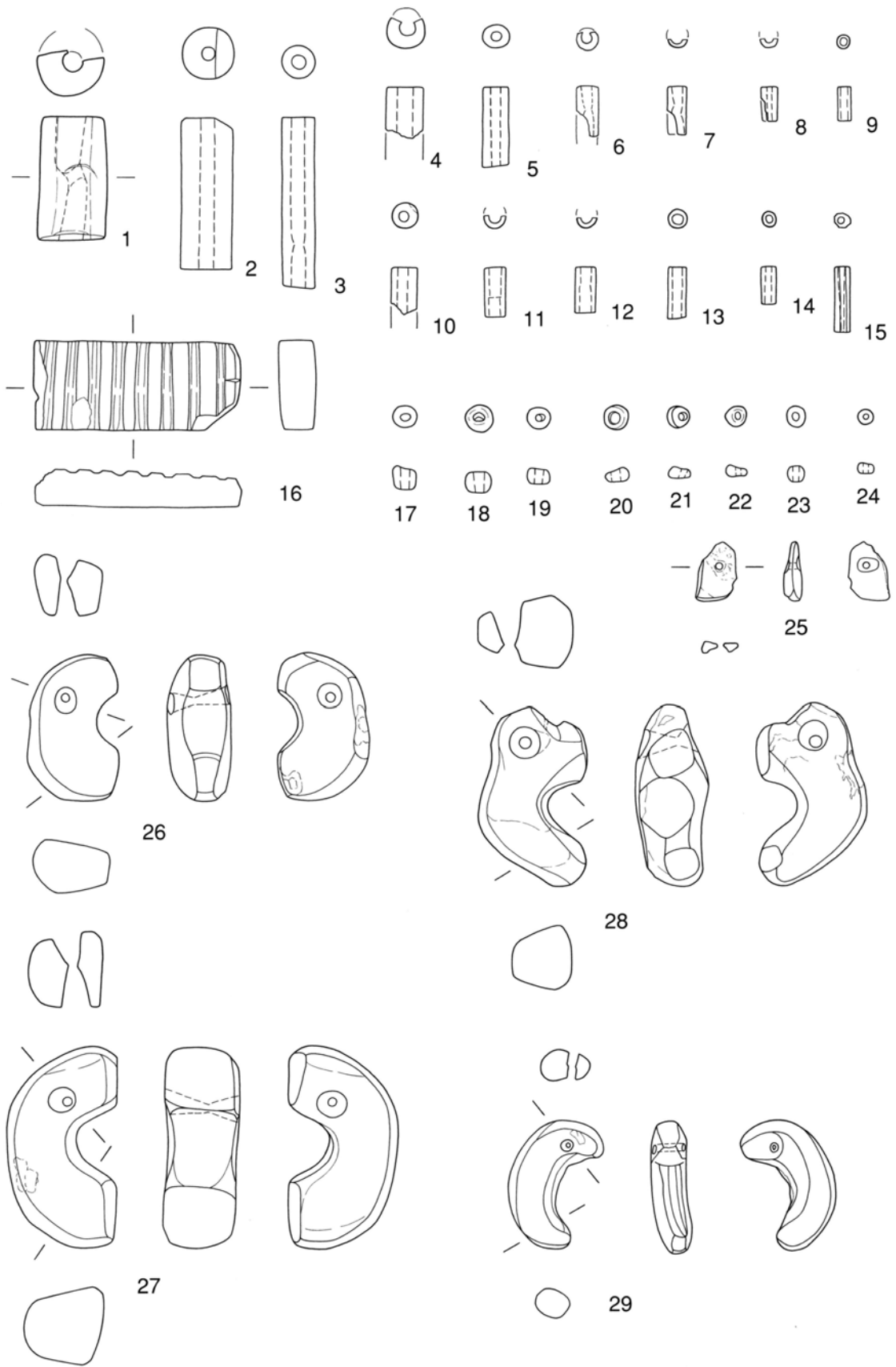


図1 玉類

(5) 骨角器

1. 生活用具 (図1～5)

(1) 漁獵刺突具

漁撈・狩獵・戦闘用に用いられたと考えられる刺突具類をとりあげる。

A. ヤス状刺突具 (1～25)

多くのものがシカ中手骨・中足骨を使用する。断面形が扁平で平たいもの(1～9)と、丸いもの(10～14)がある。3は下位に横方向の擦痕または緊縛痕がある。12・23・24は丁寧に磨かれており、髪飾りになる可能性がある。9の上端、15の上下端は不規則に凹んでおり、噛み痕であるかもしれない。

B. 鋸頭 (26～29)

26・27は逆刺が翼状をなし、左右ややずれた位置に作られるもので、被熱して白色化する。28も同様な形態をなすと思われるが、逆刺の凹凸が明瞭ではなく、未製品であるかもしれない。29は基部で、下端部が片側に曲がり、屈曲側の端部が張りだしたように削り出される。逆刺は再下位のものしか、両側面については確認できないが、同位置に作られ、肩は張らない。

C. 逆刺状刺突具 (30～32)

鋸頭と組み合わせて逆刺として用いる、同じものを何本か組み合わせて用いる、単独で柄に装着するなどの使用方法が想定されるので、逆刺状刺突具という名称は問題があるが、今回は暫定的にこのように呼称する。

シカ角が加工され、側面形が底辺の長い二等辺三角形のような形態をなすもので、斜辺の一面が平坦になる。32の平坦面には横位の擦痕または緊縛痕がある。

D. 鏃形刺突具 (33～36)

33～35のように断面が扁平なものと、36のように丸いものがあり、各々シカ角が用いられる。35は裏面が縦割されたそのままになっていて、刃部も短く、他の器種になる可能性もある。

(2) 刺突具

A. 尺骨製刺突具 (37・38)

シカやイノシシの尺骨の下端を尖らせ、刺突具として用いたもの。

37の上面には齧り痕が残り、38は上面が横位に水平に切断されている。

B. 鹿角製刺突具 (39～41)

鹿角の先端部を利用した刺突具。

39は角座から角枝部を利用したもので、上位に挟りがみられる。40も角座部分で、挟りがあり、上端に穿孔が施される。41は斜位に孔が穿たれ、刺突具もしくは柄になる可能性がある。

C. 歯牙製刺突具 (42・43)

42はイノシシノ犬歯、43はサメ類の歯の先端を鋭利にしたもので、錐として使われたと考えられる。

D. 剥片刺突具 (44～53)

中手・中足骨、橈骨、脛骨、鹿角などの剥片の先端を加工して刺突具にしたもの。

剥片刺突具には、先端のみを加工した44・46と、45・47のように側面にも若干の削痕がみられるもの、52のように上面が磨られるものがある。

(3) 釣り針 (54～59)

54は鹿角製で、軸頭には横位に切り込みが入り、傘状の先端をなす。軸部は屈曲部分から鉤部に変わるあたりで急に細くなり収束する。屈曲部裏面と背面は削られ、明瞭な面をなす。55もほぼ同様の形態をなす。これら2点は、平坦面をもつということでは、結合式釣り針の条件を満たしているが、結合部が長さが短く、単式釣り針の折れた鉤部を再加工したとみることできる。

56～58はイノシシの下顎犬歯で、結合式釣り針の鉤部になると考えられる。

59は鹿角で、釣り針の一部または未製品か。

(4) 弭形骨角製品 (60～68)

縦位の差し込み部が貫通し、ソケット状になるⅠ類と、上端が閉塞するⅡ類がある。

Ⅰ類 60は体部に沈線状の凹部をもつ。外面には有機物が付着している。

Ⅱ類 61は中位から下位にかけて横位の沈線が彫られる。沈線帯の中位の1条は一ヶ所途切れる部分がある。下端は帯状に、器壁が肥厚し、差し込み部が穿たれる。上半は細く作られ、先端部には擦痕がみられる。

2 装飾・祭祀用具

(1) 垂飾 (図6・7)

A. 歯牙垂飾 (73～76)

73は切断されたイノシシの下顎犬歯に穿孔されたもので、74は種・部位とも不明である。

75はイヌの上顎犬歯に、76はアナグマの上顎犬歯に穿孔されたものとなる。

B. 輪鼓状垂飾 (77～89)

78～89はサメ類に穿孔を施したもので、78は中央の孔が上部より穿たれているが、未穿孔のままに

62は下半がⅠ類と同様の形態をしているが、上半は無く、上面は閉塞して平面をなし、横位の穿孔が2孔、上面から側面への穿孔が1孔ある。63も同様のものかと思われるが、中位の削り出して表現される、沈線はみられない。

64・65は鹿角先端部分に穿孔が穿たれ、横位の沈線が巡る。65の先端は平坦になる。66・67も同様なものになると思われるが、65に削痕が沈線状にあるのみで、明確な沈線はみられない。

68は鹿角先端を、わずかに削られ、丁寧に研磨される。

(5) 紡織製品 (69～71)

69は鹿角座製の紡錘車で、被熱し白色化する。70は鹿角製のもので、擦痕が沈線のようになり、放射状に施される。

71の縫い針は長さ1.9cm、幅・厚み0.1cmを測る。

(6) その他 (72)

71は鹿角の角座付近の剥片で、側面の一辺が非常に強く磨られて、平面をなしている。磨り石のように使用されていたと思われる。

なっており、それとは別の位置に2孔、上面から側面にかけて丸い孔が開けられる。79は中央孔もあるが、上面の別の位置にも四角い孔が開く。89は製品ではない可能性もある。

77はカメの腹甲が円形に加工され、中央に穿孔が穿たれたもので、裏面には擦痕が残り、側面には研磨されている。

(2) 髪飾 (90・91)

90は沈線状に削りだされた横線帯が4帯施されるもので、紋様帯間はエンタシス状に膨らんでいる。下半部は幅の狭い工具で削られており、わずかに有機物が付着する。

(3) ト骨 (94)

94のト骨はシカの右側肩甲骨を利用したもので、被熱の痕跡が明瞭なものは4ヶ所、可能性があるものが2ヶ所ある。棘上端はやや磨れているようだが、原状に近く、それより下位は破損している。

3 未製品・非製品 (図7～10)

95～102は中手骨・中足骨の未製品・非製品となる。

95～97はシカの中手骨・中足骨の遠位端で、擦切で切断される。

98はシカの中足骨で、遠位端のみが擦切で横位に切断され、その後中手骨・中足骨の凹みに沿って縦に切断されている。

99～102は各々素材となるものであろうか。

103～122は鹿角の未製品・非製品である。

103は枝角が切断されており、基部裏面は強く研磨されている。また切断痕のある上面も磨られている可能性がある。104は落角を使用したもので、枝角

を切断した後の上面はやや磨られている。105もおそらく落角が使用されている。106は頭部から角座下端になり、上面には明瞭な削痕がみられる。107～111角先端部になる。107・108は擦切痕のみがみられ、110・111は削痕のみで調整されている。また111は縦に半裁されている可能性があるが、工具痕などは残っていない。109は擦切によって切断され

(4) その他 (92・93)

92は鹿角の分岐部分を使用して作られたもので、削痕や擦切痕が明瞭に残る。一端は欠損しているが、もう一端は傘状に削り出され、上面から表面に穿孔される。またもう1孔上面から側面に穿孔を施した痕跡があるが、完全な環状にはならず、外面が欠損している。

93は鹿角の角座部分を使用したもので、円柱状に削りだされた端部には、3方向に、やや太く短い沈線が施される。端部上面には明らかに折れた痕跡がそのまま残っており、未調整であるか、またはさらに先端部が延びる可能性がある。

た先端部で、おそらく釣り針等の素材になるものであろう。112の上端は擦切で切断されているか。113は上部を擦切で除去した後縦割りされていると思われるが、明瞭な痕跡は見いだせない。114は上端面が磨られたように滑らかになっており、下端は削られている可能性がある。115～117は角先端部が切り落とされたもので、116・117には擦切痕が残る。118は削痕・擦切痕ともが見られる。123は擦切により中位に凹部を呈するもので、下端から上端に近い位置にまで孔が穿たれている。銚頭の未製品と思われる124は、下端が削りによって切断された後縦割りされたもので、側面には交互につく逆刺部が成形されつつある。上端は欠損。

125は鳥骨に擦切が施されている。126は海洋性ほ乳類骨で、側面は磨られている。

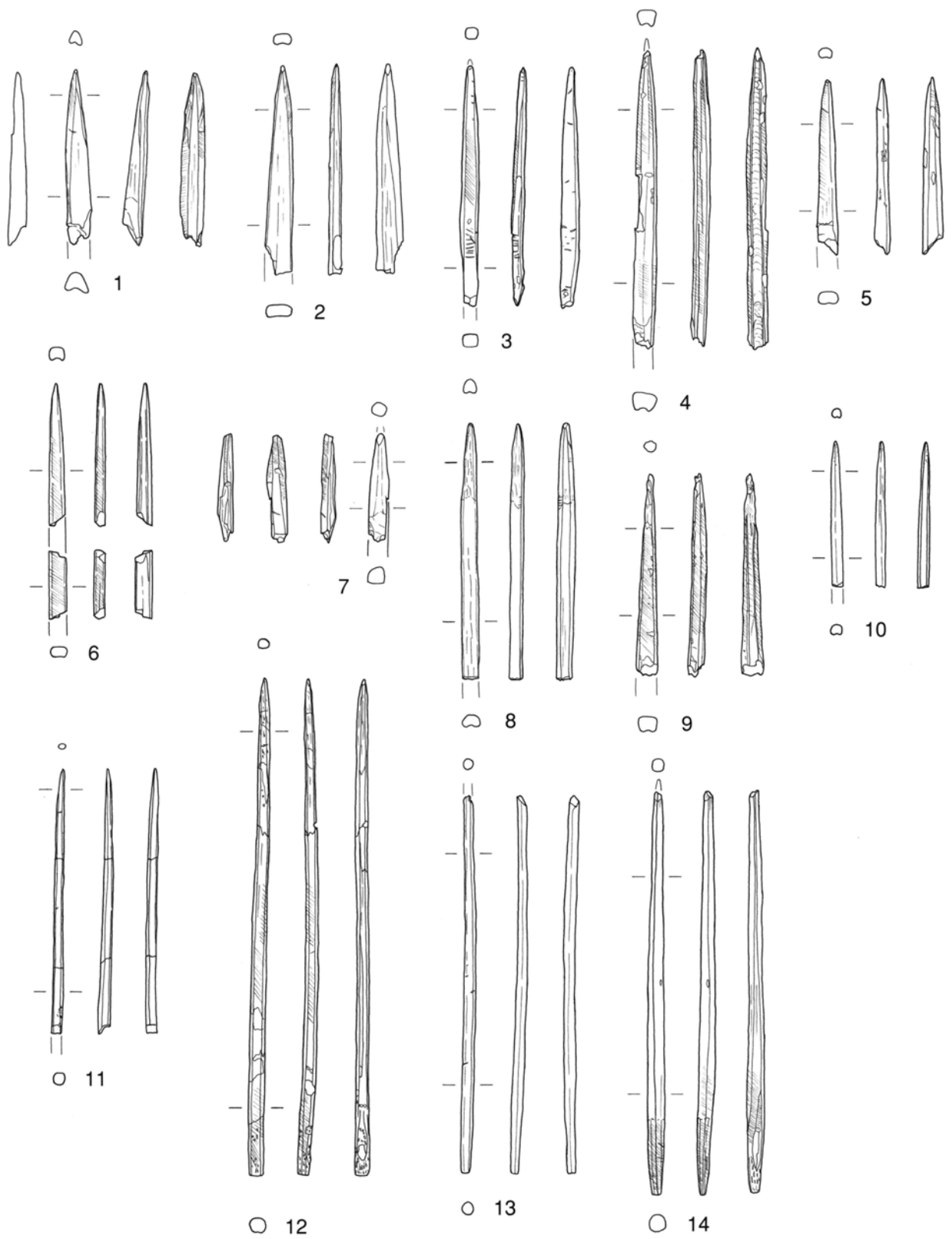


图1 骨角器 (1)

(1/2)

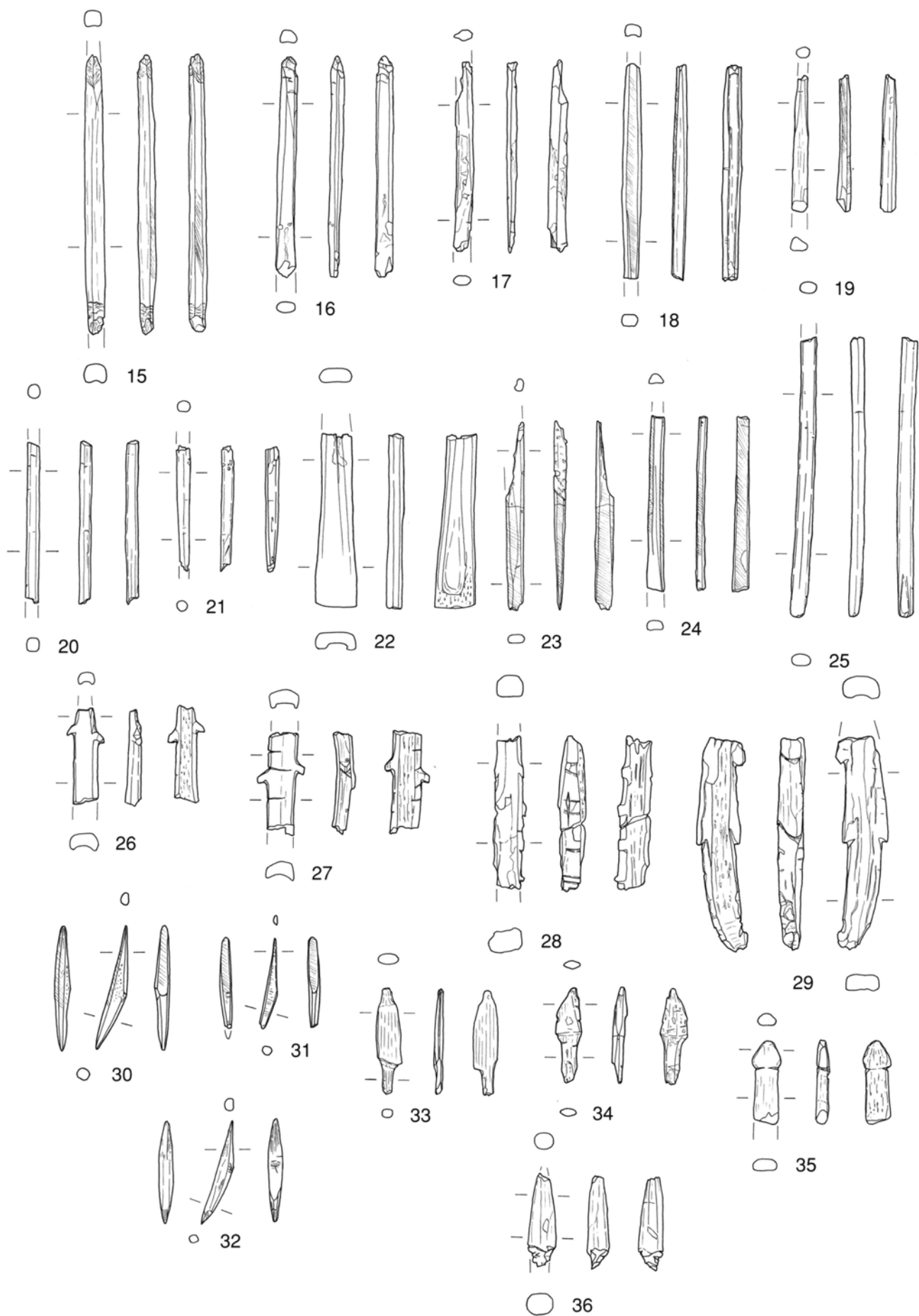


图2 骨角器 (2)

(1/2)

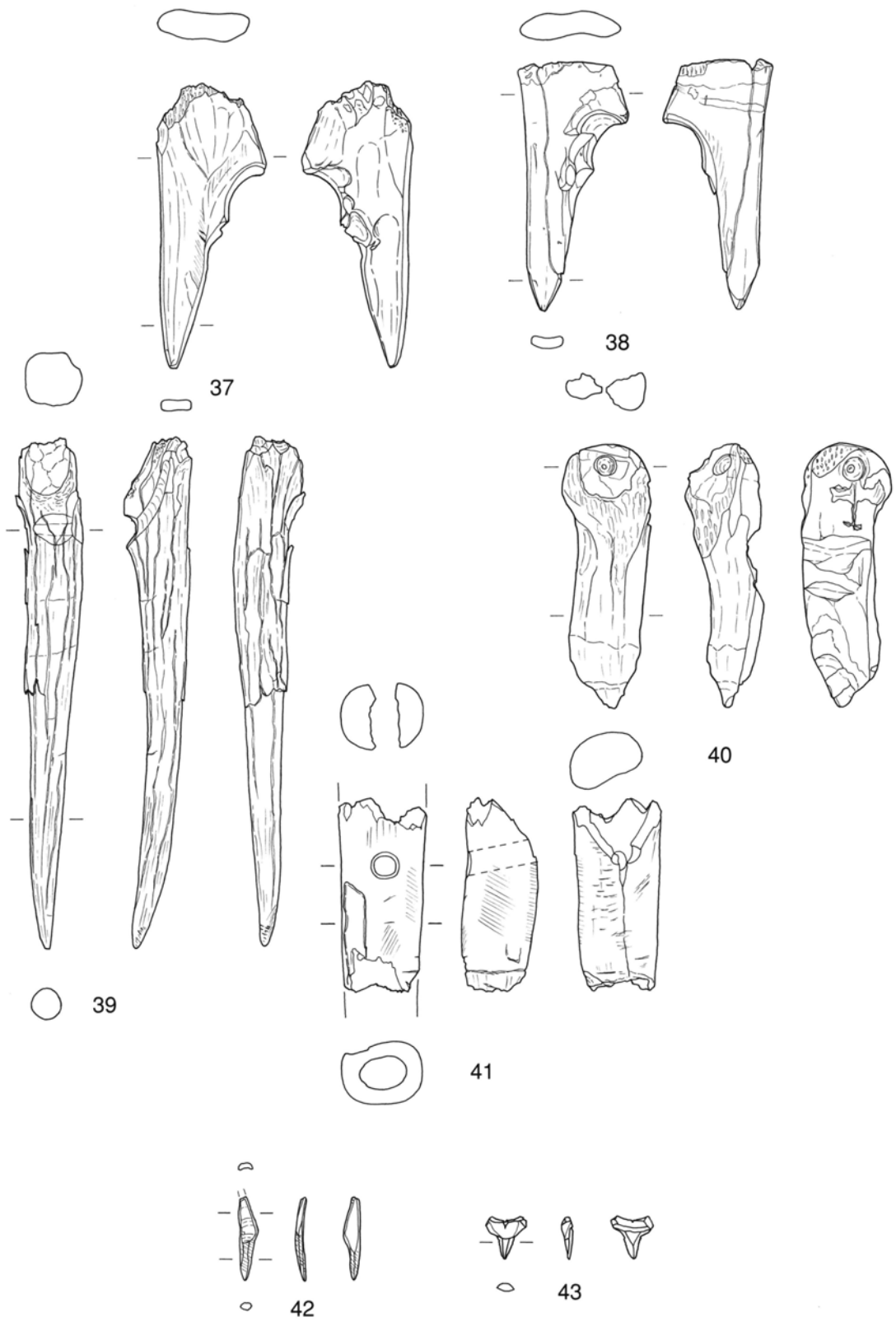


图3 骨角器 (3)

(1/2)

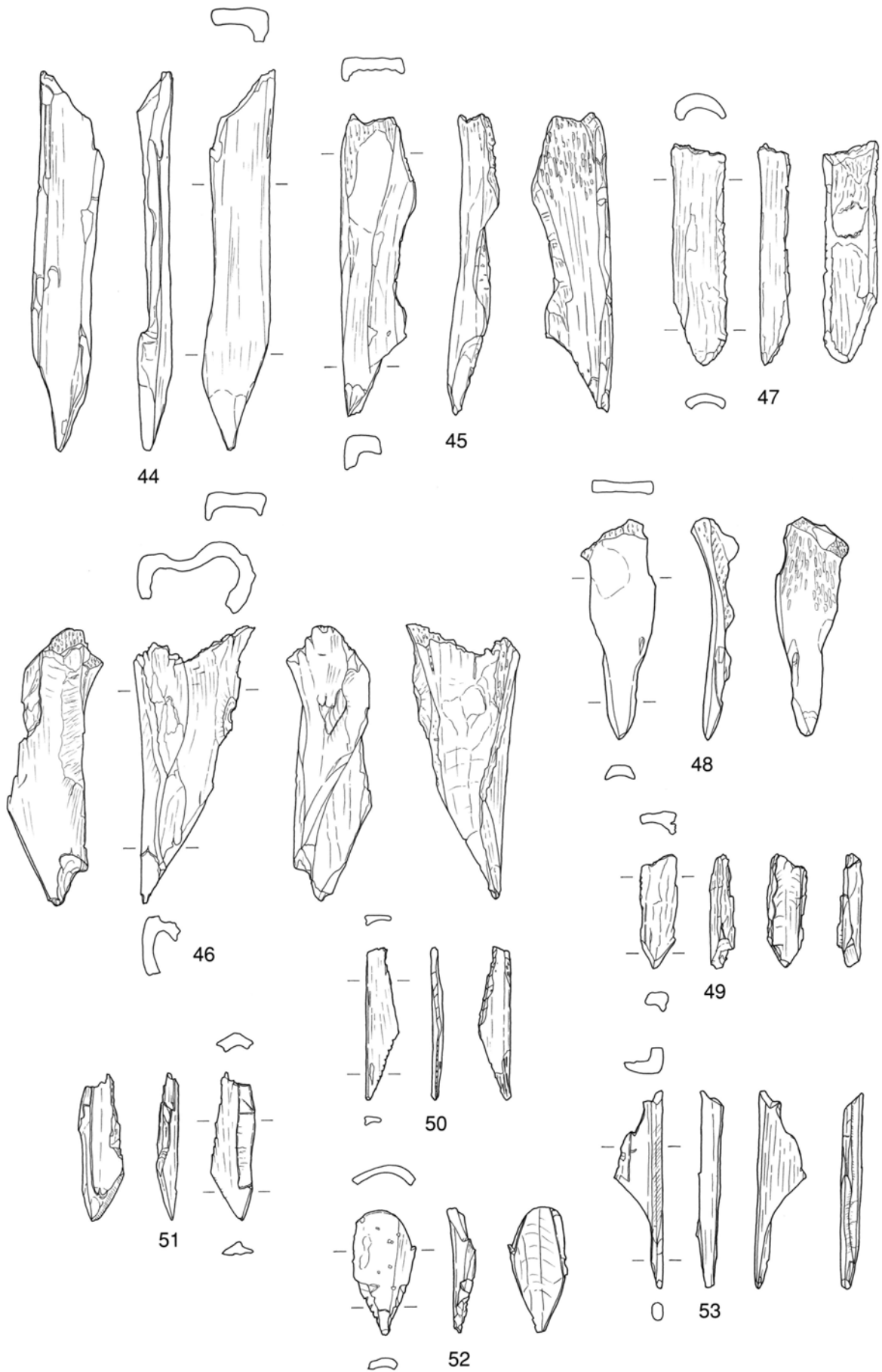


图4 骨角器(4)

(1/2)

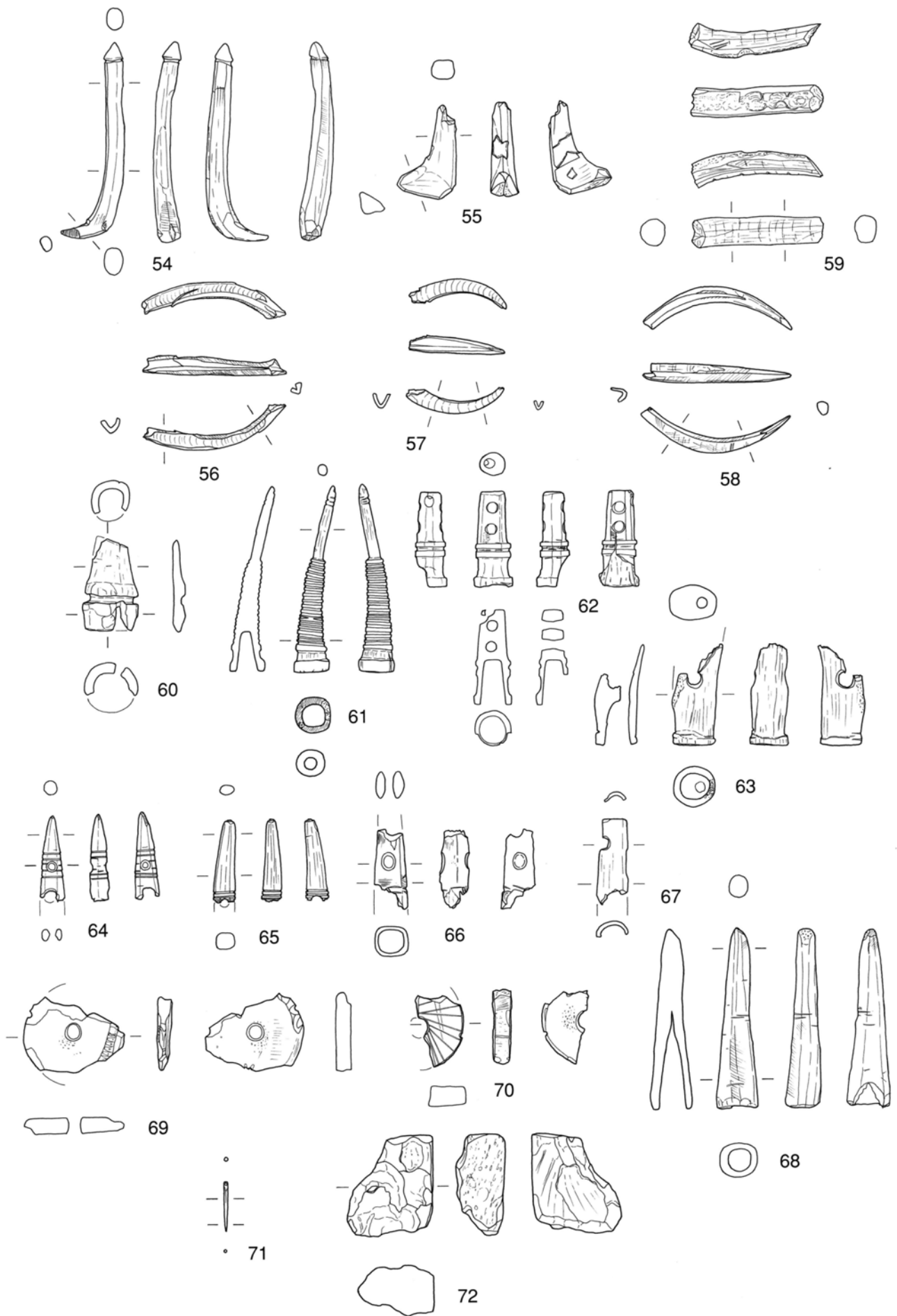


图5 骨角器 (5)

(1/2)

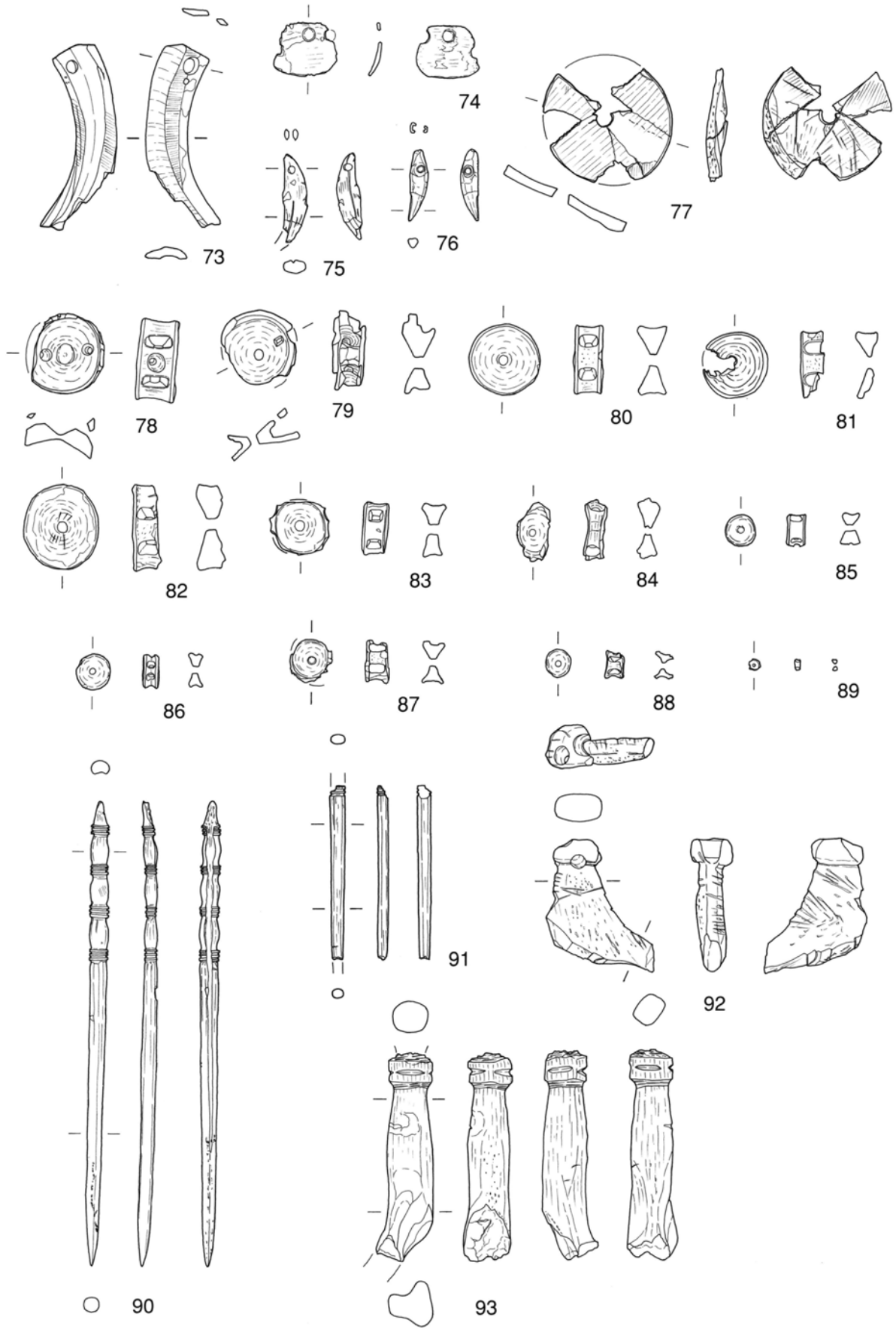


图6 骨角器(6)

(1/2)

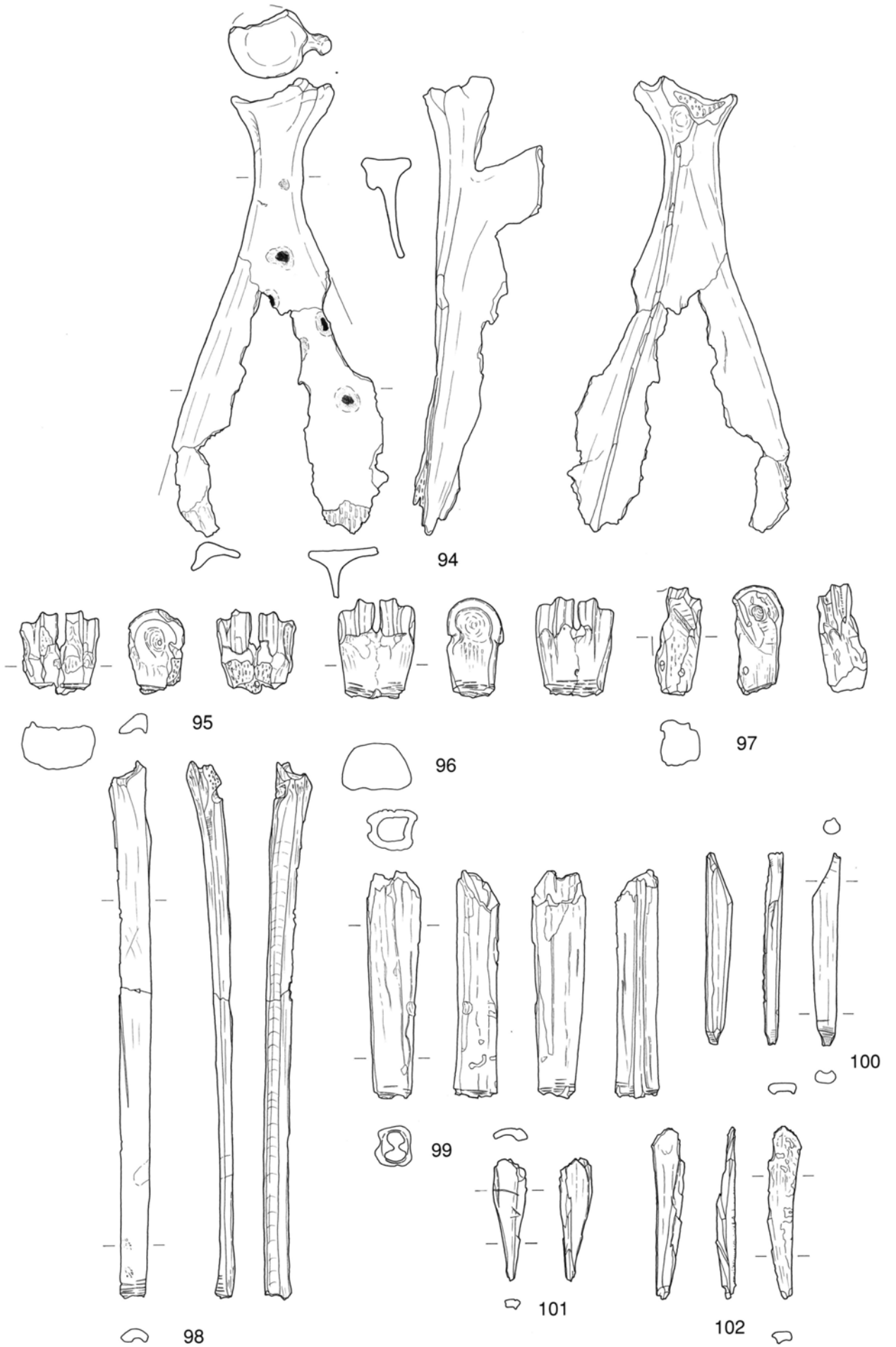


图7 骨角器 (7)

(1/2)

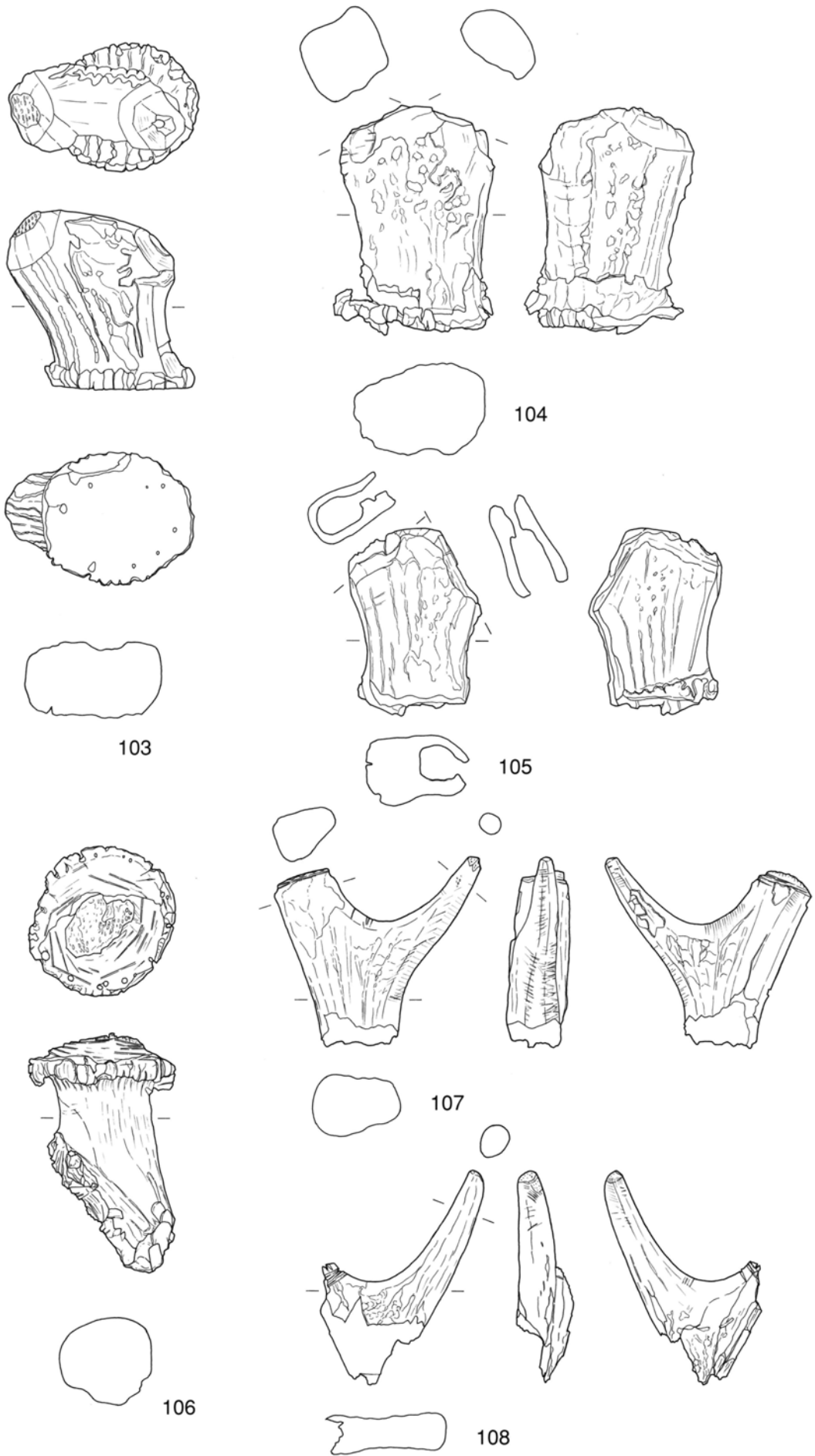


图8 骨角器 (8)

(1/2)

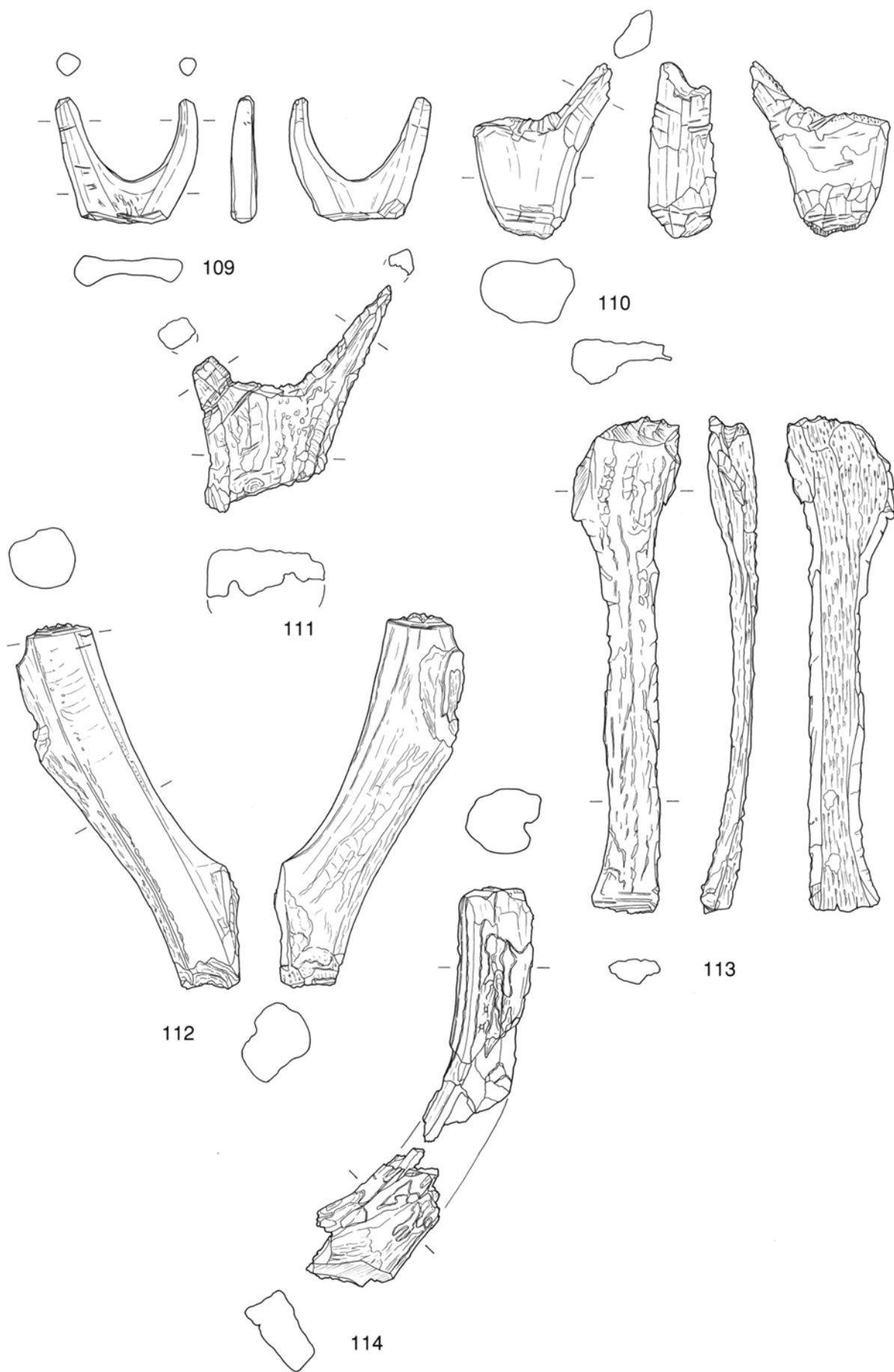


图9 骨角器 (9)

(1/2)

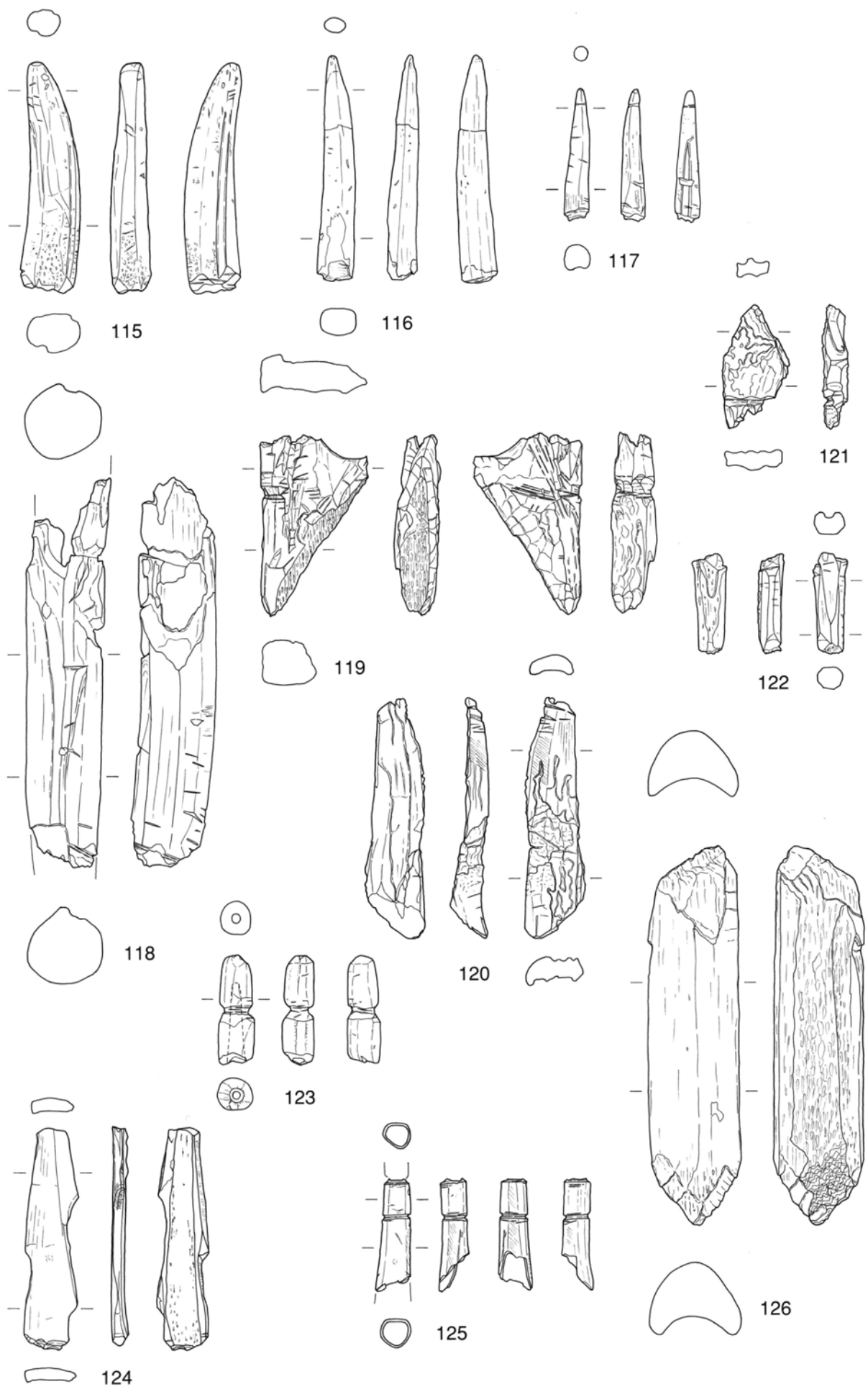


图10 骨角器 (10)

(1/2)